續群書類從

第拾七輯上

東京

續群書類從完成會

續群書類從第拾七輯上目次

和歌部

連歌部

續群書類從第拾七輯上目次終

續群書類從卷第四百六十四

總檢校保己一集
男源忠寶校

和歌部九十九

竹園抄

一歌之病之事
抑古人おほくの歌に病の名をつけたり。所謂四病八病七毒八憎等也。雖然近代不嫌事おほし。然はなかく〱いたつら事多て。初心之者歌に迷ぬへき故に。要をとりて六病を記してをかれたり。

一同語病。　二同字病。　三亂思病。
四風傍病。　五片題病。　六首尾病。

第一同語病とは歌一首の内におなし詞のあまたありて。みゝにたつをいふなり。

　難波津にさくやこの花冬こもり今を春へと咲や此花

咲や此花と云に說あまたあり。古はかくの　ことくよみ侍れとも。近代はよます。たゝし重句といふことあり。それはくるしからす。歌にいはく。

　御芳野のよしのゝ山は白雪の雪氣にくもる冬そものうき

みよしのゝ芳野の。白雪の雪氣は同語病なれとも。全句にてはくるしからす。又上下にわたらされとも。上句計下句はかりにも。おなし詞のみゝにたつは。能々すかたのあしき也。

第二同字病とは一首の内に同字さし合て聞惡(ニクキ)なり。たとへは。

　花をみて春はなくさむ木本に鶯鳴てさひしかりけり

花を見てのてと鳴てのてと聞にくきなり。

　山はみな秋とそ見ゆるきゝはいや所處に紅葉しぬらん

山はのはと。きゝはのはと聞にくきなり。如此上下の句の中にても。一句のうちにても。てにはの字。もしは物の名詞字にても。みゝにたつを可嫌なり。物の名と詞と差合うたにい

はく。

鶯もみえすなりゆく霞かな木の下くらき春の夕暮

鶯のすとみえすのすと。是をきらふへきなり。

第三に亂思病とは歌の心きこえす理のなき也。歌といふは道理を宗として。其上に詞を嚴(カザル)へし。然に理のきこえさらむは歌に有へからす。よく〳〵きらふへき事なり。

さかの山雲ゐるころは紅葉する尾花か末のあきの夕暮

此等の歌は亂思病なり。假縦底には本文を搆たりといふとも。おもてに理なからむ歌は。此病のかれかたかるへし。

第四風傍病とは宗とよむへき題をは傍にして。餘(ヨノ)ことにかゝる歌也。

山櫻それともみえす白雲のなへてたちぬるみよしのゝ里

これはいかにも雲かゝらはかゝれ。花ことにしるくおもしろしとこそ讀へきに。雲のみかゝるとよめは。風傍の病ある歌也。後白河院御時。内にて御歌合有しに。ある女房の歌に紅葉と云題にて。

入日さすおのへの雲の紅ゐにうつるやよその紅葉成らん

此歌は風躰もやさしきよき歌と沙汰ありしかとも。風傍のかれかたくして負に成ぬ。いかに入日に移るとも。紅葉をみせてこそよかるへきを。入日の雲や紅葉にて有らんとよめる。題の爲には無面目也。此體のやうな可意得。

第五片題病とは片方はほめて。かた〳〵はそしる歌なり。是意人のあやまる事也。よく〳〵意得へき者也。たとへは名所月といへる題にて。

明石潟くまなきなみの上なれは所からこそ月もすみけれ

此は村上御時。世にもちあつかひさたせし片題の歌也。作者をはしるさす。此月はあかしかたにすます。徒物にきこえたり。明石とは名のくまなきなみなれはこそ月もすめ。さもなくはすむましきとよめる也。又鳥羽院御時。頼政か片題の歌月前花といへるにて。

月影のうつらさりせは山櫻花やはよるのにしきなるへき

是も月のみほめて。月ゆへにこそ花をみるとはいひて。むねとの花をは徒物にし侍る也。

第六首尾病とは上句の初五句の下のをはりの句と不懸合歌也。いかにも上下の心を結合て歌とはなすなり。上下不懸合はたゝ語二ならへたることし。本歌にいはく。

思ひきやみ山の奥のさひしさは雪ふり積る冬にそ有ける

上句に思きやといはゝ。下句の終に此おもひきやといひつる詞をうけて。物思ともかゝるすまひをするなとゝも可言を不意得は。歌の姿きれたる也。いかにも此等をよく〳〵心得すまして可歌讀也。

二對言の歌といひて。此道によく〳〵秘する物也。其故はいか

に歌をよまむと思ふとも。上下の詞對するやうを不知は歌にあらす。その對言といふは。たとへは問答のことく。上句に云事を下句に心を顯す也。いはゝ上に櫻といひては。下句ににほふとも。咲とも。散とも。木陰とも。花の様なる詞を對すへし。月と上にあらは。下にくまなきとも。さやけしとも可偽對哉。或本に雙對乱對とて二あり。雙對と云は題と題とを對し。中と中とを對し。下と下とを對する也。たとへは。

櫻花さきにけらしな吹風のにほへる方になひくしら雲

櫻はなといへる對に匂とよみ。吹風にしら雲を對する也。此に數多の品あり。上に櫻といひて。下に花と對する哉らん。是は詞の替ぬれは。上下に對するにくるしからす。また上三句下二句の物なれは。上下に對して中を略するやうも有。又中を對して上下を略する様もあり。其さま〳〵といふは。

ひさかたの天津み空の雲はみな月に晴行山の秋風

是は久堅に月を對して。雲に風を對する也。是は中を略する體也。

玉河の里のうの花盛ともみゆるはかりに月そさやけき

是は卯花に月を對する也。是は中を對する也。大意を對すると云は。

ほの〳〵と明石のうらの朝霧に嶋かくれ行舟をしそ思ふ

是は上句にも明石のうらと云て。下の句には嶋かくれ行舟と對する也。此歌は大意を對すると云也。乱對といふはまた二種あり。一には上句の初の五の詞を下句の終に對し。中を上に對し。下を上中に對する也。本歌にいはく。

梅花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝは

此歌は上に中を對する也。梅に雪を對する也。

櫻花さきにけらしな足引の山のかひより見ゆるしら雲

是は上を下に對する也。櫻花に雲を對する也。二には上の詞悉うけねとも。上にある草木月花等を下にたいせねとも。こゝろはかりを對するなり。たとへは。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとのみにして

是は月も春も下に對する詞なけれとも。こゝろを對する也。おほかた歌は千萬おほしといふとも。此四の對に過へからす。歌を讀とおもはむ人は。此旨を能々心得て可讀也。是は殊秘事也。輙人にゆるす事あるへからす。いかに德を備へ。六義たゝしくよむ歌なりとも。一切對言によるへきなり。對言のしとけなきは非歌。

三親句疎句ノ事。秘事歌のゆゝしき大事也。能々可秘思。一ハ親句において二種あり。一には響の親句。二には 正の親句。響の親句につきて二種あり。五音相通。五音連聲と云は五七五七々のうつりの響也。響きれつる歌は歌の命なきなり。たとへは。

ほの〳〵と遠のと山にき鳴也しはし語らへねくら定めて

是は郭公をよめる歌也。むかし歌はなにとも姿をあらはさねとも。かくも讀侍き。今代にはかゝるへからす。ほの〳〵とをちとはをのひゝき也。暫といふはしのひゝき也。かたらへ埒とある。ゐのひゝきなり。余是にて可知。如此五句の續目々々離さるを。五音連聲の親句歌といふなり。

二ニ正の親句とはひゝきつゝかされとも詞のきれさるなり。正躰を讀むとは其躰を離さる歌。たとへは。

芳野山みねの櫻の散しより花はあたなる物とこそしれ

よしの山と云て。やかてみねとつゝき。さくらといひて。やかてちるといひて花と有。此歌正の親句也。是は萬億の中の其一也。六義九章をはなるといふとも。如斯よみたらむはよき歌なるへし。また五音相通といふは。五音の中何へつゝけともくるしからす。たとへは。

朝霞もりの梢もみえぬまて立かくしけり花のかはして

朝霞のみともとはまみむめもの五音也。もりと云も上に同。まてのてとたちのたと。たちつてとの五音也。以之一切可心得也。

二。疎句とは縱轡も不通詞もきれたれ共心の離ぬ歌なり。是は能々手廣事なり。讀案様なるへし。

四就六義三種の差別あり。性躰形也。躰形の二種は大秘事也。故に可習云々。性之六義といふは風賦比興雅頌也。風と云はそへうた也。是は本歌の面には顯さて。外の物にいひ顯して。そのこゝろをうくる歌也。たとへは。

難波津にさくや此花冬こもり今を春へとさくやこの花

此歌は仁徳天皇と御弟宇治の月倉宮と互に位をゆつりて。王なき事三年也。御兄は弟こそ應神天皇の禪を得給ひたれは位に即給はめとて。位にものほり給はす。又御弟は我かくて有れはこそ兄も位に着給はねと千死給へり。力なくて仁徳くらゐに即給へり。其を王仁といふ大臣のよめる歌也。難波津にとは仁徳のおはします宮の名也。なにはつに咲や此花冬こもりといふは。即位給へき花は咲たれとも。いまた時の花にてなけれは冬籠と云也。今を春へと咲や此花と云は。今こそ時の花かと云なり。此歌面すへて仁徳のことはきこえねとも。そこには仁徳の御事也。かゝる歌を風歌と云也。風とは諷也。風といふは。たとへは虚躰とみえねとも。ほかの物にあたりて風としらるゝことくに。風の歌はおもふことを異物によりあらはすなり。

二賦と云は一首に心のあまた有歌也。賦の字をくはるとも盡すとも讀り。さては一首に事をあまた盡したる歌也。たとへは。

咲花に思つくみの味氣なさ身にいたつきのいるも知すユ

咲花におもひつく身とは愛することゝろ也。いたつきとは文選には勞の字をつかひ。内典には煩の字をつかへり。文選史記には無常をいたつきといへり。相如野章云。蚕食蓬忘無常といふ也。

三比とはたくらへ歌也。たとへは物を二ッ何もおなし様也とくらふる歌也。本歌にいはく。

君にけさあしたの霜（のイ）と出ていなは戀しきとに消やわたらむ

是は君に別て命の消ぬへきみを。霜のきえぬへきにたくらふる也。

四興とはたとへ歌也。是は物を二ッならへて。何も似たりといへとも。而各別の形をいへる也。風比興はいつれもたとふる方有といへとも。風は心と心をたとへ。比は形と形をたとへ。興はたとへてしかも分別する。此替めはかり也。

我戀はよむともつきしありそ海の濱の眞砂はよみ盡す共

五雅の歌とはたゝことゝ歌也。是は物にもたとへす。するくとよめる歌也。無別子細歌也。本歌にいはく。

僞のなき世なりせはいかはかり人のとのは嬉しからまし

六頌と云は祝歌也。いのるいはひを祝といひ。褒るいはひをは頌といふ也。

此殿はむへも富けりさきくさの三葉四葉に殿つくりして

宜とは道理也。幸木とは檜なり。是をさき草と云は。大唐の道川（河イ）には水濁りて。是を呑ゆへに人の命の短也。此里には檜を尋て水に入れは水すめり。仍彼國には檜を幸木と云。幸の字をはさちといふよみ有。さちといふをちときとは同響なる故にさきくさといふなり。草は種也。草にはあらす。幸の種也。日本紀に云。

石代の濱松かえを引結ひ身にさちあらはあはむとそ思ふ

是は在間皇女の歌也。三葉四葉とは三棟四棟也。文云。楊國忠依楊貴妃寵家榮。三ッ棟四ッ棟ゝと云へり。

五本歌取様

本歌を執に四様有り。一には詞を一にして心を替へ。二には心を一にして詞をかへ。三には本歌の上下の句を打かへて取。四には本歌の大意をとる也。詞を不替して心一ならさる歌。

梅花それともみえす久堅のあまきる雪のなへてふれゝは

梅の花それとそ匂ふ久堅のあまきる雪のなへてふれゝは

こゝろを一にして詞をかふるうた。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして

春やあらぬ花や昔にかはる覧なかめし我は本の身にして

本歌の上下をたちかへたる歌。

思ふ事いはてたゝにやゝみなまし我と等人しなけれは

と有をとりて。

我となと等しき人のなかるらん思とのはいかていはまし
大意をとる歌。
けふこすは明日は雪とそ降なまし消すは有とも花とみましや
とある歌を。
けふこすは明日は雪とそふる里の花も昔の人や戀しき
古歌をとりて本歌とせむには。如斯意得てよむへき也。此外本歌をとるやう無名抄に見えたり。

六返歌躰之事

歌を讀には人の歌の返事するやうもよく可意得也。是を不意得して返事をしぬれは。人にとかめらるゝ事の有也。一に我よりまさりたる人の返歌には。後句の終を我歌のかしらにゐたゝきてよむ也。二に同程の人には。上下のことはを合て中を何ともとる也。三に我よりおとりたる人の返歌には。かれからたのかしらをとり。我歌の末にをくなり。四に鸚鵡のかへしとて。口まねをする様によむ也。是はかならす上下をいはす。又此外近比の歌は唯姿はかりをとりて讀様あり。

一我よりまさりたる人の返歌。
おもひとけは哀成ける夕哉何とて人を待ならひけん
とある歌の返歌。
待らんとおもひもしらて數ならぬ憂身を歎く夕暮のそら

二おなし程の人の返歌。
しるらめやいく秋をくる七夕の契りしとは忘れぬものを
とある返歌。
織女の忘れぬ秋の契さへよそにおもはぬたのめなりけり
又の體。
忍ふ山しのひてかよふ道も哉人のこゝろの奥も見るへく
とある歌の返事に。
忍山しのふかひこそなかりけれ人の心の奥のあさゝに
又の體。
あちきなやこは何事の報にてつらき人しも戀しかるらん
とある歌の返歌に。
なに事のむくひ成らんつれもなき人を忘す戀わたりつゝ
此様はおなしほとの人の歌の返しにすへきなり。

三我におとりたる人の返歌の様。
晨明のつれなくみえし別より曉はかりうき物はなし
とある返歌に。
鳥の音をうき物そとて恨しはあかぬ別の有明の空

四鸚鵡の返し。
おもへ共思はぬとのみいふなれはいなや思はし思かひなし
とある返事に。
思とも思はぬ中はいふともいなやよしなしいふかひもなし

返歌の體さま〳〵有といへとも。此四種をは不過。此やうを能〳〵心得て。歌の返しおすへきなり。

七題を可存知事

歌をいかに讀とも。題をあしく意得ぬれは。ひかこと多て歌にあらす。能々可意得。題を讀とおもひてよみたれとも。落題になる歌あり。それ忍戀と云題にては。いかにも忍たるをよむへきに。餘に忍ふ心をいはむとて。忍ひ餘て人に知らるゝよしを讀は。忍戀には似れとも落題となる也。山家の栖を題にてよむに。あまりに山深すむよしを云て。庵とも籬とも。いへの心ちをよまぬ歌あり。此外にかゝる事おほかるへし。名月の題を常の月によめるはらく題也。名所花に花の興のみいひて。名所の心のなきはらくたいなり。

名所花落題

山櫻わきて盛になりにけり所からにそ花も見るへき

忍戀同

なをさりに有程こそは忍ひけれ戀すと人にもらしぬる哉

山家同

里遠きみ山の奥のしるしにはきゝこそなるれ峯の松かせ

名月同

更る夜の月におきゐて明す哉物おもふとは秋にそ有ける

海邊月同

清見潟ふけ行なみに霧晴て浦の戸わたる有明の月

いかにも題をほむる心ちにおもひ入て歌をは可讀也。いかにおもしろき歌なれとも。題をわろくよみぬれは非歌。但歌のおもしろく出來むには。少々題はあしくとも可出來也。片題の事は前に云るかことく也。傍題歌といふは。宗とよむへき題を閣て。別物を宗と讀歌也。此は殊おかしき事なるへし。たとへは月と云題にて。

月夜には光そまさる玉河のうの花かこふ里をとはゝや

題の月をは傍にさしをきて。卯花を讀たる歌也。よく〳〵意得可讀事也。人の誤事なり。

八懷帋之事

抑歌には懷紙を能々可意得也。上（古歟）方には四季に四色紙を用事有。これも近來世にはたゝ常の帋用なり。その懷帋を書に。二條六條兩家各別也。先二條家には二首三首題は一帋に可書也。二首題に成ぬれは。帋のはし六寸置て詠字を可書。詠字は上一寸をきて書也。詠字と何首和歌といふことを書事。上古は一字闕に書しを。近ころは引續て書也。詠と題との間一寸なり。詠より一字はかり下て。題の頭をあつへし。いく文字の題も是には遺へからす。歌をは詠字と同行に可書也。題も歌と又一寸へたつへし。我名をは題と詠との間にあてかふて書へし。官ある人は官名姓。無官人は名をかくへ

き也。僧はそうの名を書。兒は姓名を書へし。女房は名はかりを書也。また祝歌に成ぬれは三行三字に書也。此時は二首歌成とも。口四寸。詠と題との間五分に可書也。三首歌は如此。一首の歌のことくにて。一帋の中を間賦てかくへし。必一首は三行三字に可書也。五首七首にもなりぬれは。是にも上下の句二行に可書也。歌にかき交實名は眞字可書。さうに書ぬれは。か名にまきれてまかふ事あり。書とめてにはの字を眞名つかふ事ひせつ也。名を書に。我名をいかにもいやしくなして。すゝろにあけてかくへからず。上て書事は貴人の振舞也。二行半よの常三首二首躰也。

詠三首和謌　藤原忠輔

千鳥

なきてゆくかた田のうらの
さ夜千鳥夜さむにあろや
こゑのうらむる

庭雪

我たにも跡つけかたき
庭の雪に人のとはぬも
うらみさりけり

忍戀

いかてわかおもふとたにも
しらせましつゝむそ戀はく
るしかりける

三首和歌かくの如し。

祝言歌かならす三行三字に可書なり。

寄松祝

君か代ものとかに
すめるいけ水に
千代のかけさす庭のひ
めまつ

五六首より百首に至まて。此體にかはらてたゝ二行に可書也。又艶書歌は四三一四三一四三一四二一と可書。これはふみのおくにも。また袖かきにも。如此心得て書へきなり。

しのひね
とものや　のなみ
思ふ　た
と　はいろに
とふ人　いてぬ
もな　れ
し

また札の歌は二行にも三行にも書て。あまる字をは下に書

とむるなり。

まつよひのふけ行かねの
こゑきけはあかぬわかれの
とりはものかは

かやうに書へし。

内裏院に奉ル歌をは。懐帋の上をつゝみて。左右なく文臺にをかす。文臺の傍にをくへし。大臣家歌諸公卿家歌なとは上をつゝます。是もさうなく文臺にをかさる也。等輩の人の許にては。をくへき所をはからひてをくなり。委細は帝訓集にあり。六條家には會帋躰二條家にかはらす。三首二首も三行四字に書事なり。そのほかおなしことなるへし。壁柱なとに歌を書には。歌の下に名をかくへき也。たとへは連歌のことし。女房は懐帋に名をかゝぬ事あり。歌をもはしかき歌のやうに書事あり。是は いたく歌よみとも人に知ぬ姫御前なとの。しとけなき躰にする事なり。兒なともおさなきもおとなしきも。其かはりめ不可有。男法師かくのことし。

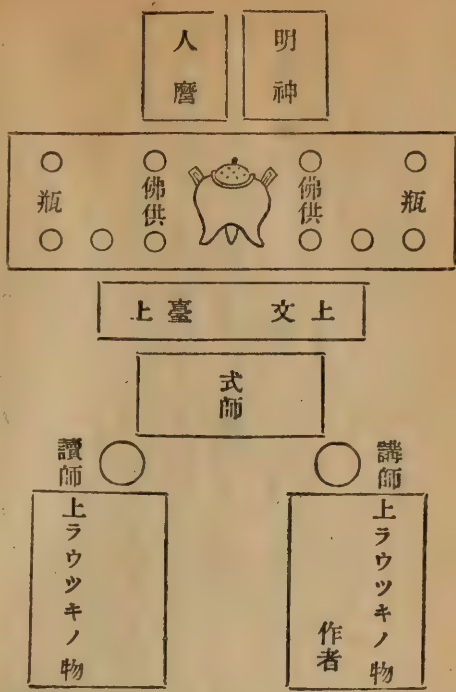
九和歌講作法

尋常の披講には五種のことを行也。先會衆あつまらぬ先に座席を支度すへし。その様は先人麿を右にかけて。葛城明神を左にかくへし。そのほか書影あらは。官階にしたかひて左右に懸へき也。さて明神人麿の前に机如常。花瓶閼伽燒香可有候。檀供如常。机のまへには文臺をゝくへし。文臺の左右に圓座を敷へし。講師讀師の座也。中に禮盤あり。式師の座也。右に管絃者ならひに伽陀師の座を作へし。執筆の座はさたまらさる也。何にてもあれ。可然所をすへきなり。

〔以下十九行據版本補之〕

さて會の集會席にのそまんには。面々つねのつほをそんして居也。着座せぬ先に。ひさまつきて戸をあけて入て。かしこまつて文臺のすへにをくへきなり。かくのことくして衆みなあつまりて。座つほ〲に居さたまるなり。惣禮の伽陀をはりて。式師靜にあゆみより。下﨟の歌よりはしめて。次第に歌をよみあくるなり。初の一詞はさし聲に。次二返は滿座同音に聲をのへてゑいする也。さて次第に懐紙下﨟は下になり。上﨟は上に成なり。かさねたる懐紙を文臺にをきて讀師本座に着す。つきに講師よりて座につきて。さしこゑにて歌をよみ。歌の善惡をいふなり。此時滿座おもひ〲に難をも陳をもすへし。當座に事不落居は判者の許へ尋へし。又當座に判者有は。餘の役をのそきて。歌の判をこひて事を定るなり。さて披講をはりて諸歌何首をいはす。讀歌には詠の字をかくす。故に詠とはしめにあけて。何歌といふ詞を詠する和歌とよみあくる也。普通のうたには詠十首の和歌として。つきに題の名をよみをはつて。連歌の執筆は器量にし

たかふへきなり。連歌酒宴なと過ては。かならす管絃をしてたつへし。歌はたかく詠せす。上方の聲をうけて。細音に詠すへき也。



難もすへき者のする也。すましき者の慧(アチキナク)にするは尾籠なり。〔かに歟〕いにりも上衆をまつへき也。此旨を意得て和詞處には可入也。

十物名類可存知事

もし難波江の歌には芦のみえすとも可讀也。明石更科にはくもりたる夜なりとも。月の明なるやうをよむへき也。芳野志賀には花散て後なりとも。花の有やうをよむへき也。都の名所にむかひては。その時はなくとも有やうを可讀也。花。郭公。月。雪。みな興あるさまを可賣なり。

十一風體に十の樣あり。

一長高歌。　二懷廣歌。　三てには正歌。
四理至極歌。　五戯たる歌。　六物にすかりたる歌。
七古體歌。　八毎詞入心歌。　九心をのこす歌。
十物にすからさる歌

その本歌にいはく。

長高歌

此たひはぬさもとりあへす手向山紅葉の錦神のまに〳〵

懷廣歌

思ふには忍ふるとそまけにける色には出しとおもひし物を

てには正しき歌

有明のつれなくみえし別より曉はかりうき物はなし

理至極歌

僞のなき世なりせはいかはかり人のとのはうれしからまし

戯たる歌

鶯の花をぬふてふ笠はいなおもひをつけよほしてかへさむ

物にすかりたる歌

風吹は空によこきるあは雪のおもはぬ方にふる我身かな
古體歌
袖あやめみとのまこはいせしまより契そふかき月よみの森
詞とに心を入たる歌
夜をさむみみきはの氷一重つゝかさねてかへるしかの浦波
心をのこす歌
我戀は松を時雨の染かねてま葛かはらにかせさわくなり
物にすからさる歌
戀しともいはてやはてむ数ならぬ身のうき程をうち歎つゝ
歌の風情おほしといふとも。不可過此十體。此外善白等と云あり可習也。これは家の寂秘事也。努々他見不可有之。爲顯入道殿小童にて竹園にて教給へる。民部卿入道殿の詞を爲顯の書集給へるなり。是れは世界にひろめさる抄也。能々可秘々々。返々不可有他見也。

爲顯本云。

爲家。爲顯。能基。三代也。嘉元二七二日。

又冷泉方には二行よりも三行に如此書也。

詠字題字作者前諸之。

かたのよりよとへとかよふ
狩人の船にすゑたる
やかたをの鷹
秋きぬとしのゝをふゝき
なのらせてそともの竹に
人かはるなり

〔右竹園抄雖得三本校合相互異同頗多々故今專從舊本之體耳〕

時秀卿聞書

聞書少々

一草のかけといふ事詠すへからす。禁忌也。草の本原なととはよみ候へく候。

一あはとそきゆるなとゝいふ事。山邊はしかるへからす。海也。

一かほ鳥。みちの國にはかきつはたと云也。又梟共云。但山河のいわゐにたてるかほよ鳥と讀はかはせみ也云々。春の末夏の始物也。

一さよの中山とあらは。たひにてあるへく候。

一夜千鳥とは云事讀へからす。月の夜千鳥とはよむへし。

一あかれさすとは云事あかねをさし日にほす事也。あかねさす日とも紫とも云也。むらさきと云事は。紫の下をあかれて

そむる故也。
一むな車と云事。むなしき車也。(宋世云。輿の如く車にむれを立る車也。)
一八重さかきと云事。榊葉の八重にあるへからす。花瓶なとに八重に立たるを云也。
一野といふ題を取て。草の原と讀たるもくるしからす候。
一よわたるといふ詞は夜渡也。道といへは世間をわたる道也。
一野といふ題に岡の邊とよめるはあしき也。岡のへと云心なれは也。
一晩風涼といふ事。晩夏にあらさる也。夕風凉也。
一くゐ垣とは柴なとの葉の有をきりてしたるを云也。とりのかきなとをさ様にこかる也。又くゐ垣といふ説もあり。五音相通之故也。
一蕣の花はよむ事は。はなすゝきといふ事あれは不苦也。
一まとゐの衣と云事。須磨の海士の衣によりての事也。
一なく千鳥かなといふと。千鳥なく也と云はかはる也。
一す鳥といふは鵜の事也。又島津鳥共云也。
一湖のうみと云字に。海の字を短册なとにかくへからす。
一こはきといふに兩說有。一には小萩。一には木萩也。
一たらちをといふは父也。たらちめとは母也。たらちねといふは父にても母にてもなる詞也。

一埋火といふ題にては爐火をよむへからす。爐火の題にては埋火をもよむ事不苦也。爐火はおほかたの題也。
一渡といふ題には。名所にてなけれとも。いつくにも水の有所にたにあれは讀也。古渡と云題には名所をかならす讀也。
一五文字にやすく散といふ事は。連歌なとはしらす。歌にはあしき也。同事なからちりやすきなとゝ云へきなり。
一寒草の題に蘆をはよむへからす。其故者出題の時。寒草寒蘆寒衣なと、別に出る間。寒草の題にては寒蘆をよむへからすと也。
一檜原なとを苑とよむ事よむへからすと也。
一歌合の方人を書付とき。人の名をはかた名一字つゝ書也。我名をは下に二字なから書也。
一歌合の時。卷物の末ひらかぬおくをかくして。たゝ今披講する所計を見するなり。
一歌をは正路によむへきなり。努々邪路すへからす候。但邪正の分は實に能々其道に入ふしたる人ならてはしらさる也。又人の歌を面白珍敷とおもはゝ。先一樣あると思ふへき也。眞實〳〵好歌はそのやうにおもしろ〳〵めつらしきとはおもはぬ者也。
一連海心敬のうたに。舟に人なしと讀たるは連歌詞也。同事なから招月の歌に。人もわたらぬせたの長橋とあそはしたる

は歌詞也。
一歌によむに。正路より稽古にてよみあけ。後は縦より邪路に似る歌を讀出たるも不苦也。初心の時より邪路におもむきたるうたは惡事候也。
一くつてこふとは。昔郭公もすにくつをあつらへたるに。もす其くつを出さる也。仍もすは郭公の出る時節には藪中のた□の物也。かへるなとを串にさして藪の方におく物也。郭公出るまうけにもすこしらへて置也。もすのゐさしといふ也。又くつてこうもすめの里の郭公といふ歌も有。もつは不直なるものと早歌にもうたふ也。もすはくつてこふとなく也。
一湊川つもるになして立浪の雪にさほさすゆきの舟人
此歌つもろになしてなとゝいふ詞惡也と云々。正廣か歌也。
一月をみてと云ふ文字は。連歌なとはしらす。歌にはあしき也。月見れはなとは善也。
一小舟とめぬれはさ夜ふけふる雪のあしの枯葉にさゆる聲哉
此歌さやくならは可然也。さゆると云は雪のふりたる色也。さやくといふは聲の事なり。
一又舟くもると云は連歌詞也。同事なから舟にてはくもろは能也。
一五文字に消侘ぬと置ても。哉けりなりなとゝは結句に讀へからす。

一舟中雪なとゝいふ題は。河舟をもよむへき也。湖なとも同事也。舟の字も船の字も同事はおなしことなり。
一朝と云題をとりて。明ほのをよみたるくるしからす候也。
一百千鳥といふはもゝちの鳥といふ心也。是若基俊流也。鶯と云說可有事は治實也。雖然もゝち鳥さえつる春は物ことにとよみたるも。物ことにとおれはもゝちの鳥なり。
一浦舟なとゝ云題にて。海をよみたる則善也。浦といふ字なけれともくるしからす。又舟の浦にある躰ならすとも。浦といふ字と舟といふ字たにあれはくるしからす候也。
一舟にたく火の殘煙はといふ言葉は連歌付候歟。
一つま琴。つま鏡。つま木。みなちいさき也。
一浦春曙と云題は。正月にも二月三月にも出てくるしからさる題也。兼日の題にかきりての事なり。
一樵路蕨と云題は二月三月の題也。子細同前也。
一花梢と云題は梢といふ字をよみあらはしたる也。あなかちにまはしてよむへからす。
一春會無春契戀なとゝいふ題はよみにくき也。
一はつきとは。山里なとに物をほさんとて木をしたてゝ。そのうへに木を渡て置物をいふ也。招月之歌に有也。
一老鶴といふは詞はよまさる也。老のつるとは詠也。
一心の空といふ一切おもはしから言葉也。心もそらなとは

中々好也。
一歌は□道理の立たる好也。但道理のなき所を所詮にしたるうたあし。これを心得たる事大事也。
一春の草なとゝ云題に萩の燒原をよみたるは落題也。草にはあるましき也。
一懷紙したゝむる樣。折めを付は二條家の流也。丸卷たるまゝなるは冷泉家也。少れつる事は女房の懷紙にかきりたる事也。ひとりほとけさせしかため也。
一ふしたちて也。早苗の生立をいふ也。
一歌一首のうちに夜と世とよむ事くるしからす候也。
一秋の嵐春の嵐なとゝ結句なとにおく事は。或は立田吉野山なとの春秋の名所の山なとにては。春山秋嵐なとよみてぬ也。名所ならてたゝ山はかりよむ時は。山の秋風よむへき也。
一撰集を見事。三代集は。俊成卿定家卿撰集者なれは。千載集新古今集なとは見へき物也。其外撰集見す共也。家集みたらんはまさるへき也云々。
一面白詩。我心におもしろくおもはん歌四五十首。又源氏の言葉のおもしろきなとをいつも心に持て。詠吟して歌をよまは。なとかわろき歌のよまるへきなりと也云々。
一螢火と讀事上古はありし事也。中古より此かた二條家にも冷泉家にもきらひてよまぬ也。螢のともす火とは讀へき也。
一のらと云は夏野なとにはよむましき也。秋冬なとにはよむ也。其故は秋の末に霜をきなとしてあれたるをのらと云也。
一螢には或草村或はかまなとくちて成也。
一埋火のもと燈のもとなとよむ事は。ちと歌のやうによりよむへき也。たゝ閨のともし火燈のかけなとにてあるへき也。春物ふかき燈火のもとなとゝ讀候。春物ふかきなとゝ云所に心あるへき也。古事にてはなき也。
一歌をよまん時。我心にか樣おもへとも。人の心得さらぬ歌をはよむへからす。歌合の時殊心得てよむへき也。
一旅店の店の字は。野への草枕なと斗よみては惡也。宿の心さしもよむへき也。
一若葉。あさみとり。ともに春也。八雲御抄に（本ノマヽ）
一夏鳥と云題にては時鳥水鷄鷺なとを讀へき也。殊郭公水鷄を本によむへき也。
一夕立は六月のもの也。但四月五月なとにも雨の急に降を夕立と云事有也。
一姉小路神明神主豐文と云人の歌合の時の歌に待堪戀。
　さりともとたのむ夕の空なから身をうき雲に山風そふく
此歌を招月判云。此歌或はおもひいてよ誰かねことの末ならん。或さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲ふく風のみねに

みゆらん。此歌ともの類也。か様の歌は是程の位にいたらすしてよむは我物にてはなき也。借物也。か様の歌を實に我は讀者をと云人々。さらは思ひ出よたかかれことの末ならん雲ふく風のみねにみゆらむなとの樣の歌をいひてきかせよといはゝ。位にいたらぬ物ならは。くはしくゐいふましきものなり。

一原といふ題をとりては。或は浮島か原みかのはらなとゝて。名はかりにて原のなき所なとをよむへからす候也。其故は八雲抄にたゝはらといたしして。又別に河原と出しわけたれは也。

一浮島か原に二有。一にはふしの麓に有也。一には鹽かまの浦に有也。松なとよむ所也。

一そかの河原にてすけを讀はますけとよむへき也。小すけなとはよむましき也。其故は萬葉以來ますけとよみならはしたり。

一人毎にさゆりを讀時。さゆり葉のしられぬとつゝくる詞は。催馬樂にさゆり葉のしられぬと云詞を取て万葉巳下讀也。雖然さゆり葉のしられぬとつゝくる詞のいはれをはしられぬ事也。

一とをつ人とはもろこしの人の事也。遠津あすかといふ事は別の事也。

一蚊遣火といふ題にて招月歌に。夕されは杣木もしらぬ蚊柱をたつれはあたら夏の古郷。此歌は蚊計にて遣火の詞なけれ共。(然世)題の出時かやり火といふ題はあれとも。蚊と計云題なし。悳間蚊計を讀にも則かやり火有へきと也云々。

一鵜河照射なとも同事也。照射と云題にては。あなかちにてらすなとゝよますとも。ともし或はさつをの弓なとにて滿足也。鵜川にてもあなかち篝とよまぬとて不苦也。慈圓の御歌。鵜飼舟あはれとそみるものゝふのやそうち川のゆふやみのそら。か様の歌にて可心得也。

一都をめくる夕立といふ事は。都の四方をめくる也。

一夕立の題に六月の雨と讀事不苦也。五月雨の題に五月の雨とよむなれは也。

一五月雨の題に夏の雨と詠事くるしからす候也。

一富士の雪は六月の十五日に消。やかて其夜降也。

一雲とをきといふ五文字不可然。くもとをみ善也。

一木なといふ事。落葉にかきらさるなり。

一草を取手なとゝいふ事。早苗に限たる事なり。

一閨の題に床と計よみては落題也。

一扇の風ふき出すなとゝいふ事しかるへからす候也。

一橋といふ題に梯といふ字讀たるも可用也。又棹といふ題に竿の字を讀可用。

一雲のかけはしを朽と詠へからす。雪（雲歟）の梯といふ事は吉野のみねより泊瀬の鐘の有所へ雲の梯をかけて。天人來て初瀬の觀音を供養しゝより起たる事なり。

一みねなとを月の通ちと讀事あるへからす候也。但讀風によるへきかと也。

一時雨なとをさのみ海の沖にてはよむへからさる也。

一山路橋といふたいに。路の字はなくともくるしからす候也。

一舊戀といふたいは久戀なとゝはかはるへし。何にもあれふるき物をよせて可讀也。

一結句に萩のうは露とよむへからす。萩の上の露と可讀也。

一題をとりては其會の時分に可讀也。季の題に限ての事也。是は昔の歌合にことにとかめたる事也。

一擣衣の題に結句なとにうつ衣哉といふは人の打を云也。衣うつ也といふは我うつ也。

一軒の草といふしのふの事也。忘にてはなきなり。

一蘆のかれまといふは惡詞也。

一雲の浪まといへはとをき心有也。

一遠樹紅といふ題は。あなかちさのみあかき事にてはなくとも。紅なと可讀事不苦也。

一やしをの岡は泊瀬にかきらすいつくにも有也。泊瀬の山の麓にはなき也。たけに有と云也。

一廿八品のうたを披講する時は。短册のやうに本尊の方へなしてせぬ也。題の有方を本尊のかたへなして。人の名の有かたを講師のかたへなしてよむなり。

一廿八品の歌端作を書時。聞法華講と書は悪也。

一すさましきと云詞は。秋の始の詞にて候。用之。

一歌をは心を大様にもちて可讀也。細になれはけたいなる心にてあしきなり。

一歌を大様によみて好云々心。其證歌には。

谷風に吹あけらるゝ木葉こそ軒の下うつ時雨なりけれ

此歌は一興有歌なれとて。あまりに心こさひにしていやしき也。

吹はらふ嵐の後の高ねより木葉くもらて月やいつらん

昔の歌は此風に皆やさしきなり。末代になりてはいよいよいやしくなるへき也。心得へし。

一きつけしたる歌は惡也。其證歌に曰。

河上にふりつむ雪や□瀬々にやすらふうちの柴舟

此歌は五文字たゝ河風にとしたらは可然也。かやうに河上に雪ふるらんなとゝいへる。さしたる事なしと云々。

一題に色々有也。まはすも有なり。正路に讀も有なり。縱は袖氷重夜といふ題は。袖氷夜といふ字はいつれも正路によみあらはすへき也。重の字はまはすへき歟。又結題は取（？）も有

捨字もあり。まはす字も有。正路に讀あらはす字も有也。

一夢浮橋の事。源氏物語より出たる事を。定家卿始て春の夜のうきはしとたゝして取給ふ也。其後ゆめのうきはしと云事をよむ也。又同時代家隆卿夢の浮草といふ言葉をはしめて詠出されたる也。然間夢の浮草といふ言葉を詠へからす。一句なりとも主あるとをとらさる好也。

一歌合に前に出たる題の文字を後の題によむへからさる也。たとへは歳暮松なとゝ前に出たるに。後の題にて松をよみたる様の事也。

一かこと。加言。誓言。神言歟。かこつけ事。少の事にもいふ也。

一鶯の衣〔花歟〕かさといふ事は。梅の花をひとつちきりたらば。うくひすの笠に似相へきといふ心也。笠をぬふとは鶯の木つたひたるすかた。物をおるに似たれはいふ也。かとりをかともいふなり。

一ほろしとはひよとりしやうことといふもの也。かはつなくきしのほ〔ろ歟〕ろしといふうたあり。

一連海防の歌に水郷。

白妙の布にゆふへを巻こめてさらす日したふ宇治の川島

嶋峯紅葉にて。

椎柴のうら吹風にみちくるや峯の紅葉のあきのはつしほ

此歌共みな未來記の歌也。

一立枝の梅といへは。必々客人の心有也。古歌に。

我宿の梅の立えやみえつらんおもひの外に君かきませる

此歌によりての事也云々。

一羇中といふ題にては。かしまたちの旅はよむへからす。

一櫻散木の下風といふは制詞也。雖然さくらちると計いふ。きとくもなき詞なれは也。堯なとはさくらちるをも一句によむましとなり。

一本歌をとる事。古今後撰拾遺此三代集のうたを取也。時代は堀川院百首のころまでのを取なりと云々。

一俊成卿五社法樂百首は歌判によりたる事也。其故は歌合なとの時。我は正路に判すると思へとも。若神慮にやちかふらんとて。そのために百首なり。

一懐舊往事とを人つねに人〔又歟〕同物に心得たるあしきなり。懐舊のたひにては昔中古當時のこと讀也。

一卯月の花といふはうのはななり。

一砌といふ題にては庭軒籬なとよむへし。

一はつせめ。山の神也。

一すゝか姫。宇治の橋姫。松浦さよひめ。雲の殘たる物也。すゝかのこわと云物也。たてゑほしをぬきておれたるかいしに成たるなり。

一小野小町秋風のふくにつけてもあなめ〳〵の歌。此あなめ

〳〵は女目々と書てよむ也。可秘ト云々。
一恨たる抔いふ詞好へからす也。
一歌はいつれにも道理なき事はなき也。歌合なとの時も。いつれにも道理はありとも。歌の姿やさしくして下すからぬを。よく〳〵みて方人になるへき也。
一河に奥といふ事はよむへきなり。但小川なとゝいひてはあしきなりと云々。
一河戸といふ事。河へなるかたに竹にて戸をして。水なとくむを云と一說にあり。
一夜床といふ事。古人歌合に難たる詞なり。
一すみれかもとになく雲雀といふ事よむへからす。すみれはちいさき物なれはなり。
一とまやといふ事。山ちにもありと云々。
一ならのあすかは願弘寺邊なり。
一四季の歌をは實して可讀也。戀雜の歌をはちとまことしからぬをもよむなり。
一五月雨なとの歌に。雲のほるといふはなをふるき心なり。くたるといへはは□也。
一□題といふ事二あり。一には題をかたはらにして。よの事をほとおほくよみて。題をかたはらにしたるをいふ也。一には題の二首も三首もとりたらん時。或は夏鳥夏戀なとあらんに。戀の歌にも鳥をよみたるを云也。私云。歌合なとの時事也。
一季の題をとりたらん時。春の題をとりては。打向て春の雪なとを可讀也。さはなくて春はうき。冬そ戀しきなとはよむましき也。又夏の題になつそかなしき。春そこひしきなとはよむましきなり。これを故實ト云々。
一里といふ題をとりてむらを讀事くるしからさる也。又村を取て里とよむ事同前也。
一原といふ題を取ては。名所の野を讀て。いつれの野原とよみたるもくるしからす候なり。
一寄鳥雜といふ題を取ては。鷄のなくにめをさますなとゝよむへきなり。私云。何にても季のなき鳥をよむへき也。寄鳥雜にては旅戀涙夢枕なとの事を可讀也。又人事と云題も同事也。
一草河といふは南禪寺の内に有也。永観堂の方より流出たる河也。
一あはれはかけよなとゝいふ詞をよまん時は。露とも又は□床の□なと様の物を讀へき也。かけよといふ□□なり。
一晩凉といふ題にては。晩氣のすゝしきすかたをも可讀也。
一夏嵐をよむ事。古歌に七月の初嵐とよみたれは。夏秋より冬

春まて可讀にてあれにて。六百番歌合に夏の歌にあらしを多く讀たる也。音不言也。

一むろのやしまは少里也。煙たつとよむへきなり。

一みかの原といふ事は。本歌の心は都をけふいてたれとも。みかの原といふ心なり。

一みつの御牧は内裏の御料所也。左馬督右馬督なとゝいふも是を持ゆへなり。

□圓御歌に。

御牧より草なふ駒のくちの籠を見るも悲しき世の習ひ哉

此歌のくちの籠は馬の口にかこをくみて置物をいふなり。

口傳秘説抄有。

西洞院平官兵衞督

永祿二年三月六日書之。　時秀判

此一帖以時秀卿筆之本不違一字書寫之了。

寛文四年十月　日　丹榮(花押)

かりねのすさみ

予既二毛の秋を送れとも。こゝろにかなふ事もなし。道のはしめみちの終りいひをしふへき。夜の鶴は世をはやらせしかは。まことにみなし子とやらんにて。はゝその一木におほはれ。露霜のうれへをさけて。人となりにしそかし。かくてよろつかゝるものゝとはりをも。うかゝひしるへきいとなみいてきたりし後は。世の中いつかたもみたりかはしく。住馴し里もののゝふのちまたと事かはりて。あしをたつへきやうもなければ。愛やかしことさすらひもて行ほとに。螢雪の光もむなしく旅ねの窓の前に消うせ。あるはなくなきは數そひ行て。身ひとりにうき事もあつまりてくるにやと。晝をくらしよるを明し侍にも。和歌のうら浪たちかさねたる家の風。よはりはてぬる跡なから。朽やらぬ汀の小舟さしすてすしてそなくさめける。さて行とまるを宿とさためて。足にまかせ行ほとに。富士の麓にたちとまり。中空なるしら雪と年をつむ事みとせはかり。みたらし河の清き流をむすひて。神に手をあはせ。身の春秋を送りし比。ある人歌はいかやうによむへき物そと尋侍しに。古抄の口傳。家にたつる所のすちをあら〳〵語侍しを。おなしくは鳥の跡にとゝめてと。あなかちにのそみしこゝろさしすて難く。又は柴の庵のしはしなる世中のわすれかたみにもやと。かりねの枕をしやりて。眞柴のくゆる火のおり〳〵書つけ侍るものなり。

諸法從緣起となれは。何事もそのたよりにまかせてあらはささらんには。いたつらに心にくつるむもれ木となりて。いつの

春をかまちてあふ事のあらむ。抑歌の道は二はしらの御神の御との葉より事おこりて。今にたゆることなし。もてあそふものはしけしといへとも。道のおくにたち入て。佛神の御心にかなひ。代を治民をみちひくみなもとゝしる事は。千々の中に一もなきにこそ。その故はまつ月氏の佛のみのり。震旦の孔子老子の道をうつしなすらへ。上王道より下萬民に至るまて心をのへ。春さり秋くれ。花散葉おつ。是みな有爲轉變のことはりと無常心を觀し。何事にも我とする事をとゝめ。心の邪をさけ。欲情貪着を離れ。一心の圓鏡に向ふ時。ともすればうかひくる憂世のくさ／＼の事をこゝろのたねとして。ことの葉にいひ出るを。吾朝の歌と名つくる也。これ一心のうへの妄想をはらひて。本來の實地にいたるたゝちなれは。天地も感動し鬼神も納受すと見えたり。されはまつ歌をよむには。道を第一にして。時節の景氣にも化すれは。全く貪着はあるへからさるものなり。たとへは春たつといふより。野邊の雪まにわかなをもとめ。谷の鶯の軒はになれん聲をまち。梅散ぬれは。峰の霞に櫻をたつねて。まつとしもなき夕の月のおほろなる影。しくものなしと家路をわすれ。藤山吹の夏にかゝる色もあはれに。山時鳥は花たちはなをまちかほに聲をおしむもあちきなく。かやりたく賤が家ゐのいふせさも。わか身の上にとりなし。やう／＼秋の初風袖にすゝしく。七夕つめの一とせを待けん心ほそさも。今宵ははれぬへき銀河のあふ瀬にやとなかめやり。よな／＼さしそふ光。月のかつらも紅葉すれはにやとあやまたれ。初かりか音啼わたれは。眞萩の上の露をそへ下葉の色つくに。ひとり有人のいねかてならむと物侘しく。うつり行神無月の空は。ふりみふらすみさためなき。時雨の雲のゆきゝに。木葉の散かふをとも聞わく方なく。霰散軒の呉竹そよさらにねられぬを夢にわひ。嵐さえぬる夕くれは。あすや雪見む峰の松と心をつけ。年のくれゆけは。こえぬる老の浪をかなしひ。鶴龜によそへて君か代の久しからむ事を祈り。さきたつ野邊の烟を見ては。をくるゝ人の身をおとろき。よし野の花をしまの月に思たちて別れ行には。宮古の山名殘あはれにかへり見せられ。いつしかなるかりねの宿に。草のむしろをしきしのひ。雲の上に見し人の面かけに。をよひなき思ひをかけ。道のゆくての袖のかも。心に殘るつまとなりて。といひかくいひ。つれなきをしたひ身をかへり見。まつはひさしき物と心をくたき。新手枕には獨ねにまたれし鳥のねをかこち。一かたならぬ世間の道。昨日見し人けふはなく。さかへおこるまへにはおとろへを歎き。わひぬる上には時にあふよろこひをたのしひ。ひんかしに行にしにさり。いく程となきなからへのとにかくに心を盡し。薪の山人は行なやむ[illegible]もにのかへさに。けふもくれぬとおとろき。もしほくむ海士の袖かはくまもなきうら

み。千々のことわさにふるゝを。とはの塵となしてはらへは。一物のこらぬ心鏡何のくもりか侍らん。こゝをまもる事。尤學者の本意にや。

問云。歌をよむ事いかやうなるへきそや。

答。定家卿云。情以新爲先。詞以舊可用云々。是第一の心え成へきにや。然るに今の世の歌は。詞をあたらしくあらぬやうにつくろひたてゝ。心をはとさまかうさまになすと見えたり。いかにも心のあたらしき所をもとめて。詞はふるく先達のつかひつけたるやうに。たゝしくのひ〳〵と幽玄に稽古すへきにこそ。同卿云。近代の人所詠出。心詞雖一句。謹可除弃之云々。是は同類の事也。今の折ふしをみれは。昨日かも人のよむところの詞を。けふはすこしひきちかへ。わか物かほに作りなす事あり。ゆめ〳〵有ましき事と也。むかしはさるためしあれとも。たかひにぬすみとるへき心ならねは。結句一興にもなりにしと也。今はむねのうちをすてゝ。よそよりたよりあるにすかりて。作出す心のみなれは。かくいましめたる也。同卿云。歌は廣見遠聞道にあらす。たゝ心より出て。みつからさとる物也と云々。尤殊勝の詞也。可信可仰。同卿云。常観念古歌景氣可得〔染しイ〕心云々。此心は先達の秀歌の餘情景氣を思ひつゝけて。詠し出したる其作者に成かへり。春秋の野山。世間の有さまに合せて。けにかくこそあれと。わか心にそましむるなり。その心より詠し出さむ歌。いかてかその歌の姿に似さらん。青黃赤白黑。いつれか染るにと色をなす。尤可思惟。

問云。いかやうの歌を本として學へきそや。

答。同卿の作百人一首これを本として學へきにこそ。かの百首はかの小倉の山庄にして。四十余年道の工夫修行の時。始天智天王より終順德院の御製まて。みな上中今の體をそなへたる歌を撰したり。その故は上古の歌は上古なから中古當世の體をそなへ。中古の歌は中古なから上古當世の體をそなへ。當世の歌は當世なから上古中古の體をそなへたる也。先段にいふかことく。摠して此道は代をおさめ民をみちひく教戒の端たり。しかれは實を根本にして。花を枝葉になすへき事也。それを新古今のころの作者。ひとへに花をとり實をすてゝ見ゆるを。定家卿かなしひて。此抄をしたゝめ給ふとそ。されは古今集の序にも。見上古歌。多存古質之語。未爲耳目翫。徒爲教戒之端といへり。是にて能々工夫有へきもの也。かく心えてのうへにては。一座一興に花過て一ふし有をもつかふまつるへきにや。知失耻失德也と侍れは。たちかへりては空おそろしくはゝかり思ひて。本體をまなふへき也。たゝし又實を本になすへき事とて。通屈のなけれは事つまる也。事つまりては稽古の成し難けれは。初心の時は樣々に心をめくらすへきにや。本體をはたと心え分つれは。あしき方にははれぬとそ。

問云。一向あしきすちにて不可用歌の様は何れそや。

答。同卿の作未來記五十首。雨中吟十七首。是佛法ならは戒文なり。はしめの未來記に云。

たか春といはもと菅のねのひしてひくまの野への松の一入

是體也。この歌を見るに。詞のえむにひかれて。あなたにうつりこなたにうつり。よみもてゆく程に。歌の本意をうしなひて。一すちに其心を云とゝけす。たとへは人の上にはことをたくみにし。水もらさしとしたしきものから。下の心の氷はてゝうちとけすおろそかなる様の事にこそ。いひつゝけたるさまは歌のやうにて。ことはりさらに夏ひきのいとみたれてすちなけれは。無心所着の躰と云も是なり。からの歌にも離騷の躰とて。世のみたれおたやかならぬ時の風をあかせり。かやうの所をも能々たつねあきらむへきものか。されは先段にいふかことく。詞ふるくと有をまもるへき也　當時はこと葉をたくみにせんと作る故に。異風異躰になりて。彼未來記の躰にひとし。この風躰をさかりにこのみよまん時。歌の道はやすたるへき世いたれりとなん知へしと侍る也。さて雨中吟と云は。詞は子細なし。風躰のあしき義をしめす也。雨中吟と號する事。尤可有心得儀なり。名の外に躰なく。躰のほかに名なしとは。まことにかやうの事也。たとへは五月雨の日をへたるころ。南氣なとゝて。ぬるらかなる風吹なやみて。人の心もはれ〳〵しからすものむつかしく。野山草木のうへまてもしほれうらひれ。すくよかならぬさまを十七首の體にしたてたり。されは十七首のうち大概雨をよみてはふるもの也。詩の序云。治世之音安以樂。亂世之音怨以怒といふも。そのこゝろをもつて世の盛衰をはかりしる事侍にこそ。此國は歌の道よりよろつのことわさおこり侍れは。たゝしき所肝心なり。あるは人にをくれ。あるはうれへある人の詠しいたす。哀傷述懐なとは各別の事也。それにはあらす。ことはとゝのをらす。いまはしくうちしほたれたる様ある也。かへす〳〵風躰第一の事也。能々分別すへし。かならすよみいつる歌の風躰あしけれは。其身の尖有といへり。詩序云。逸者其聲樂。怨者其吟悲云々。されはあしきことあらむとては。をのつから歌の風躰のうちしほれたるよみいたさるゝ也。それを心得分て。つゝしみ詠しなをし。身を全する事。此道の肝要也。造次顚沛に工夫をゆるすへからさる者歟。さて和歌と云和の字によくもとつくへし。しからはかく書をき侍る跡の。あさはかにいたつらことなりとも。あさけりをたちみるに。一ふしもよき事あらはしたかひ。あしからん事にはとり合すしてさてをかは。何にか和せさる事の侍らむ。人ことにわれをたてんとては。人を謗する心の侍る。いかならんことにか。只我をすてゝ他にしたかふこと和の根源なり。破有法王出現世間。すなはちやふりすてらるへし。

明應第八之年暮侍し比、兩神もかゝ見給へ。埋火の光をたよりとして。一時はかりにしるし付る者也。人のあさけりはさもあらはあれ。かりねの宿のうきつれつれのことわさなれは。かりねのすさひとや名付侍らむ。

十代末葉素純在判

素純法師或云。與阿彌。東下野守常緣息。

〔右かりねのすさみ以圖書寮本校合〕

續群書類從卷第四百六十五

和歌部百

定家卿和歌式 又承元和歌式ト云

〔本書與正編卷第二百九十二所收近代秀歌全相同者也故從省略〕

〔奥書云〕承元之頃。自征夷將軍依被尋先人。所注送之秘本也。

弘長二年九月老後更書寫之。

三代撰者桑門融覺判

愚見抄

詞はいかにとあるへき物そと尋侍しかは。只心のをよふ所に叶はんとすへしとの給しは。けにも不堪のものゝ上手の様をうらやみ。秀逸の姿を心にかくれは。道とをく成て。讀いたることなかるへし。されはわつかに存得たらんしるへにまかせて。ことの道理をわきまへ讀へし。かくしつゝまなひもてゆかは。しねんに發明する事もなとかなからん。をよそ歌の様一かたならす。さりなから初心のとき。むねとよむへき姿を思ひわかち侍るか。ゆゝしき重事にて侍也。達者のよめるをためしに引て。おもしろき歌をこのみよむこと。ゆめ〳〵あるへからす。稽古たに入もてゆけは。何となき事をけすらひもなくいひ出すも殊勝に聞へし。生得の不堪のことに侍らん人は。當世古風とてよむ姿を。しとやかに讀ならふへきにや。一の故實にて侍るへし。歌の本には代々の勅撰とてそ數侍れは。それにて躰を見したゝめてまなふへき也。只なをくたけたかく。しかも心ある歌にて侍へし。わか詞のありさまにて思ひはへるに。讀に

したかひまなふにつけて。としく／＼月く／＼に先非のかんかへらるゝことのみそ侍る。それと申は。たゝかけりすくし侍し事ともなり。いかにも初心の時。さやうのかけり歌はおもしろくも覺へ。又よまれ侍也。よく／＼指南をまもりて。かたよるとなかれとそ。亡父卿もいましめられし。ふるくよめる詞にも。みゝとをに何やらんとおほえん詞を讀へからす。わさとさやうの詞をつゝ（け歟）てんといてたつ輩も侍るから。本文なとのよくも心得すへぬことをよむ人もまゝ侍り。さるほとにあやまることともおほきにや。庭訓を得ぬかいたす所なり。金吾の說とての給し。つねに人のそゝろにといふ詞をよむとて。すゝろにといふこと何と心えたるにか。綺字をすゝろにと讀とかや。外緗の書記の點にすゝろにと訓せることもあれ共。なとやらんそゝろは聞よし。此兩說の用捨は歌によるへき訓にや。それをなまさかしく。すゝろとのみいふことは。はなはたおかしきことにこそ。歌によるへきそと申は。

なには人蘆火たくやに宿かりてすゝろに袖のしほたるゝ哉

此詞は上句のあし火たくやといへるにたいして。すゝろにとよめり。あしにはすゝろといはんこと。尤緣なるゆへに大切なるへし。あし共なく。もしはさゝ竹しのやなと樣のえんある詞もなからん歌に。すゝろといはん事。つや／＼所詮も侍らし。凡すとそとは共音かよへりといへ共。そゝろにといへるは。常にみゝなれて。きゝよき成へし。たとへはもとはさやの中山と申せ共。夜の心を入たき歌には。さよの中山とよむかことし。是もやとよと同類なり。かゝるたくひこれにかきるへからす。一をいはゝ三のすみをもさとり知へし。抑歌のすかたにあまたの風姿あり。十躰とてふるくも家々にたてをきて侍にや。又詩の十躰とても侍り。詩歌の十躰共に相違なきにや。三五記にくはしくはわかちあてゝ侍り。十躰と申は。　幽玄躰。　長高躰。　有心躰。　事可然躰。　麗躰。　濃躰。　有一節躰。　面白躰。　見樣躰。　拉鬼躰是なり。よろしくこれはふるく申をきて侍れは見知せよ。此外の躰の又可存知事あまた侍り。いはゆる寫古躰。　景曲躰。　物哀躰。　存直躰。　行雲躰。　廻雪躰。

理世躰。　撫民躰と申ことあり。

身に寒く秋のさ夜風吹なへにふりにし人の夢にみえつゝ

これこそ寫古躰と申へき。物さひしく心うるはしき歌さまなり。亡父卿のことにうらやまれし詞なり。存直躰と申すは。たゝ十躰の中の麗躰にて侍るへきにや。されともいさゝか心えわくへし。麗躰なからも平懷にて侍るかたなく。ありのまゝならん歌を存直躰とは申へし。行雲廻雪躰と申は。幽玄の詞にとりての姿也。幽玄の歌の中に。わきて行雲廻雪といはるゝすかた侍り。心幽玄詞幽玄とて兩種あるへし。今の躰は詞幽玄にて侍るへきにや。文選高唐賦云。昔先王遊高唐。怠而晝寢。夢見一

婦人。婦曰。妾巫山之女也。爲高唐之客。旦爲行雲。夕爲行雨。朝々暮々。陽臺之下。旦朝觀之如言。故爲立廟。號曰朝雲。同洛神賦云。河洛之神。名曰宓妃。(本ノマヽ)髣髴兮若輕雲之蔽月。飄颻兮若流風之廻雪。肩如削成。腰如約素。(此神女也。)此景粧を心にかねたらん歌なと申へきにや。景曲の體と申さんは。四時につけていつれまても。其時の興を讀そへたらん歌そ景曲躰には叶へき。理世撫民躰と申は。有心躰の種類にて侍り。異朝堯舜。我國延(喜歟)行天暦のかしこき御めくみになそらふる姿成へし。此帝は一國の尊主。萬人の秀頂也。有心躰の(歌歟)は和歌の本意至極とすへき躰也。かるか故になそらへ名付る成へし。有心躰なからも。理世撫民躰といはるへききさまあり。これ歌の灌頂なるによりて。くはしくはのせす。又かきのせんとするに。さらに其詞なし。まなひゆかは身つからさとりしるへきにこそ。物哀躰。これもことに好士ことにおもはへてもつへきにや。たゝのこりなく。さこそとしつみきはまれるすかたにて侍へし。すへて大事の躰なり。有心躰の歌の中にあるにや。

くれわたる秋の庭こそあはれなれまして消なむ夏の夕くれ

しめをきて今はと思ふ秋山のよもきかもとに松虫のなく

小篠はら風まつ露の消やらてこの一ふしを思ひをく哉

これらにて侍り。愚老もいかにしてかやうによみにせんとのみ。明暮はなやみあんすれ共。さらに叶ひかたし。亡父卿の桐火桶の歌なとの給しは。かゝるたくひにそ侍りけん。さて秀逸様はいと大事にそ侍る。それをはれの歌と申あり。地歌とはれの歌とをおもひわかたさらん歌よみは。無下のことなるへし。

貫之
さくら花開にけらしな足引の山のかひより見ゆるしら雲

躬恒
住吉の松を秋風吹からに聲うちそふる與津白浪

おきつ風吹にけらしな住吉の松のしつえを洗ふ白波

これらにて侍へし。又遠白躰そ猶不思儀の躰にて侍る。未練のほとはかつてよまるましき躰なり。

さゝ浪や國つみかみの浦さひてふるき都に月獨すむ

ほの〳〵と有明の月の月かけに紅葉吹おろす山おろしの風

をくら山しくるゝ比の朝な〳〵昨日はうすき四方の紅葉ゝ

これらにて侍り。小倉山の歌は愚詠の中にはすこしつかふまつれるやうに覺ゆるたくひ成へし。さひしき姿と申は。

日暮れはあふ人もなしまさき散嶺の嵐の音はかりして

故里はちる紅葉はにうつもれて軒の忍に秋風そ吹

此たくひにて侍へし。常によき詩を吟して。心をすますへき也。詩は心をたかくすます物にて侍る□閣省花時錦帳下。廬山夜雨草菴中。此詩をそ亡父卿は詠せられし。故鄕有母秋風涙。旅館無人暮雨魂。これ又すくれたることにて。感を動すたくひなり。白氏文集の中に大要の巻あり。常に覽せよと古人も申ためる。

ゆかちかしあなかま夜はの恭夢にも人のみえもこそすれ

たかまとの野ちのしの原末さはきそゝや木枯けふ吹ぬなり

是らは出きかたきたくひ。上手のともからのよむへきにや。物つよき歌に。

君か代の久しかるへきためしには神そうへける住吉の松

此歌をかねてそうへしと申人は。相傳なき人のあやまりなり。あさましき事と。金吾も仰せられけるとかや。歌のまことに本實と申は。物になそらへて。いはゝとし五十有餘の上卿の衣冠たゝしやかにき入て。何となく物なれたるけしき。かたへをもぬけてあるへかしきか。おとなしやかに笏とりなをして。陣の座につき。政にしたかへるをみるやうにそあらまほしき。〔マヽ〕點ぬらんうらみしと思ふとても〔ともイ〕待へきにあらすといへ共いはし

これ又大事の躰也。ゆめ〳〵初心のほと讀へからさる歌さまなり。

嵐吹とを山もとの村かしはたか軒はより雪はらふらん

家隆卿か歌にはこれらにまされるたくひみえぬにや。よろしき詞なるへし。さても俊頼朝臣は生得の堪能にて侍けれとも。かすかに物あはれなる姿をよまさりき。たゝいしけに讀なしけるはかりにこそ。金吾はつねに俊頼は歌よむふしもしらぬ成へしとのみ申されけるとかや。おもふへし。代々の勅撰の中にも。萬葉のやうなもこ〔已歟〕道の後存へし。古今集は初心のため。又練磨の人のため。ともにわたりて始終よろしかるへし。當世の風躰は初心のほとは斟酌あるへきにこそ。千載集なとはこひねかふへきさまにや侍らん。難義なとならひしらんとすへからす。たゝ此道を思はゝ。寢食を忘て朝夕に心に見て讀ならふへし。あゆみをはこはすして。長途にいたらんとせんこと。ゆめ〳〵叶ふへからさるへし。よますしては誰も上手になりたるためし侍る。はやよみを必このむことなかれ。はやくもよみ。をそくもよも〔[illegible]歟〕。心勞するをもて業とすへし。朦氣なとのきさして。心底みたりかはしき時。しみてあんすること又あるへからす。退屈しぬれは。中〳〵道の陵廢となることにて侍り。さらんおりは景氣歌とて。心はなけれ共。詞歌めきてゆゝしけなる詞を四五首よみて。機をすゝめてのち。心をしつめつゝ。有心躰をもとつき讀へき也。心さしをさきたてゝ讀もてゆけは。あかる事うたかひなし。たゝすることのかたきにあらすと申は。此ためしにやあらん。まなひもて行まゝには。又いよいよ大事に成侍る也。あふけはたかきなとかきをきたる。先賢の遺訓もまことなるかなや。うたを讀には詞の取捨にて侍り。詞にとりてあまたのさま〳〵侍へし。言詞の中にやさしき詞をは一向につらねよせ。つよき詞をは又一首によせて讀也。ふときほそきによみそへ。こまやかなることはをけたかき詞によ

みませつれは。歌きすくみて不具也。あひかまへてふとみほそみもなく。するりときこえさせて讀へし。いへは詞にはすつへきもなく。とるへきも侍らす。たゝつゝけからにて。ことはの是非雌雄はきこゆへきにや。未練不堪のともからのよめるにこそ。されは詞ふしたちてうけられぬ詞はまゝ侍れ。心を能〳〵案しかへし〳〵用捨すへき也。少々詞のとゝこほりたれ共。心のふかくさしはさめる歌はそれにゆるさるゝにや。いかさまにも又心をむねとして。こと葉の善惡をわきまふへし。心詞の二は鳥のつはさ車の輪のことく成へし。一かけては叶へからす。あまり心を深くよまんとて。うち聞に何事をいへるにかと覺ゆるやうなる詞ゆめ〳〵讀へからす。かたはらいたきことなり。上手のわさとこれまてと詞をいひのこして。うしおほめきをしたる歌をうらやましと思ふて。推て讀かいたす所なり。初心のほとはこと心をたゝしく。詞をなほく讀つくへき也。正路をうしなはすして。まなこを道肝にかけてはなたされは。かならす直に源底にいたるへし。いたりぬれは。いかなる道をまなへとも。かつてわつらひなし。いりかとを能〳〵まほりおしふへきにや。そのつゝしむへき事と申は。かけり歌のきゝみえ也。このほと明ほのゝ春。夕暮の秋なといふこと。人ことにこのみよむは何事そや。夕暮の秋といひ。明ほのゝ春と讀て。歌の心たにもやかてあたらしくならんには。尤さこそ侍るへけれ共。また〳〵そのせんなし。たゝ春の曙秋の夕暮にてこそきこゆれ。このたくひ。これにしもかきらす。數〳〵見えきこゆ。かなしきかなや。道すてにすたれなんとする成へし。此頃かたをならふる好士。みなもてこれにまよへり。つゝしまては何かせん。數〳〵歌の本となるへきたくひと見ゆるは。

夕されは門田のいなは音信てあしのまろやに秋風そ吹

空は猶霞もやらす風さえて雪解にくもる春の夜の月

後の歌は此比のうた也。ふるき詞に本になるへきたくひ。その數侍れとも。この歌のあまりにめてたさた〔にて〕ひきのせて侍り。此作者の讀たまふるたゝすまひ誠によろし。堪機のうへに。しかも道をまもり得られたるにや。西上人なとの事は中〳〵申せはことあさし。當道の明鏡なるへし。

よられつる野もせの草のかけろひて涼しく曇る夕立の空

つの國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり

是等は凡慮のすこしも立よりかたき風骨也。

吉野山やかて出しと思ふ身を花ちりなはと人やまつらん

山さとにうき世いとはん友もかなくやしく過し昔かたらん

今そしる思ひ出てよと契しは忘れんとてのなさけ成ける

此姿はまなふへし。さて鎌倉右府の歌さま。おそらくは人丸赤人をもはちかたく。當世不相應の達者とそ覺へ侍る。

物のふのやなみつくろふこての上に霰たはしるなすの篠原

筥根ちをわか越くれはいつの海や奥の小島に浪のよる見ゆ
これはわさとめかて。たしなまぬ所成へし。萬葉集の中にかをましへたりともよもはゝからし。□右府の歌勢を見るにそ。道も物うく。心も窮する様に覺え侍る。此おもむき不器のまへにはことにおそるへきさま也。愚意ひそかに通して。歌さまの無上と見えて。しかも本にひかるへきは。清輔亡父卿の歌にて侍るへし。これはいにしへをかね。いまの世にも叶へきなり。かの人〱の歌をかきあつめて。そのあちはひをなめよ。うたは和國の風なり。詞人の耳にちかく心やさしく。うちきくにことはりきこえて。あはれをもよほす様によまんとすへしとはかりそいましめられし。かやうの事共をしるも〱〔し歟〕け侍るにふ。なき影のみ戀しくて。懷舊の涙。往事の夢。ともにせんかたなくこそ。朝夕はよひよせ給て。道の故實より外は仰らるゝこともなかりき。これなきとなきやうなれ共。道の骨肉なるへし。人のめたつるまてのことにはあらしなれ共。家の明規にあふきて函中をいたすへからす。あなかしこ〱。

本云
建保四年十一月十三日終功畢。

遺老藤原朝臣定家

右愚見抄一卷。冷泉民部卿爲廣卿、定家卿九世孫〕眞跡本。課養子清通摸寫。寛政十年八月日源弘賢。

隆源口傳

あをやき

青柳のかつらにすへてなるまてにまてともなかぬ鶯の聲

柳をこきてかつらにつくるをいふ。かつらにはあまた義あるへし。

ますらおかふしゐて嘆きつくりたる柳のかつらわかいもか爲

霜かれの冬の柳ともよみたり。青柳とも讀たり。四條大納言の歌枕にかくあり。

霜かれの冬の柳はみる人のかつらにすへくめもはりにけり

わかせこかこさゝんさほの青柳手折てたにもみるよしも哉

いねのほをかつらにする事あるへし。

六帖歌云。

わきもこかはかと作れる秋のたの初穂のかつらちれとあかぬかも

我はかのわさたをおほく作りたるかつらと見つゝ忍はせ我を

躬恒歌云。

青柳のはなたの糸をよりあはせたへすもなくは鶯の聲

これを本にして。あをやきにははなたとよむへし。

六帖歌云。

春雨のふりにし日より青柳の糸のはなたは色まさりけり
好忠歌云。
やまかつのはてに（た（好忠集））かりほすむきのほのくたけて物を思ふ比哉
なつかしくてにはなれゝと山かつの垣ねのうはら花咲にけり
たまゝくゝすのうるさゝといふ事あるへし。くすのはのにきりたるを云なるへし云々。くすにはくすてといふ物あるへし。かつらなるたまのやうにまひてある也云々。いとくうるさけにあれは。うるさゝといふなるへし。

春のしも　萬葉集歌
あさみつむ春のゆふしも立そめてしはしもみねは戀しき物を
件集には霜露（霜歟）暗始とかきて。露霜をきそむとよめり云々。霜は冬にもあるをかくよめり。
古萬葉集歌云。
秋山に霜ふりかすみこのはちり年をゝふ共わかわすれめや
秋にも霜をあらせてよめり。ゆるきのもりあふみにあり。
夕されはかち音すゝかつきめのをきつもかりに出ると思はん
かつきめとはあまをいふなるへし。

うくひす
春くれは妻をもとむる鶯の梢をつたひ鳴わたるかな
つまこふともよめり。

なつさくら　古今集利貞歌
哀れてふことをあまたになさしとや春におくれて獨咲らん
あまたになさしとやといふにあまたの儀あり。或人云。哀れと云事をさくらのみにあらせて。余の花よりもこれか殘りてといふ心なるへし。或人云。このひとつをあはれとやいはせてんといふ心也。こときはみなちりうせたるゆへなるへし。或人云。よろつの春を惜む人あまたにはあらし。たゝこのみるひとのみあはれといふ心なるへし。

きゝす
あし引の山のきゝすそなきとよむあさけの霞みれはかなしも

やまふき　好忠歌云。
かはつなく井出の山吹まきしたれ君まつともと思ひ立けり

かつみ
これもなるへし。はなかつみとはこものはななるへし。

つくはね
みねをいふなるへし。又云。しはを云。

さいたつま
春の野に彌生の月のはつかまてまたうらわかきさいたつま哉
よろつの草の名なり。

たまくしけ　あかつきをいふなるへし。
曉によはなりにけり玉くしけかた山に月かたふきにけり

さくらのか

花の色は霞にこめてみせすとも香をたにぬすめ春の山風

ちとり　友　則

夕されはさほのかはらの河霧に友まとはせるちとり啼なり

さほのかはらとはさぬきの國にあり。賀茂河原にも。かたにも。はまにも。うらにも。あらいそにもよむへし。かは千鳥ともよむへし。

かは千鳥すむ川のせにたつ霧のまきれかたにも逢みてし哉

これは河千鳥とよめり。

時雨　後撰

神無月ふりみふらすみさためなき時雨そ冬のはしめ成ける

しくれをはいつも〳〵よむへし。たゝし時雨そ冬のはしめなりけるといふは。ふりみふらすみするをいふ也。

たかさこ

高砂のおのへにたてる鹿の音にことのほかにもぬるゝ袖哉

高砂といふにあらそひあり。しかはあれともうけならひたるをしるすへし。たかさことはよろつの山をいふなるへし。そのゆへは本文云。積砂成山といへり。しかれはいふなるへし。おのへとは山のおのへをいふなるへし。

素性歌云。

山守はいははゝいはなむたかさこの

たゝしこのほかにも。はりまにもたかさこのおのへとよめり。それはところの名なれはおとろ〳〵へからす。たゝしおのへといふにふたつの心あり。能因歌たかさこのおといふなり。又或人云。たかさこにをのあるを云。たかさこの尾上の鹿とよめり。はりまのたかさこにも。さくらあらはよむへし。

ふせや　樹下集

も鹽やく蜑のふせやの柴の戸を明れはみたるもしてゆつれは

或人云。ふせやとは野をいふともあり。

輔親歌云。

おひたちし芦のふせやをみるけふはなにはのことは昔成けり

恩にも思はましやは東路のふせやといひし野へにねなまし

みもすそ川　經　信

君か代はつきしとそ思ふ神風や

通明朝臣案東寺にてよみて。時の人々にわらはる。されともゆへありとそ申されける。

いひ　後撰歌

池水のいひいつるとの難けれはみこもりなから年そへにける

池にはいひといふものをたてゝ。水やらむとては。さしあけてさしなとする也。

草のとさし　後撰　兼　輔

秋のよの草のとさしの淋しさはなけくにあかぬ物にそ有ける

草のとさしとは。あやしの家なとは。くさして戸をあみてたつるなるへし。それとさしたるを云。

きよみかせき　するか　　兼盛

よこはしり清見か關の通路にいつといふとはなかくとゝめつ伊豆にめをかく。略之。

すくろのすゝき　後拾遺　靜圓

あはつのゝすくろの薄つのくめは冬たちなつむ駒そいはゆるやきたるすゝきよりをひいてたるなり。

ころもうつ

してうつとは。或人云。しと〳〵とうつ也。又云。つちをいふなり。

みなれさほ

ぬれたるさほをいふ。四條大納言舟さすさほをいふ。イ本云みつになれたる船さほをいふ。

しかすか

古歌枕云。さすかと云也。但しかすかのわたりとはむさしにあるへし。四條大納言云。にほひたるむまにのりたるをいふ。

たこ

たこのさころも。たこのも。ふるくよめることはなり。

はきか花すり　古萬葉

我衣はきぬにもあらす高圓の野をわけしかは萩のすれるそ

はきのはなをもちてころもをすると云。

たか　朝忠歌云。

おほつかなあはする鷹のこひをのみあまきる雪に行末しらすも

こひとは木にゐるをいふ。おほきなろたかつかふには。かならす木ある所にてつかふ也。たかにあまたのことあり。たかへる。とかへる。とやかへる。このたかへるとはてにかへるを云。

長能歌云。

みかりする裾野にたてる一つ松たかへる鷹のこゐにかもせん

八郎藏人といひける人のいひけるは。かゝる歌なし。是は長能かよみあつかひたりける歌なるへし。件藏人たかへるとはしかいふにあらす。くはしからす。たつぬへしといふ。高治殿かくそのたまひける。但故若狹守はてにかへるをいふともいひし。とかへる。とゝかへる。とを山なとにてかへるをいふにや。かへるとはたゝやにてかへるをいふと云々。かへるとはけなとのかへるを云。

陸奥のしらふの鷹の手にすへてあさちのぬしのこれや此こゐ

しらふのたかとは。をにしろき事あるなり。あさちのぬしとは。

後拾遺歌云、

われか身はとかへる鷹に成にけり年はふれともこゐは忘れす
能因したかへるとはてにかへるをいふ。
なつかり
夏かりのたまえのあしを
なつかりとは夏かりするを云。たまえのあしとは越前國にある所を云。
たまゆら　　通俊歌云。
惜むにはから國人のたまきなるたまゆらたにも春のとまらぬ
或人云。たまゆらとはしはしといふことなり。康資王母云。たまゆらとはひさしき事也。
ゆくほとにたまゆらさかぬ物ならは山の櫻をさそか誰みむ
有古双紙云。具平親王此歌を四條大納言にとひ給けれは。たまゆらとはわくらわといふやうなる事也とそ申ける云々。たゝ心うるにひさしきことを云給。イ本云
五月雨はますけの笠もほしわひぬ玉ゆらはるゝ時しなけれは
この歌にも猶しはしとそみえたる。
しのすゝき　　古今集歌
わきもこかあふさか山のしの薄ほにはいてすも戀わたる哉
しのすゝきと云に。八々やう／＼に不同に云なり。或人云。霜かれの冬野すゝきをいふ。六帖にはなすゝき。しのすゝきと各別に書り。心うるにことなるへし。

六帖歌云。
いもかもとわか通路のしの薄われしかよはゝなひけしの原
年ふとも我忘れめやあふさかのしのゝをすゝきをひはつる迄
わかな　　拾遺抄歌
あすからは若菜つませんかた岡のあしたの原はけふそ燒める（イ曉歟）
あしたのはらはやまとの國にある。こしきのこほりあるゆへにかくいふ。あしたのはらなとつゝく。わかなをはつむなとよむへし。わかなあまたの事あるへし。なつな。せり。すみいれなとよむへし。
かるも　　拾遺抄歌
かるもかくふすゐのとこのいをやすく
かるもかくとは。かれたる草なとをかきあつめて。ゐのしゝのふす也。ゐのしゝはいたぬるなれはかくよむ也。
ふくめる
梅の花ふくめるそのに我ゆかん君かつかひを又まちかてら
ふくめるとは。古歌枕云。つほめるを云也。
しき／＼　　古歌云。
春雨のしき／＼ふれはたかまつの山の櫻はいかゝみるらん
しき／＼とは。古歌枕云。しきりといふことゝ云々。
みさこ
みさこゐる沖のあらいそによる波の行末もしらす我戀しさは

水砂兒はうをゝとりてくふ鳥也。されはあらいそにゐぬと云說もあり。

たつかゆみとはゆみをいふ也。

六帖歌云。

たつか弓てにとりもちてあさかりの君はたゝれぬ手枕のうし

　しきしま　　有歌云。

いまとく（とイ）はむ人をはしはししき島ややまとの國に人や絕たる

かの國にしきしまと云神あるなるへし。彼國にひとのきの松にましりてをいたるによりて。しゐしはといふなるへし。イ本云以上。但彼國にしゐの木の松にましりてをひたるゆへに。しゐしはといふ也。

　たなゝしをふね

ほり江こくたななしをふね

舟にはたなとてあるなるへし。それらたぬ小舟を云。

　したりやなき　　まさなりの歌

はらふへき人なきやとはらへてみるしたり柳に風をこそまて

　すゝのしのや　　或人歌云。

時鳥とこめつらなることそなきなくとかたきすゝのしのやは

すすといふ竹のあるなり。それしてつくりたる家なるへし。なくことかたきとは。すゝのやは山も里も遠き野中にある也。時鳥は山には常にあらんするなれは。かゝる野中にはきくことかたしといふなるへし。郭公をは六月にはよむへからす。

古今集歌

さ月はて聲みな月のほとゝきすいまはかきりの音をや鳴らん

此歌は五月六月をそへたる也。六月の郭公をよむにはあらす。

　つま　　萬葉集

なにはのにあし火たくやのぬしたれとをのか妻こそ珍しき哉

つまとは人々あまたの事をいはると云々。或人云。女をいふ云々。彼つまこふらしかなといふ。これかなるへし。

六帖歌云。

さを鹿のつまとふのふとなく聲のいたらむ方になひけ神はき

これらの歌は女をいふときこえたり。

共にぬる物とはなしにいなつまの秋のたのみを空にたつらん

これはおとこをいふとみえたり。萬葉集には己妻と書てつまとよみたり。これを見ぬ人のおとこといふなるへし。或人云。つまはとりからと云。これおとこをいふなるへし云々。されともつまとはおほやうは妻をいふなるへし。又云。おとこをいひて。むきゝによめり。

春のゝにあさる雉子の妻こひてをのかありかを人にしれつゝ

耕雲口傳

此十とせあまり。白川の東花頂山の奥に幻質をかくし（よせてイ）。隱家に友をむすひ。泉石に心をすましてあかしくらすほとに。應（百一代後小松）永十あまり五の年やよひの末つかた。あめふりつゝきて。雲は軒はをうつみかくし。花は庭前に散みちて。殊ものさひしきおりふし。くろすのほとりに山居したる僧尋まうてきたり。法談なとの次にやまとうたの道まてかたりつゝけて。このころすたれにし道をおこされて。よにありとしある人。みなこれをたしなますといふとなし。齊の紫の色。楚の細腰は無道のわさなるをたにまねひしたかへり。まして我豐葦原の代々につたはれる舊俗なれは。誰か是をよろこはさらん。誠上の好所にしたかふといふ。先聖の格言もおもひしられたり。數ならぬ身。をよひなき道なれとも。高山をあふき景行にはむかふ心さし侍。此道のをこりいかなることはりにか。又いかやうにまなふへきものにかとこれをとふ。予答云。七八歳のむかしより。先考内のおほいまうちきみのひさの下をはなれす。みやつかへし。ものまなふるひま〳〵に。このみちをのみたんれんせられし程に。いつれの諸藝にもこえて。すきのこゝろさしふかく侍しかとも。風骨をうる事もなくて。弱冠の年は父兄の大故にあひて。三とせのほとは藤衣はつるゝいとの一すちに。うれへの色にやつれはてゝ。諸の道をもみなうちすてゝ。夢のよのあたなるならひにおとろき。生死大事の工夫より外は。こゝろにかゝる事なくて。とし月をかされしほとに。日ころのけいこもすゝむ事なくて。末のよはひに及にき。こゝに信州の中書王（宗良親王）と聞えさせたまひしは。かけまくもかたしけなき後醍醐の御門御子。外祖父は爲世の入道大納言。御母贈從三位爲子そかし。木曾路を分上りて。よしのゝおくにすませ給ひしに。此道のほまれ幼齢より世にかくれなく。晩年の風格あめかしたためしすくなくおはせしかは。朝夕親近して此道を問たてまつりしほとに。日ころのあやまり氷のことくにきえ。雪のことくにとけて。露はかりの力量も出きにけるにや。後には新葉集撰定のことをさへ委附せられたてまつりにしかとも。いくほとなくて。また雲水漂泊の身と成て。そのありし世にきゝをき。まなひなれにしことも。みな隔生のとの如くになりにしかは。此道の秘事口決なとも。跡かたちをおほえす。しかはあれとも師傳をはなれて。心にうる一すち日は。いまた人にかたる事はなけれとも。後のかたみにいさゝかこれをいひとくへし。所詮あめつちはしまりてより。此道おこれりといふは。古來の先達のことはなれとも。さして信をとる事もなくて過にしを。山林修行ののち。無事閑寂のうちに自然に能心得たり。萬物の性は不生不滅なり。生滅にあつからさ

る性萬理を具足せり。此一性は天地にさきたちて。あらすといふときもなく。ところもなし。天地にをくれてもまたしかなり。是萬物の根源なり。和歌のことはりまた則是にあり。あめつちわかれてありといふは。猶皮相の上のことはなり。されと天地あひわかれ。陰陽互にきさして。日月星辰は天に付。山川草木は地に付なり。日出ておき日入てふす。天地のうちにありとしあるわさ。何事か此うたの道をはなれたるや。吟詠して花をあはれひ露をかなしむは。既にことはにをちたれは。和歌の第二義門なり。歌の眞躰にはあらさるへし。和歌をは日本の陀羅尼なりと古人是をいへり。又神明佛陀。菩薩聖衆。これによりてこゝろさしをのへ給へるは。只此深理あるによれるにこそあらめ。抑三十一字につらぬるに付て。堪能有不堪あり。堪能といふは生付にいひ。出すことのことはりたゝしく。ことのはゆうひにやさしきなり。不堪といふはこゝろきかす詞つたなきなり。しかはあれと堪能をたのみて。さのみけいこの功をつむことなければ。つゐにさせる秀逸もいてこす。不堪をはちて是をたしなめは。日比のつたなきところなをりもて行て。堪能のしわさとことならさるなり。或は生なからにしてしり。あるひはまなひてしる。其功をなすにいたりてはひとつなりと。孟子書傳にとけるも此理なり。道人の中に利根の人は一聞千語す。鈍根の人もこゝろさしをはこへは。つゐに闇明の實性にかなふかことし。たゝ生付に心たくみに。ことはやさしき人のけいこの功をつみたるか。ありかたき達者といはるゝなり。其人古今おほし。たゝ寢食をわすれ。萬事を忘却して。朝夕の風のこゑにこゝろをすまし。雲の色になかめをこらして。ちりのまのあたことにこゝろをみたらす。一大事をこゝろにかけたる人の。いつも胸中に大疑團のあるかことくにてあかしくらせは。自然に歌にこゝろうかみたる時も。また歌の席にのそみて。題にとりむかひたる時も。その折ふし見ゆる空のけしき。雲のたゝすまひ。かの時にきゝし風の聲。雨のおとなとのふところにうかひて。ふしきなる風情。あたらしきこゝろねなとのよみいたさるゝなり。是に付て初心の人の心うへき肝要の條々。少々これをいたすへし。

一歌を詠する時心を本とすへき事。心といふはうたの質なり。また理なり。このことはりは萬の物のうへにそなはりて。人の私にするところにあらす。されはいかにして三代集のうたは。たゝありに私なく。うちきくにことはり聞えておもしろし。三百篇の詩の性情を吟詠して。たかくすなほなるかことし。それより後に歌道おとろへて。中古以來の歌はとゝろもひつみ。ことはもいやし。また三代集の中にも。後拾遺の歌はいかにそや。うるさきことのましりてきこゆるなり。千

載集のさきほとに。經信卿。其後。俊頼出來て此道中興せり。いはんや西行上人。俊成卿。定家卿なと和歌の大聖人なり。是によつて新古今の一集文質合兼て。今古のいひふるさぬ[古イ]こゝろをよみ出て。淳古の風一變するに似たれとも。只相[たイ]斗を學ひて。めつらしきこゝろをよみいてさるは。むかしの人の口まねにこそあらめ。歌のみちいかてか相續せん。これによりておもふへし。たゝよく絶妙のこゝろを案し出すへし。絶妙といへはとて。人間よの常の日用をはなれす。たゝ人のいひふるさぬ[妙や云也イ]ところなり。但めつらしきこゝろをよみ出てたりとも。それに至極のおもひをなすへからす。このこゝろはへに取付て。一重の上のこゝろを案しいたすへし。古人の云。こゝろのうちにこゝろを撰すといへる[とイ]是なり。たゝしく案し出して。なをそのうへをみかくこそは。たとへはさとりのうへにも重々ありて。敎に五十二位をへてのほるかことし。またうたにこゝろを本とする事は。いかに人有て辯說たくみに容儀よく。文章技藝世にすくれたりとも。心にこれるものは。身をたて世を治にたらさるかことし。文章技藝等は歌のことはのことし。

一詞をみかくへき事

詞は歌の文なりかさりなり。●後撰拾遺より金葉詞花のころほひまては。歌をよむにこゝろを本とすといへとも。こと葉をえらふことなきによりて。歌のすかたいやしきに似たり。君臣合躰時節到來するによりて。新古今の一集。心の泉みなもとふかきのみにあらす。詞の花にほひたへにして。人のめをおとろかし。人の耳をよろこはしめて　錦繡を綴みたし。金石を合奏するに似たり。このころ又あまりにやさしき詞。たへなる質を本とするによりて。極上の達者ともこそ心をうしなはすして。しかもことはすくれいみしけれ。つき／＼の歌人ともは。其身たに心えぬ事を。ことはにまかせてくさりつゝけたり。かやうならはさらに歌の本意にあらす。いかてか天地をうこかし。鬼神をもやはらくへきや。されはまつ心をもとゝしてのことはなり。文質彬々として君子なりと。孔子もとかれたり。歌に案しかゝりてよみいたすとき。よくこゝろをえて。ことはにうつすに。たとひ十分によきことはと思ふとも。たやすくそのまゝにてうちをくへからす。うへにあることはをしたになし。したをうへにとりちかへ。また猶上下こゝろをあはすは。同心にてなをやさしきことはにとりかへて。き[こイ]ゝよくおもしろく吟詠するに。おもかけふかく感情をふるやうに引なすへし。古人のことはのうへにことはなえらへといへるは是なり。またあなかしこ是たれりとて。よきほとにてうちをくことなかれ。貫之は歌一首を廿日はかりによみ出しけるといひつたへたるは。こゝろこ

と葉をよく〳〵えらひけるにこそありけめ。所詮詞をすこしたかく備ぬれは。こゝろもつれてふかくなるなり。心こそ本なれとて。ことはをゆるかせにする事なかれ。こと葉は三代集を出へからすといへり。然とも世のするになるにしたかひて。歌のかすおほくなり行は。さいひてはうた出來かたし。たゝゆらゆらとしたることはにてあらは。後々の集のこと葉詠すへきこと異論あるへからす。縦又古今後撰のことはなりとも。聞(にくイ)あしきこと葉かへすかへす不可詠。又一ふし有こと葉のいたくよみつけぬを。三代集おほえたるとて。其詞よみたるをめつらしき事にして。わかちからを入て。こゝろをたくみいたさぬことあるは。たゝ古きこと葉をよみたるはかりなり。更に高名に非す。古詞をとりてわか風情をあたらしくめくらすは。上手のしわさなり。近來連歌の詞を歌になしてよむ事あり。是歌の淺近になる基也。昔の連歌はあなかちに歌にそむかす。

　くちなしに千しほ八千入そめてけり

といひたれは。

　こはえもいはぬはなのいろかな

と付たり。かやうならは。上下の句を歌になしたりともくるしからし。今やうの連歌を歌になしたらは。更に六義のすかたに叶へからす。歌の詞を歌によみ。連歌の詞を連歌にせは。歌にも達せる人と云へきにや。連歌又古來の一道なり。是をのそく(弃イ)にあらす。

一本歌取様之事

古に此ことなし。中古以來の事なり。古今集の歌に萬葉集の歌と同様なる歌のあるは。本歌の分にてはなし。只萬葉のこは〳〵しきをやはらけて。聞よくなしたる也。さるほとにはゝかる所もなく。さなから本の歌とひとしきもあるなり。此法詩家にも有也。黄山谷か點南の十絶は。白樂天か詩を取て。或三四字二字なをせり。後學批判して。樂天は敷演(比喩イ)に長し。山谷は剪裁に長といへり。今の世に本歌取とはこれに異也。喩は三百篇の詩はたゝ性情を吟詠するはかりにて。ものによる事なかりしを。李杜韓柳か詩なとには。詩書百家の詞。さならぬ曹幼劉陶謝か詩なとをとりて。こゝろをたくみにまうけたるそ。今の歌の本歌取儀に可叶。季の歌をは戀雜にとりなし。戀雜をは季にとりかへなとして。こと葉はかりをとりて。こゝろをあたらしくなしたるかよきなり。本歌とりちかへたる歌。

新古　いかにせむこぬ夜あまたの郭公またしと思へは村雨の空　家隆

寂蓮

同 老の浪こえける身こそあはれなれことしも今は末の松山

此たくひは戀を季になしたる例なり。後の歌兩端にわたれり。又同季景物なれとも。こゝろたにあたらしくなりぬれはおもしろきなり。

新古 大空は梅の匂ひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月　定家

同 詠むれはちゝに物おもふ月に又我身ひとつのみねの松風　鴨長明

此兩首は其季をかへすして殊幽待ふかし。

同 さむしろや待夜の秋の風ふけて月をかたしくうちの橋姫　定家

忘れなんまつとなつけそ中〳〵にいなはの山の嶺の秋風　定家

是また大意をなし例也。

又本歌の詞のをき所をかへたるは。風骨ありて聞ゆ。さりなから置所替ねとも。こゝろたにたしかにあたらしけれはよきなり。

新古 有明のつれなく見えし月は出ぬ山郭公待夜なからに　後京極

新古 おりふしも移れはかへつよの中の人の心のはなそめの袖　俊成女

此たくひなとそあるへき。古今本歌取たる本になりぬへき歌。勝斗すへからす。少々是をいたせは。殘はをしてしろへし。又本歌をとるにをきて。歌作といはるゝ人有。心きゝたる歌人。昔の歌をとかくあてかひつくり出たれは。おのつからよき歌に似たれとも。まことには性情を吟詠せぬによりて。おもかけ優に委妙なることのさらになき也。此條々にて本歌取やうは粗心得つへし。

一當座の歌よむ時可心得事

題を五首にても十首にてもとりたらん時は。まつ其題を一々にみわたして。此題にはかくよむへし。彼題にては此風勢をめくらすへしと。よき程に心あてかひをして。聊案しうかへて後取分。秀逸の出來ぬへからん題を心にいれて能々案すへし。若あまたある時。かたはらに能歌をよまんとくはたてんに。一座の歌皆書そろへたらんとき。我題によまぬ歌有て。たちまちにせめもよほされては。いとゝ心まとひして出くへからす。至尊の御前の御會には。三首より硯をめくらす程に。上位の人殊に大事也。わか身よみ出すして。次の人に硯をゆつるは。よきはちとこそ故人は思ひならはしたれ。まして一座の歌皆出來たらんに。一身讀出さゝらん事は。無類恥辱なるへし。清輔朝臣か諸人の歌皆出來て。一身讀をくれたりけるに。いく世になりぬ水のみなかみと云うたをよみ

てこそ。をそく出來にけるも中〳〵殊勝成しか。させる事も出こぬに。一座をさへんことは未練の至極なるへし。

一兼日出題の時可見事

當座出題の時は。餘念にわたらす。是を案するによりて。中〳〵よろしき事も出來也。兼日の時は餘日あるをたのみて。何ときにてもなと。心遣觀法してうち過ほとに。世のならひなれは。君長に仕。難去來客に對面しなとするほとに。期日近成て。はしめておとろき案するによりて。たゝ當座にもいくほとけちめなく。またをとりさまなる歌をいたす時に。他人は用意ふかくして案し置たる中に。おかしけなる歌よみて。人わらはれになりぬれは。道も物うく退屈の心出くる也。只題取たらんはしめ。當座の思ひをなして。よく〳〵あんしたくむへきにこそ。備不虞にあらかしめすと。春秋傳にとけるも此理成へし。抑此當座兼日の兩條は。誰も心得ぬへきことなり。ことあたらしく是をしめすへきにあらぬにや。さりなから人はたゝかたき事をすれとも。やすき事にあやまりをするなり。疢疾（チンシツ）に不死して衽席に死するたとへ爲之なり。昔五代の時馮唐といふ人。君の使に蜀に趣けるに。大劔門小劔門なといふ嶮難をとをるとては。馬に心ゆるしせす。くつはみをよく取て。終に事ゆへなく過けるか。蜀の都に成都といふは平地にて。心安くおもひて。こゝにて落馬しけり。三十一字つゝくるは。やすきことゝみな人思へり。思意には一大事とおほゆるによりて。餘にことあさき事をさへ申をくなり。

一初學の人古歌の躰にをきて意得分へきこと。初心の時は何としても上手の其道をえて。自由自在にこと葉にあらはさねとも。其心を底にふくませて。艶にはかりかたくよめる躰からうらやましくて。かなはぬことをよりすちり案して。達者とひとしからん事をもとむ。是第一のひか事也。只うたのあからぬのみならす。次第にさかりもて行なり。たゝよのつねにあるやうに。ことはたゝしく。こゝろ一筋目ありて。大やうらかによみもてゆけは。とし月をかさねてあかおちぬれは。自然にむかしの人にもたちならひ。また心ふかく艶なる歌もをのつから出來なり。初心の時におもしろきうたよまんとたしなむこと。たとへは昔唐國の中に宋と云國に。おろかなる田夫有て。夏の日わか田の苗のみしかきことをなけきて。ほねをおりて。一々にぬきあけて。とく長くなさむとして。苗のかるゝをしらさりしかことし。此理諸道にわたりておほし。大宮の内府妙音院入道相國にひはをならひけるに。ある時相國禪門しめされけるは。御分のひは日來よりわろく聞ゆるは。いかやうにけいこするにかととはれけれは。内府答て云。別したる事侍らす。たゝ御ひはのあまりに殊勝

におほゆるほとに。何としてかかやうにかるく引侍らんと。たしなみ侍るといひけれは。扨は此故なり。かまへて師のまねすへからすとしめされけるも此道理なり。常に本としてまなふへき躰のうた。

新撰和歌集　貫之
櫻ちるこのした風は寒からて空にしられぬ雪そふりける

新古　西行
芳野山やかていてしと思ふ身を花ちりなはと人や待らん

同　家隆
ことしより花咲そむるたち花（むめの花イ）のいかて昔のかに匂ふらん

新勅　定家
あけは又秋のなかはも過ぬへし傾ふく月の惜きのみかは

此たくひはまなふも失あるましき躰にて。心詞たゝしくて一ふしあるなり。其歌に於ては秀逸なれと。後生秀歌のわろかるへきにあらす。後學まねひそこなふへきなり。またまなひてわろかるへき躰。

新古　定家
春の夜の夢のうき橋とたえして嶺にわかるゝよこ雲の空

同　同
秋とたに忘れんとおもふ月影をさもあやにくにうつ衣哉

同　後京極
物思はてかゝる露やは袖にをくなかめてけりな秋の夕暮

續拾遺　雅經
小倉山しくるゝ比の朝な〳〵きのふは薄きよもの紅葉は

新古　西行
うつり行雲に嵐のこゑすなりちるかまさきのかつらきの山

同
よられつる野もせの草の陰ろひて凉しくくもる夕立の空

これらは上手の風骨を盡て。幽意微詞をもしろしといへとも。中〳〵ことのはなし。初心の人かゝる躰をおもしろくおもひてまねひよまは。邪路に落へき事決定なり。千歳のしたに。もし此道を發得する人。千萬人の中に一人出來ことあらは。おのつからよみもやせんすらん。先年老拙千首よみて信州中書王に奉り合點有し時。むしの歌に。とふへき人もよもきふにとよみしに。點をあひたまひて。こと葉をこまかにかきそへ給しに。此蓬生おもひよりけることに感するところ也。我二百首のうたをよみて。みつから是をかきつかひて。玉津島の歌合と名付たり。此中にこの風情有。いまた人にみせねはよもしらしとて。其御歌（末句イ）を後にかたりたまひし。

この暮もとはれん事は蓬生のすゑの風の秋のはけしさ

此一首古人（玄櫻イ）にも及ぬへし。後には新葉集に入り。是にまねひかたきこゝろなり。このたくひ古來おほけれとも。心肝にそみたるによりて是をかくなり。所詮此質なとはかやうによ

まんと。はしめて稽古せは。生をへたてゝも。さらによみにすへからす。また高上深奥なれと。うちきくにことはり聞えて。初心なりともなとかよまさらんと覺えぬへき歌の躰。

身に寒く秋のさよ風吹なへにふりにし人の夢にみえつゝ　西　行

新古 津國のなにはの春は夢なれやあしのかれ葉に風わたるなり　西　行

同 ふるはたのそはのたつきにゐる鳩の友呼聲のすこき夕暮　西　行

同 又やみんかたのゝみのゝ櫻かり花の雪ちる春のあけほの　俊　成

同 雨そゝく花たち花に風すきて山ほとゝきす雲になくなり　同

千載 ほとゝきす一聲啼てかたをかの杜の木末を今そすくなる　爲　世

これらは歌の面にことはり聞えすきたるやうにみえて。あなかちに深けもなしと。初心の人はおもふへし。さりなからおほろけにてはよみ似せかたき。幽玄高妙の眞躰をそなへり。知音にあらすはさとりかたし。此内かたをかの時鳥は。近代爲世入道大納言詠なり。幽情古人に及て。人を感する高風有によりて。是をくはふるなり。このうたともをうちきくに。こゝろ得ぬへしとて。かやうによまんとせは。またうた損する事。さきの一例ほとこそなくとも。たゝありの平懐歌になりぬへし。心得わくへきなり。以前の六ヶ條。六義によそへて是をいたせり。これはたゝ堅固の初心のためにしめすことなれは。深義に及はす。其上此道の秘事なといふ事。別にあるへからす。只我心よりいてゝ。心とさとる事なれは。大方趣向たにも心得たらは。肝要はたゝ數寄の心さし一なり。京極中納言[入道イ]以來。御子左の一門此道の宗匠なり。彼家には達者と數寄とをならふるに。達者よりは數寄の人を執するよし。故大臣はかたり給ひしなり。彼大臣は爲世入道大納言存生の時。爲藤卿。定爲法印以下の一門の人々。他家には小倉公雄。入道中納言等會合して。定家卿遺跡京極家にて。毎月の歌の談義とて。不闕にさたせし時。所縁によりて其所にのそみて。幼年より耳をうたせたりし。そのときもたゝ數寄の人を一番に賞翫しけるとそかたりたまひし。尤そのいはれある事なり。

歌道に付て古事口傳なとは。古さうし[一イ]もとめぬれは。おのつから不審もはるゝなり。またしらすともわつらひなし。たゝよみいたす歌六義にかなひて。人倫をやはらけ。鬼神をかんせしむるこそ此道の詮要なれ。老拙きはめて本來不堪の身にて。稽古またいくはくならぬことは。此道をはたゝ依學にして。其余の和漢の才藝をこそいかにもかなと。壯年のころ

はおもひしかとも。それ猶亂中に年をおくりて。はか〳〵しき事も侍らず。まして此はたとせはかりは山林に流落して。何事も隔生のことくになりにたれは。何かは人を道ひくほとの事も侍へき。此條々只一時の閑談（語イ）にてやみにしを。後日の廢忘に備へけれは。大概しるしてあたふへきよし。たび〳〵の懇情のかれかたきによりて。はゝかりなから筆を染るもの也。さても頓昭法橋か後裔は。今の世にはなきものとこそ多年心得侍しに。其あたり末學の一童子。雲霞線のことくにつらなりて。なを祖風を忘れす。此道に心さしあるよしかたり給ひしこそ。めつらかにあはれに思ひ給れ。他見は禁制なれとも。此人一日見せて。その後はすみやかに丙丁童子にさつけらるへし。後まて殘とゝまらん事は。一には住よし玉つしまの明神も恐あり。又は當時のあさけり。千載のそしりものかれかたし。後世の楊子雲はわかのそむ所にあらさるものなりかし。

右此一卷者南禪寺禪栖院耕雲魏公上人所述。而和詞之道深切着明者也。最可秘之。

文安五戊辰曆小春既望日誌之。

（於南朝稱ト也）權大納言右大將藤原長親卿。法名明魏。又號耕雲。新後拾遺。新續古今兩集共ニ明魏法師ト入。（撰摘題和歌集。）尹大納言師賢卿孫。權中納言家賢卿息。

新葉和歌集。弘和元年十二月三日奏覽。新葉ニハ右近大將長親ト有。

（中務卿兵仗）尊良親王。（信州中書王ト申。配於土佐國。其後越前國於金崎城自害。後醍醐天皇皇子。御母贈從三位爲子。入道大納言爲世女。）

〔右耕雲口傳以刊本校合〕

續群書類從卷第四百六十六

和歌部百一

釣舟

ある童形しきしまのみちに深く心をよせて。歌讀樣我にをしへよとたひ〳〵有しかとも。いかなる事を注しまいらすへきとも覺へ侍らす。むかしより先達の書をかれし物いとおほかりけれは。またなにことをか申侍るへき。ことさらに近ほとは。洛陽の月のもとを別て。邊鄙の塵に埋れしかは。適片端聽聞せしことも忘はてぬるうへ。中〳〵僻覺なることはいかゝとおもひなから。花の匂ふかき志にめて。柳の糸のすちなき事を書集て。此一册となし侍る也。すみよしの松のことのはおち散るへきにはあらねとも。なにはのあしの末の世に。もしみる人侍らは。かたはらいたき事なるへし。

一歌をよまん人は。珍らしからさる事なれとも。春霞たなひく山のけしき。秋霧のふもとをこめてたちのほる粧。妻戀する野邊のきゝす。田面の鹿の曉の聲。見る事聞ことにつけて心をかけ。古歌に吟し合て心をさとり。自の句をもつくるへし。俄に題にむかへる時はかり案せは。よきうたの出こんことかたかるへし。志ほと歌はよまるゝもの也。おほかた人のよむ事なれは。如形しらはやの望なくは。三十一字をつゝくるまてもいかゝそや。いつれのみちもすきより上手の名をはうるもの也。

一歌をよむには。題の心をよく分別する事肝要也。いかによきうたをよみ出しても。題にちかひぬれは徒ことなり。花と云題には。花のことを本に云て。そのうへにては何事をもとりよせてよむへし。月雪なとも同事なり。題をならひてよまぬ人は違たる事多し。たとへは郭公稀と云題を。つねには未はつ音のやうに心うる也。はや鳴すかりて世に稀なる事也。山

家人稀と云題も。山里にとひくる人の稀なる事也。すむ人のまれなる事にてはなし。忘戀と云題も。我人を忘事にてはなし。人に忘らるゝ事也。余は是に准てしるへしと南。

一一字の題を初の五字にをく事。みくるしき事なり。但二十首三十首なひし百首ともよむ時は。稀に上に置てもくるしからさる也。又三字四文字の題を上の句はかりに云はてたるもわろし。下の句はかりにをきたるもわろし。上下にゆつりてよむへし。有人山家卯花と云題をとりて。山里の垣ほにさける卯花はと。上の句に云はてゝ。下の句に云へき事もなくて。わきかへぬれる心ちこそすれと書たると云事。古人のかゝれし物に見え侍り。二字迄の題は一ところによみたるもくるしからす。一字の題を下の句の終におきたるはよし。

一題によりて。よまねとも苦からぬ文字有へし。たとへは松上藤と云題には上と云字。野外雉と云には外の字。竹間月なとには間と云字。かやうの文字也。戀の題には其字をあらはさて。心計をよむ事おほし。寄戀はよせ物の文字をあらはす計にて。戀の心を本によみて。よせ物は文字たにあれは。なにとそ云てもくるしからす。月似玉と云題に。玉のをなとをよみてはちかふへし。寄玉戀と云に。玉のをとよみては。よし是程のちかひなるへし。又戀にかきらす。題の文字をあらはさて心をよむ事あり。落葉浮水と云題にて。筏士よまてことゝはん水上はいかはかりふく峯の嵐そ。これも古人のかゝれし物にてみたるやうに覺侍り。是は初心の時はさして好さる躰也。又戀の歌に會不逢戀といふ題にて定家卿。色かはるみのゝ中山秋こえて又遠さかるあふ坂の關。此風情は初心の時も戀にはよむ事あるへし。但上手に成てのちは。いつれの躰をよむとも憚あるへからす。初心の時か様の事を好めは。用なき事に心をついやして。よきうたはよまれぬ物なれは。まつ斟酌あるへきか。

一懐帋のうたと當座のうたと少心得有へし。懐紙は兼日より題をとりて。思案する物なれは。いかにも手をこめて骨をおり。なにかなと思入てよむへし。當座は一風情ある所あらは。手さはやかによみ出して。あは當座のうたよむ人のみるやうによめとなん。したゝめ様も。懐紙をはいかにも執して。作者の名字をもたしかに書へし。たんさくは少名字をも草に書也。詠草をも兼日をは立紙にかき。當座をは折紙に認へし。

一五十首百首なとよむには。地はれあるへし。題を見渡して。五十首ならは。十首はかり心よせなる題にて。はれのうたとみゆるやうによみ。殘りをは一風情に。さるから上手のしわさとみゆるやうによむへき也。定家卿の申されしにて。物に注したる事有。慈鎮和尚は歌は上手にてましませとも。百首

よむ様をはしろしめさすと。是は毎首手をこめてあそはして。地はれなしと云事なり。是一の故實也。

一三首二首の懐紙の歌をよむに。次に有題の文字をまへなる歌によむ事庶幾せさること也。又名所を三首のうちに二首まてよむ事。これも好さる事なり。たんさくには自然二首さくりて皆名所をよむ事は。題によりてくるしからす。それも三首ともよまむ時は。悉に名所をはよむへからす。例の名所このみと云るゝ也。又三首の懐紙の中に。雜の題に他の季をよむ事。冷泉家には嫌こと也。當季をは被赦也。戀にはいつれの季をもよむへし。又雜の題に戀をよむ事憚有。季の歌に戀をよむ事は自然にあり。當座も同事也。獨吟なとには。五十首百首よむ時。雜の部にはいつれの季をもよむへしと云訓られし也。

一山と有題に谷峯岡なとよみてもくるしからす。嶺なとゝ計有題に。山とよみてはわろし。風と云題に嵐木枯なとゝよむはよし。嵐なとゝ出たる題に風と計よむはわろし。海も同事也。是に准て心得へし。

一歌には十躰あり。それを悉弁知まては一向初心のときは不可叶。大かたやさしき姿をよまむ歌には。三十一字ともに詞をもやさしく。心をも優によむへし。又つよき歌をよまむ時は。上下ともにかけ合て。つよき詞をよむへし。三躰の和歌に此姿見えたり。龍頭蛇尾の病とて。かしらは龍にて。尾は蛇の様なる事を嫌ふ也。ふとみほそみなく能吟し合て。一字成ともあた字をかぬ様にたしなむへしとなん。

一本歌をとる事。近代の作者の歌をはとるへからす。大方新古の時代迄をとるへし。當時の作者成とも。家の人なとの歌をは證歌には引へし。凡季の歌をは戀雜にとり。戀雜の歌をは季にとるへし。季を季戀を戀にとるをは。いけはきあかかむたらとて笑こと也。また本歌をとると本歌のことはをうはふとはかはるへし。たとへは古今集の戀の歌に。

徒に行てはきぬる物故に見まくほしさにいさなはれつゝ

此歌を雅親卿とりて。

我心行てはきぬる梢かな咲あへぬ花の見まくほしさに

本歌をは如此とる也。詞をうはふといふは。

郭公啼や五月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉

と云歌を。順徳院の御製に。

時鳥鳴や卯月の忍草しのひ／＼の夜半のひと聲

如此なるを本歌のことはをうはふと申也。又本歌をもとくやうによむ歌あり。

芦の葉に隠れてすみし津國の小やもあらはに冬は來に鳬

と云うたを。是も同し御製に。

芦の葉にかくれてすまぬ炭かまも冬あらはれて煙たつ也

一かやらにかくれてすみしといへるを。かくれてすまぬと云て。されとも冬あらはれてけふりたつなりと。すみかまのうへにて云あらはす也。是躰の事心をつけてみれはみしる事あり。古き歌を見ても。かやらの事をよく分別する事肝要也。

一いかに本歌にあれはとて。わろきこと葉をよむへからす。よきことはあしき詞をきゝわけて。よく詞をつゝくる事肝要也。珍しからんために。人のきゝしらぬことを抄出し。或は物の異名なとの聞よからぬとを本とよむ人あり。幾度も春のあけほの。秋の夕暮。淺茅か原。よもきふの宿。おもひあまり。恨わひなと云事は。見さめせすしておもしろきを。打きらし。たれときほし。たみたる聲。せな。ふてつむしなとのたくひ。あるは名所をよむとても。うやむやの關。あかはたの山。つちの浦なと云事を抄出し。萩をみなへし等のことは不珍とて。鬼のしこくさ。目さまし草なといへることを好みよむ事。上手に成ましきしわさ也。但か樣の事をもよむましきと云にてはなし。よみつのりて後は。なにたることとなりとも。作者の口に余ましき事也。

一本歌のこと葉の事。せいのこと葉は中〳〵中に不及。其外ぬしあること葉。或は人の口にいたく有やうなるうたのこと葉をのそきて。常に云ならはしたること葉をは。本歌の二の句迄は不苦。たとへは足曳の山ほとゝきす。久かたの月のみやこ。うはたまの夢の契。みよしのゝよしのゝ山。しのゝめの朝の空。秋の夜のなかき思ひ。是等の詞幾たひよみてもくるしからす。櫻散木の下風。僞のなきよなりせは。我か戀は松を時雨の。夕されは門田の稲は。思出るときはの山。村雨の露もまたひぬ。是等のたくひは處をかへすけ斟酌有へし。

一童形の時よみて似合侍らぬことゝもあり。たとへは老らくのむかしかたり。翁さひたる。侘ぬれは。木をとりはこふ。つりたれてうき世をわたる。市におも荷はこふなといふ類。此外本歌にあれはとて。あらかねのつち。あまさかるひな。しなかとりゐなの。如此のことはいかにもしんしやくあるへし。惣而恐ろしと云にはあらす。

一初心の時つねに見てしかるへき物のこと。本歌には古今集尤よし。その中に艶き歌をつねに心にかけて。閑に心を案すれは。何と云計なくおもしろくおほゆる也。古今の歌か心に面白おほえけすは。歌かおかると心うへしと。古人の申されし事あり。萬葉集は歌のはしまりなれは。多本歌にとること有。されともことはとはしく〳〵しくて。初心のためにはまなひかたし。但覺てわろきことは有ましき也。古今につゝひては千載集。新古今。近代の集には續古今。續千載集可然し。家の集には定家卿拾遺愚草尤肝要也。餘にたけすきて。手爾葉も

普通のやうにはなし。堅固初心の時は學ひかたし。心を付てみは用捨有へき也。玉吟といへるは家隆卿の集也。尤よし。此外百人一首自讚歌等な心にかけは。こと葉も艶しく心も珍しくなるへき也。才覺のためには源氏伊勢物かたり。或は朗詠三躰詩の絶句なと尤可然。又稽古の指南には八雲の抄。三五記。僻案抄。桐火桶。毎月抄。莵本。鷺末。是等に過たる物あるへからす。竹園抄はちかひたる事ともあるにや。當家にはさのみ用られぬ者也。

一稽古の時は。いかにも歌數をよみて。細々に人にみせて善悪を弁知事肝要也。會にあふ事は稀なれは。獨吟を細々にさた有へし。初心の時よりうつくしくよみて。すきまなき様にと計心にかくれは。うたのはたはりなくして。一躰にのみなりて。つゐにはこたけなる歌ならてはよまれぬ者也。ことに獨吟は人前のしわさならねは。なにたることをもとりよせて。時に雅意に任せたる事をもよみて御らんすへき也。しかりといひて歌のそこぬるやうには有へからす。歌のかさをよみ出さんと云こと也。はれのうたのとき。人の前にては上に申せしことく。兒若衆の身にもにあひ侍らぬ事をよむはわろき也。一切のことを一篇に意得候て。つまりたる事はわろし。惣而二條家のうたはかりにも。邪路をよませしとて。少しも入ほかなる事をはかたくいましめあり。冷泉家のうたは毎首つねに人の思かけぬ處をよみ出して。はたと目のさむるやうにきこゆる也。五尺のあやめに水をかけたるやうによめと。爲尹卿もすゝめられしと也。しかれとも邪路をはかたくいましめたまふを。あしく心得たる人は。冷泉家の歌はみちの魔障にて侍るなと云人あり。生得口の叶はぬ者かかやうの事をは云也。爲家卿已來二條冷泉の兩流相分つゝ家々の口傳區々也。披講の次第。懷紙の認やう。題のてにをは。其外相傳の事につけて。遙にかはりたることゝも有へし。兩家のたゝすまひをよくしらぬ人は。とりまきらかして物を申故に。相違の事おほし。結句人の云たる事をちかひたるなとゝ云人あり。一首の懷帋は兩家とも三行三字なれとも。雅經卿の家説には三行五字にかゝるゝ事あり。此故に稀に三行五字の懷紙世にちれる事有へし。難すへからす。一を知て二をしらぬ人。物を難すること口惜事也。此次につれに人の口にはあれとも。そのおこり何ことゝもしらぬ歌の古事。又はきゝしらぬ詞。物の異名なとの不審なることゝもの。一徃のせつをかたはし申へし。

八雲たつ出雲八重垣妻こめに八重垣つくるその八重垣を此歌はそさのおの尊の御うた也。神代のうたは文字の數もさたまらさりしを。此御時より三十一字に定りぬ。此故に歌のはしまりをは八雲といへり。抑此歌の由來は。天神七代の

をはり。伊弉諸伊弉册尊の御子一女三男おはしましけり。日神。月神。蛭子。素盞烏尊是也。日神月神は伊勢の内宮。外宮。蛭子はにしのみや。素盞烏は出雲の大社是也。そさのお神とならせたまはぬはしめ。出雲の國いさなきの里に狩人となりて。とし月を送たまひし時に。ひの川上に一の里あり。行て見たまへは人只三人なり。父をは足なつち。母をは手なつち。娘をはいなた姫と申。大蛇にとらるへきことをなけくと申間。其時そさのお哀に思食て。七いろの船に酒を湛て。三階にたなを積て。おんくわむと云衣をきせて。彼姫を隠し置たまふ。大蛇七月七日の早天に水より浮出て。三階の棚をみるに。女はおんくわんにかくれて見えさりけれは。船に移たる姿をまことの姫とおもひて。かしらを舟のうちにひたして。酒をのみほさんとす。つひに酔ふして有。素盞烏劔をぬき持て。足手を截おとし。其後尾を切たまへは截す。みれは劔有。村雲のかゝりてみえす。もとめ出たまへは。雲たちまちさりにけり。尾なる劔をとりて。頭をうちおとしたまふ。大蛇二に切られて去ぬ。大和國布留の明神にあるむら雲の劔是也。其後三人の者を具してわか屋に歸り。夫婦となりて。たゝならすなりたまふあひた。産所をこしらへたまふに。八色の雲下て産所の上にかゝる。素盞烏少も騒す。大蛇の怨靈と心得て。なわを産屋に引まはしたまふ。故に鬼のてなわにかゝりて災もなし。八重に引まはして垣のことくしたまふ。故に八重かきといへり。其時素盞烏今のうたをよみたまへり。此うた三十一字のはしめなる故に。最初に是を云侍る也。

なにはつにさくや此花冬籠今は春へと咲や此花

此歌とあさか山の歌をは。歌の父母と申ならはしたれは。先此歌の心をしるへき也。昔仁徳天皇と申御門おはしましけり。なにはのみやに住たまひし故に。なにはの皇子と申奉りき。御おとゝのみやは宇治にすみたまひし故に。宇治の王子と申けり。父の御門のいかゝおほしめしたりけん。御おとゝの宇治の王子に御位を讓りたまふ。父の御門崩御の後。急き御くらゐにつきたまへと。なにはの王子のたまひけれは。兄を閣て位につくへき故なしとのたまへるを。なにはの王子重て仰事ありけるは。あにおとゝとはいるましき也。父の御門御さためのうへは。とく〳〵位につきたまへとて。互に辭退したまふ。故に三とせまて御門もなくて。天下の民迷惑しける間。宇治の王子。所詮我世にあれはこそとて。空しくならせたまふ間。王仁といへる者此歌をよみて君をいはひ奉る也。なにはつに咲や此花冬籠とは。くらゐにもつきたまはて。こもりゐたまひし事也。今は春へと咲やこの花とは。位につきたまふといへり。此花とは兄の花といふ事也。梅をは

花のあにと云故に。梅の花をさしてよめる歌なり。此君を仁徳天皇と申奉る也。つゐに平野明神とあらはれ給。家隆卿社頭雪と云へる題にて。

なにはつに冬籠（心イ）せし花なれや平野の松にかゝる白雪

とよまれしも此君也。宇治の王子は離宮と申て。是も神とあらはれましく〱たまふ也。

あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふ物かは

此歌をは歌の母と申ならはしたり。此歌の心は昔みちのくにあさかの里にすめる女を召上。采女とて召仕れし女のよめる歌也。あさか山かけさへみゆるとは。みちのくにある名所也。此山には浦里田ある所也。されはあさか山とも。あさかの海とも。あさかの沼とも云也。この沼と云は入海をいふ。此山あひは口ほそくおくひろし。陰さへみゆるとは。賤しき者の住家なれは。あらは成と云なり。山の井のあさくと云は文字のつゝけやう也。しかも此うみはたゝあさき入うみなれとも。はては千尋のうみ也。千ひろのことく思へとも。涯分による也とよめる歌也。此うたを古今の根元とをく也。女のよみし歌なれはとて歌の母と申也。此女を御門めしつかはれしに。あるとき御かはらけ給りて。露い情にめてた〔よ脱歟〕まふ。其時此うたをよみて。御門に奏りし故に。叡感い不浅して。あふみい國うねめの庄をけはひ所に給りし故に。うねめと是をめされけり。是よりはしまりて。今も禁中に采女と云女官をめしつかはるゝといへり。

春くれは星の位に影見えて雲井のはしにいつるたをやめ

ほしのくらゐと申は。君は三公七辨とて。大臣公卿にうやまはれて。政をたすけたまふをかく申也。三公とは左大臣。右大臣。内大臣。是を三斗にたとふる也。七辨とは辨官の人七人有也。是を七星になそらふる也。雲井の橋とは。清涼殿より紫宸殿へとをる間に有はし也。たをやめとは。女官のかたちいつくしきを云。正月一日元日節會に三公七辨女官なとの雲井の橋に出て。君につかうまつることをよめる也。

初春のはつねのけふの玉箒手にとるからにゆらく玉の緒

此歌の心は正月はつねの日。玉はゝきを百官にくたされ。禁中をきよむるなり。ゆらく玉のをとは。のふる命千秋萬歳といはふ也。又一説に。民のしわさにかいことて。糸錦（綜イ）にせん爲に。むしの子を紙にうみつけさせて。それを正月の初子にはゝきにてはらひおとしてかひはしむる也。此はゝきを手にとれは。民の命をのはゆる也。糸のゐなるを玉の緒ととり合てよめるうた也といへり。京極のみやすところを志賀寺の上人戀ましく〱て。みやす所の御手をとりて。よまれける歌となん申侍けり。

かそいろはいかに哀と思らん三年になりぬ足たゝすして

此歌の心は。天照太神の御兄弟一女三男。ひとつ御はらにやとりたまふ時に。そさのおの尊御心懸せて。ひるこを御腹のうちにてなやめたまふ故に。誕生ありてのち。三年まて御あしたゝさりしことを。いかにも父母あはれと思たまふらんとよめる歌也。此うたは俊頼卿の歌也。拾遺抄に入たり。かそいろとはちゝはゝのことを云なるへし。

もかみ川のほれは下る稲舟のいなにはあらす此月はかり此歌の心はみちのくにもかみ川と云河有。ことの外はやき川也。船をのほすれは。舟をしくたされてのほりかぬるを。さほさしてのほすれは。人の物をいなと云ふ時。かほをふるやうなるを。いな船と名付たるよし申一說あり。又いねをつみて河上の里へはこへは。みつはやくして。のほれはくたるとも云にや。今此うたはむかし六位の藏人のよみける歌也。藏人をふる人は。六位の時は昇殿をゆるされて。君の玉座にちかくつかうまつるといへとも。五位にあかれは。もとの地下へ歸りて昇殿叶ぬなり。來月には五位に昇へき間。此月計昇殿すへき也。されとも位のあからんことゝ。いなにはあらす侍れとも。位を昇れは。地下へくたるを歎てよめる歌也。くらゐ山昇るにつけていかなれは雲井の月をよそにみるらんとよめるも。六位の藏人五位にあかりてよめる歌也。のほれはくたると云んために。もかみ川をとり出し。いなふれのいなにはあらすと。言葉をかさねんために。かくのことく讀る也。歌をはかやうにとり合せてよむ事也。分別有へし。

岩橋の夜の契りもたえぬへしあくる侘しきかつらきの神是はかつらきの一言主神と申神の御事をよめる歌也。むかし役優婆塞かつらき山と芳野山との間に橋を渡て。たやすく山臥をありかせんとて。此神にわたしたまへと訴申されけれは。わかかたちみにくし。晝はわたさし。よるよるわたさんとありけれは。なをひるも渡せと云を。わたし給はさりけれは。忽に縛て大なる石にかつら二まきまつゐてをかれたり。後に護法徒をときにけり。此故に橋をも渡しはてたまはす。えんのうはそくと神との契もたえぬることを戀にとりよせて。あくれは人かへりて。夜の契のたえぬることのわひしきによめる歌也。此故にかつらきのくめの岩はしの事をは。末もとをらぬ樣成事におほくなそらへてよめり。

わかせこかくへきよひ之蜘蛛のくもの振舞兼てしるしもむかし允恭天皇と申せし御門の后をはそとをり姫と申也。御かたち世にすくれたまひて。御身にひかり有て。御はたへ衣にすきとをりたれは。衣に通る姫と文字に書て。そとをり姫と申也。わかせことは御門の御事なり。待人のこんとては。かならす蛛と云虫糸をひきて。其振舞を見する也。さゝかにとは蛛のこと也。今夜かならす御門后の臺へ行幸な

らんと云事を后のよみたまへる歌也。後には紀伊國玉津島と云所へ御幸成て。遂に玉と成りて。今は神にあらはれたまふ。玉津島明神是也。歌道を守給ふ神也。

近江なるつくまの祭とくせなんつれなき人の鍋の數みん

此歌の心はあふみにつくまの明神と申神おはしましけり。此神のまつりの日。氏子の女男したる數なへをつくりて神に參する也。是をわかおもふ人われにはつれなくとも。男をはしたるらん。つくまの祭をいそきて。なへの數を見はやとよめる歌也。

あつまちの路のはてなる常陸帶のかと計もかけんとそ思

此歌の心はひたちの國にかしまの明神と申神おはしましけり。此神につきてひたち帶と云事あり。けさうする男の名を帶に書て。神の御前にかけてのつとふを申に。をのつからかゝるをとりて。此人をすへきにこそとしりて。男かたらひよる也。それほとのかことを成とも。思ふ人にかけはやとよめる歌也。

さむしろに衣かたしきこよひもや我を待らん宇治の橋姫

むかしめふたり持たる男。もとのめつはりをし。七ひろの和布をねかひければ。この男もとめんとて。海のほとりに行てたつねける程に。龍王にとられてうせにけり。もとのめかなしみて。彼はまのほとり成ける家にたち入て。事のやうを尋ければ。ありし男月のあかゝりけるに。今のうたをなかめてしありきけり。是を聞て。こはいかにとて。男にとりつきければ。我は龍王にとられて。もとの身にてはなし。ゆめ〳〵ちかつき給ふなと云ければ。夜もすからよそなからかたらひて。なく〳〵家に歸り。そのまゝ思死にしにける。後に宇治のはし姫の明神に顯たり。委ははし姫の物かたりにみえたり。

芳野山こそのしほりの道かへてまたみぬかたの花を尋ん

しほりと云ことと色々に申せとも。是はふかき山に入に。出さまのみちをしらん爲に。木のゑたかやなとを折かけて入也。扨これをしろへに出れは。もとのみちにかへる也。道因法師出さまのしほりをよまれしを。淸輔朝臣。入さまには出んみちをしらん爲にこそしほりはすれ。出さまには何故すへきと申されたりけれは。此歌を證歌に出されしとそつたへきゝ侍る。

まてといはゝねてもゆか南しゐて行駒の足おれ前の棚橋

たなはしの事。賤か屋の門の前なとには。必小川堀溝なと有上に。たなのやうにうち渡たる橋を云といへり。此歌の心は。夜ふかくかへる男。いまちとまてといはゝ。ねてもゆけかし。しゐてかへるかにくきに。まへのたなはしにて。おとこのりたる駒の足をおれよかしと云也。

春雨のしく〳〵ふれはいなむしろ庭にみたろゝ青柳の糸

此歌不審也。いなむしろは秋。青柳は春也。いかてかやうにはよむらんと覺ゆるを。八雲抄にたゝ柳の枝水にうつりたるか。いなむしろににたりと云はかり也とみえたり。しくしくふるとは頻にふると云事なるへし。

春されは鵙の草莖へたつとも我はみやらん君かあたりを

もすの草くきの事。色々に申人あれとも。此歌をもて意得れは霞の事ときこえたり。この次に春されは夕されはなといへる事を申へし。別なる事にてはなし。されはと云事なり。夕されは雲のはたてに物そおもふと云歌も。夕くれはされはよと云事也。今の歌も春されは霞ふかくへたつとも。君かあたりを見やらんとよめる歌也。櫨を云ともいへり。歌によるへし。

庭たつみかきほにたえぬ五月雨は眞木の戸口に蛙鳴也

にはたつみといへる事。色々に申人あれとも。只長雨の時庭にたまりたる水のこと也。水たかくなれは。戸口まてかはつなく也とよめり。又まきのとゝ云事。つねには松の戸草の戸なとのことく心うる也。しからす。上臈の住たまへる所をは。うつくしき木柱にてつくる。これをまきの戸。まきのはしらと云。此故に眞木と二字書也。

あけまきの跡たにたゆる庭の面にをのれ結へと茂る夏草

あけまきと云事に兩說あり。此歌は車のすたれと聞たり。あれたる宿には車をもたつる事なし。あけまきはゆふ物なれは。あるへきなれとも。それはたえて。なつ草のむすふはかりに茂りたるよとよめるうた也。又牛をかふ童をいへり。

光ありと見し夕顏の白露はたそかれときの空め成けり

此うたは源氏夕顏の宿のまへに車をとゝめて。夕かほの花をとはせ給ふ。うちよりうへわらは花を一ふさ扇の上に置てまいらせたりし時。しはしとて。うちわたすをちかた人にもの申す。われそのそこに白くさけるはなにの花そもといふ。古今の歌を詠したまへり。此物語の心をよめる歌也。たそかれ時は夕のこと也。空めとはよそめと云事也。をちかた人とはあなたこなたへすくる人のこと也。

脫沓の重なる事のかさなるはゐもりのしるし今みつる哉

いもりのしるしと云事は。女の二心あるよし人の申せとも。誠空事をしらんために。いもりと云むしなとらへて。血をしほり出して女の身にぬるとき。誠に別のおとこをしたれは此血身にしむ也。空ことなれはします。其故はゐもりとは守宮と書て。宮をまもるとよめり。宮とは女の事也。女をまもるむしなれは。女のとかのありなしを顯す也。此歌の心は女のぬきたる沓のうへに。又沓のかさなるを見て。さては別の男のかよひけるよと。連々沓のかさなる事の度かさなるを

不審したれは。別の男ねやのうちに有けり。今こそ兼て守宮のしるしを見付たれとよめる歌也。

天の川かよふ浮木にととはん紅葉の橋はちるやちらすや

七夕のあふ夜は初秋なるに。もみちのはしと云事不審也。此歌は匡房卿の歌也。是は鵲の翅をならへて星を渡すに。別れの時おとす涕くれなゐなるに。鵲の羽のそめられたるを。もみちのはしとよめるといふなるへし。

七夕のいをはたたてゝをる布の秋さり衣誰かとそみん

いをはたは五百のはたの事なれとも。此歌は只はたはりのひろき事をいへる計也。秋さり衣とは。すゑの秋にこそよむへきに。初秋にはいかゝとおもへとも。冬かまへの事なれは。秋の中ならはいつも云へし。又七夕の別にきたる衣とも云也。

君をゝきてあたし心を我もたはすゑの松山波も越なん

末の松山をなみこすと云事。色々にとりなしてよみたる歌おほし。其みなもとはむかし奥州に夫婦有ける者。末の松山のほとりをゆくとて。女男に申やう。われらか中もかはるへき事のあるへきかといへは。男あれなる松山を波のこえん時かはるへしと云を。女うれしく思て家にかへりにけり。有時又二人ともなひてありきけるに。松山は海のむかひなれは。おきつなみたかくうちあくる時。松山のよそめなみのこゆる様に見えけるを。まことにこゆるそと意得て。女男に云やう。兼ての約束なれは。いとまをたへとて。終に離別しにけりとなん。此故にかはる中をなみこすといへり。此歌も君より外に別のあたし心有らは。末の松山なみこすへしとよめる也。むかしの人はかくおろかにありといへり。

東路のさのゝ船橋取はなし親しさけすは妹にあはんかも

是はむかし上野の國にさのゝ舟はしと云はし有けり。そのはしのわたりに住者有けり。河のむかひなる女のもとへかよふを。おやの心に詮なしと思て。はしの板を四五枚とりはなしたりけるをしらて。月をなかめてわたるとて。踏はつしておちて死にけり。其事を後におやにさけられて。女にえあはぬ者かくよめるとそ申傳へ侍る。

山鳥のおろのはつ尾にあられ共かゝみの山のかけに鳴也

山とりの鏡のこと色々の説あり。わか影を山の井なとにうつしていたく見る鳥也。此故に山鳥のかゝみと云とも申。尾羽の中にかゝみのことく影のうつろ羽有とも云也。又尾をへたつると云事有。一説にはをのか尾をへたてゝ雌雄ふすとも申。又山の尾をへたてゝふすとも申なり。おろとは雄の事也。はつおとはなかき尾一すち有る也。

天さかる鄙の長路をこきくれは明石のとより大和島みゆ

あまさかるひなと云ふことは。日と云ん爲のまくらことは

か。天さかるとは日影のしたひにかたふくことを云也。遠さかるなと云はとの事なるへし。

岩代の野中にたてる結松心もとけすむかしおもへは

いわしろとは紀伊國の名所也。結松とはむかし有間王子と申人おはしましけり。父の御門御くらゐをゆつり給はすとて。恨て紀伊國へ下。兵を集て謀反を起給ふ時。岩代の王子の御まへに參給ひて。種々御立願有ける時。松の枝を引むすひて。我本意をとけは又歸こんと宣事をよめる歌也。此故に結松と云ならはしたり。

おもひかね水の柏にこと(うらとイ)ゝへはうかふはしつむ泪成けり

みつのかしはの事説々あり。三角柏と文字に書と云一説あり。此柏は伊勢島にあり。神明の御供を備る時。かいしきにする木也。角のやうにして三葉にありと云也。又水のかしはと云は。戀するものゝ水の上に柏の葉をうかへてみるに。あはんとてはしつみ。あふましきはもとよりうかふ也。是を柏の占と云説有。此歌はこの心ときこえたり。又水の底なる岩をも柏と云事有。舟かたのことは也。又なにはつのもにうつもるゝ玉柏あらはれてたに人を戀はやと云歌あり。是は蛤をよめると云説あり。俊頼朝臣のうた也。

ならさかやこの手柏のふたおもてとにもかくにも佞人哉

ならさかのこの手かしはとといへる物。見しりたる人なし。兒の手と書たるとあれは。いかにもちいさくて。かいての葉の樣なる物かと云人あり。又有歌に。いはれのゝ萩のたえまのひま〳〵にこの手かしはの花咲にけりとよめり。この時は草のやうにも聞たり。ねちけ人とは佞人とかくといへり。此うた何とも心得かたしと。古人申されし也。

古へのいともかしこしかたゝ鮒つゝみやきなる中の玉章

此歌は大伴の王子御謀反の故に。天武天皇よし野にこもらせ給ふとき。御息女よりかたゝ鮒をつゝみやきにして。中に御ふみを入させ供御に備たりし時。御文を御らんして。俄によしの山を出て。大神宮へまうてたまひて御參籠有けり。神明の御告によりて。伊勢より美濃國不破の關に移たまひ。皇子と御合戰有て終に討勝せ給ひ。二たひ御位につき給ふ。此心をよめる歌なるへし。

河社しのにおりはへほす衣いかにほせはか七日ひさらん

川の上に棚をかきて神供を備て。わか無實を祈なり。七日ぬれ衣をほせともひすとよめるは。神を恨たる心也。しのとはたなを篠にてしたる故に。しのにおりはへとよめる也。又しのに物おもふ。しのにふる雨なとよめるは。つよくふる雨。つよく物おもふと云事也。

世中に君なかりせはからす羽にかける言葉(辞歟)誰かしらまし

敏達天皇の御時。吳國よりからす羽に備物を書て越たり。よ

みわつらひけるを。有官人申けるは。からす羽をこしきに入てむして。すゝしのきぬをはのうへにおほひけれは。文字あさやかに見えてよまれけるといへり。是をほめてよめるうた也。今もしのひふみをはからす羽に書と云事あり。しのふ心のふかきを烏羽にかく玉章とよめる也。いたくしのふ心成へし。

いかにせんあまのさかてを打反し恨ても猶あかすも有哉

たけき女天にむかひて。うはなりを呪咀するとて。手をたゝくことを天の逆手をうつと云也。人をのろふ事也。

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる

きつとはきつねと云事の下略也。くたかけとは庭鳥の事也。よもあけはきつねにはまれてしにもせて。早鳴てせなを歸しつるとかこちたる也。せなとは男也。またきとははやくと云事也。はめなてとははまれもせてと云事也。

天の原ふりさけみれは春日成みかさの山にいてし月かも

是は安倍仲丸入唐して歸る時。日本を見つけて。東より出る月をみてよめるうた也。ふりさけみれはとは。ふりあふのきてみれはと云事也。

とめこかし梅盛なる我宿をうときも人は折にこそよれ

とめこかしとは。もとめこよかしと云事也。もとめと云を上略してとめといひ。こよかしと云を下略して。こかしといへり。

露をたに今はかたみの藤衣あたにも袖をふく嵐哉

藤衣とはおやなとのいみの時きる衣也。禁忌也。しゐしはの袖もおなし事也。

玉ゆらの露も沸もとゝまらすなき人こふるやとの秋風

玉ゆらの事様々申せとも。たゝすこしと云事也。手玉ゆらといふは。はた物をるひと云物を左右へゆら〳〵ととりわたすをいふ也。此歌はすこしと云事也。しはしとも云事也。

ちらすなよ篠の葉草のかりにても露かゝるへき袖の上かは

しのゝは草とは。竹のほそくちいさきやうなる物也。

さひしさはその色としもなかりけり槇たつ山の秋の夕暮

まきたつ山とは只槇たちたる深山の事也。又槇をきる山とも云へり。此歌はそのいろとは見えねとも。斧の音秋の夕暮にきこゆろは。その色よりもさひしとよめる歌成へし。

駒とめて袖うちはらふ影もなしさのゝわたりの雪の夕暮

萬葉に心くるしくもふりくる雨か三輪か崎さのゝわたりに家もあらなくにとよめる歌を本歌としてよめる歌也。さのゝわたりは家もなき所也。駒をとめて袖をはらふへき程の陰もなしとよめり。

更にけり賴めぬ鐘は音つれて七ふ淋しき十ふのすかこも

此歌は定家卿深夜待戀といふ題にてよめる歌なり。萬葉にみちのくのとふのすかこも七ふには君をねさせてみふにわれねんといふ歌をとりてよめる歌也。みちのくにとふと云所あり。とふといはんために。まくらことはにみちのくとをける也。七ふには君をねさせんとよめるを。人はいまたこねは七ふさひしきとよみ。かねはかりなとつれて。まつ人はこぬなうちなげきて讀る歌也。本歌の心をとる歌也。

ほのかにも軒はの萩に結はすは露のかことを何にかけまし

露のかことはかすかなる事也。又かこつけをかことゝいふ。又ちかことをもかことゝいへる上界也。此歌はたゝいさゝかといふこと也。かすかと同し心也。

書流す言の葉をたにしつむなよ身こそかくても山川の水

是は媒葉といふ古事より出來たる歌也。むかし唐の御門の后に美人おはしましける。いかなる玉簾のひまよりか。人見たてまつりて心をかけゝるに。しらせ申へき便なくて年月を送りけり。有時后御溝のほとりに出御ならせたまひて御遊有けるを人しらせける間。河上に行て木の葉に思ふ心を書付てなかしてけれは。后御らんしてつゐに望を叶へましくけると云事を。今わか身のうへに思ひよせてよめる歌也。

すゝか山桐の古木のまろきはし今もや琴の音に通ふらん

むかしすゝか山にはしの有けるを。人わたるとてみれは桐の木なりけり。是にて琴をつくりたれは。つま音たへなりけり。御門きこしめしてめされて。すゝかの琴と名付られ。禁中に今も有けろとなん。

はし鷹の遠山の毛に雲かけて袖打はらふ春のうす雪

遠山の毛といふは胸の毛の事也。又鳥やにて毛のはゆるをも云といへり。

取かふもおほつかなきは箸鷹のめとりつきする春の夕暮

めとりつきするとは。子を妊て身おもく成て。とはさる事を云といへり。

はしたかの鳥はこゝにも教草心をつくるいぬのやりなは

をしへ草とは。鷹羽をつかひて。かり人に鳥ををしふるやうにする也。

山風の遠きかたのゝゆるき草鷹のおほには今そしらるゝ

ゆるき草とは。鳥たかにせめられて。しけみをくゝる時。草のゆるくを云也。

狩こむる鳥はのかれし秋草の上にたかつかふ鷹のみさこ羽

みさこ羽と云事。みさことて海河に有鳥也。そのことくにして。鷹わか影を草にうつして。鳥をすくませてとるを云なるへし。

箸鷹の木居とりえてやかゝるらん槇の葉かくれちる櫻哉

槇の葉かくれといふは。鷹の影を鳥のうしろになして。見えつかくれつして鳥を愛するをいふ。是は逸物の振舞成へし。

白波のたつたの里にあられ共しはしぬすたつ鷹のをひ鳥

ぬすたつと云事。鳥をとりてぬしにしらせすして。はむをいふとなん。

箸鷹の身より心を盡すこそたゝさきの世のむくひ成けれ

此歌は寄鷹戀といふ題にてよめる歌と見えたり。右の羽はみより。左はたゝさきといふ也。

いつ迄かゆるりくるりとたかたぬきあはぬ思ひに身を盡さまし

是もおなし題と見えたり。鞲(タカタヌキ)とは鷹をつかふ時手に入るゝ物也。

たかのより麓の里に飛下るつまこゝろみのはくらへの鷹

小大にとつかんとて。つまの羽をこゝろむる也。

山深みつむさ玉鳥木居をして見るにもおつる空をとふ鳥

玉とりといふはわしの事也。梢にゐて空とふ鳥をにらめは鳥おつるといふ也。

箸鷹のみよりのさか羽かき曇り霰ふるのにみ狩すらしも

さか羽かくとは。羽のもちれたるを云也。鷹かりといふ題まゝ出る事有。或は寄鷹戀なとも出る題あり。何ともよみわつらふ題にて侍る間。鷹ノ本歌を十二首しるして大方注を付侍る也。

凡日本へ鷹の渡事は三ケ度也。神代に一度。人王の始一度。仁德天皇の御宇に一度。百濟國より渡也。たかの名をは小竹と云。鷹飼の名をは末光といひ。犬飼の名をは袖光といへり。其比政賴卿といふ人あり。越前國敦賀津にて此鷹をうけとる也といへり。また西園寺の鷹の口傳に見えたるは。むかし信州諏方大明神の御前にて。とりをとりくらふ鳥あり。是を見てかりてとる。是則鷹也。此故に鷹狩と申也。諏方を鷹の神とあかめ奉る也。

ゆく末の花の光の名をきくにかねてそ春にあふ心ちする

此歌は法花經の藥草喩品に。號曰花光如來と云事をよめる也。凡法門をもてうたの題としてよむ事つれにあり。よむやうをしらては。當座に令迷惑事有へし。そのためにかたはししるし申也。或は法花經の廿八品の外題を題としてよむ事あり。或は觀經の十六觀文を題とする事あり。此外諸經諸論の要文を題に出さるゝ事あり。しかるに其品等の大意をやまとこと葉によそへてよむやうあり。又其品の中の文を一句の題としてよむ事あり。此うたは花光如來といふ佛の御名をあけて。花の光の名をきくにとよまれたり。又此品の大意をよまはかくはよむましき也。大意といへるは。草木成佛のむねを談して。一切草木のうへに一味の雨はそゝけとも。をのか色々もえ出て。花の色かはることく。佛の慈悲は平等

なれとも。衆生の根機まち〳〵なれは。樣々の益をうといふ事をとく品也。されは古の歌に。もろともに一味の雨はそゝけとも柳はみとりはなはくれなゐとよめる。是此品の心也。余は是に准て心得へき事となん。

いそきたて爰はかりねの草枕猶奥ふかしみよしのゝ山

此歌は化城喩品の大意をよめる也。此品の心は大通智勝佛の昔の因緣をあかして。一乘の心をうるほし。化城寶處とて本覺の都有。かしこへいたれと。二乘のたくひをすゝめし品也。此こゝろをこゝはかりねの草枕とよみて。化城の心をあらはし。猶奥ふかしみよしのゝ山とよみて。本覺のみやこをあらはす也。いそきたてといふ五文字は。釋迦如來のとくしてもとの都にかへれとすゝめたまふ事をかくよめる也。是は八條院高倉のうた也。

僞のなき世の人のことのはを空にしらする有明の月

此歌は觀經の華座觀の中に。說是語時無量壽佛住立空中といへる文をよめる也。此心は釋迦如來韋提希夫人に對して。彌陀の悲願をしめしたまふ。夫人よくも信し給はさりしうたかひをはらさんために。彌陀如來空中に住立したまふ。是をみて夫人決定往生の信を增たまふと云事をかくよめる歌也。蓮生法師かうた也。

をく露の染はしめけるとのはに四方の時雨や色をそふ覽

此うたは阿彌陀經の六方護念の心をよめるうた也。釋迦如來舍利弗に對して。一日七日名號をとなふる衆生。一心不亂ならは淨土に生すへしとときたまふ事を。末法の衆生信すへからすと心得て。六方の諸佛出て舌をのへて證誠し。此經を護念したまふと云事を。をく露のそめはしめけるといひて。尺迦の御ことはをあらはし。四方の時雨とよみて。六方の心をあらはす也。四方をあくれは。をのつから上下はこもる也。色をそふらんと云て。衆生の信をます事をしらする也。是は信生法師かうた也。

さま〳〵にわくる形もまとにはひとつ佛のさとり成けり

此歌は慈鎮和尙の御詠也。十界をよめる歌なるへし。是は天台宗の意。十界互具の法門とて。地獄。鬼畜。人天。二乘。ともにひとつ佛性を具したると談する旨を。ありのまゝによまれし歌也。かくのことく物にもなそらへすして。ありのまゝよめる事も有。すへてさま〳〵の手たて有へし。わつかに尺數のうたを五首あけて。事の心をさとらせ申也。此外禁中の年中行事をもつて題とする事あり。前に書てまいらせつる一帖に。大かたしるし侍る間。是にはのせ侍らす。

むらくさに草の名はもしそなはらはなそしも花の咲にさくらむ

此一首は廻文の歌也。廻文錦字の詩の姿なるへし。むかしは

寶滔といへる者あり。其妻蘇若蘭といへる有。又妻に超陽臺といへる有。寶滔ある國の大守と成て下る時。陽臺をはむかへとりて。若蘭をはのこし置けり。若蘭恨てのあまりせんかたなみに。二百余首の詩をつくりて。錦に是を綾あらはせり。上より下へよみ。下より上へよめとも。皆聲韻の詩となれり。寶滔是を傳聞て。あはれにやおもひけん。若蘭をむかへとり。陽臺をは出しけり。此故にかれか織たる錦をは相思の錦と名付けり。それ我朝にしてやまとことはにあらはす事。此一首より外はまれなる事に申傳侍る間。めつらしきに付て是をしるし侍る也。かゝるなさけの道は。今とても有へき事にこそ。上に申せしことく。歌をよまんと思はん人は。やまともろこしのあはれなるためし。佛法世俗の道までも心にかけ。つねは世のはかなき事を觀して。後の世の實のみちをねかひ。あるひは戀の道にこそふかき哀はおほかるめれと。嬉きふしにもうらみあるか。ことにもこのみちにのみ心をかけましまさは。いかてか見る人もなひかさらん。かくとりあつめたるはし〳〵を。しつかに思ひしたゝめ。何といふ題をとらはかゝる事をよむへしと。たえまなく工夫有へき事肝要也。たとひ本歌をみれとも。おほえたる計にて。其心をわきまへしらすはかひなかるへし。古歌に秋萩の花咲にけり高砂の尾上の鹿も今や鳴らんといへるを。つねには人高砂の尾上に萩をよみたると心得る也。是は我宿の庭なとに萩の咲たるを見て。尾上の鹿も今や鳴らんとおもひやりたるにてこそ侍れ。又けひの海のにはよくあらしかりこものみたれてみゆるあまのつりふねといふ歌あり。これもけひのうみにかりこもをよみたるにてはなし。みたれてといはんために。かりこもをよひ出したるはかり也。すへて此たくひ本歌におほし。毎首に心を付て御らんして。猶不審のことをは能存知しりたらん人にたつねたまひて。其心をまなひましまさん事尤よろしかるへし。相かまへて初心よりたけすかたいりほかなる事このむへからすとなん。

【右釣舟以帝國圖書館本及圖書寮本校合】

和歌部百二

綺語抄上

天象部

天

古今云
あまのはら　おほそらをいふ。
ふりさけみれは　ふりあふひてみれはといふ事也。

安倍仲丸

古今云
あまの原ふりさけみれは春日なる三笠の山にいてし月かも
かやかのはら　そらをいふなり。
古今云
あまのみそらとよめり。
ひさかた　そらをいふ也。
或説云。月をいふ云。非也。
万葉十二
久堅の天つみそらにてる月のうせなん後そ我こひやまめ
あまち
久堅のあまちはとをしなほ〳〵にいへにかへりてなりをしまさよ　ヒイ
ひさかたのひかりとよめり。
古
久堅の光りのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん　友則本
久堅の天つそらにもすまなくに人はよそにそ思ふへらなる
久堅の天てる月のかくれなは何によそへて君をしのはん

久堅の天の川原の渡し守君わたりなはかちかくしてよ
久堅のあまくもをかす雲かくれなきこそ渡れはつ田鴈かね
これみなそらをいふと見えたり。月をいふとは見えす。ひさかたの月とは。そらの月といふにこそ。

あまのさくめ
久堅のあまのさくめかあまふねのとめしたかつはあけにけ(セイ)るかも(ナイ)

日

あかねさす　日をいふ。
たわすれていをそねにけるあかねさすひるはさはかり思ひし物を
月にもあかねさすとよめり。　月部を見るへし。

あさつくひ　あさ日をいふ。
あさつくひむかふつけくしふるけれは何そも君かみれとあかれぬ

あさひこ

あさひかけにほふ
万四 朝日かけにほへる山にてる月のあかれぬ君を山こえにをきて　猿丸
集にはよそなる君を山こしにして。

ゆふつくひ　ゆふ日をいふ。
ゆふつく日さすやをかへにつくる屋のかたちをなしみ(ヨイ)鹿そよりくる

月

ゆふつくよ　ゆふくれの月なり。
千 春霞棚引けふのゆふつくよきよくてるらんたかまつの野に
古 春されはこのくれもとのゆふつくよおほつかなしや山かけにして
ゆふつくよさすやをかへの松の葉のいつともわかぬこひもするかな　猿丸
ゆふつくよあか月山のあさかけに我身はなりぬこひのしけきに　同人
十 春たてはしるしはかりの夕月夜おほつかなしもこかくれにして　人丸

あか月つき
さ夜更てあかつき月にかけ見えてなく時鳥きけはなつかし

きよき月
長歌。ますかゝみきよき月よ

万八 たか宿の梅の花そも久堅のきよき月よにこゝらちるらん

をはすて山の月　信濃にさらしなの郡にあり。をはかとし比ふる。またこのめのいとあはれにおぼえけり。このめのいはん事はいかなりともきゝてん。みをなくなせといはんにも。なくなしてんといひけるほとに。このめをはをにくみて。ころせといひけれは。めのいひける事のえさりかたけれは。をはをさらしなの山にいてゐてころしにけるに。八月の月のいとさやけかりけるを見て。よめるなりとそいひつたへたる。

うはたまのそのよの月　夜于玉言。

万四 うは玉のそのよの月よけふまてに我はわすれすまなくおもへは

つきよみのひかり　月讀之光。足廣言。

万四 月よみの光にきませ足ひきの山をへたてゝとをからなくに

万四 つきよみの光はおほくてらせ(きよ本)ともまとふ心はたえす思ほゆ

七 天のはら道とをきかも月よみの光すくなしよはふけにつゝ

ゆふさらす

みそらゆく月よみ人

万七 みそらゆく月よみ人をゆふさらすめにはみれともしるよしもなし

万四 三空云。

みそらゆく月の光にたゝひとはあひみし人の夢にしみゆる(め歟)

つきよみおとこ

六 天にます月よみおとこぬさはせむこよひのなかさいほよ月こそ

つき人おとこ　かつらおとこをいふ。

万十 秋風のきよきゆふへに天の川船こきわたす月人おとこ

万 大空にまかち(し歟)しらぬきうなはらをこきてきわたる月人男 人丸

万十 ゆふつくよかよふあまちをいつしかと明きてたのむ月人おとこ

万十 天の海月の船うけてかつらかちかけてこく見ゆ月人おとこ

さゝらへおとこ　萬云。月形名也。

六 山のはにさゝらへおとこ天の原とわたる光見えてしよしも

つきよめは（四條大納言云。月よにあれはといふ事也。よそめはなといふやうなるとなり。）

月よめはいまたふゆなりしかすかに霞棚引はるたちぬとか

いさよふ　山のはよりさしいつる月をいふ。

山端にいさよふ月をいてんよと待つゝをるに夜そ更にける 乙黒丸

うつろふ月とよめり。

十一 木間よりうつろふ月の影おしみたちやすらふにさよふけにけり

月よさし
十 我やとのけもゝのしたに月よさしした心よしらたてこの頃
あかねさしてる月
旋頭歌
十一 はつせのやゆつきかしたにわかかくしたるつまあかねさし
てれる月よに人みてんかも
四 おほとものみつとはいはしあかねさしてれる月よにたゝに
賀茂女歌 あへりとも
月をしてれり
八 我宿に月をしてれり時鳥心あれことよひきなきとよませ
月のねすみ
露のいのち草のねにこそやとれるを月のねすみのあはたゝ
しきかな
此歌は花山院御歌也。(房殺避歟)櫻山伏性に。人のよにあることは。
きしにおひたるくさはをひかへてあるに。その草の根を
白鼠と黒鼠とうちかはりつゝかふりたつにたとへたる事
あるなり。
高光少将
たのむよの月のねすみのさはくまの草葉にかゝる露のいの
ちを
雲
こよひのつくよ
とよはたくも
万一 わたつみのとよはた雲に入日さしこよひの月夜すみあかく
こそ
あさゐるくものしく〳〵に　敷布常二。
万四 かすか野にあさゐる雲のしく〳〵に我はこひます月に日と
に
やくもさす　八雲列。(刺歟)
やくもさすいつものこそ(ら歟)かくろかみはよしのゝ河のをきに
なつさふ
霧
いさらなみ　ゆふきりをいふ。
けさ〳〵
万九 天の川きりたちわたるけさ〳〵は(とイ)我まつ君かふなてすらし
も
霞
かすみをなかるとよめり。
春霞なかるゝともに青柳のいとゝひもちてうくひすそなく
あさ霞とよめり。
かすみをかゝるとよめり。
十二 あさ霞かゝれる山をこえていなは我はこひんなあはん日

までに
　　ありはらのしけはるかむすめ
[古]おもへとも猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山はあらしとおもへ
は
寛治八年嘉陽院歌合に。はなゆへにかゝらぬ山はなかり
けり心ははるのかすみならねと。顯綱朝臣のよみ侍たる
を。かすみをはかゝるとはよまれてやあらんとて。まけに
判せられたり。かゝる歌ともありけるを。方の人々ともの
しらさりけるにやあらん。

雨

しつくしく　あめをいふ。
あめをたなひくとよめり。
[万]春雨のたなひく山のさくら花はやく見ましを散らせにけり
ひちかさあめ　にはかにふる雨をいふ。
妹か門行過かてにひちかさのあめもふらなんあまかくれせ
ん
しくれをはいつもよむへきなり。
神な月ふりみふらすみ定なきしくれそ冬のはしめなりける
これはふりみふらすみするしくれを云也。さらぬしくれ
をはいつも〱よむへき也。いま案。春夏なとはいかゝあ
るへからん。

あまさはり
[万]あまさはり常にみる[するイ]君は久方のよむへの雨にこりにけんか
も
あまつゝみ　雨乍見。
久かたのあめもふらぬかあまつゝみ君にたくひてこの日く
らさむ
かさなしと人にはいひてあまつゝみとまりし君かすかたし
そ思ふ

霰

あられたはしる　出人丸集。
[十]我袖にあられたはしりまきかくしけたすてあれや妹かみん
ため
霜のうへにあられたはしりいやますに[本し]あれはまひこんとし
のをなかく

雪

あまくもきりあひ　雪の降るおりくもれるをいふ。
打なひき春さりくれはしかすかにあま雲きりあひ雪は降つ
ゝ
たなきりあひて　四條大納言歌枕に。雪の降にくもるをいふ。
うちきらし　四條大納言歌枕に。雪の降にかきくらかるをい
ふ。

家持歌云。
うちきらし雪は降つゝしかすかに我家のそのに雪は降つゝ
万十 うちきらし春さりくれはさゝのうれにをはうちふれて鶯なくも
はたら　またらといふ事なり。
万十 あはゆきのはたらに降るとみるまてにまかひて散るは何の花そも
よをさむみ朝とを明てけさみれは庭もはたらに雪は降つゝ
はたれとも。
万四 あは雪のはたれに降とみるまてになからへちるはなにの花そも
はたれ霜降なとよめり。
しつり　四條大納言歌枕に。木に降たる雪のおつるをいふ也。
奥山のしつりのしたの袖なれや思ひのほかにぬれぬとおもへは
あまきる雪
古 梅の花それとも見えす久堅のあまきる雪のなへてふれゝは
雪すくとよめり。
家持
万 白雪もいまたすきれはおもはすに春日の里に梅の花見つ
みゆきふる
中〔臣恐脱〕武良自
万 時はいまは春になりぬと三雪降遠き山邊に霞棚引
あは雪　春の雪をいふ。可尋。しはすにとよみたり。
万四 しはすにはあは雪降としらぬかも梅の花さくつほめみすして
霜
しもをはをくとそよむ。霜降ともよめり。
八 たてもなくぬきもさためぬをとめこかをれる紅葉に霜なふらしそ
つゆしも　あきのしもをいふ。
万四 久堅の天のつゆしもをきにけりいへにある人まちこひぬらむ
猿丸
萩の花ちるらんをのゝつゆしもにぬれてをゆかんさよはふくとも
人丸
露霜に衣手ぬれていまたにもいもかりゆかんよはふけぬとも
春霜
春くれはみくまのうへにをく霜のけつらん我はこひしたるかも

風
かせをきよしとよめり。
秋かせのきよきゆふへに天の川船こきわたす月人おとこ
山したかせ
霞たつ春日の里の梅のはな山したかせにちりこすなゆめ
古 白雪の降こすときはみよしのゝ山した風に花そ散ける
このめはる風
後 かへる鴈雲路にまとふ聲すなり霞吹とけこのめ春風
あゆのかせ　越俗語東風謂あゆのかせ。
あゆのかせいたく吹らしなこのあまの釣するをふね漕かへるみゆ
あをのうらによするしらなみいやましにたちしきよせくあゆをいたみかも
みなとかせ
十七 港風さむく吹らしなこの海につまよひかはしたつさはになく
ひら山風
九 さゝなみやひら山風のうら吹は釣するあまの袖かへる見ゆ
しらやま風
十四 たくふすましら山風のねなへともころかをそきのあろこそえしも

あさけのかせ
八 あさけのかせのたもとさむしも
あきゆふ風
十 戀つゝもいなはかきわけい、へゐせはともしくもあらし秋の夕風
あすかかせ
一 たをやめの袖吹かへすあすか風都を遠みいたつらに吹く
つまふく風（ナカラフルツマフクカセノサムキヨニワカセノキミハヒトリカモヌラム）　常陸陽人。
たちはなのした吹風
廿 橘のした吹かせのかくはしきつくはの山をこひすあらめかも
かせをいたみ　風乎痛。
八 わかをかの秋萩の花風をいたみちるへくなりぬみん人もかも
あさこちのかせ
十 かすかのゝはな散ぬれはあさこちの風にたくひてこゝにちりこね

時節部

はるされは　くれはといふなり。
はるさりくれは

十 冬こもり春さりくれはあし曳の山にも野にもうくひすそ鳴

万 なつされは　夏儲而　なつまちて

あきされは

八 あきされはをく白露に我宿の浅茅かうへはいろつきにけり

あきつけは

十 あきつけはおはなかうへに置露のけぬへく我かおもほゆる
かな

ふゆされは

ふゆかたまけて　冬方設而。

秋のたのわか丶たはりのすきゆけはかりかねきこゆ冬かた
まけて

たそかれとき

すみ染のたそかれ時のおほろかにありこし君にさやにあひ
みつ

後拾遺 足曳の山ほと丶きす里なれてたそかれ時に名のりすらしも　輔親卿

あらたま　としをいふ。つきにもよみたり。

万四 た丶一夜へたてしからにあら玉の月かさなるとおもほゆる
かな

万 あら玉の月まつ(たイ)まてにきまさねはゆめにみえつ丶思ひそわ
かねし　せ(万葉)

きみをおもひあかこひなくはあらたまの(安良多麻乃)たつ丶きとによく
ろよもなし

万二 むつきたつはるのきたらはとよめり。

としのはにはるのきたらはとよめり。

万十七 みゆきつき春のきたれと梅のはなきみにしあらねはおる人
もなし

うちなひきはるたちぬらし

うちなひく　はるをいふ。

(ちイ) うらなひく春はきにけり

ひはりあかる　はるをいふ。

廿 ひはりあかる春日とさらに成ぬれは都も見えす霞棚引　家持

かけろふ　春夏の夕くれの空にあるやうにみゆる。ちひさき
むしなり。

つれ／＼の春日にみゆるかけろふのかけみしよりそ人は戀
しき

ひをりの日　右近の馬場の手結の日を云也。五月四日也。

ひはきもしらす　日月不知。

ひさかたのあめにしらる丶君ゆへに日はきもしらす戀渡る
かな

あかねさすひをもへなくにとよめり。

あかねさすひをもへなくに我こふるよしの丶かはにきりに

たちつゝ
むかしへ　萬云。昔者也。
二 むかしへのふるきつゝみはとしふかき池の汀に水草生ひに
けり
うつせみのよ　はかなしといふこと。
三 うつせみのよははかなしとしる(いふことイ)物をあきかせさむみしのひ
つるかな
古 空蟬のよにもにたるか櫻花さくと見るまにかつ散にけり
ねてもみゆねても見えけり大方は空蟬のよそ夢には有ける
けさのあさけ　今朝の且開。
八 けさのあさけ鴈かねさむくなくなへに野邊のあさちそ色付
にける
八 このころのあさけ(朝明)にきけは足曳の山よひとよみさをしかそ
啼
あさなけに
後 あさなけにみのうき事をしのひつゝ詠せしまに年も經にけ
り
あさとらす
万六 風ませにこたちをしけにあさゝらすなきとよますする鶯のこ
ゑ
あさにけに　朝爾食爾。

三 あをやまの峯の白雲あさにけにつねにみれともめつらしわ
かきみ
おほぬさ　ゆふくれのそらをいふ。
いやひけに　伊也比家爾。
うるはしとあかもふきみはいやひけにきませ我せこたゆる
ひなしに
うはたまのくろかみ　千玉之髮。
うはたまのゆめ　夜干玉能夢。
万四 我せこかかくこふれこそうは玉の夢に見えつゝいねられす
けれ
野玉之
四 うは玉の黑髮かはりしらけてもいたくこひにはあふ時あり
けり
ぬはたまのわかくろかみ　奴波珠書也。天智天皇御歌云。
万四 ゐあかしてきみをはまたんぬはたまの我黑髮に霜はをくと
も
現にはあふよしもなしぬは玉の夜の夢にそつきて見えこし
奴波多麻乃
十九 ぬは玉の夜わたる月にあらませはいへなるいもにあひてこ
ましを
わきもこかいかにおもへはぬは玉の一夜も見えぬいめにし

見えぬ

黒玉之

むは玉の黒髪山をけさこえてやました露にぬれにけるかな

むはたま よるをいふ。またくろきをいふ。

ぬはたま 奴婆珠。奴波多麻。

うはたま 烏玉之夜 野干玉之よわたるかり

天徳歌合に。むはたまのよるの夢たにまさしくは我思ふことをと。中務かよめる歌を。小野宮左大臣判者にて。よるをはぬはたまとこそいへとて。この歌をまけに判せられたり。今萬葉集にはむは玉といひて夜といひ。うはたまとても夜とよみ。又ぬは玉とてくろしといへは。わかぬことゝ葉にこそあめれ。なとかく判せられたるにかありけん。又其時もこの證歌をおほえさりけるにやあらん。

むはたまとよるをいふ。むは玉とはからすうりのねをいふ也。よるもかみも。くろきものをは。かの玉によせていふ也とこそ。

ゆふかたまけて

万十一 いつとても戀せぬ時はなけれともゆふかたまけて戀はすへなし

ゆふかたかけて

草枕旅にものおもふわかきけはゆふかたかけて鳴かはつかな

さぬるよは

万 玉かつら絶えぬものからさぬるよは年のわたりにたゝ一夜のみ

よをなかみ

十二 夜をなかみいのねられぬに足曳の山ひことよみさをしかなくも

ひくらしに ひゝとひといふ。

あかつきくたち 曉降。

万十 こよひのや曉くたちなくたつの思ひはすきてこひしそまされ

よくたちて 夜降而。亦夜具多知爾。

よくたちてねさめてきけはかはせとめ心もしのに鳴ちとりかな

夜降而

よくたちて河ちとり鳴むへしこそ昔の人もしのひきにけれ

あさゆふ あしたゆふさりといふ。

くるとあくと

古 くるとあくとめかれぬ物を梅の花いつの人まにうつろひぬらん 貫之

よな／＼ よる／＼といふ。

あさな〳〵　あした〳〵といふ。

あかときのかはたれとき

下總助丁

あかときのかはたれときにしま垣をこきにし船のたつきしらすも

しの〻め

十一 あさかしはぬるやかはへのしの〻めの思ひてぬれは夢に見えくも

あさかしはぬるわかいへのしの〻めに人もあひあはすつまなき陰に

ぬるやかしは　可尋。

さかまろ（るイ）

古 しの〻めのほから〳〵とあけゆけはをのかきぬ〳〵なるそかなしき

家經はすへてよるをいふとそいひける。能因かあか月といひけるに。いみしき論にそしける。能因か註云。あけはなる〻ほとのそらの雲のしの〻めに似たるなり。

古 しの〻めのわかれを惜み我そまつとりよりさきに鳴はしめつる

なをあけゆくほと成へし。

いなのめ　よるをいふか。　稻目。

万十 あひみらくあきたらねともいなのめのあけ行にけりふなてせんかも

たまくしけよるといふこと。　家持説。あくといはんとて。

曉に夜は成にけりたまくしけかたやまに月かたふきにけり

戀つ〻もけふはくらしつ玉匣あけなんあすをいかてくらさん

朱羅引 あからひく　あか月をいふにやあらん。又た〻日をいふにや。

十 あから引いろ（色）たへ（妙）の子のかすみれはひとつまゆへに我戀ぬへし

むは玉のこのよなあけそあから引あさゆく君をまてはくるしも

四 長歌に云。むはたまのよる　はすからにあからひくひもくる〻まて

つかのま　束間。

人　丸

万四 夏野ゆくおしかのつの〻つかのまもいもか心をわすれて思ふや

おほなこかをちかたのへに刈草のつかのあひたも我わすれめや

十一 くれなゐのあさはのはらにかるかやのつかのまも我わすられぬなり

たまゆら　しはしといふことなり。
たまゆらにきのふのくれもみし物をけふのあしたにこふへきものか
いさゝめ　かりそめといふことにや。
万九 いさゝめに思ひしものをたこの浦にさける藤波ひとよへぬへし
まきはしらつくる杣人いさゝめにかりいほせんとつくりてんかも
いさなみに
いさなみにいまもみてしか秋はきのしなひにあらん君かすかたを
たまのを　みしかきをいふ。あひたなしといふめり。
たまのをもあひたもをかすみまほしにとよめり。
すかの根　すけの根をいふ。いとなかきかゆへに。なかしといはんとてはかくよむ。
清　忠
散ぬへき花みる時はすかの根の長き春日もみしかかりけり
あかすのみ君をあひみんすかの根の長き春日を戀わたるかも
すかの根のなか〳〵しといふ秋の夜は月みぬ人のいふにそ有ける
まなくらすひはすかの根にあるものをあふよしもなと玉のをならん
とこよへ　常世邊。
浦島兒歌
十 とこよへにあらましものをつるきたち我こゝろからおくやこのひと
おひかよに
後 難波かたみきはの芦のおひかよにうらみてそふるひとのこゝろを
後 おひかよにうきこときかぬきくたにもうつろふ心有けりとみよ

坤儀部

あきつしま　日本國也。　秋津島。
日本紀云。神武天皇御即位後巡檢此國。爲體似蜻。仍而秋津島云。蜻カケロフノ形ナレハナリ。亦云。秋津洲と云々。
岩
あしひき　やまをいふ。
素盞烏尊歌云。あし曳の山邊くらしとしらかしのえたもたはゝにゆきのふれれは。悪日に山路をゆきける。大雪にあひたりけるより。山をはあしひきといふとそ。
やまさとを

むさゝひはこすゑもとむとあし引のやまのさとをにあひに
けるかな
やまのかひ　山のゆきあひをいふ。峡也。
山のかひそことも見えすおとゝひもきのふもけふも雪のふ
れゝは
はるやま　しらまゆみ
やまひこ　やまにものこゑにしたかひてこたふる物をいふ。
つくはね　かのもこのもとよめり。
古 つくはねのかのもこのもに立そよる春のみやまのかけをま
ちつゝ
山片就而　やまかたかけてとよめり。
万 雪をゝきて梅をな戀ひそ足曳の山かたつきていゑゐせるき
み
おく山のいはかき　いしをまもこゝ（本ノマヽ）かきにしたる也。
十二 奥山のいはかき沼のみこもりとこひはわたらんあふよしを
なみ
古 おく山のいは垣紅葉散ぬへしてる日の光やむときなしに（闕疑）
これもいはかけをいはかきとかけるにやあらん。
四 おく山の岩かけにおふるすかの根のねもころ我もおもはさ
らめや
あやめなとにもよむへし。

思ひ出るときはの山
古 おもひ出るときはの山のほとゝきすからくれなゐにふりて
つゝ（て(古今)）そ鳴
思ひ出るときはの山のいはつゝしいはねはこそあれこひし
き物を
万八 はるやまのさきのをすへそわとよめり。
山のすそへ　四條大納言の歌枕には。山のほとりといふ。可
弁。本ノマヽ
旅人の山のすそのにやすらふはあをみて月も涼しかりけり
山もせ
やまもせにさけるつゝしの
万八長歌云 たかまとのやまにものにも　或人云。書新（註イ）謂也。
路 いはかねのこりしく山
三 岩かねのこりしく山をこえかねてなきはなくともいろにい
てんやも
長屋王駐馬寧樂山作歌（引歌）
古 ちひきのいし　ちり石。
かみのもろふし　神之諸伏。
万四 我戀はちひきのいしをなゝはかりくひにかけても神のもろ
ふし
古 をちこちのたつきもしらぬ山なかに

みこしちの雪ふる山
万 三越路の雪降山を越ん日はとまれる我をかけてしのはせ
たまかつましまくま山　玉勝間島熊山。
十二 玉かつましまくま山の夕くれに獨か君か山路こゆらん
たまくしけみむろとやま　珠匣見諸戸山。
七 玉くしけみむろと山をゆきしかはおもしろくしてむかしお
もほゆ
こもりくのはつせの山
長歌云。
三長歌 已母理久乃コモリクノ泊瀬云々。
隱口乃泊瀬山　隱久乃始瀬乃山
隱來之長谷之山　隱江の
野
のもせ　野面也。のゝおもてにてといふ也。のゝおもてをいふ
なり。
むらさきのねひき(はふ歟)よこのゝはるの
十 むらさきのねひきよこのゝはるのにはきみをこひつゝうく
ひすなくも
のら　曠野。
遍昭
古 さとはあれて人はふりにしやとなれやにはもまかきも秋の
のらなる
万 くれなゐのあさはのゝらにかた(る歟)くさのつかのまもなくわれ
わすれすも
くたらの　冬の野をいふ。可尋。
万八 くたらのははきのふるえにはるまつとおりしらくひすなき
にけらしも
とりかなくあつま
とりかなくあつまをとこのつまわかれかなしありけん(く歟)とし
のをなかに
しなかとりいなの　つのくにゝあり。これにあまたの說有へ
し。しらかとりといふへきを。かきたかへたる成へし。
人丸歌云。
しなかとりいなのをゆけはありま山きりたちわたるむこの
さきまて
猿丸歌云。
しなかとりいなのをゆけはありま山ゆふきりたちぬともな
しにして
しなかとりいなやまとみて(とよに)ゆくみつのなみのみよせしかく(に(万葉))
れつまはも
しなかとりいなやまゆすりゆく水のなのみよにはりて(本ノ)こひ
わたるかも

攝津國にいなのといふ野の有也。その野は昔雄略天皇のかりし給ひけるに。いのしゝはなくて。しろきしかのとられたりけるより。いなのといふとなん。またしりなかとりといふとなん。いるとてはかりきぬのしりをいるものなれは。さといはんとて。しなかとりといふともいふへし。
賴綱なとはいのしゝをしなかとりといふとそいひける。
或僧說云。　宗延。
これは昔みかとのかりせさせ給ひけるに。かのしゝを百とりて。そのなかにいのしゝのなかりけり。百みなとはおくに中とはにしていへるなり。かみよゝりいひつたへたる。とかくいふへからすと云々。
今案。此說なを心えす。百といふとをいなかとはにして。なかといふへきやうおもひかけす。又かのしゝをあまねくしなかとりのとなにあらは。さそやともおもひてん。これはうたのしなとして。神といはんとてはちはやふるといひ。やまといはんとてあしひきといふやうに。いなといはんとて。しなかとりとよめるにこそあめれ。白鹿鳥はさもやときこゆる物を。

ひな　いなかをいふ。さてかたくなはしき物をは。ひなれたりといふ。

万二 あまさかるひなのあらのにきみをゝきてこひつゝあれはいけりともなし

万三 あまさかるひなのなかいをこきくれはあかしのとよりあまつしまみゆ

とりかなくあつま

万三 長歌。とりのなくあつま(か歌)のくに。等里我奈久。

廿 とりかなくあつまおとこのつまわかれかなしくありけんとしのをなかに

十三 いきのをにわか思ふきみはとりかなくあつまのさかをけふやこゆらん

田 さかこえてあへたまり(のたのも(万葉))にゐるたつのともしき君はあすさへもかな

いをしろく

たゝならす(しかとあらぬ)いをしろおたをかりみたりたいを(よせ(万葉))におれはみやこおもほゆ

やまたもるすこ

あしひきのやまのとかけになく鹿のこゑきこゆやはやまたもるすこ

わかゝりはかのすきゆけは

あきのたのわかゝりはかのすきゆけはかりかねきこゆふゆかたまけて

里

やふなみのさと〻よめり。

やふなみのさとにやとかりはるさめにこもりつ〻むといも　家持越中佐
につけつや

さとのみなかとよめり。

まとろくののにもあはなん心なくさとのみなかにあへるき
みかな

杜

十二 思はぬをおもふといは〻まとりすむうなてのもりのかみは
しるらん

橋

みかはのやつはし

こひせよとなれるみかはのやつはしのくもてにものをおも
ふころかな

みかはのやつはしは。はしらのやつあれは。くものあしや
つあるによそへてよめる也とそ。されともさはなくて。は
しのやつありけるとそ。

多久太須麻新羅邊
たくたすましらきへ　新羅國云也。

たくたすましらきへいますきみかめをけふかあすかといは
ひてまたん

水部

このはかくれてゆくみつ

万四 おくやまのこのはかくれてゆくみつのをとき〻しよりつね
にわすれす

いはにふれ

五 たかやまにいてくろみつのいはにふれわれてそ思ふいもに
あはぬよは

あめふれはたきつやまかはいはにふれきみかくたかん心は
もたし

やましたとよみゆくみつの

十二 かみやまのやましたとよみゆく水のみをしたへすはのちの
わかつま

はやみはやせ

十一 はつせかははやみはやせをむすひあけてあかすやいもとと
ひしきみかも

みあはさかまきゆくみつ　水阿和逆纒。

この川のみあはさかまき行水のとはかへらし思ひそめたり

さらひゆく　障良比遊水之。

万四 ひとつせになみさへさらひゆくみつののちにそあはんいも（ま）
（万葉）にあらすとも

さ〻らみつ

をとなしのやまのしたゆくさゝらみつあなかまわれも思ふ
心あり
わすれみつ　忘水也。
のなかなとにしりもさためぬ水をいふ。またほそくなかるゝみつをいふ。
うたにはたえ〲になとよめり。
ましみつ
せきいるゝ水をいふ。
有二説。(一ハ眞清水。一ハ天之淸水云々。)
イ重之
足　也
わかもとのいさらゐかはのましみつのましてそ思ふきみひとりをは
このいさらゐかはといふ事は人のしらぬ事なり。秘事なり。ゆふたちなとに。もしはにはかにあめふりて。にはのみつなとのまさりて。かとよりなかれいつるをいふ也。それをこのころの歌仙。いぬかみのとこのやまなるいさらかはいさとこたへてわかなもらすなといふ歌の。いさらをかはなりとありけるを。人々わらはるとかや。これはいさやをかはなり。くはしくはよしなし。
たきつせ　たきるをもいふなり。
をとはかはせきいれておとすたきつせに人の心の見えもするかな
本云。みつねか歌云。いせか歌とこそ後撰にはあれ。
氷
うすらひ　うすこほりといふなるへし。
万 さほかはにこほりわたれるうすらひのうすきおもひをわかおもはなくに
たるみのみつ
いのちさえひさしきせしもいはそゝくたるみの水をむすひてのみつ
この歌萬葉集攝津國作とそ。
たるひ　こほりのゝきなとよりさかりたるをいふ。
萬葉集云。　　志貴王子
石そゝくたるひのうへのさわらひのもえいつるはるに成にけるかな
岩そゝくとは。いはのうへにみつのかゝりたるをいふ。たるひとは。その水のこほりたるをいふ。それかそはよりさはらひおひいつ。さわらひとはおさなきはらひをいふ。もえいつるとは木草のもえいつるをいふ。或説云。たるひとは近江國甲賀郡にあるところのなをいふ。そのところにはたるひさかる事あり。わらひもとくおふるにやあらん。此說可思。

いはそゝくきしのうらはによるなみのへにきよすれはとのし出てん

万二
いはそゝくたるひの水のはしきやしきみにこふらくわか心から

沼

かくれぬ

いはかきぬま

万十三
あをやきのいはかきぬまのみこもりにこひやわたらんあふよしもなみ

こもりぬ

万十二
こもりぬのしたにはこひんいちしろく人のしるへくなけきせめやも

みぬまとよめり。

十九
(万葉)
おほきみはかみにしませはみつとりのすかたみぬまをすかたとなしつ

江

あしまえとよめり。

本ノ

うたかた　あめのたまりてなまりのやうになるを云。

にはたつみ

万
いとおほくふらぬものゆへにはたつみいたくなゆきそ人のみろへく

にはたつみこのしたかくれなかれすはうたかたを猶はなと見ましや

貫之はこの歌をそ返〲かむしける。

おちたきつかはせになひくうたかたの思はさらめやこひしき物を

にわたつみ見もあへすきゆるうたかたのあはれかなしきあめのしたかな

おもひかはたえすなかるゝみつのあはのうたかた人にあはてきえめや

後
ふりやめはあとたに見えぬうたかたのきえてはかなきよをたのむかな

うたかたとは人をもいふにや。

十七
(万葉)
あまさかるひなにあるわれをうたかたもひもときさけておほすらめや

みつのあや　みつのおもてにこさめなとのふりかゝりたるか。ものゝ文ににたるをいふ。

水のおもにあやをりかくるはるさめややまのみとりをなへてそむらん

そふ　さはのやうなるところをいふ。

金葉にさはなり。そふ同傳也。

君かためやまたのそふにえくつむとゆきけの水にもすそぬらしつ

萬葉集に澤字をそふとよめり。

やまのゐ　山井也。山の中にいてたるなり。

[十六]あさか山かけさへみゆる山の井のあさき心をわかおもはなくに

この歌はかつらきの王をみちのくにゝつかはしゝ時。くにのかみのまうけ事をろそかなりとて。心ゆかぬさまに見えければ。さきのうねめなりける女に。左の手には盃をもたせ。右の手には水をもたせて。王のひさにとりて。このうたを詠しければ。王の心ゆきてひねもすにあそひけると。萬葉集にみえたるなり。

あふさかのせきにて　貫之

むすふてのしつくにゝこる山の井のあかても人にわかれぬるかな

やまの井の水のすくなきは。むすひてのむにゝこりて。つきにえのますなりぬれはとてよむなり。

いは井　磐井也。石の中よりいつるみつなり。

まつかけのいは井の水をむすひあけてなつなきとしと思ひけるかな

いた井　板井也。いたをつゝにしたるゐ也。

我やとのいた井のし水さととをみ人しくまねはみくさゐにけり

みかくれて　水にかくれてといふ事也。

はつせかは

長歌

[十三]隱來之長谷川之

隱口のはつせをとめかてにまけるたまはみたれてありと[三]いはしや

[七]隱口のはつせのやまのやまきはに

[七]隱口のはつせのやまのけふりたち

[十三]隱口のはつせの山にてる月は

己母里久乃泊瀬河――

されは猶[本]こもりくといふへきなめり。

かはと

[万]ちとりなくさほのかはとのせをひろみうちはしわたすなかくとおもへは

[万四]ちとりなくさほのかはとのきよきせにこまうちかはしいつかかよはん

ほそたにかは　備中備後國のなかにあり。

まかねふくきひの中山おひにせる細谷川のをとのさやけさ

まかねとはくろかねをいふ。

波
如本
下野諸人　しらなみのよする
廿 しらなみのよするはまへにわかれなはいともすへなみやた
ひそてふる
しらゆふはな　白木綿花。
七 はつせかはしらゆふ花におちたきつせをさやけしと見にこ
し我を
六 やまたかみしらゆふ花におちたきつなつみのかはとみれと
あかぬかも
六 やまたかみしらゆふ花におちたきつたきのからちは見れと
あかぬかも
あふさかをうちてゝみれはあふみのうみしらゆふはなにな
みたちわたる
いほへなみ　五百重。
おほきみはいほへましませあま雲のいほへのしたにかくれ
たまひぬ
万四 みさこよひあらいそによするいほへなみたちてもゐてもわ
かおもふきみ
いそもとゆすりたつなみ
廿 おほよとのいそもとゆすりたつなみのよらんとおもへるは
まのきよけく

いそもとゝろによするなみ
四 伊勢の海のいそもとゝろによするなみかしこき人にこひわ
たるかも
いそは
十二 わたつみのおきはおそろしいそはよりこきめくりませつき
かへぬとも
七 しほはやみいそはにをれはかつきするあまとや見けんつり
もせなくに
いけにしらなみいそなとよめり。
きみかいゑのいけにしらなみいそによせしはしはすともあ
かぬきみかな　　家持
海部
あさけのなき　いそのうら
七 なこのうみあさけのなきにけふもかもいそのうらわにみた
れてあらめ
わたつみ　海若。うみをいふ。
わたのそこ　綿底。
七 わたのそこをきこくふれをへによせん風もふかぬかなみた
ゝすして
うなはら　うみをいふ。

万五 うなはらのおきゆくふねをかへれとかひれふらしけんまつらさよひめ

あるみ　あらうみといふか。

五 おほふねをあるみにいたしいますきみつゝむ事なくはやかへりませ

あをうなはら

家　持

廿 あをうなはらかせなみなひきゆくさくさつゝむ事なくふねははやけん

ひちきのなた　比治奇乃奈太。

十七 きのふこそふなてはせしかいさとを(いさなとり(万葉))ひちきのなたをけふ見つるかな

おほとものみつのはま

おほとものみつのはまにあるうつせかひいへにあるいもをわすれておもふ

やほかゆくはまのまさと

やほかゆくはまのまさこもわかとにあにあさらめやをきつしまもり

さゝなみのしかつのうら

七 さゝなみのしかつのうらのふなのりにのりにしこゝろつれにわすれす

今案。近江國志賀郡さゝなみやまあり。しかのさゝなみといふへきを。さゝなみやしかのといひつたへるは。あるやうあるにやあらん。

しほのはやひ

なこのうみにしほのはやひはあさりしにいてんとたつはいまはなくなる

しほさいに

しほさいにいと(ら)このしまにさすそね(へこくふねに(万葉))といものろらんやあらきしまわを

あまのともしひ

十五 やまのはに月かたふけはいさりするあまのともし火おきになつそふ

七 きのくにのさかひのうらにいてみれはあまのともすひなみまよりみゆ

十一 すみよしのつもりのあまのうち(け歟)のをのうかひかゆかんこひ〱あらすは

あひきする　網引爲。

七 あひきするあまとや見えんあきのうらのきよきあらいそをみにこし我を

三 我きぬを人になきせそあひきするなにはおとこのてにはあるとも

あこ　如前。

かこ　ふねこくものなり。水手。
七 なこのうみをあまこきくれはうみなかにしかもなくなるあはれそのかこ
すまのあまのうらこくふねのこきたれてなみのたちゐにきみそこひしき
やかたをのしるしのすゝのをときゝてこゝろほそくやきゝすなくらん
やまさとのかけひの水はいつよりもふゆのねさめのともとこそなれ
やまさとのそともかくれのしつのやにかけひのみつをまかせつるかな
うちはへてものおもひをれはうらふれてたまきはろみともなりぬへきかな

綺語抄中

神仙部

かみかせ　神の御めくみをいふなり。
かみかせや伊勢のはまおきおりふせてたひねやすらんあらきはまへに
みもすそかは　伊勢太神宮の御まへにあるかは也。
通宗朝臣つくしの安樂寺にて。神風とよみたりけるを人わらひけり。
はまをきとはあしをいふ。
万一 やまのへの三井をみかへり神風のいせのをとめこあひみつるかな
たつたひめ　あきをそむる神なり。
たつたひめいかなるかみにあれはかは秋のこのはをちゝにそむらん
たつたひこ　龍田彦。
九 わかゆきはなぬかはすきしたつたひこゆめこのはなを風にちらすな
さほひめ　春をそむるかみなり。

人　丸

さほひめのいとそめかくるあをやきをふきなみたりそ春の山かせ

十二 はふりこかいはふみむろのますかゝみかけこそしのふあふ人ことに

はもりのかみ　はをもる神といふなり。

後 ならのはのはもりの神もましけるをしらてそおりしたゝりなすなよ

かはやしろ　かはのうへにあるやしろを云。
かものたゝすのやしろをいふとも。

貫之歌云。

かはやしろしのにおりはへほすころもいかにほせはかなぬかひさらん

ある人云。かはのかみをいふと云々。
しのにをりはへほすとは。人のぬのなとをゝりかけてほすをみて。かはのかみのまねひて。きぬをかは中にほすか。河なれはまたひぬか。されはいかに／＼ほせはかといふなるへし。

ゆく水のうへにいはへるかはやしろかみなひたかくあそふころかな

やまかつら

古詩 まきもくのあなしのやまの山人と人の見るへくやまかつらせよ

山かつらとは古歌枕云。あけほのにたつ雲をいふ。又云。かみまつらんとて。しゐしはおりにゆく人のゆふかけたるをいふ。

文時歌云。

ひほろきは神のこゝろにうけつらしひらのたかねにやまかつらせり

この歌を源順つてにきゝて。なにとよまれたるそとおほめきけるを。又文時きゝて順のぬしみし（本ノ）みし／＼とそうなつきける。

あきつはのそてふるいも　あきつはとは蜻。（ゑんはなり。）

あきつはのそてふるいもをたまくしけおく（おくにおもふをみたまへ（万葉））もをもこそみたへ我きみ

湯原王宴序云。本ノマヽ

ひもふる　そてふるをいふ。

万五 うなはらのおきゆくふねをかへれとやひれふらしけんまつらさよひめ

此歌は遣唐使のめの渡海のいのりに松浦明神にまひて。

菅大臣

此歌尋加 このたひはぬさもとりあへすたむけやまもみちのにしき神

のまに〱

みそき　はらへをいふなり。

　禊（はらへみそき。）豐禊。（とよのみそき。）

みそきして思事をそいのりつるやをよろつよのかみのまに〱

　まに〱とはこゝろのまに〱といふなり。

とよのみそき　おほやけの御はらへなとをいふ。

あまたみしとよのみそきのもろ人のきみしも物をおもはするかな

さはへなす　これはちいさきはへのあつまりてなくこゑなん。いかつちのなるににたりといふ心なり。

　長能歌云。

さはへなすあらふる神もをしなへてけふはなこしと人はいふなり

　衆蚊成雷といふ心なり。

なこしとは萬葉集云。わこしのはらへとて。あしき神（らイ）をなこむるはらへ也。

ゆふたゝみ

ゆふたゝみてにとりもちてかくたにもあれはあれなんきみにはあけぬかも

（木綿疊手取持而如此谷母吾波乞嘗君目不相鴨）

仙室を　あしたつ。龍門。仙家。

あしたつにのりてかよへるやとなれはあとたに人のみえぬなりけり

　仙人はつるにのるといふ事のあるなり。

遊於松浦河序

余以暫往松浦之縣逍遙。聊臨玉島之潭遊覽。忽値釣魚女子等也。花容無雙。光儀無匹。開柳葉於眉中。發桃花於頰上。意氣凌雲。風流絶世。僕問曰。誰鄉誰家兒等。若疑神仙者乎。娘等皆咲荅曰。兒等者魚夫之舍兒。草菴之微者也。無鄉無家。何足稱云。唯性便水。復心樂山。或臨洛浦而徒羨玉魚。乍臥巫峽以空望烟霞。今以邂逅相遇貴客。不勝感應。輙陳歎曲。而今而後豈可非偕老哉。下官對曰。唯唯今敬奉芳命。于時日落山西。驪馬將去。遂申懷抱。贈詠歌曰。

五 あさりするあまのこともと人はいへとみるにしられぬうま人のこ

　答

五 たましまのこのかはかみにいへはあれときみをやさしみあらはさすありし

蓬客更贈歌三首

五 まつらかは河のせはひ（ひかり〔万葉〕）もあゆつるとたゝせるいもかものすそぬれぬ

まつらなるたましまかはにあゆつるとたゝせるこらかいへちしらすも
とをつ人まつらのかはにわかゆつるいもか袂をわれこそまかめ

娘子更報歌三首

五 わかゆつるまつらのかはのかはなみのなみにおもはゝわれこひめやも
五 われされはわきへのさとのかはとにはあゆこさはしるきみまちかてに
五 まつら河なゝせのよとはよとむとも我はよとますきみをしまたん
五 まつら河かはのせはやみくれなゐのものすそぬれてあゆかつるらん
五 人なみのみらんまつらのたましまを見すてや我にこひつゝをらん
五 まつらかはたましまの浦にわかあゆつるいもらをみらん人のともしき

和松浦仙謌　　山上憶良

きみをまつまつらのうらのをとめこはとこよの國のあまおとめかも
こゝろさしふかうのさとにをきたらははこやのやまをゆきてみましを

この歌は萬葉集の歌也。ふかうといふは无何有といふとなり。はこやは藐姑射といふとなり。ともに仙人の住所なり。

をのゝえくたす

この歌は晋王質といひしもの ゝ仙家にいたりて。琴を弾をきゝけるほとに。けんしりうたけてゐたりける。をのなん柄くちにけるといふとなり。

たちぬはぬきぬきし人もあるものをなにやまひめのぬのさらすらん

この歌は伊勢か龍門にてよめるなり。仙人衣裳奇（竒イ）みてなとよめり。

仙人のきぬはぬひめのなきなり。

浦島子玉篋

傳云。みつのえのうらしまのこかめをつりけるか。化して美女になりにけり。あひかたらひて蓬萊にいたりて。めをとことなりて。後このうらしまのこ。わか本國へまかりてこんといひけれは。蓬萊の神女。あなかしこあくなといひて。はこのちいさきをとらせてをくりたりけり。わかもとすみし所とおほしき所にきてみれは。ありしにもあらす。やまも河となり河も山となり。ありし木むらなく。まして

さとゝといへは。ありし所ともなかりけれは。人によりてうらしまのことといひしものゝすみかはいつこそととひけれは。その人はつたへきけは。此四五百年のさきにかめつりて。やかてうせにけりとこそきけ。をのれらはその七世のむまこなりといひけれは。いとあさましと思ひて。さてもこのはこはなにのいりたれは。あなかしこあくなとはいひしそと。おほつかなく思ひてあけたりけれは。あかき雲のやうなるものそたちのほりにける。かゝるほとに我身はくちせまりて。やかてたちいにけり。みのおひをこめたりけるにやあらん。それを本文にて中務よめるなり。

なつのよはうらしまのこかはこなれやはかなくあけてくやしかるらん

又日本紀には。雄畧天皇御時。丹波國余社郡人水江浦島子釣龜。化爲美女。到仙宮云々。今案。余社郡は丹後國也。丹後國は本丹波國也。元明天皇御時。始分丹波五ヶ郡被成丹後國也。然者丹波國余社郡とある宜可然。又萬葉集には。つのくにのすみのえとあるは何事哉。委可尋。又傳には赤雲とあり。萬葉集長歌には しら雲となりて のほりにけりとあり。異說可尋。在下器部。

人倫部

すへらき　おほやけを申。

むなしきふね　太上天皇を申。

すみよしの神はあはれと思ふらんむなしきふねをさしてきつれは

もゝしき　内裏をいふ。

もゝしきの

うちひさすみやこ

廿 うちひさすみやこの人に(万葉)もつけまくはみしひのとくありとつけこそ

さ(す歟)れたけのおほみや人

六 さすたけのおほみや人はこゝとすむさほのやまをは思ふやもきみ

ひさかたのみやこ

ひさかたのみやこをきてくさまくらたひゆくきみをいつとかまたん

みかは　内裏のやりみつなり。

あやしくもところたかへに見ゆるかなみかはにさけるしもつけのはな

あをによし　ならのみやこなり。

万一 あをによしならのみやこはよろつよにわれもかよはんわすると思ふな

万三 あをによしならのみやこにさくはなのにほふかとくいまさ

かりなり
あふみのあれたるみやをみて　人丸
さゝなみやしかのからさききたれともおほみや人のふれな
ちかれつ
故郷
さゝなみやしかのみやこはなのみしてかすみたなひきみや
きもりなし
しかのやまとはなからの山をいふ。みやきとはみやまき
をいふ。(无謂。宮木といふ歟。)
うちのみやこ
額田王歌云。
万一 あきのゝのおはなかりふきやとれりしうちのみやこのかり
いほしそ思ふ

官位部

もろゆき　宰相をいふ。
よしいき　左右衞門をいふ。左右兵衞をいふ。
新田部貞範自兵衞府生遷任近衞將曹歌云。
よしいきのもりのわたりをうちすきてみかさの山にわれは
きにけり
みかさやま　中少將をいふ。

人倫部

かそいろは　父母也。
かそとはちゝをいふ。いろとは母をいふ。
かそいろはいかにあはれとおもふらんみとせになりぬあし
たゝすして
此歌は江相公の日本紀竟宴に。第一卷の伊弉諾伊弉册尊
第三蛭子の事をよむ也。
たらちね　ちゝをいふ。
但萬葉集たらちねのはゝ云々。
たらちめとは　はゝをいふ。長歌。
つねひと　都禰比登。
わかせこかとゝるなへにつねひとのいふなけきしもいやし
きますも
妻(ツマ) めをいふ。論ある事也。おとこをもいふにやあらん。後
撰に人のおとこに侍りけるをあひしりてつかはしける。
右近。ありはらのするかたかむすめ。からころもかけてた
のまぬ時そなき人のつまとはおもふものから。
万三 とをつ人まつらさよひめつまこひにひれふりしよりおへる
やまのな
佐夫流(サフル) 遊行女婦之字也　萬葉第十八長歌云。具之。
やすみしる
おしへやし　おとこをいふ。

万 おしへやしこひしとおもへと秋風のさむくふくよはきみを
しそ思ふ
おしへやしあはぬ君ゆへいたつらにこのかはのせにたまも
ぬらしつ
はしけやし　をんなをいふ。
万 はしけやしわかいへのけもゝもとしけみはなのみさきてな
らさらめやも
はしけやしあはぬこゆへにいたつらにこのかはのせにもす
そぬらしつ
やまかはのそきへをとをみはしきよし（波之吉余之）いもをあひみすかく
やなけかん
波之吉與思
万八 はしきよしいもかすかたをみすひさにひなにしをれはあれ
こひにけり
いも　めをいふ。
いつくしきいもを思ふとかすみたつはるひもくれにこひわ
たるかな
をとめ　小女也。　まひゝめをいふ。
五節のまひひめをみて　むねさた
あまつ風くものかよひちふきとちよをとめのすかたしはし
とゝめん

さくさめのとし
或人云。前（赤奥）奢若歳云々。　丑歳名也。
或人云。丙寅歳云々。
或人云。しうとめの名也。　後々同之。
或人云。さくさめのしうとめをいふ。
能因抄にも如之。
愚案。作号歳歟。酉歳名也。
なにはおとこ
万四 わかきぬを人になきせそあひきするなにはをとこのてには
ふるとも
あつまをとこ
万 とりかなくあつまおとこのつまわかれかなしくありけんと
しのをなかみ
なには人
万 なには人あしひたくやはすゝたれてをのかつまこそとこめ
つらしき
みやこかた人
十八 こそのはるあひみしまゝにけふみれはをもやめつらしみや
こかた人
うなゐこ　垂髪。　謂童子也。
ほとゝきすなちかへりなけうなゐこかうちたれかみのさみ

たれのそら

あまをとめこ　萬葉云。海女。

風をいたみよせくるなみにあさりするあまをとめこかものすそぬれぬ

あつまをんな

万 にはにたつあさてかりほししきしのふあつまをんなをわすれ給ふな

からちめ

からちめのてそめのいとをくりかへしかたいとにありともたえんとおもふな

やまたつ。山に木つくるものをいふ。

衣通姫

きみゆきてけなかくなりぬやまたつのむかへにゆかんまか(まつに)は(万葉)りにはまたし

山多(古歟)賓乃者。是造木者云々。

松浦佐用嬪面　まつらさよひめ。

序云。大伴佐提比古郎子。特被朝命奉使藩國。艤棹言歸。稍赴蒼海。妾也松浦(佐用嬪面。)嗟此別易。歎彼會難。即登高山之嶺。遙望離去之船。悵然斷肝。默然銷魂。遂脫領巾麾之。傍者莫不流涕。因號此山曰領巾麾之嶺也。仍作歌曰。

とをつ人まつらさよひめつまこひにひれふりしよりおへる山の名

そみかくた　行者をいふ也。

長能歌云。

しらかしのしらぬやまちをそみかくたたかねのつゝきふみやならせる

はつせ女　泊瀬。

六 はつせめのつくるゆふはなみよしのゝたきのみなはにさきゝたらんや

たをやめ　行婦。婇女。

たをやめのそてふきかへすあすか風みやこをとをみいたつらにふく

婇女　うねこめ。或本。

あつまをんな

四 にはにおふるあさてかりほししきしのふあつまをんなをわすれたまふな

わきもこ　めをいふ。

拾 わきもこかあかものすそをしめぬらんけふのこさめにわれをぬらすな

万七 とをるへくあめはなふりそわきもこかかたみのきぬをわかしたにきて

人　丸

拾 わきもこかねくたれかみをさるさはのいけのたまもとみるそかなしき

おほなこ　萬葉集云。女郎名也。

二 おほなこのをちかたのへにかるくさのつかのあひたもわれわすれめや

たはれを

うなはらのとをきわたりをたはれをのあそふをんなとなつさひそこし

せこ　おとこをいふ。

わかせこかふりさけみつゝなけくらんきよき月よにくもはたなひき

せな　おとこをいふ也。

あふくまにきりたちわたりあけねともせなをはやらしまてはすへなし

ますらを　可尋。〔左勘〕

萬葉には大夫をますらをとよめり。

ますらをかふしゐなけきてつくりたる山のかつらはいもか爲かも

ますらをかゝ弓はとりたてゝいつるやをのちみん人はかたりつけなん

〔下勘〕大夫　幼婦

万四 ますらをもかくこひけるをたをやめのこふるこゝろにならへらやめも

ますらをのうつしこゝろも我はなしよるひるわかすこひしわたれは

ますらたけを　麻須良多家乎。

十九 からくにゝゆきたらはしてかへりこんますらたけをにみきたてまつる、みてこ(万葉下同)

やすらを

内大臣藤卿娶釆女安見兒時云。

我はもややすらをみたりみなひとのみかてにすともやすらをみたり

あそひを　たはれを

石川女郎贈大伴宿禰田主歌

万 あそひをとわれはきけるをやとかさすわれをかへせりをそのたはれを

此歌は大伴田主はかたちよりえんにて。みる人きくをんなこれを思ひかけたり。石川女郎その心さしありて。かなひかたき事をなけきて。はかり事をなして。あやしきをんなのすかたにて。しのひてよるかのねたる所へゆきて。ひとるものをもちて。しのひやかにかとをたゝきけれは。た

そととふに。このひんかしのまつしき女のひとりにまう
てきたるそといふに。くらくてそのかたちもみさりけれ
は。火をとらせ(ち脱歟)てかへしてけり。あけてのちはかり事のか
なはぬとをはて。かくよみてつかはせるといへり。

大伴田主報贈哥

あそひをにわれはありけりやとかさすかへせるわれをそあ
そひをにはあれ

ものゝふ

ものゝふのいつさいるさにしをりせるとや〳〵とりのむや
〳〵のせき

しほりとは木をおりかけてしるしにする也。

とや〳〵とり　一云。
むや〳〵せき　一云。

からしを

猿丸

からしをのたつやのさきにたつしかもいとわかとくものは
おもはし

かつしかのまゝのてこ

十四 かつしかのまゝのてこなをまことかもわれによすとて(ふ(万葉))まゝ
のてこなを

十四 かつしかのまゝのてこなかありしはか(かは(万葉))まのゝをすひになみ

もとゝろに

いしゐのてこ

十四 ひとみなのとはたゆともはにしなのいしゐのてこかとなた
えそね

しつ　いやしきものをいふ。

やまかつ　もの思ひしらぬものをいふ。

四條大納言歌枕。

山かつと人はいへともほとゝきす

たみ

みやきひくあつさのそまにたつ民のやむときもなくこひわ
たるかな

人行部

みとのまくはひ　夫婦あひあふとを云也。

古歌云。

みとのまくはひまてはおもはす

ぬくくつかさなりてはわかめ。人にあふといふ事にてか
くよむ。

ぬくくつのかさなるとのかさなれはいもりのしるし今はあ
らしな

ゐもりのしるし

ゐもりのちを女のまへにつけたるに。おとこせぬかきり

は。そのちのあらへともおちぬか。おとこしつれはおつるとそ。

つと　土産也。

にしこき　あまたの論あり。

一説には。こひよのよはひする時に。けさうふみにするなり。

一説には。新千束をこりて女の門にをく也。千束にみたぬかきりはあはぬ也とそいふ。

にしこきのかすはちつかになりぬらんいつかみやこのうちは見るへき

一説には。にしきゝといふ也。

木を一尺はかりにきりて。にしきまたらにいろとりて。女のかとにたつる也。それをあはんと思ふにはとりいれ。あはんと思はぬにはとりいれぬ也。

能因歌云。

にしきゝはたてなからこそくちにけれけふのほそぬのむねあはしとや

一説にはにしこきといふ木をはいにやきてそめ。(門歟)内にさせは。あいあふといふ事にて。いはひによせて。けさうの事にする也。

から人の舟をうかへて遊ひけるけふそわかせこはなかつらせよ

此歌は三月三日曲水宴を家持の卿のよめるなり。

いやこむと

わきもこかひたひにおふる雙六のことひのうしのくらのうへのかさ

うらふれをれは

十 君にこひうらふれをれはしきのゝのあきはきしのきさを鹿なくも

あきつはのそてふる　ゑんはのはを云。秋津羽そてふる。

三 あきつはのそてふるいもをたまくしけおくに思ふをみ給へわかきみ

せりつみし

せりつみしむかしの人もわかとくこゝろにものやかなはさりけん

この歌は。むかしあさましかりし山のをのこの。殿はらのみなみおもてにて掃除なとせしに。思ひかけすみすを風のふきあけたりけるに。うちにいつくしきむすめのせりをくひてありけるをみて。わりなく心さしありけり。思へともかひなくてありけり。人しれすめしゝせりをつみありきけれど。この生さし心にかなはてやみにけり。それをかくよめる。

のもりのかゝみ

昔曹文と云ける人ありけり。おほやけにつかまつりて。仰をうけ給はりてゐ中へくたりけるか。かさゝきのかたをうらにいつけたりける。かゝみを中よりわりて。かさゝきのはねをこなたあなたにつけて。かた〳〵をはめにとらせ。いまかた〳〵をはをのれもちて。女のおとこせん事はこのかゝみにてしらん。我も女せんことは。此かゝみにてしれとちきりて。女を京にをきてくたりたりけるに。まつをんなのおとこをしたりけれは。このかさゝきのかたはねつきたるかゝみかはるかにとひて。曹文かもたりけるかゝみにつきてけり。それを見て。ちきりたかへて。おとこしてけりとなんしりにける。

日本紀に委はあり。

ねらひ　鹿をまつをいふ。まちともいふ。

萬葉集云。

ねらひするしつのをのこのしらめたるやさしくものを思ふころ哉

しらめたるとはもたると云と云々。可尋。やさしくとはやならひにえひらといふ物をいふ。やをさせはやさしとそへたる也。

夏かり　なつかりをするをいふ。

なつかりのたまえの蘆をふみしたきむれゐる鳥のたつ空そなき

或人云。この歌は帯刀先生源重之か歌なり。たまえとは越前國にある所なり。そのくにゝてかりして。たまえのほとりにをりゐて。さけなとたうへて。その時によみたりけるにやあらん。むれゐるとりのたつそらそなきとは。そのこゝろなり。わかるゝをはむらとりといふは。そのこゝろなりとそありける。

ゆくさくさ

万三 しらすけのはの（ま）ゝはきはらゆくさくさ君こそ見らめはの（ま万葉）ゝはきはら

ゆきふれは　ゆきふれはと云なるへし。　行觸也。

くさまくらたひゆく人もゆきふれはにほひぬへくもさけるはきかな

みつはなす　美都煩奈須。

廿 みつはなすかれるみそとはしれゝともなをしれねかひつちとせの命を

むらきも　村肝也。

万四 むらきもの心くたけてかくはかりわかこふらくをしらすやあらん

しつのをたまき　伊勢物語。

いにしへのしつのをたまきくりかへし昔をいまになすよしもかな

人詞部

あしびき　山といはんとて。

いそのかみ　ふるといはんとて。　大和にあり。

いそのかみふるともあめにさはらめやあはんといもにいひてしものを

あつさゆみ　はるといはむとて。をすとも。ひく。

くれたけ　よ。ふし。

しらいと　くる。よる。

さゝかに　いといふ。

すかのね　なかしと。

ちはやふる　かみ。

つかのま　みしかしといふ。

しきしまや　やまと。

たまたれ　みすといふ。

むはたま　よる。くろし。ゆめ。

しきたへ　まくら。そて。いへとも。

たまかつら　たゆといはむとて。

ふくかせの　をと。

からころも　きる。はる。たつ。かされ。

くさまくら　たひといはんとて。

あかねさす　日といはんとて。

おほとものみつ

万四 おほとものみつとはいはしあかねさしてれる月よにたゝにあへりとも

うちはへて

後 ふるさとの山ほとゝきすうちはへてたれかまさるとねをのみそなく

うちはへてれをたきくらすうつせみのむなしきこひもわれはするかな

かす〱に　数々に。

古十三 かす〱におもはぬ人はありといへとしはしもわれはわすられぬかも

古 かす〱にわれをわすれぬものならは山のかすみをあはれとは見よ

古 かす〱におもひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりにこそふれ

うちなひき　わかくろかみ。

天智天皇御歌

ありつゝも君をはまたむうちなひきわかくろかみにしもはをくとも

うちなひき　こゝろは。
万四 いまさらになにをかおもはんうちなひきこゝろはきみによりにしものを
とことは　常不止。
万四 とことはにかよひしきみかつかひこすいまはあらしとたゆたひぬらし
うちはふき
古 さつきまつやまほとゝきすうちはふきまたもなかなんこそのふる聲
猿丸
おりはへて
古 あしひきの山ほとゝきすおりはへてたれかまさるとねをのみそなく
古 あけたてはせみのおりはへなきくらしよるはほたるのもえこそわたれ
ねもころに　ねんころといふ事なり。
こきたれて
古 あけぬとてかへるみちにはこきたれてあめもなみたもふりにこそふれ
よしゑやし
万十四 よしゑやしたゝならねともぬえとりのうらなけきせるつけんころかな
よしゑやしきまさぬ君をなにするからとまぬわれをこひつゝをらん
うつら〳〵
廿 なてしこの花とりもちてうつら〳〵見まくのほしききみにも有かな
うらこひし
むらさきのねはふよこのゝはれの日は（はるぬには（万葉））うらこひしらにうくひすそなく
人丸
わかせこにうらこひすれはあまのかはよふねさしこきかちのをときこゆ
うらかなし
おもやめつらし　於毛夜目都良之。
こそのはるあひみしまゝに今日みれはおもやめつらしみやこかた人
うらめつらし
わかせこかころものすそをふきかへしうらめつらしき秋の初風
うらさひし
むはたまのよるのさむしろひきかへしうらさひしくもたえ

にけるかな
古 きみまさてけふりたえにししほかまのうらさひしくも見え
わたるかな
うらふれて　四條大納言歌枕云。もの思ひてくるしけなるさ
まをいふ。
うらふれてものおもひをれは
ことにいてゝ　ことのはにいてゝといふなり。
人　丸
ことにいてゝいはゝゆゝしみやまかはのたきつ心をせきそ
かねぬる
くちのはに
後 あはれてふことこそつねにくちのはにかゝるやひとのおも
ふてふらん
またまつき　眞玉付。
大伴坂上郎女
万四 またまつきかれこれかねていひはいへとあひてのちこそく
ひはありけれ
たまきはる　二説あり。いのちのきはまるを云。玉切命。
八 たまきはるいのちにむかふこひよりもきみかみふねのかち
からにかも
たまきはるいのちにかふるわかせこをいかにせよとかたひ
にゆくらん
万 かくしのみこひやわたらんたまきはるしらぬいのちをとし（いのちもしらす年をへにつゝ（万葉））
はへに
万六 かくしつゝありくをよみて（あらくをよみそ（万葉））たまきはるみしかきいのちなか
くほりする
万 たゝにあひて見てはのみこそたまきはるいのちにむかふわ
かこひやまめ
ものをほむるときにもよむへし。たまのうてなといふ
さまなるへし。
万一 たまきはるうちのおほのにこまなへてあさふますらんその
くさふちを（ふかぬ（万葉））
たまきはるわかやのうへにたつかすみたちてもゐても君か
まに〳〵
しづたまき　四條大納言歌枕には。いやしき人のたましゐを
いふと云々。可尋。
しつたまきかすにもあらぬいのちもとなとかくはかりわか
こひわたる
この心なるへし。
たまきのかと　萬葉集歌云。
ひと日にはちたひまいりしひむかしのたまきのかとをいり
かてぬかも

たけそかに　多鶏蘇香二。たまさかにと云事にや。
たましきてまたましよりはたけそかにきたるこよひしたのしくおもほゆ
きませ　いませといふ事なり。
わかせこかきませるよひのあき風はおもひのほかにきみかきませる
あやなし　あちきなしといふ事なり。
あやなしかすみたちなかくしそ
ぬく〳〵　つらぬくといふこと也。
あへす　たへすといふこと也。
わひしはた
後 あきかせのふけはさすかにわひしはたよのことはりとおもふものから
なつにまいりて
万四 かくしてやなをやかふらんちかゝらぬみちのあなたをなつにまいりて
はゝ〳〵に
万四 はつ〳〵に人をあひみてあさからん（いかならん）いつれの人にやまたま（日にかさたよそに）たに見む（万葉）
しき〳〵　しきりといふことなり。敷布。
はるさめのしき〳〵ふるにたまかつの山のさくらはいかゝあるらん
しく〳〵に　之久々々二。
廿 いへつとにかひそひろへるはまなみはいやしく〳〵にたかくよすれと
なこのうみをきつゝしらなみしく〳〵におもほえんかもたちわかれなは
はしき
万三 むかしこそよそにも見しかわきもこかおくにとおもへははしきさほやま
万三 はしきかもみこのみことのありかよひみし（みしゝいくちの（万葉））いくめけのみちはあれにけり
ひとことしけし
万 このまにはひと事しけしこむよにもあはんわかせこいまならすとも
しゑや　四恵也。
万四（ね敷） かけてよりひとこと七けくかくしあらはしゑやわかせこおく（おく）きもいか〳〵（もいかにあらめ（万葉））
十 あきはきにこひつくさしとおもへともしゑやあたらしまたあはんやは
もたあり　黙乎之。
万四 なか〳〵にもたもあらましをなにすとかあひみそめけんと

けさらなくに
もとな
万 あひ思はぬひとをやもとなしろたへのそてひくまてになき
のみなくも
家持
さよなかにともよふちとりものおもふとわひたるときそな
きつゝもとな
十五 うるはしとあかおもふいもをおもひつゝゆけはかもとなゆ
きあもかるらん
十二 うらもなくいにしゐきみゆへあさなく〳〵もとなやこひはあ
ふとはなしに
うはへなき　宇波弊无。
湯原王歌云。
万四 うはへなきものかはひとはかくはかりとをきいへちをかへ
すと思へは
万四羽弊无 うはへなきいもにもあるかもかくはかり人の心をつくすと
おもへは
ことのなくさ
これのみそきみにはこふるわかせこかとふといふことはこ
とのなくさそ
へみ　へしといふ事なり。

ひきよせておらはちるへみむめのはな
きこはむ　よきひとのきこはんと云なり。
たえすきこはむうくひすのこゑ
けさ〳〵　あまのかはきりたちわたるけさ〳〵と
仮也 さ　さなへ　さころも　さむしろ　さゝ
さぬるよは
万 たまかつらたえぬものからさぬるよはとしのわたりにたゝ
ひとよのみ
万 たつかなきあしへをさしてとひわたるあなたつ〳〵しひと
りさぬれは
あすか河したにこれるをしらすしてせなことふたりさねて
くやしも
ゐねてこましを
あすか川せくとしりせはあまたよもゐねてこましをせくと
しりせは
おくかなし　奥香无。おほつかなしと云歟。
十二 かすみなくはるのなかれをおくかなくしらぬやまへをこひ
つゝかこむ
おくまへて　奥眞經而。
六 なかとなるおきつかりしまおくまへてわかおもふきみはち
とせにもかも

六 おくまへてわれとおもへるわかせこはちとせいろせありこ（を）（いはとせ（万葉））
せぬかも
おくにおもふ　奥爾念乎。
三 あきつはのそてふるいもをたまくしけおくにおもふを見た
まへわかきみ
三 むかしこそよそにもみしかわきもこかおくにとおもへはは
しきさをやま
さよりはに　催馬樂にこはきかはらのさよりはになとよめる
も。はきの秋風にふかれて。すこしなみよるなり。
たちよきり
たちよきりみるへき人のあれはこそあきのはやしのにしき
しくらめ
けたし
わきもこかあきのまかきを見にゆかはけたしやとよりかへ
しいてむかも（萬歟）
しきしのふ　布𦵚。
藤宇合歌に云。
万四 にはにたつあさてかりほししきしのふあつまをんなをわす
れたまふな
なかなけは　なれかなけはといふ。汝鳴者。
万 なこのうみのかはらのちとりなかなけはわかさほやまのい
もこふらしも
ほとゝきすなかなくさとのあまたあれはなをうとまれぬお（おほかれは或）
もふものから
なみたくましも
いもとこしとしまのさきをかへるさにひとりし見れはなみ
たくましも
けたし
万三 やまぬきはけたしあれともわきもこかゆひてんしめをひと（もり（万葉））
ゝかむやは
まさなくに　いませぬにといふ歟。
万三 見まほしとわかおもふきみもまさなくになにゝかきつらん
如本 むまからしに
はたや
万一 みよしのゝ山のしたかせさむけきにはたやこよひもわかひ
とりねん
なけ　なけのみとしそれやなきといふなり。なしといふ事な
り。
ひねもすにゆきはてすともくひもなしなけのもみちのよる
のひかりか
素性
古 いさけふははるのやまへにまとゐなんちりなはなけの花の

かけかは

けゝらなく　こゝろといふ事なり。　同轉也。

古 かひかれをさやにもみしかけゝらなくよこほりふせるさやの中山

この歌はとほつあふみとするかとのあひたに。さやのなかやまといふ山のあるか。四ケ國にはゝかり（ふイ）て。甲斐のしらねと云山をみせぬなり。よこほりとはにたかに心得つへし。國風俗詞也。如本

けなかし

大さゝきの天皇御歌

万 君かゆきけなかくなりぬやまたつねむかへかゆかむまちにかまたん

すきかて

古 わかやとにさけるふちなみたちかへりすきかてにのみひとりみるらん

古 よやくらきみち（するイ）やまとへるほとゝきすわかやとをのみすきかてになく

古 さくらちるはなのところははるなからゆきそふりつゝきえかてにする

いもかかとゆきすきかてにひちかさのあめもふらなんあまかくれせん

かてに　かつといふ。

あはゆきのたまれはかてにくたけつゝわかものおもひのしけきころかな

たれこめて　おろしこめてといふ也。

駿河内侍

古 たれこめてはるのゆくゑもしらぬまにまちしさくらもうつろひにけり

よたゝなく

古 さみたれのそらもとゝろにほとゝきすなにをうしとかよたゝなくらん

とふらふ

あきのゝに人まつむしのをとすなりわれかとゆきていさとふらはん

とをゝに　萬葉云。十尾ニ。

あきはきのえたもとをゝにをくつゆのけなはけぬともいろにいてめや

おりて見はおちそしぬへきあきはきのえたもとをゝにをける白露

あしひきの山ちもしらすしらかしのえたもとをゝにゆきのふれゝは

しのき　淩。鹿ニ。

八 うたのゝあきはきしのきなくしかのつまこふらくはわれ　猿丸
にまさらし
廿 をみなへしあきはきしのきさをしかのつゆわけなかむたか　家持
まとのゝを

雪ニ。
古 おくやまのすかのねしのきふる雪のけぬかとをいはんこひ
のしけきに

いちしろく
おもひいてゝねにはなくともいちしろく人のしるへくなけ
きすなゆめ

たつきしらす　弓ニ。
あつさゆみすゑのたつきはしらすともこゝろはきみにより　猿丸
こしものを

しかすかに　さすかにといふ。
ふきまかひゆきはふれともしかすかにかすみたなひきはる
はきにけり

すからに　これもさすかにといふなり。
こひしねとするわさならしむはたまのよるはすからにゆめ
に見えつゝ

しふき　謚義欤。
後 たにさむみいまたすたゝぬらくひすのなくこゑしふき人の
すさめぬ

おゆる
後十六 たのまれぬうきよのなかをなけきつゝ日かけに見ゆる身を(ふ欤)　業平
いかにせん

はたら　またらといふ事なり。
よをさむみあさとをあけていてたれはにはもはたらにゆき
ふりにけり

こゝたくの　萬葉云。幾許。
万 ゆふかけにきなくひくらしこゝたくの日ことにきけとあかぬ
こゑかな

ゆきふれは　ゆきふれはといふ心なり。
万十 わかせこかしろたへころもゆきふれはうつりぬへくももみ
つやまかな
万 くさまくらたひゆくひともゆきふれはにほひぬへくもさけ
る花かな

そかひにみゆる　萬葉長歌に云。
十七 おほきみのみことかしこみおほそらをそかひに見つゝみや

こへのほる
いてゝ見つゝ　いてゝみるといふなるへし。
十二 あさな〳〵つくしのかたをいてゝみつゝなきにわれなくい
ともすへなみ
こゝろもしのに　巳許呂母之努尒。
二十 むめのはなかをからはしみとをけれは心もしのに君をしそ
思ふ
八 ゆふつくよこゝろもしのにしらつゆのをくこのにはにきり
〳〵すなく
三 あふみのうみゆふなみちとりなかなけは心もしのにむかし
おもほゆ
むはひて
ゆきのいろをうはひてさけるむめの花いまさかりなりみん
人もかも
たくふ
古 はなのかをかせのたよりにたくへてやうくひすさそふしる
へにはやる
ましめつらし
万十 すみよしのさとにこしかははなはなのましめつらしみ君に
あへるかも
おもやめつらし

十八 こそのはるあひみしまゝにけふみれはおもやめつらしみや
こかたひと
かたまつ
うくひすのいまはなかむとかたまてはかすみたなひきつき
はへにつゝ
きみをつかひをかたまちかてらとよめり。
しみゝ
十二 わすれくさかきもしみみにおふれともおにのしこくさなを
おひにけり
もゝにちに　百尒千尒。
もゝにちに人はいへともつきくさのうつろふこゝろわれも
ためやも
おくまへて　奥眞經而。
六 おくまへてわれとおもへるわかせこは花と色と（ちとせいはとせ(万葉)）やありこせ
ぬかも
六 なかとなるおきつかりしまおくまへてわかおもふきみはち
とせにもかも
そきへ
十九 あまくものそきへのきはみわかおもへるきみちかれ（に歎）なむ日
はちかつきぬ
十七 やまかはのそきへをよしみはしきよしいもをあひみすかく

やなけかん
たえぬとに　たまかつら。
たまかつらたえぬものからさぬるよはとしのわたりにたゝひとよのみ
なかきことに　すかのね。たくなは。山とりのお。
よそなるとに　あまくも。　あさくらやま。
さにつらふ　長歌に云。
さにつらふきみかみとあか

居處部

くろきのやには
いたふきのくろ木のやにはやまちかしあすもとりてはもてまいりなん
しきたへのいへ
万 とゝめえぬいもにしあれはしきたへのいへよりいてゝくもかくれにき
ふたさやのいへ　二鞘之家。
万四 ひととをしけみやきみをふたさやのいへをへたてゝこひつゝをらん
きのまろとの
筑前國にあるなり。ひとのおほしきとはいひ。あるはこたへなとすることゝろなり。木をまろにしてつくりたるなり。

天智天皇四　時親王歌云。
あさくらやきのまろとのにわれをれはなのりをしつゝゆくはたかこそ
あさちはらぬしなきやとの
なにはめのあしひたくやはすゝたれとをのかつまこそとこめつらなれ
すゝのしのや　すゝといふたけをしてふきたる也。
ほとゝきすとこめつらなるとそなききく事かたきしつのしのやは
ふせや　あやしき屋をいふ。
しつのふせやなとよめり。
或人云。ものをいふ。有論。
俊頼朝臣
よもすからふせやのひまのしろむまておきのかれはにとの葉をそきく
たこのふせやともよめり。
あまのふせやともよめり。
あしかき
十一 ひとめもるあしかきこしにわきもこかあひみしさきにとそ
十二 さたおほき
十三 あしかきのすゑかきわけて君こゆと人になつけそことはたな

しり
くまと
あしかきのくまとにたちてわきもこかそてもしほゝになき　上總防人
しそもはゆ

財貨部

錦
たまのをといふ事は。かた〱によみたり。
たゆ。なかし。みしかし。みたる。
十一 いきのをにおもへはくるしたまのをのたえてみたるなしら
はしるとも
たまのをのたえてあることひのみたれなはしなまくのみそま
たもあはすして
かたいともてぬきたるたまのをゝよはみみたれやしなむ人
のしろへく
あひたなし
たまのをのあひたもをかす見まほしみわかおもふいもはい
へとをさかる
なかし
きみにあはて久しくなりぬたまのをのなかきいのちのをな
かくもなし
しぬるいのちいきもやすると心見にたまのをはかりあはん
といはなむ
をくるまのにしき　小車錦也。高名のにしきの名也。
をくるまのにしきのひもをときたれてあまたにもせぬきみ
ひとりなり
ひもとはしたひもなり。はかまのこしをいふ。
しのふへしむすひもあへすをくるまのよひ〱ことにとく
るしたひも
よるのにしき
古 見る人もなくてちりぬるおく山のもみちはよるのにしき成　貫之
けり
綾
くれはとり
或人云。かゝるあやのあるなり。
後 くれはとりあやにこひしくありしかはふたむらやまもこえ
すなりにき
或人云。むかしこのくに（呉）よりふたむらわたしたろあやの
名なり。これによせて。ふたむらとはよむにやあらん。た
しかなる事なしと云々。或人云。すゝめあやをいふとそ。
この人は後撰を見さりけるにやあらん。いとあやし。これ

は後撰第十一巻の歌也。題におほやけのつかひとしてあつまへまかりける人。あひかたらひてありけるをむなに。やむことなきみちなれはと。いひちきりてまかりたちにけり。のちにあらためらるゝことありて。めしかへされけれは。京にまてきにけり。この女きゝよろこひて。とひにをこせて侍りけれは。みちにて人の心させりける。くれはとりといふあやを。ふたむらつゝみてつかはすとて。いひをくりて侍りけるとかきたるを。ふたむらやまはをはりのくにゝあり。されはうるはしく。あるまゝのことをよみたるにこそあめれ。さかしくこのくによりふたむらをこせたるあやによせてとは心みんするそ。またさもすこしはいはれたり。されともこのたいをみぬさまなれはおとろかれたるなり。これを奈良に宗延といふなる人は。とをたうみにくれはとりといふところにをりたるあやなれは。ところにつけて。あやのなをかくいふなりとこそ。これもさもあらめともいかゝはあらん。可尋也。

今愚案に。順和名に綾字を訓するに。呉越謂小綾也云々。これにつきて心をうるに。呉越唐國國也。むかしこのくによりふたむらわたしたるあやのなといふも。又すゝめあやといふも。いはれたることくこそきけ。呉。くれ訓也。服。はとり訓也。仍くれはとりとは呉國小綾綾歟。宗公遠江國名不審也。

きぬ

つくはねのにゐくはまゆのきぬはあれときみかみけしとあやにしるしも

みけし

布帛

けふのほそぬの

みちのくにのみつきものに。狹布といふ布のあるなり。

みちのくにけふのほそぬのほとせはみむねあひかたきこひもするかな

(万葉)たまかはにさらすてつくりさら〱になにそこの〱心かなしき

衣

ころも

あやめかるたこのさころもぬれ〱もときにあへりと思へらなり

あまのはころも　天人衣也。

つるはみ　四位已上人衣也。

あけのころも　五位衣也。

みとりのころも　六位衣也。

さくらいろのころも　表衣をいふ也。

古 さくらいろに衣はふかくそめてきん花のちりなんのちのかたみに

ふちころも　ふちにてをりたる衣也。又ふくをいふ。

万 すまのあまのしほやききぬのふちころもまとをにしあれはいまたきなれす

からあゐのやしほの衣

十一 からあゐのやしほのころもあさな〳〵なれはすれともいやめつらしも

かさせるころも

万四 わかせこかかさせるころもはりめをちすいりにけらしなわかこゝろそふ

くれなゐのうすそめ衣

十二 くれなゐのうすそめころもあさはかにあひみし人にこふるころかも〔云歟〕

しのひもちすり

みちの國のしのふのこほりにすれるすり也。

古 みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにしわれならなくに　河原左大臣

はきかはなすり　法住寺にもするとかや。

萬葉集云。はきの花をもて衣をするなり。

けさきつるのはらのつゆにわれぬれぬうつりやしぬるはきか花すり　範永朝臣

此歌ときの人わらひけり。しらさりけるにや。

ゆはた　纈也。又結。めゆひをいふなり。

かしはきのゆはたそむてふこむらさきあはむあはしはいの心に

かしはきとは兵衛府をいふなり。

彼府官人のたちのをのいろをいふなり。

ころもしてうつ

月よゝみころもしてうつこゑきけはいそかぬ人もねられさりけり　伊勢大輔

してうつとは。

一義しめ〳〵とうつといふなり。

一義にはしと〳〵とうつといふなり。

一義つちをいふ。

しろたへのそて

古 かすかのゝわかなつみにやしろたへのそてふりはへてひとのゆくらん

いろにはあをく。きに。あかきいろあれとも。しろきを本

とすれは。かくよむ也。
しろたへのそてのわかれ
十二 しろたへのそてのわかれはおしけれとおきもみたれてゆる
しつるかも
十二 しろたへの袖のわかれをかたみにてあらつのはまにやとり
ぬるかも
まそて
十二 まそてもちゆからちはらひきみまつとなりしあひたに月か
たふきぬ
そてとほり
七 あまさかるあまをとめこかそてとほりぬれにしころもほせ
とかはかす
あきつはのそてふる　秋津羽之袖。ゑんはの羽を云とそ。
三 あきつはのそてふるいもをたまくしけおくにおもふをみた
まへわかきみ
袖もしほゝに
廿 あしかきのそまとにたちてわきもこかそてもしほゝになき
しおもほゆ
わかけよそひの袖
十 わかきぬたきみにきせよとほとゝきすわかけよそひのそて
にきゐつゝ

ぬれきぬ　なきなゝり。
をみなへしなきなやたちししらつゆのぬれきぬをしもきて
わたるらん
あつふすまなこやかしたに
九 あつふすまなこやかしたにふせれともいもとしれゝははた
へさむしも
しつはたおひ
いにしへのしつはたおひをゆひたれてわれ(た万葉)てふ人はきみに
まさらし
すそのうちかへ
からころもすそのうちかへあはねともけしきこゝろをあか
おもはなくに
あさてこふすま
十四 にはにたつあさてこふすまこよひたにつまよしこさねあさ
てこふすま
はねかつら　葉根縵。
万四 はねかつらいまするいもをゆめに見てこゝろのうちにこひ　家持贈童女
わたるかも
同 はねかつらいまするいもはなかりしをいかなるいもそこゝ(こひか)
たゝひたる(わひたるイ)

ひたちおひ　こをいふなり。

友則歌云。

あつまちのみちのおくなるひたちおひかとはかりもあひみてしかな

器物

ゆみ

たつかゆみてにとりもちてあさかりに（きみにた丶しぬたなくらの丶に）きみたちいぬのなくらの丶に（万葉）

（み七）いなふちのほそかはやまにたつまゆみゆつかまくのみ人に（まて（万葉））しらえな

（二）みこもかるしなの丶まゆみわかひけはうな（うまひとさひて（万葉））ひとたなきいなといはんかも

ともやたはさみ　得物矢手挟。

あしひきの野にもやまにもみかり人ともやたはさみみたれたる見ゆ

ますらをのともやたはさみたちむかひいるまとかたは見るにさやけし

かさ

わきもこかそてをたのみてまの丶うらのこすけのかさをきすてきにけり

みしますか丶さ

みしますけいまたな丶なりときまたはきすやなりなんみしますか丶さ

あつま　和琴をいふ。

匡衡歌云。

あふさかのせきのあなたをまた見ねはあつまのこともしられさりけり

うらしまのこかはこ

浦島子傳云。蓬萊神女あなかしこあけなといひてあつけたるけを。おほつかなかりて見たりければ。させる物もなかりけり。た丶あかきくもそいてける。

中務歌云。

なつのよはうらしまのこかはこなれやはかなくあけてくやしかるらん

みつのえのうらしまのこかたまくしけあけさらませはいもにあひなまし

みつのえのかたみとおもへはうくひすのはなのくしけはあけてたにみす

みつのえはたつぬへしとそ。

あけてたになに丶かはせんみつのえのうらしまのこをおもひやりつ丶

或人云。奈良僧これは蓬萊よりかへりてあけたるに。むら

さきのくもたちいてぬとこそいひたれ。またみつのえといふ事たつぬへしとあるいかに。つのくになにはにみつのほりえといふところにてもありなん。すみのえのうらしまのこともいひためり。

しつたまき　倭久手纒(父懸)。

万四
しつたまきかすにもあらぬいのちもてなそかくはかりわかこひわたる

五
しつたまきかすにもあらぬ身にはあれとちとせにもかとおもほゆるかな

あやむしろ

ひとりぬるとこくつらめやあやむしろをになるまてにきみをしまたん

さむしろ

古
さむしろにころもかたしきこよひもやわれをまつらんうちのはしひめ

とふのすかこも

十
とふのすかこもとは。こもをとふしまてこめてあみたるなり。ひろくせんとてしたる也。

みちのくのとふのすかこもなゝふにはきみをねさせてみふにわれねん

又云。とふのこほりといふ所におふるこものとふしあるなり。

いなむしろ　みなむしろといふへしとそ。

みつのそこに。やなきのやうなるものゝ。むしろしきたるやうにてあるものなり。

みなむしろかけそひやなきみつゆけはなひきおきふしそのねたえせす

いなむしろ　いねのむしろのやうに見ゆる也。

万
たまほこのみちゆきつかれいなむしろしきてもきみを見むよしもかな

枕

こもまくら

こもまくらあひまきしこもあらはこそよのふくらくもわかおしみせめ

すかまくら

十四
あしからのまのゝこすけのすかまくらあせかまちせんころせたまくら

たまはゝき

正月のはつねの日はひすくさにするに燃燈といふものを云なり。燃燈をはゝきにして。當豈の蠶室(とこからにイ)をはくなり。

初春のはつねのけふのたまはゝきてにとりもちてゆらくたまのを

これを或人のいひしは。はつねの日のまつをいふとこそありしか。さてこそはつねのけふのとはいはれたれ。又眷めとゝこそいへ。佛の御名にこそ燃燈とは申せ。

ねよとのかれらつ

万四 みな人のねよとのかねはうつなれときみをおもへはいねかてにかも

まつらふね　於攝津作。

七 さよふけてほりえこくなるまつらふねかちをとたかしみをはやみかも

まつらふねみたるほり江のみをはやみかちとるまなくおもほゆるかも

みをさかのほる

ほり江よりみをさかのほるかちのをとのまなくそならはこひしかりける

あしにかりつみ

十一(万葉) おほふねにあしにかりつみしみゝにもいもかこゝろにとり〔のりに〕てけるかも

うきおるふね

十四 なかまてにうきおるふねのこきてなはあふことかたしけふにしあらすは

たなゝしをふね　ちいさき船のしりたなゝきを云。

高市黒人羇旅歌云。

よもやまをうちよみれは〔越(万葉)〕かさぬひのしまこきかくるたなゝしをふね

いなふね　いねつみたるふねなり。

古 もかみかは　いてはにあり。

もかみ河のほれはくたるいなふねのいなにはあらすしはしはかりそ

もかみ河は出羽國のたちのまへよりなかれたる川なり。それにたちへいくに。河のあまりはやくて。かまへてさしのほりたれは。かくよめるなり。

あさこくふね

七 あゆけ(万葉)かたしほひにけらしちか(万葉)のうらにあさこく舟もおきにある見ゆ

まかちしけぬき　しらぬといふへきか。

万九 しらさきはさちありとまておほふねのまかちしけぬき〔繁貫〕いまかへりこむ

十五 おほふねにまかちしゝぬき〔之自奴岐〕うなはらをこきてきわたる月ひとおとこ

十五 おほふねにまかちしゝぬきときまつとわれはおもへとつきそへにける

綺語抄下

動物部
植物部

動物部

鳥

うくひすつまをもとむ

十 はるさればつまをもとむるうくひすのこすゑをつたひなきつゝもとな

うくひすのこほれるなみた

古 ゆきのうちに春はきにけりうくひすのこほれるなみたいまやとくらん

おゝりにをゝり　うくひすのなくとよめり。

六 春されはおゝりにをゝりうくひすのなくわりしまにやますかよはせ

うくひすはたによりいつとよめり。

古 うくひすのたによりいつる聲なくははるくるとをいかてしらまし

くたらのゝはきのふるえに春まつとをりしうくひすなきにけらしも

もゝとりのこゑのこほしき

万五 むめのはないまさかりなりもゝ鳥のこゑのこほしき春きたるらし

ひはりあかる

十九 うらうらにてれる春日にひはりあかりこゝろかなしもひとりしおもへは

八 ひはりあかるはる日とさらになりぬれはみやこもみえす霞たなひく

いなおほせとり　或人云。にはゝたゝきをいふとぞ。

古 やまたもるあきのかりほにをくつゆはいなおほせ鳥のなみたなりけり　忠岑

古 わかゝとにいなおほせとりのなくなへにけさふく風にかりはきにけり　猿丸集にあり。

百首中 仲實

あき田かるをしねのひたははへたれといなおほせとりのきなくなるかな

百首中 顯仲

わかかくるかとたのひたにおとろきていなおほせとりのたちやかへらん

百首中 公　實

いたくらのはしをはたれもわたれともいなおほせとりのす
きかてにする

よからす

七 あかつきとよからすなけとこのやまのかみのこすゑはいま
たしつけし

あさからす

あさからすはやくなゝきそわかせこかあさけのすかた見れ
はかなしも

ほとゝきす

ほとゝきすを六月にはよむへからす。たゝし。

一 さつきはてこゑみな月のほとゝきすいまはかきりのねをや
鳴らん

これは五六月とそへたるなり。六月にさりとてよむには
あらす。

本云。うけならひたる人やむことなし。かくのたまひしな
りとそ。

してのたおさ　ほとゝきすをいふ。

いくはくのたをつくれはかほとゝきすしてのたおさとなき
わたるらん

くつてたはらんとなくとよめり。

ほとゝきすとよます

十 たちはなの花ちるさとにかよひなは山ほとゝきすとよませ
んかも

十 ほとゝきすきなきとよませたちはなの花ちるにはをみひと（みんひとや）
やなれて（たれ(万葉)）

ほとゝきすにいもとよめり。

ほとゝきすいもこひかねてよもすからゆくゑもしらすなき
わたるなり

なかなけは　汝鳴は。

あふみのうみゆふなみちとりなかなけはこゝろもしのにむ
かしおもほゆ

ゆふなみちとり　如上。

すたく　潜くゝる。(或人はすむといふとそゝ。四條大納言
歌枕にもすむを云々。)

七 なつそひくうなかみかたのおきつすにとりはすたけと君は
をとせす

この歌の心はのゝしるといふにやあらん。

あしかものすたくいけみつまさるともまけみそかたにわれ
こえんやも

万 にほとりのすたくいけみつ心あらはきみにわか戀心しめさ
ね

おほきみはかみにしあれはみつとりのすたくみぬまをみや
ことなしつ

かはつ

良　暹

後拾 みかくれにすたくかはつのもろこゑにさわきそわたる井出
のうき草

すたくとはさはくといふにやあらん。

ねやのうへにすゝめのこゑそすたくなるいてたちかたにな
りやしぬらん

しかにもよめり。

さをしかのすたくふもとのあきはきは露をくことのかくも
あるかな

ひとにもよみたり。

後 すたきけんむかしの人もなきあとにたゝかけするは秋の夜
の月

はまちとり

はなちとり

万三 しまのみやまなのいけなるはまちとりひとめにこひていけ
にくゝらす

万三 しまのみやいけのおもなるはまちとりあらひなゆきそ君ま
さすとも

かさゝきのゆきあはぬはね

よやさむきころもやうすきかさゝきのゆきあはぬはねに霜
やをくらん

この歌事神祇部にくはしくしるせり。みるへし。

かものはかひ

万 あしへゆくかものはかひに霜ふりてさむきゆふへの人をし
そ思ふ

ともよふちとり

万 さよなかにともよふちとり物おもふとわひたるときになき
つゝもかな

ゆふなみちとりなかなけは

万三 あはのうみゆふなみちとりなかなけはこゝろもしのにむか
しおもほゆ

こゝろもしぬに

なかなけは　汝鳴者。

猿　丸

万三 おふうみのかはらのちとりなかなけはわかさほかはのおも
ほえらくに

右 ほとゝきすなかなくさとのあまたあれはなをうとまれぬお
もふものから

あさとり

万三 あさとりのれのみやなかんわきもこにいまゝたさらんあふ
よしもなし

にはつとり
七 にはつとりかけのたりおのみたれ尾のなかきこゝろもおも
はさるかも

やこゑのとり
かけろとり
ものおもふといれすてきたるあさあけはわひてなくなりか
けろとりさへ

たかみそきゆふつけとりかから衣たつたの山にうちはへて
なく

ゆふつけとり
おほやけの御はらへに。にはとりにゆふをつけて。あふさ
かにはなつなり。
相坂のゆふつけとりにあらはこそきみかゆきゝをなく〳〵
も見め
たかみそきゆふつけとりかからころもたつたの山にうちは
へてなく
又云。いにしへ鬪鷄せしに。ゆふをつくといふことあり。

山とりのおのしたりおの　なかきことにそへたる也。
人丸歌云。

あしひきのやまとりのおのしたりおのなか〳〵しよをひと
りかもねん
やまとりのをとりのしたりおといふなり。なかきにそへ
たるのみにあらす。また山とりはひるはめと丶もにあれ
とも。よるははなれてひとりぬるなり。
十一 あしひきの山とりのをのひとをこえ人（ひとめ(万葉)）をみしこにこふへき
ものか
このうたにてそまことにやまとりのおとりとはみえた
り。
(ヲ歟)そろのはつおとよめり。
十四 山とりのそろ(ヲ歟)のはつおにかゝみかけとなふへみこそなによ
そりけめ

たのむのかり　あまたの説あり。
東國にかりすとて。かたよりにして。をのか日々にしゝを
とるなり。伊勢物語歌云。
みよしのゝたのむのかりもきみかため
又はたのおもてのかりといふことなりとそ。或人のゝた
まひし後。
あふさかのせきわすれにけるなかにまへ(本ノ)わたりをしつゝも
のもいはねは
一條攝政

くもゐにはわたるときけととふかりのこゑきゝかたきしき
にも有かな
返　　　　　　　　　　　　　　　とよかけ
雲井にてこゑきゝかたきものならはたのむのかりもちかく
なきなん
返　　　　　　　　　　　　　　　女
ことつてのなからましかはめつらしきたのむのかりもしら
れさらまし
かりかねにつまよふとよめり。
万八
たれきゝつうらなきわたるかりかねのつまよふかりはかく
しるくそある
かりにたまつさかくとよめり。
古　　　　　　　　　　　　　　　友　　則
秋風にはつかりかねそきこゆなるたかたまつさをかけてき
つらん
可尋
かな山のしたひかしたになくとりのこゑたにきかはなにか
なけかん
　　　　　　　　　　　　　　　人　　丸
あき風にはつかりかねそきこゆなるたかたまつさをかけて
きつらん
たまつさとはふみをいふ。かりのふたといふ事なり。

まとり
まとりすむうなてのもりのすかのねをきぬにかきつけきせ
んこもかも
すかとり
十二
しらまゆみひたのほそ江のすかとりのいもにこひめやいを
ねかねつる
うつらなくふりにしさと　いはれのゝへ
うつらなく（けふかなイ）ふりにしさとのあきはきはおもふひとゝもあひ（みつる）
見つるかな
十七　　　　　　　　　　　　　　　家　　持
うつらなくふるさと（し）人はおもへれとはなたちはなのにほへ（ふ）
（万葉）
このやと
十一
ひとことをしけしときみをうつらなく
こゐ　たかの木にゐるをいふ。
　　　　　　　　　　　　　　　朝忠朝臣
おほつかなあはするたかのこゐをなみあまきるゆきにあは
せつるかな
たかつかふ人のいひしは。大たかつかふに。たかのそりて
ゐるきのなゝり。その木にゐて。きしのかくれぬる所をう
かゝふ也。
たかにこゐをわすれすとよみたり。

左大臣殿

わかこひはとかへるたかとなりにけりとしをふれともこゐをわすれす

すゝむしを

後拾 とやかへるわかたかならしはしたかのくるときこゆるすゝむしの聲

とかへる　たゝとにていつこともしらてかへるを云也。

またとやかへるとおなし心といふ心もあるへきか。

後 わするとはうらみさらなんはしたかのとかへる山のしゐはもみちし

とやかへる　とやにてかへるなり。

このかへるといふは。けのかはるなり。ことしとりて。つきのとしのあきすきてかへるをは。かたかへりといふ。むねのふのよこさまになるなり。つきのとしをはもろかへり。ふのこまかになる也。

たかへる　てにかへるをいふ。

長能歌云。

みかりするすゑのにたてるひとつまつたかへるたかのこゐにかもせん

盛房かいひけるは。かゝる歌なし。これは長能かよみあつかひける歌となんいひける。盛房はたかへるとは田にてかへると云也。宇治殿もさそおほせられける。故若狭守通宗はてにてかへるをいふなりと云々。とかへるとは。のなとにてかへるをいふと也。かへるとはとやにてかへるをいふ。このかへるとはみなけのかはるをいふ也。

たかへり　たかつかひし人のいひしは。こたかなとのそりたる。かへりてぬしのてなとにゐるをいふ。

やまかへり　山にてかへるをいふ。

すはなれ　すをはなれたるをいふ。

さかる　たかのしぬるをいふ。

はしたかの野もりのかゝみ

はしたかののもりのかゝみえてしかなおもひおもはすよそなからみん

この歌の心は。昔雄略天皇のかすか野にかりし給ひけるに。たかをうしなひて。野守をめして。このたかをもとめよとおほせられけるに。野守かしこまりて。地をまもらへて。そらをも見あけすしては。たかのあり所をは申そととはせ給ひけれは。まへにありける山水をさして。この水にかけのうつりて見え候なりと申けるにより。この山水をのもりのかゝみと云也。

くものはたて

くものすつくることは。はたのてかきたるににた(リ脱歟)といふ
なり。
ゆふくれはくものはたてにものそ思ふあまつそらなる人こ
ふる身は
しつき　ついといふとなり。
いましはし(とわひにしりのを(古今))とねもくれはさゝかにのころもにしつきわれを
たのむる
とよめるは。くものきぬにつきて。客人きたるといふ事を
よめる也。
しつきはむかしの事にてをかし。
かけろふ　玉蜻蜓。
八 かけろふのほのかにみえてわかれなはもとをやこひんあふ
ときまては
あまのつるらん
九 たひ人のやとりせんのにしもふらはわかこはくゝめあまの
つるらん
わすれかひ　うみにあるかひなり。
わかせこをこふれはわひしいとまあらはひろひてゆかんこ
ひわすれかひ
あはひのかたおもひ
伊勢のあまのあさなゆふなにかつくてふあはひのかひのか
たおもひにして
よとかはのそこにすまねとこひといへはすへていをこそね
られさりけれ
此歌古歌也。漢書(事イ)に魚はいをねす叓にといふ事のある也。
さゐ　ちいさき魚の田のあせのたまり(本ノ)水なとにあるなり。
やまさとのたのきのさゐもくほへきにをしねほすとてけに
はくらしつ
をしれ　下部にあり。
たのき　下部にあり。
雑藝云。
こひすきとねりはいつくへそ。さゐすきとねりはいつくへそ
といふこれなり。
さをしか　わかきしかなり。
さをしかのつめたにひちぬやまかはのあさましきまてあは
ぬきみかな
伊勢大輔もちいさきしかをいふとそいひける。
をしか　雄鹿。
このころのあきのあさけにきりかくれつまよふしかのをと
のともしさ
すかる　わかきしか。
古 すかるなくあきのはきはらあさたちてたひゆく人をいつと

かまたん
萬葉。竿志鹿。さをしか。　狭尾牡鹿。同。
棹牡鹿。同。　左小牡鹿。同。　左男牡鹿。同。
つまとゝのふ
十 さをしかのつまとゝのふとなくこゑのいたらんきはめなひ
け萩はら
しかのこゑまてうらふれにけりとよめり。
十 かりもなきはきもちりぬとさをしかのなくなるこゑもうら
ふれにけり
さつをのねらひ　れうしともしするをいふ。
十 やまへにはさつをのねらひおそらみとをしかなくなりつま
のめをほり
十 山のはにあさるさつをはあまたあれとのにもやまにもさほ
しかそなく
（万葉長門守巨曽倍朝臣津島）
俊頼朝臣
八 このをかにをしかふみをこしうかねらひかもかくすらくき
みによりこそ
やましたとよみなくしかの
八 あしひきのやましたとよみなくしかのとゝもしかもわか心
つま
馬
さひくまのひのくま河にこまとゝめしはしみつかへわれよ
そに見ん
十二 ませこしにむきはむこまのこかるれと（のらゆれと（万葉））なをしこひしく思た
えぬを
古 まなつろのあしけのこまやなかぬしのそのかとゆかはあゆ
みとゝまれ
あをこま
万二 あをこまのあかきをはやみくもゐにていもかあたりをすき
てきにけり
あかこま
万 あかこまのこゆるむまなりいれめゆひいもか心はうたかひ
もなし
あちむらのこま　二説あり。
あちむらといふは。ちゐさきとりのむらかれてわたるや
うに。おほくつらなれるこまといふ事もあり。又はところ
のなにあちむらといふまきなとのあるにやともいふ。可
尋。又日のかけともいふ。
ゆふやみはみちも見えねとふるさとはもとこしこまにまか
せてそ見る
此歌は管仲は信馬てゆくといふ事のあれはなり。老馬智
なとかけり。

かをさしてむまてふ人もありけれはかもをもをしとおもふ
なるへし
この歌は趙高指鹿稱馬て。秦世(二脱歟)皇帝にたてまつりたると
のあるなり。仲文か車を能宣かもとにこひにやりたりけ
るに。なしといひけれはよめるなり。返事。
なしといへはおしむかもとやおもふらんしかやむまとそい
ふへかりける

植物部

草

さゐたつま　くさをいふ。

後拾 のへ見れはやよひの月のはつかまてまたうらわかきさゐた
つまかな

みくさ　はるくれはみくさめうへにをくつゆの。

はるくれはもぬ(もすのくさくき(万葉))ふたさたき見えねともわれはみやらんきみ　人丸
かあたりを

いはしろののへのしたくさとよめり。
十 とたくはとにかくにせんいはしろののへのしたくさわれし
もかりて(かりてはイ)

のきのしたくさ
十二 わかやとののきのしたくさおふれともこひわすれくさみれ
とまたおひす

おにのしこくさ　蘭をいふ。
十二 わすれくさわかしたひもにつけたれとおにのしこくさこと
にしあらし
わすれくさかきもしみゝにおふれともおにのしこくさなを
おひにけり

わすれくさ　萱草をいふ。
おにのしこくさ　蘭をいふ。

或人云。むかしおやのなくなりにけるを。あにをとゝして
こひかなしひけり。あにわすれくさをつかにうへて。わす
れなんとおもひけり。をとゝはらんをうへて。いかてかお
もひをわすれしとおもひけるに。あには思ひわすれて。を
とゝはいよ〳〵こひかなしひけり。おやそのふたりのこ
のゆめに。いみしくあはれかりて。その中にもをとゝをそ
いますこしあはれかりけるとなん。

かくもくさ　蓬をいふ。

つきくさ　鴨頭草。又作鷄冠草。
萬葉。月草。唐振草。
つきくさのうつろひやすきこゝろあれはとしをよそふるこ
とはたえすな

はねす　家枕

詠唐採花歌（様懲）　家持歌云。
夏　なつまけてさきたるはねすひさかたのあめうちふらはうつ
ろひなんか
このはねすは。ひとのたつぬるとを。されとつき草とそひ
とはありし。
庭櫻　柘榴　露草
はすいろ　翼酢色。大作坂上女郎。
このはすいろとはいかなるいろそ。もしはねすいろとい
ふへきか。翼酢とかける。翼字はねなり。もししからはさ
きの唐棣花とおなしとにや。可考。
こなきかはな
十四不辨知國　なはしろのこなきかはなをきぬにすりなるゝまに〱あせ
かかなしき
おほゐくさ
古上野　かみつけのいならのぬまのおほゐくさよそに見しよはいま
こそまされ
さしもくさ
かくとたにえやはいふきのさしもくささしもしらしなおも
ふこゝろを
すけ
すかのみ
いもかためすかのみとりにゆくわれは山ちまとひてこの日
くらしつ
いはもとすけ
おく山のいはもとすけのねふかくもおもほゆるかもわかお
もひつまは
いはほすけ
見わたせはみむろのやまのいはほすけしのひにわれはかた
おもひをする
みくまかすけ
みよしのゝみくまかすけをあまなくにかりのみかりてみた
れなんとや
こすけ
やましろのいつみのこすけよそなみにいもかこゝろをわか
おもはなくに
まのゝいけのこすけをかさにぬはすしてひとのよそなをた
つへきものを
すかのね　なかき事にもよみたり。ねんころの事にも。
十一　すかのねのねんころにいもにこひせましらおもふこゝろ
おもひえぬにも
あしひきの山におひたるすかのねのねんころ見まくほしき
きみかも

ありますけ
おほきみのかさにぬふてふありますけありてのちにもあは
んとそ思ふ
かりこもの　おもひみたる丶とよめり。
すかのね　やますけといふ。
万四 いなといは丶しひむやわかせすかのねのおもひみたれてこ
ひつ丶もあらん
万四 やますけのみならぬとはわれによりいはれしきみはたれと
ねぬらむ
はなかつみ　あしのはなをいふ。
古 みちのくのあさかのぬまのはなかつみかつみる人のこひし　能因
きやなそ
又こもの花をいふ。
十四 をみなへしさくさはにおふるはなかつみみやこもしらぬこ
ひもするかな
となくさ　くさのはなをいふ。
みくまの丶うらのはまゆふ
みくまのゝうらのはまゆふひとへなるこ丶ろはおもへとた
丶にあはぬか
ねしろたか丶や

かはかみのねしろたか丶やあやに〳〵さね〳〵てこそこと
にてにしか
藤波　ふちなみといふは。みつもなく。か丶るとも。よすとも。
いはぬ本ノ
ほと丶きすなくはふりにもちりにけりさかりすくらしふち
なみの花
うへしふちなみ　みつもなく。またよすからといふ事もなし。
八 こひしけはかたみにせんとわかやとにうへしふちなみ花さ
きにけり
十四 はるへさくふちのうらはのうらやきにさぬるよそなきころ
をしおもへは
眞葛　まくす。
十一 まくすはふをの丶あさちをこ丶ろよりひとひかめやもわれ
ならなくに
まくすはら
なのりそのけな
猿丸集。
あつさゆみひきつのつなるなのりそのはなさくまてにいも
にあはぬかも
いつものはな　伊都藻之花。
四 かはかみのいつものはなのいつも〳〵きませわかせこときき

わかぬやも
あやめくさ　菖蒲をいふ。(くちなはににたりとていふなり。)
　あやめは虵名なり。
なてしこ　石竹之共花。
万三 なてしこのそのはなにもかあさな〳〵てにとりもちてこひぬ日なけん
古 やまとなてしこ　いも。わきもこ。わかくさなといふ事也。
あなこひしいまもみてしかやまかつのかきほにさけるやまとなてしこ
　たゝしあはれなりちとせのみかはなとよめり。
素性
われのみそあはれとおもはんひくらしのなくゆふくれのやまとなてしこ
　本文云。鍾愛勝衆草。故云撫子。艷契千年。故云常夏。ちとせのみかはとはさてよむ也。
ふか[みィ]くさ　牡丹也。可尋。
ふかくさのにはにしけれるはなのかをいよへきてへようけもちのかみ
　いよへきてへよとは只言するとは也。うけもちのかみとは宅神をいふなり。
おはなをしなみ
千 わかやとにおはなをしなみをくつゆにてふれわかせこちらまくも見む
あきのゝのおはなかすゑをゝしなみてこしにもしるくあへるきみかな
すくろのすゝき　やきなとしたるすゝきのもとなとのくろきなり。すくろといふ也。
粟津のゝすくろのすゝきつのくめは冬たちなつむ駒そいはゆる
しのすゝき　またほにいてぬをいふ。又さるすゝきのあるなりとそ。
はなすゝきおはなさかふきくろきもてつくれるやとはよろつよまてに
　能因注云。みやまのほかにはよむまし。ありにはあれとも。
もとあらのはき　たけのたかくて。もとのあかりたる也。
長能
みやきのにつまよふしかそさけふなるもとあらのはきにつゆやをくらん
古 みやきのゝもとあらのこはきつゆをおもみかせをまつことくきみをこそまて
こはきかはら　こちいさきはきのおひたるはら也。

はきかはなすり　萬葉集云。はきのはなして衣をすれるなり。
はきにもとの心はとよめり。
みつね
秋萩の古枝にさける花みれは本のこゝろはかはらさりけり
すゐふきなひく
あき風のすゐふきなひく萩のはなともにかさゝすあひかわかれん
えたもたはゝに
あきはきのえたもたはゝにをく露のきえもしぬへしこひてあはすは
いつれをかわきてをらましむめのはなえたもたはゝにしらゆきのふる
えたをとをゝに
あしひきの山ちもしらすしらかしのえたもとをゝにゆきのふれゝは
八 秋はきのえたもとをゝにをく露のけなはけぬともいろにいてめや
十 あきはきのえたもとをゝにつゆしものをきてさむけき時になりにけるかも
うれわゝらはに
八 たまにぬきえた[にイ]もあらなん秋はきのうれわゝらはにをけるしらつゆ
えたもしみゝに
十 見まほしみわかまちこひしあき萩はえたもしみゝにはなさきにけり
あきのほをしのにをしなみ
十 あきのほをしのにをしなみをくつゆのけかもしなましこひつゝあらすは
てもすまにうふ
てもすまにうへしはきにやかへりては見れともあかすこゝろつくさん
あきのはきはら
十 このころのあかつきつゆにわかやとのあきの萩はら色つきにけり
すゐふきなひくはきのはな
十 秋風のすゐふきなひくはきのはなともにかさしてあひかわかれん
いなつま　石總。可尋。
いなつまのまたさかへつゝあをによしならのみやこを又も見むかも

木

卯花を　あつま花といふ。うのはな月夜とよめり。

古
さつきやみうの花月よほとゝきすきけともあかす又なかむかも

あさけつく　朝毛告。きといはんとて。

あさけつくきひとともしもまつけやまゆきくと見らんきひともしも

あさもよひ　薪をいふなり。いひかしく木なりとそ人丸はいひける。

万葉集三
日本紀第四歌云。あさもよひきのせきもりかたつかゆみ

ゆるすときなくまつゑめる君(今鏡)
はつすゆるすときなくかおもふ

あさもよひきのかはゆすりゆく水のいつさやむさやいるさ

やむさや或説
のやせや

あさもよ〔し万葉〕きかたゆくきみかまつちやまこゆらんけふそ雨なふりそね

岩代
いはしろのむすひまつ

いはしろのきしのまつえをむすひたる人はかへりてまた見けんかも

或人云。岡本天皇の王子のものにくるひてありき給ひけるか。紀伊國のいはしろといふ所の松を。いまありきめくりて。えた見むとてむすひをきたまへりけるを。かくよむとそ人はおほせられける。この歌に心かなへり。又或本云。つかにうふるまつをむすひてをくをいふ。

いはしろの野中にたてるむすひ松こゝろもとけすむかしおもへは

住吉に石代といふところあるなり。

はしきかも

たまゝつのえ

みよしのゝ玉松のえははしきかもきみかみことをもちて通はく

おほとものみつのはまゝつ

山上以憶良在大唐時(臣歌)憶本郷歌

万一
いさこともはやひのもとへおほとものみつのはま松まちこひぬらん

椙

いそのかみふるのやまなる杉むらのおもひすくへき君にあらなくに

みわのやましるしのすき　人のやとたつぬるによむ。或説。むかし三輪の明神すみよしの明神にすてられてよみ給へる歌にいはく。

こひしくはきてもみよかしちはやふる三輪のやまもとすきたてるかと

とよめる歌を本文にて。いまの人その心をよむなり。この事いとおそろし。たしかの證文を見てこそ一定すへき。さ

る事やはありしと。神のおほさんもいとふひんなりかし。

こぬれ　長歌に云。

万 こぬれかしたにうくひすなくも

又云。あしひきの山のこぬれ。

五 はるくれはこぬれかくれてうくひすのなきてきつらんむめ
のしつえに

説あり。

あしひきの山のこぬれのほよとりてかさしつらくはちとせ
ほくとそ

このくれ　きのしたのしけりてくらきをいふ。

家持

みやまのきこのくれことにそめわたるしくれとみれは霰な
りけり

春くれはこのくれもとのゆふつくよおほつかなしも山かけ
にして

十九 たこのさきこのくれしけきほとゝきすきなきとよめはたゝ
こひぬやも

家持

このくれのしけきおのへのほとゝきすなきてこゆらしいま
しくらしも

こくれともいふ。

〔ヵ歌〕しらなとかるに。しけき木の中にいりぬれは。こくれにい
りぬるといふ。

はゝきゝ

しなのにそのはらやふせやといふ所にあるなり。或人の
云。はゝきゝのもりのあるなり。そのもりいとしけくて。
もりの中にはゝきゝのおひたる也。それをとをくてみれ
はあるやうにて。もりのしたにゆきてみるに。木のしけり
て見えぬなり。それをいふなり。或人の云。はゝきゝにに
たる木のそのもりにあるなり。それをとほくて見るには
あるやうにて。ちかくてみれはあらぬ也。

そのはらや伏屋におふるはゝきゝのありとはみれとあはぬ
きみかな

さてかくよめり。

盧橘

古今 さつきまつはなたちはなのかをかけはむかしの人のそての
香そする

伊勢物語云。昔女ありけり。人につきてほかのくにへまか
りにけり。もとのおとこ宇佐の使にてくたりけり。その國
の惣官といふものゝ女にてありときゝて。かのいへにい
たりたりけれは。さけのませたりけるに。女のあるしにか
はらけとらせよ。さらすはのましといひけれは。かの女か

はらけとりていたしたりける。さかなにたち花をすゑた
りけれは。とりてよみてやりたりけり。それよりむかしに
よせならはせるなるへし。ほとゝきすのこゑきゝても。む
かしおもひいてたるとよめり。
まつのさえたとよめり。
万 やちくさのはなにうつろふときはなるまつのさえたにわれ（をわれは）
はたらん（むすひな(万葉)）
たわすれて　手忘而。
万 うはたまのそのよのゆめをたわすれておらすきにけりおも
ひしものを
こすゑこそりて
十二 あしきやまこすゑこそりてあすよりはなひきたれこそ妹か
あたりみむ
うつろふ　さくらにはちるをよみたり。
古 はる風にはなのあたりをよきてふけこゝろつからやうつろ
ふとみん
みやましみに
十七 むめのはなみやまとしみにありともやかくのみきみは見れ
・とあかにせん
はなをにしきとよみたり。
元輔歌云。

はなのかけたゝまくおしきこよひかな錦をさらすにはとみ
えつゝ
ちらて木にあらんをはいかゝ。
古 みわたせはやなきさくらをこきませてみやこそ春のにしき
成ける
これはやなきをこきませてそにしきともよめる。さくら
のかきりをはよむへからす。
まつかさ　松蓋也。
まつのおひたるにはかさといふものゝある也。こと歌は（本ノ）
やなきのいと　柳絮。
やなきにはいとゝいふものゝあるなり。
まよふいとの　柳なみよるをいふ也。
春くれはしたり柳にまよふいとのいもか心によりにけるか
な
やなきはるとよめり。
十九 はるの日にはれるやなきをとりもちてみれはみやこのおほ（かはりイ）
ちおもほゆ
うらもなくわけゆくみちにあをやきのはりしたてれはもの
おもひつゝ
桃　けもゝとよめり。
みむろ　或説さかきをいふ。ひとのさうしにあるをまうす。

人丸歌云。

〔　　〕ふみむろの神さひていなにはあらぬ人めしけみそ
ねこしてうふ

中納言安倍廣庭

万八 いにし年ねこしてうへしわかやとのわか木のむめは花さき
にけり

しらつゝし　見死人屍哀傷云。

かさはやのみほのうらとのしらつゝしみれともあかすなき
人おほゆ

ふくめり

万四 はるさめをまつとにしあらしわかやとのわか木のむめもい
またふくめり

もみちをる

穂積皇子

万 たてもなくぬきも定めすをとめこかをれるもみちに霜なふ
らしそ

もみちをかせそかしけるとよめり。

古 あきなれといろもかはらぬときはやまよそのもみちをかせ
そかしける

竹

いさゝむらたけ

わかやとのいさゝむら竹ふくかせのをとのかすけきこのゆ
ふへかな

葛

さねかつら

はれかつら

たまかつら

仲實綺語抄三帖以一本（北村春水藏本）校合了猶不審多々

明和三年五月日

百華庵（花押）

（右綺語抄以東京帝國大學圖書館本圖書寮本校合）

續群書類從卷第四百六十八

和歌部百三

師說自見集上

歌言少々　源氏言少々　鳥類少々　鶯少々　時鳥少々
鴈少々　雀少々　烏少々　鷹少々　鴙少々
喚子鳥少々　鷄少々　千鳥少々　枕少々　甃
莚　簾　篝籌　火取　挿頭
秡麻　標　衣　裳　袴
紐　帶　綾　錦　布
綿　糸　機　斤　車
樋　筏　舟　碇　繩
網　綱　緒　魚梁

註之中合點者私之註也。

任思出注付之間。兩書在之。次第不同。以外比興々々。

やまと歌は心よりおこりて。みつからさとるといへ共。師なくしてはかなふへからさるにや。さろは古歌を師とすともいふめれは。此をしへを思ふにしりぬ。心をは自覺り。詞をは古歌を本とすへきなるへし。其詞と云ふは必しも古人の讀ることはを少もかへすよむへきにはあらす。言つゝきからをまなふへしとそ。其中に足引の山。玉鉾の道。久方の空抔と云つゝけたる言は。題目の如くにて。古人の言を學ふとしもなき也。如此の事は先達の教へなくては自覺る事不可叶歟。此外に歌言と云は。則萬葉集。古今。後撰。拾遺。又は三十六人の家集なとによめる歌の言を歌言と申にや。夫も古集の中に今は耳遠なる詞をは學ふへからすと。歌の先達ことにいましめられたれは。かやうの事は師を可用なり。いかさまにも師とすへき人なくは。友達なとにても。此道を能心得。又は心安るへき人に。我今讀る歌を見合て。わろかるへき言をは取替へ。よき言をは可用歟。如此稽古すれは。終に

我と納得の期あるへき歟。いかなる達者堪能の人も。我歌の是非を分明に知事は大事といへり。初一念と云か如く。初思得つる言を思返して取かふる事無間。人を師とすれは我よりも無氣量人なれとも。人の歌をは能心得る事なれは。問合て其道理に任て我歌を直すを爲古實云り。

一替詞と云は。同歌の理りのいひ現はされたれとも。心は不替して。詞の勝りてする〳〵と節無。吟の下に取替ふるを替詞とは申すなり。

一歌を能も悪しくもよみ出て後に。五七五七々の句を上に置替。中に置替。下に置かへなとして。其歌のすかた事からを見合て。勝りたるに置替を第一の故實なりと。師の庭訓にて侍也。いかさまにも先讀出しつるまゝにて出は。數寄の不足成人かと師説に侍り。能々歌をせゝりみかくへしとなり。歌は十首に七八首は地歌流通物なれとも。其内にも詞の置所。ふしくり。下品の文字一も交ぬれは口惜事なり。増て少珍敷。我讀出たりと思はん歌をは。彌一言なりともみかくへしと也。詠歌の後悔病と云は。なま研にて出たる中に有と云り。定家卿の抄物に云。歌讀の號のあらん人の一首にても比興の事仕ぬれは。宜き歌なとをのつから仕出たれとも。誰にあつらへけるそ抔と云はるゝは。無念の事也と書れたり。されは當座の探題なとを歌數讀は無故實至なり云々。達者なれ共。時によりて更に風情の浮ますして。沈思する事も有て。披講の期に連ねられたるは。如法見苦しき事と云り。我よりも上﨟又上手の歌數よりも多よむ事尾籠事と云々。當時は歌も連歌も數多仕たれは。上手と人に思はるゝと存にや。劣らしまけしと數仕事。更不得師説人の業なり。相構て可心得事と云々。此事は西行抄と云物に。彼上人のくれ〳〵書れたれは。此上手すら用心は有ける歟。

一毎歌金玉をのみ讀んと思事。ゆめ〳〵有へからす。只出來次第に讀て。其内に詞をもかさり。風情をも可案と也。

一或花の歌を風情をもとめ。或月雪を讀時。思寄らぬ戀雜等の歌のふと出來事。初心の時も上手になりて後も有事と云り。如此の歌の中に宜き歌も出來と云り。左樣の歌をは相構秘藏して持て。家隆卿抔は常の事なりけるとかや承及也。又兼て名題等の歌を心靜に仕をきて。其題の出來時さし合るも故實云々。人によるへき事歟。或は老人或は物忘する人なとは。當座にては思わたる事も有へけれは。兼日題等には用に立へきにや。

一和歌には十躰有。多分此内をは不可出哉。此内にいつれの躰にてもあれ。我學得ぬへき一躰に先もとつきて詠習て。殘の九のすかたをも次第々々に讀習ふへしと云り。されは我心に不叶らけられす思ふ姿をは。わろしなとと一偏に嫌ふま

しき也。上手は何の躰をも相兼にや。但於此中生得に口のいやしくこはき人は。相構て毎歌やさしくなみやかに讀んと心にかくへし。又天性歌の姿かひなくよはからむ人は。したゝかにたけ高く言つよく讀んとたしなむへき也と云り。只一躰におもむくは。道狹き事なりと敎へられたり。爲世卿の風躰には。歌はやさしくするくとのみ可詠とのをしへなり。爲兼卿の庭訓は。たけ高く言たくさんに。言の用捨なく。只思樣に讀めとなり。爲相卿のをしへは。いつれの躰にても。其人の得たるすかたに先もと付て。後よのかゝりをもうかゝふへしとなり。昔より今に至まて。必しも師の風躰に弟子の歌不似。父の歌樣に子の詠歌不似。是則みつから得たるにしたかふかゆへなりと云々。

一十躰とは。

　うるはしき躰

ほのくと明石の浦の朝きりにしまかくれ行舟をしそ思ふ
鶉なく眞野の入江のはま風に尾花なみよる秋の夕暮
三吉野は山も霞て白雪のふりにし里に春はきにけり
思ひかね妹かり行は冬の夜の川風寒く千鳥なくなり
夕されは門田のいなは音つれて葦のまろやに秋風そ吹

　濃躰

すかはらや伏見の里のあれしより通ひし人の路も絶えにき
夕されは野への秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里
思ひあれは袖に螢をつゝみてもいはゝや物をとふ人はなし
少々略之。

　長高躰

思ふとなとゝふ人のなかるらんあふけは空に月そさやけき
立田川紅葉はなかる神なひのみむろの山に時雨降らし
風になひく富士の煙の空に消えてゆくゑもしらぬ我思哉
時雨の雨染めかねてけり山しろのときはの杜の槇の下はゝ
少々略之。

　幽玄躰

侘ぬれは今はたおなし難波なる身を盡してもあはんとそ思
いきてよもあす迄人はつらからし此夕暮をとはゝとへかし
在明のつれなく見えし別より曉はかりうきものはなし
秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

　有心躰

なからへは又この比や忍はれんうしと見しよそ今は戀しき
津の國のなにはの春は夢なれや葦の枯葉に風渡るなり
山里に契りし庵やあれぬらんまたれんとたに思はさりしを

　一節有躰

立かへり又もきて見ん松島やをしほのとまや波にあらすな
年たけて又こゆへしと思ひきや命なりけりさやの中山

夢にても見ゆらん物を嘆きつゝうちぬる宵の袖のけしきは
嵐ふく峯の紅葉の日にそへてもろく成行我涙かな

面白躰

やま里に白地なる都人さひしとや見ん住うからぬを
うかりける人を泊瀬の山おろしはけしかれとは祈らぬ物を
庭の面に我跡つけて出つるをとはれにけりと人や見るらん
今そしる思ひ出よと契りしは忘れんとての情なりけり

見様躰

早苗とるやま田の筧もりにけり引しめ縄に露そこぼるゝ
むら雨の露もまたひぬ槇の葉にきりたちのぼる秋の夕暮
夜もすから浦こく舟は跡もなし月そのこれる志賀の唐さき
吹はらふ嵐の後の高ねより木の葉くもらて月や出らん

事可然躰

住佗て身をかくすへき山里にあまりくまなき夜半の月哉
あはれいかに草葉の露やこほるらん秋風立ぬ宮城野のはら
明はまたこゆへき山の峯なれや空行月の末のしら雲
年月をいかて我身にをくりけん昨日見し人けふはなき世に

拉鬼躰

流れ木とたつ白浪とやく鹽といつれかからきわたつみの底
唐人の舟をうかへてあそふてふ今日そ我せこ花かつらせよ
足引のこなたかなたに道はあれと都へいさといふ人そなき
片枝さす孛生の浦梨初秋になりもならすも風そ身にしむ

此十躰歌多分略之。是斗にても大方可被意得歟。

一古歌に心得ぬ様なる詞等。又は師説の條々。只今心にうかふ斗註付事。今も用可詠こと葉斗を註也。

たゆたふとは。ふねなとの浪にゆるゝ躰なり。

たつきとは。たよりなり。萬葉には田時と云り。

春され。秋され。夕されなとゝ云は。春は秋は夕はと云こと葉なり。

しみゝとは。しけきと云言なり。雨もしみゝになとゝあり。しけき心なり。

いさゝめとは。ちとゝ云言なり。いさゝかの程なとゝいふも此心なり。公任卿説にはかりそめと云言云々。

しつくとは。しつむと云言なり。水の面にしつく花の色と云。又しつく石と云は。しつみもうかひもせす。半にみゆるを云と師説なり。

わくらはとは。まれなると云言なり。わくらはとよむへしと師説なり。時ならぬ櫻なとの紅葉をわくらはと云説不可用なり。

すたくとは。多集と書り。螢なとの群まるにもよめり。

玉ゆらとは。しはしと云言なり。公任卿説にはわくらは同こと云々。不可然之由八雲に云り。

うたかたとは。少と云言云々。水の泡をも云。

はしにわか身そ成ぬへらなるとは。橋にはあらす。はしたになりぬへきと云言なり。

しは鳴とは。しきりに鳴と云言なり。又しは〱鳴心ともいへり。通用なり。

なけとは。なをさりなり。なけゝといふもおなし言なり。

ことに出てとは。ことはに出となり。

かてとは。かたしとなり。消かて。過かてと云も。消かたき。過かたき心なり。又雪なとのつもれはかてにくたけつゝと讀るは且(カツ〱)の心なり。

うつたへとは。打絶てとなり。うちたへてなとゝ云も。ひたすらと云言同事云々。

ひたふるとは。一向にと云言なり。ひたすらと同言なり。

かこととは。かこつと云言なり。又かこつけ言にも云なり。兩説に用なり。源氏言に。かこと斗引かけたりと云は。すこしの義にいへり。

ゆらにとは。ひまのなきと云言なり。手玉もゆらにおるはたと云も。ひまなき心なり。

いそうとは。あらそふなり。きそひ狩と云も。あらそひて狩をするを云り。

はたれとは。斑(マダラ)なり。雪なとのまたらにふるなり。

うちきらしとは。打霧たるなり。うちくもろをも云。

たはるゝとは。あそふ心なり。風流と書り。萬葉には風流士と書てタハレヲとよめりと。

つかのまとは。時のまのことなり。つかのあひたとも云なり。

うつろふとは。移なり。

いつさいるさとは。出さま入さまなり。

ちくさとは。さま〱なり。千種なり。

ねこしてとは。草木なとを根引にしたるなり。根くしてとも同言なり。

源氏言にかたへは人のと云は。かた糸の心なり。片枝ニハアラス。

みやひとは。なさけなり。

情まほとは。うるはしくと云心なり。

さゝめとは。さゝめことなり。みゝらことゝ云も同事なり。さゝやき事なり。

とむとは。もとむると云ことはなり。

あらましき風なとゝ云は。あらき風なり。

うたゝある人とは。うたてある人と云ことはなり。

鬼こもるとは。心にくきと云言なり。

やゝとは。やう〱なり。

やよやとは。やゝと人をよふ言なり。

ちなにたつとは。千名なり。さま〳〵名の立なり。

なれとは。おのれなり。

あせたるとは。里なとの荒たる心なり。

おのかしゝとは。おのれ〳〵なり。

さぬらくとは。すこしぬるなり。さぬるなり。

老さひたるとは。老てさひしき心なり。

翁さひとは。老て後わかやくていなりと云々。

しりへの岡とは。家のうしろの岡なり。

しめゆふとは。我物とりやらしたる事なり。しめ野なと同事なり。

あふさきるさとは。とするもかくするもと云言なり。

心あてとは。心になしはかることなり。

てもすまとは。手もやすめすと云なり。

野もせ。山もせ。庭もせ。道もせなとと云。みなせはきと云言なり。みちたる心なり。狭の字。

ひなひたるとは。ゐ中めきたると云言なり。

あさはかとは。淺くはかなきなり。

よすかとは。たよりなり。

あなかまとは。あなかしかましなり。

みかくれとは。兩説なり。見えかくれなり。水かくれなり。

なへとは。たとへは花のちる時分。風の吹をりなとゝ云言なり。時分からと云言なり。

あやなしとは。無益なりと。八雲には註せられたり。

いやとしのはとは。彌の年なり。はの文字はやすめ言なり。

あかたとは。田舎なり。

してうつとは。しけく擣なり。又はしつかに打とも云。二様に讀りと在之。衣してうつとよめり。

さしなからとは。さなからなり。

あかるゝとは。あちこち行わかるゝ事なり。

いやましとは。彌まさるなり。

あまきるとは。空の霧なり。

ことつてとは。事付なり。

しけぬくとは。しけく貫（ヌク）なり。

つてとは。傳なり。

まくりてとは。袖まくりなり。

ゆきふりとは。行觸なり。

まとゐとは。まはり居たるなり。

春まけてとは。春かけてと云言なり。懸なり。兼なり。

時かたまく。夕かたまくなとゝ云も。かけたることなり。

けにとは。勝たるなり。露よりけなるも。露より勝たると云言なり。

むせふとは。とゝこほる事なり。

たかたにかとは。たか方にかと云言なり。又誰爲にかと云言にも云なり。

月よめはとは。月をかすふる事なり。

そのかみとは。昔をもいふ。いにしへをも云。

日もあやとは。めてたき事に云。

はたとは。又なり。

しほとけきとは。ぬれしほたれたる心なり。吉野川の歌に。かいのしつくしほとけしとよめり。

うれたきとは。うれはしきと云言なり。

つい松とは。たい松なり。又音なり。

心なくさとは。心なくさめと云言なり。

駒もすさめす苅人もなしと云言は。馬もくはす人もからぬ心也。人をすさむるなと云義にはあらす。

いさにとは。しらすと云言なり。

ふりさけ見るとは。ふりあをのきてみるなり。

まに〳〵とは。隨意と書り。心まかせのこゝろなり。風のまに〳〵と云は。風のまゝになり。

たはゝとは。たわむ躰なり。

とをゝとは。たはみのく躰なり。萬葉には十尾と書り。

うれたきとは。ねたきと云言なり。

由緒言

ゆらく玉のをとは。延命と書り。いきの緒の延たる心なり。

まゆねかき。はなひ。ひもとくは。待人の來へきには。老のまゆのねのかゆしと云り。ひものとくるも其想と云々。

とふのすかこもとは。十ふにあみたるこもなり。奥州但馬國によめり。

しちのはしかき。しきのはねかき。両說なり。車のしちと云物の上にねたる數を百夜かくは。戀る人に逢へきためと云々。鴫の羽かきはしけきことに讀るなり。

たきつ心とは。物思に心のわきかへれは。水のたきりわくにたとへたる言なり。

たきつとは瀧にはあらすと申たれ共。瀧にも讀る古歌少々是あるか。連歌にはたきる瀬とて山類にのかるゝ歟。

戀のやつことは。たゝ戀する人なり。やつこは人につかはるゝ人をいふを。八子によせてもよみたるなり。

夏かりとは。說々有なり。一には夏の狩と云々。一には夏の雁と云々。一には夏苅と云々。定家卿說には夏苅のあしと云々。夏雁は羽ぬけ鳴（鴨イ）云々。夏狩は藥狩とて。五月五日の前に鹿を取と云々。

野守の鏡とは。兩說あり。一には野にある水と云々。一には野を守ける鬼のもちける鏡と云々。

にしはつとは。まさしく聞と云言云々。又はしめて聞と云こと葉とも云り。是等淸輔朝臣の說歟。定家卿は不用詠云々。

萬葉の內の造事歟云々。

錦木とは。色取たる木を戀る人の門に千日立れはあふと云ことなり。

ねりそとは。木や草を苅てねちてゆふをいふと云々。

河社とは。種々の說あり。一には夏神樂する時。河邊にてすること云々。一には水神の住所をいふ云々。是は俊成卿の說なり。口傳在之。

しをりとは。木草深きやまの等を行くに。後にまよはしとて。草木をむすひ折たつることをしをりと云なり。

みとのまくはひとは。神代に女神男神のとつき玉しことなり。

くわのえひらとは。かひこの時。薄なとあみて。かひ子をいる丶物と云々。

しつりとは。雪の消かたに木よりおつるを云。

わらてくむとは。わらをくみて。垣にもしき物にもするをいふと云々。俊頼抄にはみくみとも云り。又私に云。みくさみとて。小舟のはたにわらをくみて。浪をふせくを云也。

まふしとは。鹿をねらふ時。身かくしに木を折てさすを云云々。

ともしとは。夏山に夜鹿をよせて射時。火をともすをいふとなり。

さつをのねらひとは。狩人の鹿をねらひて射を云。山さつと云も狩人のことなり。

山かたつくとは。山のそはのかけになりたるを云云々。

夕間暮山かたつきて立鳥の羽音に鷹を合せつる哉

此歌も山かけのくれたる心なり。

しらつくしとは。身をつくしの事なり。水の深き所のしるしと云々。

このまく丶たちとは。鳥なとの木間をく丶り立こと云々。

あまのさかてとは。人を呪咀する時。手をた丶きてのろふ事と云々。

あまのまてかたとは。兩說有なり。海人の鹽干潟にまてと云貝をさしとるなり。是は俊成說なり。あまのまてかたとは。海人の鹽ひかたに鹽をまくことなり。是は淸輔朝臣の說なり。いつれもひまなきことに讀り。和泉式部か歌には海人のまく潟と讀たり。

衣返してぬるとは。衣をうち返してねたるには。戀しき人の夢に見ゆると云り。古歌には袖を返すともよみたり。

玉くしけあくと夢に見とは。わか心を人のしる想なりと云々。

やそくまとは。八十隈と書り。道なとのかくれ〳〵の多をいふなり。

とまてとは。八雲抄には田苅手なり云々。私に云。田苅時手のくひに鷹たぬきの様にわらなとをあみて。貫入たる物をとまてと云歟。公茂(上民イ)の説如此。

色絶(イロタエ)の子とは。好色を云云々。

みつわさすとは。老かゝまる躰なり。左右のひさ頭におとかひの一所によるを。三わさすと云なり。

ちはやふるとは。久しきことに云り。神にも松の老木なとにも云り。

みのしろ衣とは。簑の代に雨雪の時上に打きるかたひらなり。又祈の時なてものにきる衣をいたすをも云歟。人形をも身の代とは云なり。

うへふせてとは。魚とる筌を河にふせたるなり。

都のてふりとは。みやこのうるひ也と俊成卿云。

ぬのかたきぬのみるのことゝは。やつれたる布衣のすそのつゝりのさかりたるは。海草のみると云物に似たりと云々。ことゝは如なり。鶉衣と云も鶉の毛のほたれに似たるを云云々。

水むまやとは。水の馬やにはもてなしもまうけもせぬなり。仍飯酒なきをは水むまやと云なり。源氏にも云り。明石のうまやも水うまやの隨一云々。

はとふく秋とは。説々多なり。一には鳩ふくなり。鳩の鳴をふくと云々。一には初吹秋云々。初風の事云々。一には山たちぬす人なとの山路にて鳩の鳴まねを手をくみてすると云々。五音故に如此申替なる歟。

駒そつまつくとは。人に戀らるゝ人ののれる馬は爪つくと云り。

袖に付墨とは。是も戀らるゝ人の袖には墨の付と云り。

ぬく沓のかさなるとは。人の妻のま夫するには。男のぬきたる沓のかさなる也云々。

つくまのなへとは。近州つくまの明神の祭に。女のおとこしたる數なへを神にたてまつると云事なり。〔あふみなるつくまのまつりいそかなむつれなき人のなへのかすみむイ」

う坂の杖とは。越中國うさかの明神の祭に。女の夫したる數。榊にて神主女を打と云事なり。

ひたち帯とは。鹿島明神の祭日。社の前に男女の帯を取かけたるを。神主とりて。いつれにても手にあたる帯を二つゝむすひあはするを見て。女夫になりけると云り。仍ひたち帯のかことと云は。それにかこちかゝりて契りけると也。又かこつけ事をもかことと云なり。兩説なり。私に云。同國筑波やま神の祭に。當國の男女殘らす參て。我人の女夫をいはす夜

逢けるをは。かゝひの祭と云也。萬葉の歌にもよめり。
そかひに見ゆるとは。追すかひに見事也。（俊頼朝臣。俊成卿同前。）そかきくをも追すかひにある菊と俊成卿の説也。又黄菊也云々。一本菊なり云々。如此種々に云り。私云。或老人の申しは。そか菊とは十日の菊を云と。或書にありと云り。其故はみそかとは三十日と云。十日とはそ日と云々。菊は九月九日を正日なり。昨日九日過たる間十日菊と云々。まことに一理の尺は叶たれ共。如此の説は古今共に。其代に鏡と成。師と成たる人の説をあまねくは用事なれは。今用かたき事なり。

かの見ゆる池へに咲るそか菊のしかみさ枝の色のてこらるしかみさ枝とは。汝か下枝となり。てこらさとは。照こさと云云々。

鳩の鶏とは。鷹にとられぬ鶏の有けることとなり云々。はとのきゝす同前。

たのむのかりとは。兩説なり。一には田の面の鴈なり。一にはたのもしの鹿狩なり云々。私云。是も五音のゆへに釋のかはりたるにや。いつれにもあれ。今讀んする歌によせありぬへからんを可用詠歟。古歌にも身をかくすへきやともとめてんとも。爪木こるへきやともとめてんとも兩説なれは。俊成卿も兩説を共によまれたり。又とこの山なるいさや川と‖も。とこの山なる名取川共。一首の歌を兩説に釋せられたれは。是も今は何れにてもよせ有ぬへきを詠へしとなり。冷泉家爲尹卿なとはとこのやまなる名取川をのみ本と申さるへき歟。師説の故なるへし。

三重の帯とは。戀すれは身のやせおとろへて。いつもの帯を三重に返してもすると云心なり。

二なき戀をしすれはつねの帯の三重に結へく我身は成ぬ

行水にかすかくとは。たゝはかなき事のたとへなり。

とこよとは。常葉の國也。蓬來島のこと歟。

よろへの水とは。社頭なとにある水と云々。源氏には加茂社に云ける歟。私に云。よるへの水とは。和泉式部か歌に稻荷にやらんも詠たる歟。八雲には作者云。判者はかりかたしとあそはしたるにや。

料簡言

くしみ玉とは。昔神功皇后の御裳のこしにはさみ給し二の石の事を云り。今は筑前國いとの郡内深江の社に有云々。私云。我筆鎭西に有し時尋しかは。此二石當時國大分の社に納申たりと云々。

とふさたつ足柄山に船木きり木にきりかへつあたら船木を

とふさとは。杣木にきりたる木の跡に。其木の末を必立ことをとふさたつと云云々。さる間木にきりかへつとよめ

りと云々。木にすりかへつと云本もあるなり。背事歟。此歌は筑前國觀音寺造ける時のことと云々。足柄山は相摸國なり。不審云々。私云。若足北山歟。宰府近所にあしかりと云所もあり。それは木やまと云近所なり。足北郡に野坂浦と云所を萬葉には讀たれとも。今は此名所なきなり。我等鎭西にて尋しかとも。地下の古老人もしらさるよし申き。所の名は昔と今とにかはることのみ侍は。いかゝありけん。或抄物に云。木に切りかへつとは。木に切りかけつと讀たるを書たかへると云り。材木を取る時。へちの木にたふれかゝりたる木をは。いまはしきことゝて不用木也。仍あたらふな木を木にきりかけつと讀たる也云々。昔は筑前も肥前も杣木おほかりけると云り。

鶯の木つたふ梅のうつろへは櫻の花のときかたまけぬ

かたまけぬとは。片設と書り。夕片設春片設とよめるも。まうけたる儀と云々。けとくと同音也云々。八雲の御說には。此梅の花の歌はあなたにとられて少々と云心なり云々。清輔抄には待と云心なり云々。所詮まうけたる心歟云々。

あさか潟鹽ひのゆたに思へらはうけらか花の色にてめやも

ゆたといはんれらに。淺香潟鹽ひと讀つゝけたり。古歌の習なり云々。ゆたとはゆたかなり。うけらか花は。世俗におけらと云草の花は。咲たれともひらかぬやうに見ゆるゆへなり云々。あさか潟は名所なり。

朝霞かひやか下になくかはつ忍ひつゝ有とつけんこらかも

蛙によせたる戀の歌云々。かひやとは說々有。一には鹿火屋云々。一には蚊火屋云々。一には飼屋云々。魚を取るには餌付をしてとる間。其所に造かけたる小家を飼屋と云云々。清輔說如此。鹿火屋は俊成卿說歟。一には子飼する家をかひ屋と云云々。六百番にくはしく見えたり。

とこよ物此橘のいやてりに吾おほ君はいまも見ること

とこよ物とは。常磐の國の橘とよめるなり。いやてりとは彌照たりと云心なり。大君とは大皇と書り。ことゝはことくなりと云々。

百舌鳥の草くきとは。もすかゐたりける草のくき云々。一說には霞を百舌鳥の草くきと云り。俊頼說なり。

うな原の興行舟をかへれとはひれふらし釼松浦さよ姫

大伴佐手彥唐にわたりしに。さよひめ名殘を惜て。高山にのほりて。ひれをふりてまねきし事云々。私云。ひれふるやまにのほりし時發句。雪そちるはらふ袖ふる山おろし。此發句二條攝政家より預御感き。ひれは袖同こと云々。又一說云。佐手彥當國篠原村と云所の人のむすめをかたらひしに。名殘をしたひけれは。夫鏡を形見にとらせけり。

猶跡をしたひて桑河と云川を渡に。此鏡を河に落し入ぬ。さて山にのぼりて。さてひこをまねきけると。肥前國風土記に有と八雲にはのせられたる歟。同事歟。篠原と云所はひれふる山よりは三里斗南にあたりしやらん。松浦河と玉島川とは少へたゝりたり。此所の鏡の神（宮イ）と申は。大宰少貳廣嗣神と成たる所なり。廣嗣うたれし所は松浦近き浦なり。

玉島の此の川上に家はあれと君をやさしみあらはさすけり

此歌は昔山上憶良玉津島浦に逍遙するに。釣する女とも有。かほみめかたち人にすくれたり。何里いかなる家に住そと問て云。うたかふらくは神女かと云り。此女みなわらひて云。只山水にあそふと云々。さて此歌をよめりと云々。八雲にも見えたり。私云。我等玉島にて尋しかは。玉島川上に廿余町東に君尾と云ふ小山有と云り。是はかの歌に付て。後の人の造いたせる名所かと存き。君をやさしみとは。君を恥て在所をあらはさぬと讀りと云々。

とゝめえぬ命にしあれは敷たへの家より出てゝ雲隠れにき

しきたへの家ともよむへきなり。

我はもややすみを得たり皆人のえ難くしたるやすみを得たり

やすみと云うねめを人々思かけたるを。一人逢見て讀る歌云々。師説云。此歌をはあまねく我はもややすみを得たりと申歟。家説には我斗ややすみを得たりと。口傳なりとをしへ給しなり。我はもや。我はりや此文字の讀あやまりかと云々。我はりとは我はかりなり。

忘れ草吾したひもに付たれは鬼のしこくさことにし有けり

忘れ草は萱草なり。住吉岸の草是也云々。わすれんとすれ共不被忘と云心なり。絶て久き女に逢てよめると云り。萬葉には相聞と書たるは戀の歌なり。紫苑をは思草と云一説有。八雲に思草と有は紫苑の一名と云々。又尾花かもとの思草とあるはりんたうなり。鬼のしこ草とは紫苑なり云々。私云。萬葉一説云。鬼とは凶と云義也。しことはしこ名なり云々。是等非師説。

夕つく日さすや岡へに造屋の形をよしみしかそよりくる

ゆふつくひとは夕附と書り。かたちをよしみとは。地形のよきと云心也。しかそよりくるとは。しかれは寄來云々。

朝こちにゐてこす浪とは。風吹てゐての堤を浪のこすと云なり。ゐてとは堤の水いるゝ水門なり。井ゐとも云なり。

一鳥類

春鳥とは。只春の鳥なり。

坂鳥とは。秋小鳥なり。

す鳥とは。海河等の洲の鳥也。栖鳥にはあらす。

島鳥とは。嶋津鳥同事歟。鵜の眞鳥の事也。

放鳥とは。飼鳥を放たるなり。不吉なり。
花千鳥とは。別の事なり。それは花と万の鳥となり。
すか鳥とは。飛騨の細江によめり。
ひな鳥とは。鳥の子なり。
百鳥とは。万の鳥なり。
朝鳥とは。朝の鳥なり。小鳥の事歟。
百千鳥とは。百千の鳥なり。鶯も此内と云々。
しら鳥とは。鷺なり。
貌鳥とは。只うつくしき鳥と云々。
貌よ鳥とは。ふくろうと云鳥のおさなき時の名云々。又云。
世俗にそなと云鳥云々。
山川の井くゐの上のかほよ鳥影みる時そ音はなかれける
或説云。そなと云鳥は。水に我影をうつせは。水の底なる
魚恐れてうかひ上を取と云々。又云。貌よか沼にもよめり
と云々。貌よ花と云も此沼の草花と云々。杜若の事なり。
一鶯の鳴ちらす花と。萬葉にあり。
うくひすの雲井にわひて鳴と。後撰に讀り。
鶯のなきてわたると。源氏に云り。
やつかさになく鶯と。後撰に讀り。(やつかさとは山の谷の
ことなり。)
鶯の妻をもとむともよめり。
うくひすの夜なかぬにくしと。清少納言枕草子に書り。
しやか父とは鶯なり。郭公の父云々。
郭公をはしての田おさと云也。又はうなひこともいふ。し
てのやまにて童なる故云々。八雲に云り。妻戀するとよめ
り。古を戀る鳥共云り。
朝霧のやえ山こえて鳴ともよめり。
一鴈
鴈は八月柳の末に風吹時はしめて來云々。
朝なきてゆきし鴈かねと讀り。
初田かりかれともよめり。
鴈の來花と書て。かきつかの花と清少納言枕草子に書た
り。此草に花咲比必々鴈來云々。葉も草の様もゑんとうと
云草に似て。花は藤花に似て。かつらのあるなり。北野歌
合愚老仕て難せられぬ。されとも舊記有上ははゝからす。
一鴂
なゝきゝしとは。日本紀に云たかむすひの使なり。鴂なり。
やたけの鴂とは。八峯の鴂と云同事云々。
や峰は名所なり。又云。彌たけき鴂をやたけと云云々。鴂
は春はたけき故なり云々。
きゝす妻よふとよめり。さをとる鴂と詠。きゝすのひなとは
鴂の子なり。金鳥とかきてきゝすと讀といふ事無正說。

一喚子鳥
ひと待よひに鳴と讀り。きさの中山に讀り。春の鳥云々。或說云。箱鳥同物歟云々。はこ鳥も春の物と云々。

一鷄
明つけ鳥とも。かけろとも。夕つけ鳥とも云。
曉になく夕つけのわひこゑとも讀り。
かけのたれ尾とよめり。くたかけとも詠。庭津鳥とも讀り。
くたかけとはちいさき庭鳥なり。夜ふかく鳴初と云り。伊勢物語の注には門屋に云り。門屋をくたと云云々。庭鳥は門屋に住と云々。
庭鳥には冠も鉾も連歌の寄合には有へき歟。

一雀
すゝめ色時とは。くれふかく成比を云なり。
すゝめかくれとは。春木の目のいてゝ。いまた葉にならぬ程を云なり。世俗の言なれとも。歌にも連歌にも申へき歟。きゝにくからぬ故なり。
破車と云事は。雀のよりあひにすへきにや。本文に有也。すゝめよく家をうかつともいへり。うかつとは破事なり。
すゝめ鷹とは。つみ小鷹の事なり。貝にもすゝめ貝とよめり。

一烏
やた烏とは。神宮の御使と云り。
みむれ烏とは。いなりの社に云なり。
森しる烏とは。森にすむゆへ也。
さち烏とは。狩庭に云り。烏の有は鹿のとらるゝ物也。
鷹烏とは。それたる鷹なと付たるを云なり。
月夜烏。子持烏。夏なり。
烏とふ大をそ鳥のまさしにもきまさぬ人をころくとそ鳴
烏とふとは烏と云と云言なり。飛にはあらす。烏てふと云言也。大をそ鳥とは大そら事すると云事なり。まさしにとは正になり。不來人を來（コロク）と鳴と讀る也。烏はむくひをかへす鳥と云り。孝の鳥云々。

一千鳥
千鳥なくよしのゝ川の音しけみやむ時なしにおもほゆる君　人丸
古歌は如此のみ讀り。やむ時なしといはん爲斗に。上句五七五はよめり。
さ夜中と夜や更ぬらん芳野川瀬のなるなへに千鳥鳴なり　六條御子
夜更ては水音も瀬のなをもたかきなり。
秋おふる河原の千鳥鳴なへにいもかり行は月渡る見ゆ　家持卿

いもかりとは。いもかもとへゆけはと云ことはなり。

家持卿

河へにも雪はふれらし宮の内に千鳥鳴也ゐん所なみ

正月於内裏聞千鳥詠云々。ふれらしとはふるらし也。ゐん所なみとは。居所なしと詠なり。

清輔

秋生るあとの河原の河おろしにすたく千鳥の聲のさやけさ

あとの河原とは名所なり。河おろしとも讀り。すたくとは多集と書り。ひさきとは木蓮の事なり。

明ぬへく千鳥しは鳴白妙のきみか手枕いまたあかなくに

白妙とは衣の事なり。

讀人不知

今夜こそ涙の川にいり千鳥鳴てかへると人はしらすや

此歌は能因か記に有古歌云々。入千鳥とは居千鳥也。りとると五音歟。但非師説。可尋。

人丸

あふみの海夕浪千鳥なかなけは心もしぬにいにしへ思ほゆ

心もしぬとは。しのにと云言なり。しのにとは千思汝にと云心なり。

兼輔卿

いは千鳥あやな鳴音は何ゆへそなかすの濱のなかす待らん

岩千鳥とは千鳥の名云々。なかすの濱［illegible］は名所なり。

一枕

家隆卿

建保百首　すか原や伏見の里のあれ枕ゆふかひもなき草の霜かれ

家隆卿

家集冬歌　よそへてはうきねの床のあれ枕をしそ鳴なる池の氷に

此あれ枕二首の歌不審なり。先年或人の連歌に仕たりしを。いさゝか不審のよし申たりしに。此歌を證歌にひかれしかは閉口仕き。物をひろく見すして。うたかふ事はあるましきことなり。されとも此家隆卿の歌二首を思に。いかさま古歌に云。

いさこゝに我世はへなん菅原や伏見の里のあれまくもおし

此歌をもや本歌によまれたるらんと。猶うたかはしき也。たしかなる正本を見てそ此疑ははれ侍へき。若かたかななとにも書あやまり。又よみあやまりかと存そかし。其故はアレマクヲ、シソ鳴と書たるを。アレマクラと書たかへたるにや。一首のあれ枕ゆふかひもなきとあるを。ラとヲと書あやまりかとそおほへたる。すへてかたかなの文字は。少の筆つかひのちかひめにあやまりある物也。しかれは古人達もいましめられたる歟。此ヲ此ラ。此チ此テ。此レ此シ。此タ此ク。此ス此ム。此ノ此ニ。此ヤ此カ。かや

うの字に書そんしもよみあやまりも有ぬへきなり。されは和字にかきましふる眞名字をはたしかにかくへしと。定家卿も仰られたるにや。

秋風に心みたるゝたひね哉ゆひとめられぬ草枕して　仲正

石清水の歌合にもかや枕はよめる歟。又稲枕ほうの木の枕をもよめり。

一甃

石たゝみ有ける物を岩に又しく物なしと思ひけるかな　皇太后宮大貳

返し　俊頼

名にしおはゝ身もひえぬへし石たゝみかた敷袖に衣重ねよ

一莚

玉ゆかのおましのはしにはたふれて心はなきぬ君なけれ共　俊頼

此歌はたかひて不逢戀と云題云々。心はなきぬとは。心はなくさみぬとなり。おましとは御座なり。

新六 逆めへにそろゐ刈ほす莚うちおのれかつ〳〵しくかとそみる　信實

そろゐとは。とゝのほらすそろはぬゐなり。

知家卿

とへかしな身もいたつきのさし莚ひとへに戀る心なかさを

いたつかはしきと云詞を。板付となすらへたる歟。

綾莚をになるまてに戀わひぬ下くちぬらしとふのすかこも　鎌倉右大臣

あや莚をになるまてにと萬葉に讀り。綾莚をしきやふりて。緒はかりに成たる心歟。

水上月 木かくれて浪の折しく谷川のみな莚にも月そすみける　俊頼

みなむしろは水むしろ歟。

いな莚しきつの浦の松風はもりくる折そしくれともしる　清輔

判者俊成卿云。左歌。松風に時雨をまかへて。もりくるをりそ時雨ともしると云る。心はよろしく侍を。此稲莚の本躰を思に。しきつの浦に事よるへしともおほえ侍らす。河ならはをかしかるへし。住吉の松か下には。稲莚しくへしとも覺侍ぬなり。又稲莚斗にて旅の心有へしともおほえす如何云々。作者云。稲莚とはたひを云事にはあらすや。近人歌にも旅にかへすは稲莚とやと云り。又ふるき式にしるせるをみられさるにや。河にこそあるへけれと侍は。みな莚を思たかへ給へるにや云々。

一簾

いよすたれ。しのすたれ。こもすたれ。あらすたれなと〻よめり。

一答籌（カタミ）　師光

正治百首
賤女かかたみの底はむなしくておはぬ若菜に日數をそつむ

衣笠内大臣

磯なつむ海人をとめらか花かたみ浦はの浪に影やそふらん

一火取　讀人不知

六帖
たき物の籠の下烟ふすふとも我獨をはしらすへしやは

知家卿

新六
薫物のひとりのおきのいきなから灰まきれても世をすこす覧

一挿頭　衣笠内大臣

新六
左藤右櫻とてとりなれしかさしの花もむかし成けり

是は舞のかさしの花の事なり。

一秡麻　爲家卿

新六
今は我すてられなから麻ぬさの君か手なれし時そ戀しき

人丸

六帖
すへ神にぬさとりむけて我こえん行逢坂の山とわかるな

すへの社とは惣社なり。

讀人不知

同
あはなくに夕けをとふとぬさにきる我衣手は又そくつへき

一標　人丸

万
淺茅原小野にしめゆふそらとをいかゝといひて君を待らん

讀人不知

同
やま高み夕日かくれぬ淺茅原後見んためにしめゆはましを

夕日かくれの淺茅原と云言。萬葉歌に取てよむへき言なりと師説なり。

家隆卿

同
君に似る草とみしより我しめし野山の淺ち人なかりそね

人なかりそねとは。人なかりそと云ことはなり。ね文字はやすめ字云々。

大伴駿河丸

六帖
山主はけたし有ともわきも子かしめ結はんを人とかめやは

一衣　爲家卿

つかふ迚きしや衣のさかさまにとしやゆかなん今は成やと

忠臣のつかふる道をいそくとて。夜の衣をさかさまにきたりしことなり。ふる衣。うすわたにおれる衣。初狩衣。新

衣。にほはし衣。けよそいの衣とは內衣の事なり。內衣にはひもなしと讀り。

讀人不知

鶺鴒衣　かしは木のゆはたそむてふ衆のあはんあはしは灰の心に

はいの心とはあくの事なり。

万　筑波ねの新桑繭の衣はあれと君かみけしとあや（レイ）にきまほし

みけしとは御衣也。あやにきまほしとは。あやにくにきまほしと云々。又あやとはほめたる言にも云り。

爲家卿

新六　あさましや賤か井本のとき衣ふみあらはれは人もこそしれ

ふみあらふを文題にそへたるなり。

人丸

家集　とき衣思ひみたれて戀れともなとわかゆへととふ人はなき

とき衣とはときみたしたる衣なり。

顯國

我戀はしつの借きぬをのか身にあはぬことをも歎きぬる哉

師時卿家歌合云々。借たる衣なり。狩衣にはあらす。

重家卿

月影に甲斐のけ衣さらすかとみれはしらねの雪にそ有ける

照山雪と云題云々。甲斐の白根は雪の時ならても白歟。

好忠

わきも子とさ夜のれ衣重ねきてはたらか（へ歟）近みむつれてそぬる

顯季卿

堀　君か爲ゆはたのきぬを取してゝ神にそまつる萬代まてと

ゆはたは帶にも讀り。顯注未勘に委ある歟。

人丸

家集　ふる衣うちすて人は秋風のたちくる時にものおもふものを

同

同　しほ衣あまの御門を思ひけるうき世にふれはきぬ人もなし

あまの御門とは天の御門歟。不吉事歟。天智天皇御事歟。

好忠

さゝら浪立ておりつる水のあやは夏のかはらのすゝみ衣そ

水の綾とは文浪の事なり。又うす物の綾は水の文なり。夏衣云々。

いなをさの甲斐のけ衣。玉衣。裏わけ衣。せみの羽のうすら衣。白麻衣。あま衣。海人衣。尼衣。海人の狭衣。あらはし衣。（あらはし衣は出家の衣歟。）袖つき衣。袖續歟。

一裳

信實

新六　たか爲となかき契をわきも子かうはものこしの例にそひく

郁芳門院安藝

久安六首 衣手そさえ渡りけるあられちはわかものこしにきれは成息
わきも子か染裳の引腰とよめり。

一袴
あやめ引しつの狭袴ぬれ〳〵も時にあふとそ思ふへらなる　好忠

一緌
家集 明たてはまつさす緌の糸よはみたえてあはすは猶や亂れん　貫之
これは狩衣の入ひもの事歟。

寄見物戀 忘れすやかさしの花の夕はへに赤ひもかけしをみの姿を　經信卿
逢事は片結ひなるわきも子かゆはたの紐よいつかとくへき　基俊
心みにゆはたの緌をときそめて深くしみなん色はかはらし　殷富門院堀川
俊忠かもとにて戀十首歌云々。

一帶
家百首戀 年久にゆはたの帶を取してゝ神にそあはんいもにあはんと　顯季卿
此歌の五文字斗かはりて。祝の歌にも有不審也。　信實

新 折しもあれえやは心をかけ帶のいもゐは胸のへたて成へし　家持卿
万 古のしつはた帶を結ひたれ誰と云とも君にはまさらし　仲正
七日帶戀 君やさはひらおの下にほの見えて殘りゆかしき菊の下帶
玉のおひ。ゐての下おひ。戀によめり。紫のこ染の帶。雲の帶。石の帶なとゝよめり。

一綾
家集 くれはとり二村山をきて見れは目もあやに社月はすみけれ　俊頼
家集 うらもなく今は一重にわきも子か逢見そめてん雲鳥のあや　顯季
雲鳥の綾とは夏の綾歟。くれはとりとはあやの惣名なり。
爲兼卿歌にはは鳥とよまれたり。一説歟。

一錦
らんせいの錦の色もいかならん香さへにほへるやま櫻哉　爲家卿
万葉旋頭歌 こま錦ひものかたえそゆかにおつるあすの夜こむといひせは取置てまし　人丸
こま錦とは高麗の錦なり。

俊頼

家集 朝露のをきゐる庭のとこ錦たれしき島のやまと撫子

玄有法師

歌合月 唐國の錦にをれることのはも見えぬ斗にすめる月かな

判者清輔云。何事にか侍らん。文にくらき物なり。子細にまとへり。若明詠に侍。織錦機中。已弁相思之文の心にや。凡本文を歌に詠事は古人誡之。昔の歌にはいとも見えす。就中歌合にはよしなき事歟。

一布

讀人不知

六帖 をち方に白き花こそいなおさの甲斐のてこなのさらす手作

かひのてこなとは人の名と云々。手作りとは布名云々。

仲正

遠村卯花 むかへおの畑のかこひの卯花やしつのさらせる手作の布

むかへおとはむかひのお也。山の尾なり。

中書王宗

布 しかまなる市女かもてるかち布の色ふかくのみ人を戀つゝ

仲正

七日布戀 いかなれは戀にむまるゝたゝ布のなをさゆみなる人の心そ

さゆみとは布のすゝし歟。

仲實

堀川 石文のけふのせは布はつ〳〵に逢見ても猶あかぬけさ哉

けふとは郡名なり。せは布は細布なり。はたはりのせはきを細布と讀り。

俊頼

卯花のかきねえけり山かつの月にもさらすけふとみつるは

けふとは兩説なり。一には郡の字と云々。一には毛布と書たり。ゑそは鳥の毛にて布を織といへり。此歌も毛の布とよみたるにや。奥布かたひら布なとゝもよめり。

一綿

為家卿

新六 駿河なるふしの蚕子のにゐ綿はたかねの雪の色ににるらし

しらぬひのつくしのわたとよめり。兩説歟。一には白ぬひ。一にはしらぬ火なり。

一いと

しけいとゝは下品の絲なり。麻のうみいと。績とも云。

知家卿

我かくてわく手のいとのいくめくり命なかくて年をへぬ覧

顕季卿

家集 河内女の手染の絲の亂あひてよりあふへくも見えぬ君哉

知家卿

一機

時雨つゝ秋のみけしを織はたのおりてにあはすたつ嵐かな　光俊

山賤のあさ手にかけてをる機のおさ〳〵しきは我身成けり

おさ〳〵と云事。源氏に多書り。說々多歟。

一斤（ハカリ）

水はかり。稻はかりなとゝよめり。一さほとも云なり。

一車

數ふれは車をかくるよはひにて猶此世にそめくりきにける　俊頼

七十をは車をかへるよはひと云り。（く歟）

老か世にまたしちたてぬ小車のつたふ力もなきそかなしき　信實

しちをは公卿に成て用云々。

（堀久百首）行なやむ牛のあゆみに立塵の風さへあつき夏の小車　定家卿

小車の錦のひもとくとは。おほく逢戀によめり。

かさり車。すき車。賀茂によめり。

しのひ車。よはひ車。むな車とは。人ののらぬ時の車なり。

柴つみ車。炭車。柴車とは車にあらす。

毛車。手車。文車。

一樋

傳ひくるうちひを絕すまかすれは山田は水も思はさりけり　西行上人

うちひとは。樋に繩を兩方に付て。水をうちなかす事歟。

（井題歌）かけ渡す竹のわれひにもる水の絕々にたゝとふ人そなき　爲家卿

しめはへて山田の下ひくちぬらん早苗もしつむ五月雨の比　家隆卿

田河のうてひとよめるは打樋歟。石樋とは石にてしたる樋なり。うつみひとは土のそこをとをしたる樋云々。北國にはしほをも樋にかけたるなり。

一筏

（万長歌）いつみの川にもてこゆる槇のつまてをもゝたらすいかたに造のほすらん略之

百にたらぬいかたとつゝけたり。いかとは五十と書故と云々。

吉野川。戸無瀨川。越（エチ）川等に讀り。

筏繩とよめり。いかたのたゝむとは重るなり。

一舟

（万）青浪に袖さへぬれてこく舟のかしふる程にさよ更なんか　家持卿

かしふるとは。舟をつなかんために。木の長を濱にゆすり入て立て。それに舟をつなくなり。大船にかしふり立てゝなとよめり。梢を下にしてふりたつる也。

兼盛

あら浪のかけくる岸の遠けれはかさまにけふそ舟渡する

かさまとは風のひまなり。

小侍従

五月雨に早緒の繩は朽はてゝしほにひかるゝ舟そあやうき

はやおとはろかひに付たる繩也。

泊舟　光俊

岸近くよせつなはへてさす舟にこゝそとまりと人むかふ之

万　人丸

さよふけてほり江こくなる松浦舟梶音たかしみを早みかも

みをはやみとは。水の深き所は早云々。

赤ち小舟。あけのそは舟。さにぬりのあかし小舟なとゝ云は。にをぬりたる舟なり。

万葉　讀人不知

百つ島足から小舟あるきおほみ名祉かるらめ心はもとへと

相摸國云々。あしのかろき船と云々。

建久歌合　顯朝卿

朝ひらき日より待えて百つしまあしから小舟とまり出なり

此歌は前の歌を本歌によめり。あさひらきとは朝開也。朝ほらけの事也。

おきつ鳥鴨てふ船とは舟の名也。

海人の石船とは。石を舟のおもしにとり入たるを云云々。魚とり入て後は。石を海にすつると云々。

つなてひくたなをの船とは手繩歟。

いつて船とは。ろを五たてたる小舟也。

伊豆出舟とは。みをか崎によめり。いつれも早き船の事云々。

西行上人

くれ船よ朝妻わたり今朝なせそいつきのたけに雪しまく也

近江湖のわたり也。しまくとは風のまく也。くれ舟は木つみたろ船歟。

盛方

かこのおす音にしるしも霧のまにゆらの戸渡斬のすゝ船

かことは舟こく人なり。又ちいさき舟をもかこと云り。

鈴船とはらうまや路の舟の事なり。

六帖　讀人しらす（イ无）

潮をこくかたかけ小舟流る共いたくなわひそ梶取にゆかん

ゆらのとを渡る舟人かちをたえ行ゑもしらぬわか思ひかな

梶をたえとは。かちの緒の切たるなり。

五月雨もをやむ晴まのなからめや水のかさほせま菰かり舟
や梶かけ島かくれ行とよめり。や梶とは彌梶なり。
西行上人

一碇
こき出るとまりの舟のいかり綱へにくりあくる聲聞ゆなり
光俊

一綱
思のつな。よせつな。千引のつな。心のつな。海人
のふる綱。ねりそのつな。

一縄
ひたのかけなは。あまのかく縄とは。亂たる事によめり。
只又かくなはともよめり。古今に見えたり。
たく縄とは兩說有。一には縄をたくるなり云々。綱の縄を
くりよすることなり。一には縄を燒なり云々。燒とは。網
のふるく成てすてたるを。あまのいさり火にたきて魚を
取とも云り。海人の縄たきいさりせんとはと云歌より。こ
の說々は出たり。これもかきくけこの五音歟。
千尋たく縄とよめるはたくる縄歟。

一緒
うれへのを。心のを。つりのたなをなと〻讀り。
万 住吉の津守あひきのうけのをの浮ひかゆかん戀つ〻あらすは
津守の浦は名所なり。あひきとは網引なり。

一網
万 大宮の内まて聞ゆあひきすとあこと〻のふるあまのよひ聲
讀人不知
あことは網人なり。
おみの浦のひき網のつなのたくれ共長きは春の一日成けり
好忠
おみの浦は江州云々。
今は又日も夕かけてをく網の遠くな出そあまのうけ舟
知家卿
うけとは網縄に付るおけなとなり。

一魚梁
新六 せきかくろ田上川ののほりやなさかまく水の落そわつらふ
知家卿
みなせ川行瀬の水のくたりやな春の日[光イ]よりにはやさして見
爲家卿
やなせとは梁うつ瀬なり。梁くつれとは梁の破たるなり。

師說自見集下

神祇　寺　王　院　親王
歌人　民　翁　優婆塞　みとり子

未通女　女　いも　妻　使
海人　田子　たくみ　遊女　遊士
傀儡　樵夫　長　山かつ　賤人
總角　垂髫　奴僕　童子　楊貴妃
李夫人　王昭君　上陽人　陵園妾　七夜
大嘗會　元服　行幸　旅　狩獵
哀傷　夢　歌詞少々　述懐　鶴
鵜　鷺　鵲　烏　鶏
國　禁中　仙家　都　閑居
岩屋　宅　庭　屋　屋形
隣　山家　田家　郡　里
村　市　驛　庭　床
窓　戸　門　垣　籬
御調　酒　樂　文　硯
太刀　刀　弓　箭　鷹行
沓

註文中合點者私之註也。
任思出註付之間。雨書花之。
次第不同。以外比興々々。

一神祇

あしかひのあらはれ出し昔より神をは君とあふきそめてき　顕輔
日本紀云。國土の始の神の形はあしかひの如と云り。鳥子の形なり。是則神と君との始云々。

飛降る名なしの雉を射さりせは天のはこ矢も投さらましを　顕輔
なゝしのきしとは。七きゝしともよめり。
あまの羽こ矢とも。天のはゝ矢とも。同事なり。
なけさらましとは。矢をつきやりたるなり。（是も日本紀に云り。）

万長歌
天の原よりむまれたる神の御門をおく山の神木(サカキ)か枝にしらかつけゆふ絹(キヌ)付て齋之。
しらかとは四手なり。
ゆふきぬとは。絹をはらへにしたるなり。

石清水臨時祭
男山かさしの花も春なれはをみの衣ははゆるなりけり　仲實

同
男山峯の櫻にもろ人のかさしの花をたくへてそ見る　乘昌

日吉歌合
いさなきのぬきし衣もなき物をなとあふとはわつらひの神　顕昭
判者云。日本紀に伊弉諾尊衣をぬきて給しかは。煩の

神と成し事にや。け近き事にあらす。

光俊

み空より跡たれたりしあとの宮その代もしらす神さひに見

鹿島に跡の宮と申は。大明神始て天下給し所云々。

同

神さふる鹿島を見れは玉たれのこかめ斗そまた殘ける

鹿島に壺と云物一有。神代よりとゝまりたりと云々。

後京極殿

鹿島のやわしの羽かひにのりてこし昔の跡は絶せさりけり

鹿島のやとは。此や文字はやすめ字なり。只かしまのなり。

有家卿

賀茂 神山の峰のま榊萬代と香をかくはしみ立そさかえん

かみ山。かも山。五音云々。香をかくはしみとはかうはしきと也。

賀茂氏久

神山にあまのいは船こきよせてつなき始しも我君のため

あまの岩舟とは。神のあまくたり給し事なり。石舟にはあらす。

久方のあまのさくめか岩船をとめし高津はあせにけんかも

太皇太后宮大貳

御秡して詠めわひぬる雪もよに神のひほろきとくろ嬉しさ

此歌。賀茂に籠たるに。雪いみしうふるに。神の御おろしとて。くほてを入たるによめると云々。ひほろきとは說々有。神供の事とそ申める。神のひもろきときてけり。ひらの高根にゆふかつらせりとやらん。小野篁よめることを思て。今此歌をもよめるやらん。すいして侍なり。ひもろきの事は別にあら〳〵註了。

荒木田延季

神樂 白いとのたえす落くる瀧のはら跡たれそめて幾世へぬらん

たきのはらは伊勢歟。

爲家卿

伊勢 あらかねの神のはしめに跡たれし宮居の山は常磐かきはに

あらかねの神とは。太神宮の御事にや。地神の始とよまれたる歟。今案なり。

吾やとの神とよめるは家神なり。宅神なり。よしのふか歌に讀る歟。

顯昭法橋

歌合祈戀 あふ事をよるとや人に契るとて一言ぬしにねきそかけつる

衆議判云。夜とやとかつらきの神に祈けんを故有とて。面白き持と云々。

一言主はかつらきの神云々。

玉ての神とは住吉の御事云々。
ならひの宮。いその宮。いすゝ川によめり。
うみの宮。勢州にも筑前にも有之。

歌合
あつまちやはり野の清水えてしよりゐての社は名付初てき　顯朝卿

判者光俊云。井ての社は。昔景行天皇の御時。針野に御幸給ける時。寒水をえて則社を祝けん。もろこしまて思よそへられて。いみしく侍かな。和漢隔尊是同云々。

檜原もるふるの社の神やつこ春きにけりとしるらめやそも　好忠

笛吹宮。和州。(公任詠。)　朝日宮。勢州。
あかたの宮。上野。　しみつの宮。豊州。
椙社。和州。

一寺

そはたつる枕におつるかねの音も紅葉をいつる嵐の山寺　定家卿

あかたなの花のうれはも打しめり朝霧ふかし峯の山寺　為家卿

此両首見躰なり。古歌をへつらはさる躰歟。

入あひの遠山寺のかねのこゑあな心ほそ我身いく世そ　基俊

万
橘の寺のなかやにわかいねしうないはなかは髮あけつらん　讀人不知

此言不審。

賀茂社百首
ひえの山りうきやちかく成ぬらんよはにさえたる問答の聲　慈鎮和尚

一帝王

万
すへらきのかみの御門を畏みてさふらふ時にあへる君かも　讀人不知

同
すへらきの遠つ御門と有かよふしまとを見れは神代にそ思　人丸

同長歌
あめの下しろしめしけるすめらきの神のみことの大宮はこゝときけとも略之

皇日祖。大王。皇神祖。皇。是らはみなすへらきとよむなり。すめろきとも讀り。同事歟。

一院　はこやの山。
一東宮　春の宮。
一中宮　秋の宮。
一親王　竹の園。
一大臣　影なひく。おほきまちきみとも云。

万
ますらおの鞆の音すなるものゝふの大まうち君楯たつらしも　聖武御歌

一歌人

なしつほの昔の跡に立かへりわかのうらはそ浪のより人　家長

一民

おもふへき民のつかさの名斗に歎くちからの休むまもなし　為家卿

これは民部卿の事をよまれたる歟。

一翁

新六 帰るさの家ちをいそく道に出て夕とゝろきの民のこゑかな　信實

ゆふとゝろきとは。さはかしき事歟。

四のおきな。みたりの翁。つりのおきな。北の翁なとゝ云り。

若なつむ野原を見れは竹とりの翁もむへもたはれあひけり　顕昭

たはれ逢とは。なひきましりたる躰なり。

竹とりの翁を顕昭説にはたかとりの翁と云り。かくや姫をは鶯姫とも云り。

一優婆塞

うはそくか朝なにきさむ松のはは山の雪にや埋れぬらん　好忠

あさなとけ朝なり。松のはをきさみて食する事歟。行者のくひ物歟。源氏にも松のはをすくと書り。すくは食物なり。

堀百 うはそくは行すらしまきのたつあら山中にまふしさしつゝ　師時卿

まふしさすとは。柴なとを折かけたる歟。

一穉子（ミトリコ）

万 緑兒のすもりめのとは求むてふちのめや君かおもゝとむ覧　よみ人不知

すもりめのとゝはちのなきめのとか。ちのめのとゝはちのあるを云。

同 わかせこに戀とにしあらは緑子の夜なきをしつゝいねかてらくは　同

いねかてとは。ねかねたる心なり。

一未通女

万長歌 あしのやのうなひ乙女かやとせこのかたおひの時にとはなりのかみたくまてにならひゐて略之。

乙女はいまた夫せぬ女云々。仍未通女に書り。

一女（ヲウナ）

西行上人

いちこもるうはめ女のかさねもつこのて柏に両ならへん
うはめとは老たる下女云々。この手柏は両説在歟。一には児の手に似たる柏云々。かへての事歟。一には柏の葉ににたる木葉云々。或説云。世俗に手鞠花と云木葉云々。花のしろくこゝりてさくなり。

一妹　河内女。初瀬女。難波女。是皆其所の女云々。

万　いけと〳〵あはぬものゆへ久堅のあま露霜にぬれにける哉　人丸

いけと〳〵とは。行とも〳〵なり。あま露霜とは天の露霜云々。此歌いもと云事見えす。いもかもとへの心にや。尋へし。

同　あふみの海沖つ白浪しらす共いもかりといはゝ七日こえ南　人丸

いもかりとは。いもかもとへと云言なり。口かすの遠事には。七日行八日行なとよむなり。

同　久かたの天てる月の入ゆかは何になそへていもをしのはん　同

なそへてとは。なそらへてと云言なり。

同　人めもる蘆垣こしにわきもこか逢見るからに事そさた多き　読人不知

さたおほきとは。さた過たると源氏にも書たる同心歟。事ふりたるやうなる事歟。

一妻　遠つまとは。遠所の妻なり。
ともし妻とは。まれなる妻なり。
一夜妻。戀妻。人妻は人の女なり。

初瀬のやゆつきか下に陰妻あかねさしてれる月夜に人みけんかも　人丸

ゆつきとは。つきの木なり。

一使

万　み空行雲も使と人はいへと家つとやらんたつき知らすも　家持卿

たつきとは。たよりなり。雲も使と云事。萬葉の歌言にはむねとよむへしと。師説なり。

一海人

もしほやくあまの濡衣ほす見れは磯への松そはつ木成ける　能因法師

はつ木とは。物ほすくゐの事云々。

百首　雨ふれはあまのかくみにふく苫のもろ心にもあらぬ君かな　俊頼

あまのかくみとは。ちいさき舟なり。片かた斗ふきたる心歟。

兼宗卿

六百番歌合寄海人戀
わか戀はあまのさかてを打返し思とけてや世をもうらみん

此歌。右方云。あまのさかて。異説有事なり。ひとへに海人に定よめる如何。判者俊成卿云。左。海人のさかてことに庶幾すへきにはあらねとも。海人によせよめらんにをきては。何の難かあらんや。近來人々異説をいたす云々。無其理歟。愚老こそ往昔によみて侍しか。それを難するよしに侍へし。伊勢物語の外ことなる證據なかるへしと云々。あまのさかてとは。人をのろふ事也云々。異説歟。

一田子

嘉陽門院越前

千五百番歌合
戀ちにもをり立ぬれはよそにみし田子のも裾を袂いそみる

戀ちとは沼水やうのとろ水歟。それを戀ちになすらへたるにや。

一匠（タクミ）

人丸

万
とにかくに物は思はすひたゝくみうつすみ縄のたゝ一筋に

ひたゝくみとは番匠の惣名なり。それをひたのたくみと云人なりと心得たるはあやまりなり云々。木の道のたくみと云同事なり。師説なり。かなたくみ。桧たくみ。ひ物たくみなとゝ云り。

西行上人

まさき分るひものたくみやはてぬらん村雨過ぬ笠とりの山

笠とり山は醍醐山なり。まさきとはまさ木のかつらにはあらす。板のまさなり。

一遊女

家房卿

浪の上にくたす小舟のむやゐして月に歌ひしいもそ戀しき

顯昭

あしまわけ月にうたひてこく舟に心そ先はのりうつりぬる

河のせに浪のうき草うかれありく

むやゐとは。小舟を二も三も一にくみ合なり。もやうとも云。

信實

歌合遊女
ふなよせの岸の上なる門屋よりあやしくいもか見え隱する

判者光俊云。遊女か住家にこそ。同事と申なから以言かこと葉にも。船中浪上とこそ書て侍れ。ふなよせの門屋と侍る。只ひとへにおかしからんと。たしなまれたることそよしなくやと云々。

一遊士

万 海原の遠き波ちをたはれをの遊ふをみんとなつさひそこし　讀人不知
なつさふとは。むつれたるていなり。
万長歌 をとめらかかさしの爲にたはれをのかつらのためとしきませる國のはたてにさきにけるさくらの花の略之。

石川女良
たはれをと我はきつるを宿かさす我を歸せりをそのたはれを

返し　大伴黒主
あそひをに我は有けり宿かさす歸せる我そたはれをになる
此歌黒主か物語には。たはれをと我はきつるを火もとらす我をかへせりをそのたはれをと書たりしにや。身をやつして。下女の火こひに隣の黒主かもとへ行けるに書たりし歟。
あそひを。たはれを。同事云々。

一傀儡

慈鎭和尚
寄傀儡戀 一夜見し人のなさけそ立かへる心にやとる靑はかのさと

定家卿
同 一夜かす野上の里の草枕むすひすてぬる人の契りを
靑はか。野上。同宿云々。

有家卿
東路やかやつの原の朝霧におきわかるらん袖はものかは
かやつとは江州か尾州か。近江より東路とよめり。海道ならは尾州か。可尋。

爲家卿
寄傀儡戀 大井川岸の笘やの竹柱うかりしふしやかきりなりけん
山城の大井河にも傀儡有ける歟。若又駿河の大井川歟。可尋。たとへ國はいつれにてもあれ。證歌は同事歟。

寂蓮
百首傀儡 小倉山ふもとの里のさひしきはゐせきの音よ峯の嵐よ

寂蓮
同 哀なきおほよそ鳥の心すら月夜となれはされありくなり
此小倉のふもとの里と。傀儡によまれたるにしりぬ。大井川は山城の事歟。されとも此歌にはさして傀儡の言なし。猶不審なり。おほよそ鳥の歌。傀儡と聞たり。くゝつをはおほよそ鳥と云り。

一樵夫

信實
身におへる己かしわさを賤のをか手もとゝたえて取爪木哉

後京極攝政
寄樵夫戀 こひちをは風やはさそふ朝夕にたこの柴舟行かへれとも
たこは浦の名にはあらさるか。柴舟は山に有へき歟。なを

可尋。
家隆卿
柴舟の岸よりおつる小さゝ原風よりあらき浪の音かな
此歌よりと云言ニ有。不審。以他本可校合。是は浪の音を風によせられたる歟。柴舟斗にても樵夫はあるへき哉。

一山左（やまかつ）
新六 山かつのそのふのすもゝ咲にけり風もいとはて花や見る覧　衣笠内大臣
同 やまかつの賤の麻衣みしふつき草とる田ゐに立ぬ日はなし　同
山さつと書たる歌も有。

一健男（マスラヲ）
万 ますらをのうつし心も我はなしよるひる分す戀しわたれは　人丸
夏川のせゝに鮎つるますらをも我らき影はみつからそ思ふ　好忠

一長
新六雑 人のをさの神のをしへにしたかひて聲〳〵すめる九重の庭　信實
人のをさとは人長の事歟。人長かなつる事にや。河長。門のをさ。船のをさ。所のをさなとゝ云り。をさとはそのことをつかさとる人の事云々。物に長したる人なり
譬父私云。人長とは神楽の時榊を取て舞者なり。任思出書（以下十五字イナシ）附候之間。定所書等在之歟。

一賤人
万葉 しつたまきかすにもあらぬ壽もてなとかく斗我戀渡る　人丸
秋歌中 やまかせに初霜かけてしらたつの衣してうつしつの神人　家隆卿
しらたつの衣とは。しらつるはみの衣か。尋へし。

一總角
夏草 あけまきは跡たにたゆる庭もせにおのれ結へと茂る夏草　定家卿
あけまきはむすふと云事によめり。あけまきとは。いまたわらはなる時の名なり。
源氏に。はなちかふあけまきの心さへそうらめしきやとあるは。馬牛飼童のことなり。よもきふに申たる歟。

一垂髫
日くるれは山路をいそくうなひ子か草刈笛の聲そさひしき　宗親王
新六 うなひ子かふり分髪の行末によそへてかくる草かつらかな　知家卿

信實

同 うなひ子からち垂髪を振さけてむかひつふての袖かさすゝ

同

同 いとをしやまたかふろ成うなひこも焼野にあまたつ花ぬくゝ

西行上人

うなひ子かすさみにならすむき笛の聲に驚く夏のひるふし

あけまきとは。いまたゑほしきぬほとのわらはへの事なり。うなひ子はかふろなるほとの子云々。

一奴僕

有家卿

新撰歌合 今はさて慈のやつこの行末もたのむみおやの神にまかせん

此歌方人云。やつこはぬひの心なり。この歌両はれこと讀れたり。不審云々。御親レ神とは下賀茂の御事歟。それを親にそへたる歟。

一里子

家隆卿

河上納涼 よと河の入江のきしの柳かけつなく小舟にすゝむ里の子

さとの子とは。村や里やなとのわらはへなり。

一楊貴妃

定宗卿

みかきおく玉のすみかも袖ぬれこ露に消にしのへそ悲しき

まほろしの使なとゝ云ふ事もよめり。

一李夫人

同

ほのかなる煙はたくふ程もなしなれし雲ゐに立かへれとも

雅有卿

なき人はかへる煙もたてぬへしいけるつらさそ面影に見ゆ

長方卿

巾〳〵にちりなん後の爲とてもしほれし花の貌もはちけん

一王昭君

定家卿

うつすともくもりあらしと頼みこし鏡の影のまつつらき哉

有仲

瀧津せの調へを袖に引そへてならはぬ道にいたるへしやは

六條院大進

道すからなくさむやとて引琴のをことに玉をぬく泪哉

後徳大寺左大臣

あらす身のなり行たひの別ちに手なれし笛の音こそ忘れ

一上陽人

高遠卿

そこはくの年つむ春にとちられて花みる人に成ぬへきかな

春往秋來不記年。唯向深宮望明月。

宮鶯百囀愁厭聞。かやうの心をもよむなり。

二條太皇太后宮大貳

紅にたとへしかほも霜ふりてうとき人には見えしとそ思ふ

定家卿

一陵園妾

なれきにし空のひかりのこひしさも獨しほるゝ菊の上の露

長方卿

春のうれへ秋の思ひのつもりつゝみよにも今は成にける哉

登蓮法師

松の戸をとちてかへりし其日より明る夜もなき身の思ひ哉

一七夜

君か代はなかひこの粥七かへり祝ふとはにあらさらめやは

俊頼

兼昌

をしてるやうのはふきける昔もや今夜は千代と祝初けん

七夜とはうふやの七日の祝なり。甲斐國長ひこの米の粥と云てすゝると云々。うのはふきけると云は。日本紀に云り。神武天皇の生給し事なり。うのはふき合せすとは。鵜羽とも茅葉とも。両説なり。

雅經卿

一大嘗會

君まちて二たひすめる河水に千代そふ豊のみそきをそ見し

此歌は建暦二年豊のみそき二たひをこなはれける次日。定家卿のもとへつかはしける云々。

返し　定家卿

君か代の千世に千代そふみそきして二度すめるかもの川水

一元服

顯仲卿

百首 もとゆひのこそめの糸をくり返し衣の文に引やうつさん

こ染とは紫のこそめ云々。

仲實

同 今夜ゆふ若もとゆひの紫のま袖の色にはやもならなん

ま袖とは只袖なり。萬葉書には左右手と書てまてとよめり。仍左右の袖とも一説云々。

俊頼

同 うなひ子かはなちの髪を取たてし巻そめ川よ淵瀬かはるな

うなひ子とはいまたかみゆはぬおの子云々。巻そめ河は名所。もとゆひは卷ゆへ歟。

兼昌

同 かそいろの共に祈れはふたりさすしそくの影に千代そ移れる

六條院大進

同 紫のはつもとゆひにゆひおかんつるはみ衣ちとせふるまて

近比連歌につるはみ衣を仕事憚有と申歟。祝にも多よみけり。

一行幸　　爲家卿

すゝ申すみゆきの庭は遅けれとあらぬわしりに人いそく之

鈴申とは。少納言の鈴のそうの事歟。わしりとははしる事なり。鈴のそうははしるにや。

一旅　　清輔

たひつとにもたるかれ飯ほろ〳〵と泪そ落る都おもへは

仲正

いかにせんすくちはゆかて足柄やよこはしりする人の心を

横はしりは。昔は足柄と富士とのふもとの海へたに有けり。浮嶋か原と海の成てのちは。さつ田坂の南のふもとの礒にあるなり。浪の間をうかゝひて走通ふなり。

一狩獵　　問人連老

万 玉きはるうちの大野に馬なめて朝ふますらんその草ふけの

内野。御狩の事歟。江州なり。

ふけ野とは深野なり。只草ふかき野なり。

同長歌 わかこもをかりちの小野に鹿こそはいはひふせらめ鶉こそいはひもとをれ略之

かりちの小野は名所なり。

いはひふせらめとは。はいふしたると云言なり。い文字はやすめ字なり。

いはひもとをれとは。はひむつれたるなり。此いもしもやすめ字と云々。

堀川次郎百首の題には。狩獵と書て狩とよめり。

清陰

よきことを萬代かけて見つる哉かつらき山のけふの御狩に

是は日本紀竟宴歌云々。

仲正

居待月 山さつかねらふしかきや茂るらん居待の月の出よさりする

山さつは山人なり。

しかきとは。鹿をねらふ時。影にさしたる木なり。

しけるらんとは。しけかるらんなり。

顕輔

ますらをか朝ふす野へを見渡せは雲井遙にかへるせこなは

これは野徑眺望の題にてよめると云々。

せこなはとは。狩はに鹿を巻いたす時。繩を引てせこの行事なり。

爲家卿

御かり人なすの夏野は心せよ高草かくれ折木ふすなり
折木とはふし木の事歟。ふし木はなす野に多と云り。

顯仲卿

夏のたつ荻のはすりの風をとにふすのゝ鹿は今やおくらん

仲實

夏草の茂みにかゝるせこなわにもるゝを鹿に逢はつれぬる

兼昌

ねらひするしつをかまちをさを鹿の一村草と見てやよる覽
ねらひとは鹿をねらふなり。まちとはまふしなり。ねらひは夏狩なり云々。

肥前

夏かりの茂みを分て狩くれはかくれもあへぬ鹿のむら友
狩と云事二よめり。不審なり。

知家卿

明渡る山もと遠くせこたてゝ夜こめの鹿の行方そなき

俊成卿女

眺望 むさし野や草の原こす秋風の雲に露ちる行末の空
此風情言天骨の人のわさ歟。又狩子とも讀たり。

源仲綱

眺望歌合 うな原や雲井はるかにこく舟を浮木にのれる人かとそ見る
判者俊成卿云。うきゞにのれる。是又蜀郡雲猪張騫か漢に昇しかとうたかへるなるへし。心おかしく侍る。

一哀傷

万 いきしにの二のうみをいとはれてしほひの山を忍ひつる哉

よみ人不知

いきしにの二の海は。富士山にもよめり。

爲家卿

いつまてか形にやとる玉しゐのはなれね程をありと頼まん

一夢

俊成卿

初懸 知やいかに君をみ嶽の初いもゐ心のしめもけふかけつとは
みたけとは吉野なり。
はついもゐとは初精進なり。

和泉式部

ねぬる夜の夢騒かしく見えつるは逢に壽をかへやしつらん

貫之

思ひ餘こひしき時は宿かれてあくかれぬへき心ちこそすれ

匡房卿

戀やせて鏡のかけをけさ見れはしらぬ人にも成にける哉
しらぬ翁にあふ心地してと云古歌同事歟。少かはるへきにや。

俊成卿

(千五百番)とにかくに身には思のみち〳〵て面をむかん方そおほえぬ　有家卿

(待戀)更にけり頼めぬ鐘は音つれて七ふさひしき十ふのすかこも　知家卿

此歌は十ふのすかこも七ふには君をねさせてみふにわれねんと云。歌を思ひてよめるにや。

今も猶心にかゝる別かなかみかきやりし人のうしろて　雅經卿

うしろてとは。うしろすかたの事なり。

なかめしや心つくしの秋の月露のかことも袖ふかきころ　俊成卿

此露のかことは。かこちにもかこつけにもかよひたるか。袖ふかきなとゝ云言こそ上手の手しななれ。

あはてのみかへる野原の露なれとかふるはおしき萩か花摺

是は催馬樂によする戀の歌云々。此題にてはこれならす。催馬樂の歌をもよむへき也。萩か花すりは催馬樂の歌の随一なり。

(万)わきもこか夜戸出のすかた見てしより心空なり土はふめ共　人丸

夜戸出とは。ねや出るを云なり。

一歌に讀たる言少々

物へもゆかすとは。不他行なり。

ほの〳〵みえつゝとは。ほのかにみえつゝなり。

うしろやすきとは。(本ノマヽ)

事のいらへせぬとは。不御(返脱歟)事なり。

ひた道とは。一向になり。

かたはらとは。あたりなり。

夜ひゐとは。夜居なり。

けのするとは。心ちする躰也。

氷うすれてとは。氷のうすくなるなり。

むは玉の筋とは。かみのすちなり。

あたはぬことゝは。不相應なり。

夏かけとは。夏の木陰なり。

ひやかとは。ひやゝかなり。

をとなひとは。音なふなり。

いさゝかとは。すこしの事なり。

つらさとちむるとは。つらさのきはめなり。

とみのことゝは。いそく事なり。

なけうてゝとは。なけすてゝなり。

かたこしとは。かたほしなり。かたかたなり。

すまふとは。からかふなり。

もろことゝは。諸言なり。我もいひ人もいふ事也。

うとましきとは。うしうとましなとゝいふことはなり。
世ならひとは。世の習なり。おひたゝしきとも讀り。
たゝうちやすむともよめり。けしきはむとも讀り。
いふかしきともよめり。これらは多分定家卿の讀り。

惠慶法師

秋の野の花に心をよせつゝは駒うなかさぬ今日にも有哉

うなかさぬとは。さいそくせぬと云心歟。駒をすゝめぬとかや。
心はへ。心もとなし。ほしめつろかな。
かやうの言。世俗言なれとも。みな〳〵古歌等によみ侍しほとに注付なり。

俊頼

あやしきも嬉しかり鳧をとしむる其口のはにかゝると思へは

あやしきとは。此歌に取てはいやしきと云言云々。
あやしけなる家と云も。いやしけなる家云々。泪あやしきと云歌は別の事なり。あやしめたるなり。

同

紅の袖にはつれしまみよりもなれかつゝりのわゝけをそ思

これは懸人によすと云題の歌云々。
つゝりのわゝけとは。やふれほたれさかりたる事なり。

同

朝夕につたふ板たの橋なれはけたさへ絶てたちろきにけり

初かりとは。にえの初狩なり。初苅の稲は苅なり。二樣に可讀なり。

同

こりはてぬにえの初かりあさにする宿にもあらて人返しけり

此歌は隆源法師のもとにたひ〳〵まかりけれとも。身と〔マヽ〕てあはさりけれは。障子に書付けり。

返し　隆源法師

初かりのにえのひるけのつかえと穗かけそすへきいかゝ返さん

ひるけとはひる飯歟。つかとは告歟。食物入るけ歟。ほかけとは穗の初かりに穗を田神に手向事なり。俊成歌は奥州とやらんには。初穗を食時は。他人にかくして。我とち斗たてこもりて食と云事。古記に云歟。若其心歟。

東山歌合旅宿月　賀茂重保

行とまる草の枕のあたふしは月にもらてやあかす成けり

仲正

逢ことはしけめゆひかと思ひしをとを鴈にこん人は賴まし

寄井戀　同

にこり井に影をならへてすむ斗かへはや人につれな心を

同

終夜身しろきをたにえこそせね衣かへすと人や聞らん

身しろ〳〵と云事。源氏にも云り。
夕なかめ。心の根。夏すかたなとゝもよめり。

慈鎮和尚

賤のめもおほちゐつゝに夕すゝみしたるき麻の衣すゝきて

同

呉竹にいさゝか風の音つれて吹や枕に木葉ちるなり

荷もつさうきのいれ籠町あした世渡道をあはれとそみる

後九條内大臣

世の中のあたの習をあちきなくなとうけおいて花の散らん

太上天皇

なましゐにいけれは嬉し露の命あらは逢せを待となけれと

後京極攝政

旅

松島や浦風寒みいそか根のあまのかるもをひしきものにて

同

夜舟こくあかしの浦の月を見てふかくにおつる我泪かな

喜多入道二品御子

さしもあらぬ時雨なれとも玉柏ことにとりなすよはの音哉

仲實

王昭君

行すから心も行す別れちはなを故郷の事そかなしき

家隆卿

寄雲戀

思ひやるなかめも今はたえぬとや心をうつむ夕暮の雲

戀しなは人わらへにも成ぬへししゐてをいはんある世斗に　同

よそにきくうるまの島のうるさく〔壯歟〕はいひたにはなて思絶南　同

うるまの島とは。おきなうの事云々。云事をきゝしらぬ
とよめり。

思ひわひ今は我身のかつかたにありし契りを人にかたらん　爲家卿

新戀

をのつから手枕はつしね直れは我思はすといもそむけたり　光俊

同

自から妹かつたへの口まねひあらぬけしきもなつかしき哉　同

夕すゝみあたねの床の明方にすたれうこかし秋はきにけり　大輔

是は簾うこかし秋風そふくと云歌の心をおもひたるな
り。

建長歌合

数ならぬ身は山かつのしつ〳〵と物哀にもなる住ゐかな　信實

寶治百首

草枕かたさることやなきあかつきかけてゆめおとろかす　同

弘長百首
ふる雪のつもるをりこそ我やとにあしふみ入て人も問けれ
同

同
浪の上に磯のあら／＼しられてそくたく心の程も見すへき
西行上人

よしのやま花ふきくして峯こゆる嵐は雲とよそに見ゆらん
同

花みれはそのいはれとはなけれ共心の内そくるしかりける
同

もろ共に我をもくしてちりね花うき世をいとふ心ある身そ
同

かたはかりつほむと花を思ふよりそゝ又心ものになるらん
同

空晴て沼のみかさをおとさすはあやめも深き五月ならまし
同

こさゝしくふるからをのゝ道の跡を又澤になす五月雨の比
ふるからをのは名所にはあらす。只枯野なり。
同

月
悔しくも賤か伏屋とおとしめて月のもるをもしらて過ける
同

中／＼に時／＼雲のかゝるこそ月をもてなすけしき成けれ
同

虫
秋風のふけゆく野への虫の音にはしたなきまてぬるゝ袖哉
同

せく床にたけるうしほの大よとによとむとゝゐもなき泪哉
とゝゐとはしほのたゝへたる時を云ふなり。たけるうしほと云事不審也。
同

さることの有なりけりと思ひ出て忍ふ心のしのへとそ思ふ
忍ふと云文字二よめり。心をたにもよくいひあらはさは。音をはいたむましき歟。
同

さる事のあるへきかはと忍はれて心いつよりみさほ成らん
みさほとは。音もせて堪忍したる體なり。
同

煙たつふしに心をあらそひてよたけき戀を駿河へそ行
同

むかはらはわれかなけきの報にてたれゆへ君か物を思はん
むかはらとは。むくひの事にや。
同

さかとよとほのかに人を見つれ共おほえぬ夢の心地そすれ
同

とゝいへはもてはなれたるけしき哉うらゝかなれや人の心は

同

いとをしや更に心のおさなひてたまきれらるゝ戀もする哉

たまきれらるゝとは。きもつふれたると云心なり。

玉きるとは。つくしことはなり。

同

人しれぬ泪にむせふ夕暮は引かつきてそ打ふされける

引かつくとは。衣の事歟。

同

物思ふ袖になけきのたけ見えてしのふしらぬは泪なりけり

同

柴の庵ときくはいやしき名なれ共よに好もしき住ゐ成けり

東山に阿彌陀房と申聖人の菴室にまかりてよめると云々。

同

吹風のなめく梢にあたる哉かはかり人のをしむさくらに

世俗になめけなとゝ云心歟。

同

みさひゐぬ池の面の淸けれはやとれる月もめやすかりけり

みさひとは。みしふと云同事なり。

同

吉野山雲を斗に尋入て心にかけし花を見る哉

はかりと云言の縁にて。心にかけしとよめる歟。言のよせ

縁と云は如此の事なり。心おくりとよめり。

好忠

花ちりし春の嵐をおしみ置て夏の日よりに吹せてし哉

同

さよ中にせこかきたらは寒くともはたへを近み袖も隔てし

西行上人

わきも子か衣うすれて見えしよりはたれれせしと思成にき

うすれとは。うすくてと云言なり。

はたれとは如何。不口傳。可尋。もしはたかね歟。

同

玉さかにあひみても又別ぬるあさけのまゝ人名殘かなしも

同

をたまきかあさけのまゝ人我ことや心の中に物おもふらん

朝けはあしたの事歟。まゝ人とは眞人と書り。まら人たちなとゝ物語にもよめり。

一述懐

千里

世の中を思ひわひぬる心こそ身よりも過て老まさりけれ

慈鎮和尚

思ひてにかこちなけくは心なし人てふ名をもけかしつる哉

委形老少外。忘懷死生間。

清輔

若さかりやよ何方に行にけんしらぬ翁に身をはゆつりて

躬恒

草も木もふけはかれぬる秋風にさきのみまさる物思ひの花

貫之かもとにつかはしける。

返し

貫之

こと茂き心より咲物思ひの花の枝をはつら杖につく

心の炭とよめり。憂喜皆心の炭と云事歟。

躬恒

みな人の花の衣をきる中にひとりそ老にしほみはてぬる

慈鎮和尚

賀茂社百首
町くたりよろほひ行て世を見れはものゝ理みなしられけり

爲相卿

世にしつむ言葉斗のはへてもいかほの沼のみかくれそうき

是は古今長歌をとられたる歟。古歌をとる躰如此歟。あな面白々々。

後九條内大臣

山深く八重のさかも木引とても世のうき事は猶そまよはん

俊頼

年ふれはけかしき溝に落ふれて濡しほたれぬいとをしの身や

けかしきとはいやしきなり。おちふれとは人ならぬよし樣也。

俊頼

山かつのつくらに居たる我なれや心せはさを歎くと思へは

つくらとは。とくらと云物の事歟。わらうた歟。五音歟。

白雲井なる甲斐かね。わたの原ふかみとり。眼の霧は立亂。水のあは心。たてしまのからき別。(江州なり。)是等の言は忠岑か長歌の中を貫書り。

一鶴

たつの村鳥とも。村つるともよめり。

仲實

さゝ浪や小松に立て見渡せはみをかみ崎に田鶴むれてなく

小松か崎。みをのみ崎。江州なり。

讀人不知

万
かしふえにたつ鳴渡るしかの浦に奥つ白波みちしくらしも

かしふ江も。しかの浦も。筑前國名所なり。

仲正

獨ねはけ衣さゆる霜つるの身ふるふ斗さむけき物を

け衣とは内衣也。つるのけ衣にそへよめる歟。

玉浦。あへの田のも。竹田原。むしろ田。さほ川。鳥羽田。しほかまの三崎。なからの濱。これらの名所鶴をよめり。

一鵜

鳴海潟鵜の住岩に生る和布のめもかれす社見まくほしけれ　俊頼

新六 いかにしてしかま入江のはなれ鵜のしはしの程も心休めん　爲家卿

大帖 白川の瀨々をたつねて我せこは鵜川たゝさは心なくさむ　讀人不知

飼くたす。かひあくるなとゝ。鵜川にはよめり。

う川たゝさはとは。う河たつなり。

ま鳥。島津鳥。河鳥。これみな鵜なり。

一鷺

大井川おりゐるさきの立跡をあさせとしりて渡かち人　隆祐

かやうの風情は兼て見たる故歟。

さきの簑毛とも。うな毛ともよめり。

一鵲 カサヽキ

大帖 かさゝきのはねに霜ふるさむき夜を獨わかねん君待わひて　人丸

かさゝきの羽かひの山の山風にはらひもあへぬ霜の上の月　定家卿

羽貝の山は和州歟。

懸状中 ます鏡うらつたひする笠さきの心なかさのほとを見るかな　俊頼

ますかゝみとは。月の名にも云。

かさゝきの峯飛こえて鳴ゆけはみ山かくろゝ月かとそみる　千里

鵲飛山月曙と云心歟。

一烏

曉と夜からすなけとこの山の梢のうれはいまたしつけし　讀人不知

此歌なとやらん。心にしみておほゆる間書加畢。

しつけしとは。しつかなるなり。夜の明には物さはかしき事によみたるなり。

朝烏。月夜烏。子持烏。うかれ烏。よたゝ鳴と讀り。

一鷄

庭津鳥。くたかけ。かけろ。あけつけ鳥。かけしはとりなとゝよめり。

庭鳥は八聲鳴とも一說なり。又は八聲は彌聲なりとも一說なり。しは鳥とは後になく鳥云々。ちいさき鷄はおくれて鳴ゆへに後鳥云々。

一國

讀人不知

万いさ子ともたはわさなせそ天地のかためし國そ大和島ねは
たはわさとは。あた事の躰歟。世俗にたは事と云もあた言の心歟。

兼直
出る日のたか見の國を安國と祈するをは神やてらさん

同
ひとへにそ神も佛も守るらんわか日のもとのおほやまと國

万葉長歌をしてるや難波の國のあしかきのふりにしさとゝ人みなのおもひやすみてつねもなく略之

同長歌あめつちもよりてあるこそ石はしるあふみの國のころも手のたなかみ山の略之

同長歌あし原のみつほの國に手向すとあまくたりますいほよろつちよろつの神の神代より略之

いほよろつとは五百萬歟。ちよろつとは千萬歟。

家持卿
同長歌すへらきのとをの御門としらぬひのつくしの國はあたまもるおさへのきそときこしめす略之

とをの御門とは。久き心にも。常の心にも讀と云々。あたまもるとは。朝敵を治と云り。

同長歌こもりえのはつせのくにゝさよはひにわれかきたれはたなくもり雪はふりきぬさくもりて雨はふりきぬ略之

こもり江とも。こもりくとも。兩說なり。
たなくもりとは。雲のたな引ことくの事云々。
さくもりてとは。すこしくもるなり。
吉野の國。はつせのくに。なにはのくになとゝは。郡をくにとよめると云々。
つくしの國とは九州なり。浦安の國も日本の名云々。いさなきの尊の名付給けると云り。

後京極攝政
昔よりみやこしめたるこの鄕はたゝわか國のも中成けり
も中とは世俗にまん中と云事歟。國のみ中ともよめり。五音歟。

一禁中

同
萩の戸の花の下なるみかは水ちとせの秋の影そうつれる

知家卿
是も又衛士のたく火か百敷のみかはの池の夏虫のかけ

法性寺入道關白
月九重にたゝめる玉の御はしよりかたふく月のねり昇哉

同
とねりめす豊のあかりに月さえて宮人はしるたつの尾の道
宮人はしるは走歟。たつのおの道不口傳。可尋。

これを見ん人は心をみかくへし大葉のむくのいにしへの跡　慈鎮和尚
とのえ見れはふるき御垣の瓦葺かはらぬ御代に又めくる哉　信實

一仙家

桃の花しけきみ谷に尋入て思はぬ里にとしそへにける　仲實
内裏御會深山花
山人もすまていく世の石のゆか霞に花は猶にほひつゝ　定家卿
のりてゆく鶴の羽風に雲はれて月もさやけくすむ山へかな　兼昌

一都

万
萬代に見るともあかんやみよしのゝたきつ河内の大宮所　笠金村
同
和泉川行瀬の水のたえはこそ大宮所うつろひゆかめ　讀人不知
内裏百首符哉
山城のこの都をや守りけんおかたのかもに跡たれしより　行家卿
山城國の都。おほやまと國の都なとゝよめり。
故郷の題にも。國のみやこはよめり。
万葉長歌
高照す日のわかみこはとふとりのきよのみやこに略之

万葉
わたらひのいもゐの都神風にとよめり。伊勢の事云々。
玉水のたきつ都ともよめり。吉野なり。瀧の都同事歟。
同
久堅の都をゝきて草枕たひ行君をいつとかまたん　よみ人不知
藤原のふるき都とよめり。
同
立かはりふるき都と成行はみちのしは草長く生けり　同
此歌はならの都にてよめると云々。
同
よそに見しま弓の岡も君ませはとこつ御門と殿ゐしにゆく　同
これは古郷をよめる歌と云々。
同
清き瀬に千鳥妻よふ山きはの霞立らんかみなひの里　人丸
是も故郷を讀りと云々。
古郷
さほ殿のさかゆく見れはかけふれて故郷と社覺えさりけれ　兼昌
かけふれてとは。かけてもふれてもと云ことは歟。
万
我里に大雪ふれりおほ原のふりにし里にふらまくは後　天武天皇御歌
万葉長歌
やすみしる我おほ君のありかよひなにはの宮はくちらとる
海かたつきて玉ひろふなにはをちかみ略之

やすみしるとは。八方しろしめすと云事なり。
大君とは。大王なり。
海かたつきてとは。片かけたると云なり。
玉ひろふとは。貝ひろふなり。

一閑居

さもこそは庭も木葉にうつもれめ苔生にけり松の下道　俊成卿

山た守ひたの音にこそをのつから人住里のあたりともきく　寂蓮

一岩屋

山ふしの岩屋のほらにとしふりて苔にかさぬる墨染の袖　後京極攝政

百首
やまふかき岩屋の月は明やらて苔の戸ひらに秋風そふく　後九條内大臣

雲葉春
雪間より立出てみれは霞けり神の岩やの春の明ほの　宗信僧正

大峯の童子の岩の事云々。　家隆卿

懸述中
おくの海やゑそか岩やの煙たに思へはなひく風はふくらん　同（好忠イ）

川上やかさ木の岩やけをぬるみ苔を莚とならすうはそく

万
大なむちすくな彦なのいましけん賤の岩やは幾世へぬらん　讀人不知

同
肌薄くめのわかこかいまし劔みほの岩やは見れとあかぬかも　同

一宅家とよめり

山さとはまはらの軒の萱まよりもりくる秋の夕月夜哉　北院入道二品三子〔御製〕

わひて住やとに光のくれゆけは吹風のみそ戸さし成ける　千里
柴扉日暮隨風掩。日といはて光暮と可詠證歌也。

一盧（イホリ）

賀茂社百首
出かへに窓ぬりのこす庇までもすさめすやとる秋の夜の月　慈鎭和尚

山家春雨
やまかつの庵は萱のぬけめよりわり（ロカイ）なくもるゝ春の雨哉　仲正

實治
かけつくる谷の庵の軒はよりしつくもなかし五月雨のころ　信實

女御入内御屏風
秋風になひくいなはの絕まよりほのかに見ゆるしつか柴庵　季經卿
しつか柴庵とは。片ことのやうにきこえたれとも。爲證歌書之。

定家
山陰や嵐の庵のさゝ枕ふしさり過て月もとひこす

一屋

讀人不知
夕つくひさすや河邊につくる屋の形をよしみしかそ寄くる

夕つくひとは夕日なり。

夕つくよとは夕月なり。

かたちをよしみとは。地形のよきと云なり。

しかそよりくるとは。然なり。しかれはなり。

俊頼
逢不遇戀 山賤のあしやにかける竹すかきふしにくしとも思ひける哉

俊成卿
五社百首 なにはめかあしのしの屋のしのす垣一夜のふしも忘やはする

俊頼
堀百 しなか鳥いなの濱屋に旅ねして四方のひかたにめを覺しつゝ

しなかとりとは。いなといはんためにつゝけよめり。

いなは海もあれは。濱屋とよめるにや。

ひかたとは。風の名なり。

俊成卿
都ちは遠かられとも草枕しかのはまやも浪はかけけり

清輔

歌合戀 東やの軒の萱間におふとみし人をしのふは我身成けり

嘉陽門院越前
千五百番 片岡のすゝのしのやに秋くれぬ時雨もらすなならの上ふき

重之
百首 春の日はゆきもやられす蛙鳴ゐての河屋に駒とゝめつゝ

讀人不知
万 久堅の埴生の小屋にこさめふり床さへぬれぬ身にそへわきも子

仲正
寄山家述懐 佗人の片そにかくるあふり屋のしたくらなりや山蔭にして

一屋形

親隆卿
久安百首 小萱ふくくゝめやかたの竹柱ふしよからぬは旅ね成けり

くゝめ屋形の事。不得師説。可尋。

一隣

衣笠内大臣
新六 里人の軒をならへて住やとは五まてこそとなり成けれ

忠房
建久百首 たらちねのさらに隣を替けるは子を思ふゆへと聞そ悲しき

これは文のをしへに云事歟。又隣は三まても云る歟。

經信卿

一山家山の家をもよむへし

山家述懐
旅ねする宿はみ山にとちられてまさきのかつらくる人もなし
山家
入ぬとや都の人はなかむらん窓よりにしにめくる月かけ
山家題は山里と斗にて不定云々。山居の心あるへしと云り。

一田家

我門のいなはのしたひつたひきて田子の水もる花の夕かけ（けイ）　後九條内大臣
此歌不得心。末句不審なり。人に可問聞なり。亡父は不知事をは。大草子をこしらへて書付をきて。萬人に尋とひて說々を注付しなり。まして心にくき人には殊によく口傳せしなり。尤故實歟。

隆祐家歌合山田
いなしきや山田守おのかりほにてねぬ夜の數を幾夜へぬ覽　讀人不知
いなしきとは田舍の事なり。此歌夜二よめり。しかも歌合なり。されは稽言なくは無力かやうにも可詠歟。其歌の心を本とするゆへ歟。

百首春歌
蛙なく田中の井戸に日はくれてをもたかなひく風渡なり　寂蓮
田中の井戸にて。田家の心はあるへきにや。尤可爲證歌歟。面高は夏たるへきにや。如此事詠歌のために大切の事也。此歌もまさしく田家にゐて。たゝいま歴覽の體を。ありのまゝによめるかと見えたり。

田家
秋風にとはまし人の音つれもいくたの里は冬かれにけり　爲家卿
生田のさとゝよみても。田家あるへき證歌なり。この歌昨日たにとはんと思ひしと云歌をすこしよせられたる歟。

正治百首
山里のわさほの庵にをのつからともなふ物はみな口まほり　範光卿
わさほの庵とも可詠哉。みな口まほりとは。五位と云鷺のことなり。みと鷺ともいふなり。

堀百
たなつ物み園にまきついさ子共そともの小田に慈姑拾はん　顯仲
たなつ物とは米の種なり。五のたなつものと云も。五こくの種云々。萬葉にはいさや子らとよめり。子とも〻同事歟。

一郡

君か爲命かひへそわれは行鶴てふこほり千代をうるなり　忠岑
甲斐國へまかり申によめる云々。
まかり申とは。いとま申なり。
鶴の郡は甲斐にあるなり。

衣笠内大臣

一里

新六 みちのくにけふのこほりに織布のせはきは人の心なりけり　讀人不知

寛平御時歌合 嵐吹山下さとにふる雪はとくちる梅の花かとそ見る　讀人不知

いく野の里。（卯花詠。）葉山里。（なとゝよめり。）花園里。（三州なり。）小河里。（卯花あり。）夜寒里。月よしの里。

万 夏草の思ひしなへてなけくらんつのゝ里みんなひけ此山　讀人不知

おもひしなへてとは。思うなたれたる心なり。

つのゝ里。石見國歟。

なひけ此山とは。かたふけと云心歟。

風吹ぬうらみやすらんうしろめたのとかに思へ荻原の里　實方

荻原里は三河歟。車の里。（上野國。）草刈里。（入江を詠。水口詠。）松風の里。（尾州。）

一村

春部の村。（丹後。）青柳村。（江州。）槇の村。（同上。）

一市

立くらす市女もさこそ歎くらめ心をかへて思ひしるかな　經家卿

あき人によする戀をよめると云々。

いちめとは。市の女なり。

市ひめの神のゐ垣のいかならんあきなひ物に千代をつむ覽　爲顯

屏風に市姫の形かきたるを詠云々。

市姫とは市場に祝たる神の事云々。

たつの市うるまのし水涼しくてけふはかひある心ち社すれ　俊頼

泉夏の友たちと云事を詠云々。うるまのし水はたつの市に有にや。可尋。大和國たつの市は辰日立市なり云々。

やきつへをわか行しかは駿河なるあへの市路にあひしこらかも　讀人不知

燒つへとは昔は燒津めと云けり。今はやいつの郷なり。日本武尊の草なきの劔ふり給し所云々。あへ山の内なり。うつの谷をへたてたるなり。うつの谷の西の麓なり。

一驛

東路のむまや／＼とかそへつゝ近江のちかく成そうれしき　讀人しらす

うまや／＼とは。今や／＼と云言をそへたるなり。

明石驛。關のうまや。（鈴鹿なり。）梨原の驛。（和州なり。）かこの驛。（播州。）水のうまやとは。飯酒もてなしせぬ驛なり。

一庭

顕仲卿
堀百 柴の庵のはいりの庭にをく蚊火の煙うるさき夏の夕暮
はいりとはひきくいやしき家云々。庭と云題にてはいり
可叶哉。

西行上人
我もさそ庭のまさこの土あそひさて生たてる身に社有けれ
たはふれ歌と云々。

為家卿
新六 詠めのみ唯つれ〳〵の庭たつみ世にふりはてゝ行方もなし
此なかめは長雨なり。庭たつみとは。庭にたまりたる水な
り。庭の題に可叶なり。

一床

上東門院兵衛
山かつのすかきの床の下さえて冬きにけりとしらせ顔なる

一窓

読人不知
万 まとこしに月さし入て足引の嵐吹夜は君をしそおもふ
足引の嵐ともよめり。

西行上人
音はして岩にたはしる霰こそ蓬の窓の友となりけれ

寂蓮
若宮歌合 谷深き霞の窓は明やらて雲にいさよふうくひすの聲

一戸

知家卿
新六 今夜こゝへとしけしとて逢事をちかへ遣戸のたてなからのみ
物へたつると云題なり。

好忠
我せこか返屋のすゝ戸かけさけてたゝぬをみるそ秋はすへなき(ヱイ)
ねやの風戸をさすとよめり。

一門

俊成卿
霧のうちもまつ面かけにたつる哉西の御門の石のきさはし
祇園社百首云々。當社の躰歟。

読人不知
万 いもか門ゆき過かねて草むすふ凡ふきとくな又かへりこん

一垣

好忠
朝な〳〵庭の草かるとせし程にいもか垣ねはうすらきに皃

西行上人
折ならぬめくりのかきの卯花をうれしく雪のさかせつる哉

仲實

春さりてかつらの里に雪ふれは八重の柴垣花咲にけり
この雪ふれはと云事 雪にはあらさる歟。往ふるゝと云言なり。納涼の歌にもゆきふれはと堀川院百首にも讀り。共同心歟。
花のみつかき。花の八重垣。花の宮垣。浪のみつかき。神のあらかき。竹あめる垣なとゝよめり。

新六
心ある宿のとなりの中ひかき文のかよひのはさまやはなき　信實

歌林良材歌
秋の月白くそてれるうなはらの青ふしかきも色かはるまて　讀人不知
是は日本紀に云。事代主の神の海中に八重青ふしかきを造て歸さると云り。
ふしかきとは柴垣と云々。

隣家虫
あや檜垣たてへたてたるあなたにて機をる虫の聲そ聞ゆる　定（曾イ）家卿
あやひかきとは。あや杉なとゝ云ことの義歟。

一籬
やま里に匂ふを見れは菊の花たきとのまかき思こそやれ　惠慶法師
やことなき所より菊の花のうつろへるを出し給へは云々。たきとのまかきの事しらす。若瀧殿の事哉。たきとのと云事源氏にも云り。註も二様あり。一説は瀧殿と云々。一説は瀧と野となり云々。瀧殿は名所なり。定家卿は瀧殿と註之。又あはらまかきとよめり。

一御調（ミツキ）

新六
ゆたかなる七の道の御つき物海山かけてさためをきてき　爲家卿

大嘗會歌
くるもとや瀬田のはしけたたはむまて運續くるみつき物哉　元輔
くるもとの橋ともよめり。日次の御調とも讀り。
あら玉やはたさす駒に壁立てせたの長橋引渡なり　顯仲卿
此歌五文字不得心。可尋。はたさす駒とは。荷付馬のもつ御物には旗をさす歟。若其事歟。可尋。

一酒

万
酒の名をひしりといひし古へのおほき聖のことのよろしさ　家持卿
價なき寶と云ともひとつきのにこれる酒にあにしかめやは　同
一つきとは一盃なり。一はいのさけにはまさらしとよめり。
同

古への人ののませるきひ酒のやもはらすみてぬきす給らん
やもはらとは八のか　めの酒歟　八はらの酒ともの
酒歟。あち酒とも。うま酒とも。萬葉の註にはいへり。
白き。黒き。竹葉。豊みき。清みきなとゝ讀る。皆酒の名な
り。

季　經　卿

春秋のとめる宿には白菊をかすみの色にうかへてそ見る
かすみとは酒のみとよめる歟。

俊　頼

清みきの聖を誰もかたふけてしゐをつみえぬ人はあらしな
此歌は人のもとにて終夜あそひけるに。さかなに椎つみ
なとして。或聖のあやしきことを色々云けるによめると
なり。此事は亂行の聖の事をよめる歟。

一藥（クスリ）

讀人不知

万 わかさかりいたくくたちぬ雲にとふ藥はむとも又落めやも
くたつとはくたりたりと云言なり。雲にとふ藥とは仙藥
の事歟。

一文

顯　昭

六百番歌合 にしきゝに書そへてこそ言のはも思そめつる色はみるらめ

此歌。右方申云。左。錦木に心さしを見せそむるにてこそ
あれ。文をそふへき事かは。左方陳云。能因か書たる物に
云。錦木にはかならす文を付義なり云々。

一硯

仲　正

寄硯戀 僞の名をのみ立てあひみぬは硯の上のちりや吹けん

喜多院入道御子

正治百首 いさ清く蓮の法をうつしてそ鳩も硯の水をそへける

一太刀

光　俊

山深み松のおふてふ岩かねにおさめしたちはいもそ知らん
此歌は左の萬葉の歌を思へる歟。たとへは。

讀人不知

万 玉たちをぬきぬる妹もあらは社よのなかけきも嬉かるへき
玉太刀は一説云　なき人の身にそへたる太刀云々。又太刀
をほめたる義と云々。いさゝか心得分へき事歟。

一刀

衣笠内大臣

新六 何事を思ひけりとも知られしなゐみの内にも刀やはなき

知　家　卿

同 今はわれまろはにとける腰刀世につかはれぬ身とそ成ぬる

信實

（同）大和歌こしはなれたるさひ刀さも世にたえすきゝもなき哉

一弓

西行上人

しのためてすゝめ弓はる小野童ひたひゐほしのほしけ成哉

讀人不知

（万）枕なるおふちのまゆみとる時そ君か手風はいとゝ戀しき

おふちのま弓しらす。可尋。ねやの枕に弓をゝく事歟。

一箭

の矢。きつね矢。矢筋。なる矢とはかふら矢なり。

讀人不知

近江のややはしのしのを矢にはきて誠ありとや戀しき物を

やはしとはやは瀬歟。名所なり。

一滕行（行滕歟）

仲正

夜と共にえ社あはせねむかはきの引波もなき戀をのみして

讀人不知

（万）すこしきあを何もてこ梁にむかはきかけてやすむこの爲

一沓

和泉式部

庭の面にみえす散つむ木葉くつはかても誰の人かきて見ん

（万葉歟）飛鳥のあすか男からうらはれてぬいし黒沓さしはきて庭にたゝすみ　隆之

一三代集說等は口傳する事なれは無左右註かたし。大かたは顯注密かんに多分見えたるうへは。それにていつれの說をも可知歟。但一門を傳たる人は必其師說斗を可用なり。昔より兩說とて。俊成卿定家卿なとの事を不言切をは。兩說共に可用云々。此間いかなる仁か仕けるや覽。めとにけつり花さすと云ことを。發句にしたると承及なり。此事は誰や覽古人の說に。妻戶をめとゝ云と書たるを一見仕しなり。さりなから古今說の隨一に云。目とゝ云草にて。けつりたる花をさせるとあるうへは。分明に無口傳て。物のかたはしみて。をさへてはいかゝ申へき。妻を女と云によせて。妻戶と尺せるにや。或は自見。或は立所もなき人の中に付て。歌も連歌も仕へき事は押義歟。されは如此の說々は誰人の說をいつれの人よりつたへたると云事を。たしかに手繼を引付る事云々。

自冷泉家年來相傳申所書集候畢。又自見之分彼是取合。號師說自見集。更他のためにあらす。

了俊花押

寬正五年三月廿九日。今河德翁之以自筆本。不替一字令書寫訖。

天文十七年六月廿三日　小寺玉性坊賴重

從四位上行大藏大輔橘朝臣豐文

永祿七年甲子正月十一日　亮鎭書之

於姉小路高松　大神宮神前之參籠所令書寫訖。

右松泉院御本令懇借寫留者也。

〔右師說自見集以帝國圖書館本及一本校合〕

和歌部百三

歌林良材集

林にしけき良木のけたうつはりとなるへきも。ひたのたくみのをのまさかりをめくらして。きりもちゐるにあらされは。その材をあらはす事なし。詠歌の道も是におなしかるへし。ならの御門の萬葉集をはしめとして。三代集等にあつめおかれたることの葉は。誠に歌のはやしのよき木なり。然れとも末の世に定家家隆ことときのひたのたくみにあはさらは。是をきりもちゐる所なくして。雲のまさかり月のをの。其妙手をあらはす事なかるへし。爰をもつていとけなきわらは。つたなきたくみに。その心をつけしめむために。おろかなることの葉にまかせて。是をしるしあつめて。歌林良材集となつくるになむありける。

歌林良材集上

第一　出詠歌諸躰

一卅六字歌　卅一字ニ五字あまる也。

八雲　ありそ海の浪間かき分てかつく海士の息もつきあへす物をこそ思へ　二條院讃岐

一卅五字歌　卅一字ニ四字あまるなり。

伊勢　我はかり物思ふ人は又もあらしと思へは水の下にも有けり　讀人不知

一卅四字歌　卅一字ニ三字あまるなり。

古　滄海の興津しほあひにうかふ泡の消ぬ物からよる方もなし　讀人不知

後　冬の池の鴨の上毛におく霜の消て物おもふ比にもある哉

新古 ほの〴〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしの風　信明
同 和歌の浦や神津しほあひに浮ひ出る哀我身のよるへ知せよ　家隆
二字以下あまる歌は其數をしらす。故にのするに及す。
一第一句有七字體
万 いてある駒は早く行ませまつち山待らん妹をはや行てみん　源經信
新古 さもあらはあれ暮行春も雲の上に散こと知ぬ花しにほはゝ　讃岐
さもあらはあれなのみなからの橋柱くちすは今の人も思はし
一第三句有七字體
千 春はたゝ花の匂ひもさもあらはあれたゝ身にしむは曙の空　季通
同 思ふをも忘るゝ人は遮莫うきを忍はぬ心ともかな　有房
花島の匂ひも聲もさもあらはあれゆらの三崎の春の日暮し　定家
一一首中同てには有二歌　新古今以後
新古 人そらきたのめぬ月はめくりきてむかしわすれぬ蓬生の宿　秀能

同 つらきをも恨ぬ我にならふなようきみをしらぬ人も社あれ　小侍從
風草 冬の日は草木のこさぬ霜の色を葉かへぬ枝の花そさかふる
同 葉かへせぬ竹さへ色の見えぬまて夜とに霜のをきわたす覽
右ぬもし二あり。
新古 あふとみて事そともなく明にけりはかなの夢の忘かたみや　家隆
右無文字二あり。
新古 みるめこそ入ぬる磯の草ならめ袖さへ浪の下にくちぬる　讃岐
右ぬるの字二あり。
一不言其物體詠用許歌
舟
万 島つたひとしまかさきをこき行はやまと戀しく鶴さはに鳴　赤人
同 いそ崎をこきて廻れは近江路や八十の湊にたつさはになく
餘花
古 哀てふとをあまたにやらしとや春におくれてひとりさく覽　讀人不知
鶯
同 木つたへはをのか羽風に散花を誰におほせてこゝら鳴らん　素性
月桂　伊勢

同
久堅の中にをひたる里なれは光をのみそたのむへらなる
一有二説歌共爲本歌用之事
古
曉のしきのはねかきもゝはかき君かこぬ夜は我そ數かく
曉のしちのはしかき百夜かき君かこぬ夜は我そ數かく
臨期變約戀　　俊成
千載
思きやしちのはしかきかきつめて百夜も同まろねせんとは
慈鎮
千五百番
とに角にうき數かくは我なれや鴫の羽かきしちのはしかき
業平
後撰
住侘ぬいまは限の山里につまきこるへきやともとめてん
同
伊勢
住侘ぬ今は限の山里に身をかくすへきやともとめてん
俊成
千載
住侘て身をかくすへき山里に餘くまなき夜半の月かな
同
今はとて妻木こるへき宿の松千代をは君となをいのる哉
鳥　　元良のみこ
後
あふ事は遠山すりのかり衣きてはかひなき音をのみそなく
定家卿僻案抄云。きぬなとのすりには。おほく遠山をする物なれはよめるにこそ。一本には遠山鳥とあり。音をのみそなくと云に事よれるにや。すりの遠山いはれある上に

行成卿
大納言の本に遠山すりとあり。
万十一伊勢物語
浪間よりみゆる小島の濱ひさし久しく成ぬ君にあはすて
定家
霜おかぬ南の海の濱ひさし久しく殘る秋のしら菊
右はまひさしにて。庭上のこゝろはあるなり。
一一首中毎句有疊詞歌
万一
よき人のよしとよくみてよしと云し吉野よくみよよき人よ君
人丸
同十一
梓弓引みひかすみこすはこすこはこそせなそこすはこはそを
讀人不知
後撰
思ふ人おもはぬ人のおもふ人おもはさらなん思ひしるへく
同
秋も秋今宵も今宵月も月所も所みるきみもきみ
西行
新古
いかゝすへき世にもあらはや世を捨てあなうの世やと更に思はむ
右か様の歌はわさとよめれはわろし。たまさかには今も讀へき也。
一無同文字歌
ものゝへのよしな
古
世のうきめ見えぬ山路にいらんには思人こそほたしえけれ
第二　取本歌本説體
一取本歌二句或三句引違意體

古 あかてこそ思はん中はわかれなめそをたに後の忘かたみに　讀人不知
新古 ちる花の忘かたみの嶺の雲そをたにのこせ春の山風　良平
本歌の二句の詞をとりて。四季の歌をは戀雑によみ。戀雑をは四季の歌によみなす。是本歌をとるにたやすき様なり。
伊勢 思あらは葎の宿にねもしなむひしき物には袖をしつゝも
新 たえてやは思ありともいかゝせむ葎の宿の秋の夕暮　雅經
古 名取川瀬々の埋木あらはれはいかにせんとかあひみそめ劔　讀人不知
名とり川春の日数もあらはれて花にそしつむ瀬々の埋木　定家
万七 ことしゆく新島もりかあさ衣かたのま〔上缺〕あひは誰かとりみん
名所百首 玉島や新島もりかことし行川瀬ほのめく春の三日月　家隆
万一 たをやめの袖吹かへすあすか風都をとをみいたつらにふく　定家
飛鳥川遠き梅かゝにほふよはいたつらにやは春風は（のイ）ふく　躬恒

古 けふのみと春を思はぬ時たにもたつ事やすき花の陰かは
新古 散はてゝ花の陰なき木の本に立事やすき夏衣哉　慈圓
一本歌第三四句を第一二句になしてよめる體
拾 春たつといふはかりにやみ吉のゝ山も霞みてけさはみゆ覧　忠岑
新古 三吉野は山も霞て白雪のふりにし里に春は來にけり　後京極
源氏 世に知ぬ心地こそすれ有明の月の行衛を空にまかへて
新 有明の月の行衛を詠めてそ野寺の鐘はきくへかりける　慈圓
古 秋の夜は名のみ之けり逢といへはとそともなく明ぬる物を
新 逢とみてとそともなく明にけりはかなの夢の忘かたみや
一本歌第一二の句を第三四の句になしてよめる躰
古 わきも子か衣のすそを吹返しうらめつらしき秋のはつかせ　讀人不知
新 さらてたに恨みんと思ふわきも子か衣のすそに秋風そ吹　有家
伊 かち人の渡れとぬれぬえにしあれは又相坂の關もこえなん
新古 相坂の關ふみならすかち人の渡れとぬれぬ花の白なみ　後京極

人丸

万 さゝの葉のみ山もそよとみたるめり我は妹思ふ別きぬれは

清輔

新 君こすは獨やねなん篠のはのみ山もそよとさやく霜夜を

讀人不知

古 小莚に衣かたしき今宵もや我を待らん宇治のはし姫

後京極

新 きり〳〵す鳴や霜夜のさ莚に衣かたしきひとりかもねん

讀人不知

古 時鳥鳴や五月のあやめ草あやめも知ぬ戀もするかな

後京極

新古 打しめりあやめそかほる時鳥鳴や五月の雨の夕くれ

一取本歌一句躰

讀人不知

古拾 戀すれは我みは影と成にけりさりとて人のそはぬ物ゆへ

後京極

はるかなる程にもかよふ心哉さりとて人のしらぬ物ゆへ

讀人不知

新 我泪もとめて袖にやとれ月さりとて人のかけはみえねと

古 春の色のいたり至らぬ里はあらしさける咲さる花のみゆ覽

長明

新 秋風のいたりいたらぬ袖はあらしたゝ我からの露の夕暮

蟬丸

古 是やこの行も歸るも別ては知もしらぬもあふさかの關

家隆

新 此程は知もしらぬも玉鉾の行かふ袖は花の香そする

讀人不知

古 君やこし我や行けん思ほえす夢かうつゝかねてかさめてか

家隆

新 櫻花夢かうつゝかしら雲の絕てつれなき嶺の春かせ

素性

古 ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年を我そへにけん

後京極

新 ぬれてほす玉くしのはの露霜にあまてる光いく代へぬ覽

喜撰

古 我庵は都のたつみしかそすむ世を宇治山と人はいふなり

後京極

新 春日山都のたつみしかそおもふ北の藤なみ春にあへとは

源 鈴虫の聲のかきりをつくしても長夜あかすふるなみた哉

家隆

新 虫の音も長夜あかぬ古鄕に猶おもひそふまつかせそふく

小町

古 侘ぬれは身を浮草のねを絶て誘ふ水あらはいなんとそ思ふ

俊成女

新 恨すや浮世を花の厭ひつゝ誘ふ風あらはと思ひけるをは

万 河内女の手染の糸を繰返し片糸にあり共たえんと思はんや

定家

河内山也 伊駒山嵐も秋の色にふく手染の糸のよるそかなしき

万 鹽みては入ぬる磯の草なれやみらく少くこふらくのおほき

讃岐

新 みるめこそ入ぬる磯の草ならめ袖さへ波のしたに朽ぬる

源まさすみ

古 谷風にとくる氷の隙ことにうちいつる浪やはるの初花

家隆

新 谷川に打出る浪も聲たてつ鶯さそへはるの山かせ

源 みても又逢夜まれなる夢の中にやかてまきるゝ我身とも哉

後京極

新 みし夢はやかてまきれぬ我身社とはるゝけふは先悲けれ

一本歌二句三句不替置所躰

小町

古 色見えてうつらふ物は世中の人の心のはなにそありける

俊成女

新 折ふしもうつれはかはる世中の人の心のはなそめのそて

古恋歌 逢事のまれなる色に思ひそめ我身はつねにあま雲の空

定家

新イ 逢事のまれなる色やあらはれんもり出て染る袖の泪に

忠岑

古 有明の難面見えし別より暁はかりうき物はなし

後京極

新 有明のつれなくみえし月は出ぬ山郭公待夜なからに

人丸

古 足引の山鳥のをのしたりおの永〳〵し夜をひとりかもねん

後鳥羽

新 櫻さく遠山鳥のしたりおのなか〳〵し日もあかぬ色かな

読人不知

古 わたつ海の沖津鹽合にうかふ泡の消ぬ物からよる方もなし

家隆

新 和歌の浦や沖津鹽あひに浮ひ出る哀我身のよるへ知せよ

遍昭

新 末の露もとの雫や世中のおくれさきたつためしなるらん

本末究竟等

後京極

新 末の露もとの雫もひとつそと思出てもそてはぬれけり

源 空蝉の羽におく露の木かくれてしのひ〳〵にぬるゝ袖かな

後京極

新 なく蟬の羽におく露の秋かけて木陰凉しき夕暮の聲
古 憑めつゝこぬ夜あまたに成ぬれはまたしと思ふそ待に勝れる
家隆
新 いかにせんこぬ夜あまたの郭公またしと思へは村雨の空
古 思ほえす袖にみなとのさわく哉もろこし船もよりし計に
定家
鳴千鳥袖のみなとにとひこかし唐土舟もよるのね覺に
新 今さらに雪ふらめやもかけろふのもゆる春日と成にし物を
後京極
櫻花今かさくらむかけろふのもゆる春日にふれるあは雪
古 山城のゐての川浪立かへり見てこそゆかめ山ふきの花
俊頼
新 櫻あさのおふの浦浪立かへり見れともあかす山なしの花
古 結手の雫にこる山の井のあかても人にわかれぬる哉
慈圓
新 むすふ手に影みたれ行山の井のあかても月の傾きにけり
千里
古 月みれはちゝに物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねと
長明
新 詠れはちゝに物思ふ月に又わか身ひとつのみねの松かせ
古 おふの浦に片枝さし掩ひなる梨のなりもならすもねて語らはん

新 片枝さすおほの浦梨初秋になりもならすも風そみにしむ
宮内卿
讀人不知
古 折つれは袖こそ匂へ梅の花ありとや爰にうくひすの鳴
有家
新 散ぬれは匂はかりを梅花ありとや袖に春かせのふく
中皇子
万 君か代も我代もしれやいは代の岡のかやねをいさ結ひてん
式子
新 行末は今いく世とかいはしろの岡のかやねに枕むすはん
一本歌の意詞を引直用體
菅文時
拾 水の面に月のしつむをみさりせは我はかりとや思はてまし
顯輔
詞花 難波江のあしまにやとる月みれは我身一もしつまさり㒵
一本歌の意に贈答せる體
後拾 さひしさに宿を立出て詠れはいつくもおなし秋の夕暮
定家
秋よたゝ詠すてゝも出なまし此里のみの夕と思はゝ
源 あけまきのなかき契を結こめおなし心によりもあは南
定家

なかくしも結はさりける契故何あけまきのよりあひに劔

大貳三位

吹風そおもへはつらき櫻花こゝろとちれる春しなければ

定家

風ならて心とをちれ櫻花うきふしにたにおもひおくへく

和泉式部

（後拾）黒髪の亂もやらて打ふせはまつかきやりし人そ戀しき

定家

かきやりし其黒髪のすちことに打臥宵は面影そたつ

讀人不知

（古）名取川瀬々の埋木あらはれていかにせんとか逢みそめけん

定家

名取川いかにせんともまたしらす思へは人を恨みける哉

人丸

（万）さほしかの妻とふ山の岡へなるわさ田はからし霜はおく共

定家

思ひあへす秋ないそきそさほ鹿の妻とふ山の小田の初霜

伊勢

（古）久堅の中におひたる里なれは光をのみそたのむへらなる

定家

（新）久堅の中なる川のうかひ舟いかに契てやみをまつらん

（古）立別いなはの山の嶺におふる松としきかは今歸りこん

行平

（新古）忘れなんまつとなつけそ中〱にいなはの山の嶺の秋風

定家

（古）み山には松の雪たに消なくに都は野邊の若菜つみけり

讀人不知

消なくに又やみ山をうつむ覽若菜つむ野にあは雪そふる

定家

（古）唐土も夢にみしかは近かりき思はぬ中そはるけかりける

兼藝法師

心のみもろこし迄もあくかれて夢路に遠き月の比哉

定家

右定家卿歌は此體を自得せると見え侍り。

（古）君かうへし一村薄虫の音のしけき野へとも成にける哉

兼藝法師

しけき野をいく一村に分なしてさらに昔を忍ひかへさむ

西行

（古）立田川紅葉みたれてなかるめり渡らは錦なかやたえ南

讀人不知

立田川嵐や嶺によはるらんわたらぬ水も錦たえけり

宮内卿

能因
後撰 心あらん人にみせはや津の國の難波わたりの春のけしきを
爲家
津の國の難波の春の曙に心あれなと身をおもふかな
德朝法し
詞花 君すまは問まし物を津の國の生田の森の秋のはつかせ
右歌は詞花集に入たれ共。作者は一條院の御（時イ）代の人と見えたり。故に多本の歌にとられ侍り。
家隆
新 昨日たにとはんと思ひし津國の生田の森に秋は來にけり
同
津の國のいく田の杜の時鳥をのれすますは秋そとはまし
順德
御百首 秋風に又こそとはめ津の國の生田の森の春の明ほの
新 さ夜ふくるまゝに汀やこほるらん遠さかり行志賀の浦波
家隆
新 志賀の浦や遠さかり行浪間より氷りて出る有明の月
後拾 花みると家路におそく歸る哉まち時すくといもやいふらん
實定
新 花みてはいとゝ家路そ急かれぬ待らんと思ふ人しなければ
讀人不知

古 色よりも香こそ哀とおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも
通具
新古 梅花誰袖ふれし匂そとはるやむかしの月にとはゝや
木舟明神
後拾 奥山にたきりて落る瀧津瀨の玉ちるはかり物な思ひそ
後京極
新 幾夜われ浪にしほれて貴布禰川袖に玉ちる物おもふらん
一本歌の隔句をつゝけて讀る體
讀人不知
古 梅か枝にきゐる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝ
後鳥羽
新古 鶯の鳴ともいまたふる雪に杉のはしろき相坂の山
人丸
万 時雨の雨まなくしふれは槙のはも爭ひかねて色付にけり
後鳥羽
新 深緑あらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神杉
遍昭
古 淺みとりいとよりかけて白露を玉にもぬけるはるの柳か
有家
新古 青柳のいとに玉ぬく白露のしらすいく代の春かへぬらん
貫之

（古）白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらす紅葉しにけり
家隆
（新）露時雨もる山陰の下紅葉ぬるともおらん秋のかたみに
素性
（古）思とち春の山邊に打むれてそこともいはぬ旅寢してしか
家隆
（新古）おもふとちそことも知す行暮ぬ花の宿かせ野への鶯

一取用本歌物語意詞事

奥（万葉）貝麿
（万十三）苦しくも降くる雨かみわか崎さのゝ渡りの家もあらなくに
定家
（新）駒とめて袖打はらふ陰もなしさのゝ渡りの雪の夕暮

伊勢物語。あまのさかてをうつ事。

定家
己のみあまのさかてを打たへに（一向ニカノ物語ノ心ヲトレリ）木の葉降敷跡たにもなし

源氏若紫の巻云。くらふの山にやとりもとらまほしく覺え給へと。あやにくなるみしか夜にて。

定家
今宵たにくらふの山に宿もかな曉しらぬ夢や覺ぬと
同
やとりせぬくらふの山を恨みつゝはかなの春の夢の枕や

同椎本巻云。うらめしといふ人もありけり。里の名のなへてむつましうおほさるゝゆへも。

定家
待人の山路の月も遠けれは里の名つらきかたしきのそて
家隆
初霜のなれもおきゐてさゆる夜に里の名恨みうつ衣哉
（万）君かあたり見つゝをゝらむ伊駒山雲なかくしそ雨はふる共
定家
伊駒山いさむる嶺にゐる雲のうきて思のはるゝまもなし

萬葉第九梧桐日本琴一面（對馬結石山の桐。此琴夢化娘子云云。孫枝ナリ。）

定家
いかにあらん日の時にかも聲しらん人の膝の上わか枕せん
（六百番）昔聞君かてなれのことならは夢に知れてねをもたてまし

一取用詩意事

文集嘉陵春夜詩。不明不暗朧々月。

大江千里
（新古）照もせすくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物そなき

文集。林間煖酒燒紅葉。

定家
（林雪）林あれて秋の情も人とはす紅葉をたきし跡の白雪

同。廬山雨夜草庵中。

昔おもふ草の庵のよるの雨に泪なそへそ山郭公　俊成

晋王子猷山陰に有て。雪の夜舟にのりて友を尋て歸りし事あり。

花歌
あくかれし雪と月との色とめて木末にかほる春の山陰　定家

雲夢は澤の名之。

月淸みねられぬ夜しも唐土の雲の夢まで見る心ちする　同

文集。影落坏中五老峯。

色に出て秋の木末そうつりゆくむかひの嶺に浮ふさか月　同

毛詩云。陟彼高崗。我馬玄黃。(注馬病則黃。)

黑かりし我駒の毛のかはるまてのほりそなつむ峯の巖に　同

文集。醉悲淚灑春杯中。白樂天於舟中逢元微之時口號也。

恩草
もろ友にめくりあひぬる旅枕泪そそゝく春のさか月　同

文集。三秋而宮漏正長。空階雨滴。萬里而鄕園何有。落葉窓深。

ひとりきくむなしきはしに雨落てわかこし道を埋む木枯　同

同。望長安之遠樹。百千萬薺薺靑。

かへりみる雲より下の古鄕にかすむ梢やはるのわか草　同

鄭公請於神。日常患若耶溪載薪爲難。願旦南風暮北風。至今爲然。號鄭公風。

澤卯花
歸るさの夕は北に吹風の浪たてそふる岸の卯花　同

毛詩云。鶴鳴九皐。聲聞于天。(皐は澤也。)

九の澤になくなるあしたつの子をおもふ聲は空に聞ゆや　基俊

一題をまはして意をたくみによめる躰

旅戀
かりにゆふ庵も雪にうつもれて尋そわふるもすの草くき　定家

待戀
風あらきもとあらの小萩袖にみて深ゆく夜半におもる白露　同

旅
水くきの岡のまくすをあまのすむ里のしるへと秋かせそ吹

山路尋花
旅衣袖ふく風やかよふらんわかれて出し宿のすたれに

松浦山
三吉のゝ春もいひなしの空めかとわけ入みねに匂ふ白雲

たらちねやまたもろこしにまつら船今年も暮ぬ心つくしに

右山上憶良在大唐憶故郷歌萬葉に有。又憶良思子歌等同在萬葉。又松浦さよ姫ひれふる山の歌等あり。かれこれをとりあはせてよめるにや。

同 秋の色にさてもかれなて蘆へ行たなゝし小船我そつれなき（おなし人を戀わたる貫之）

山家ノ曙 と山とてよそにも見えし春のきる衣かたしきねての朝けは

尋山花 たか里の雲のなかめに暮ぬらん宿かる花の嶺の木の本

花添山氣色 玉ノたれおなしみとりもたをやめの染る衣にかほる春かせ

水滑流白秋 夏衣秋たにたえぬ神無月いせきの浪のいそく時雨に

池月久明 いく千代そ袖ふる山の水かきもおよはぬ池にすめる月影

夏はてゝぬるやかはへのしのゝめに袖吹かふろ秋のはつ風

右萬葉歌二首あり。一云。秋かしわぬるや川邊のしのゝめに人もあひ見す君にまさらし。又云。あさかしわぬるや河邊のしのゝめに思ひてぬれは夢に見えくる。二首ともにぬるの詞は潤の字を書り。川邊なれはぬるゝ心にや。定家歌は寢心によめり。草木も夜はぬる事あれは。潤の字もぬる心に通てかけるにや。おほつかなし。猶可尋。

水鳥 池にすむ在明の月の明る夜をおのかなしるくうきねにそ鳴

万代戀 おしほ山千代の綠の名をたにもそれとはいはぬ恭そ寂しき

右拾遺愚草にのせたる歌ともなり。

一字両には見えされ共てにはによりて戀の歌になる事　　後京極

新後撰戀 又もこむ秋をたのむのかりたにも鳴てそ歸ろ春の明ほの　　俊成

千五百番 道のくのあら野の牧の駒たにもとれはとられて馴ゆく物を　　後京極

新 何ゆへと思ひも入ぬ夕たに待出し物を山のはの月

右たにの詞にてみな戀の歌になれり。

古 白浪の跡なきかたにゆく舟も風そたよりのしるへ成ける　　式子

新 しるへせよ跡なき浪に漕船の行衞もしらぬ八重の鹽風　　後京極

同 かちをたえゆらのみなとによる舟の便もしらぬ興津鹽風

右初の一首はもの字にて戀の歌になれり。後の歌は。しるへせよ。又たよりもしらぬ詞にて戀になれり。

第三　虚字言葉

一うたて　うたゝ同。あまりにと云心也。轉の字也。

古 ちるとみて有へき物を梅花うたて匂ひの袖にとまれる　　素性

同 心こそうたてにくけれ染さらは移ろふ事もおしからましや　　讀人不知

萬十一 三日月のさやかに見えぬ雲隠れみまくそほしきうたて此比　　同

同 花とみておらむとすれは女郎花うたてある様の名に社有けれ　能因

後拾 おもふ事なけれとぬれぬ我袖はうたゝあるのへの萩の露哉

一あやなし　かひなき心也。顯昭か云。やくなきといふこゝろ也。

古 春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえね香やは隱るゝ　躬恒

同 見すもあらす見もせぬ人の戀しくはあやなくけふや詠暮さん　業平

同 知しらぬ何かあやなくわきていはむ思のみ社しるへ成けれ　讀人不知

一あやな　あやなしのし文字を略したる也。

拾 身にかへてあやなく花を惜かないけらは後の春もこそあれ　長能

古 山吹はあやなくさきそ花みんとうへけむ人の今宵こなくに　讀人不知

後拾 ふりぬとて思もすてしから衣よそへてあやな恨みもそする

同 心もておるかはあやな梅の花香をとめてたにとふ人のなき　能宣

拾 匂ひをは風にそふとも梅花色さへあやなあたに散すな

一あやに　あやにくと云詞也。あいにくの心也。

後 くれはとりあやに戀敷ありしかは二むら山もこえす成にき

一いさゝめ　かりそめ也。

萬 いさゝめに思ひし物を田子の浦にさける藤浪一夜へにけり

同 眞木柱つくる杣人いさゝめにかりほにせんと造（きのイ）りけめやは

古 いさゝめに時待間にそ日はへぬる心はせをは人に見えつゝ　まのゝめのと

一けに　それよりまさると云心也。勝の字をかく。けはすみて讀へし。定家卿云。又誠にさりけりと云事をけにとつかふは。現にといふ心也。

古 夕されは螢よりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき　きのとものり

同 忘れなんと思ふ心のつくからに有しよりけにまつそ戀しき（伊勢物語云わするらん物語に云うたかひに）

新古 おきてみんと思ひしほとにかれに鬼露よりけなる朝顔の花　好忠

右勝の字也。

愚草 むは玉の夜わたる月のすむ里はけに久堅の天の橋たて　定家

右現の字也。

一ことならは　かくのことくならはなり。

古 ことならはさかすやはあらぬ櫻花みる我さへにしつ心なし　貫之

[後]ことならは折つくしてん梅の花我まつ人のきてもみなくに

一あへす　とりあへすの心也。不敢とかく。思あへすは思さためぬこゝろ也。

[古]千早振神のいかきにはふくすも秋にはあへす移ろひにけり　讀人不知

[同]秋風にあへすちりぬる紅葉はの行衛定ぬ我そかなしき　貫之

[愚草]思あへす秋ないそきそさほ鹿の妻とふ山の小田のはつ霜　定家

一ほに　あらはれたる心也。それを穗にも火にも帆にもよせて讀也。

[古]秋の田のほ[穗]にこそ人を戀さらめなとか心にわすれしもせん　讀人不知

[萬]見渡せは明石の浦にたける火のほ[火]にこそ出めいもに戀しも

[古]秋風に聲をほ[帆]にあけてくる舟はあまの戸渡る鴈にそ有ける　菅根朝臣

一たまゆら　玉のこゑ也。日本紀に玲瓏とかく。八雲抄には玉ゆらはしはしといふこゝろ也。

[萬十一]玉響にきのふの夕みし物をけふのあしたはこふへき物か

[堀百]遲れしと山田のさ苗とる田子の玉ゆらもすそほす隙そなき　紀伊

[愚草]七夕の手玉もゆらにをるはたを折しもならふむしのこゑ哉　定家

[同]玉ゆらの露も泪もとゝまらすなき人こふるやとの秋かせ　同

一ゆらく　のふる心也。

[新古]初春の初音のけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉のを　讀人不知

一わくらは　たまさかの心也。又夏木立の中にもみちしたるをもわくらはと云也。

[万]人となる事はかたきを和久良婆になれる我身は死も生も

[古]わくらはに問人あらはすまの浦にも鹽たれつゝわふと答へよ　行平

[源氏]わくらはに行あふ道を賴みしも猶かひなしやしほならぬ海

[愚草]わくらはにとはれし人も昔にてそれより庭の跡はたえにき　定家

一しのゝく　凌の心也。浪をしのく雲をしのくなとも同。顯昭か云。侵心也。

[萬]いはせ野に秋萩しのき駒なめて初とかりたにせてやゝみ南　讀人不知

[古]奥山のすかのねしのき降雪のけぬとかいはん戀のしけきに　賴綱

後 奥山の槇のはしのきふる雪のいつとくへしとしらぬ君哉

一たわゝ　とをゝ同。たわみたる心也。

古 おりて見は落そしぬへき秋萩の枝もたわゝ（とをゝイ）におけるしら露　讀人不知

後 秋萩の枝もとをゝに成行は白露おもくをけるなりけり

一いましは　定家卿云。いまはと云詞にし文字をそへたる也。顯昭云。いましはしなり。

古 いましはといひにし物をさゝかにの衣にかゝり我を頼むる　讀人不知

一しつく　石なとの浪にゆられて。あらはれかくるを云也。

萬 藤浪のかけなる海の底清みしつく石をも玉とわかみる　小野篁

古 水の面にしつく花の色さやかにも君か御影のおもほゆる哉　長明

かつらきやとよらの寺のゑのは井に猶白玉をしつく月かけ

催馬楽云。かつらきの寺の前なる。とよらの寺の西なるや。ゑのは井に白玉雫や。ましら玉しつくや。

一うたかた　二の心あり。一は寧なと云やうなる詞也。一は水のあはを云なり。後撰の歌は水のあはによせて詞をつゝけたる也。

第十五 はなれそにたてる室の木うたかたも久しき年を過にける哉

萬十七 鶯のきなく山吹うたかたも君か手ふれす（はイ）花ちらんかも

後 思川たえすなかるゝ水の泡のうたかた人にあはてきえめや

源 詠する軒の忍ふに袖ぬれてうたかた人もしのはさらめや

一ゆたのたゆた　浪にゆられたゆたふ（へイ）心也。

萬 我心ゆたのたゆたにうきぬなは江にも澳にもよりやかねまし　讀人不知

古 いて我を人なとかめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふころそ

一いて　萬葉には乞の字を書ていてとよめり。請心にや。又さてもなと云心にかなへる歌もあり。

萬十二 乞如何（いていかに）わかかく戀るわきもこかあはしといへる事もあらなくに

万 いてあか駒ははやく行ませ見上

いて我を人なとかめそ同上

古 いて人はことのみそよき月草のうつし心は色ことにして　讀人不知

同 我をのみおもふといはゝ有へきをいてや心は大ぬさにして

一さそな　けにそなといふ心也。

後鳥羽

新 露は袖に物思ふ比はさそなおく必秋のならひならねと

後京極

同深山月 深からぬと山の庵のね覺たにさそな木の間の月はさひしき

定家

かれぬるはさそなためしと詠てもなくさまなくに霜の下草　同

新 袖にふけさそな旅寢の夢もみし思ふ方よりかよふうら風

一しつはた　みたれたる心也。しつはた帯はしつかおるはたぬのゝ帯也。それは別の事也。

後 しつはたにへつる程なる白糸のたえぬる身とは思はさら南

しつはたに思ひみたれて秋の夜の明るも知す歎きつる哉

一やよ　やゝと呼たる心也。

古 やよやまて山郭公事つてむわれ世中にすみわひぬとよ　三國町

源 思ふらん心の程ややよいかにまたみぬ人のきゝかなやまん

同 いふせくも心に物を思ふかなやよやいかにととふ人もなみ

新 やよ時雨物思ふ袖のなかりせは木のはの後に何をそめまし　慈圓

一いとなき　いとまなき也。

古 あはれともうしとも物を思ふ時なとか泪のいとなかるらむ　讀人不知

古 日暮しの聲もいとなくきこゆるは秋夕暮になれは成けり

後 春の池の玉もにあそふ鳰とりのあしのいとなき戀もする哉

一そかひ　をひすかひたる事をそかと云。そかきくもそかひきく也。

萬六 玉しきて待ましよりは竹そかに來る今夜し賴もしく思ほゆ

同 筑波ねのそかひに見ゆる足尾山あしかるかともさね見えなくに

拾 かのみゆる池へにたてるそか菊の茂きさ枝の色のてこらさ（一説承和菊云々俊成定家卿不用之）　定家

愚草 足尾山やます心はつくはねのそかひにたにも見らくなき比

一いさよひ　いさよふ同。やすらふ心也。猶豫とかく。又不知夜とかけり。

萬三 武士の八十うち川のあしろ木にいさよふ浪の行衞しらすも　人丸

同七 山のはにいさよふ月を出んかと待つゝをるに夜そ更にける

同 かくれぬの初瀬の山の山際にいさよふ雲はいもにか有らん

古 君やこむ我やゆかんのいさ宵に槇の板戸もさゝすねにけり　讀人不知

愚 郭公心つくしの山のはをまたぬに出るいさよひの月　定家

一說。いさよふ月は十六夜の月を云。萬葉には不知夜とかけり。十五夜の月よりいさゝか遲く出るによりて。やすらふとはいへり。源氏物語云。いさよふ月にゆくりなくあくかれん事をといへり。是は十五夜の月の入かた十六日になる事をいへり。是も月の入らむとて。しはらくやすらふ心にいへるにや。

一ほと〳〵しく　二の心あり。一はうと〳〵しき心也。一は
おとろ〳〵しき心也。いつれも木をきるをとをいへり。
（後）なけきこる人ゐる山の斧のえのほと〳〵しくも成にける哉
右後撰第十七詞云。人のもとより。久しう心地わつらひて。ほと〳〵しくなんありつるといひて侍けれは云々。
（拾）宮作るひたの工のてをの音ほと〳〵しかるめをもみし哉
右歌の詞にその心見えたり。源氏藤のうら葉の巻にも此詞みえ侍り。

一みかくれ　水にかくるゝ也。俊頼朝臣は見えかくるゝ心にはしめてよめり。
（古）河の瀬になひく玉ものみかくれ（水）て人に知れぬ戀もする哉
（源氏）けふさへや引人もなきみ（水）隠におふる菖蒲のねのみなかれむ
俊頼
とへかしな玉くしのはに見隠れてもすの草莖めちならす共

一すさむ　物のすかりたる心也。定家卿云。すさふと云詞。古人不好詠之。
式子
（新古）窓ちかき竹のはすさむ風の音にいとゝみしかき夏の夜の夢
西行
（同）松にはふまきのはかつら散にけりと山の秋は風すさむらむ
後京極
思ひ侘うちぬる宵もありぬへし吹たにすさめ庭の松風
西行
誰すみて哀しるらむ山里の雨ふりすさむ夕暮の空

一かはす（むイ）　ましへたる心也。定家卿云。枝かはすなとは不立（廿）耳云々。
讀人不知
（古）白雲に羽うちかはしとふ鴈の數さへみゆる秋の夜の月
俊頼
おもふ（ひイ）くまなくても年のへぬる哉物いひかはせ秋の夜の月
後撰第十一詞云。人にいひかはし侍ける云々。

一はた　将也。當也。ことはのたすけ也。
そせい
（古）郭公初こゑきけはあちきなくぬし定ぬ戀せらるはた
（後）から衣きてかへりにしさ夜すから哀と思ふを恨らんはた

一しかすか　さすかなり。しとさとは五音通也。
（萬七）荒磯こす浪は騒かししかすかに海の玉もはにくゝはあらすて
能因
（拾）打きらし雪はふりつゝしかすかに我家のそのに鶯そ鳴
（後）まとろまぬ物からうたてしかすかに現にもあらぬ心地のみする
能因
（後拾）思ふ人ありとなけれと古郷はしかすかにこそ戀しかりけれ

同 しかすかにかなしき物は世中をうきたつほとの心なりけり　馬内侍

一すさめぬ　不愛也。すさむは愛也。世俗に用るにはかはる
也。

古 山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわひそ我見はやさむ　讀人不知

後拾 香をとめてかる人あるを菖蒲草あやしく駒のすさめさり鳬　惠慶

源 その駒もすさめぬ草となにたてる汀のあやめけふや引つる

一たれしかも　誰かも也。し文字は詞のたすけ也。

古 誰しかもとめて折つる春霞立かくすらん山のさくらを　貫之

愚草 誰しかも初音聞らん郭公またぬ山路にこゝろつくさて　定家

御百首 誰しかも松のを山のあふひ草かつらにちかくちきりそめ劔　順徳

一こゝら　おほき心也。

古 木つたへはおのか羽風に散花を誰におほせてこゝら鳴らん　素性

同 世中はいかにくるしと思ふらんこゝらの人に恨みらるれは

一いつはとは　いつとは也。は文字をそへたる也。

古 いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふとのかきり成ける　讀人不知

一さしなから　二の心有。一はさなからと云詞也。一はさす
也。

拾 櫻花今夜かさしにさしなからかくて千とせの春をこそみめ　九條右大臣

同 さしなから昔を今に傳ふれはつけのをくしそ神さひにける

大空にむれゐるたつのさしなから思ふ心の有けなる哉

一くたち　かたふく心也。夜くたちも夜のふけゆく事を云
也。

古 さゝの葉に降積雪のうれを重みもとくたち行我さかりはも　讀人不知

萬 夜くたちにねさめておれは河瀬とめ心もしのになく千鳥哉

一かて　かつ〳〵なり。

古 淡雪のたまれはかてにくたけつゝわか物思ひのしけき比哉　讀人不知

一よるへ　たのむ縁あるあたりを云也。よるへの水も其心
也。

古 よるへなみ身をこそ遠くへたてつれ心は君か影と成(もイ)にき　讀人不知

後 なるとよりさし出されし舟よりも我そ寄邊のなき心ちする

源 さもこそは寄邊の水にみ草ゐめけふの挿頭よ名さへ忘るゝ

清輔

月影はさえにけらしな神垣のよるへの水につらゝゐるまて

一說よるへの水は社頭の神水かめに入たるを云といふ說あり。但俊成定家は不用之。清輔朝臣の歌は其心也。俊成定家はたゝ緣ある水にもちい侍り。源氏の歌は神水の心にもより侍れと。それも又緣のこゝろに見侍れは。相違なく侍るへし。いさゝかそれに相にたれ共。又緣ある水とも聞侍り。

一そよ　さや同。そよく心也。

古 ひとりして物を思へは秋の田の稻葉もそよといふ人のなき

後 花薄そよともすれは秋風の吹かとそ聞ひとりぬる夜は

人丸

新 さゝの葉は深山もそよと亂るめり我はいも思ふ別きぬれは

一ことなしふとも　事なきさまにいひなすなり。

讀人不知

古 村鳥の立にし我な今さらにことなしふともしるしあらめや

一こてふにゝたり　來るといふにゝたる也。

讀人不知

萬 我宿の梅咲たりと告やらはこてふにゝたりまたすしも非す（散ぬ共よし）

貫之

古 月夜よし夜よしと人に告やらはこてふにゝたり待すしもあらす

貫之

拾 こてふにもにたる物哉花薄戀しき人に見すへかりけり

一なみにおもふ　人なみに思ふ也。

万 わかゆつる松浦の川の河浪のなみにおもはゝ我戀めやは

讀人不知

古 みよし野の大かはのへの藤浪のなみにおもはゝ我戀めやは

一やさしき　はつかしき也。俊頼朝臣は就世俗之詞。やさしき心に用之。

讀人不知

古 何をして身のいたつらに老ぬらん年の思はん事そやさしき

一打きらし　空のきりわたれる心也。たなきりあひ。あまきりて同之。

家持

拾 打きらし雪はふりつゝしかすかに我家のそのに鶯そ鳴

萬八 たなきりあひ雪もふらぬか梅花さかぬかはりにそへてたにみん

同 あまきらし雪もふらぬかいちしろくこのいちしはにふらまくをみん

一みなから　みなゝから也。

業平

古 紫の一もとゆへにむさしのゝ草はみなからあはれとそ思ふ

一たはやすく　たやすき也。

後 霰ふるみ山の里のさひしきはきてたはやすくとふ人そなき

一うらめつらし　うらかなし。うら戀し同之。うらは心を云也。

讀人不知

古 わかせこか衣のすそをふき返しうらめつらしき秋の初かせ

源 舟人は誰をこふとか大嶋のうらかなしけにこゑのきこゆる

一うらひれ　うらふれ同。物おもひうられへたる心也。しなへうらふれと云同之。

讀人不知

古 秋萩にうらひれおれは足曳の山下とよみ鹿のなくらん

一とゝろ　動也。

貫之

古 五月雨の空もとゝろに郭公なにをうしとかよたゝなくらん

讀人不知

同 天の原ふみとゝろかしなる神もおもふ中をはさくる物かは

一すへなし　たよりなき也。

古 あふくまに霧立渡り明ぬとも君をはやらしまてはすへなし

一なたゝる　名に立也。

雅正

後（たにもイ）露にたになたゝる宿の菊ならは花のしるし（あイ）や幾代なるらん

一われて　わりなくしての心也。一にはわかれて也。

讀人不知

古 宵の間に出て入ぬる三日月のわれて物思ふ比にも有哉

高根より出くる水の岩たゝみわれてそ思ふいもに逢ぬ夜は

新院

詞花 せを早み岩にせかるゝ谷川のわれても末にあはんとそ思ふ

永實

金 三日月のおほろけならぬ戀しさにわれてそ出る雲の上より

一またき　はやき也。速字をかく。

讀人不知

古 我袖にまたき時雨のふりぬるは君か心に秋やきぬらん

伊 夜も明はきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる

公實

堀百 春立て梢に消ぬ白雪はまたきにさける花かとそ見る

一うつたへに　打つけと云心也。定家卿は打と云心によまれ侍り。八雲抄に云。打たへて。偏にといふ心也。たへはたひなと云かことし。又詞也。

春雨はふりそめしかとうつたへに山を（忠見集歟）緑になさんとやみし

うつたへにあまたの人はありといへとわきて我しも夜獨ぬる

うつたへに鳥ははまねと綱はへてもてまくほしき梅花かも

源氏には藤袴卷に。うつたへに思ひもよらてとりたれは。手を引うこかしたり。これはうちつけ也。やかての心也。

森雨の歌と同。

松かねを礒への浪のうつたへにあらはれぬへき袖の上哉　　定　家

おのれのみ登のさかてをうつたへに木葉降敷跡たにもなし　　同

一まとを　　間遠也。まちかきは間近也。

萬三　こらか家路や丶間遠きをぬは玉の夜渡る月にきほひあへんかも

同四　はしけやし間近き里を雲井にや戀つ丶おらん月もへなくに　　讀人不知

古　須磨の海士の鹽燒衣筬をあらみま遠にあれや君かきまさぬ

新　なれ行はうき世なれはやすまのあまの鹽やき衣ま遠成覽　　徽子女王

一いとせめて　　いとは寔也。せめてはせめての事にする也。

古　いとせめて戀しき時はむは玉の夜るの衣を返してそぬる　　小野小町

一なへに　　からにといふ詞と同。

古　我門にいなおほせ鳥の鳴なへにけさ吹風に鴈はきにけり　　讀人しらす

同　夜をさむみ衣かりかね鳴なへに萩の下葉もうつろひにけり　　よみ人不知

第四　實字言葉

一あさなけ　　あさ夕と云詞也。あさにけ同。朝爾食云々。

古　あさなけに見へき君としたのまねは思立ぬる草枕也　　龍

源　朝なけに世のうき事を忍つ丶詠せしまに年はへにけり

萬　いかならん日の時にもかわきもこか裳引の姿朝なけにみん

一玉のを　　三の心あり。一はしはしと云也。一は玉のを。一は命を云也。

萬十二　中〳〵に人とあらすは桑子にもならまし物を玉のをはかり　　藤原興風

古　しぬる命いきもやすると心見に玉のを計あはんといはなん

伊　あふ事は玉のをはかり思ほえてつらき心のなかくみゆらん　　讀人不知

古　あふ事は玉のをはかり名の立はよしの丶山のたきつ瀬のと

右しはしの心也。

古　片糸をこなたかなたに捻かけてあはすは何を玉のをにせん　　讀人不知

右玉の緒也。　又いのちの心也。

新　玉のをよ絕なはたえね存命へは忍ふる事のよはりもそする　　式　子

右いのち也。

一かりほ　　二の心あり。一は借廬也。一は苅穗也。

古 山田もる秋のかりほ（借菴）に置露はいなおほせ鳥の泪成けり　忠岑

後 秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ　天智

一目もはる　二の心あり。一は草木の目のはる也。一は日もはるかなる也。

古 津の國の難波のあしのめもはるにしけき我戀人しるらめや　貫之

難波江に茂れる芦のめもはるに多くの世をは君にとそ思ふ　兼盛

右草木の目のはる也。

古 紫の色こき時はめもはるに野なる草木そ別さりける　業平

右目もはるかなる也。貫之土佐日記に松原目もはる〳〵なりとかけるもおなし。

一野もせ　野の面也。庭もせ。道もせ。宿もせ同之。

後 秋くれは野もせに虫の織みたる聲のあやをは誰かきるらん

同 宿もせにうへなめつゝそ我はみる招く尾花に人やとまると

愚草 庭もせにうつらふ比の梅花あしたわひしき數まさりつゝ

同 道もせにしけろよもきふ打なひき人影もせぬ秋風そ吹

一野つかさ　野きは也。岸のつかさとも云。つかさはきはの心也。

萬十七 足曳の山谷こえて野つかさに今やなくらん鶯の聲

萬四 さほ川の岸のつかさのわかくぬきなかりそありつゝも春しきたらはたち隠るかに

萬十 里とに霜はをくらしたかまとの野山つかさの色つくみれは

一雨もよ　雪もよ同。もよは夜の心也。一説もよは催也云々。

後 月にたに待程おほく過ぬれは雨もよにこしとおもほゆる哉　和泉式部

後拾 三笠山さしはなれぬと聞しかと雨もよにとはおもひし物を

新古 草も木もふりまかへたる雪もよに春立（待イ）梅の花の香そする　通具

源 かきつめて昔戀しき雪もよに哀をそふるをしのうたゝね（ろきねかイ）

一いをやすくぬる　いこそねられれ。いのねられぬ。いもやすくねられぬ。いを皆同。い文字は何もぬる事也。萬葉に寢の字宿の字を書り。

古 夢にたにあふ事かたく成行は我やいをねぬ人やわするゝ　讀人不知

同 手もふれて月日へにける白ま弓おきふし夜はいこそねられね（ぬイ）　貫之

同 いその神ふりにし戀の神さひてたゝるに我はいそねかねつゝ

拾 郭公いたくなゝきそ獨ゐていのねられぬに聞はくるしも

同 君こふる泪のかゝる宵のまは心とけたるいやはねらるゝ　基輔

同 いとゝ歎いもねさるらんと思ふ哉けふの今宵にあへる七夕　躬恒

新 いもやすくねられさり鬼春の夜は花の散のみ夢に見えつゝ

詞花 夢ならて又も逢へき君ならはねられぬいをも歎かさらまし　家隆

新 郭公一聲鳴ていぬる夜はいかてか人のいをやすくぬる

一あさなゆふな　二の心あり。一はたゝ朝夕也。一は朝の食夕の食也。

古 伊勢の蜑の朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしも哉　讀人不知

一あさけ　上におなし。定家卿云。あさあけと。あもしをくわへてよむは。中比よりの事也。このましからぬ事也云々。

萬 郭公けさのあさけに鳴つるは君きくらんかあさいやすらん　安貴王

拾 秋立ていく日もあらぬにこのねぬるあさけの風は袂涼しも

一あたら夜　おしき夜の心也。萬葉に惜夜又新夜とかけり。　源信明

後 あたら夜の月と花とをおなしくは哀しるらん人にみせはや

後 玉くしけあけまくおしき怪夜（アタラ）を衣てかれて一人かもねん

同 我心とのそみ思へは新夜の一夜もおちす夢に見えけり

一ことそともなく　何事をいひ出たる事もなき也。

古 秋の夜は名のみ成けり逢といへは事そともなく明ぬる物を　小町

新 あふとみて事そともなく明にけりはかなの夢の忘かたみや　家隆

一めさし　二の心あり。一はあまのいさりする時物入る籠也。一はめのわらはの名也。

催馬楽 こよろきの磯立ならし磯なつむめさし（二の心あり）ぬらすな沖におれ浪

たけ川の橋のつめなる花園に我をははなてめさし（めのわらはに也）くはへて（するイ　催馬楽の詞也）

神楽 朝くらやおめの湊にあひきせは玉のめさしにあひきあひ鳥

一わかせこ（吾見子）　わきもこ（吾妹子）　通夫婦也。

古 妻 わかせこか衣はろさめふるとに野への綠そいろまさりける　貫之

同 妻 我せこか衣のすそを吹返しうらめつらしき秋のはつかせ　讀人不知

同 夫 我せこを都にやりて鹽かまのまかきの島の松そ戀しき　肥後

堀百 夫 我せこか手なれの駒も澤にあれて春の氣色はあしけなる哉　師頼

（新）我せこ（夫）は柴かりふけと隙をあらみ門田の庵に月そもりくる　人丸

（萬）わきもこ（妻）かねくたれ髪を猿澤の池の玉もと見るそかなしき

一たらちね　通父母也。

（萬七）たらちねの親（母）のそのふの桑も猶袖かへろ衣にきろと云物を

（古）たらちねのおや（母）のまもりと逢そふる心計はせきなとゝめそ　通

（後）たらちね（父）はかゝれ迚しもうは玉の我黑髪をなてすや有けん　昭

たらちね（父）やまたもろこしに松浦舟今年も暮ぬ心つくしに　定家

一しつのをにまき　二の心有。一は苧をうみたるへそを云。一はたゝいやしき人を云也。

（古）いにしへの賤のをた卷いやしきもよきもさかりは有し物也　讀人不知

をた卷はあさけのまひきわかことや心の中に物やかなしき　好忠

（同花）一たひは忍とりにし世の中をいかゝはすへき賤のをたまき　公任

（新）數ならはかゝらましやは世中にいとかなしきは賤のをた卷　式子

（同）それなから昔にもあらぬ秋風にいとゝ詠を賤のをたまき

右おほくはいやしき心によめり。いにしへのしつのをたまきの歌は。へそのをたまきにつゝけてよめり。

一このもかのも　此面彼面也。つくはねにかきるへしと云説はあやまり也。

（古）筑波ねの此面かのもに陰はあれと君か御影にしく陰はなし

（後）山風のふきのまに〳〵紅葉はゝこのもかのもに散ぬへらゑ

源氏云。このもかのもの柴ふるひ人云々。

一きりたち人　八雲御抄云。へたてたる人を云。一說云。きり〳〵とえ忘ぬと云心也云々。不定。

（後）今はとてあきはてられしみなれ共きりたち人を（ゑやは）忘るゝ

一いなせ　いやともおゝとものの心也。

（後）いなせ共いひはなたれすうき物はみを心共せぬ世成けり

右詞云。おやのまもりける女を。いなともおゝともいひはなてと申ければ云々。

一ねりそ　なわのなき時。木草の枝をねちよりてゆふ也。

（拾）かの岡に萩かるおのこ繩をなみ（ねろや）ねりその碎けてそ思ふ

一みなれ　水になるゝ也。それをみなるゝにとりなしてよめり。

（古）よそにのみきかまし物を音羽川渡るとなしにみなれそめ劔　藤原のかねすけ

拾 大井川下す筏のみなれ棹みなれぬもさへ戀しかりけり　讀人不知

一心かへ　我心を人の心にとりかふる也。

古 心かへする物にもかかた戀はくるしき物と人にしらせん　讀人不知

一こひのやつこ　意につかはるゝ心也。

萬十二 ますらおのさとる心も今はなし戀のやつこに我はしぬへし

同十六 家に有し櫃にしやうさし治めてし戀のやつこのつかみかゝりて　穗積親王

堀百 慕來る戀のやつこの旅にてもみのくせなりや夕とゝろきは　俊頼

一櫻かり　櫻を尋る也。紫かり。竹かり。いもかり。皆同也。

櫻かり雨はふりきぬおなしくはぬるゝ共花の陰にかくれん

一おきなさひ　老て猶されすける也。

後 おきなさひ人なとかめそ狩衣けふはかりとそたつも鳴なる　行平

一はたれ　雪といはねとも殘雪の事にきこゆる也。

萬十 篠の葉にはたれ降おほひけなはかも忘れんといへるまして思ほゆ

萬十九 我宿のすもゝの花かさはにちるはたれのいまた殘たるかも

一いのちにむかふ　命とひとしき心也。萬葉にむかふは對字を書り。

萬十二 ます鏡たゝ目に君をみてはこそ命にむかふ我こひやまめ　笠金村

萬八 玉きはる命にむかふ戀よりは君か御舟のかちからにもか

一こまかへり　老て二たひわかくなる事也。萬葉に若反とかけり。

萬十二 露霜のけやすきわかみ老ぬとも又こまかへり君をしまたん

一としのは　年ことの事也。萬葉に每年とかく。

萬十九 年のはにきなく物ゆへ郭公きゝはしのはくあはぬ日の多さ

萬廿 我せこか宿の山吹さきてあらはやます通はむいや年のはに　家持

同六 年のはにかくもみてしか三吉野の淸き川うちの瀧つしら浪

一三重の帶　みのやせて一重の帶を三重になしてむすふこゝろ也。

萬四 一重のみいもか結ひし帶をすら三重にいふへく我身はなりぬ

同十三 二なき戀をしすれは常の帶を三重にゆふへく我身はなりぬ

一木つみ　水によるあくた也。萬葉の廿詞に見えたり。

萬廿 堀江より朝汐みちによる木つみ貝にありせはつとにせましを

一たふさ　手なり。

後 折つれはたふさにけかるたてなから三世の佛に花たてまつる

一とふさたて　とふさは木の末也。木をきりたる跡に。其木の末をたてゝ置事也。

沙彌滿誓

萬十一 とふさたて足柄山にふな木きり木に切かけつあたら船木を

同十七 とふさたて舟木きるといふのとの島山けふみれは木立しけしもいく代神ひそ

一このてかしは　小兒の手ににたるかしはのは也。一說大とちと云草を云。此草は女郎花に似て。花の白くさくといへり。

萬十六 なら山のこのてかしはの二面とにもかくにもねちけ人かも

右歌は佞人をそしる歌也。佞人とは口きゝかましき人を云。然はかしはの葉の風にふかれて。おもてうらのみゆるにたとへたるへし。

一あゆの風　越俗語に東風をあゆの風といへり。

萬十七 あゆの風いたく吹らしなこのあまの釣する小船漕返るみゆ

一八十ともの を　八十は多心也。とものをは伴男也。

萬 そイ めひ川のかはの瀨ことに篝さしやそとものをは鵜川立けり

一とものそめき　そめきは騷の字を萬葉にかけり。さはかしき心也。

萬十一 ますらをは友のそめきになくさむる心もあらん我そ苦しき

一都の手ふり　みやこのふるまひ也。

あまさかるひなに五年すまひして都のてふり忘られにけり

一しゐのこやて　椎の木の小枝也。

萬十四 おそはやも猶こそ待めむかへ尾の椎のこやての あひこたかかし

一袖つく　一は衝也。袖の水につく也。一は續也。袖をかはすこゝろ也。

萬七 ひろ瀨川袖つく斗あさきせや心ふかめて我おもへらむ

同八 織女の袖つくよりの曉は川瀨のたつもなかすともよし

一山櫻戶　櫻の木にてつくりたる戶也。杉の戶松の戶のことし。

足引の山櫻戶をあけおきて我まつ君を誰かとゝむる

名もしるし嶺の嵐も雪とふる山櫻戶の明ほのゝ空

一か事はかり　帶にかことゝ云物あり。鉤の字也。さてかくはつゝくる也。かことは說々あり。一は少事をか事と云也。又かこつ事也。又ちる事也。

古 東路の道のはてなるひたち帶かこと計もあひみてしかな

一ひちかさ雨　俄に雨のふりて笠も取あへぬ程にて。袖をかつくを。ひちかさ雨とは云也。顯昭はひさかたをかきあやまれりといふなり。

神一 いもか門行過かてにひち笠の雨もふらなん雨かくれせん

右催馬樂妹門歌云。いもか門せなか門。行過かれてや。わかゆかは。ひち笠の雨もふらなん。しての田をさ。雨やとりかさやとり。やとりてまからむ。てのたをさ。此歌も萬葉の歌を本體にしてつくれりと見えたり。又源氏物語須

磨卷云。風いたく吹出て空かきくれぬ。御はらへもしはてす立さはきたり。ひち笠雨にかふりて。いとあはたゝしけれは。みなかへり給なむとするに。笠もとりあへす云々。

一夢をかへ　〔同下ト[illegible]〕夢をかへといふ事。夢をはぬる時みるによりて。夢をかへとはいへり。かへもぬるゝ物なるによりてなり。

〔後〕まとろまぬかへにも人をみつる哉まさしから南春のよの夢　　するか

〔後〕れぬ夢に昔のかへをみつる哉うつゝ（よりイ）に物そ悲しかりける　　兼輔

右二首歌後撰集の詞にその心見えたり。

一ぬかつく事　ぬかは額也。禮拜する事也。

〔萬八〕あひ思はぬ人を思ふそ大寺のかきのしりへにぬかつくかと右歌。あひ思はぬ人を思はんは詮なき事也。大寺にて佛にこそぬかをもつくへきに。垣のしりへにぬかつくは詮なきことゝ也。一は餓鬼のしりへ也。寺にはかきてもつくりてもあれは。餓鬼のしりへと云也。

一かほ花　うつくしき花なり。かほ鳥同。

〔萬八〕たかまとの野へのかほ花面影に見えつゝいもか忘かねつも　　家持

一うけらか花　をけらか花也。ひらけぬ物也

あさか瀉鹽干のゆたに思へともうけらか花の色にてめ（いてゆやイ）やも

一みのしろ衣　みのをきるへきかはりにきたる衣をいふなり。又古歌のみのしろ衣は。身の代とも聞侍り。

〔後〕降雪のみのしろ衣うちきつゝ春來にけりとおとろかれぬる　　敏行

山里の草葉の露もしけからんみのしろ衣ぬはすともきよ　　中原宗貞

せなかためみのしろ衣うつ時そ空行かりの音もまかひける　　宗貞

一とよのみそき　大甞會の御禊の事也。

〔拾〕あまたみしとよのみそきの諸人の君しも物をおもはする哉　　寛祐法師

歌林良材集下

第五有由緒歌

一浦島か子の僊事

〔萬葉九長歌〕
春の日の　かすめる時に　住（すみよし或）の江の　岸に出ゐて
つり舟の　とをらふみれは　いにしへの　事そおほゆる
水のえの　浦島の子か　かつをつり　たい釣かねて
七日まて　家にもこすて　海きはを　過て滑ゆくに
わたつみの　神のおとめに　たまさかに　わしらひ（いこきイ）
かたらひの　となりしかは　かきつらね　常世にいたり

わたつみの　神のみやこの　なかのへの　たへなる殿に
たつさはり　ふたり入ゐて　おいもせす　しにもせすして
なかき世に　ありけゐ物を　世中の　しれたる人の
わきもこに　つけてかたらく　しはらくは　家にかへりて
父母に　ことしつけらひ　あすのこと　我はきなんと
いひけれは　いもかいへらく　とこ世へに　又かへりきて
けふのこと　あはんとならは　此はこを　ひらくな夢と
そこらくに　かためし事を　住の江に　かへり來りて
家みれと　家もみかねて　里みれと　里もみかねて
あやしめと　そこに思はく　家いてゝ　三年の程に
垣もなく　家うせめやと　此はこを　開きて見ては
もとのこと　家はあらんと　玉くしけ　すこし開くに
白雲の　箱より出て　とこ世へに　棚ひきぬれは
たちはしり　さけひ袖ふり　ふしまろひ　足すりしつゝ
たちまちに　心きえうせぬ　若かりし　皮もしはみぬ
くろかりし　髪もしらけぬ　ゆなくくは　いきさへ絶て
後つゐに　命しにける　水のえの　浦島の子の
家（いへ所ならん歟）路をみれは　作者不見

返歌　とこよへにすむへき物をつるきたちわか心からおそや此君

右。浦島か子の心には。三とせのあひたとおもひしか。故郷にかへるにいたりて。數百年をへたる事を知さりけり。此玉くしけをあけさらましかは。二たひ仙郷にかへる事もやあらまし。故に開てくやしき事に。後くの歌にも讀るなり。或記に水江浦島子は雄略天皇廿二年に仙郷にいたりて。淳和天皇天長二年に故郷に歸れるよししるせり。天長のころの事ならは。萬葉集の歌にはあるへからす。なをくたつぬへし。

夏の夜はうら島か子の箱なれやはかなく明てくやしかる覽

一松浦佐用嬪巾麾山事

萬九　とをつ人松浦さよ姫つま戀にひれふりしよりおへる山の名　憶良

右。欽明天皇の御時。大伴の佐提比古遣唐使にて。もろこしへ渡りける時。其妾さよ姫なこりをおしみて。松浦山にのほりて。きぬのひれをふり。其舟をまねきしによりて。それより其山をひれふる山とは名付侍り。其事を山のうへの憶良かよめる歌也。後人追和の歌萬葉集にあまたあり。松浦山は肥前の國にあり。

萬九　山の名といひつけ（とかもイ）たるもさよ姫か此山のへにひれをふり劔

同　うな原や沖行船をかへれとかひれふらしけん松浦さよ姫　憶良

同　松浦方さよ姫のこかひれふりし山の名のみや聞つゝおらん

一松浦川釣鮎乙女事

憶良

萬五
あさりする海士の子供と人はいへとみるにしらへぬこま人の子を

海人乙女

同
玉島のこの川上に家はあれと君をやさしみ顯はさすありき

右。憶良か松浦の玉島川にあそふ時。あゆつるあまおとめ子を見るに。花の容ならひなく。柳の眉こひをなす。誰か家の子ともそとゝへと。たしかにいはさりしかは。憶良歌をよみてやりき。すなはちあま乙女の返歌上にいへるかことし。又歌三首よみてつかはしける中に。

憶良

同
松浦川かはの瀬ひかり鮎つるとたゝせる妹かもの裾ぬれぬ

乙女

同返歌三首内
松浦川七瀬の淀によとむとも我はよとます君をし待ん

帥大伴卿

後人追和歌三首之内
まつら河川のせはやみ紅のものすそぬれてあゆかつるらん

吉田道宜

君をまつ松浦の浦のおとめらはとこよの國のあま少女かも

一櫻兒事

壯士

萬
春されはかさしにせむと我おもひし櫻の花は散にけるかも

同

同
いもか名にかけたる櫻花さかは常にや戀んいやとしのはに

右。昔櫻子といふ女あり。二人の壯士に思ひかけられ侍り。此おとこ命を捨てあらそひけれは。女思ひけるは。昔より一女の身として二門にゆく事をきかす。壯士の心もまたやはらきかたし。しかし身をうしなはんにはと思ひて。林の中へ入て。木に頸をかけて。つゐに自害しぬ。二人の男血の泪をなかせともかひなし。よておの〳〵歌をよみて心さしをのへ侍り。上にいへるかことし。

一縵子事

一男

萬十六
耳なしの池し恨めしわきもこかきつゝかくれは水はひな南

二男

同
足引の山かつらこのけふゆくと我につけせは歸りこましを

三男

同
足引の山かつらこのけふのといつれの隈を見つゝきにけん

右。大和國に三人のおのこ有りて一人の女をおもへり。其女の名をかつら子となんいひける。此女おもへらく。一女のみは消やすき事露のことし。三雄の心さしはたひらきかたき事石のことしといひて。つゐに耳なしの池に行て。身をなけてうせぬ。其時三男かなしみにたえすして。おなしくよめる歌。上にいへるかことし。

一菟名負處女の奥槨事（付生田川の水鳥いる事）

田邊福丸

萬 古しへのさゝた男の妻とひしうない乙女のおきつきそこれ

同

萬 芦の屋のうない乙女のおきつきをゆきくにみれはねのみしなかる

同

萬 塚の上の木の枝なひけりきくかことちぬ男にしよるへけらしも

右三首なから長歌の返歌也。心はむかしつの國あしやの里にうなひ乙女といふ女あり。それを二人の壯士いとみあらそひけり。男の名ひとりをはちぬ男といひ。ひとりをはさゝた男といひけり。男の心さしいつれもひとしかりけれは。おんなせんかたなくして。親にいとまをこひて。つゐに自害してうせぬ。其時ふたりの男もおなしく自害しけれは。其所の人是をはふるとて。女のつかをは中につきて。二人の男のつかをも相ならへてつくれるを。うなひおとめのおきつきといへり。おきつきはつかの名也。萬葉に奥槨とかけり。棺槨に入なからうつみけるにや。萬葉十九の巻にも又長歌あり。其歌には。墓の上に黄楊の小くしをさしたれは。生つきて有けるよし見えたり。福麿か歌に。つかの上の木の枝なひけるも。其心をよめるにや。又花山院のつくらせ給へる大和物語にも此事見えたり。其物語にいへる事は。昔つの國にすむ女ありけり。其をよはふ男二人なむありける。ひとりは其國にすむ男。姓はむはらになむ有ける。今獨は和泉の國の人。姓はちぬとなむいひける。かくて其男とも年の齢顔かたちのほとともおなし程になん有ける。こゝろさしのまさらむにこそはあけめとおもふに。心さしのほとも只おなしやう也。暮れはもろともにきあひぬ。物をこすれは。たゝおなし様におこす。何まされりといふへくもあらす。女おもひわづらひぬ。おやありて。かく見くるしく年月をへて。人の歎をいたつらにおふもいとをし。獨にあひなは。今獨かおもひはたゝなんといふに。女心にもさおもふに。人の心さしのおなし様なるになむ思わつらひぬる。去はいかゝはすへきといふに。そのかみ生田川のつらに。女ひらはりをうちてゐけり。かゝりけれは其よはひ人ともをよひにやりて。おやのいふやう。たれも御心さしのおなしやうなれは。此おさなきものなんおもひわつらひて侍る。思ひ給ふやうは。此川にうきて侍る水鳥をい給へ。それを射あてたまへらん人に奉らんといふ時に。いとよき事なりといひてゐる程に。ひとりはかしらのかたを射つ。今ひとりは尾のかたをいつ。いつれといふへくもあらぬに。おもひわつらひて。女。

住侘ぬ我身なけてんつの國の生田の川は名のみ成けりとよみて。此ひらはりは河にのそみてしたりけれは。つふりとおちいりぬ。おやあはてさはく程に。此よはふ男ふたりもやかておなし所におち入ぬ。ひとりは女のあしをとらへ。ひとりは手をとらへてしにけり。おやいみしくなきのゝしりて。取あけてはふゝりす。男とものおやもきゝつたへて來にけり。此女のつかのかたはらに。又つかともつくりてほりうつむ。時に津の國の男のおやのいふ樣。おなし國の男をこそ同所にはせめ。ことの國の人のいかてかこの國の土をはおかすへきといひて。さまたくるとき。いつみのかたのおや。いつみの國の土を舟にてはこひて。こゝにもて來てなむつゐにうつみてける。去は女のはかを中にて。左右になん男のつかともいまにあなる。さてひとりの男のおや。かれかきたりけるかり衣。はかま。えほし。おひ。弓。やなくひ。太刀なとをも入てそうつみける。今ひとりのおやは。おろかにやありけん。さもせすそ有ける。かのつかの名をは乙女つかとそいひける。ある旅人此塚のもとにやとりたりけるに。人のいさかひするおとのしけれは。あやしと思ひてみせけれと。さる事もなしといひけれは。あやしと思ひ／＼ねふりたるに。血にまみれたる男前に來りてひさまつきて。我かたきにせめられてわひしく侍り。御はかししはしかし給はらむ。ねたき物のむくひし侍らんといふに。おそろしと思へとかしてけり。夢にてやあらんと思ひたれと。太刀は誠にとらせてやりてけり。とはかりしてきけは。いみしうさきのことくいさかふ也。しはしありてはしめの男きて。いみしう悦て。御とくに年比ねたき物うちころし侍りぬ。今よりはなかき御まもりと成り侍るへきとて。此事のはしめより語る。いとむくつけしと思へと。めつらしき事なれはとひ聞程に。夜も明にけれは人もなし。朝にみれは。つかのもとに血なとなかれ。太刀にも血つきてなむありけるといひ傳へ侍り。

一ゐての下帶事

俊成

ときかへしゐての下帶行めくり逢瀬うれしき玉川の水

【左四首據刊本補】

山城のゐての下帶引むすひたのみしかひもなき世なりけり

定家

みちのへのゐての下帶引むすひ忘れはつらしはつ草の露

爲家

めくりあはむ末をそたのむ道邊の行別ぬるあたの契は

あたなりや道の芝草かりにたにむすひすてぬる露の契は

右。大和物語に見えたる事也。昔内舍人なりける人。大うちの御てくら使に大和國に下りける。井手といふ渡りに。

きよけなる人の家より。女ともわらはへいてきて。此行人をみる。きたなけなき女。いとおかしけなる子をいたきて門のもとにたてり。此ちこのかほのいとおかしけなりけれは口をとゝめて。此子うちゐてこといひけれは。此女よりきたり。ちかくて見るに。いとおかしけなりけれは。夢〳〵をおとこし給ふな。われにあひたまへ。大きになり給はん程に。まいりこむといひて。是を形見にし給へとて。帶をときてとらせけり。さて此子のしたりける帶をときとりて。もたりける文に引ゆいてもたせていぬ。此子ことし六七はかりにありけり。此男色このみなりける人なれは。いふになん有ける。これを此子はわすれす。おもひもたりけり。男ははやうわすれにけり。かくて七八年ありて。又おなし使にさゝれて。大和へいくとて。ゐてのわたりにやとりてみれは。前に井なんありける。それに水くむ女ともあるかいふやう。〔大和物語諸本かくのことし。これは水くむ女のはしめよりの事をかきつけたるへしイ〕

一くれはとりの事（付あやはとりくれはくれしの事）

諸　實

後　くれはとりあやに戀しく有しかは二村山もこえす成にき

右詞云。くれはとりと云あやを。二村つゝみて遣すとてよめりといへり。是は日本紀に。應神天皇の御時。使を吳國へつかはして。あやなる女をもとめし時。吳王四人のあやおりを渡せり。其中にくれはとり。あやはとりといふ二女あり。しからはあや織の名なるへし。さてくれはとりあやとはつゝけよめり。後撰の詞にくれはとりをあやの名といへるは。あやはくれはとりよりはしまれるによりて。やかてあやの名にも用侍るにや。くれはとりは吳織。あなはとりは穴織とかけり。二むら山は。綾二端といはんため。此山をとり出し侍り。

なとてかくつれなかる覽あなはとりあなあやにくの君か心や

夜をこめて春は來にけり朝日山くれはくれしのしるへなけれは

右。くれはくれしは。日本の使を吳國へつかはすとき。高麗王のかたへ道しるへをこひし時。くれはくれしといふ二人の道ひきをいたして。吳國へ案内せしめし事也。おなしく日本紀應神天皇の紀に見えたるなり。

一葛城王賜橘姓事

聖　武

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜おけましときはの木

右。聖武天皇の御時。井手の左大臣諸兄公いまたかつらきのおほきみと申侍りし時。御前に有ける橘を給りて。則姓にめされけるより。たち花氏ははしまれり。其時の御製萬葉にのせ侍り。

一奥州金花山事

家持

萬十八 すめろきの御代さかへんと東なるみちのく山に金花さく

右。聖武天皇の天平勝寳元年に。みちのくにの小田といふ山にして。はしめて金を堀出し侍りし時。大伴家持長歌をよみて奉りし。其反歌三首の一なり。是によりて年號に勝寳の二字をくわへられ侍り。

一岩代の結松事

有間王子

萬一 岩代のはま松か枝を引むすひまさきくあらは又歸りこむ

右。有間の皇子は孝徳天皇の御子なり。齊明女帝の御時。蘇我赤兄と心をおなしくして。御門をかたふけんとせしか。紀伊國のいはしろといふ所にありて。心さしのとけかたからん事をうれへて。其所にありける松の枝をむすひて手向にして。此歌を讀置て外へいて侍りし。其間に赤兄かしか〳〵のよしを御門へ御申入侍りし。其かへり忠によりて。有間の皇子の謀反の事あらはれて。つゐに藤白坂にしてころされ侍り。後〳〵の人此松の事をよめる歌。同萬葉にのせ侍り。

意吉丸

同 岩代の野中にたてるむすひ松心もとけす昔おもへは

人丸

後みんと君かむすへる岩代の小松かうれを又見けんかも

一三輪のしるしの杉の事

讀人不知

古十八 我庵は三輪の山もと戀しくはとふらひきませ杉たてるかと

右歌。顯昭法師か云。三輪の明神の御歌と申說あれと。たしかに知かたし。たゝ三輪の山のほとりに住ける人のよめるなるへし。此歌を本にて。しるしの杉といふ事は。讀ならはしたるにこそ。拾遺集に住吉の明神の託宣の歌とてのせ侍り。

拾 住吉のきしもせさらん物ゆへにねたくや人に待といはれん

是を三輪の明神の住吉の明神のおほんもとへかよひ給ふ時の歌といへり。

伊勢

古 三輪の山いかに待みむ年ふ共尋る人もあらしと思へは

右。伊勢は杉たてる門の歌を本歌として讀り。是よりして三輪の杉の門には。尋るといふ事を。後〳〵の人はよめる也。

三輪のやましるしのすきはうせす共誰かは人のわれを尋ん

我宿の松はしるしもなかりけり杉むらならは尋きなまし

ふる雪に杉の青葉も埋れてしるしもみえぬ三輪の山本

一葛城久米路の橋事

後 かつらきやくめちに渡す岩橋の中〳〵にてもかへりにし哉

同返哉 中絶てくる人もなき葛城のくめちの橋は今もあやうし（なイ）

拾 葛城や我か屋はくめのはしつくりあけ行程そ物をこそ思へ

同 岩橋の夜るの契も絶ぬへしあくるわひしき（いさイ）葛城の神

葛城や渡すくめちのつき橋の心もしらす今歸りなん

右。くめちの橋の因縁は。文武天皇の御時に。かつらきの役の優婆塞といふ人あり。姓はかも氏。名は小角（をすみ）といへり。大和國葛城の上の郡の人也。卅余年かつらき山の岩やの中にゐて藤の皮をき。松の葉をすきておこなひしかゝ孔雀明王の咒をならひて。あやしき驗をあらはして。雲にのり仙人の城にもかよひ。鬼神をもしたかへて。水をくませ薪をひろはしむ。ある時葛城の嶺より吉野のかねの御たけの間に橋をつくりて。かよふ路とせんとおもひて葛城の明神一言主の神に是をわたせといふ。明神うれへなけゝとのかれんかたなし。わふ〳〵大なる石をはこひて橋をつくる時。ひるはかたちみくるしとて。夜る〳〵わたさんといひけれは。行者いかりをなして。咒をもて神をしはりて。谷の底におきつ。文武天皇の藤原の宮におはしましし時也。葛城の神宮人につきて申さく。役の優婆塞國をかたふけんとす。はやくいましめらるへきよしを奏す。御門おとろきたまひて。使をつかはしてからめしめむとし給ふに。空をとひてからめられす。わつかに母をめしとられしかは。行者母にかはらんとていで來れり。すなはちからめ取て 文武三年つちのとのゐのとし五月に。伊豆の島になかしつかはす。流人になりなから。あるひは海の上をありき。あるひは富士のたけにかよひなとしけるとなん。のちにはもろこしへもわたりけるにや。道昭和尚の勅を請て。法をもとめにもろこしへわたりし時。彼行者にあひたりといへり。一言主の神は行者にしはられて。いまにいまたとけすといへり。一言主のわたしもはてさるによりて。くめちの橋の中たえてなと歌によみ侍り。

一あすはの神に小柴さす事

萬 庭中のあすはの神に小柴さしあれはいはゝん歸りくまてに　若麻續部諸人

右。下總國阿取波宮と申社は。神のちかひにて。小柴をたてゝ祈る事のあるをいふ也。

海雜別歌 今更にいもかへさめやいちしるきあすはの神に小柴さす共　俊頼

一おそのたはれをの事

萬 たはれをと我はきけるを宿かさす我を歸せるおそのたはれを　石川女郎

同返歌
たはれをに我は有けり宿かさす歸せる我そたはれをにはある　田主

右。大伴の田主といふ人美男にてありしを。石川の女郎といふ女。これを思かけて。はかり事に東隣の貧女のまねをして。くらき夜中に火を求めに來る。田主は是とも知すして。火はかりをやりてむなしく歸しければ。あくる朝に女郎此歌を讀てつかはし侍り。田主か返歌もおなしく集にのせ侍り。たはれをは風流士とも遊士とも書り。田主をさしていへり。おそはかはらそといふ獸也。獺の字也。此獸はしめはたはふるゝ樣にて。後にはくひあふ物なれは。それを田主にたとへていへる也。

散木集
世中はおそのたはれのたゆみなくつゝまれてのみ過渡哉　俊頼

一鶯の卯の中の郭公事

萬長歌
鶯の　かひこの中に　郭公　ひとり生れて
さか父に　にてはなかすや　さか母に　にては鳴すや
卯の花の　さける野へより　とひかへり　き鳴とよまし
橘の　花をゐちらし　ひれもすに　なけと聞よし
まひはせん　とをくなゆきそ　我宿の　花橘に
すみわたれとり

右。今の世にもまれ〳〵鶯の巣より郭公のひなを得る事ある物なり。をやににさるによりて。さか父に似す。さか母に似すとはよむなり。

一もすの草くきの車

春されはもすの草茎見えすとも我はみやらん君かあたりを

右。萬葉集春相聞歌也。顯昭云。もすの草くきとは伯勞の草くゝるをいふ也。くゝるをくきとよむ事。萬葉の歌の證類共引のせ侍り。清輔の奧義抄には。もすのゐたる草のくきをいへり。我家は彼草くきのすちにあたりたる里にあるとおしへたる事をのせ侍り。此説によらは。我は見やらん君かあたりをと。戀の歌に萬葉にのせ侍る。其使あるににたり。「八雲の御抄云。是有樣の由いふ人あれ共。所詮もすのある草くきをさしてしるへにいひけるを。後にたつぬるに。そのあともなしといへる心也とのせ侍り。その使あるに似たりイ」俊頼朝臣の　いせより匠作顯季のもとへをくれる歌。

とへかしな玉串の葉にみかくれてもすの草茎めちならす共　俊頼

右。顯昭か云。或説に。木葉しけりて。しるしのくさみえすといふ義あり。俊頼は其心によめるにやといへり。又もすの草くきは。もすはもと時鳥のくつぬいにて有けるか。くつてをとりてかへさゝりしによて。そのかはりにかへ

るやらの物を。草のくきにさしはさめるをいふといへり。これをもすのはやにへともいへり。かくのことくの諸説はたしかなる本說なきにや。信用にたへす。（なしといへとも後人とりもちゐて讀る歌もあるにやイ）

定家

かりにゆふ庵も雪に埋れて尋そわふるもすの草くき

右。萬葉の君かあたりをとよめる歌によりて。戀の心はあるへき也。

一かひやか下になく蛙事（付蚊鹿雨說事）

萬 朝霞みかひやか下になく蛙聲たにきかは我戀めやも

同 朝霞みかひやか下に鳴蛙しのひつゝありとつけんこもかな

足引の山田もる庵におくかひの下こかれつゝわか戀せらく

右。敦隆か類聚古集に。萬葉の朝霞の歌二首。共に夏部蚊火の篇に入侍り。又六百番歌合俊成卿判詞云。山田のいをは。田をまもる人の住屋を離居して。山中に居候間。蛙の聲を聞て。別居のなくさめにせる心。相聞の歌也。又かひやといふは。彼庵の下に火をくゆらかし。煙をおほからしめて。或令拂衆蚊。或令去雄鹿也。然於于蚊鹿者。縱有兩義。至于煙炎者可爲一決。朝霞といへるは。夜煙の凋隙にそひける。朝霞の山腰に廻れるに不異によりて。彼歌に尤相叶者歟。古來風體抄にも此事くはしく侍り。又顯昭法師は蚉をかふやといふ說を申侍り。俊成定家は是を用侍らす。

新勅撰 夜もすからかひやか煙たてそめて朝きりふかし小山田の原

慈鎭

右是も蚊火の心によまれ侍り。

一山鳥の尾の鏡の事

萬十四相聞歌 山鳥のをろのはつをに鏡かけとなふへみ社なによそりけめ

人丸

右山鳥の鏡の事。ふるくより二樣にいへり。一は戀といふ鳥は。鏡におのか影を照してなくといへり。戀はすなはち山鳥なり。一は山鳥はめお一所にはねす。やまの尾をへたてゝぬるか。曉におとりのはつをに。めとりの影のうつる事あるを見てなくを鏡とはいへり。誠の鏡にはあらす。おろは雄也。ろは助詞なり。はつをはなき尾也。おとりのなき尾といふへき也。

六帖歌 ひるはきてよるは別るゝ山鳥の影みる時そねはなかれける

山鳥のはつ尾の鏡影ふれて影をたにみぬ人そ戀しき

俊賴

一鳩ふく秋事

ますらおの鳩ふく秋の音たてゝとまれと人をいはぬ計そ

右。鳩ふく。秋のはしめかり人鳩を取らむとて。手をあはせて。はとのまねをしてふく事をいふ也。又れうしの鹿待

にも。人をとめむとても。又人にことありとしらせんとても。はとふく事をするなり。此歌は其心也。

好　忠

まふしさし鳩吹秋の狩人（山イ）はおのかすみかをしらせやはする

顯　季

堀百
乾またき袂に風の涼しきは鳩ふく秋に成やしぬらん

仲　實

同
まふしさすさつをのみにもたへかねて鳩吹秋の音たてつゝ

一野もりの鏡の事

はし鷹の野もりの鏡えてし哉思ひおもはすよそなからみん

右。昔雄畧天皇と申御門かりをこのみ給けり。野に出て狩し給ひけるに。御鷹そりて見えす。野もりをめして問れけるに。御鷹のあり所を申す。いかにして爰にゐなから。掌をさすかことくに。さたかに申そとゝはせ給ひけれは。此野に侍る水に。鷹の影からつりて侍れは申すよしを奏しけるにより。野にある水をはし鷹の野守の鏡とは申つたへたり。さてよそなから見むとは讀る也。無名抄には天智天皇の御時とかけり。顯昭は雄略天皇と申說につけり。此天皇かりをこのみ給ふ事。國史にみえたれは。其說を用侍るにや。八雲抄云。野にある水也。

一いもりのしるしの事

脫沓のかさなる事の重なれはいもりのしるし今はあらしな

右。いもりは守宮と云虫也。ふるき井なとに。とかけににておなかき虫の手足つきたるをいふ。法花經の嘉祥大師の義疏に見えたり。いもりの血を取て女のひちにぬれは。私の情ある時。洗とも落すといへり。これによりて宮をまもるとはなつけ侍り。宮は女のゐる所なれは。女を守護する心に名付侍り。又張華か博物志といふ書には。いもりに朱をかひて赤くなして。其血を取て女の身にぬれは。一期の間らする事なし。もしわろきふるまひをすれは。消らするよし見えたり。内典外典の說相違ある也。ぬく沓のかさなるといふは。女のみそか事するおりには。はきたる沓のおのつからかさなりてぬきおかるゝといへり。さてかくはよめり。

忘るなよたふさにつけし虫の色のあせなは人にいかゝ答ん

返歌
あせぬとも我ぬりかへん唐土のゐもりもまもる限こそあれ

一錦木事

錦木はちつかに成ぬ今こそは人に知れぬ閨の中道

匡　房

思かねけふたてそむる錦木のちつかにたえて逢よしも哉

永　實

いたつらにちつか朽ぬる錦木を猶こりすまに思ひ立哉

能因

錦木はたてなからこそ朽にけれけふの細布むねあはしとや

右。にしきゝは。一說云。おくのゑひすの男女よはゝんとては。文をやる事はなくて。一尺はかりの木をまたらに色とりて。其女の門にたつれは。あはんと思ふときは。千つかになりてとり入るゝ也。あはしとおもふ人には。とりいれさるによりて。ちつかになりてくつるよし讀るなり。此外灰の木をにしきゝとは云說あり。袖中抄にしるせり。

一けふのほそ布事

道のくのけふの細布ほとせはみむねあひかたき戀もする哉

右。けふの細布は奥州より出たるせは布也。けふは狭の字の聲也。せはしともよむ也。故にこゑと訓とをもて。けふのせは布とはいへり。又ほそ布とも云也。けふは郡の名と云說あり。あやまり也。奥州にけふと云郡はなき故也。むねあひかたきは。はたはりせはき布なる故に。うしろはかりにはきたれ共。まへはたらぬによりて。むねあひかたきとはよめるなり。又無名抄に。けふの細布は道のくに鳥の毛にておれる布也といへり。おほからぬ物にておりたる布なれは。はたはりせはきとはいふと也。

いしふみやけふのせは布(ほそ布イ)はつ〳〵に逢みても猶あかぬ中哉

卯の花のさける垣根は乙女子かたか爲さらすけふの布かも

一ひをりの日事

俊頼

法性寺殿にて
なかきねも花の袂にかほるえけふやまゆみのひをり成らん

右。古今第十一巻詞云。右近のむまはの日おりの日云々。凡左右近の騎射は五月三日は左近の荒手結。四日は右近のあらてつかひ。五日は左近のまてつかひ。六日は右近のまてつかひ也。俊頼の歌は五日のまてつかひをよめり。古今の詞は六日の右近のまてつかひをいへり。ひをりと云は。隨身のかちの尻を引おりてきる故にひおりとはいへり。引をゝ心也。荒手つかひも同しすかたなれと。それはならしなれは。かたの様に引をる也。是によりてまてつかひの日を。むねと日おりの日とは云也。

一反衣見夢事　付袖をかへす事)

古 いとせめて戀しき時はうは玉の夜るの衣を返してそぬる

万 わきも子に戀てすへなみ白妙の袖返しゝは夢に見えきや

同 我せこか袖返す夜の夢ならし誠に君にあへりしかこと

同 白妙の袖おりかへしこふれはかいもか姿の夢にしみゆる

右。衣を返してぬれは。戀しくおもふ人の夢にみゆると云事。昔より云傳へたる事也。袖かへすといふもおなし事也。

一河やしろ事

神のときこゆる瀧のしらなみのおりしも君か見えぬ此ころ
古來に云。瀧をはかく神のことなとも讀事にて。川社も瀧ある川上にてするなるへし。貫之集。朱雀院の御時。〃親王御屏風の歌に。夏の神樂といふ事をよめる歌二首侍り。

（貫之集）河社しのにおりはへほす衣いかにほせはか七日ひさらん

右。河やしろといふは。俊成卿說に。かはの岩瀨に落瀧つおと高く白波みなきりて。大鼓なとの樣にきこゆる所を云也。さて衣ほすと云は。誠の衣にはあらす。きぬをほしたるに似たる事をいふ。龍門の瀧を伊勢かなに山ひめの布さらすらんといひ。布引の瀧なとをいふ樣なる事也。七日とも八日共いふは久しき事を云也。萬葉十卷。秋のほをしのにをしなみをく露のけふもしなまし戀つゝあらすと讀るは。しのはこと葉也。それを川やしろにしの折かけて夏神樂するといひ侍り。

（同天曆御時御屏風歌）行水の上にいはへる川社川波たかくあそふなる哉

右。川社と云につきて。うへにいはへるとは讀るなるへし。俊頼朝臣の歌の口傳。顯昭法師等か說に。水のうへに社をいはひて。夏神樂をするを川社といへるは。貫之か彼歌よりいへる事也。

匡房

川社秋をあすそと思へはや浪のしめゆふ風の涼しさ

（諸社百首）五月雨は岩波さそふきふね川河社とは是にそ有ける　俊成

五月雨は雲間もなきを川社いかに衣をしのにほすらん　同

一あまのまてかた事

（後）伊勢の海の蜑のまてかた暇なみ存命へにける身をそ恨むる

右。海邊に蟶（マテ）と云物砂の中にありて。しるをはきいたせは。其かたをみて。あま共のまてかりと云。かねのさきのほそきを二またにしたるにて。是をさしとり〳〵するを。いとまなしとはいへる也。又一說顯昭か袖中抄にのせたり。信用にたらさる事也。

一さくさめのとしの事

（後）今こむと云し計を命にて待にけぬへしさくさめのとし

右。此歌は人のむこの今こむとて待にけるか。文かよはす所のあなりときゝて。久敷まちこさりけれは。あとうかたりの心をとりて。かくなん云つかはしける。女の母の歌也。かるかゆへにさくさめのとしはしうとめの名のよし。なへての說にいへり。刀目は老女を云也。たゝし定家卿僻案抄に。讃岐入道顯綱朝臣か說とてしるされたるは。さくさめのとしと云は。早苗の早字。若草。初草。乙女。たをやめ。はつせめ。河内女のめもし也。故にさくさめのとしと

は。若草めのとしにて侍と聞えぬへし。しうとめの平懐の事ならは。詞にあとうかたりの心をとりてとはかくへしともおほえす。すこしつねになき事なれはにや。あとうかたりとはいへる。あとうかたりとはなそ〱かたりと云事歟。拾遺にはなそ〱かたりとかきたり。

一猿澤の池に身なけたる采女事

拾　わきもこかねくたれ髪を猿澤の池の玉もとみるそかなしき　人丸

右。大和物語に云。昔ならの御門につかうまつる采女ありけり。かたちいみしうきよらかにて。人々よはひけれ共あはさりけり。其あはぬ心は。御門を限なくめてたき物になんおもひ奉りける。御門めして。さて後又もめさりけれは。かきりなく心うしと思ひけり。夜るひる心にかゝりて覺えけれと。御門はさしもおほしめさす。さすかにつねには見たてまつれる。猶世になからふへき心ちもなかりけれは。みそかに出て猿澤の池に身をなけてけり。御門はかくともしろしめさゝりけるを。事のつゐてに人の奏しけれは聞し召て。いといたうあはれかり給ひて。池のほとりにおほん御ゆきし給ひて。人々に歌よませ給ひける時。人丸讀る歌上にいふかことし。御門もおなしくよませ給へる歌。

猿澤の池もつらしなわきも子か玉もかつかは水そひなまし

と讀給ひけり。さて池のほとりにはかつくらせ給けるとなん。

一笠鷺の行あひのま事（一説かたそきの行あひの間）

夜やさむき衣やうすき笠鷺（かたそぎ）の行あひのまより霜やおくらん

右。歌論義といふ書にはかたそきとあり。奥義抄にはかささきとあり。かたそきと云は。神のほくらのつまに刀のやうにてたてる木也。または千木ともいふ也。此歌は住吉の社の年月おほく積りて。あれたる所おほくありけれは。そのゆへをおほやけにしらせ奉らんとて。御門の御夢に見えたる歌といへり。かさゝきといふ說は。天川に鵲と云鳥の羽をならへて橋となして。織女を渡すと云事也。其笠さきの行あひの間をあやまりて。かたそきともかけりといへり。但七月七日こそ七夕のわたらんために渡すへきに。冬なんと霜の歌によまん事はいかゝときこゆれと。歌はさのみある事也。たゝ空より霜のふるといはんとて。笠さきの行あひの間とはよめる也。笠鷺の橋に霜をむすひて讀る歌ともあまたあり。

笠鷺の渡せる橋の霜の上を夜半にふみ分殊更にこそ　忠岑

錞圓

六帖
鵲の千世ふる橋のまとをにて隔る中に霜やおくらん
鵲ハたすゝいつこ夕霜、雲井に日を寒ノかけは、家隆イ
笠鷺の羽に霜ふりさむき夜を獨わかねん君待かねて

一しきのはねかきの事（付しちのはしかき）

古
曉のしきの羽かき百はかき君かこぬ夜は我そ數かく　讀人不知

右。昔あたなる男を頼む女有けり。こぬ夜の數はおほく。くる夜の數はすくなかりけれは。かのこぬ夜の數をかく事なん。曉の鴫の羽かくよりもおほかるにいふなるへし。

曉のしちのはしかき百夜かき君かこぬ夜は我そかすかく

右。是は榻と云物あり。車の具にて。是を用てをりのほりをする物なり。昔男のよはひける女の有けるか。百夜かのしちの上にふしたらは。あふへきと契たる故に。夜毎にきて。しちの上にまろねをして。九十九夜迄は數を取りて。しちのはしにかきたる事を云也。鴫の羽かきは古今集に入たれは正説成へし。但しちのはしかきも。ふるくよりいひ來れる事なれは。すてかたきによりて。いつれにてもよりきたれるにしたかひて。共に用侍る者也。

思きやしちのはしかきかきつめて百夜も同まろねせんとは　俊成

一八橋の蜘手事

後
打わたしなかき心は八橋のくも手におもふ事はたえせし
戀せしとなれる三河の八橋のくもてに物をおもふころかな

右。三河國に八橋と云所あり。橋の八あるなり。くもてとは。橋の柱につよからしめむために。すちかへてうちわたしたる木をくもてとは云也。又蛛と云虫の手は八あれは。八橋と云によそへて。蛛手に物をおもふとよめるにや。伊勢物語には。水のくもてにて橋を八渡せりといへり。是はくもてに水のなかれたるをいふにや。いさゝか其心かはれり。くもてといふ事は八橋ならても讀る也。

俊頼

堀百
波たてる松のしつ枝をくもてにて霞渡れる天のはしたて

一紫のねすりの衣事（付寢すりの衣）

古
戀しくはしたにをおもへ紫のねすりの衣色にいつな夢　讀人不知

右。紫の根にてすれる衣を云也。然るを奥義抄に。ねすりの衣は。紫の衣をきて人とねたりけれは。あせに色のかへりて。きぬにうつりたりけるか。摺きぬに似たりけれは。人にあふ事を紫のねすりの衣といへり。此説をは定家卿の寄勘に。寢摺の衣不甘心のよしかゝれ侍り。

後撰
人しれてねたさもねたし紫のね摺の衣うはきにはせん　堀川右府

和泉式部

返歌　ぬれ衣と人にはいはん紫のね摺の衣うはきなりとも
右。是は小式部の内侍和泉式部か一子にて。かたち姿世に過れて。又いく野の道と讀みけん時のおほえさこそ侍りけめ。上東門院の御腹の君達御心を盡し給けるに。堀川の右府幽玄好色過れたる人にて。忍ひてこそ心かよはされけめ。女もあなかちに世をつゝみて。見つともいふな。あひきともとこそ契りけめ。大二條の關白同事と聞えながら。今一しほのおほえことにて。おしたちあらはれ給けるに。彼下にを思へ色にいつなと云し衣を。今はねたしうへにきんとの給へるを。和泉式部たゝぬれきぬとこそはいはめ。うへにき給共といへるは。名取川の心をはえあらかはて。たゝ事はりなきぬれ衣といひなさんとよめるにこそ。定家卿新勅撰にのせられ侍り。

一室八島事

詞花　いかてかは思ひありともしらすへき室の八島の煙ならては　實方

返歌　下つけや室の八島にたつ煙思ひありとも今こそはしれ　女

右。下野國の野中に島あり。俗に室の八島と云。其野中に清水あるより出るけのたつか。煙に似たるを云也。　攝津

法性寺内大臣歌合　絶すたく室の八島の煙にも猶たてまさる戀もする哉

判者基俊はたえすたくの五文字を難し侍り。誠のけふりにあらさるゆへにや。

一末の松山の事(付末松事)

古　君をゝきてあたし心を我もたは末の松山なみもこえなん　藤原興風

同　浦ちかくふりくる雪は白波の末の松山こすかとそ見る

右。昔男女のありけるか。末の松山をさして。かの山に波のこえむ時そ忘るへきと契りけるか。程なくこと心つきてけるより。人の心の替るをは波こすと云也。彼山に誠に波のこゆるにはあらす。あなたの海のはるかにのきたるに。立浪の彼松やまの上よりこゆるやうにみゆるを。有へくもなき事なれは。誠にあの波のこえむ時は。こと心はあろへしと契れる也。能因か歌枕には。本の松。中の松。末の松とて。三重にありといへり。去はにや山といはて。只末の松とよめる事も侍り。

後拾　契りきな形見に袖をしほりつゝ末の松山浪こさしとは　元輔

いかにせん末の松山波こさは嶺の白雪消もこそすれ　匡房

一しのふもちすりの事

古　　河原左大臣
道のくの忍ふもちすり誰故に亂れむとおもふ我ならなくに

右。陸奥國の信夫の郡に。もちすりとて。髪をみたしたるやうに摺たる物を。忍ふもち摺といふなり。

伊勢　　業平
春日の丶若紫のすり衣忍ふのみたれ限り知られす

右。武藏野の若紫とこそいひならはしたれと。是は春日の里にてよめる歌なれは。春日野の若紫とはつゝけ侍り。武藏野はけふはなやきその歌をも。古今には春日野とかきかへたり。思所あるへし。

千　　頼政
思へともいはて忍ふのすり衣心のうちにみたれぬる哉

詞　　寂然
道のくの忍ふもちすり忍ひつゝ色には出しみたれもそする

清輔
昨日みし忍ふのみたれ誰ならん心の程そかきりしられぬ

右。此歌は宇治の左大臣の末の子に中納言大將兼長。冬の春日祭の使に立給ひし供の人々。色々の花を折てきらめきける中に。前右馬助範綱か子清綱か忍ふすりのかり衣をきたりけるか。心ありて見えけれは。前左京大夫次の日範綱かもとへいひやりける歌也。末の世にもおかしき事は出きにけりとなん。

一宇治橋姫事（一宇治玉姫）

古　　讀人不知
さ莚に衣かたしき今宵も我を待らん宇治のはし姫　又ハ玉姫

右。宇治のはし姫とは。姫大明神とて。宇治のはしの下におはする神也。其御もとへ宇治橋の北におはする。離宮と申神の夜毎に通ひ給ふとて。曉毎におびたゝしく浪の立おとのするとなん。彼邊の土民は申ならはせり。此歌は離宮の御歌と申。又隆源阿闍梨と申者は。住吉の大明神のうちの橋もりの神に通給ふと申故に。此歌は住吉の明神の御歌といへり。

古　　讀人不知
千はや振宇治の橋守なれをしそ哀とはおもふ年のへぬれは

右。此歌を古今集の一本に。宇治の橋姫とかける事あり。又橋姫の物語といふ物あり。それに此二首の歌をかけり。たゝし定家卿は彼物語不可用之よししるされ侍り。

六帖　　家持
むは玉のよへはかへるに今夜さへ我をかへすな宇治の玉姫

一武隈松事

我のみやこもたるといへは武隈のはなはにたてる松もこもたり

右。奥州たけくまといふ所に二木の松あり。是によりて子

もたるとはよめり。はなはとは山のさし出たる所のあるをいふ也。

後拾
武隈の松は二木を都人いかゝととはゝ見きとこたへん　　橘季通

右詞云。則光朝臣のともにみちのくにゝ下て。たけくまの松をよみ侍りけると也。

後拾
武隈の松は二木をみきといはゝよくよめるにはあらぬ成へし　　僧正深覺

右詞云。季通か歌をつてにきゝてよみ侍るとなん。

同
武隈の松は此たひ跡もなし千年をへてやわれはきつらん　　能因

右詞云。みちのくにゝ二たひくたりて。後のたひ武隈の松も侍らさりけれは。よみ侍りけるとなん。

一柿本人丸渡唐事

拾
あまとふや鴈の使にいつしかもならの都にとつてやせん　　人丸

右詞云。柿本人丸もろこしにてよめる歌。

同
夕されは衣手寒しわきも子かときあらひきぬ行てはやきん　　人丸

右詞云。もろこしへつかはしける時よめる。

一三角柏事

中納言俊忠家五十首歌還題
神風やみつの柏木事問てたつをま袖につゝみてそくる　　俊頼

右三角かしはとは三葉かしはを云也。伊勢太神宮にて三つの柏をとりてうらなふ事あり。是をなくるにたつはかなふ。たゝぬは叶はぬ也。さてたつをとりて。袖につゝみてよろこふなり。又日本紀には御綱葉とかけり。延喜式には三綱柏とかく。國史には三角柏とかけり。又みつゝかしはともよめり。又水の柏共讀り。

わきも子かみもすそ川の岸に生る人をみつゝの柏とをしれ　　輔親

新古今
思侘みつの柏にとふことのしつむにうくは泪なりけり　　小侍従

右歌はみつのかしはゝ。水にうかむかしはによめるにや。しつむは思ふ事かなはぬ心にいへり。

一志賀山越事

古
梓弓はるの山邊を越くれは道もさりあへす花そちりける　　貫之

右詞云。志賀の山越に女おほくあへりけるに。よみてつかはしける。

同
山川に風のかけたるしからみは流れもあへぬ紅葉なりけり　　春道列樹

右詞云。志賀の山越にてよめる。志賀の山越は北白川の瀧のかたはらよりのほりて。如意の峯越に志賀へ出る道也。志賀の山越は春にかきらすいつもする事也。たゝし堀川の次郎百首には。春の題に志賀の山を出す。是によりて六百番の歌合にも春の題にとれり。堀川百首を例にせるなるへし。

順

拾 名をきけは昔なからの山なれとしくるゝ秋は色まさりけり

右詞云。西宮左大臣家の屏風に。しかの山こえにつほしやうそくしたる女ともみちなとある所。

一夢をかへといふ事

するか

後 まとろまぬかへにも人をみつる哉まさしから南春の夜の夢

兼輔

同 ねぬ夢に昔のかへを見つるよりうつゝに物そ悲しかりける

右。夢をはぬる時見るによりて。夢をかへとはいへり。其うへかへによせて。此二首の歌をはよめり。後撰集の詞に見えたり。

一ぬれきぬの事

讀人不知

古 かきくらしことはふらなん春雨に濡衣きせて君をとゝめん

右。古今集離別歌也。ぬれきぬとはなき名を云といへと。其來歷たしかならす。春雨にぬれきぬきせての歌は。一説に云。人のたひに出んと云しか。雨ゆへにとまりたらは出んと云し事か。そら事に成へき也。さてかきくらしことはふらなむとよめる也。

貫之

後 春くれは咲てふことをぬれきぬにきする計の花にそ有ける

右。花はさくといひたれと。程もなくちれは。さきたりといふか名はかりなりと云心也。

和泉式部

後拾 ぬれ衣と人にはいはむ紫のねすりの衣うはき成とも

右歌はたしかになき名をよめるときこゆ。

一野中の清水事

讀人不知

古 いにしへの野中のし水ぬるけれともとの心をしる人そくむ

右野中の清水は播磨國いなみ野にあり。昔はめてたき湯にて有けるか。末の世にぬるく成ぬれと。むかしをきゝつたへたるものは。これを尋てのみける心也。能因歌枕には野中の清水は本の妻を云といへり。奥義集に同樣にいへり。

讀人しらす

後 我ためはいとゝあさくや成ぬらん野中の清水深さまされる せイ

右歌。おとこのもとの女にかへりすむときゝて。女のよめる也。

同 いにしへの野中の清水見るからにさしくむ物は泪なりけり

一四の船事

萬 賜入唐大使藤原清河返歌　聖武天皇

四の船はや歸りことしらかつきわかもの裾にしてゝまた南

右遣唐使には大使副使判官主典の四人の使あるによて。四綱船をそなへらるゝ事也。同時の長歌にも四の船といふ詞あり。

一篠田杜の千枝事

和泉なる篠田の杜の楠の木の千枝にわかれて物をこそ思へ

右。篠田の森には楠木の一本かはひひろこりて。千枝に別れたるといへり。是によりてしの田の森には千枝といふ事をよめる也。

一小花かもとの思草事

萬 道の邊の小花かもとの思草今さらになそ物はおもはん　讀人不知

右。思草は草の名にはあらす。只草を云なるへし。

古 秋の野の小花に交りさく花の色にやこひんあふよしをなみ

右。この小花にましりさく花は。定家卿は龍膽の花の霜かれに殘れるをいふといへり。

霜むすふ小花かもとの思草消なん後や色にいつへき　定家

一濱松か枝の手向草事

萬 白波のはま松か枝の手向草いく代までとか年のへぬらん　川島皇子

右。手向草はたゝたむけといはんと也。松をもむすひ。又時にしたかひて。花紅葉をも折て手向くるを云となり。

萬 八千草の花はうつろふときはなる松のさ枝をわれは結はむ　家持

一余五（ヨコ）海織女の水あめる事

よこの海にきつゝ馴けん乙女子か天のは衣ほしつらんやそ　曾禰好忠

右曾丹三百六十首の中七月上旬の歌也。よこの海に織女のくたりて水あめるとて。衣を松にかけし事のあるをいふ也。

一蟻通明神事

七わたに曲れる玉をつらぬきて蟻とをしとは我はしらすや をイ

右。清少納言か枕草子にあり。何の世にてか有けむ。もろこしよりこの國をうちとらんとしてまつ心みける時也。七曲にまかりたる玉の中はとをりて。左右にあなあきた

るかちいさきを奉りて。是を綱とをして給らんと申たるに。そこらの人さらに思よらさるに。中將なりける人蟻をとらへて。二はかり腰にほそき糸をつけて。あなたの穴に蜜をぬりて蟻を入たるに。蜜のかをかきて。糸よくはひて。あなたの口に出にけり。さて其糸のつらぬかれたるをつかはしたれは。日の本の國はかしこかりけりとて。かたふけん事をおもひとまりけり。其中將はかんたちめ大臣になされ給ひて。後には神になりけるにや有けむ。其明神の御もとにまふてたりける人によりあらはれて。の給へる歌上にいふかことし。又貫之集云。紀伊國にまかりくたりて。歸上に。馬の煩ひてしぬへきあつかひをするを。道行人とまりて見ていふやう。例のこゝにいまする神のし給ふとて。かく社もなくしるしも見えねと。こゝろいとうたてくおはする神なり。さき〳〵もきせい申てなむやむといふに。みてくらもなけれは。いかなる態をすへきにもあらす。いかゝはせむとて。手はかりあらひひさまつひて。さても何の神と申さんするそといへは。ありとをしの明神となん申といへは。かくよみてたてまつる。

かき曇りあやめも知ぬ大空にありとほしをは思ふへしやは

右。ありとをしの明神の事は。貫之和泉國をまかりのほる時と。大鏡并古事談といふ抄物にしるせれと。彼家集に過へからす。

〔以下據圖書寮本及刊本補之〕

一姨弃山事

右 我心なくさめかねつさらしなやおはすて山にすむ月をみて

右。大和物語云。しなのゝ國にさらしなと云所に男住けり。わかき時に親はしにゝけれは。おはなん親のことくに。わかくよりあひそひて有に。此めの心いとうき事おほくて。このしうとめのおひかゝまりてゐたるを常ににくみつゝ。男にも此おはの御心のさかなくあしきをたはいひきかせけれは。むかしのことくにもあらす。おろかなる事おほく。此おはのためになり行けり。此おはいといたう老て。ふたへになりてゐたり。これを猶このよめところをかりて。いまゝてしなぬ事に思て。よからぬことをいひつゝ。もていましめて。ふかき山に捨たまひてよとのみせめけれは。せめられ侘て。さしてんと思ひなりぬ。月のいとあかき夜。をんなともいさ給へ。寺にたうときわさすなる。みせたてまつらんといひけれは。限なくよろこひておはれにけり。たかき山のふもとに住けれは。その山にはる〳〵と入て。たかき山の嶺のおるゝへくもあらぬにをきて。にけてきぬ。やゝといへは。いらへもせてにけて。家に來て思ひけるに。いひはらたてゝけるおりは腹立てかく

しつれと。年比おやのことやしなひつゝあひそひければ。いとかなしく覺えけり。此山のかみより。月もいとかきりなくあかく出たるをなかめて。夜一夜ゐもねられす。かなしくおほえければ。歌よみたりけり。(上にしるせり。)と讀てなん。又いきてむかへもて來にけり。それより彼山をなんおは捨山と云ける。なくさめかたしとは。これかよしになん有ける。

顯注密勘には。或書を引て。此歌はめいにおはか捨られて讀るといへり。されと大和物語を本とすへし。又をひかおはを捨ても。又めいかすてゝも。總て姨弃山とよまん事も。和漢の流例なきにあらす。難たるへからす。摩開山の事なとを引て。定家卿はなため用られたり。

一常陸帶事

あつま路の道の終なるひたち帶かこと計もあはんとそ思ふ

右。俊頼抄云。ひたちの國にかしまの明神と申神の祭の日。女のけさう人のあまたあるときに。其名を布の帶にかきあつめて。神の御前にをく也。おほかる中にすへき男の名かきたる帶はをのつからかへる也。其を取て禰宜か得させたるを女みて。さもと思ふ男の名ある帶なれは。やかて御前にてそれを聞て。男からちかゝりてしたしく成ぬ。たとへは占なとの様なる事也。

一三重帶事

萬十三　二つなき戀をしすれは常の帶を三重にゆふへく我身は成ぬ

これは戀をしてやせたるによりて。たゝの帶を三かへりなとにする也。

一とふさたつ事

萬　とふさたつ足柄山に舟木きり木にきりかけつあたら舟木を

右。とふさ。鳥跡とかけり。又萬葉十七。とふさたてふなききると云のとのしま山と讀り。登夫佐多烈とかけり。是萬葉のならひ也。いつれも木の梢也。山にいりて木をきりては。必木の梢をきりて。きりたる木のあとに立也。たとへはかはり也。仍木にきりかけつと讀り。ふなきは舟にする木也。此歌は滿誓か筑紫觀音寺造おりの歌也。

一玉はゝきの事

初春のはつねの今日の玉はゝき手に取からにゆらく玉のお

此歌萬葉にいれる本も有。又なき本もありと申。右歌は天〔[illegible]〕賓寳字二年正月三日侍從等をめして。内裏のあつまやに侍らしめて。すなはち玉箒を給て。とよのあかりし給ふ時。内侍鎌子勅を奉て。王卿等に歌を詠し詩を賦せしむる時。右中弁大伴宿禰家持か讀る歌也。此玉はゝき說々あり。俊頼口傳には。はゝ木と申木に子日の松を引具して。はゝきにつくりて。む月の初子の日。こかふ屋をはくとい

へり。又たゝ物をほむる故に。玉はゝきとはゝきをいふといへり。又松を玉はゝきと云といへり。いつれもたしかなる說なし。又能因法師の大納言經信卿とかたりける說云。京極の御やす所をしかてらの老法師戀たてまつりてけさん申ける。御息所の御手を給て。此歌を詠し侍といへり。ふるき歌をひしりの詠せん事。さもありぬへし。大方は萬葉の歌なれは。事の外の空事なるへし。

一おにのしこ草の事

萬四 忘草我下ひもにつけたれはおにのしこ草ことにし有けり

右。是は家持か坂上家大娘にをくる歌也。離絕數年。後會相聞往事歌と云へり。たとへはたえてひさしき女にあへる歌也。歌は忘んとすれともえ忘すと云心也。鬼のしこ草は紫苑の名也。物忘せぬ草也。顯はなけく事あらん人はうへてみるへからさる草といへり。

一むや〳〵の關の事

古歌 武士のいつさ入さに技折するとや〳〵とりのむや〳〵の關

右。八雲抄云。陸奧と出羽の中に行かふ山有。木しけくて行きたやすからす。仍しほりうちしてたより行。されはとや〳〵とをりと云也。むや〳〵はかの山口に有關の名也。在出羽方。

一ぬかつく事

あひ思はぬ人を思ふは大寺のかきのしりへにぬかつくかと

右。是はあひ思はぬ人を思はんはせんなき事也。大寺にこそぬかをもつくへきに。かきのしりへにぬかつくは無詮事。これは垣のしりへ也。されと餓鬼をも寺にはかきてもあれは。かはしてかける也。

萬十六 寺々のめかき申さくおほうはのをかきたはりて其こはらまん

佛造るあかにたらすは水とゝめ池田のあそか鼻の上をほれ

一かほ花（うつくしき花也。かほとり同。）

十八 たかまとの野へのかほ花面影にみえつゝいもか忘かねつも　家持

一つくまのなへの事

一やまと琴夢化娘子事

萬五 いかにあらん日の時にかも聲しらん人の膝のへわか枕せん　娘子

同 ととはぬ木には有ともうるはしき君か手馴のとにし有へし　大伴卿

右。對馬國の結石山のきりのまこ枝にてつくれるやまとことあり。このこと夢におとめに化して。その志をのへ。かつは又歌を讀り。上にいふかことし。ときに則返答も。大宰帥大伴卿返歌。又上にいふかことし。其時このおとめよろこふと見て夢覺たり。中衛大將藤原卿にありし時の

事也。このやまとことをは天平元年十月七日使をもて奉ると見えたり。

一かたまけぬ　　片設とかけり。ものゝありまうけたる心也。又かた〳〵まけたるこゝろにもいへり。

萬十三 鶯の木つたふ梅のうつろへは櫻の花のときかたまけぬ

此歌は梅花の咲たる程に。櫻の花はかたまけたりといへる也。又櫻花さきまうけたる心にも叶へる也。

一うけらか花（をけらか花也。ひらけぬ花也。）

あさかかた鹽干のゆうに思へ共うけらか花の色に出めやも

右。ゆうはゆたか也。うけらか花はひらけぬ花なれは。出ぬといへり。

一そか菊の事

拾遺十七 かのみゆる岸へにたてるそか菊（或本そか菊）の茂みさ枝の色のてこらさ

右。そかは。むかひのきしにそかひにみゆるとよめるにや。承和の帝の黄なる色をこのみ給ける。黄菊をそわ菊と申事は。いつよりいふ事か。おほつかなく侍るよし。俊成卿も古來風體抄にしるされ侍り。

筑波ねの背向にみゆる足ほ山（本ノマヽ）あしかるか共さねみえなくに

右そかひとはをひすかないふへうにみゆる也。

古來風躰云。さて此萬葉集は。後拾遺序に申たるは。この集のこゝろはやすき事をかくし。かたきことをあらはせり。よりてまとへる者おほしとそ書たるを。今さはあらぬにやと覺侍るなり。この集の比までは。歌のとはに人の常によみける事ともを。とき世うつりかはる齢に。よますなりけることはともあまたあるへし。もろこしにも文體三たひあらたまるなとゝ申たる樣に。此歌のすかたことはゝ。とき世のへたゝるにしたかひてかはりまかる也。むかしの人のかたき事をあらはし。やすきことをかたくなして。人をまとはさむと思ふにはあらさるへし。たゝしかき樣のもしつかひにとりてそ。うちまかせてその事につかふもしをもかゝす。とかくかきなしたる事そおほかるへき。たとへは春の花秋の月ともいへる歌を。やすくさはかゝて。眞名かなとひともしつゝかきて。波流の波奈。阿俊の都伎なと樣にかき。又おなし一字にかくにとりても。こゝかしこに文字をかへつゝかき。また三十一字のものを十餘文字にも二十餘字なとにもかきなしたるところ〳〵の侍り。誠すこしはまとはさんとする事にやとも申つへかめれと。それもことはをかよはして。かくもいふそなとみせんとなるへし。されと今來も左樣のもしつかひにはかられて。まとふ物ともあるへし。

以御正本寫之。

此篇（皆イ）上下者故禪閤令述作給。和歌之奥儀也。勝説也。殊本

末流布世間。傳寫之潰希有之歟。新三位忠顯卿以彼御自筆
本新寫焉。余披見。設(誤歟)字等改正之。深秘函底。敢莫他見。
永正五年仲秋上旬　　　　後鈴華寺殿 従一位判

〔右歌林良材集以圖書寮本及刊本校合〕

續群書類從卷第四百七十

和歌部百五

和歌現在書目錄序

卅一字之詠風者吾八嶋之習俗也。起自稻田姫之奮室。至于葛城王之旅館。皆各依此仕（住歟）爲莫不述其舊懷。然者緇素男女之交。哀樂憂喜之時。先動天性之感。必爲露膽之媒。然而言葉出辰月。忽焉不癘紙。詞華染耳。飄榭空委塵。於是平城帝詔群臣。以撰萬葉。憶良臣傳舊聞。以集歌林。自厥以來。延喜天曆之聖主。花山白河之法皇。各率遺範。遞有勅撰。其外前後新撰共入幽玄之境。古今髓腦併爲指南之玩。九品十體遍分。先賢之心雖測（日歟）。十五卅六相對。後生之眼易迷者乎。或稱樹下山伏之集。或日發心悦目之抄。皆是奇才博覽之所撰。隱士處女之私集歟。又光仁天皇下勅。始定歌標。寘撰法師奏宣。即注作式。加之人々意巧。家々口傳。縱雖有緘石之謬。豈又無擲金之聲哉。歌合者田村二宮洞院百番艷流之濫觴也。家集者人丸猿丸黑主庵主歌林之權輿歟。百首歌者帶刀長獻褰懷於春宮之闕。乙侍從致丹祈於東國之杜。是其始也。如斯等累代遺文。諸家秘思。不載目錄。爭知部數。一切經見在書各有目錄。和歌通我國詩。何無目錄。是以隨見隨聞粗記。聊分八家。略收諸部。名曰和歌現在書目錄。抑邊鄙頑愚之輩。管見狂簡之集•ゝ必記載。難取準的之故也。若猶有遺漏之要書。重又得新作之秘文者。隨注年紀。追入此錄。于時仁安之年夷則之月。記大概貽小說耳。

卅一字の歌はやしまの國のとわざなれは。稻田姫の宮居の所よりおこりて。葛城王のまうけのむしろにも。これをいひてそ心をとり。それよりして男をんなのなかにも。たのしみかなしみのうちにも。まついてくろなかたちと成にけり。しかはあれといにしへは折にのそみて心さしうちにうこき。興にのりてことはほかにあらはるゝはかりにて。とわたる舟のかちかき

つくる事もなく。はやしに落ろこの葉のとくにちりうせにけらし。奈良の御門萬葉をえらひ。憶良臣歌林をあつめしよりは。はまちとりあとあるとゝなりて。醍醐村上のひしりのみよにもおこしたまひ。花山白河のかしこき君もわすれたまはすなりにける。わたくしにはこのもとの集。やまふしかしわさといひ。色々なるとの葉多かり。又光仁天皇はみとのりをくたして歌標をたて。喜撰法師は勅をうけたまはりて髄腦をつくれり。これのみにあらす。南をさすにたへたるふみ。なかころもまゝいてきにけり。歌合は田村の二宮洞院の百番よりはしまりて。いまもたえかたくなむありける。家の集は赤人々丸をさきとして。黒主庵主までにとゝめ置り。もゝちのうたは帶刀長春の宮にとはの花をつくし。乙侍從はこれの山に身のうれへをひらきてよりいてきたりて。いまに跡となれり。このほか花のかけ紅葉のもと。月のまへ雪のうちのことは。さま〳〵のとわさいくそはくそ。たとへは塵のつもりて山となり。露のしたゝりて波をたゝふるかことし。ちかころこのみちみさかりなるをや。鳥しぬる時は聲うるはしく。ともし火きえむとて光をます。かなしきかなや。歌のめのまへにうせなんとするなり。今の世の人はこのむとすれと。たゝ案のほとりをのみゝて。はこのうちをはしらされは。これらのたくひ。谷のむもれ木やうやく朽うせて。みねのかすみあとなく成なむことの思出。をのつからすたれたるをおこし。たえたるをつく世もあらは。これをしるしの杉にて。みわの山のおくまてもたつねわたる。みるめをもとめんものは。ちひろの海のそこまてもかつけとて。花すゝきほの〳〵みたる物を。もしほ草かきあつめて。かすの家をたて。あまたの事をこめて。和歌現在書目録となつく。たゝししつのおのいやしく。あつまめのかたくなにて。人しられぬたくひをは。かならすしもこれにつくさす。抑身はかた時の煙となりぬとも。この〔本脫歟〕ふみなかき世にまさきのかつらたえすあらは。みちをたしまむものは跡にもしのへとて。人のゝすけき年。神まさぬ月のころほひ。しるしをきつる事になむありけらし。

眞名序土代暫讀之。淸書時可破却歟。

撰集家（廿二部）　抄集家（十八部）
類聚家（八部）　髄腦家
歌合家　會集家
百首家（十七度）　家集家（本廿六人其外可隨時）
惣雜家（部類無定今■可出來故也）

撰集家

萬葉集一部廿卷。
右平城天子詔侍臣撰之。（見古今序。）

古今和歌集一部廿卷。(千九十九首。)
序云。大內記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河內躬恒。右衞門府生壬生忠岑等。各獻家集幷古來舊歌。於是有詔。部類所献之歌。勒二十卷。于時延喜五年歲次乙丑四月十五日。臣貫之等謹序。假名序千歌廿卷云々。
後撰和歌集一部廿卷。(千三百九十六首。)
右一條攝政(伊尹。)爲中將之時。(奉行文源順作。)補撰和歌所別當。仰梨壺五人撰之。所謂(源順。大中臣能宣。清原元輔。紀時文。坂上望城也。)
拾遺和歌集一部廿卷。(千三百五十一首。)
右花山天皇勅撰。
後拾遺和歌集一部廿卷。(千二百十八首。)
右治部卿通俊爲五品侍中之間。承保之比奉勅命撰之。應德三年九月十六日奏之。寬治元年八月重献目錄。(有序。)
金葉集一部十卷。(六百五十四首。此外連歌十六首。)
前木工頭源朝臣俊頼。依白河法皇御氣色撰之。內奏之後有御氣色。三ケ度撰改。有麁細兩三本云々。天治元年奏之。大治元二之間奏之。
詞華集一部十卷。(四百九首。)
正三位左京大夫藤原顯輔。奉讚岐院仰撰之。天養元年六月二日奏之。

已上七部勅撰。

新撰萬葉二卷。(菅家。)
序云。寬平五載秋九月廿五日。但下帖他人撰歟。序云。延喜十三年八月廿一日云々。如或書源相公作也。今案。件年源相公參議右衞門督當時也。(可尋。)
樹下集廿卷。
多々法眼源賢撰之。有假名序。
玄々集一卷。有序。能因撰之。
山伏集。(撰者不分明。)
念首入道打聞。
良暹打聞。
尼葉子。(尼公持來於經信卿家賣之。故爲名。)
三卷撰。(中下隆經朝臣撰之。)
十卷抄。(經衡撰之。)
後拾遺。(資仲卿。且四卷不果書也。)
五葉集廿卷。
尾張權守橘盛忠撰之。(有假名序。或有眞名序。敦光作之云々。)後冷後三白河堀河鳥羽五代和歌云々。
良玉集十卷。
八條兵衞佐入道顯仲撰之。金葉集撰之比。大治元年十二月廿五日撰之。

山階集。南部中秋也。）
拾遺古今廿卷。
右京大夫教長撰之。詞花集撰之比撰之。序者永範朝臣。
續詞花集廿卷。
清輔朝臣撰之。二條院召覽之。清書了可奏之由。雖蒙勅命。不遂崩御之由見序。々者長光朝臣。
今撰集。（上中下顯昭。）
已上十六部私撰。

抄集家

萬葉集抄九卷。
右一說紀貫之。一說梨壺五人抄之云々。
同廿卷抄。（撰者可尋。）
新撰和歌集四卷。
右紀貫之撰古今集。撰了後。更蒙勅命抽其勝。但不奏崩御云々。
拾遺抄一部十卷。（五百八十六首。）
右撰定本集後更抄出云々。
和漢朗詠集上下。（四條大納言撰。）
金玉集一帖。（同。）
前十五番。（同。）
深窓集一帖。（同。）
三十六人撰。（同。）
題抄二卷。（能因撰。）
麗華集一帖。（不知撰者之趣。見後拾遺序。）
後十五番。（或道雅。或定賴云々。未決。）
上科抄。（上下。上卷古人。下卷近代江廣經撰。）
續新撰。（通俊卿。限後拾遺中云々。）
明月集。（顯季卿。）
悅目抄。（基俊。）
相撲立。（同。）
新撰朗詠。（上下。同。）
蓮露集。（上中下。或僧侶集。諸集哀傷部。）
一字抄。（諸句題。淸輔朝臣。）
戀部集。（作者可尋。）
桑門集。（古今僧侶歌。有序。顯昭撰。）

類聚家

類聚歌林。（憶良。在平等院寶藏。）
六帖。（貫之母。）
山戶苑田集。
類聚古集廿卷。（萬葉。敦隆切續之。）
古後拾。
類林。（五十卷。有序。仲實朝臣。）

龜鏡集。(伊勢室山入道。十卷。)
佳句集。(十卷。)
題林。(歌合卅卷。歌會卅卷。百首卅卷。雜々卅卷。合百廿卷。
二條院召了。清輔朝臣。)
諸家集部類。(撰者可尋。在富家入道殿。被傳獻故左府云々。)

髓腦家

歌標。(濱成。有序。)
僧喜撰作式。
孫姬式。(喜歟。有序。)
石見女髓腦。
勘解由次官清行式。(號石見女是歟。未決。)
新撰髓腦。(四條大納言。)
綺語抄。(仲實。)
口傳集。(隆源。)
能因歌枕。
白女口傳。(作名歟。)
俊賴口傳抄。
童蒙抄。(刑部卿範兼。)
奥義抄。(四卷。或六卷。清輔朝臣。)
九品。(四條大納言。)
忠峯十體。
道濟十體。
和歌初學抄。(清輔。)
以下闕

一本奥書
此一册飛鳥井亞相禪門眞跡也。可令秘藏之。一覽之次染筆者也。
桑門逍遙叟花押

右和歌現在書目錄以或家秘本校合畢

和歌合略目錄

亭子院歌合。(延喜十三年。)　勅判
京極御息所廿一番歌合。(同廿一年三月。)　判　大和守藤忠房
天德四年三月卅日歌合。　小野宮左大臣
內裏歌合。(應和二年五月四日。)
村上皇女規子
野宮十番歌合。(天祿三年九月廿八日。)　和泉守源順
女四宮歌合。(同四年。)
內裏歌合。(寬和元年八月七日。)
同歌合。(同十日。)
同廿番歌合。(同二年。)　中納言義懷

廣田社歌合。(大治三年八月廿九日。)　基俊
顯輔朝臣家歌合。長承三年九月十三日。)　基俊
家成朝臣家歌合。(同四年。)　基俊　國仲
同家歌合。(保延元年。)　基俊
或所歌合。(同四年。)　同上
奈良花林院歌合。　同上
平經盛朝臣家歌合。(仁安二年八月。)　清輔朝臣
住吉社歌合。(敦頼勸進。嘉應二年十月九日。)　俊成卿
法住寺殿上歌合。(同年十月十六日。)　同上
新羅社歌合。承安三年八月十五夜。)　同上
別雷社歌合。(治承二年三月十五日。)　同上
賀茂社歌合。(元曆元年九月。)
後京極家歌合。(建久元年九月廿四日。)
北野歌合。(同年十月。)
後京極家歌合。(同二年十月三日。)
左大將家歌合。(同五年十月三日。)
同家歌合。(同六年二月。)
同家歌合。(正治元年冬。)
新宮歌合。(同年十一月七日。)
影供歌合。(同八日。)
內裏歌合。十二月。)

左大將家歌合。(同二年二月。)
影供歌合。(二月十日。)
御室撰歌合。(三月五日。)　俊成卿
左大將家歌合。(三月。)
城南寺歌合。(五月。)
影供歌合(五月。)
內裏歌合。(七月十五夜。)
內裏歌合。(十八日。)
新宮歌合。(八月一日。)
影供歌合。(廿日。)
內裏歌合。(當座。九月盡日。)
內裏歌合。(十月一日。)
內裏歌合。(同日。)
新宮歌合。(十一月。)
影供隱名歌合。(十二月二日。)
石清水若宮歌合。
石清水社歌合。(十二月廿八日。)
土御門內大臣家影供歌合。
影供歌合。(三年正月十八日。)
同歌合。(三月十八日。)
新宮撰歌合。(三月盡日。)

影供歌合。(四月晦日。)
內裏歌合。(建仁元年正月廿八日。)
老若歌合。(二月。)
新宮撰歌合。(二月廿九日。)　釋阿
內裏歌合。(三月盡日。)
影供歌合。(八月三日。)　釋阿
五十番歌合。(八月十五夜。)　同上
戀十五首歌合。(九月十三夜。)　同上
八幡歌合。(十二月。)
仙洞影供歌合。(同二年。)
和歌所歌合。(同三年。)
內裏歌合。(當座。元久三年十月。)
石淸水歌合。(同。十月。)
春日社歌合。(十一月三日。)
院歌合。(同二年六月。)
北野社歌合。(新甞。當座。七月十八日出題。後京極判。有序。)
同社。(十一月十一日。)　衆議判
高陽院歌合。(建永元年正月十一日。)
鴨御祖社歌合。(三月七日。)
和歌所歌合。(七月十三日。)
卿相侍臣歌合。(同廿五日。)　衆議判

卿相侍臣嫉妬歌合。(八月。)
住吉社歌合。(承元二年五月廿九日。)
內裏歌合。(建暦二年二月廿六日。)
五題歌合。(五月廿二日。)
松尾社歌合。(建保元年七月十七日。)
內裏歌合。(八月七日。)
仙洞歌合。(九月十三夜。勝負并無判。)
三題歌合。(同月。)
仙洞歌合。(三年閏九月十九日。)　定家卿
亂歌合。(同九月盡日。)
內裏歌合。(當座。二年五月十日。)
同歌合。(同。七月。)
秋十五題亂歌合。(八月十六日。)　定家卿
內裏歌合。(九月五日。)
名所撰歌合。(八日。)
月卿雲客歌合。(廿五日。)
仙洞歌合。(當座。三年六月十六日。)
和歌所歌合。(十八日。)
八幡宮撰歌合。(七月五日。)
內裏歌合。(當座。八月廿一日。)
撰歌合。(同。九月九日。)

月卿雲客歌合。(廿九日。)　家隆卿
內裏百番歌合。(四年閏六月九日。)
四十五番歌合。(當座。八月廿二日。)　衆議判
四十二番歌合。(同。同廿四日。)　同上
北野宮歌合。(五年四月廿一日。)
內裏歌合。(當座。六月廿四日。)
內裏歌合。(同。七月一日。)
前關白家歌合。(九月。)
內裏歌合三題。(當座。十月十六日。)　定家卿
同歌合。(同。十七日。)
同歌合。(同。十八日。)
四十番歌合。(當座。十九日。)　御判
內裏歌合。(十一月四日。)
內裏歌合。(當座。廿一日。)
內裏五題歌合。六年二月廿一日。)
內々歌合。(五月晦日。)
內裏歌合。(當座。承久元年二月廿三日。)
內裏六題歌合。(同。閏二月五日。)
八幡宮歌合(閏二月五日。)
鴨社歌合。(三月七日。)
賀茂社歌合。(同日。)

內裏歌合。(七月。)
日吉社歌合。(九月六日。)
內裏五題歌合。(當座。二年三月廿三日。)
春日社歌合。(同月。)
住吉社歌合。
粟田宮歌合。(四年九月。)
撰御歌合。(嘉祿二年四月廿一日。)　家隆卿
石清水若宮歌合。(寬喜二年三月廿五日。)　定家卿
(光明峯寺)攝政家歌合。(貞永元年七月。)　同上
卅三番歌合。(八月十五夜。)　同上
石清水社九題歌合。(嘉禎二年。)
五十番歌合。　後京極攝政御判
遠島御歌合。(七月。)
河合社歌合。(寬元元年十一月廿七日。)　爲家卿
日吉社歌合。(同四年。)
仙洞百廿番歌合。(寶治二年九月。)　爲家卿
仙洞影供歌合。(建長三年九月十三夜。)
卅六人歌合。(弘長二年九月。)
新名所歌合。　爲世
新玉津島社歌合。(出題爲秀卿。貞治六年三月廿三日。)

賀茂歌合。　[illegible]邦
日吉歌合。
清瀧社歌合。
遍昭寺歌合。
在納言歌合。
瞻西上人雲居寺歌合。
民部卿泰忠三井寺歌合。
尾坂歌合。
水無瀨殿釣殿六首歌合。（當座。建仁二年六月。）　後鳥羽御判
高倉一宮歌合。
小野宮右大臣家歌合。
後三條內大臣家歌合。
京極前太政大臣家歌合。　經信
中院右大臣家歌合。
六條右大臣家歌合。
右大臣家月十首歌合。（月詣集）
右大臣家三題歌合。（實公）　清輔朝臣
大納言道綱家歌合。

大納言實國家歌合。
資雅卿家歌合。
長實卿家歌合。
顯隆卿家歌合。
範兼卿家歌合。
教長卿家歌合。
賴輔卿家歌合。
重家卿家歌合。
修理大夫顯季家歌合。
藤原通宗朝臣家歌合。
俊賴朝臣家歌合。
清輔朝臣家歌合。
季經朝臣家歌合。
小野宮侍從家歌合。
大貳資通家歌合。
民部卿經房家歌合。（建久六年正月廿日。）　釋阿
爲業入道家歌合。
師光家歌合。
隆親家歌合。
兵衛佐經正家歌合。
橘義清家歌合。

橘俊綱朝臣家歌合。
隆信家歌合。
範玄律師亭歌合。
觀蓮亭歌合。
御裳濯河歌合。(西行。)　釋阿
宮河歌合。(同。)　定家
後京極攝政自歌合。　釋阿
俊成卿百番自歌合。
定家家隆五十番歌合。　御點
家隆卿百番自歌合。
知家自歌合。　定家
光俊朝臣家歌合。
宗尊親王百番自歌合。
關白家歌合。(詞關白良基公。貞治五年十二月廿日。)　爲秀卿
文明歌合。(文明九年七月七日。)　兼良公
常德院將軍家歌合。(文明十四年閏七月。)　雅親卿
文龜歌合。(文龜三年六月十四日。)　爲廣卿
松下三百六十番歌合。
道堅法師廿五番自歌合。
南朝五十番歌合。　宗良親王

百番宗長連歌合。(永正五年六月。)　實隆公
時代不同五十番歌合。　後鳥羽院
堀川院艷書合。
女房艷書合。
十五番歌合。(永祿六年八月廿三日。)
千五百番歌合。
左大將家歌合。(號六百番。)　俊成卿
仙洞御歌合。(寛永。)　實條公
職人盡歌合。　同上

詩歌合

內裏詩歌合。(元久元年。)
院詩歌合。(二年六月。)
內裏詩歌合。
內裏內々詩歌合。(九月十三夜。)
內裏詩歌合。(建保元年二月廿六日。)
內裏五題詩歌合。(二年二月三日。)
北野宮詩歌合。(四年三月十五日。)
內裏詩歌合。(當座。六年九月廿五日。)
仙洞詩歌合。(建長二年九月。)
五十四番詩歌合。

六十番詩歌合。（文明十九年正月十三日。）

右和歌合略目錄以稻山行敎本一校

明月記抄出

明月記（土御門院御宇　歌道事）

文治四年四月廿二日戊子。晴。巳刻計入道殿（俊成卿。于今河法皇）令參院給。爲勅撰集奏覽也。日來自筆御清書。白色紙。紫檀軸。（貝鶴丸。）羅表紙。組紐。外題中務少輔伊經（伊行子。行能之父）書之。納筥。筥蒔繪自御沙汰手有新歌。未斜令用給。於御前殊有叡感云々。自令讀申之給。又蒔繪歌以神筆之本留御云々。

廿四日庚寅。入夜猶伺書奉書云。（同集撰者等表少可撰加之由被仰事勅。加廿首已上廿六首入之）撰者之詠乏少。（千載集撰者之詠始入十一首依）猶三四十首可副進之云々。可撰進之由有御返事。

九月廿九日壬戌。天陰。入夜雨降。良辰徒暮。依難默止。黄昏參（後白河院第一皇女亮子。安德天皇准母。御裳同興入也）殷富門院。與大輔清談。漸及亥時。無人寂寞。欲退出之間。忽門前有松明之光。有參入之人。內外相驚。權中將參入被語云。已欲付寢之間。庭前之木葉忽落聞嵐音。遂不能寢。忽出騎馬所參也。存人不可候出之間。見件車感涙相催之由。女房感悅。更掌燈。連歌和歌等。新中納言。尾張等相加。種々狂言等。及鷄鳴數聲。雨漸滂沱。遠路天明者不便之由被急出。猶徘徊空階雨滴之句數返。借笠退出。歸路間天漸曙。

建久二年八月三日己卯。（大將殿三席事）天晴。大將殿（後京極殿）來十三日可有御作文管絃和歌等。光範之獻題。家月幾月長。詩契萬年會。管絃壽域中。已上詩共不叶御意之由被仰。）松上鶴。（和歌。）

十二月廿七日辛丑。（大將殿百首歌事）夜雪旣積。（三寸計り。）朝天令晴。今日百首歌進大將殿。（先是進一首。有御和。）於披講者可期出仕由被仰。病氣猶不扶得之間不能參入。

閏十二月四日戊申。（上題百首被讀上事）天晴。午時計參無動寺法印（慈円）。爲悅中牛事也。見參良久之後。件少輔入道（寂蓮）同乘退出。路次參押小殿幷中宮。此間入道（寂蓮）行車中。相次參一條殿。依昨日仰也。入夜被讀上百首。（御歌入道予三百首也。）（後-極　寂蓮　守家）事畢有當座狂歌等。深更相共歸家。

建久七年二月廿二日。天晴。藏人大進。來月一日大臣殿（後）可有和歌。松不改色。消狀了。

三月一日。（內大臣之任槐之後初度作文和歌等事）天晴。午時參內大臣殿。御供參大炊殿。今日大臣之後初度御作文和歌云々。即退出。入夜歸參。詩講始後也。公卿中宮大夫以下濟々云々。中將殿初接文場給。依殊召中將殿。右大弁。藏人弁着公卿座末。殿上人有家朝臣之外弁官等也。事了置和歌。季經卿。隆信朝臣（俊成猶）。予。保季等在此列。心中無興。祝歌彌不堪無術。今朝申入道殿受歌也。歌講未始之前。殿下（月輪殿）御參內。予雖遣歌不參講席。深更事了。御供參北小路殿退出。歌題松不改色云々。殿下今夜渡御九條殿云々。

廿六日。天晴。賭射也。（此間略之。）(イ小書也)座定後。(後京極殿)左大將殿揖起座。令出幔門給。次右大將又同被出。左大將殿令過給、每度予動座。伊輔又同出居動座。御前不可然之由。源亞相被加難云々。事次申處被仰云、除目執筆大臣候御前時。殿下御着座之時。去(立イ)座下簀子。家禮不寄御前歟。已無其憑。仍動座也。

(大臣殿三首和ヽ事)七月廿一日。申尅計參大臣殿。(後京極殿)又有三首歌。亥時計退出。昨日明月。今日微雨。明日逢戀。

(駒牽大將除目以後事)建久ヽ年八月十六日。黄昏着束帶。依駒牽事也。退出之後。送一(良經卿臣駒牽歌也)行右中弁許。立馴之三世乃雲井乎今更尓隔天見留霧原乃駒。返事歸塵則持來、時乃間乃隔鳴立馴之雲井留近幾霧原乃駒。

(仁和寺宮五十首ヽ和事)十二月五日。天晴。少輔入道(寂蓮)來。一日依召參仁和寺宮。(守覺法親王)仰云。欲詠五十首和歌。定家父子可詠進之由可相示者。時云。身雖憚多。聞此事無左右領狀。宮之御事更不似事也。(他說歟)

(大臣殿詩歌合事)正治二年二月九日。天晴。風雪冴寒。未時計參上。文人等漸參集。秉燭已後有詩講。式部大輔。（公卿一人有座。）親經朝臣。（直衣。上。）資實朝臣。（束帶。置詩還入之間。被召付着座。未揖。親經又座云々。）有家朝臣。予。長兼。宗業。爲長。（序。）成信。高範。知範等也。皆以才士也。一人極見苦。資實朝臣有秀句。滿座感歎。漢十二梟高祖德。唐三百載太宗功。尤足賞翫。本自堪能也。殊勝々々。予胸句。頭權右大弁加感詞云々。爲面目。講師成信。讀師式部大輔。講畢有和歌。（無序。）季經卿。隆信朝臣。保季朝臣。業清等加之。李部。(親經ヽ實明臣)兩貫首。宗業。高範不進和歌。保季可講師之由被仰。依爲四位、思召忘歟之由奇之。密密取御氣色。仍長兼可奉仕之由被仰。（今夜奉行人也。）即着圓座。季經卿讀師講畢退。無尋常歌。

(大臣殿六合事)廿三日。天晴。依召參大臣殿。(後京極殿)被仰和歌事。予無風情。又(更イ)不成。今日構出書進了。入道(俊成卿)心勞之間。講席之交頗痛思給之由。今朝申之。殿下(後法性寺殿)仰所申頗有理。然者可被延日數歟。計其程可申上云々。其程計申之。有其恐。所詮可隨御定之由申之。

(大臣殿撰歌合事)廿五日。天晴。午時計依召參大臣殿。(後京極殿)與中書撰右方歌畢。御供參御堂。隆信朝臣。寂蓮入道等依召參入。撰左歌了之後。昏參御前。有和歌。題待花日暮。春夜增戀。讀上了退下。殿下今夜御方違。歌人十題歌合。左方。中將殿。(良輔歟)（實殿下御歌。(後法性寺殿)）隆信朝臣。保季朝臣。家隆、寂蓮。業清。右方。資家。（實大臣殿。(後京極殿)）能季朝臣。（實(慈ヽ)僧正御房。）有家朝臣。定家。顯昭。丹後。深更歸參。殿御供。

廿八日。陰。雨降。雷雨三聲。早旦參上。又參南殿。歌合間事爲御使往返。夕退下。

(大臣殿撰歌合事)閏二月一日。天晴。午時計參。大臣殿(後京極殿)已前御座。未時計季經卿參入。少時召御前。（西面。）季經卿在長押上。弘庇敷疊。隆信。保季在南座。有家。予。能季。資家等北座。（此兩人依無人數被召出。）諸大夫二人。（淸實。國時。）各取硯蓋。置長押上圓座前。（圓座本自敷之。）件蓋各入歌一卷。（左右各書之。）次大臣殿召予保季。

相共參上座制座。取卷打返硯蓋。披歌置其上。次依仰左方先讀上。(保季。)右方一番〔硯蓋出兩方相分已分明也〕(曉信。)歌左右共詠之。二返了。予讀上之。右方歌詠讀之。次相互可難之由被仰。少々事各申之。次判者定申云。持云々。次第之儀大略如此。(判者前置硯紙。書付勝負番度數等。)廿番讀上了起座。還着本所。(取直歌向御前天置之立。保季不取直。)少時各起座。昏又依召參南面。出題。(近山花。閑二月戀云々。)如形終篇。女房歌遲々經時刻。寒嵐難堪。適出了。今夜北政所令參一品宮給云々。歌合之義。頗雖可有興。判者之躰。次第之儀頗無詮歟。予歌五首被撰入。花勝。(左寂蓮。)郭公負。(左府御歌。)野風。(左不知。)秋恨。(左寂蓮。)冬述懷。(左不知。)持三首云々。雖不及自愛。可謂面目。人々歌惣今度不得之。皆恐謬歌也。(予又問前。)

〔大臣殿詩歌合也〕廿一日。巳時計參上。依番上格子。參南殿歸參。午終殿下〔後法性寺殿〕御出法性寺。騎馬御供。少時大臣殿〔後京極殿〕。(中將殿。)季經卿。隆信朝臣。有家朝臣。長兼。(束帶。)爲長。成信等依召參入。於新御所出題。各評定云。今日詩與歌被合。可爲興。予申云。不堪物。尤可作一方。但大臣殿令書一紙給。下給衆中。各披見。詩題春日山寺即事。(勒新春人塵。此勒字被召爲長。)歌題山花。瀧水。

詩作者。左大臣〔後京極殿〕。右中將〔良平〕。有家。定家。長兼。爲長。成信。信定。知範。

歌人。左大臣〔同前〕。季經卿。中將〔良平〕。隆信朝臣。有家朝臣。定家朝臣。長兼。業清。信定。

各披見之。即詠吟不堪。兩方極無術。暫入御。々饌。能季朝臣。予等陪膳。季經卿被召御前。次入閑所。與經季又私行之。自餘人々依仰又各酒饌等羞了。及晚頭。雷鳴以後獻詩。殿下召取之御清書。信定又給之書。(詩不書發落句。胸腰句合和歌二首也。如相撲立。)秉燭以後披講。衆議評定之間。雷雨大風。掌灯頻滅之間下格子。於内被講了。予和歌被合爲長詩。一首持。一首負。詩被合信定歌。一首勝。一首持。是存外也。詩胸句。梟鏑響近松風夕。鳳蔡蹤遺草露春。座中頗被稱無難之由。爲存外。於歌者被處巽様難。是又何爲乎。評定訖之間雨止云々。人々退下。前後退出。即還御。騎馬御供。即退下。結番大略不憶覺。大臣殿御詩〔歌作後京極〕。季經卿歌。中將殿〔歌作良平〕。隆信朝臣〔歌作〕。有家朝臣〔歌作〕。中將殿。定家朝臣〔歌作〕。(一首勝。一首持。)信定〔歌作〕。長兼。大臣殿〔詩〕。爲長。(一首持。一首勝。)定家朝臣〔詩〕。成信。有家朝臣。信定〔歌作〕。長兼〔歌作〕。(二首勝。)知範〔詩〕。(二首勝。)業清〔歌〕。(勝負不覺悟。)

〔日輪〕〔大原出御花御覽之事〕廿八日。天陰。雨灑。以後雨又休。天間晴。雨雪交降。拂曉參上。遲明出御大原。(殿下〔後法性寺殿後京極殿〕。大臣殿御輿。予家綱朝臣着狩衣在御供。(騎馬。)巳時着御來迎院。花未盛。仰云。待花盛可來之由存之處。已欲落之由聞之。仍念來之間花已遲。又無下無人也。無興存之如何。但如先被開寶藏。午終入御鷲谷。大臣殿同御無興。又遺恨之由有沙汰。忽有勒字。成信書之。閑山是遺偕主許。(長親。通

業。最修坊等三人也。）次各退下。於下房居酒饌。此間漸終篇參上。仰云。欲出詩序。汝可書和歌序。見苦之由雖申強被仰。仍書之。臨昏如形被讀上之後退下。與兵部少輔合宿。他人皆在向房闌湯延年云々。

（自大府還御事）廿九日。朝間雨猶洒。辰後雨止。巳晴。巳時計大臣殿歷覽近邊勝地等還御。申始計殿下出御。々覽來迎院奧瀧。又御覽實源法印上野房還御。於賀茂東邊秉燭。入御九條殿。退下。

（季經卿與定家ノ和事）四月六日。天晴。知範來謁語云。季經卿大怒有訴申。予辭歌合作者假名狀。如季經等ゑせ歌讀判之時。難堪之由書之云々。此事力不及。皇太后宮切々可召出予歌之由。被申右大臣殿（後京極殿）。仍有其責。歌合之交衆難堪。結番誰人哉。又近代判者輕々更不可交其事之由。且隨有庭訓。於此御邊事。不入興之條依有恐。不顧是非詠之。於他所事者。尤以難堪之上。猶可然人々事非此限。不知其名。童法師會詠送歌。自由被結番之條見苦之由。所申入大臣殿也。以其狀被献舊后之。狂氣之間。被遣季經卿許歟。更不可痛事也。次第希有也。實詮弟子童法師歌合云々。稱病氣由不指出。

九日。大臣殿（後京極殿）今日又六借御云々。境節籠居之由。人々沙汰之由。或人告之。但何爲哉。不惜身命。雖存忠節。大小内外不似存。親雅季經讒言被信用被處理。賢人也公卿也。可信可貴。甚無益之世也。飛鳥盡而良弓藏。狡兎死而走狗烹。共憂不共樂者越王爲人也。凌雨步行。進退是苦。仍籠居耳。果云龍下乎云々。示兼時處。又稱所勞之由。以人申入云々。

七月十五日。天晴。巳時計内供來臨。宰相中將有示送事等。其内院有百首沙汰。其作者可被入之由。頻執申之由也。若爲實事者極爲面目本望。執奏之條返々畏申由返答畢。

（御百首人數共者計被撰之事）十八日。天晴。早旦内供來臨。依請也。院百首作者之事。爲相謁相公（公經卿）羽林也。昨日以消息示之。返事云。事始御氣色甚快。而内府（良經）沙汰之間。事忽變改。只老者預此事云々。古今和歌堪能。撰老者事未聞事也。是偏盼季經賂。爲弃置予所結構也。季經經家彼家々人也、全非遺恨。更不可望。但子細密密註之。送相公（公經）許畢。爲漸々披露也。可存知之由有返事。

（向宰相ニ歎許事）廿八日。天晴。向宰相中將許。即被出逢。有所勞。此兩三日不出仕云々。述所思退歸。于時亥尅計。此百首事凡非叡慮之撰云々。只權門物狂也。可彈指。

（定家被加于百首人數事）八月九日。早旦相公羽林夜前百首作者被仰下之由有其告。午時計長房奉書到來。進請文畢。今度被加之條。殊以抃悅。於今雖不可遁。是偏凶人之構也。而今如此。二世之願望已滿也。

（依成功假、奏云々事）十日。終日蟄居。入夜北方有火。鹽小路云々。即滅畢。家隆隆房卿又給題云々。入道殿令申給。五六度付頭中將達内府。人數被定。難加之由答之。仍被進假名狀。出御之間。使持書參入之間。以上北面直召取御覽。即被加三人。不論親疎。被申道理云々。

（北野ヘ參并法樂歌事）十三日、天晴。未後雨如注。入夜雨止。未時參詣北野。自歌一卷

(入籍。)預祝中偕。可表納之由語付了。先日參詣。心中祈願已以
滿足。仍重所詠進也。
宜秋門院丹後被加御百首人數事
十五日。今日聞。丹州又給院百首題云々。
大臣殿御出家御出事
十六日。大陰。雨脚洒。入夜晴。鷄鳴之程參上御堂。無程御輿出
御。予。資家。國行。信光騎馬供奉。(布衣。打梨。)經七條大宮四
條大路。自西京田中出廣隆寺西門前。出大井河。無御船不令渡
給。以信光乘小舟。被供灯明。(法輪寺。)即令參嵯峨釋迦堂。又
於大門居御輿。以予被供灯明。(法輪寺。)即還御。被昇入御輿於
中院草庵。面目恥辱計會。令上蔀御覽內勝地之由被仰。即御故
內大臣殿御墓所。大原尼公被參此所云々。入御之後各退下。予
入私盧沐浴。國行信光來同浴。但無食。未時計歸參。少將相共遊
行。臨昏還御於穀倉院邊。(路今度經大內西南如普通。)
百首歌可進御事 長房
廿三日。右中弁奉書云。百首明日可進。卒爾周章。未時計參入道(俊成卿)
殿。愚詠二十首計不足所詠出。經御覽仰云。皆無其難。早案出可
進也者。又見御歌中所存退歸。
定家和歌參法性寺殿御事
廿四日。和歌周章構出。僅書連之。未時計參法性寺殿。令御覽歌
一卷。
百首歌持參院事
廿五日。又持參歌於殿御前。撰定書連之。午時計退下。猶三首不
甘心之由被仰。雖案不出來。又一二首計書之。付女房經御覽。宜
之由有仰。又申合大臣殿。畢書連。秉燭以後持參院。付右中弁進
入之。隆房卿同參入進之云々。當時進人。白河僧正。(慈圓)權大納言。(忠良)
兩三位。(經家。季經。)隆信朝臣。生蓮。(師光。)寂蓮。入道左府。(三条實房)
(俊成卿)入道殿。已上二人今朝云々。
付定家述懷被聽昇殿事
廿六日。巳時依召參御前。暫退下之間。頭弁送書狀云。內昇殿
事。只今所仰下也者。此事凡內外日來更不申入。大驚奇。夜部歌
之中。有地下述懷。忽有憐愍歟。於昇殿者更非可驚。又非怨望。
今詠進百首。即被仰之條。爲道面目幽玄。爲後代美談也。自愛無
極。道之中興最前。已預此事。更々不及左右。即申此由了。早參
入可畏申之由有仰事。尋求僮僕之間。及晚景參入。又依書。(長
房。)又逢康宗。皆只歌物語也。弁云。夜前進入百首之後。又依召
參。無他事。只可仰下昇殿之由有仰事云々。是皆以道面目也。抃
悅有餘。
今度歌叶叡慮事
廿八日。今度歌叶叡慮之由。自方々聞之。道之面目。本意何事過
之乎。
大臣殿御歌事
九月五日。又參大臣殿。又見御歌。殊勝不可思議也。
院十首歌事
十二日。申時計長房奉書云。十首歌可忩進。明日可持參之由進
請文了。
廿一日。巳時計參南殿。給百首御歌退出。(可持參向入道御許由
有仰。)參御堂。
廿三日。長房今日爲院御使。參左大臣殿。(後京極殿)進十首題。可令忩進給
之由申之了。
大臣殿御百首紙御清書事
廿七日。又參南殿。今日被進御歌於院。百首御清書。色紙雖打。

わさとうちたるを見えぬほとに打也。たけたかき色紙也。依仰一反見之。無僻事。しろたゑとアルヲ。しろたへと可候之由申畢卷之。今一枚禮紙卷天。其上同色紙細二分計。切天。封天墨引天。檀紙二枚裹天。立文のやうにて。シリカシラハ不捻。押折天一裹。十首詩常タケタカ檀紙御清書。〔後仁和寺殿〕又檀紙懸紙切天 封天。又以二枚如百首裏也。以余時（先是右殿下御覽。）被奉。百首可被付卿典侍。十首被付長房。各被献題奉行人也。

廿八日。静閑梨來。一日一卷返送頭中將許了。後家密々歌合之可判之由有命。仍注付了。其歌尤宜。是室家所詠歟。

〔定家被驗次昇殿上〕卅日。未時計退下之間。大府卿奉書云。今夕酉時可參入者。禮紙云。可祗候西中門方云々。此事不出眾以前如此。殊以畏申了。入道殿〔俊成卿〕先參給云々。昏參三條殿。秉燭以後御供參院。令昇西中門方給。頭中將〔通具〕參會奉行。褰格子遣戶御簾奉入。可謂本意。暫在此邊。大宮相公〔公經〕依被招。於閑所謁談之間。內府〔親公〕又被謁。入道殿〔俊成卿〕少時依召參着御前座。〔後鳥羽〕御所被張御簾。北面弘庇東西行敷帖。爲公卿座。內府。入道殿。宰相中將〔公經〕。頭中將在此座。後綠敷帖。爲侍臣座。隆信朝臣。予。範光朝臣。雅經。隆範。（今夜有召參云々。）具親。（師光子。）隆實等候。東砌下敷帖。鴨長明一人參着。左前供花。（歌有御感被召抽云々。）讃岐給迎車。參候北對面云々。入道殿承仰令献題給。各評定。月契多秋。暮見紅葉。曉更聞鹿。以御使（北面云々。）、被遣權大納言〔忠良卿〕許。良久催綴篇。大納言〔忠良〕歌到來之後。〔々歟〕人之歌次第傳取進之。（各不進寄。）內府被置文臺。次取聚天給上北面、於閑所被結番云々。持參。（先一卷月題八番也。隨書出進之。）大藏卿講師參御前讀上之。各可評定由雖有仰。下﨟等不能申。內府大略評定。入道殿被定申勝負。以二題又持參。評定了後。予依召自座下參候御前。（公卿座前。）依仰引直掌灯。（臆病火消了。召家長指油。）隨入道殿仰書之。忩々周章之間。全不加刷詞。爲耻爲恨。書了退下。又給本所。付作者持參。內府被讀上。了退下。今夜歌荒蕪之上。評定等區々也。二首負。一首持。旁以恐耻了。但歌殊非遺恨。予不知讃詞。人又不擧。御製不伺知之間。録歌怖畏。每事還無興者也。即退出。（鷄鳴。）

十月一日。巳時計參御堂。北政所前今朝頗宜御。依召參御前。（大臣殿御座。）申夜前事等。如形書取歌等。經御覽。仰云。汝歌尤宜。少時退下。未時計參內。（着白重。）無程退出參院。公淸有通兩少將暫在中門邊。基宗卿參入。予退出。參大炊殿。女房云。春宮御猶子渡御事。已以一定。御所修理事幷女房等出立。旁御大事云々。昏黑退出。過六條辻之間。自院御教書到來。有御會。只今可參入者。仍北轅馳參。即給題。初冬嵐。枯野朝。夕漁舟。如形綴篇進入。被結番云々。俄而以家長有召。可參小御所云々。遙以參入。參御眼前。法印。宰相中將〔公經〕。範光朝臣。雅經等祗候。仰云。かゝる所へ參入。所存無憚可申。不申者無其詮。以汝所存爲聞召。故今夜可被召。老者目暗轉心迷。依恐具申所存了。雖衆議

判。大略定申。次依仰書詞。此事凡雖周章。且隨勅定了。次題作者重讀之。各其恐。但御製無負。以之爲冥加。次又有御會。題云。社頭霜。東路秋月。又讀之。又結番。亦讀了。不書判詞。御製無負。爲悦。暫入御。即退出。今夜之儀。極以爲面目。存外參也。

十四日。(十首歌合被付俊成卿事)以家長暫可祗候之由被仰。十首歌合可遣入道(俊成卿)許之由有仰。但入夜之間。今夜退出。明日早朝可參之由被仰。仍退出。

十五日。申始計大藏卿給歌合(五十番。)一卷。持參入道殿(俊成卿)。申仰旨等。日入之程歸參。申畏給之由。又有可申給事等。大藏卿又來傳仰。承了。

十一日。(中島宮[illegible]事)戌時自院給五首題。有召。即扶病騎馬馳參。構出腰折歌。於中鶴神前有披講。(結番、)御所。(簾外保家中將祗候。)予。寂蓮。(予脱歟)具親等預此旨參上。寂蓮兩人定申。恐無極。五首沙汰。題作者毎題三首。御製。前座主。予。家隆。具親。寂蓮計也。爲恐事千萬。還御了各退出。予時不及曉鐘。歸路降雨。入門之後甚雨。病氣甚惱。題海邊霞。古寺郭公。松間月。山時雨。社頭夕風。以社頭被書收初。即書此御社日吉云々。殊以抽信。

十二日。(内府亭和歌會事 通親公)今日内府有和歌之興云々。入道殿(俊成卿)依請可向之由有仰。予同可供奉云々。但心神極惱。有若亡之間。今朝申其由訖。宿耀師珍喜。依予俊引送老牛一頭。無乘物之間所請取也。甚優候歟。頭中將(源俊)度々有招請消息。病氣眞實不快。心神極惱之間。猶示其由。猶歌計可送之由有命。愁送腰折了。

十三日。(通親公亭人丸影供事有御幸)病氣猶重。夜前密々御幸内府影供云々。入道殿依亭主催、度々固辭趣被示之、影前勸盃。師光入道取瓶子由注給事比興歟。予所案之。比興專無益也。但從於漁父之誨歟。當座有歌合云々。此外事不聞及。

(定家初冬詠叶叡慮事)兵衞大夫家長示送云。夜前初冬。予歌殊有叡感。其座負了。召寄被定勝云々。存外面目也。但狂歌也。不慮御感可謂冥加。此比の冬の日數の春ならは谷の雪けに鶯のこゑ。此歌頗可叶時儀之由。内心存之。果以如此。自愛者也。

廿七日。(定家叙正四位下事)巳時自女房丹州許示送慶神妙之由。驚而相尋其事之處。叙一階云々。以忠弘伺出聞書披見也。載名字。此條於今者非沙汰之限。又有所存無本望、然而内外冥加。一言不出。望預朝恩。叡慮之趣極以忝。御好道之間。述懷之歌猶有憐愍歟。於事存外。是又運也。

十一月七日。(中島新宮御幸事)天晴。申時計自院有召。所勞自日來無術由。示送康業許了。猶扶參可宜歟之由重示之。仍秉燭以後勞參。今夜行幸也。望警衞之職着布衣。極雖無便。依見所勞又申其由了。仍内々(示了)此事云合康業。何事在乎之由評之。人々已參了云々。依引導入弘御所。寂蓮。家隆。具親等給題。詠吟風情盡。近日事殊以難堪。良久之後行幸云々。(右中弁長房奉行此御所事。)内府以下供奉。不見其人々令退下。無音之後。付親綱引導。更經北對北東門内御車宿戸。出池東庭。已御乘船了。依召進乘。次々船棹自池

御幸坤何新宮。可退出之由。歌合三首。評定了還御。自是各可退出之由有仰。即自庭上出西門退出。病氣殊甚。題紅葉殘梢。寒夜埋火。海濱重夜。有家今夜給題獻歌。(宮內卿)(自里第云々。)今夜歌皆以負了。(私云此人女房被前歟伴題前伊勢之氏人之女云々)御製一首。師光娘一首。持。伊勢女房一首云々。

內府亭影供事　八日。天晴。病氣彌增。無爲方。內府影供送題被責。先度之意趣歟之由。凶人等沙汰云々。重疊極無由。案之。甚以無極。深可順漁父之訓。戌時計(適具)扶重病向相門。(內府亭)人々又前後群集。(俊成卿)入道殿風氣之由被仰。頭中將猶行向云々。良久歸來。猶有許容之由披露。少時入給(予等奉迎。隆信。寂蓮。)又臨幸了云々。即被喚入。主人命云。今夜予可勸盃。似賞翫似平給。極以嚴重。片腹痛無極。具親取瓶子云々。父子是對揚歟。取盃進寄。置于菓子机上。(具親入酒也。)可讀講之由。雖有平給。不讀退入。被喚上。在貫首傍會尺耳。次召出歌合於御簾前。召家隆讀之。今夜老少分方被合云々。予入少方。尤以存外也。但以四十爲其境云々。然而家隆猶少方如何。判者以下變應。又誠其寄宜之由。少方多勝了。範光朝臣雖有座。明曉參春日由稱之。事不訖以前退下。三首題讀上。評定了後。各座本座。即分部。無當座會。人々分散以前還御云々。頗無興歟。仍早速尋訖飯廬。心中已以有若亡。寒氣極以難堪。今夜合小侍從。二番勝。存外面目。

百首御製讀聽聞事　廿二日。早旦參院。(束帶。打梨。)於中島宮。家長讀上百首歌。寂蓮家隆等三人。可聽聞之由有仰。百首聞了。御製眞實殊勝云々。)

禁中御會事　廿八日。日入之程參內。兩頭在御後弘庇。喚集人々。良久群集。(居イ)無其詮。待隆房卿云々。秉燭彼卿參入。出題。雪中識竹。深夜水鳥。藏人弁長兼書序代。歌人甚多。此事頗輕々也。有若亡少年之輩。皆以奉列。無念事也。亥時計適綴歌置之。賴範講師甚有不覺之事。詠吟了。寒風難堪。無興。早出。

大臣殿詩歌合事　十二月九日。天晴。依寒風無術。雖有召不參。終日偃臥。酉時計有家朝臣重示召之由。秉燭之程。騎馬參法性寺御造作所。(後法性寺殿)詠四首歌詩。(大臣殿。(後京極殿)三位殿。有家。爲長。成信。)歌。(殿。隆信。予。隆範。業清。)以六韻詩四句被合四首歌。勝負評定畢。夜半計御共歸。即退下。冬日於山家卽事。(勅)歌。山家雪。山家水。山家嵐。山家歲暮。

內裏詩歌事　十日。今夜內裏有詩歌云々。每事無興。稱病不參。詩。松間望雪月。歌。池邊冬月。曉千鳥。寒草待春云々。

內府亭影供事　廿六日。入夜行向美乃里亭。乍立相逢。相次向內府亭。依影供也。每日恒例衆。極雖難堪。爲追從不能固辭。入道殿令向給。九旬窮老。人定嘲歟。可哀。有例御幸。御簾中。(供見ヵ)影觀坏。師光入道。定長。入道取瓶子。(寂蓮)三首題讀上了。勝負了。還御之後。聊有盃酒。(各一盃。)題。(曉寄千鳥。山家如春。海邊歲暮。)

五百番歌合百首被念仰事　建仁元年六月六日。此間以家長百首可念進之由有仰事。仍退出。可構進之由申之。

（百首持參院）十一日。巳時持參百首。付右中弁進入。宜之由有御氣色之由。弁語之。

（今度百首殊宜之由御氣色之由通具公　公經卿）十三日。今日內府幷宰相中將。自余之上北面等。多百首殊宜之由。有御氣色之趣粗示之。日來沈思摧心肝。今聞此事。心中甚哀。及感淚。生而遇斯時。自愛難休。

（今度御製拜見殊勝事）十六日。少時依召參御前。今度御製且可見之由有仰事。拔之金玉聲。今度凡言語道斷。於今者上下更以無可奉及人。每首不可思議。感淚難禁者也。閑可見之由有仰事。御何事了。此間內府又被調。拔見其人了後。退下休息。

（三位入道百首事　俊成入道）廿三日。參三條殿。（長房歟）今朝別事不御座云々。百首早可持參之由有仰。仍給之參院。付右中弁進入了。

明月記反古裏　定家卿筆

せきのみちのはな。あしたのかへるかり。とをきほとゝきす。よるの納涼。はしのへんの月。名所のゆき。としのくれのゆふへ。たえてのちのこひ。あかつきの述懐。

（被定和歌所寄人事）七月廿六日。巳時計參上。此間右中弁奉書到來。明日可被始和歌所事。爲寄人西尅可令參仕給。追仰。初可被講和歌。以松月夜凉爲題。凝風情可令參入給。

人々布衣也。今遇此事。可謂老幸。聞人々說。寄人十一人云々。

（後京極殿良經公）左大臣殿。（通親公）內大臣。（慈圓）座主。（俊成卿）三位入道殿。（通具卿臣）頭中將。有家朝臣。予。家隆朝臣。雅經。具親。寂蓮云々。

（院山歌初會事）廿七日。未時計參八條殿。中將殿平減給云々。參左大臣殿。今夜歌事申奉之。申時計御共參北殿。秉燭之程。御共參院。人々前後參會。戌終計出御云々。大臣以下依召參上。五位殿上人置文臺切灯臺。撤敷講師圓座。先是今夜講師事予承之。次第置和歌。各着其座。次召講師。參着了。讀師令參進給。取和歌云。（後京極）通具朝臣令重之。次第令置文臺給。讀上事如例。讀左大臣殿御歌。了起座候長押下。（講之間寂蓮家隆近候長押下。）讀師賜御製。召頭中（通具）將令讀之。同音講之。講師退。各復本座。次可有當座會云々。左大臣殿書題進獻之給。御覽了用一首暮山遠鴈云々。人々歌出來了。次第置之。次召家隆爲講師。讀師（良經通親公）兩相府令相讓給。內府遂參進。披講之儀如先々。各退出。（後京極殿）大臣殿御共歸九條。今夜宿此所。

今朝洗髮始精進。

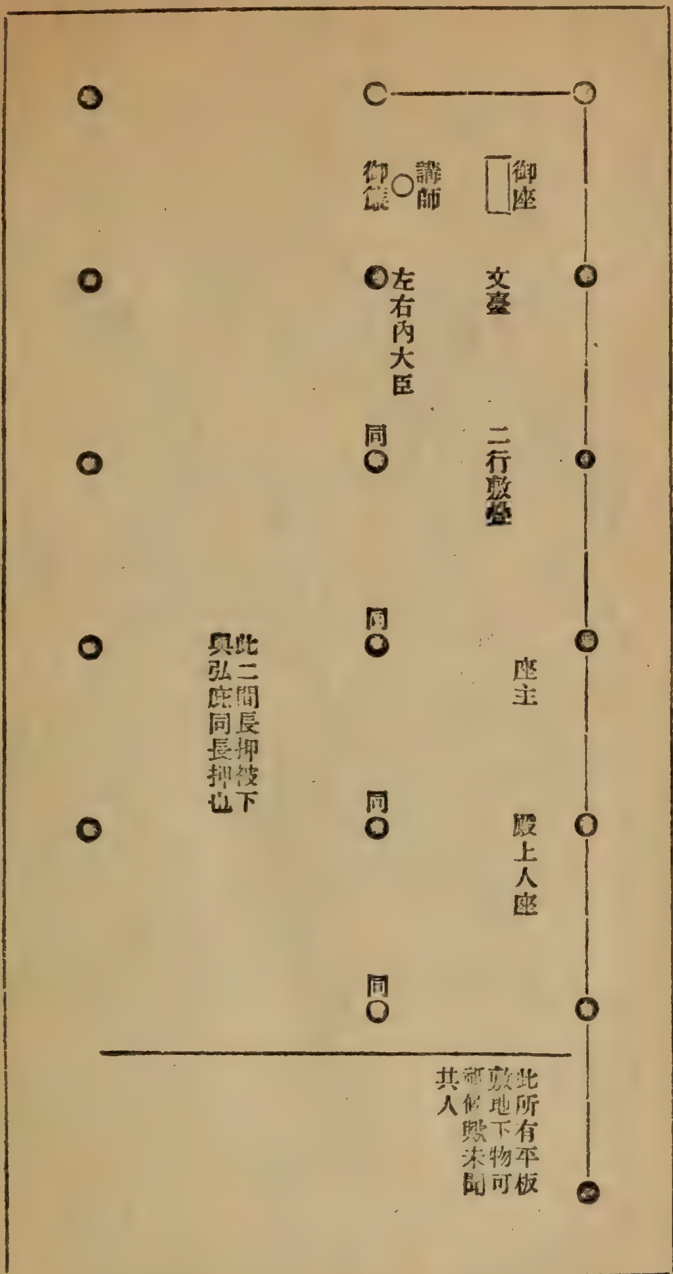
〔次頁圖原在此間今從便宜〕

（影供御歌合事）八月三日。今夜影供歌合也。良久右中弁申出御之由。次第參着。大略如一夜。左大臣殿。（良經公）內大臣（通親公）（座主。（慈圓））入道殿（俊成卿）頭中將。（通具）隆信朝臣。（非寄人）有家朝臣。予。非。保季。非。師光入道。雅經。具親。寂蓮也。先是置文臺歌合二卷。依召予參上。召仕講師。六題各十八番。題作者被書評定。入道殿（俊成）令判給。過夜半入御。人々分散。大臣殿（良經公）中御了。予依窮屈直歸坊門。今夜御結被召。道面目也。參五番勝。（如本）以二番（如本）持之由有仰事。

（和歌所事評定人々勤許事）五日。右中弁十一日御幸御共可參之由相觸。（淨衣云々。）（通具朝臣）頭中

和歌所圖

以弘御所北面爲和歌所。



將。新兵衞佐（具親）等於和歌所可着到之由相議。事達天聽。忽被置之。淸範書寄人名於其端。民部大夫宗安於內北面作籤。又以家長可爲和歌所年預之由衆議申之。召次一人付此所。如歌合之時。可催人之由等各相議。每事有勅許。頭中將聊有示告事。心中爲悅。未知一定。頗不可還事也。曉景退廬。

明後日未練歌人題詠事大臣殿後撰遣內百首被進院事
七日。次參院。頭中將以下參會和歌所。着到有御尋云々。明後日又未練歌人等詠進三題云々。作者三十人。未時皈坊門。申時計皈九條。參大臣殿（後京極）。又見被撰後撰拾遺兩集內。撰出百首被進院云々。依仰也。少々或出或入。

熊野御幸事
九日。南山御共事已有催。面目過分。但尫弱無爲方。爲之如何。御共人。內府（通親公）。大理。仲經卿。公卿三人。殿上人七人。保家。定家。隆淸。親兼。長房朝臣。忠信。有雅云々。皆以淸撰近臣也。俗骨獨相交。爭不自愛乎。

十五夜撰歌合被進院事
十二日。今日獻十五夜撰歌合和歌了。此間心神忩忙。更不得風情。き（可歟）耻耳。

十五夜歌合右方撰定事
十四日今日可撰定和歌云々。未時計有重催。凌雨勞（營イ）參。右方可撰云々。予讀之。座主（慈圓）內府（通親公）評定給。雅經具親被召加。先三十首云々。重左方歌殊宜。五十首可撰出之由有仰事。仍又撰之。內府歌大略被入歟。自以樂之。極以祆々。今度予歌殊以不得。愍四首入了。存外也。撰了付右中弁進御所。左方於和歌所被撰。大臣殿御參。寂蓮候云々。秉燭之程退出。

撰歌合事
十五日。申時計有重催。參大臣殿。御共參院。少時出御和歌所。召寄人等。文臺二置之。但左方人本自員少之上。有家不參。仍以右方人雅經爲左講師。右方頭中將（通具）讀之。予賜紙硯。又書判評定詞。此役極難堪。評定之詞如流。不暫停滯。右方有端座。左方在輿。但評定間皆近候。惣以左方勝了。取硯復本座。次有當座題。月前雁。月前旅。月前戀。又詠之。一時計之後獻之。但隱作者書連。（於閑所書之。歌各付其所。）其歌付品帳。上。（上々。上中。上下。）中。（上々。中々。中下。）下。（下上。下々。下中。）如此。

大臣殿被進院五十首歌拜見事
九月廿六日。巳時計依召參大臣殿。五十首御歌。（此間又被進題。他人不入其事云々。）自院被忩仰。仍欲進。可見之由有仰。加愚眼返上。少々猶可有御案之由申之。自余殊勝如例。

上皇御熊野詣事
十月一日。熊野御幸御精進屋被始之。略之。

三日。日吉御幸。

給和歌題事
五日。石淸水御幸。入夜左中弁奉書。給題三首。明日於住江殿可有披露（講イ）云々。窮屈之間。沈思不叶。

住吉社和歌事
六日。次參詣住吉社。辰終御幸御奉幣。（例袍衣冠男候御幣。傳生絹袍衣冠男令申祝。兩人共給祿。）御經供養訖。里神樂。相撲。三番勝負。了入御々所。（住江殿。）即被講和歌。予依召勤仕講師。內府被書序代。詠吟了退下。今日詠歌。

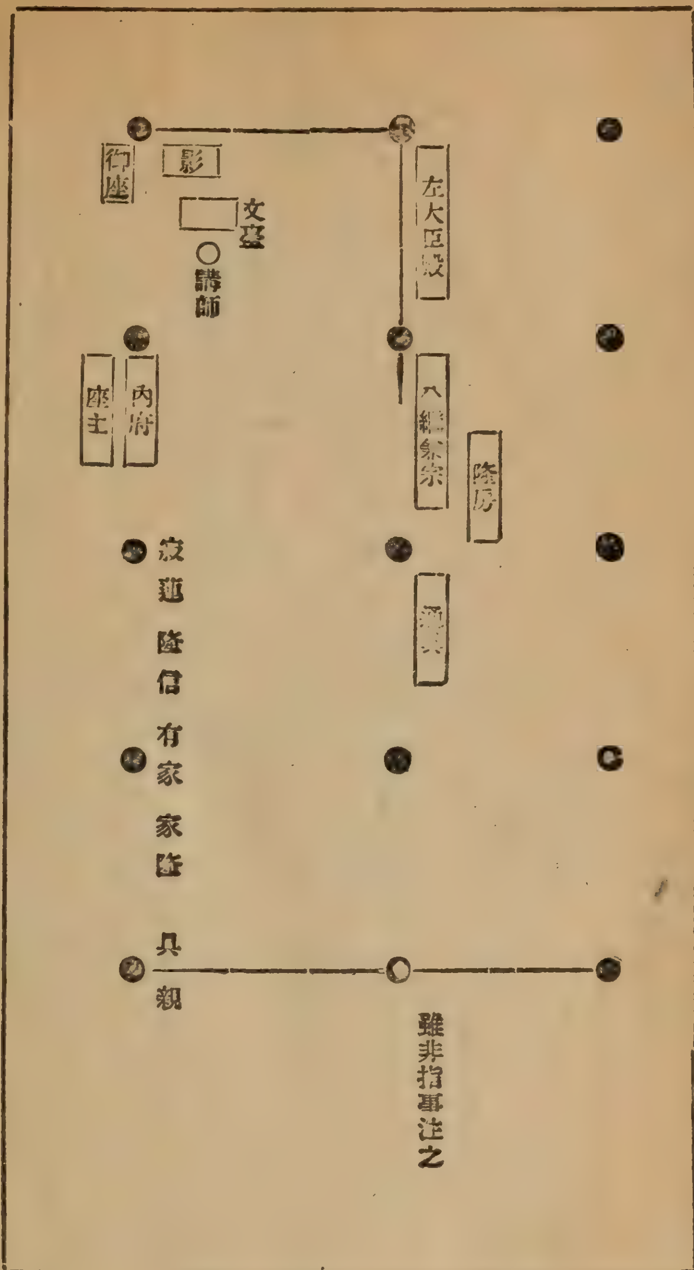
初冬侍　太上皇幸住吉社同詠三首應製和歌

正四位下行——

寄社祝
あひをひのひさしきいろもときはにてきみか世まもろすみよしの松
初冬霜
ふゆやきたるゆめはむすはぬさころもにかさねてうすきしろたへのそて
霜心已以拶錯。卒爾之間不及力。
暮松風
あはちしまかたをかなみのゆふまくれこゑふきをくるきしのまつかせ
御製祝言。(かくてなをかはらすまもれ世々をへてこのみちてらす住よしの神)
感歎之思難禁。定有神感歟。遇此時拝此社。一身之幸也。
七日。戌時計有召參上。被召入御前被講二首。忽有定被書直。題次第等爲先。如例讀上了。御製又殊勝。愚歌。
曉初雪
いろ〳〵のこのはのうへにちりそめてゆきはうつますしのゝめの道
山路月
そてのしものかけうちはらふみやまちもまたすゑ遠きゆふつく夜哉

希有〻。讀上了。人々詠吟。退出。内府(通親卿)。宰相中將(公經卿)。大貳(範光卿)。三位中將(通〻卿)。下官。定通。長房。通方。信綱家長。清範等也。
九日。秉燭以後。又着立烏帽子等。如一夜參上。小時被召入簾内。又依仰講師。事了退下。題深山紅葉。海邊冬月。愚詠。
こゑたてぬあらしもふかきこゝろあれやみ山のもみちみゆきまちけり
くもりなき濱のまさこにきみかよのかすさへみゆる冬の月影
十一日。晩景又有題。予書之持參。戌時計如例被召入。讀上了退出。羇中聞波。野徑月明。
うちもねすとまやに波のよるのこゑたれをも松の風ならねとも
一首本ニ無。
十三日。入夜給題。即詠之持參如付。披講之間參入。讀上了退出。參此王子。皈宿所。
河邊落葉
そめし秋をくれぬとたれかいわた河またなみこゆる山姫のそて
旅宿冬月
岩浪のひゝきはいそくたひのいほをしつかにすくる冬の月

影
十四日。午終時計御幸。（歩。）訖即給題。
　峯月照松
さしのほる君をちとせとみやまより松をそ月の色に出ける
　瀧月似雪
くもさゆるちさとのはまの月影はそらにしられてふらぬ白雪
十五日。午時許着發心門。宿南無房宅。此道之間。常不具筆硯。又有所思。未書一事。此門柱始書詩一首。門巽角柱。（閑所也。）
　慧日光前懺罪根。　大悲道上發心門。
　南山月下結縁力。　西刹雲中吊旅魂。
いりかたきみのりのかとはけふすきぬいまよりむつの道にかへすな
十一月三日。（新古今集事）左中弁奉書。上古以後和歌可撰進者。此事被仰所寄人云々。
同二年正月十三日。（和歌御会事）申時許參院。御向殿之間無人。仍入閑梨僧房言談。昏黒歸參。人々漸々參入。亥時計出御和歌所。内府祗候。長房朝臣召寄人。各着座。公卿在長押上如例。奥（御所同奥。狩御衣。）内府。冷泉中納言。（隆房。大宮宰相中將。（公經。）端。六條中納言。（公繼。）堀川中納言。兼宗。東帶。進退有揖。）大貳。（範光。）新宰相中將。通具。以上表。）殿上人在長押下。有家朝臣。予在奥。雅經。具親在端。具親遲々間。直可置和歌之由。内府被命。自座中准置之。（依命也。）自下﨟次第置之。有文臺圓座。置了召予參進。内府及天被取歌四五通。其後予取之置前。被目宰相（通具）。進寄座後重之。一々被置文臺。即讀上之。人名如例。各乍三首讀上。左兵衛尉藤原秀能。中原宗安。鴨長明。有馬助家長。左兵衛具親。左近權少將雅經。定家。有家朝臣。隆信朝臣。不參。有序。通具朝臣。右近中將源朝臣（三位中將通光卿）。（不參。有歌。）大貳（範光）藤原朝臣。左近中將藤原朝臣（公經卿）。權中納言藤原朝臣（兼宗卿）。權中納言藤原朝臣（隆房卿）。前中納言藤原朝臣（中納言 不參）。權大納言藤原朝臣（通親公）。（以上姓以下微音。）女歌三枚。（薄様。）次被重自歌。内のおほい。（下字マキラカシテ微音。）膏畢起退下。新宰相中將（通具）坐寄。取拂臣下歌。内府被置御製。宰相（通具）讀上了。詠吟之後。自下立各退出。
二月十日。（影御歌合事）秉燭已前參院。（歌午時計進之。）亥時計事始。入道殿（俊成）奥座。々主。入道殿。宰相中將。通具。）端。内府。長押下奥。隆信。予。雅經。具親。端。有家。家隆。寂蓮。雅經。有召講師奉仕。自余井長押候。座中勝負評定甚之。
三月廿二日。（三體和歌事）依召又參大臣殿。終日往反。秉燭之程。御共參院。今夜和歌六首。（其内分三躰可詠進之由有仰。極以難計得。）亥時計出御和歌所。有召參御前。依仰置和歌。又依仰讀上。（大臣殿令取進給。）應喚罷。長明。家隆。定家。寂蓮。座主。大臣殿。御


御座
影
文臺
講師
左大臣殿
内府
座主
隆房
寂蓮
隆信
有家
家隆
具親
雖非指事注之

製外六首。有家。雅經。有催不參。（所勞云々。）自余無催。今夜歌各宜。次有當座會。秀能加之。）暮春。又依仰讀上之。入御。退出。大ニフトキ歌（春。夏。）からひ。（ヤセスコキ由也。秋。冬。）艶躰。（戀。旅。）

影供歌合事

五月廿六日。早旦歸九条。（一身。）自大臣殿仰云。今日歌合夕方之由。夜前聞之。只今先可參者。仍參上。女院御方者仁王會御裝束。奉行能季朝臣云々。今日被詠改御歌事等被仰。中將殿參給。（仁王會料。）申時計退下。又改着尋常布衣歸參。日入之間。御共參鳥羽（于時頗秉燭。）城南寺。良久亥時計出御二棟。（取中障子。兩方座敷。）御座北第一。其東懸影居前物。掌灯。公卿以下依召參。左大臣殿。內府。座主。隆房。公繼。兼宗。通具朝臣。隆信。有家。予。家隆。寂蓮。具親。依仰通具朝臣勸盃影前。具親取瓶子。訖召予講師。內府讀師。（左大臣殿如此交衆內々大令痛給。殆無先蹤。雖見苦只隨仰之由被仰。家隆又着重服參上也。）如例讀上。三題。依衆議評定付勝持字。各成憚之間。甚久經時刻。三卷讀上了。又付作者讀上。了退下。即入御。人々競出。

（前頁圖原在此間今從便宜而已）

三體和歌更淸書事

今夜人々依仰去春三體和歌更淸書。件本依打入水損之故云々。予灯暗目不見之間。明日可書進之由。觸家長退出。依老眼疲也。

六月十一日。以長房朝臣。明日御狩之間各留守。慥可候之由被仰。

旅亭晚月明。單寢夏風淸。遠水茫々處。望鄉夢未成。

おもかけはわか身はなれすたちそひて宮この月にいまやねぬらん

寂蓮[illegible]去事

七月廿日。午時計參上。左中弁云。少輔入道（中務少輔俗名定長也）逝去之由者。（甘子イ）天王寺院主申內府云々。未聞及歟。聞之即退出。已依爲緦服身也。浮世無常雖不可驚。今聞之哀慟之思難禁。自幼少之昔久相馴。已及數十廻。況於和歌道者傍輩誰人乎。已以奇異之逸物也。今已歸泉。爲道可恨。於身可悲。家長云。除服之後更不可憚。早可參上者。可被除服。昏黑於水無瀨邊除服　語晴光門生男。）訖。

有家朝臣任大藏卿事

廿四日。除目。大藏卿有家自叙慮任之云々。和歌賞云々。幸運不及左右。生而遇此時。見和歌賞。獨遺身耻。雖顯宿運。猶思吾道名。慟哭而有餘。

影供御歌合事

八月廿日。秉燭以前參院。影供歌合也。（歌昨日獻之。江月聞鴈。松風似雨。依忍增戀。）自晝左大臣殿。前座主參給云々。此間所勞惣而不快之間。不參御共。秉燭以後出御。各着座。左大臣殿（後京極殿）。內大臣殿（通親公）。前座主（慈円）。前中納言。（隆房。表（直衣イ）。）大貳。三位中將（範光　通光）。予。具親。依仰持參杯置影前。具親瓶子。次依仰着講師座。內府讀師。（左大臣殿頻令讓給（二度）。）歌合三題。讀上了評定良久。次付作者又讀之。次當座題一首。關路曉霧。山家擣衣。各置了。又依仰讀上了退。即入御。人々退出。

水無瀨殿戀十五首歌合事俊成卿判事

九月十三日。巳時計參上。人々多着鴈衣。左大臣殿可有御早參

云々。午終許着布衣。頻被相待後御參。以遊女宿屋爲彼御休息所。時尅漸移。申始許御參云々。僧正御房先參給。次大臣殿。(御車。)有家資家御共令參弘御所給、入道殿早可參給之由有仰事。頻申其由。御參之後出御。披講十五首戀歌合。予如例讀之。有家候。雅經候。作者外内府被着座。漸及秉燭之後評定了。水路(明月記)被出當座題。小督灸治旁無御。題。(月前秋風。曉月鹿聲。小河秋月。)詠出訖。依仰又讀上之。又有折句。(十三夜。)詠出了又讀上之。又隱題。(みなせかは。)又詠出讀上了入御。人々退出。入道殿令出給。

反古裏
慶賀事

右久積鳳闕左仗之舊勞。適浴虎賁中郎之朝恩。自愛無極候之處、今預賀禮。殊抽感懷。

立昇るたつの心はおもひやれかひあるみよのわかのうらなみ

俳徊拝謁之次。恐々謹言。　後十月廿一日。左中將定家。

内裏近々燒亡事
十一月九日。夕相公入座。雜談之間。戌終許西方有火。不遠西洞院云々。仍馳參内。依不具着有衣騎馬參。主上御幸寄門御覽火、兼定衣冠祗候。火冷泉北洞院東(土御門)也。已三町之内也。仍帶胡籙取弓。事非火急。仍不昇堂上。但即火滅了。攝政殿(後京極)參給、依無益逃隱了。自左衞門陣方退出。雅平中將逐陳(衣冠)云。未申拜賀。今夜出仕如何。予云。頗於身有憚歟。於下官者去一日申了者。以前出仕頗似有憚。可退出歟之由猶示合。其條可有御心。但參入之恐。猶如職事。被觸可宜歟之由相示了。退出之間。清信少將布衣參入下車。光親衣冠參入。(予以後也。)此外人不見及。不昇殿上之間不相逢歟。今夜帶弓箭。頗似古儀。但火爲三町之内。尤可帶耳。仍不知他人之儀帶之。野矢也。而忽無其物。仍帶狩胡籙。頗無謂。且又依可然人不見也。猶帶野矢之由可披露也。每事不具之間如此。(直衣之人狩衣宜歟。)

建仁三年二月廿五日。依有召參歡喜光院。(中納言中將殿。)披見文車(庫イ)之間。青侍奔來。自院有召之由告之。騎馬馳參大内。御共殿上人北面。充滿春花門并議所之邊。御尋之後。經程之由各相示。仍自敷政宣仁門參東階方、中納言有家朝臣坐東階簀子。參其邊。此間御東階簀子。早可讀歌之由有仰事。不及沈思。各清書。家長。清範。宣綱。(以上北面、)長明。家俊。景賴。秀能在樹下。即進歌。召予。參上讀上。納言讀師。一反詠畢還御。御製。

あまつ風しはし吹とちよ花とみえ雪とちりまかふ雲の通路。

白甚雖見苦。騎馬馳皈休息。後聞。此花入御硯蓋。被奉殿下。有御御答。

御熊野詣之間撰状可相企由仰事
三月七日。巳時參御精進屋。家長云。撰歌此御熊野詣之間清書。還御宣前可進。當時雖散々申奉之由。退出之次。向家隆朝臣許。清談移漏歸。

撰歌被相企事
四月十一日。家長撰歌來廿日可進之由以書示送。此廿日計只見

歌送日夜。
（俊成卿九十賀屛風歌事）八月六日。夜深清範來書云。入道皇太后宮大夫於和歌所可賜九十賀。屛風歌可詠進者。此事入道殿深令謙退給。可否未思得事歟。

（歌所御テ川尻柄擬朽木被作文臺事）元久元年七月十六日 着下袴。巳時參殿。（後京極）午時御共參御所。（後鳥羽）未時計出御。各應召參入置歌了。依仰講師如例。なからの橋々柱（所朽殘云々。）木被作文臺。（是院御物也。今日始被出和歌所。）一座講了退下。即改着日來狩衣。次還御。自京極殿退下。

（撰歌部類始依山僧之訴延引事）廿二日。今日撰歌可被部類始。可參和歌所由。一昨日有催。仍參入。山僧訴又發。殿下令早參給云々。

（新古今部類事）廿七日。家長夜部歸京。依其告參和歌所。大理（通具）。大府卿（有家）。雅羽林（雅經）。家長會合。開歌箱部類。羽林（雅經）執筆。相構春上下如形終功。夕退下。家長勸盃酌瓜子。大理以下稱柿下影前。

（大理破子勸盃等事）廿八日。自途參和歌所如昨日 家隆朝臣參會。（雅經殊遲參。）大理被取寄横二合。（銘代々勅撰上下。）有破子瓜土器酒等。又有寒氷。大理自取刀被削氷。入興之甚。雖納涼之中。非無外人。稱堪能削之。以白布巾裹氷。左手扣之。皐陶之職頗輕々。各饗應食之。今日終夏部。七夕歌又書之。取箱退出。

（即於所歌合事）十一月十日。未時參殿。即御共參院。不經程出御。依召參和歌所。予清書。又勤仕講師。又付勝負字如形。書判詞。慈右筆注付之。四十五番評定了退。又三首題當座詠之。此間掌灯。隱作者被結番。持參之後。又依召參上讀之。付勝負。天氣殊快然。有入興之御氣色。通具。有家。保季。雅經。丹後。以別御教書被感仰云々。旬々捧之自愛。堪能歌仙得境之秋也。

（歌合可持參春日由有催輕服之事）十一日。明後日持歌合可參春日由有催。輕服日數之由申了。長房宰相奉行。

（撰歌切繼事）元久二年二月十九日。日入以後參院。（神泉御幸之後也。）家長。（行イ）秀能。宗宣。（宮内少輔。）在和歌所喚入。此日來撰歌書詞切繼殊被忩。尤可參由有御氣色。欲觸告之處。在遠所之由聞之。相待出京由。家長示之。每日可參云々。

（眞名序之事）廿一日。左大弁（親經）持參撰集序。今日奏覽了。可覽殿下由。新宰相奉之。猶被給 有被副事等云々。

（重服之身不入神祇部事）廿二日。今日終戀部。又終釋教部。雜部多之間。相待人數多時。神祇部取出之。予依憚身此部有恐之由示家長了。神歌甚多。又神歌之次第尤難測。雖一旦之沙汰。可備萬代之證據。暗列神御名字。恐無極。仍不交手。

（撰歌織直事）廿六日。巳時計參所。家隆朝臣參。織出雜下部。戀一二部今日又少々織直。人定處惡筆歟。戀部極可優。存外又多。仍忘憚直之間（原缺）日暮了。有家朝臣見所續出卷々。各退出。以家長仰事云。神祇部神次第を立は。熊野御列次有其恐。仍春部爲先。四季に可立者。神歌事惣依有事恐。寄事於身憚不知之。

（當世人歌數之事）三月二日。巳時參院。人々云。當世人歌不知食多少。先注出之可

經御覽。爲令增減也。以能書之人令書之。下官只見雜部三卷直詞等。（或人進歌依非分事多也。）又仰云。卷之始大器以故人證之。不可然。以定家々隆押小路女房等三人。（俊成卿女事也）各可立一卷始者。又繼直之。以家隆爲秋下部始。以女歌爲戀二始。以予歌爲戀第五始。依爲自專態所入末也。此仰尤爲面目。但如當時者連卅一字人末知者多入之。又昨今末生等及十首。予歌卅余。家隆二十余云々。今仰頗似撰人如何。夕退出。

（撰歌荒目六等進御所事）十九日。申時計家長持撰歌幷荒目六等。參彼御所了。

（御消息撰集竟宴先例不審事）廿日。別當（通具）消息云。新古今竟宴。凝風情可豫參由蒙催。此事如何。竟宴事先例不審。答竟宴事不存知。延喜古今。天曆後撰。皆見之所及。不見竟宴事。只所見日本紀竟宴計也。於其事者被講日本紀人別各得其人詠歌一首歟。只如講書之儀。今如承者不似此歌撰歟。極以不審者也。

（別當來消息竟宴）廿一日。竟宴事。大理（通具）重消息。竟宴事。昨日只凝一首風情可豫參云々。新相公奉行。公卿直衣。酉刻云々。或人云。新古今披露日。被講卷々始歌。可有御遊幷和歌會云々。此外全無才學者也。日本紀竟宴も何に見て候しやらんも忘却候し。打任ては竟宴何も得其卷其人。今度無題。極大事候歟。

（竟宴間事於殿下申承事　後京極）廿二日。巳時計參殿。今日有被開宇治寶藏事云々。仍大納言殿令向宇治給。仲資。知長（衣冠。）被遣。見參之次。竟宴之事昨日承之。不得其心之由申之。仰云。以長房被仰。廿七日以前淸書。（イ二無）予又假名序其以前可進。又可獻件日題者。申云。淸書事不可叶。假令其間可書出歟。假名序又更難出來。題事新古今被終功之由可宜歟。不可有題歟。若被待淸書序等者。暫可被延引。（近日依灸治不能出仕。）廿七日被遂行者。此兩事不可叶由申了者。此事更不得心。殿下不令知給。誰人計申事乎。又人云。廿七日竟宴詠歌止了。只讀上卷々初歌了後。可有御遊。其伶人皆可召新來。每事凡不得心。笙。（家方。）笛。（親兼卿。）琵琶。（親定。）箏。（經通。傳所作。）拍子。（親能卿同。）和琴。（有雅。）篳。（侍從盛兼。）

（以中、可被遂行竟宴事）廿三日。御淸書假名序等難出來。仍以此中書被遂竟宴之後。可有淸書。可被繼加序云々。此旨殊忽思召。定有事故歟。

（九條右大臣御歌不入事）廿四日。參殿下。天德入道右大臣（九條右丞相師輔公）殿御歌。此勅撰不見由申之。此事遺恨也。可書入之由可申也。午時計參所。殿下令申給旨。示付家長訖。

廿七日。殿御參之後。自神泉還御。々湯殿之後御寢。數剋之後令驚給。今夜於自身者不可詠歌由被仰合。更不可然。尤可有御製之由。殿下令申給。其後歌御案云々。二首被奏見合。一首令計申給。御淸書了出御。丑剋歟。於弘御所有此事。（例和歌所北。）元三御藥之時出御所也。北儲御座。（二帖。東西行。）其南二行敷帖。（南北行。）對座爲公卿座。北西有掩御簾。殷富門院。（修明）東宮御覽。殿下。（良經公）前太政大臣。（賴實公）（各冠直衣。）先候座。良久出御。家長有御前緣。奉仰召左衞門。（通光卿）右衞門。（通具）隆衡。經家。（束帶。）參上着座。相

國傳仰。召家長召有家。々々參上文臺下。豫文臺切灯臺儲之。新古今集在文臺上。讀序。通具卿參講師之後詠之。春部始四五首詠了。講師退出。次歌人次第置歌。兵衞佐具親以上。秀能。清範。家長。歌付人令置之。少將忠定。宮內少輔宗宣。（々々清範夜前臨期入之。）少將雅經。左衞門權佐親房。上總家隆朝臣。前兵衞佐家衡々々。前右馬保季々々。左中將經通々々。大藏卿有家々々。公卿見上。殿下不起座令置給。次召家隆朝臣。參上講師。有家々々依仰參講師後詠吟。了歌人退下。（兩度讀師前太政大臣。）次伶人着座。殿上五位置御遊具。拍子隆仲朝臣。比巴右大弁。箏經通々々。琴隆雅。笛親兼卿。篳篥。笙隆衡卿。御遊畢入御。人々退出云々。抑此事何故被行事乎。非先例。卒爾之間每事不調。歌人又非歌人。其撰不審。

廿八日。家長示可參之由。即參所。竟宴歌持來書取之。勅撰猶可見之由有仰事。仍少々引見。賀部子日歌清正經信卿歌相似。仍加夾算。又哀傷部自或所撰進。和泉式部御返事。上東門院御歌。周防內侍歌相似。此二首令奏。仰經信子日可止。哀部二首不可除。相並可入。

廿九日。參殿下。（後京極）僧正御房參給。撰歌之間之事頻被召問。又假名序御草賜見之。殊勝云々。尤可被念進覽由計申給。愚意又同。假名序。云古云今殊寡常難有事歟。此文章眞實不可思議無比類者也。終日在御前。夕家長持參新古今和歌集。先經御覽。訛謬等可被直之由申之。信定取之持參。兩三度有被尋仰事等。又相副狼藉一六進上。家長退出。

（裏書）此集序被載撰者五人之名。予未復任。爲後代無其道理。此日以前可復任之由雖申。或無日次。或無上卿。遂不被行。而過今日了。近代事只有一旦之興。不及始末之沙汰。私力不及事歟。被書官位了。

（新古今又被取破事）四月十五日。午時參院。新古今又被取破。自殿下令申給之故云々。散々切繼。今日不終功。或入或出。又置替其所。予歌三首被出。四首被入之。今度歌皆存尋常由歟也。爲悅夕退出。

（大僧正御房之長歌依仰返進事）廿日。巳時參上。小時家長持參長歌。（大僧正（慈圓）詠進給云々。）此歌可和進之由有仰事。長歌曾未詠之。卒爾勿論也。但出御以後退出。即終篇。如文不加點。如形淸書又持參。付家長內々經御覽。可直者可直進之由申之。還來云。神妙也者。如形事早速還似不謐。爲道雖不當。依沉思不得風情。依早速頗可表堪能之由所相勵也。不被返下。以之爲悅。又退出。

廿九日。參殿下。大僧正參給。頭弁同候御所。終日雜談。被取出御作賦二首。羇旅一首。殷高宗得傅說。頭弁又作隱逸賦取出之。此次又可被合詩歌之由被議定。出題歌人可催之由。蒙仰退出。此事頗無益事也。以書狀少々觸送了。題水郷春望。山路秋行。大（慈圓）僧正御房。宰相中將殿。（良平卿）有家朝臣。下官。保季々々。家隆々々。雅經。具親。讃岐。丹後。詩人。御作。（後京極殿）大納言殿。中納言殿。（資實。）左大（親經）

弁。長兼―。爲長―。宗業―。成信。孝範。信定。
五月三日。詩歌合事漸叙聞。可詠試之由。有御氣色之由。家長語之。仍內々申此由。家長又有所望氣。同申之。
四日。早且參上。以殿下御書內々令見家長。御製事也。即持參御所。還出云。若期日延引者爭不詠哉之由有仰事。即申此由了。又家長事昨日同有御許。即書送題了。又大僧正御歌一首。可書入新古今之由有仰事。仍入之。出御之次仰事云。欲合親經。必二番可負。依爲師匠也者。
詩歌合延引事於院可被合事
十日。家長朝臣來臨。殿下詩歌合於院御所可被合之處。詩於御所未被講。仍被忌五月。延引了云々。
十二日。詩歌合之事。大略被結番。予可爲御結之由雖被仰。長兼先度合家隆。今度不可然之由申云々。僧正御房又可合資實卿之由御望云々。仍家隆可合御作之由申了。有御許。予憖合長兼。今度歌殊不得風情。定見苦歟。
新古今可被出歌多事
壬七月廿五日。參殿。仰云。新古今猶可被出歌多云々。仍被書出。
新古今故殿御押紙事
建永元年七月十九日。自院有召。(新古今料云々。清範奉。)即馳參。與大府卿(有家)被召云々。彼人不參。大雷電之後。淸範出來。下新古今。五卷有之。依有故殿(後京極殿)御押紙。可見此事者。披見。
賀部。(源卿撰。不審事等。)
一品良子內親王家歌合後宴歌。(土御門右大臣。)
押紙。貽不審。可尋沙汰。件歌合祐子內親王家也。(是源卿撰也。時代人名勿論者也。)
哀傷部。
二位かくれ侍て新少將かもとにつかはしける。知足院入道前太政大臣。(同人撰。)
押紙。二位荒涼也。此事暗難知。問外記可左右歟由申。
戀部。
西行歌二首。一定西行歟云々。此事有不審者。可止歟由申之。
雜部。
伊勢大輔正光中將之時贈答。
押紙。伊勢大輔正光中將時如何。上東門院入內以後參云々。是又源卿撰。可隨勅定之由申之。
廿日。昨日西行歌二首被出了。其次公經卿。又宰相中將(良平。)歌被出了。予今朝問師重。即勘送。法性寺殿母儀。北政所。從一(土御門右大臣師房公女)位源師子。仍書直之。正光卿中將に侍りける。可止之由被仰下。此歌伊勢大輔集に不入僻事歟。又祐子內親王書直了。凡此卿撰歌之詞散々。隨見及雖直。見落事如此。
新古今序中被加夏以御製事
建永二年(承元元)三月十九日。沐浴。午時計有召之由。淸範示之。未時扶病參上。給御製三首拜見。此事新古今序以集中歌心被載其部段。件歌皆以上古作者歌用之。其中夏はつまこひする神なび山の郭公と有。件歌赤人歌にて入後撰之由。去秋宮內卿見出。依

作者替不覺悟也。此事告下官令奏聞。其時議定可改序歟。又雖載序可出此歌歟。去年事不切。此歌予申。於序更不可被改一字。又被載序歟。夏部計無之者。尤可遺不審。撰集之時撰者或引直古歌少々。又自詠稱讀人不知入之 定例也。案此事。神なひのつまこひの郭公の歌。新有御詠。被入御製第一之儀也。此事有勅許。去比予家隆又可詠進之由有御事。非御製者不可然由重申之。必不可用。只爲御覽合之由被仰。仍詠進。各異樣三首。今日被下御製。殊勝云々。其內一首猶殊宜由。以清範奏聞。仰云。然者早可切入。即召經師切繼之。出本歌入新御製。（讀人不知と替。）此次又依仰少々出御製了。

（障子歌改事）十月廿四日。秀能語云。御障子歌皆被替了。兼日沙汰無性體。如反掌。萬事如此。

（新古今歌或入或出事）十一月八日。參上。依仰又切新古今。（出入如反掌。）以切繼爲事。於身無一分面目。近日和歌沙汰又驚耳目。上手多出來歟。如除目任人。

建曆元年十一月四日。住吉經國來談之次。當社東遊歌可詠進由。日來云付之事重示之。仍詠之。

住吉社東遊和歌

從三位行侍從藤原朝臣――

住よしの松かねあらふしきなみにいのるみかけはちよもかはらし

（家隆朝臣消息付殿事）建曆二。五。九。入夜宮內（家隆）卿消息云。只今被仰昇殿。抃悅之至。不知所謝云々。聞此事。道之面目。世之善政也。可謂幽玄。殊感悅。夜前遇清範朝臣。粗談此事。愚意已符合。尤有興者也。其次云。仰云。水鄉詠海事。倩案之。不可然。詩雖兼作。歌猶可分別歟云々。日來愚意所存也。殊相叶本意者也。

七月廿三日。秉燭以前着直衣參內大臣殿（光明峯寺殿）。（一條。）少將（教家）在車。見參次仰云。故殿（後京極殿）御次第并入道殿（後法性寺殿）御記云。公卿起座。進寄讀和歌非也。公宴外公卿不起座。講師進後座寄之。次直授讀師也者。此事自文治每度如此。付此儀者可用此說歟。申云。文治以後有此事者。被改旁宜歟。被仰人々。尤可被用此儀給。御歌見無其難。申其由。此間泰敏季忠不得心。役人忽闕如。有長取寄冠可勤之由。事遲々甚不便。人々參會。亥時計主人（內大臣殿）出御。兼立切灯臺。依御氣色各着座。八人。（皆直衣。）資實。長兼。有家。賴範。爲長。（端。）公定。在高。予。（奥。）次置文臺。今一人置圓座。次次第置詩。先序者。次地下。次殿上人。但信定朝臣在殿上人中。（四位少納言院殿上人。舊雲客之故也。）詩置了召講師。大內記敦倫參進。（資實卿）師取詩召寄人々。公卿次第居寄。爲長卿立下長押。坐講師後。公輔。孝範等在其邊。知長在讀師後。（長押下。）重詩。此間公卿各授詩。或取傳。次々第講詩。此間忠明朝臣參入。奉行兼隆取其詩授知長。（內大臣殿）忠明朝臣坐公卿座末長押下廣庇。詩講了讀師取下其詩。此間主人取出詩。（御懷中也。）頗披覽指遣。讀師取之。披置

講儀同。但數返詠吟。發句落句共有頌聲。讀了講師退。詠了公卿復本座。此間依御氣色爲長卿加奥末。召着忠明朝臣座末。(端。衣冠。)次々第置和歌。(今夜文人皆悉詠歌。永久例也。)次各議定。召右少弁長資爲講師。着圓座揖。人々又居寄。在高。賴範不進。爲長卿依人々催又座講師後。詠序了。即立復本座。雅經朝臣詩忠明朝臣在講師後詠吟。夜深人疲。講師如果願。事了各復座。次賴範出朗詠。(佳辰令月。)在高。爲長卿助音。今夜非成業人無朗詠。依無其人也。二返又諷詠。事了自下立座各退出。弁官持笏膝行。置笏置詩。自餘人不取笏不膝行。講師長資有揖。置詩歌間無揖。爲家置詩。誤左廻置歌右廻。失也。經高兩度左廻。有所存歟。自餘皆右廻。還家聞曉鐘。暑氣殊甚。

有心無心連歌事

十二月十日。又今日院於馬場殿有鵯(鷄カ)合負態。左金吾(忠信卿)經營。其風流只金銀錦繡盡善盡美云々。去春過差之制如何。相國自其所被退皈。(其人數之內又有龍蹄等。相國以下獻之。)次除目評定。戌終於殿上有若宮御元服定云々。其事畢又出御馬場殿。各應召參入。無心宗之輩在東。有心宗在西云々。(是御所也。)先立隔屛風。各宗連歌折紙一枚。訖撤屛風。寄合賦魚鳥云々。其物不覺悟。太不堪。東。御所。定通卿。予。家隆朝臣。雅經朝臣。賴資。(執筆。)家長撤屛風後。淸範書之。西。光親卿。顯俊卿。宗行朝臣。定高朝臣。重輔。(未至。被召加。)仲家。家綱。淸範。(執筆。)予二尅入御。折紙六枚。御句如流。天氣太快然。即退出。

又有心無心連歌事

十二月十八日。早旦家長奉書。今夜可有有心無心連歌。可參云々。陰明門院御佛名兼領狀。仍此由示奉行資經。秉燭以後着布衣參院。夜深月昇。出御馬場殿云々。依召參上如一夜。但昨日源大納言結構(什歌)御事積數多紙。仰云。有例連歌。隨句員數可令取紙云々。仍有催。有心在西。源大納言(通具卿)。同中納言(定通卿)。予。雅經朝臣。家隆朝臣。賴資。家長。無心在東。兄弟兩卿(光親。[illegible]明)。兩弁(宗行。宣[illegible])。家綱。重輔。仲家。淸範。上北面輩二人在無心方。五位殿上人。成實。基俊。在有心方。每人書一句取紙一帖。置其前賦黑白云々。百句了。仰云。紙不盡。又々可會合。又算紙數。御所(後鳥羽)十四帖。予十一帖。雅經九帖。光親卿八帖。家長七帖。以下云々。各取紙可出云々。十一帖甚重。公卿所持還有恥歟。次退出。置緣着沓退出。北面取之給從者云々。雅經中將同乘皈家。

廿五日。欲參女院御佛名之間。使者奔來云。可有連歌。可參。仍布衣馳參。(甚雨。)實氏宰相中將穢限過了初參。可候連歌座由被仰云々。依甚雨先相儲馬場殿。小時出御如例儀。始賦木名人名。人名トハ當世人名字隱題用也。不可嫌尊卑云々。此中有隆忠名。雖戲事丞相名如何。太不便。如一夜每句置紙。(今夜檀紙。)百句了入御。予十六句。御句十九。定高朝臣十一。以之爲多。定通卿女院佛名了追參加。揖如例。光親卿又束帶。爲佛名參入。不交其事候此座。顯俊朝臣。予等布衣祗候。事了予即退出。有心御句。兩卿。予。賴資。家長也。

仁和寺宮月次花鳥歌事
建保二年二月卅日。午時計參仁和寺御室。先日被仰付和歌。如形終篇（月次花鳥歌廿四首。）持參。御浴之間不見參。以人數度蒙仰。愚歌詠進。殊爲悅之由被仰。則退出。

三月十三日。入夜藏人判官康光俄入來。周章相逢。傳勅云。寛弘以往歌仙三十人可撰進者。凡如此撰歌撰人事。愚鈍之性更難弁知。縱雖所存。自由決之條。冥恐難遁事歟。只書出四五十人進上イ無了。

八月廿七日。申時計依淸範朝臣告參上。未及昏黑。於出御馬場殿。家隆朝臣兼候北面方。依召自東面參入。頻應召參長押下。先是仰云。今度歌殊宜。書拔之。或十番。或廿余番。別有結番。同可讀上。前後如何。予申云。先被讀上書拔。後可被披講大卷歟。大卷定移時尅之後。更被講撰歌者。頗有繚墮歟。衆議皆同。又叶叡慮。仍先被講十番。（是爲叶御意歌計畧也。殊爲當座之要。）其歌誠宜。各賞翫。次被講廿六番。（十番。又被結他歌也。）次被講大卷。八十番。（秀逸三度結番。）各評定。此結番偏決叡慮。人不見之。神筆御本之間。無相伺人。結番歌太同科也。仍大畧被定持。餘興更不盡。天氣快然。明日連歌事等被仰定。戌尅計退出。

廿八日。御連歌太、賦遠ゝ事戌終計參馬場殿。出御訖着座。大相國大炊御門被儲懸物。太過差也。（積楠々物。其傍積紙。）又以平裹置。毎人數其前令置物。不落料云々。但賦物太以難。諸人不得風情。上句反讀。（假令松妻雜界之體也。）下句三字中略云々。假令ツマキ月。マカキマキ之體也。兩句共難得。百十余句之間。事訖各退出。各裹之取之。出之體頗見苦。但上卿以下皆如斯。寧獨醒乎。還御以後。於庭上名謁。訖退出。於門邊聞曉鐘。所賜護袋二。（有緒。）紫染衣。（小袖云々。）一段綿三帖。（富士綿ト云。如雪。）色革二枚。紙三帖也。（已上十一句歟。）

廿九日。申時計出御馬場殿。如一昨日。有召仰云。一番歌更加五番結之。可定申勝負。中將又讀上。大宮大納言公經卿被候。粗申所存了退出。頻預問答。太以面目。次御笠懸。此間又依仰兩人公經卿家衡見物。及昏黑事了。入御本御所之後退出。已候龍顏。老幸何事過是乎。即所申頻有御尋參了。件十五番早兩人書執可披露之由有仰事。即是神筆也。退出宿所。猶以有恐。仍淸範寫可下之由。於御前申之了。即書之授之。

十月十一日。日サイ入以前着行幸裝束。參龍口殿。藏人淸定持來檀紙。此御所景氣。無題三首歌可詠進之由仰之。即求硯書之。卒爾不得風情。

白河の紅葉の錦立歸是も跡ある千世の舊路
なゝそちをめくりし月のためしとて千世まて照せ明けき世
を
神無月なへて時雨る紅葉はも猶山近きいろはみえけり

十六日。內裏御會不參和歌密詠進事今夜內裏被講松上雪。可豫參之由有催。遠路窮屈。前後不覺。內々達女房了。可進歌之由有勅許。其歌闕如。

此みゆき松の白ゆふ枝ことに千とせをかけて神そまもらん

名所百首哥 建保三年九月十日。(丁巳。)自內名所百首可注進由蒙綸言。仍書進之。本歌有名歌之體所々也。

十一日。藏人廣光來。百首和歌事傳綸言。申畏奉由。

十三日。酉時許參中宮。(着直衣也。)秉燭參相門內大臣亭也見參。每人百首依難講說者。題卅首許部類人々歌。可被講之由。先日有其定。依爲今夜之儀。先可被讀上秋由。一昨日申定了。隨信定朝臣淸書遲々。仍先被講秋。人々參集之後出御。非式法之儀。公卿殿上人圓座。御座橫座前立灯。二行敷疊。各可群居之由被仰。予。實隆宮內卿。丹波前司知家朝臣。少納言信定朝臣(追參。)有座。以信實爲講師。業淸。有長參弘庇詠吟之。一卷書連。作者讀上之。(如本名者。)書樣。內大臣峯殿ゝ家公權大納言良ゝ卿。宰相中將實氏卿。侍從宰相ゝ家。從三位。被書能季卿名。慈圓僧正御房御歌云々。)家隆朝臣。知家朝臣。信定朝臣。家長。行能。業淸。有長。信貞。光家。有季。入道大藏卿。獻詞。越前。講之間太久。讀一卷了。又講春部間。曉鐘已報。止詠歌只讀上。次戀歌少々拔出可讀上之由。被仰弘庇預。(講師退後也。)峯殿御詠幷予。宮內卿。越前。戀一兩。取此事人々響應。以之擋說。於今者依有事煩。漸可披露之由被定。雞鳴月未入退出。老後數夜病競發。太難堪。

感詠　袂をハみしかまの市に尋ても逢にし人は命成とも

名所百首先五十首ゝ進事 廿三日。名所歌。(先五十首。)以少將ゝ家令淸書。進上禁裏了。愚詠進上事。天氣快然。人々對捍無興之處。詠進之上。早速悅思食之由有仰事。

人々百首ゝ合事忠實 廿四日。左中將。範宗讚岐國司。前宮內。(行能。)前丹波。(知家朝臣。)藏人判官康光。民家各送五十首歌。雖似人望。老眼之苦耳。

廿五日。入夜少將自內退出。持來名所五十首歌。有可撰進仰。短慮迷而不知所爲。

五十首ゝ加點返上禁裏事 廿日。五十首歌。少々加點。返上禁裏了。

院百首被仰出事 廿九日。淸範朝臣奉書。給百首題。年內可詠進云々。追々三百首。非得風情哉。太以難堪。

百首可急進由仰事 十月廿四日。藏人判官康光爲中使扣蔀戶。扶病承綸言。夕陪參百首今日可進之由仰之。猶不構出。明日可進由申了。

名所百首頻被召事 廿五日。自禁裏頻被召歌。先日給題。多改未承此由。近習懃徃返之間。外人不告之。其身閉口之間不聞及。太難堪。今日更詠改間。牢籠力不及申。

名所百首進內裏事 廿六日。未時書出百首。(先五十首。更可書出之。)付少將內侍進。

宮々御參ゝ書歌可ゝ進由二品消息事 十二月六日。二品御消息云。明日宮々御參。(彼狀如此。)可被遣和歌。誰人可詠進哉之由。申未無湘殿之處。可被詠進由被仰下。可存其由者。畏奉了。如此事先例上﨟多奉之歟。頗似過分而已。左右可隨御定由申之。祝言雖一首。無難詠出之條。極以可畏事也。彌增沈思之辛勞耳。聞見事忘却。入宮立后之間歌。尋中內

（兼實）大臣殿了。雖廻愚案。卒爾風情不尋常。仍書二首。重汀湯付淸範朝臣。可伺披露由示之。

くれぬまのけふのそらにそしられぬるまつは久しき千世のためしと

まつ程も久しきけふの夕くれは契るやちよのはしめなりけり

（雑事之歌御覽事）七日。卯時夜前淸範朝臣返事到來。其狀云。御詠經御覽候之處。端御歌もの〳〵しくて殊宜候。可被用之由。內々御氣色所候也。淸範謹言。

夜前進覽之後。重有思出事。くれぬまのけふ。古今貫之歌。七字頗不快。仍當時之詞雖劣改之也。後日可申此由。

くれかたきけふのそらにそしられぬるまつは久しき千世のためしと

書高檀紙二枚加禮紙。以二枚如立文裹之。依有存旨用此字。

俱禮加多喜計布野所羅
仁所志良禮奴留萬津
者比佐志喜千世能田
日志登

午時束帶參彼宮。（土御門北。堀河東。新所。重門高閣。翠簾白砂鷺月。）付前右少弁親房朝臣（衣冠候。）進入之。女房有會釋返事。（故攝政殿（後京）女房。能保卿娘也。中宮御母儀令沒給後參此宮。號五條局。弁內侍腹也。）自花山院（入道前右府。）遠江權守定綱相具御帳參入云々。今夜參入之儀。公卿扈從。殿上人前駈。御車可被寄南階云々。保延依女院御所寄對。十九日露顯。以西二棟爲彼御方云々。

（在記奧）和琴之長六尺。（鐵尺。頭弘七寸。下五寸五分。）琴。（長六尺三寸。）

（禁裏御歌合事）建保三年八月十五日。少將自內出。今夕和歌內府參給。御製有（後鳥羽）院御合點之內。又所下給也。申旨不背御氣色。秉燭已後參內。（束帶。）陣中不取笠。參入以後又甚雨。小時出御。以前可參之由康光仰之。仍與忠定範宗朝臣先參候。即出御。被仰可候長押上由。九條大納言殿則參入給。仰云。相待內府參之間。可有當座歌。可獻題者。愁申之。（以詞也。）禁庭虫。雨中戀。即各詠之。無程被講。宰相中將。（經通。）忠定々々。範宗々々。範基々々。重長々々。康光。此間內府所勞由令申給。仍被講本三首。但結番云々。被處判者歟。大略定申。光家歌太尾籠。赦面無極。（此歌不見合勿論事也。）次讀作者。御製太以優美。內府御歌又尤異常。心中恐思子夜凌雨退出。

十一日。（一作日歌合加判詞事）一昨日歌合。可加判詞之由。依仰書進之。

（禁裏御連歌事并歌合事）八月廿一日　日入以後參內。參鬼間。小時頭弁參入。又右武衛參。此間治部重長來召予。參御前。俄而召人々（各イ）。（光親卿）參入始連歌。（賦人名革。草イ）一兩句之間。雅經朝臣參入。按察可參由女房申之。

忽抑連歌。(五十句後。)被待彼參之間。有狂歌合。(兩方各詠各體。)評定了按察參。(夜半歟。)改賦物。(魚河名。)又九十句訖各退出。已曉鐘也。予。雅經朝臣。(直衣。)範宗々。行能。康光。(皆北座。)右武衛。(衣冠。上結。)定高々。(同上。)重長。棟基。成長。(皆上結。予獨把笏帶劍。太非時儀。)雅淸々(直衣。)執筆書之。

建保(仙洞首詠進事)年正月廿八日。淸書仙洞百首。(來月五日以前可進之由。一昨日被仰。)雖沉思不可有秀逸。仍所忩進也。人々皆進餘剩云々。愚詠僅滿卒外。無可相副物。

建保四年十一月一日。日入之程參内。依宅一八和歌題也。候小板敷之間出御。下于方。依召參杏脫。又依仰昇長押。頭弁同候。忝蒙綸言。此間頻資持參女院御書云々。入御。即給御返事。猶候殿上。秉燭已後右府令參給之間入御。頭弁披去夜詩。(密儀御作文。但左右府已下獻詩給。)有御製。題松上望新雪。先點高標天半冷。未覃低葉地猶乾。得題之躰太以神妙。頭弁云。今日松容之次。御作之體已以如此。何中殿御會不候乎由。伺院御氣色。太神妙。明春早可遂行由有仰事云々。尤可然事歟。此次予等申右大臣殿云。延久治承有中殿初度之儀。延喜天曆依有内宴還無此事承曆以後又有和歌儀。案彼是。至于公宴。雖未置詩歌。今度同日被講詩歌。更無其難歟。是依兩方共此事尤希無歟。今被始行之。即可爲萬代佳例。還可稱延久治承歟。相府之。尤可然。猶以事次可伺松容由被仰頭弁。小時宰相中將(經通。)參入之後。藏人佐來仰召由。即參上。(如夏歌合。)右府令候御前給。予。宰相中將參着長押上。殿上人自下次第置歌。(資隆。信實。行能。雅經朝臣。保季朝臣。範宗朝臣。)次經通卿追置之復座。予參進置歌之間。可進候之由有仰事。仍候講師圓座北。次召雅經朝臣。參進着圓座。(講師。)右府給歌。召保季朝臣令重之。次第被置。經通卿已下近參講之。康光追持參歌。取續奉讀師。三首一度可講之由被仰。及公卿之間。家衡卿參入。(有輕服事。重被仰遲參。)進寄披講了。各退下。右大臣殿御共退出。仰云。今夜以後可在一條。凡進歌之輩。右大臣殿。大納言公經。通具。(夜部詩座參入云々。)中納言。(忠信。重服人不候御神事月歟。)參議。(參二人。)實氏卿有催不進。)三位。(家良。家衡。家隆。)殿上人參之外。忠定朝臣。光家。歌體不可說。太不便。

十二月十二日。今日付一首愚詠於山城守。

雪乃内の本の松容色萬佐禮加多陪乃木々波花ら佐久奈里

傍官昇進不被競望。僅申松爵之一階之由。先日示付之。稱無次由。仍加送此歌。爲之何松容也。

十三日。午時自山城送書云。今朝御湯殿之次具申入了。愚歌有御詠吟。置自賞以舊賞加階。有其例哉之由有仰事。々體似宜者。且以感悅。舊賞之餘執。過加階之勸功。

私勘云。
定家卿
建保二年二月十一日。任參議。（從三位。元侍從。即日賜兼字。）同三年正月十三日。兼伊與權守。同四年正月十三日。兼治部卿。三月廿八日。辭侍從。十二月十四日。叙正三位。（俊忠卿去天永二年春日行幸行事賞。）
本云
以後成恩寺禪閤殿下令書拔給御自筆之本所書寫之也。

本云
此寫本不審繁多之間。或推以改之。或模寫字形。今求得資直卿筆之本直之。異本之由。諸々猶非無不審者也。
右明月記書拔一册園氏ヨリ求之而寫畢于時延享五戊辰天
仲春旬　花押

（右塙氏初以明月記抄出爲卷第四百七十後以現在和歌目錄及和歌合略目錄兩書改之印行既畢今從舊本以圖書寮本及明月記加比校併收附卷末）

續群書類從卷第四百七十一

連歌部一

竹林抄

夫連歌は日本武のみことのつくはのことの葉にはしまりて。花山の法皇の殘れるを拾ふ和歌集にいれられしより此かた。其後。俊頼も此道を翫ひ。定家。家隆もかの風をしたふによりて。菅原の世々につたはりて。柳の糸のより〳〵にたえすそありける。しかはあれと大和歌の一の體として。勅撰の一の集にあみなされたる事は。其跡なかりしを。近き世になにかしのおとゝの菟玖波集をゑらはれて。おほやけことになすらふるみことのりをくたされしによりて。勅撰の和歌にかたをならへ。天下のもてあそひものとなれりけり。かゝりけれはおろかなる翁。かうはしき跡をしたひ。のこれる言の葉をひろひて一萬句をゑらひ。二十卷となして新玉集となつけ。つくはの跡にまかせて。綸命を申うくへきはかりになして。しはらく桃の花の坊の文庫におさめをきし。折ふしはからさるに應仁の大なるみたれいてきて。蓬か宿は燒野の原となりぬるのみならす。そのあたりのしらなみたちこそりて。七百合はかりのしみの栖をひきちらし。おほちをほくとなせるときこえし。かゝりけれは新玉のひかりもいつちへか消えうせけん。あさちか原の露のみそふかゝりける。爰に宗祇といへるひとりの世捨人ありけり。七人の連歌をあつめて十卷となして。竹林抄と名つけけり。おもひよれる處なさけあるに似たれは。則かれかのそむにまかせて。いさゝか筆の跡にあらはせり。つたなきおきな今しはらくも老の浪にたゝよひて。いのちの露もなからふるものならは。續菟玖波集をあつめん事をおもへり。しからは彼竹林も諸家のうち聞になすらへて。さらにゑらひいれんといへるところしかならし。

竹林抄巻第一

春連歌

ふりにし年の高闕の宮といふ句に
尾上より春たつ山や霞むらん　宗砌法師
春の御前のしるき百敷
ますかゝみ見るを氷のためしにて　平賢盛
かへり来る都の人の家〳〵に
年をむかへて松たてる門　権大僧都心敬
まとをになるはかはるそなたか
春のくるひかしの山のかすむ日に　法印行助
あかぬこゝろそ花にそひゆく
山かくす霞のひまのたえ〳〵に　法眼専順
草の原なる若菜をそつむ
片岡のあしたの霞さむき日に　智蘊法師
にほひすくなくさける初花
霞けり雨は夜の間の朝日影　能阿法師
うらかおもてかころもともなし
しのゝめのあしたの山のうす霞　宗砌
あたゝかなれや春の里人
衣きぬ山こそなけれ朝かすみ　賢盛

ところ〳〵にみゆる人里
立こむる霞のうちに日は出て　宗砌
わかふるさとゝ鳥のさへつる
たかうへし木末の野邊に霞らん　心敬
こしかた遠し船の行末
和田の原山は霞の浪まにて　専順
こゝろひとつはのとけくもなし
朝ぼらけ霞にうかふあま小舟　心敬
風そうきあたら櫻の花の陰
船をいたせはかすむいそやま　宗砌
こもれるむろのふかき木の本
船よはふともの浦わの夕霞
花はなと根にもとまらすちりぬらん
なみにかすめるひらの山かせ　賢盛
木の下とをく躑躅咲ころ
松たてるすへやかすみのみほの浦
浪風も江の南こそ長閑なれ
難波にかすむ紀路の遠山　心敬
いまもたもとを誰かほすらん
日影さすさほの川原の朝かすみ　智蘊
山かけ遠くもえいつるころ

里人の汀にあそふなつみ川　専順
木のめも色にいつる梅かえ
鶯の聲のわかなを今朝つみて　宗砌
風の音きくはつ春の空
子日せしたか世の小松ふりぬらん　心敬
かすみのうへの高間の山
あゆみ行野路のしの原雪消て　賢盛
遠嶋松のかすむあけほの
きえやらぬあはちの山を雪にみて
日影ほのめく雨の朝風
山はけふ雲井にかすむ雪消て　宗砌
おくまて山のあさくなる頃
谷をとち峯をうつみし雪とけて
その數〳〵のしろき歌人
玉しきのあられはしりはあけはてゝ　賢盛
春のあらしの山風そふく
せきかくる大井のつらゝとけやらて
はなたのおひは又もむすはし
いし川のあさき氷ははやとけて
なみたや瀧津こゝろとはなる
つらゝゐし谷の鶯こゑとけて　宗砌

梅か香きよき雪の下水
月になく谷のうくひす今朝出て　能阿
ちる花の香を袖にうつさん
梅のさく谷の下水くみなれて　行助
へたつる花のわけほのゝ雲
梅そさく月の桂もにほふらん　能阿
夜な〳〵ねはや花の咲かけ
梅か香のかすめる月を袖にみて
花をは手をりしきみをそつむ
梅かほるあかつき毎に起いてゝ　行助
はつ鶯のきゝあへぬころ
おき出よとはかり梅の匂ふ夜に　賢盛
宿からさひし鶯のこゑ
淺ちふに一本たてる梅さきて　専順
やせぬるかけを哀れとそ見る
道のへに半くちたる梅さきて　心敬
むかひの山も遠き五月雨
我門の春の柳に風ふきて　智蘊
ふりたるいけの本のおもかけ
まゆほそきみきりの柳くち殘り　賢盛
よる舟ちかき春の山もと

青柳の朝けのけふり江に晴て　　行助
かすみに雪のたまる遠山
こす浪の花のうき嶋あくる夜に　　智蘊
猶さひしくも春かへる頃
藻しほやく煙にかすむ鴈啼て　　心敬
霞さひしく暮わたるころ
帰る（あまつイ）鴈友なき春に音を啼て
春はいつくにかへり行らん　　行助
天津鴈宮古の花を餘所にみて　　専順
旅たつ山やかすみそむらん
帰る鶴霜の月にけさ啼て　　宗砌
けさこそ星（果イ）は雲にいりぬれ
帰るかり北なる山にたな引て　　専順
かすみをわくるゐての中道
かへる鴈山の下帯ひきすてゝ
はてはかれ野の露の夕暮
下萌の草葉にかゝる春の雨　　宗砌
こけの葉さむく露そこほるゝ
岩高き峯の早蕨萠かねて　　専順
年〳〵の春はいつくに帰るらん
若葉の葛のかゝるむもれ木

いつかきえなん雪のふる道
あら小田に去年のよもきの萠出て　　心敬
とまるもおしき袖の梅か香
小田かへす山里人のあさころも　　智蘊
やしなひかへす人もこそあれ
山もとの春のあら田に水いれて　　宗砌
汀のたつも春やしるらん
すきかへす田みのゝ嶋の雨の日に　　賢盛
あけ行峯に侵むしら雲
猶淵の夜の春雨ふりはれて
風静なる花の夕はへ
春雨の名残ほのかに月いてゝ　　専順
春のあらしの松にふく音
夕暮の霞の月は夜るさへて　　宗砌
わたれる音のよはき春風
更る夜の霞や月に残るらん　　専順
春はこゝろになをそのこれる
老ぬれはいつ見る月も朧にて　　行助
須磨の浦霞の色に暮にけり
あかしやいつらおほろなる月
しつかにすめる春の浦なみ

芦の葉に小夜風霞む月深て　心敬
いく浦まてそ舟の行末
月霞む淀の川瀬の朝またき　宗砌
やとりさへ移りかはれる春はうし
霞むゆふへの廣澤の月　心敬
むかしの庭に梅そにほへる
霞む夜の月のもとには人もなし
なかは過行春のかなしさ
朝な／＼われてかすめる夜半の月
くもるちきりをたのむ日の影
春雨に花まつ程の色見えて　能阿
とけぬ霞に風やふくらん
山姫の衣にいそく花のひも　智蘊
なかむるかたな霧なへたてそ
鶯のこゑする朝け花咲て　賢盛
かくるこゝろや行かへるらん
めかれせぬ木末になれと花咲て　能阿
日木こる崇の道のあわれさ
花さけはかれたる枝をみるもうし
かゝる住居そわきてさひしき
古里は人めかれ木に花咲て　智蘊

枝よりちるか露の下草
ふる里の花は野原の木末にて
あれたる庭そ人めかれぬる
故郷はとはれし花もむかしにて　能阿
残るをも人そ惜ふるもの語
いさ行て見んふる里の花　賢盛
森の日暮る春雨の跡
人も見ぬ田中のむらに花開て　智蘊
奥山すみも春そしらるゝ
鳥のなく朝戸あくれは花咲て　賢盛
こゝろみかてらたつねゆかはや
開花を木のもとすみのはしめにて　行助
花にさきたつ人もありけり
櫻さく山への川に鶯よひて　心敬
法も今来になるこそかなしけれ
花さく山をくたる川ふね
この宇治川のたち花の島
鶯のほる水の水上花さきて　智蘊
いまよりうへん木々の数／＼
花さけはうとき人たに問ふものを　行助
まことの事に聲もいたさす

門花や杉に人なとゝむらん　専順
はな一木つゝ匂る春の夜
遠近の家〳〵梢咲つゝき　智蘊
まつくれ行にかこつ言の葉
山桜いく里人のたつぬらん　行助
露わけ迷ふ山の下道
たつぬるをしらてや花のしほる山　智蘊
かへさは野に道まよふなり
しらさりし花をは雲にたつねきて　専順
まれのちきりは更に七夕
天川かた野の花に御幸して　心敬
舟こきかよふ難波住よし
白雲の伊駒のたけの花を見て　宗砌
たひねはいつく入相の鐘
初瀬山よもに花さく陰わけて　専順
日もなか岡に又やくらさん
奈良山や花のふる里住すてゝ　心敬
庭そ草木の中にあれぬる
山科や花のふる宮春もうし　宗砌
とをさかる都の春もうらめしや
花おひにけり志賀の山かけ　賢盛

春のはやしは風も音せす
古寺に花の人まつかけさひて　専順
我かた〳〵に帰る旅人
山桜かけにしきをたちわけて
さたむる事も人にこそよれ
山かつは花を宮古につけもせて　心敬
かへるさはわか言の葉を閉捨て
しるへをもせぬ花の山かつ　専順
こゆれはくるゝあとの山道
花に行やとりやからん峯の雲　行助
なれきつる名残さこそと帰る路
山〳〵櫻見すてゝそゆく　智蘊
春もこのまゝすめる世もかな
山里のまた見もなれぬ花に来て　専順
おもはぬいろをこゝろにそみる
夕まくれ友のまれなる花に来て
おつるか雁のあけかたのこゑ
花にきて又たひたゝむ空もうし　行助
泪こそおほえす袖にこほれけれ
花をも身をもわすれぬるかけ　心敬
野原をゆけは袖の追風

花にほふ山本とをし朝かすみ　智蘊
霞こめたる木々のむら立
見ぬ花のにほひにむかふ山越て
かすみ色そふ木々のむらたち
むかひゐる心の花をやまに見て
明わたるよ川の雲のたな引て
杉の葉しろき花の山もと　行助
やかてといひし末もたかへし
おそくときいつれをも見ん山櫻　能阿
心はゆきて我はゆかれす
ちらぬまにみはや千里の春の花　宗砌
いとふこゝろそ空にしらるゝ
峯の庵蘿の花に風を見て
一たひあふをかきりとやせん
年〳〵にまれの櫻の花を見て　能阿
霞にのこる山道のすゑ
花やしる去年も我こそ尋ねつれ　専順
いつまてかゝる身をたのむらん
春待に見るとは花もしりかたし　能阿
月日をふれは春は來にけり
見し花の去年の面影先たちて　智蘊

かはす言葉はよしやなくとも
去年見しを花にとはゝやわするなよ　能阿
かはらぬはかりあふ事はなし
わすれすよ花こそ名殘去年の友　宗砌
過る日かすは身にもおほへす
花盛かけに我か世をつくさはや　智蘊
待とせしまに世をやつくさん
花さかぬ若木の春に身は老て　宗砌
しれる人たにいまはなかりき
いつまての若木そすまの山櫻　専順
ちきりの末にたのむあふみち
又や見ん老その森の春の花　行助
いにしへの芳野の宮をきてとへは
老木の花に山かせそふく　智蘊
宿かす人の名殘わすれし
開花を老木のもとの契りにて　能阿
よそめなく心むもろゝ谷の戸に
くち木は花をいつまてかみし　専順
あくろ雲にそ霞たちぬる
思ひねはまた見ぬ花を枕にて　智蘊
たまくらわたる窓の山風

春の夜や夢ちも花に匂ふらん　宗砌
山の端毎に櫻さくころ
春の夜は花よりいてぬ月もなし
袖の香したふ春の山かせ
みてかへる心を花やうらむらん　智蘊
いてゝ戸ほそに月を見るくれ
人歸る山路しつけき花のもと　心敬
こよひの風のなにと吹らん
暮ぬとて歸し花の山さとに
老木の梅のわひて咲色
花も我春のさかりやしたふらん　行助
また來ん春そ行衛はるけき
花やしる山もこえうき老の坂　專順
あわれもうきも言の葉そなき
又も見し花なと老をいとふらん　智蘊
すへもさためぬ春の山ふみ
花まてはいとはれぬ世に身を捨て
あらんかきりとおもふ同し世
いつまてそ我行末の花のはる
かたしきかぬる夜半の衣手
花散るこけのむしろに雨落て　宗砌

又ともすれはものそかなしき
跡もなきこけちの花をひとり見て　智蘊
かすめる山はふかき夜もなし
あけほのゝ花の外なるかれ聞て
入日さやけき半天のかけ
鐘はなを花に夕をつけやらて　賢盛
とわれぬほとのおく山もかな
花を風いつくにさかはふかさらん
さくをまつにはをそき梅か香
花よなととくちる春をならふらん　能阿
くるれはつもる山の端の雪
けふ櫻またきに花のうつろひて
風吹ちかふ木々のむら〳〵
山遠く我見にくれは花ちりて　宗砌
おく猶かすむ木かくれの道
ちりくるをしるへにゆけは花もなし　智蘊
わすれすなから夢はいにしへ
いかにねし夜のまに花はちりぬ覽　宗砌
むなしき床そあくる侘しき
かつらきや山したふしの花ちりて　智蘊
あやにくにしたふを春や歸る覽

開ちる花の二むらのやま
　芝生にふかし露わくる山
櫻ちるよし野のみやの春さひて　専順
　音する水のふかき夕暮
よし野なる春のはや川花もなし　賢盛
　よむ歌に難波の事かのこらまし
花うくひすの春のあけほの　行助
　すたれのうちのきぬの音なひ
軒ちかき花の匂ひに月ふけて　智蘊
　春の夜のとるしのゝめの月
心さへほのめく花の陰にねて　心敬
　わかれしのちの今朝の有明
花にわし夢のたゝちは雲路にて　智蘊
　きのふの春をのこすうくひす
花にねし野邊の一夜の朝臥　宗砌
　かり枕またぬ嵐の音つれて
木の本したふ山さくらはな　能阿
　人なまつにはつらき夜るひる
花を風おもふものかはとはゝとへ　智蘊
　いかゝはせんとをくる玉章
おらてこそ見すへき花に人はこす　専順

　水かれ草の青き葉もなし
瓶にさす花のさかりはみしかくて　能阿
　花はたゝおりつる枝もちり盡し
かめの櫻を風なたつねそ　賢盛
　本のさとりをこゝろにはえす
色にそむ花を一ふさ我かおりて　心敬
　おく山櫻たれかなかめん
ちらはちれ霞のうちは花もなし　行助
　まつをわするゝ雪の夕くれ
ちるを見てこぬ人かこつ花もなし　心敬
　こゝろにちきる行末の春
身のあらはとはかり花のちるを見て
　身をかこつほと物思ふなり
たつねすはとはかり花のちるを見て
　草かる岡の宿のゆふくれ
たちよらん駒つかれ行花のかけ　賢盛
　ふみわけかたき道の白雪
ちるを見て駒ひきかへす花もなし　心敬
　いそくこゝろをさのみしたはし
余所にこそ人まつ花はのこるらめ　智蘊
　人のこゝろのあたし世中

花をたれうつろふ物とうらむ覧　宗砌
　いかにいひてか後はかこたん
とわぬをもみれはわすれし花ちりて　専順
　うつるまもいへそわするゝ春の暮
花ちりにけり見し人もなし　能阿
　我いゑ〳〵にたれかへる覧
山櫻ちる木の本は人もなし　宗砌
　あわれをそふる夕暮の色
さてもとて花の跡見る人はなし　智蘊
　風のあらきも秋のこゝろか
雁のとふ春の山の端花落て　行助
　山にいりては山そさひしき
鳥はなと花ちる谷にかへるらん　宗砌
　風さたまらす雲まよふそら
ちる花の名殘をいつち慕まし　専順
　松ふく風の宿の夕くれ
花をとふ人なとちるをみすつらん
　我はいそかぬかへるさそうき
花ちらす風や人をも恐るらん　宗砌
　松のうは葉にのこるしら雪
ちる花は思はぬ風そやとりにて　行助

　おもふにもわかれし人は歸らめや
夕暮ふかし櫻ちる山　心敬
　あくかれて待としらてやこさる覧
花ちる宿の夕暮のはる　宗砌
　むかしの友の春になれつゝ
もろくちる老のなみたを花もしれ　智蘊
　いまとはれんもしらぬあた人
移り行世は春風に花ちりて
　うき心たかいにしへを殘すらん
花ちる里は世〳〵の松風　宗砌
　いつのこゝろか春にまされる
世はいとゝ花ちるころやうかるらん
　竹の葉のそよくは風やかよふ覧
世間つらし花のちるころ　能阿
　夢もなと人に別の見へつ覧
ちるをならひの花の世中
　夢うつゝともわかぬ明ほの
月にちる花は此世のものならて　心敬
　とにかくにかゝる契りはやすからて
花ちる山の月のうき雲　宗砌
　野寺の鐘のすへの里人

花おつるあかつき露に旅立て　心敬
　さひしさつらさ誰にかこたん
花落るころしも閑を夜る聞て
　住山ふかし誰にかたらむ（しられむイ）
花ちらはなかれて匂へ春の水　賢盛
　たちわかれぬる春の宿〳〵
木のもとの契かれ行花落て　智蘊
　せめてはちすのちきりともかな
すみかたき春の野寺のはなおちて　心敬
　野はらのあらし霧くたく聲
故郷の身をしろ雨に花落て　智蘊
　また風よわき野邊の夕露
故郷のわか葉の萩に花落て　心敬
　わかれしころをいつにくらへん
木のもとの草たかくなり花ちりて　宗砌
　あらしに慕るゝ野邊のかり庵
草青き花のふる跡人もなし　智蘊（賢盛イ）
　ふるき門さす春のくれかた
よもきふに松風吹て花もなし　賢盛（智蘊イ）
　うつれる春の夢はさめけり
花にこしきのふの山の松の風　心敬

　時しもあれかたみの雲に風吹て
きのふの花そおもかけにちる
　うき身のうへを木の葉にそしる
花はたゝきのふの夢とうつる世に
　一むらまよふ雲のさひしさ
鳥の音をきのふの花の名殘にて
　一夜あかすも旅そさひしき
閑倍ぬ花はきのふのやとの雨　行助
　雪ふみわくるあとそのこれる
あかさりし昨日の花の陰に來て　專順
　見さりし里の松風そふく
一枝ものこらぬ花の陰に來て　智蘊
　ふかき木すゑの露の下かせ
人も見ぬ青葉の花の雨にきて
　なれにし人も夢の世中
山櫻けふの青葉をひとりみて　能阿
　見わかす木々の枝茂るころ
青葉よりいつくの花の匂ふらん　專順
　なくさまぬ形見はさても何かせん
花なき枝にのこる夕風
　はてはたゝよきも惡しきもなき世にて

花ちるあとは風ものこらす　心敬
　かへりあるしのけふの日永さ
花の後又我さとに住もうし　宗砌
　たれか別る鳥のなくらん
人もなきみ山の花の春の暮　行助
　人行やらぬ青柳の陰
乘る駒を宿なき春の野にかひて　宗砌
　あれたる里に人はこたへす
誰かかふ手にもたまらぬ春の駒　賢盛
　むまれぬさきを誰かしるらん
またきより鷹のすゝ山をめにかけて　専順
　たのむこゝろそゆきて生るゝ
はし鷹のすゝ山の小鳥又かけて　能阿
　山あらわるゝ雪の明ほの
かくれふす夜半のありかに雉鳴ゝ　宗砌
　野邊もみとりの春をしるころ
雲雀なくあしたに草の戸をあけて　心敬
　移り行雲もかたちの歌の道
すえ野の水に蛙なくこゑ　賢盛
　花もたか春をこふとてしほるらん
やよひの雨のゆふ暮の山　宗砌

　かけもさひしく櫻ちるころ
三月山はつかあまりの月見えて　行助
　夏なきとしと思ふ木の本
山ふかみ後の彌生の花を見て　心敬
　春をかへすは日数なりけり
暮ぬへき彌生の今年くはゝりて　行助
　たつねて花に枕をそかる
菫摘かたやふしみの野邊の暮　賢盛
　しのふとすれと色に見えけり
躑躅咲いはての山を又こえて
　面影は替らて賴むかひもなし
おられぬ水にうつる山ふき　行助
　いわぬ色をはいはてこそしれ
山吹のかきほあれ行春のくれ　賢盛
　いわぬうらみをのこす別路
春の後又山ふきの花さきて　智蘊
　花あひ似たり夢の一時
胡蝶とふ野邊の蘇なみ菫草　賢盛
　こさしとたのむ袖のあたなみ
たそかれに藤の色めく陰にきて　能阿
　浪なれ衣袖しほれけり

折かさす藤のうらはの露落て　宗砌
南に遠くむかふ春の日
藤さける北の家／＼末かけて　賢盛
しほむかつらをなけく天人
雨そゝく春のふちえの浦さひて　智蘊
我か身も花もしらぬ世の中
歸りこん程又いつそけふの春　專順

竹林抄卷第二

夏連歌

とまるもうすき袖の移り香
夏衣きのふは花にたちなれて　專順
花はにしきをしける草村
人かへる櫻か本に夏のきて　賢盛
見はてぬ月そ夏の空なる
茂り行峰の卯花木かくれて
むらさきの庭に流るゝ三河水
杜若さくやつはしのさと　宗砌
名をのこしてや春は行らん
鶯の跡とひいてよ郭公　賢盛
そなたとはかり鳴のくさ盤

時鳥またるゝ山に木かくれて
卯月の山に殘る山吹
くちなしの色にならふる郭公　行助
忍ひ侘てや音にはたつらん
ひとりなくみ山かくれの郭公　宗砌
きゝそつたふる神のそのかみ
時鳥ほのかたらひし山にれて　心敬
聞もめつらしこの都鳥
杜宇今朝は音羽の山越て
ちかきそのふにうつきさく頃
時鳥聲も袖とふ月いてゝ　專順
つれなきを待こそ心くらへなれ
なけ郭公いてよあり明　智蘊
そことなにはの夕暮の空
時鳥あしのしのひに鳴過て　心敬
あかつき聞し入相の鐘
郭公行衞わすれぬ日は暮て
行衞いつくそしら雲のうち
一聲はをちもかたらぬ郭公　智蘊
なみた幾度露とふるらん
時鳥杜の雫に聲をちて　心敬

生田の河のふかきなみたよ
(をち)百千歸りなくねは森の時鳥　賢盛
その名のゝしる聲は大内
山守やなれて聞らんほとゝきす　行助
河のむかひの五月雨の頃
山城の夜戸出に聞つ郭公
物思ふ我か夕くれをしるらめや
やよほとゝきすなくさめてゆけ　能阿
神代やありし言の葉の花
まつりする夏山さくら遲く咲（おりかさしイ）　専順
かへり見るわたくしとてもあらしかし
茂るしのふに軒やくちなん　賢盛
ひかとみゆるは螢なりけり
春ははやすくろの薄しける野に　心敬
晴やらぬ雲にや雨はのこる覧
五月をときの鳥そなくなる　能阿
渡るをしかのあとの一聲
ともしさす夜るの山ちの郭公　行助
戀せよとてのとしもへにけり
いく歸り鷹のとや野を分つらん　賢盛
うちこもりつゝをくれ一夏

秋またぬともしの庭の野にいてゝ　心敬
弓するふりたてかへる狩人
棹庭の入野のともし消る夜に　宗砌
むねにせくこそ音なしのたき
淺ちふをかのとの分るおのゝやま
かけふかくなるもりの下草
尋へきあとも夏野のはなれ駒　行助
身を秋になす人のふるまひ
小山田に早苗とりそへおりたちて　専順
植てそ竹のかけに住ぬる
水青き小田のさなへのふしみ山
あさかの山はあさきうたかは
小田うふる玉つくり江におりたちて　賢盛
身をたすくるも神のあわれみ
植し田のいなひかりしてふる雨に　宗砌
なみこそかゝれあやめ引袖
末遠くのふる五月の玉の緒に　賢盛
幾夜かをくるともしする人
しれかしな後のこゝろの五月闇　能阿
しからきや夏山むかふ谷ふかみ
柚木なかるゝ瀬々の五月雨

草の原にも道はありけり
五月雨のころはよと野に舟さして　宗砌
友にあふちの陰はなつかし（めづらしイ）
五月雨のはれまの夕日夕月夜　専順
うふる山田のさみたれの頃（さきイ）
一むらのさかひのあふち花ちりて　賢盛
山ほとゝきすすくる一こゑ
見もはてぬ夢と月との短夜に　宗砌
住吉はたゝ此浦の名のみにて
なかゐの濱のみしか夜の月　専順
かすみしまゝのなか雨の暮
五月やみほたるはかりの月もなし　心敬
あさ日さすまもくらき五月雨
匂くる花たち花に夜戸出して　能阿
かく戀んとの身とそなりぬる
橘はたか袖ふれしたねならん　賢盛
ふけとそおもふ夏の朝風
立花のかとりの袖に露落て　専順
ひかりやわかつうすきともし火
夏衣日も夕やみに飛ふほたる
くれ行かけや庭火たく覧

遣水に螢數〳〵流れ來て　智蘊
蟬のはかなき心ともしれ
何故に螢のもえて明すらん　専順
人の命もしるきともし火
ありと見る程も夏虫我なれや
煙みしかき末そかすめる
夏の夜の蚊のこゑ遠く明初て　賢盛
驚くほとの心たになし
夏の夜のあくるさかひにまとろみて　行助
淀のいり江の五月雨の頃
こす浪の末葉のまこもかり捨てゝ
松にこたふる風の一聲
おとろける梢の蟬の夜る鳴て　心敬
林のおくに鐘聞ゆなり
空蟬のあくる朝けに鳴いてゝ　賢盛
しけみにおもき夏のはの露
鳴蟬の五月の雨にこゑふりて　能阿
やすむかたなくさすや船人
鵜かひ火の影に手縄の數くりて　専順
水と火の心みち引道もかな
のほる鵜舟そ手縄くるしき　宗砌

たふねさし捨かちよりそ行
今朝歸る夜半の里人うをすべて
かるゝ色なる荻のやけ原
風たにもそよかて照す夏の日に　心敬
水の心やすみにころらむ
夕立の名殘の月の清き夜に　宗砌
凉しき風の秋を引初
夕立の名殘の雲に月はれて　能阿
かるゝよもきは露も殘らす
ひきすてゝあさほしちらす夏の日に　専順
うすきそ雪は見るもふりせぬ
白妙のはたへすきたる夏ころも　宗砌
のほる峠にあせをほす人
夏衣うすゐの山路越やらて　心敬
高峯にたえぬ雲の通ひ路
ふしみれは雪けの嵐夏かけて　専順
年を經は山さへ高く成つへし
けぬからへなる富士のはつ雪　賢盛
おもはす袖のさむくこそなれ
富士颪夏野に雪を吹かけて　宗砌
山よりいつる風そ凉しき

雪とくる氷室の川の末見えて　心敬
岩もる水はつたひてそ行
谷ふかき氷室のあたりうるほひて　専順
袖にやとるもうすき月影
夏衣あふきのにほひうつろひて
夏のころもに風そやとれる
蓮葉の匂ひほのかにうちしめり　賢盛
我かへるさの道の露けさ
庵ちかき野中の清水結ふ手に　行助
うしほの岸に日こそ暮ぬれ
いく夏を清水の寺に結ふらん　賢盛
あふきそかたみかせこゝろせよ
むしあけや夏のひかたの夕すゝみ　宗砌
冬に一はなさけるなてしこ
清水せく岩ねの月夜夏さえて　智蘊
御祓するころにや夏のなりぬ覽
見よや凉しき水底の月　賢盛
いたつらふしの中川の宿
夕凉み夜は泉をまくらにて　宗砌
夕〳〵と契りこそをけ
あたりなる里人すゝむ松のかけ

きえはきゆへき思ひならすや
見ぬもうし身を秋ちかく飛ふ螢　能阿
たくへてふしにむかふ火ひえ
六月のみたらし河に行かへり　賢盛
松ひとりあさちにたてる陰さひて
御祓いく代の志賀の浦人
すつるや人の身をおもふ覧
瀬を見れはあさち流るゝ御祓川　宗砌

竹林抄巻第三

秋連歌

色なきこゝろすかたにそかゝる
目に見へぬ秋風たちぬ渚の松　宗砌
いまた旅なる夕暮はうし
待人はこぬ故郷に秋たちて　専順
行とくと待ふまゝに夜は明て
夏か秋かのはつ風のこゑ　能阿
たえ〳〵なりし秋の初風
一葉より後は木毎に数を見て　心敬
出にしあとの山はくれけり
初秋の月は空よりあらわれて
あと又はけし秋の山かせ
色かはる木々は一葉をはしめにて　専順
こゝろのすゑの白風そふく
立田山木々の青葉の露分て
いかなる中の契りなるらん
七夕のあふよは稀に絶もせて
水をむすへは月も移れり
天津星ならふ雲ゐをまつるよに　賢盛
またこぬくれの秋は初風
下葉ちる荻や露をさそふらん
一露をたゝむ思ひの玉さかに
のこるほたるや露をまつらん　行助
山は木すゑの秋になるころ
目くらしの鳴音やとゝ峯の松
秋くるからに袖はぬれけり
蜩のなけは空蝉音をたえて　能阿
かへるか鷹の濱邊たつ聲
荻の葉に風うちそよく秋はきて　賢盛
夕くれかたれ故郷の月
荻の葉の心もさそな秋の風　心敬
おなしをしへをあまたにそ聞

秋きふく荻の上風山をろし
野邊のさくらの紅葉もそちる
山松の本あらの小萩風ふきて　宗砌
時雨につるゝかりの一つら
色かはる庭のむら萩ちり初て　賢盛
人待我もなみた落けり
門のなく夕の萩の露を見て　心敬
ちりならぬ身もたゝ夢のうち
蝶のゐる花のとこ夏秋かけて　専順
まことかましきおもかけそたつ
女郎花たゝ行はかりと見つる野に
むかしの袖を露にとはゝや
花すゝき野邊には人のよもうへし　能阿
野さとの秋のくれそさひしき
行くともすゝきか本は誰かこん　宗砌
小萩うつろひをしか鳴みち
瀧ちる尾上の宮の跡ふりて　心敬
あき風やとす松の一むら
枯〳〵の岩もとすゝき露もなし
鶉なく野と庭そなりぬる
あれ行は尾花か本の里ならて

波に音するうちの山かせ
いかゝせん（すむイ）尾花かりなる秋の庵　賢盛
うしろてみゆるきぬ〳〵そうき
朝貌のさくしのゝめに戸をあけて　専順
ひもとくほとの中のきぬ〳〵
しのゝめの花の槿うつろひて
いく秋かへし桃をえし人
ふる宮のそのゝ朝顔開のこり　宗砌
ひとひもいそけあらましのすゑ
朝顔の花のあたなる身を持て　智蘊
露よりも猶身そあわれなる
朝貌の花は又さく世の中に　心敬
さたかにみえぬ道芝の露
くるゝ野に花さく小草摘捨て
むかへは月に人そまたるゝ
夕露に花咲草の戸をさゝて　賢盛
月にとふ人の袖より露落て
あさち色つく宿の夕かせ　専順
名もしらぬ小草花咲川邊かな
芝生かくれの秋の澤水　心敬
けに老まてはしらぬ露の身

花にさけ森のかけなる秋の草　能阿
いかなるかたになひきはつ覽
武藏野やかやかすゑ吹秋の風　心敬
もみち葉みたれ雨のふる頃
いにしへをしのふの軒の露もうし　宗砌
月もいろなるむしの聲〳〵
をきのほる露のまかきの暮初て　賢盛
きり〳〵すこそかへの底なれ
いつまてと夕露むすふ草の本　智蘊
なく虫も我ひとりとやうらむ覽
あまのかる藻の露の夕暮　宗砌
あさちか原の人の面影
露はたゝ夕のおとすなみたにて　心敬
うき身の秋はけにそはかなき
消て又玉の緒になる露もかな　行助
旅の袖とふ有明の月
世中はいつくも秋の露の宿　智蘊
老のあわれを月もとへかし
風つらき檜原の山の秋の庵　賢盛
なみたは色に先そ見えぬる
暮る野に虫の音またぬ露置て　心敬

時雨のあとの露そ身にしむ
虫の鳴野邊の遠山色つきて
そともの草や風の下露
亂れにし虫の音よはる月深て　智蘊
露うちそゝく庭の草むら
をのつからむしかふ宿とあれはてゝ　行助
そゝける水を手にそ持たる
籠にいるゝ虫の命の露のまに　賢盛
住はつへしや露のあたし世
鳴虫の命も人にあらそひて　能阿
いまうからぬはいにしへの秋
虫の音になくさむ庭は野となりて　宗砌
さか野のかたの秋のわかれち
虫の音もよはれる月を西に見て　心敬
露よりあまるしの原の月
鈴虫のなみたふりはへ鳴こゑに　能阿
春さり秋をむかへぬるころ
子日せし野邊の松むし又なきて　心敬
たく火しめれは月そふけ行
幾秋の神樂をうたふ夜に　賢盛
猶いつまてかをしねもるらん

棹鹿のつまとふ暮の月を見て
人ゆへふくる月やうらみん　宗砌

小男鹿の妻まつ山にたひねして
月にたにねぬるかはなる眞萩原　心敬

鹿こそなかねつまやあふらん
松には風の聲そしくるゝ　専順

山本の野を夕暮と鹿なきて
岡のかり田は人もかけせす　宗砌

山本の月に鹿なく夜は深て
けふりそうすき閨のくれ竹　能阿

山里に鹿おとろかす火は見えて
むかしのあとのあさちふの露　心敬

御狩野もいまはをしかのたちとにて
をしはる釣簾にしたふおもかけ　宗砌

棹鹿の跡を大野の梓弓
ちきりを秋そ通ひたえぬる　心敬

あはせつる菅野の男鹿音に鳴て
尾上の月のちかき明かた　賢盛

なきつゝや秋を男鹿のかへるらん
山の端のほのかになるや霧の中　能阿

けふ初鴈のひとつらのこゑ

うちの渡りの山のはの月

曉の雲に初鴈聲はして
こし方を思ふも遠き山越へて　専順

天の戸わたる初かりのこゑ
我心たれにかたらん秋の空　智蘊

荻に夕風雲にかりかね
雲のうへなる月そくまなき　心敬

初鴈のなみたやひとり時雨らん
人にこゝろを荻の下かせ　行助

鴈そたつはまへに船やかゝるらん
眞砂の露を拂ふ秋かせ　心敬

月寒き夜るのしほひに鴈落て
跡こそみえね千鳥なくなり　行助

眞砂より雲にとふ鴈數きえて
くれ行春は中宿もなし　宗砌

天津鴈はいをいつくに休むらん
長月さむみあり明の霜　賢盛

あまつ鴈きぬたのうへに聲ふけて
日よしのかけそ北の峯なる　心敬

幾山をかへる燕の過つらむ
鴈はくれとも人はおとせす　賢盛

船つなく夕河おろし身にしみて　心敬
　ちかき隣の秋の人こゑ
火をとるや身にしむ風をふせく覧　能阿
　うき秋草のまくらいく夜そ
もりのこすかけの山田の一庵
　秋さむけなる木からしそ吹
をしねもる遠山もとの草の庵　宗砌
　いてはやかゝる露の世中
秋の田のひたやこもりにうち侘て　賢盛
　三のさかひにいまそまよへる
思はすの月を二日のそらに見て　心敬
　たれかゝくらんともし火の色（ひとイ）
玉すたれおろさぬ宵に月待て　能阿
　いくへかへたつ我かたの山
月をなを松のはかこつ柴の戸に　心敬
　追てとふけや御舟山かせ
峯の月をそきはたれかひかふらん　能阿
　浦よりかすむ志賀の辛崎
山こえてみれはむかひの夕月夜　専順
　かた野のかち路露しゐきつゝ
夕月夜山の端なくはなをや見ん　能阿

　あれたる宿に秋風そふく
月をたゝうき夕暮のあるしにて　心敬
　雲井の雁の遠き夕暮
さしのほる月はほのかに峯越えて　専順
　うらはにちかく船やきぬ覧
しらさりし山の端見ゆる月いてゝ　賢盛
　むかひやいつく舟かよふみゆ
末のより月さしいつる水すみて（はれイ）
　淋しく庭の池そあせ行
埋水草のたえまに月すみて
　はれかく鳴の聲そさひしき
いなはなる露の数〳〵月見えて　智蘊
　ふかき夜にみたるゝ螢とひ消て
月をあらはす草むらのつゆ　賢盛
　はやくの此世えこそたのまね
露つたふ竹の葉すゑに月見えて　行助
　うつり行なり秋のうき雲
むら雨の月にちきりを猶かけて　能阿
　にしなはしめの住よしの神
秋すてに月になりぬる夜や寒き
　人もこゝろそうはの空なる

我思をあくかれいつる月の夜に　宗砌
　我袖からのうき秋としれ（くれイ）
さそわれは月のいつくにあくかれん　専順
　ふむともみえぬ道の露霜
行人もしつまる月のしろき夜に　心敬
　遠き宮古のことゝきかまほし
みる心月のうちにや移るらん　専順
　しらぬ心をわれもたのむな
月も猶たかめつるにかむかふらん　賢盛
　夜そあけわたる峯のしら雲
いらさらん空にも見はや秋の月　能阿
　浦にいつくの鐘聞ゆらむ
吹送る遠山風に月おちて　智蘊
　あらはになりぬ冬のかよひ路
こえくれは山もさわらぬ月を見て　賢盛
　いるへき山も見えすかすめり
海原や浪によわたる空の月　専順
　ふき残り行松のうら風
湊船をし明かたの月落て　智蘊
　目覚しなるゝ秋の夜な〳〵
舟もよふ暁月の浦傳ひ　心敬
　きけはさむけき澤水の音
舟くたす伏見の月の更る夜に
　幾夜もあかし廣澤の月　賢盛
　こほりの下に水響くなり
難波江やあかつき月に鐘なりて　行助
　はれぬることも夏のなかあめ
行て見ん秋こそ月の須磨の浦
　心にはたえたる峯も住つへし
おもひあかしの夜な〳〵の月　宗砌
　ともし火きえぬ夜や更ぬらん
月見えは出よあかしの泊り舟　専順
　また霧ふかしいつる朝市
住吉の月より西に船かけて　賢盛
　須磨の浦こゝの國にも住かたし（ゐイ）
あわちの山にきゆる月かけ
　磯のとまやにいかゝあかさん
いたつらに月松しまや夜るの雨　専順
　丹波路や此山かけの住ところ
月まちなれつむら雲の里　能阿
　はる〳〵岐岨の里のかりふし

おは捨の月を都の望にて　行助
霜かと見れは殘るしらきく
水無瀬川いまもはやくの秋の月　智蘊
麓の竹を拂ふ山かせ
とよら寺むかしの月の影深て　宗砌
谷のこゝろそ我に靜けき
曉をしるや高野の秋の月　行助
外山なる正木うつろふ秋の霜
西にあけ行葛城の月　能阿
かた岡かけてふれるしら雪
月のこるあしたの原をおきて見よ　賢盛
こゆへき末の遠き山の端
武藏野に天の原なる月更て　宗砌
遠きかへさをおもふ旅人
白川や關路の月を西に見て　心敬
こふるもむなし遠き中道
いつか見ん都の月の小夜の山　宗砌
かへるさおもふあかつきの空
うき身なも都におくれ秋の月
秋すきかたの旅の歸るさ
故郷に我まつ月や殘るらん　智蘊

露も木葉もみたれてそふる
月影のしのふにかゝる軒あれて　宗砌
風のみ分る露の下くさ
すむ月の心のまゝに宿あれて　賢盛
太山の寺は誰も入こす
灯に月をかゝ(萌イ)くる窓あれて
冬さく草の花の夕しも
里からやまかきの月はふりぬ覽　智蘊
物おもふ身の露の下ふし
故郷はよもきか月をまくらにて　心敬
太山の庵に衣うつこゑ
杉の葉にかゝれる月はかすかにて
夕霜しろき山の下道
柴の戸に峯こす月や移るらん　行助
いねかての夜さむを誰か侘ぬらん
まつに風ふく月の山里　心敬
もりかぬる山田の庵たち出て
松のうへなる岡のへの月　專順
秋になるかと誰にとはまし
月をたゝ住人なれや草の原　心敬
身のふり行に袖はぬれけり

いく寝覺とわれし影そ秋の月　能阿
たつやかもめのあかつきの聲
一眠ほとへにけりと月落て　宗砌
野分の風の吹やしく覧
山本のむら雲しろき月落て　智蘊
鴈はまたわかれもやらす鳴聲に
山のはみれは月かたふきぬ　宗砌
嵐に鐘やこゑめくるらん
深きよの月の西なる山もうし　能阿
雲ゐのいつく鴈のなくこゑ
深き夜の月は西なる影澄て　專順
心のありし行衞をそとふ
かたれ月昔の人の代々の秋　宗砌
庭をかれ野の松むしの鳴（聲イ）
月さへやみし世の友を忍ふらん
捨る身は木深き陰に庵卜て
うき世の月よ見えしなかめし　專順
千々にくたくる心とをしれ
月やあらぬ我身ひとつの秋の空　智蘊
あくるそつらき行末の空
消れたゝこゝろの月の秋の雲

秋のいたらぬ方もありけり
月のよも迷ふ心はやみ路にて　行助
うき身の業のつらさえけり
月をみてこほるゝ涙いかゝせん　智蘊
これそ此秋の朽はの岩ね松
苔にさひたるみ山ちの月
契ても人はとはめや谷の庵
見れは月すむ峯の古寺　專順
佛ともあらわれぬるを仰けたゝ
月の御顔のきよき大空　行助
ねやの戸さむく通ふ松風
琴のねに月の色そふよは更て
なかれての後やうき名と成ぬ覧
秋の寐中のあけかたの月　心敬
心〳〵に物おもふころ
宿毎（ふるイ）に光あらそふ月を見て　能阿
庭の廣さや住あらすらん
向ひゐる心を宿の秋の月　賢盛
冷しき夜そ夢をへたつる
曉の月まつ床に起ふして　能阿
こゝろほそきは老か身の秋

夜な〳〵の空にかけ行月を見て
花さく草もなひく村〳〵　宗砌

あさ霧や末野の月をかくすらん
小舟によるの雪そのこれる　心敬

朝ほらけ月は遠山出て見よ
冬はさやけき岸の下水　行助

秋よりや川邊の月はこほるらん
男山秋の半のまつりして　賢盛

見れは魚すむ月の水底
里なき山を幾重越らん

消はつる所もしらぬ月入て
秋の寂中そ都なりける（都之秋ノもガカイ）

朝霧の四方にめくれる山を見て
朝けの里にさむき秋風（いと、イ）　智蘊

一村の竹の葉けふり霧立て
よしをそくともなかき夜すから（をかしイ）

夕霧につな引舟の川のほり
竹の葉のほるよな〳〵の月　宗砌

明わたる川霧白くこす汲に
汐風さむし行末の秋　賢盛

霧まよふよこのゝ塘日はくれて
せんかたもなき秋の悲しさ　心敬

霧くらき夕山みちの雨舍り
あつま路遠し幾日きぬらん

心ひくけふの今夜の駒むかへ
みちひく事は法にこそあれ　宗砌

遠くきぬけふあふ坂のおくの駒
はやさし出よ山の端の月　専順

今夜くむ初汐衣おりはへて
良はた寒くなら山の秋　能阿

かけ干てうつや衣のさほの内
こゝろもあれな秋の山かつ　専順

露染のゆふへもーらすうつ衣
獨のみ起ゐる床に月を見て

余所のきぬたに寒きころもて
山里のさやけき月に人はねて　智蘊

風や木の葉の衣うつらむ
芝生かくれの秋の澤水　行助

夕ま暮霧ふる月に鳴なきて
かり枕いな野の原に夢覺て　専順

月かたふきぬ鳴の啼聲
哀そふかき野邊の夕暮　能阿

澤水をたもとにかくる鴫鳴て　心敬
　獨淋しき宋の夕暮
霧立て鶉なく野は人もなし
　我おもひをやむしの鳴らん
鶉ふす尾花かもとの草かくれ　宗砌
　淺茅かうへの露のさみたれ
秋はたゝ心の色をふく風に　智蘊
　松古ぬたか世にうへて殘るらん
うき秋風の夕暮の聲　宗砌
　昔たにうかりし人の移ひて
ふるき都の秋の夕暮　心敬
　身を捨る心世になとなかるらん
よはひの末の秋の夕暮　専順
　寐覺には聞つる物を郭公
よな〳〵かなし山里の秋　宗砌
　愛こし月の積る年〳〵
長夜はれ覺〳〵におもほえす　能阿
　神代の月もかくやさやけき
天の戸の明方遠き秋のそら　専順
　有明くらき宇治の山本
曉の雲よりさむき秋の雨　智蘊
　うちかさねぬるよるの衣手
問もうし泪も秋の窓の雨　行助
　あかす見る今宵の月も哀しれ
秋こそなかは老の行すゑ　専順
　しはしの月の五更のかけ
うしつらし老のね覺の秋の空　智蘊
　こゝろにかゝる月のうき雲
秋の夜はなかきやみさへなけかれて　専順
　かゝるつらさはひとりにそある
山ふかき秋の夕の草の庵　智蘊
　かりに馴にし面かけそ憂
世中を秋の野山の奥の庵
　さゆる霜夜のなか月の空
有明の遠の野寺に鐘なりて　宗砌
　苔なきすゝきちるなり
いねかての有明の月（暁イ）の露寒み　心敬
　はやくも三の秋は過けり
長月や十日あまりの月はおし
　おもひもけふり不二計かは
月淋し室の八島の秋の暮　宗砌
　木をきるをとの信樂の里

あしろうつ田上川の末の秋　智蘊
　過るそおしきかりの一聲
舟人も棹を忘るゝ秋の海　心敬
　夕日うつろふ山の淋しさ
梯をゆけは袖ふく秋のかせ
　涙やをとす鹿のなく聲
狩人のあらきこゝろもうき秋に　専順
　いとはれてこそ袖は沾けれ
幾めくりうき世の秋にあひぬ覽　宗砌
　紅葉する木陰の月に宿かりて
いつくにゆかんわひ人の秋　能阿
　ともし火ほそく殘る秋の夜
露青き草葉はかへに枯やらて　心敬
　殘る夕日そ山に色こき
草かるゝ秋の末野の水はれて　専順
　夕されは月の色さへ身に入て
里はむかしの深草の露　能阿
　音そのとけき故鄕の雨
秋はたゝしのふにかゝる軒朽て　心敬
　軒の雫や松かねの露
蔦の葉にむら雨かゝる菴ふりて　智蘊

　まつをしりてや月そさし來る
閉はてし蔦の葉落る松の戸に
　そよとの音をたのむ金風
しは栗のおつる木陰の草の庵　宗砌
　聲ならす輕き此身のうかれ來て
風のうへなる峯のおち椎　専順
　あらはすにこそ罪も殘らね
椎ひろふ秋の木の下かき分て　賢盛
　くれぬる色にかはるうら風
霜白き椎の葉山の秋ふけて　心敬
　木の葉にましる水の水上
奥しらぬ深山颪に秋ふけて　専順
　落るなみたそ月にさはれる
霜枯のむくらの宿に秋更て
　木末の秋の山のみえ行
隈のなく麓の原の明る夜に　賢盛
　里のしるへも見えぬ夕霧
鵙のゐる岡邊の木末秋ふけて　宗砌
　尾花か末に風わたるころ
鵙のなくかれ野の櫨の葉は落て　心敬
　朝夕まつは旅の音つれ

子を思ふはゝその一木朽やらて
こひしささそふ秋風そ吹
ちるらめや我故郷のはゝそ原　智蘊
鴈のなみたやともに落らん
色替る秋のは（嶺イ）山のゆふ日影　宗砌
境の山は霧も曇らす
影うかふ池のつき島菊咲て　賢盛
行まゝに山路すくなく成にけり
今はの秋の菊の一もと　行助
聲先落る雲の初鴈
秋山に風まつ下葉移ひて　專順
梢淋しく殘る山下
紅葉ゝのあけのそふ舟漕水に　宗砌
月なき闇の空はいつまて
木の下の紅葉に風の聲ありて　能阿
有明の月のあかつきの山
吹おろす風のもみちは秋もなし　宗砌
くれなゐ匂ふ袖の白菊
仙人は秋の木の葉を衣にて
人もちる昨日の花の山里に
木のは音するゝ秋そかなしき　心敬

あさちか原はいつの世中
野の宮や荒にし後の秋の露　能阿
別れし後は別路もなし
古の秋の野の宮跡さひて　宗砌
朝の月に別れ行空
聲淋し木末の秋の山からす　行助
まさきちりくる峯の秋風
男鹿なく外山のおくや時雨覧　專順
なにとか秋を過し果まし
めくり來ぬ露もふるやの村時雨　行助
侘つゝすめる椎柴の下
九月の後瀬の山や時雨らん　智蘊
曉たれを松むしの鳴
問ふ人も嵐の山の秋の暮　行助
草の枕は月もたまらす
うらかなし思ひあかしの秋の暮　能阿
水田のおしね冬そ刈なん
たへてやはうき身のあらん秋の暮
名はもれ安し身をいかゝせん
思ひ入山もうき世のあきの暮　宗砌
こゝろふかきも袖はぬれけり

世を厭ふおく山住の秋の暮
ひとり淋しき木からしの風
世に遠くこもるみ山の秋暮て　行助
なると吹こす風の烈しさ
まきのやも住うき計秋暮て　智蘊
嵐の音やなをかはるらん
遠近の木末むら／＼秋暮て
千枝ゝ紅葉色よ移るな
初時雨しのたの森に秋暮て　専順

竹林抄卷第四

冬連歌

冬かけておほ野に殘る草の花
みかさの森に時雨ふるころ　賢盛
吹風はかり空に音して
雲晴る後や木葉の時雨らん　専順
夢にきて又歸る面影
定なや夜の時雨の今朝の雲　宗砌
扨幾度そぬるゝ我袖
めくりてや同しね覺に時雨らん　心敬
冬たつ空は物そさひしき

我身ふり泪しくるゝ世に住て　宗砌
深草や里もふり行秋毎に
身のうきふしみ山な時雨そ　智蘊
雲ふく風の冷しき音
木葉なとあたの時雨に契るらん　専順
中／＼に二の川は見るもうし
三室龍田の紅葉ちる頃　賢盛
別やさそふ天の川かせ
なきさなる岡邊の木葉散／＼に　心敬
をとも霰のあらし吹
瀧つ瀬の落葉からへに玉とへて　専順
水も淋しき故鄕の池
猿さはきならのは落る山の陰　宗砌
さそな都とおもふ山里
ならの葉の落る霜夜に寢覺して　心敬
かれや殘らん霜の下草
まはらなる杜の朽はのかさなりて　賢盛
うき身しらてや思ひ初けん
ちりそ行我住山の下紅葉
ちらしをく他言のはに名やたゝん
あらしの山の木々の冬枯　行助

かへり水無瀨の宿の古道
山もとの瀧もあらはに木は枯て　能阿
落來るかけもはやき隼
音さそふ霜のはやしの朝嵐　賢盛
枯野ふく風はいつくに舍るらん
夕の雲のさむき山もと　専順
かつきえなからふれる初雪
松風の夕の庭に猶さえて　能阿
めくる時雨や余所の夕暮
冬の日の林の奥に鐘寒て　智蘊
かゝるうらみそ獨つれなき
蔦のはの冬枯わたる松さひて　賢盛
吹としふくはすこき秋風
かるゝ野の一むら薄ひとつ松　心敬
哀にみゆる野邊の冬枯
なてしこの一花殘る霜の下
床は霜なる有明のつき
冬枯の草の庵に夢さめて　智蘊
春まつ年の末いのる人
冬枯の草の露とも身をしらて　専順
いつまて草のかるゝ露霜

武藏野をゆけは秋過冬の來て　心敬
いつくの山におもひいらまし
むさし野は草の爪木も冬枯て
霜のうへなるけた物の跡
分なるゝいなの笹原かれたちて　賢盛
庭にいりたつ木からしの風
寒き日は野邊の小鳥も人馴て　智蘊
曇るかとみれはさたかに雪晴て
木の葉の後の冬の夜の月　専順
すめは水こそ閑にもゆけ
月影のこほれるまゝに雲消て
中空ひたす海そ杳けき
寒のこる月のつりはり細きよに　心敬
よこしまに咲窓の梅かえ
さゆる夜の庭の月影さし更て　能阿
外面の山の木葉ちる頃
霜枯の野邊の故郷月さえて　宗伊
ふすまもうすし苫の小筵
敷妙のまくらの古屋霜寒て
庭火をたきてうたふ榊葉
鳥の音も八度の霜の寒る夜に　行助

入江やこほりなかれよるらん
むら芦の下葉に霜のたゝよひて　専順
風やかれ野の色に吹らん
冬されは蘆の花ちる遠干潟　智蘊
烈しく送る袖の追風
冬枯の山もといつる蜑小舟
なれもうつらと鳴やをるらん
霜枯のまのゝ入江の夕千鳥　宗砌
楸うつろふ濱川の水
友やなき鳴れ恨る夕千鳥　能阿
つなかぬ駒は野にやかふらん
山の端にあちむら渡り日は暮て　賢盛
青葉も見えぬ霜の松かえ
山水の月のよ床に鴨啼て　宗砌
をしね一むら殘る澤水
つらゝゐる入江は鴫の跡もなし　賢盛
生田のもりの陰を行水
杭よりなかれにあかす鵜のゐて　専順
二度かへり三津の江の里
立鳥のつかひはなれぬ波にきて
月さむしとや千鳥鳴らん

霜こほる袖の川原をかへる夜に　心敬
かたしく袖に月はさえけり
河原風氷をわたるふねにねて
とは山しろく雪そつもれる
朝こほりかり田の月に末とちて　能阿
かりねうきたる秋のこのころ
朽やらぬを田のいなくき霜ふりて　賢盛
ふりわけかみのとけぬこゝろよ
朝ことの非つゝのつらゝとちそひて　専順
ゆふへの雨の竹をうつこゑ
いつのまに霰ふる夜の更ぬらむ　賢盛
雪になるおのかせの烈しさ
はし鷹をすゑ野にしけきすゝの聲　心敬
いのちやわれをのこしをくらん
鳥のふすかりはそこゝろとまりやま　宗砌
我とたゝ打こそなるれこひころも
たかはのとりをたつるかりひと
きてかくれすむ草の戸のうち
人をさへかりはの鳥やたのむらん　心敬
わたす世とをきくめの岩はし
絶にけるその御かりはは名を留て　賢盛

こゝろのあらはつみおもくせよ
諏訪山の御狩は神も請つへし　宗砌
竹の末葉にむすふゆふして
山あひの袖の霜よや更ぬらん　賢盛
それもしほるゝあまの羽衣
ふる霜やかさす蘿に消ぬらむ
柚木とる山はあまたに分入て
峯　炭燒しからきの里　行助
哀にも眞柴折たく夕煙
すみうる市の歸るさのやま　心敬
うす衣冬は綿にそ成にける
世をわひ人のたのむ埋火　行助
なひく芦火そ浦に影さす
あま衣冬の袖たに一重にて
上からへにとおもふかの國
かさねたるつくしの綿も寒きよに　賢盛
紅葉もわれをすゝめてそちる
風寒み酒あたゝむる冬の日に　行助
うかるゝ玉や空に消なん
さやかなる夕日の下のよこあられ　宗砌
木からしそよく山の下蔭

梢のはにかゝる霰の打ちりて　智蘊
あふ人も宿はとゝへは物いはて
ふゝきに笠をかたふくる道　心敬
いつのよか其曉に至りなん
雪まつころそ霜にかねなる　宗砌
駒はやるかりはの夕風あれて
雪になるかと北そさむけき　賢盛
また雲みへぬ唐舟の道
波の上にふるやと雪をまつら山　專順
磯の岩ねにたまるしら波
捨小舟雪をはらはん主もなし　能阿
海のうへなる遠山のかけ
朝もよひきのふ見さりし雪降て　專順
しはし時雨の雲そはれたる
露寒き末野の山に雪降て
狩場の歸さ得物こそあれ
暮る野に月を待とる雪はれて　心敬
几帳のおくに見ゆる人影
白妙のかたひら雪に戸を明て　宗砌
跡よりきゆる山のうき雲
行人の袖白妙に雪ふりて

初時雨過るも安くめくりきて
雪見る野邊にたつる小車
尋てたにもあひかたき頃
駒はなつ雪の山下くるゝ日に
學へる道も道にてはなし
小男鹿のあとのみ殘る雪の山　心敬
澤邊の水のをちかたのこゑ
鴈そ啼雪の此夜や更ぬらん
夕の鐘にかへる山下
鳥の行雪の杉むら幽にて
一むらの里は幽に日の暮て
雪の木末に烏なく聲　専順
立こゑ寒し冬の朝市
山下の雪におり居るむら鵆
風こそ松の聲となりぬれ
山下の木末は雪に埋れて　智蘊
已ひとりと松は古けり
袖につもれる雪を打拂ひ　専順
不二をおもひの山とたにみよ
ふるからへにあかす集る庭の雪　心敬
明れはちかくみゆる山の端

雪寒き麓の里にめもあはて　賢盛
かれ木のみたつ冬の山下
まきれすよ雪の高峯の一松　心敬
驚く夢に夜は更にけり
雪折の竹の下庵ふしわひて　智蘊
いつはりなからあはれとや見ん
繪にかける雪のはせをは枯やらて　行助
いくへとよらの竹の下道
西にまた月ある雪の今朝晴て　心敬
道絶てさまよふ山の陰ふかし
雪のうへなる峯のむら雲　専順
やかてかく替るへしとは思きや
雪ふみわくる小野の山かけ
うしとていなむ方も覺す
木の本をたのむ雪野は道もなし　心敬
聞しにかはるまつかせのこゑ
山里に今夜の雪やつもるらん
冬木の梅も香やはかくるゝ
山里はつもれる雪を籬にて　智蘊
おもふほとをは誰かしらまし
淋しさは跡なき山の今朝の雪　専順

たゝなをさりの人のあらまし
雪深したつねやはこん峯の庵　宗砌
うつみし霜に道そのこれる
たれ越て伊豆の高ねの今朝の雪　賢盛
その跡のこる宇多の御狩場
雪にきる笠置の寺の名も古て　宗砌
立てるも寂し松の一もと
鷺の毛のみのゝお山の雪の暮
暮行年の末になるころ
降雪の積る印を枝に見て
いかてむかしをしのひかへさん
くたる世の天津神樂の舞の袖
君かめくみそつみを忘るゝ（あけてイ）
佛たち雲井に高き名を聞て　賢盛
雪に猶闘の吳竹打靡き
梅さたかなる冬の一本　專順
羽風の道はうたかひもなし
梅匂ふ暦の末も年〳〵に　賢盛
しめちか原の秋冬の色
下もへのいぶきの山邊春待て
立方しるき市人のこゑ
春を待都の東あくる夜に
人こそすまね雪ふかき山　專順
さのみなと浮世に年をくらす覽　行助
かたふくからにさむき冬の日
我齢今年もくれはいかゝせん　智蘊
おしむへき月日流て春もうし
我身ふり行年のくれかた　宗砌

竹林抄卷第五

戀連歌上

我こゝろこそうはのそらなれ
それとなく見しを思ひの初にて　行助
なからへて賴む契の末いかに
またはつ草のねみんともせす　賢盛
見るはおもひそ猶まさりける
聞てのみ人はうからしつらからし（たつねなイ）　智蘊
いかにいひてか名をは立らむ
中立もまたこそなれねおほつかな　能阿
草の名の忍ふこゝろもみたれわひ
ことなしひにやいひもよりなん　賢盛
我たへかたきこゝろをそしる

しのはしよ泪も袖をたのむらん　心敬
なみたのとはぬ夕暮そなき
忍れとこゝろのしるをいかゝせん　專順
なみたのしらぬ夕暮もなし
忍るをもらす心よ誰ならむ　心敬
戀のやつれはいとはれやせん
雨の夜の忍ひかよひに袖ひちて　宗砌
君かあたりはかすますもかな
月もうし忍ひかよひの夜半の空
山にいらぬはこゝろなかりき
忍ふ夜を哀とおもへ空の月　行助
あふはうれしき春にこそなれ
忍ふ夜をしれはや月は霞むらん
ゆけはまたにあへる里人
忍ひかねまたねぬよはに起出て　心敬
行衞をとはゝいかゝ答へん
思ひわひ我々をかへて忍ふよに
さしていはぬそをしへなりける
尋ぬやと君か宿をやかくすらん　專順
もしかはりなは何とかこたん
をしへつる言葉はかりに宿とひて　行助

心の道やをしへならまし　賢盛
妹かりにゆけはなみたの先たちて
猶そぬれそふ歸るさの袖
思ひ侘ゆけとも人はあはぬよに　宗砌
おもふこゝろのなとちかふらん
行と來と同し戀路によは更て
神のめくみをうることやいつ
はかなくて難面中を祈る世に　專順
めくみのあらは身もたちぬへし
あはぬせに水のかしはのうらめしや　賢盛
袖ほしあへすさくらちる陰
花にこそ契りし人のうつろひて　行助
はかなやこゝろ何たのむらん
風の雲嵐の花を契りにて　心敬
ふきこむる袖の梅か香吹風に
花のちきりは妹もとかめし　賢盛
此あしたより人やかはらん
頼れぬ露のちきりに秋は來て　行助
あとなしことになれるあらまし
かけこしは夕の雲を契りにて　智蘊
おもふもむなし兼言の末

契よりきのふの雲は跡見えて　心敬
なみたすゝろにものおもふころ
契らすよたれに夕のうかるらん
人をまつ日のいくか過らん
後の世も同し道にと契きて　行助
おもへはいのちをしからぬ中
後の世とちきるをふかき頼みにて
ふたり消んとたれおもふ覧
末長き契りに後の世をかけて　賢盛
あはさらましと何おもふらん
契れ人尙後の世のあるものを　宗砌
さま〳〵にこそふたり成ぬれ
愚にや生れん後を契るらむ　心敬
いつの契そ身には覺えす
生れあふとはかり人をたのみきて　賢盛
またすといひて忍ふくれかた
明日しらぬ身にいく度の空たのめ　宗砌
かはらしとのみあひおもふ中
恨すよ神なるよいの空たのめ
けふも過ぬと我そおとろく
あた人はたのめし宿の前渡り　專順
むなしく過るたのめをく中
かけてまつまへのたな橋朽ぬ間に　賢盛
あらぬさまにはなとかはるらん
契しをとへはしらすといふもうし　專順
我身もくちねこふる世もうし
あれはとて人のあはれむ命かは　行助
身に猶たのめ君かことの葉
僞のすゑをはかなきいのちにて　心敬
なひくこゝろもうつろひやせん
たのましよ世は定なく人はうし　宗砌
心ほそくもなるはこのくれ
明日までの身をたにしらす戀佗て
我はなき名を又歎くころ
戀しなんとはかりの世に住佗て
又も無名や身よりたゝまし
戀しなん後をおもひの夕煙　行助
人はこゝろのなとなかるらん
戀しなはむくふへきさへうき身にて　宗砌
あはれもかけす尙そつれなき
此世にはあらしといふを問もせて　心敬
おほつかなしや雲風の色

まては猶はれぬ思ひの雨のくれ　専順
あやめも見えぬ秋の夕暮
月まつといへはなみたのあやにくに　智蘊
こゝろしほるゝ夕暮の雨
待ものをいてはといひしよはの月　能阿
あはゝそ鳥のねをもかこたん
夢にさへ待人うとく目は覺て　宗砌
道なきほとに雪のふるころ
心たにかよはゝ猶や待て見ん　専順
かりねの床は夢も定す
端近くたのめし宿に待更て　心敬
君か來ぬ夜を待つゝそふる
幾度かねやへもいらてかこつ覽　専順
やまぬおもひそなみたさきたつ
更てこそ待もよはらぬよいの雨　能阿
あたに契し人のことの葉
今こんのよはをは誰かかさぬらん
とはすとせめて余所にもらすな
うらめしや待夜を誰とかたるらん　心敬
かさねてとはゝ逢もこそせめ
待人をたのむゆふけのちかふ夜に　宗砌

いつはりや夢のさはりと成ぬ覽
とはれぬ門をたゝく松かせ　行助
つれなやなとか知らす顏なる
言葉にも心の松はあらはさて　能阿
命をさへにかこつ戀しさ
とはれぬを待てふむしの名（はかれよイ）もつらし　行助
雲吹風に月は出けり
秋更ぬいつまて人のまたるらん　宗砌
あけなく戸ほそ月は入けり
待よひのいたつら伏に秋更て
朝夕ふかき袖の海つら
懸そ山待夜の塵（成ぬイ）や拂ふらん　能阿
はらふたもとそなみたかちなる
つもりきな待ていくよのとこのちり　宗砌
たのめとていひしはかりの暮ことに
まちていくよのなか月の月
こぬ夜はゝとひしにたる月もなし
待そらあけて雲そわかるゝ　専順
身をいたつらにいかゝなさまし
あへる夜もあるこそならひなからへよ
竹のすゑ葉はなひくとそみる

世をしらぬ人のこゝろはおれふきて　宗砌
いまはの月そひとりかたふく
とへかしななみたのそこの袖の秋　能阿
月まつほとゝうたふあはれさ
いかにせん人はとひこぬあきのくれ　行助
おもひやるにもあちきなの身や
又やみむ新手枕の夜はの月
さためぬまくらかたる行する
君とみる月は中〳〵なみたにて　心敬
なかれての世をなにちきるらん
月もはや西になる比人のきて
更行よはのこゝろくるしさ
かたるまの月をまくらの西にみて
おもふこゝろそとをくつれ（ゆくイ）ぬる
かはらしの後の世まてをかたるよに
わかれてみれはあかつきそうき
あふ夢やさめぬうつゝに成ぬらん　智蘊
なのらすとても我としれ人
うき中やむかふ時たにわするらん　心敬
中につくすは言葉なりけり
へたてうき夜のころもを恨にて　宗砌

はかなやこゝろおもひすてはや
あふ夜さへ過しうらみに我なきて　心敬
後にちきるをいかゝたのまん
あふ夜たにつゐにこゝろのとけもせて　専順
くるしやこゝろあちきなの身や
一夜れし人にあさくもわかとけて　心敬
おもひ出てはなとわするらん
今夜のみ絶にし人のとふもうし
あまりうき世を人にとはゝや
別てふことはたか身にはしむらん　賢盛
おもひはしるにすめる世の中
そふとてもつゐのわかれをいかゝせん　宗砌
かこちてあかすなかきよのそら
しはしまて別やはてんいかゝせん　能阿
たゝすむかけそ月に見えける
よしさらは歸るさいそけ名やたゝん　行助
かゝる契はありて何せん
なくさめて余所の歸さに問もうし　心敬
なをもや夢の契り待見ん
残る夜たゞいたつらふしの別路に　宗砌
起てみつからむすふ五更

色つらきはなたの帯の衣〳〵に
　袖からはしき人のうつり香
衣〳〵の夢にまきれぬ花もうし　智蘊
　圓居する春の盃めくる間に
なみたをそゝく別路の袖　能阿
　いかて衣の玉は見さらん
泪にも哀はかけぬ歸るさに　心敬
　法を求むる人そかしこき
歸るさのあかつき起はなみたにて
　月におとろく有明の春
とけてしも打ねぬ人に起別　賢盛
　おもふ程にはこゝろをくらす
衣〳〵の道より我もかへる夜に　心敬
　なるゝそ夢の契りなりける
余所に見し程は別も知ぬ世に　行助
　おもへは悲し身のうへの夢
いつまてか人に別て殘るらん　専順
　たのめ置ても何にかはせん
命をも人をもしらぬ衣〳〵に　心敬
　月みすは覺る夢をやしたはまし
人の名殘のあかつきの鐘　宗砌

　夜ふかき床に人そ休らふ
まよへとや別の月はかすむらん
　曉起に馴るゝよな〳〵
月そうきいく歸るさに殘るらん　心敬
　また名殘ある明仄の空
月そ憂き幾衣〳〵を送るらん
　またふかき夜に殘る睦言
たか爲に休らふ月そいそくなよ　智蘊
　秋の色つれなき人にみるもうし
よし別路は月もくらかれ　宗砌
　人なき庭はたゝ風の音
歸るさに心ほそくもたゝすみて　心敬
　なみたの露そ消かてにをく
草も木も思ひの色の衣〳〵に
　霧にへたつる今朝の別路
朝貌を見る間も人はとゝまらて　能阿
　うかりし人に露もみたれよ
別路の一むら薄かれやらて　心敬
　おもひやるにも袖は露けし
とはゝやな別し宿の花すゝき　能阿
　きのふ今日こそ物おもひけれ

戀しさは別し後をはしめにて　賢盛
　人はこゝろをおきし別路

消わひぬ朝の霜の後の暮　宗砌
　歸るさの物とや袖をぬらすらん

後のくれまて人はおもはし　專順
　別るゝ道の長き黑かみ

ねくたれの姿を人の見んもうし　賢盛
　おもひいかにと人なとかめそ

ともかくもいはゝこゝろやあらはれん　專順
　うきもいかなる契りなるらん

とにかくにいひのかるれと名は立ぬ
　何事か人の詞にもれぬらん

あひもあはすも名は立にけり　宗砌
　空さへつらき衣〳〵の床

數〳〵に塵の立名をおもひ侘　賢盛
　くゆりわふれはなみたこそそへ

空燒の煙の末に名の立て　行助
　曇るをたのむ暮もはかなゝ

月にさへこゝろ置るゝ名の立て　宗砌
　胸のおもひを人はしらすや

うき名にはいひけたれてやもれぬ覽　能阿

　ともに忍ふろひとにとははや　智蘊

果〳〵はたか名の世には洩ぬらん
　忍ふこゝろも今はよはりぬ

問かしなうき名立ともいかゝせん　宗砌
　かりそめなりし夢の別路

又こぬはうき身の程や見えつ覽
　見まくほしきは君にこそあれ

また來ぬはさらぬ別の跡に似て
　むすふ夢にもつらき面影

又もこすなりにし後の床荒て　能阿
　惜む別の後もたのます

手枕をかはさぬ秋に閨ふりて
　つもるはうらみさては戀しき

たのめしは跡なし事の雪の庭　宗砌
　憂事の數かと年は重りて

思ひの眞砂いはほともしれ　賢盛
　したの思ひそやるかたもなき

さゝれ石のわれてあはんも知ぬ世に　能阿
　とはに逢見ん憂人もかな

年を經る戀の山松朽つへし　智蘊
　衣手おもくしほれ來にけり

なけきこる戀の山賤我なれや　専順
思ひの色を誰におほせん
戀すてふ事を重荷にくるしみて　賢盛
みしかき夢に似たる別路
玉の緒よ又も逢すは絕つへし　能阿
おとろかしてはまたも問來す
世になしといひてかはれる人はうし　心敬
なけく思ひよ天地もしれ
國となり世となるよりの戀もうし

竹林抄卷第六

戀連歌下

夕の露もたゝなみたたる
我中にまた人しれぬ秋のきて　専順
別路になくさめにしもうつろひて
おふる葛葉もあきに逢ふころ　心敬
夜な〳〵の涙の月に鴈なきて
眞萩露ちりものおもふころ　賢盛
おほろ月夜に袖そぬれそふ
露をたにわするな消ん草の原　心敬
よしやつらきもすまん世の中

存命はおもひけりとやしられまし　賢盛
こゝろの底はたえんとやする
つらさをもしらせすうへはつれなくて　専順
いまかくこふる程そくるしき
もとの身の誰につらさをみせつらん　賢盛
たゝ夢なれやいそくきぬ〳〵
諸共にみすしらすとやいひてまし　専順
こやとは人にいつかいわれん
いとふとも行て心は見まくほし　行助
なくれあらはにきく人もなし
風たにもおもふかたより吹はこて　専順
恨ある人やわすれてまたるらん
おもひすつれは雨のゆふくれ　心敬
なみたよさのみ袖なひたしそ
物思ふ程をは見へん色もなし　宗砌
我まつ宿はこゝろさはかし
思ひなき人はしつまり更る夜に　賢盛
見めくらしけりよもの山〳〵
もの思ひまきれやすると宿出て　行助
あわんあはしをさためぬもうし
心にもまかせはいかてものおもひ　専順

たちゐにおつるなみたかなしも
夢になせ我おきふしの物おもひ
なかめわひぬるゆふ暮のそら
さりともとおもひなれそ我こゝろ
うはの空にも名こそ立ぬれ
煙ともなすなよ忍ふ身の行衛　心敬
やまそいつくも富士のしたなる
烟をは誰にくらへん我おもひ　専順
又たちかへるおもかけもかな
たき物もおなしおもひの煙にて
をのかものとはなみたをそしる
袖にあるにほひは人の形見にて　宗砌
われとつくれる罪はおそろし
その色をかりのまゆ墨はなやかに
見初しをかはらぬ末の契りにて
おもふすちなれあくるくろかみ　賢盛
別ても又あふ坂をたのむ世に
くしさす髪のあかすともしれ
露の間も心は行てそふ物を
こすのまよひにきゆるおもかけ
耳とゝむるは心引かた

面影ももらさぬ釣簾に立そひて　専順
匂ふ櫻のおくふかきかた
誰となき釣簾のおもかけ花に見て
まれなる中は新まくらかも
人を見し夢さへ花にさめやらて　智蘊
かりそめにみしこそ戀の初なれ
花にとひつる宿のおもかけ
契をきしを人よわするな
今夜たにとはすは秋の月も見し　能阿
今こんまてとたのむおもかけ
忘れしの人のまことや夜半の月　専順
日くらしの啼聲涼し秋の空
月まちてとそいひし言の葉　賢盛
一夜ねし片山もとの春の暮
忘れぬ夢路月にかすむな　智蘊
わくれは野邊の露そみたるゝ
月かけは袖のぬるゝをたつれきて　賢盛
秋の寐覺に我おもふ事
月ならてしらしな涙そらにみよ　専順
雲のかゝれる空そさひしき
なかめわひぬとは人もしれ月もみよ　宗砌

あわんゆふへをかそへてそまつ
憂中のわれたる月をなかめわひ　賢盛
かけものふかくちるや藤かえ
見つゝとへたそかれ過ろやとの月　能阿
故郷なりし人もわすれす
なかむらんとおもふ月を形見にて　心敬
いそきつる人の別の跡にねて
月はかたみとなるもうらめし　宗砌
こゝろも空にものおもふごろ
なかむれは星の數〳〵袖ぬれて　智蘊
あとこそしらね春の歸るさ
有明にゆく〳〵月の影もうし　賢盛
秋風さむみ夜こそ深ぬれ
おもひ侘行は鴈なき月落て　心敬
おもふこゝろそ空にうかるゝ
鵜なく霜夜の月にひとりねて
なみたそひとり我にかすめる
浦やましまつ夜なからの歸鴈　賢盛
わたるへき世のかきりしらすや
人こゝろまたあら鷹の手もふれて
犬さへつらき中のかよひ路

はしたかのかりの契に戀わひて　行助
八重むくらなる中の言の葉
夏虫の音になく程を人とはて　賢盛
いている人のしけき宮もり
うきなかやむしのしるしもかはる覧
秋のこゝろに戀そまされる
うれへてもふたりきかはやきり〳〵す　能阿
夕時雨又袖さむくめくりきて
人こそとはね木の葉ちる宿　賢盛
あらしもつらき秋のさ衣
なくなみたおつる木葉の露に似て　能阿
つらき嵐の秋もふけけり
色替るこゝろ言の葉ちり〳〵に　賢盛
うきたるこゝろよるかたもなし
言の葉をうたかひおほく聞をきて　専順
たゝありなしの人の言の葉
玉章を墨つきうすく書けちて
そのまゝとわぬ人はうらめし
憂中に唯一度のふみを見て
はてはなみたや海となるらん
愚なる筆はおもひをあらはさて　宗砌

またかきくらすなみたとをしれ
玉章につくさぬ筆をうちをきて　専順
つかひもおもふ程はしらせし
玉章に筆のかきりは書やりて
すてつる後は身こそやすけれ　宗砌
玉章を手にとる程はたのみきて
かへしておもへ思ふはかなさ
我やもし此玉章のひとたかへ
何事もむかへるかへに破はや
きく耳ゝなししのふ玉章　心敬
おもひもあへすいまの音信
雨風の夕にしのふふみを見て
たゝすをたのむいつはりもかな
われにはとおもはぬ文をおとろきて　賢盛
いひそめし身を恨てもなく泪
かへすをきみかふみになさはや
かた〳〵になる中道は憂し
打とけぬこゝろはしたの帯に似て　宗砌
夏のくる南の風や匂ふらん
かたみの帯のみしか夜の空　心敬
はけしくなれは風そ身にしむ

扇のみむなしきねやの形見にて　宗砌
笛竹の一夜そひねの後の暮
あふ事いかにかはる中のを　賢盛
ぬるかたを同し心に契をき
ほす夜もかなやとふのすかこも
月すみわたり松風そふく
見し人は露なこりなく夢覺て　専順
しらすよ我身いつちたのまん
いまこんと契し夢の歸る夜に
きくはかりにてそわぬかなしさ
夢にゆく我をや鐘の歸すらん　心敬
かすむなみたの末もおほえす
ほの見えし夢の中はに鐘聞て
おもふかたよりふく風もかな
夢もたゝあふとみえすは何かせん　専順
面影は我身はなれぬ情とや
よな〳〵夢そまくらならふる　賢盛
ひとのまことは身にもおほえす
ねぬる夜のうつゝにとへは夢覺て　宗砌
いまはのこゝろみたれすもかな
見し夢かとはかりたとる人のきて　心敬

なみたの外の手枕はなし
黒髪をかきやる夢のさむる夜に　専順

枕にはちよしるとこそいへ
まとろむを夢にとひくる人やみん　心敬

闇に吹來る山の秋風
涙ふり雨音信て長々夜に　智蘊

木の葉つくして冬は來にけり
きのみなと涙の袖にしくるらん　能阿

人にはいはす物おもふくれ
戀しさのいかてなみたにつけつらん　賢盛

こぬ秋風のしのふにそふく
戀侘るこゝろの露やみたるらん

みきりひたりにわかつあらそひ
やそかたも涙をのこふ袖ぬれて　宗砌

まなく落くる瀧津しら浪
泪にけ袖のせはきもよもしらし　能阿

しらはくるしき海やなからん
みせはやな泪のしたのよるの床　宗砌

憂身をすては人にしられし
戀はたゝ我かたふちとなるものを　能阿

の嶺やつこをあわれともしれ

おもひにはいかゝ生田の根わひ　賢盛

へたつる中は霧さへもうし
あふくまの名をたにのこせ涙川　専順

まつ程のとふのすかこもみふにねて
袖にせかはやあふくまの川　能阿

かはりゆく世やきのふなるらん
淵を瀬になす人もかななみた川　宗砌

かきりもなみたいかてつくさん
わか恨海の千ひろもふかゝらて　賢盛

いりてもくるし戀の山道
みるめなきかつきやせまし袖の海　専順

くるしき袖に浪もかけけり
かれぬるか人もこぬみのはまつゝら

唐船の夜半の行末
ぬれわふとつけよや袖のみなと風

おもわぬものをなとよふこ鳥
なこそとて此關すへし人もうし　智蘊

身にはいつくのたれをたのまん
人毎に憂中ことをいひそへて　賢盛

おもへは今に似たるいにしへ
たえねたゝみすしらさりし中そかし　心敬

くるゝかたその末もしられす
よるいとのむすほゝれつる中たえて　宗砌
見はてぬ夢そ行衛はかなき
恨わひぬれは松風おとつれて
こゝらの年にあへるうれしさ
つれなきをなかはゝうらみ思ひわひ　専順
わすられぬこそおもひとはなれ
誰なれはうらみて後もまたるらん
せめては余所のかへさにもとへ
ふた道のうらみも絶て戀しきに　心敬
こふるやいつの契なるらん
恨つるこゝろのすゑはあともなし　専順
たゝ夢はかりあふは逢ふかは
恨こしいたつらふしの夜をかさね
しらすつれなきいのちいつまて
人の身を恨よとてやいとふらん　宗砌
とへやなみたの雨のくれかた
身をしろも人にはうらみあるものを　行助
くる人なしの宿そふり行
伊勢の海やおふの恨を身に積て
石見のうみのかはるなみかせ

人心うらのあらしほ松こえて　心敬
のちのゆふへをさためぬもうし
見つゝとへ月もや人をうらむらん　宗砌
契つる人はとひこてあくる夜に
身をこそしらめ月はうらみし　能阿
おもひゆへ夕とゝろきも憂物を
身のくせなれやさのみうらみし　心敬
たれとても又つゐのかりの身
うらみしよ人やは人にそひはてん
なみたは露と袖にをくなり
うき人の忘れかたみはうらみにて　宗砌
ぬるゝ袖をやつゝみはてまし
恨をも世のうき事にいひなして　専順
心よりいわぬうき名やもれつらん
世をうらむへきことわりもなし　宗砌
心なしやの身もふりにけり
いひ出ぬうらみに年を送り來て　賢盛
よし野のおくは岩のかけ道
をくれしといひしをかたき契にて　宗砌
ちきりも夢となるそかなしき
なきあとに行末たのむ文を見て　心敬

名もくちはつる物にありけり
しみのすむ文をむなしき形見にて

竹林抄巻第七

旅連歌

かへる道をや花にたのまん
ゆく人に春の柳を今朝おりて　智蘊
いつの暮とかしひてたのまん
いまはとてなさけすゝむるはなむけに　賢盛
今ぞ名残りのかりやゆくらん
故郷の秋しも旅にわれ出て　行助
いかはかり旅行袖はしほれまし
いつれはしのふけふのふるさと　能阿
わかれし跡の床もなつかし
今夜より旅ねやすらむみやこひと　行助
雲の外には鴈もなくなり
梓弓いる月影に旅たちて　能阿
のちのあしたにあへるくやしさ
旅ねせしかた山櫻ちり過て　智蘊
あこかれあかす秋のよな〳〵
旅ねする紅葉の山のうち時雨　賢盛

いつくにも曇とみえす月はれて
秋の夜ふくる峯のかりふし
うき世のやとは人もとひこす
いつくにかともなひはてん夜はの月　能阿
わか身にたのむ行末もかな
かへりこん事もさためぬ旅の空　宗砌
露のなさけもあれなおなし世
見すしらぬ人に宿かる雨の暮
たま〳〵あへる法の言の葉
駒とめておなし宿かれ旅の友
こゑ〳〵かはすひとの宿〳〵
旅の暮のる駒いはへ犬ほえて
詩の言の葉も友となりけり
旅にてはむまやのおさもうとからす　能阿
さのみは人をいかゝとめまし
山かけの旅のやとりはちいさくて
こゝろつくしの旅の行末
宿いては又やしくれんそらの雲　心敬
この山もとは眞柴たになし
秋さむし煙もたてぬたひの宿　智蘊
こゝろへたつなわかれ路の末

けふまでもなれしぞ契旅の友　　行助
　賤士かやのまへを過行旅の道
宮古出てそあわれをもしる
　忘れやすると待ぞわひぬる
都人いてし日數をかぞへ來て　　能阿
　かなしや戀し夢にたに見す
旅は秋故郷いかにあれぬらん　　宗砌
　いつとたのめはかほど憂からし
かへるへき日もかきりなき旅にきて　　專順
　空行雲のまよふ身はうし
たか里も見えぬ高峯を越へ侘て　　賢盛
　むかしの夢の面影もうし
あしたには雲ゐる峯の旅まくら　　宗砌
　かへりて見はや春のふるさと
なみたにやおぼろ月夜の旅まくら　　專順
　山やたえ／＼あけわたるらん
かり枕夢のうき橋あともなし　　智蘊
　おもふもとをしあとのふる里
旅枕草となみとにへたて來て　　能阿
　こゝろのなすやさま／＼の道
夢にたに野山を過る旅まくら　　專順
　誰にちきりをむすふともなし
里の名もしらぬ野中の草枕　　宗砌
　そなたの夢に我やゆかまし
古里もをなし野中の草枕　　專順
　末もつゝかぬふる里の道
草枕夢の中半に目はさめて
　太刀さけはきてやすむ旅人
故郷の夢やつかの間ひとねふり
　たひねの枕月ぞかたふく
故郷になみたつたへよ秋のかぜ
　かりねのまくら夢たにもとへ
故郷の人もやひとりあかすらん　　行助
　たゝわれひとりのこるへきかは
人はみなたひたつ里にしはしねて　　智蘊
　うすくそのこる袖の梅か香
山里に一夜はかりのかりねして　　專順
　池になくひとりのをしを身にしりて
旅ねかなしき冬の山さと　　心敬
　人のさとわく木々のむら立
かりねせし野邊のおちかた明る夜に　　專順
　おなしなかれをむすふ里／＼

涙なと旅ねの草（袂イ）をしたふらん　心敬
　古里は野にふく風の舎りにて
たひねの夢はやすくさめけり　宗砌
　山路の庵におくる年月
旅枕ひと夜も明ぬ雨きゝて　心敬
　はやくのことをおもふ曉
わたりせん河音たかし夜の雨　専順
　みるもかなしや別ゆくかけ
旅人のあさ川わたる袖ぬれて　宗砌
　岩もる水のすさましき山
あふ坂や關のを川のあさ渡り　心敬
　渡るを河の水そにこれる
旅人の關のこなたに待つれて　能阿
　言の葉の通ふはかりを頼む身に
ふねよふゆふへ川風そふく　宗砌
　ありなしはさためかたゝな法の道
河のむかひに夜舟よふ聲　能阿
　水の月手にとる計影深く（てイ）
夜舟の棹の音のさやけさ　心敬
　霜夜そ水の月もさやけき
舟よはふあかつきかたの淀の里　専順

　野をゆく人は遠くこそなれ
淀川やくたる小舟のはやき瀬に　行助
　中にかけはや夢のうき橋
小舟まつ夜の河邊の旅まくら
　薪こる男のかよふ山かけ
朝夕にをくるや風の渡し舟　賢盛
　くるしきものは此世なりけり
わたりする朝夕船の綱手なわ　専順
　けふ幾日雪けは人をまたすらん
はる行水にわたる舟長　賢盛
　ひとりそぬるゝ秋のころも手
夕霧に舟さし歸るわたし守　能阿
　五月雨ふれはまさる川水
渡し守舟にいくかをくるらん
　こかれいてなんことはくるしな
見すしらす此友ふねにあひ乘て　宗砌
　哀にもおとろへけるよ翁さひ
ゆきゝいよ〱とをき舟みち　賢盛
　いそくこゝろをつなく古さと
興津舟そらにからろを鴈啼て　智蘊
　あさゆふ雲そたちかはりける

風ならでこゝろあてなき興津舟
　猶とをさかる中はうらめし
古里の山たに見えよ興津舟　行助
　月出ぬ山にこゝろのさき立て
おきこくふねはたとるさ夜中　能阿
　人はしらすやかゝるうき恋
友ふねもはなれ小島の興津浪　宗砌
　朝霧かくれのこるあり明
秋風に島こきいつる舟見えて
　えそたのまれぬ命兼言
おもひやれ千鳥つたひの船の道
　うきたる身とていつち行覧
漕つれし夜舟の月はかたふきて　智蘊
　なをさりの玉章ならはとめしとや
たひのつてをもいとふはやふね　心敬
　かわしもはてぬ言の葉の末
なた過る旅の友ふね漕ちかひ　宗砌
　くるゝまてには身をもたのます
朝ほらけ舟行あとの浪をみて　心敬
　さとらすは法のさはりと成やせん
ふねに風見るおきのうき雲

　おもはぬ雲そ空に見えたる
ときかへれ風のあやしき舟の道
　移り行宿は心もとゝまらす
山路のあらし舟のうらかせ
　麓に来てはその山もなし
松原にいりぬる賤のとまりふね　智蘊
　いり江を廣みうかふ鴛鴨
舟つなき人は歸てふる雪に　賢盛
　里かとおもふすゑの一むら
遠き江の舟よりのほるうす煙　心敬
　難波の海にむかふ彼きし
わたのへや大江の小舟こき出て　宗砌
　君かこゝろよとる人はたれ
入舟のかちをとすなり室の海
　うすき衣のしろき海人
漕よする舟のかとりの浦の名に　專順
　大和路の山もはるかに暮そめて
もろこし舟そたのむそらなき
　をくるもとをきあとの年なみ　心敬
山見えぬもろこし舟のわたの原　宗砌
　つゐに行へき道そ西なる

舟とむる唐人のつくしかた
　我さよころもぬれつゝそうき
おもひやれ浪路に人を松浦ひめ
　又さはきゝぬ葛のうら風
浪のまにありその濱路いそく日に　專順
　はまゆふなみの幾重こゆらん
三熊野の浦めつらしく山をみて　能阿
　ころもほすへき宿をとはゝや
都よりさほの大和路たとり來て　專順
　法にもいるやしきしまの道
するかなるかた岡のへにつかれきて　能阿
　けふりの外は月そさやけき
あつまのや草のまくらの露ふけて　智蘊
　おとすなみたも宿やなからん
枕かるいなのさゝ原冬かれて　心敬
　いかなるくまにかりほさしてん
秋寒きすかのあらのゝ旅の暮
　おもひあまるをいつかしられん
枕かる野路のしの原月まちて　能阿
　くへき宿かとたのむさゝかに
八橋のゆくてにとをきたひの道　賢盛

　うつゝといふもたゝ夢の中
都出ていく夜旅ねのうつの山　行助
　さめやすき夢のおもかけ中〳〵に
かりねくやしきさ夜の山風　專順
　つかのほとりにかよふ草かり
手にもてる鎌倉山を越なれて　賢盛
　むかひ行關路の末やかゝみ山
あしから越てしるきふしのね　行助
　宿かる山の杉のもとたち
あしからや岩ふむ道に日は暮て　心敬
　旅立し古郷人をまつ暮に
山路は雲のかへるをそみる　宗砌
　枝より露のつたふ木の本
深山路は鳥のなみたに我ぬれて　心敬
　行衞もしらぬ風は冷し
唐のとらも住へき野を分て　行助
　ふもとの里に松風そふく
わけつくす野は暮はてゝ人もなし　專順
　かたへしくるゝ山のへの雲
里人はぬるともしらしたひの袖
　つてにもまつといはすうらめし

遠くきぬ都の人やわするらん

　戀しやこゝろわくかたもなし

遠くきぬ宮古はいつちたひの空　宗砌

　草のまくらにあかす月の夜

かくてたゝ宮古ならはや旅の友　専順

　とふかひなしやすこき秋風

暮ぬとてかけたのむ野のひとつ松　心敬

　終に行道の此方のかりの宿

やすみし程をいそく旅ひと

　出舟のもよほす棹の音はして

とりあへぬまていそく旅ひと　能阿

　身のうき事は旅にこそあれ

國遠くゆけはしるへき人もなし　行助

　われをあわれとおもひこそやれ

さまざまの人にしたかふ旅もうし　心敬

　西にむかふそねかふみちなる

あつまより春を都にともなひて　智蘊

　又ねになれは床もなつかし

かへるにも同し宿とふ旅の道　心敬

　さてもはかなやいひし言の葉

先立をきけは宮古もいそかれす

　すむへきかたと山そ見らるゝ

古里はまた近くなるたひの暮　宗砌

　こゝろさはかす中そらの雲

古里にちかつく山の見えかくれ　賢盛

　御代のたからを運ふむまや路

しら浪のたゝぬ山をは夜すきて　専順

　都の山はなとかすむらん

月ほそき草の枕に春くれて　智蘊

　かりそめに草引むすふ野への庵

たひとはみるやまくらとふ月　賢盛

　こゝろつくしの旅に出つゝ

故郷もさそ雨の夜の草枕　宗砌

竹林抄巻第八

雑連歌上

　言葉や松をはしめなるらん

春たては人の千年を祝ふ世に　能阿

　ちきれる春の面影もうし

若水に雪を汲まて身は老て　心敬

　言葉はかりのあらましはうし

身をいはふ初春ことに老の來て　宗砌

星あらたまるとしは越けり
冬の水春の木かけに移り來て　賢盛
猶梅か香をしたふ木かくれ
年毎に去年を忘るゝ春もなし　能阿
曇りかすめる峯の有明
古寺の春の霜夜に鐘なりて　賢盛
古きやしろに梅にほふころ
雪薄きひはたのしのふかつもえて　心敬
紅の日影そ靡く夕かすみ
いかなる洞に雪のこるらん　賢盛
鶴のはやしも枯て目に見す
片山ゝ霜夜のあしたうちかすみ　專順
たか心かくまて染し春の花
かすむはやしの筆のうすすみ　智藴
山守のこゝろの花を風もしれ
朽木のもとにかすむ柴の戸　專順
花の頃おほえす日をや送るらん
春草高し歸るふるさと　賢盛
見るにこゝろのうつろひやせん
尋はや浮世の外の山さくら　專順
あれはそあへる年〳〵の春

またさりき老のすゑ野の花盛
山路をゆけはうくひすそなく　智藴
老の坂こえて相見る花もうし
身を捨てたに山はさためす
花さけはいつくも浮世いかゝせん
二度は人とならしと思ふ身に　心敬
たゝ月にめて花にくらさん
うき身もつゐに世にはとまらし
あらましは花散山をまつものを　智藴
うき世の中よさもあらはあれ
ちらぬ花老せぬ人もなきものを　心敬
ありしを夢にたのむはかなさ
人の世をみれは花こそつれなけれ
ゆふへの雲をなみたにそ見る
花も世のうれへの色にうつろひて
いつをかきりの心ともなし
花も葉もおもへはくちぬ世の中に
花さくたねな殘す朝かほ
遠き代の春ゝ桃園あとふりて　賢盛
まとをのころも移り香もなし
春ははやむかしの今朝に夏のきて

いつをまことの色とたのまん
墨染にそめはやけふの衣かえ　専順
かくれ家のかきねの梢しけれたゝ
世を卯花はちるもをしまし　行助
待つる月のかゝるやまの端
郭公こゝろくらへに夜はあけて　心敬
ひまなきしつも君あふくなり
まつる日のものみに出る人おほみ　賢盛
車のみきにのりしかへるさ
人のみる馬場のひをり時過て　宗砌
くるゝ野原にひろき澤水
植渡す田面の末はみとりにて　賢盛
もすそゝぬるゝ歸る道しは
植渡す澤邊の田子の野を分て（末イ）　専順
あけわたりたる河水の色
鵜かひ舟かゝり程なくくたる夜に
月めくり庭鳥うたふ聲はして
關のこすゑの秋のやまかせ　智蘊
七夕のあふのちの秋かせ
目にたてぬ垣ねの梶の葉は落て
とししる星は七つ九つ

梶をとり菊をつむ日の秋毎に　宗砌
手をあはするはうらかおもてか
ひたりみき分る小鳥のあらそひに　賢盛
立むら雀さわくいろ鳥
小鷹すえこゆみもつ人いさなひて　宗砌
草葉そよめく五月雨のころ
小男鹿のわたる野原に日は暮て
ね覺夜ふかく猶やしくれん
秋の露おひのまくらをはしめにて　専順
あかつきかたにむすふあか水
なれこしをこん世の月もわするなよ　心敬
今年もなかは過ろふる（里イ）寺
身にそしむ老にたのまぬ飛鳥風　宗砌
いつの世に別そめてかわかるらん
冬にうつろふ野の宮のあき　専順
淋しく過る松の下かけ
蛩もきけ磯の寝覺のさよ時雨　心敬
袖はけふりの香にそしみぬる
冬こもる賤かふせやに梅開て　専順
かたるも聞もおもひてそなき
いたつらに春秋くらすかた田舎　智蘊

年〳〵のおとろけとてやそはる覽
おしみかなしみうつる春秋　能阿
むかしをも今になしたる我心
かくても經ぬるしつのをたまき　智薀
なへてかすみや山ひめのきぬ
たか爲にさらせる布そ瀧津浪　専順
身のうへに見るもすさまし水の泡
岩なみたかき瀧のしたみち　行助
なかをいかてかさくるなる神
雨すくるこなたかなたの峯の雲　宗砌
消すやなみのうへのあわしま
まゆのことたなひく山は雲間にて　賢盛
澤にそ山のかけもなかるゝ
おのへよりさまよふ雲の末はれて　専順
降積る雪の山もと暮る日に
かね一聲の遠の杉村　心敬
松一むらに浦そ暮行
遠き江の煙にくもる鐘の聲
うき雲は日の入山に猶見えて
なみのうへなる與津しま山　能阿
なれもやもめの鳥なくなり

風さはく夕山もとのひとつ松　宗砌
とゝまりて名におふ宮は神さひぬ
ならの下葉にのこるゆふ（山イ）かせ　心敬
聞なれぬ鳥の音さひし谷の奥
名もしらかしにましるときは木　智薀
獸も君かこのときいてつへし
名も木たかしや桐にすむ鳥　賢盛
よそめはそらにある世とそ聞
陰高き森のはゝ木々風落て　専順
身に何事をありとたのまん
ふりのこる我はゝ木々のかけもをし
すむ山人と身はなりにけり
植置し庭の小松の陰ふりて　心敬
しのふといふもなをさりの程
小松さへおふる軒はの草かくれ　宗砌
またしらぬ深山の奥をしめ置て
眞木たつ庭のゆふ暮の色　心敬
こゝろの花よみるに替るな
古郷は軒の朽木を友として　能阿
遠き山かとおもふうき雲
軒にみし梢もくるゝ雨の日に　心敬

人そうき何ゆへ月もまたるらん
となりなる木のおほふ我宿　宗砌
床さむけなる雪のむら鳥
風渡る竹よりをちのくるゝ日に　能阿
此岸をはなるゝ後の世は遠し
さとにほりわけうふるくれ竹　智蘊
うきしつみある我よ人の世
此村のさかひの竹を風こえて　宗砌
雨にやならんふく風の聲
末なひく田中の竹に鳩啼て　心敬
冬枯の野邊に淋しき色見えて
夕日のしたの水の一すち
深山の川のさむくなる音
夕されはわたる人なき瀬をはやみ
あたしこゝろは色このむひと
埋木にかゝりて消し水の泡　能阿
松をやうつむかけの高しほ
うきみるのはつかになひく浪の上　專順
棹さす舟のくるゝ淋しさ
ふかき江の蘆の葉そよき降雨に　心敬
稻葉の風の音そしつまる

降雨のあしの丸やは戸を閉て
何事を夕の月におもふらん
雲と山とのあなたなるさと　專順
何國をさしてかけとたのまん
ひまことに雨はふるやの板ひさし　宗砌
花たち花の古郷はうし
匂ひなき釣簾に夕の雨もりて　心敬
袖さへぬるゝ道芝の露
いにしへの宮のうち野の原を見て　宗砌
月にやたれも道拂ふらん
忍ひぬる御幸のかへさ夜かけて　心敬
床ちかゝりきとのゐする聲
小車をふけぬる門に引いれて　能阿
ゆく螢釣簾のま流く照すなり
たか乘るならし夜半の小車　賢盛
ゆふへの道にまよふ小車
夜るひかる玉をいつくにたつねまし　行助
その神山に手向をやせん
家の風したふかつらをおりわひて　能阿
けになつかしきいにしへの人
學ふへきこゝろのおくを文に見て　專順

わかるゝことはならはさらなん
はかなしな文を形見の師のをしへ　行助
たのむもはかな文の言の葉
忘れ草しけきを庭のをしへにて　心敬
うらみし文に又そむかへる
若き世にまなはぬ道はかひもなし
糸をかけたる袖のさゝかに
をしへあるもしの數〳〵あらわれて　賢盛
みるやたよりの文の言の葉
たれありてむかしの道を敎へまし　行助
おもひなくさむほとのはかなさ
いりぬへき道をはしらて讀歌に　専順
薪をおへる人かとそ見る
山賤をわかことの葉のすかたにて　心敬
つゝむ名も世にかくれなく成にけり
むかしなからの大和ことの葉　宗砌
御階のもとに物もふす人
君かめす歌をはるかに聞へあけ　賢盛
面影はひたりみきりに立そひて
あはするうたのいにしへの人　心敬
あふきもてきぬ遠き人の代

敷島の道しつかなるそかの里　能阿
捨えぬ身とそ袖はぬれけれ
たとるまに年は老にき歌の道　宗砌
おもへはふみやなさけなるらん
武士の弓とる道はたけき代に
胸なる月にひかりそへはや
勢を身はひきとらぬあつさ弓
三葉四葉の家そさかふる
武士のゑひらの箭なみいろ〳〵に
思ふねかひのはやきみたらし
はなつ箭のいたる所はこゝろにて
やすきかちにそけふはかゝらん
武士のたゝかふ場に身をわすれ　賢盛
身を捨るこゝろはやすく無ものを
家をおもへはいさむものゝふ　心敬
君につかへてなからへにけり
武士のいくたひ身をは捨つらん　宗砌
うちのゝはらそうちはへて行
かちむちに馬場の人は名をあけて
むらの子とものの遠き歸るさ
かふ牛やはなちし跡をしたふらん　能阿

ゆふへにはやくとまる庭鳥
牛引て歸る里こそはるかなれ　賢盛
くろきはかりは似たる牛の子
あけまきのひたゐの髪のかたみたれ　宗砌
吹よはるいきの松風身にしみて
拍かり笛の暮るやまみち　心敬
はるかにも聞はつくしの國なれや
ことの音かよふ須磨の山かけ　賢盛
さそへや山のおくのまつ風
かくらこそことのをのれのしらへなれ
きゝつることとそみるこゝちする
かきならす此あつまやに夢さめて　宗砌
むせふそなみた袖におさへし
ひく琵琶のをとほろ〳〵と手に鳴て
愛よと菊の花はさきけり
四の緒のこゝろひくなる天津人　賢盛
松風の眼(やねふりイ)をさますいしのうへ
碁うち琴ひく人のさま〳〵　宗砌
はなたち花のうちかほるかけ
仙人や碁にいきしにをわするらん
石のうへにも世をそいとへる

みたれ碁に我生死のあるを見て　心敬
あらそへるこゝろの馬の乘ものに
かちたるかたのいさむみたれ碁　專順
あとなしことのあらましのすへ
手習にはしめの文字を書けちて　宗砌
らてむのちくのもしのふるふみ
ふたあくる硯のはこに筆見えて
過しむかしを汲やしるらん
いるゝ繪のこゝろはむすふ玉手はこ
筆の跡みるうたの言の葉
繪にかける色はまこともなきものを　賢盛
霞や山をふかく見すらん
つくり繪に色とる筆の數そへて　專順
玉のをにせんおもかけもかな
ふた度とかへらぬ人を繪にとめて　智蘊
きも玉しゐもそはぬ愛人
繪に移すむかしのすかたぬしやたれ　專順
かはれる髪に霜やおくらん
ゐる鶴はかゝみのうらにあらはれて　賢盛
とはれしみちそかたはかりなる
くたる世は占のはかせも稀にして　宗砌

弓箭にあまたしることそある
むねあけに時日をとるははかせにて
露の數見る軒そあれたる
かれもせぬかはらの松の秋を經て　能阿
煙のたつやすみかなるらん
つくりなす瓦に鬼のかたありて　宗砌
軒はともおもはぬ計あれはてゝ
かはらに見るも鬼はおそろし　専順
そこともしらぬ海の中路
たれかみし名にこそ龍の都なれ
洞はたゝこけの緣にうつもれて
いしをゆかなる仙人のあと　智蘊
亂れ碁をうつその間にもこうありて
いしをもつくすあまの羽衣　心敬
見れはつはめの一つれのこゑ
石をうつしつくもふかく降雨に　賢盛
ふかきちきりは末もかわらし
河つらに同し水くむ里みえて　宗砌
せはきたもとをくたすあまの子
おほうみの遠き鹽干にあさりして　智蘊
羽もやすめすさはく水とり

鱗の玉藻にあそふ程見えて　賢盛
舟さすあとの水はすみけり
我影もしらすや釣のおきなさひ　行助
こゝろありてはいつあかしかた
夜な／＼の釣の火とほす波のうへ　心敬
山をはなれて日のめくるかた
松見れはなみにかたふく興津島　専順
なみにもしろしあけほのゝ色
舟遠き松にむら／＼鷺は寐て　心敬
色こそかはれ秋の澤水
紅のうき草かくれ鷺のゐて
あせたる池に雨おつる見ゆ
汀なる鷺の蓑毛に風たちて　宗砌
山かけめくる賀茂の川水
かさゝきのこの橋もとの木におりて　智蘊
思ひはなれんことやまつらん
籠の内に音をなくつるの年老て　能阿
はなれてたてる松そさひしき
むかしたか手かひの鶴のおひぬらん　行助
さしくみにつらき中ともいひかたし
手かひの鳥の籠に遊ふ聲　宗砌

ねぬときなれやあかつきの秋
わきてきけ今夜はかのゑ猿の聲
岩ほふむ道のかたはら水落て
夜ふかき月に猿さけふこゑ　賢盛
煙そのほろ奥のすみかま
けた物のかける雲井は遠代に
奥ふかき道を数のたよりにて
犬のこゑするよるのやまさと　心敬
たそかれときの春そ淋しき
一村のかすむさかひに犬ほえて　賢盛
立わかれゆく人の数／＼
日くるれは市路のかりや物さひて　行助
人のかけなき里の淋しさ
一村の野中の市の日も過て　心敬
うきもつらきも里によりけり
朝市に世をわひ人の数見えて
神の御前に人そたちさる
三輪山やあしたの市の杉の門
すつるこそうけかたき身の望なれ
のむあちさけの酔のかなしさ　宗砌
くちひるのえみや詞に出ぬらん

さけのむしろはあかぬかたらひ　賢盛
たひにしあれはなくさみもあれ
朝けもるしつか椎の葉焼を見て　宗砌
里をはるかにいそく暮かた
きのふより猶をく山の木をこりて　専順
長閑なる春の山水江に落て
柴つむ舟のひとりゆくみゆ　心敬
ふるすの雉のほろゝとそ啼
うつ音は草かくれなる畑あれて　宗砌
いとなみのさてもはかなき身の行末
うつふる畑のあわれ世の中　智蘊
きぬたをとをみひとり打音
古畑の麓のむらはかすかにて　心敬
春は子日をいはふ年／＼
しつかかふこのころとれる玉はゝき　能阿
こゝろのうちをいつかはらはん
朝毎に床のちりとる玉はゝき　宗砌
人にしられぬ身こそやすけれ
ことわさに名をのこしても何かせん　心敬
いつれもあとをとめぬ世の中
たれきけとはかなや名をも惜らん

むまやのおさそ髪白くなる
春秋は程なき夢のひと夜にて　専順
我身に似たる老のあわれさ
色見えぬこゝろもはてはよはりきて　心敬
いつれか殘るなにかつれなる
物毎にあるはこゝろのしなゝれや　智蘊
風も目にみぬ山のあま彦
物毎にたゝありなしのかたちにて　心敬
水のうごくに風わたる見ゆ
人の身に五のかたちあらわれて　能阿
ふしなからなる人の下帯
たゝならぬ月の日数にくるしみて　賢盛
さもあらはあれとてなとか急く覧
ひかりのかけそ人をおもわぬ　心敬
見れは雪ふり月そのこれる
あけにけりきのふの夢は跡もなし　宗砌
よはくなり行山風のすゑ
鐘遠き里には夢やのこるらん　心敬
あらましの身にをくるあわれさ
聞はてぬ夕の鐘に寐覺して
かねにそ遠きかたはしらるゝ

野山にもこゝろのかよふ寐覺して　行助
うさは日ことにまさる世の中
いつゆきて岩ふみなれんよしの山　能阿
とふ人まれの雪のふるさと
をくれしといりしは誰そよしの山
とはれしとすめはうき世の外なれや
宮古なからのわひとの宿　行助
世にすむ身にはたゝこゝろあれ
静なる舎りは山のおくにして　専順
むかしも變身なにしのはまし
古里はおく山よりもさひしくて　宗砌
霜にむしなく聲の淋しさ
人とはぬあさちか庭に日はくれて　賢盛
鹿もなくなり虫もなくなり
絶てすめ友なしとても草の庵　宗砌
となりにすむそ老の友なる
かけ水に寐覺かたらふ草の庵　心敬
あくるあしたの野への露けさ
草の戸はたちいつるさへ袖ぬれて　行助
しつかなる谷にも松は風吹て
世のうきよりの山のさひしさ　宗砌

こゝろをあさくいかて見えけん
すまはやの山松の戸をとひすてゝ　専順
あかつきかたに誰かねなまし
山ふかみなれぬあらしをまくらにて　智薀
苅田のあとの庵のさひしさ
山かけに人もむすはぬ水をちて　行助
けにかへらぬやいにしへの夢
さる事を見れはなかるゝ水にして
消やらぬかしらの雪のますかゝみ
水にむかへはわれそうたかた　智薀
うきにたゆると山をきかせよ
谷の水峯のつま木をいのちにて　心敬
ふかくこゝろをすます月かけ
庵しむるおくやま水をよるくみて　宗砌
おもひみたるないく程の身そ
さひしとて住はなれめや山のおく　専順
のる駒すくる前のたなはし
旅人もたちたによらぬ苔の戸に　心敬
たゝにはきかし松風のをと
うらやましつかにすめる峯の庵　専順
いますむ山や捨し身のはて

思ふ事たえたる嶺にいほしめて　宗砌
こゝろのかよふゆふへにそなる
たち出て都わすれぬ峯の庵　心敬
わかすむ程や山をかくさん
峯の雲たなひく谷に庵しめて　宗砌
ふる里人とわれもなりにき
友もうしことなかたりそ山のおく
われたにいとふ我身なりけり
しられしの山をなみたの尋來て　心敬
中／＼に忘ぬこゝろわすれはや
寐覺はかりにおもふやまさと
とむるを人のなといそくらん
獨さへすめはすまるゝやまさとに
このまゝにそへ又まつもうし
まれにとふ我山里のみやこひと　宗砌
人もこす我身もゆかす深ろまに
かねなるみねのかけのやまさと
たま／＼きてもいそくかへるさ
山里をこゝろなくてはとひかたし　専順
あらんかきりやわれ人の道
山里にかよふくち木のひとつ橋　心敬

又袖ぬらす露ぞかなしき
山里に水くむ道の小篠はら
なくさめかねつ夕暮の空
山里はことはりよりもさひしくて　宗砌
おもへと世をはすてやかぬらん
山里はとはんといひし人もこす　專順
むかしの友のなにとゝふらん
名をかへてうき身を忍ふ山里に　心敬
いまこんとしを花もわするな
山里の春のひかりに身はふりて　能阿
音する風ぞ人たのめなる
里遠き深山かくれの柴の門　行助
嶺こす風に木葉ちるをと
柴の戸をとはゝなにとかこたへまし　專順
西のむかへは人をえらはす
山もとの柴のいほりに雲おりて　宗砌
暮そむる雲の絕まに月見えて
峯の嵐にむかふ柴の戸　專順
くちたる橋そたえ〳〵になる
柴の戸に世わたる人は尋ねこて

竹林抄卷第九

雜連歌下

つまとふ鹿の聲ぞふけゆく
高砂や松に尾上の風落て　心敬
老て御幸にあふやうれしき
いにしへのをしほの山の小松原　宗砌
戀しさのふたつなきこそかなしけれ
松をかたみの志賀のふるさと　心敬
行舟をそき志賀のさゝなみ
唐崎の松吹風はわつかにて　行助
言の葉のくちぬれ岩に書つけて
松の木高き山しなの山　專順
なき跡に形見の石をきさみをき
こけのみふかし山科のみや　心敬
わか世はなにゝこゝろとまらん
すか原や誰かふしみの夢うつゝ　能阿
つもる思ひはうき名とり川
これや此ちりもはらはぬ床の山　宗砌
ゐてのわたりの雪のあけほの
ひとりぬる鷺坂やまやさむからし　賢盛
思ふあたりを雲なへたてそ

山鳥の長岡の邊に妻こめて　能阿
いもかあたりそはなれやられぬ
かけ深き美豆のゝ森の雨やとり　行助
田かへす人の袖そかすめる
いそのかみ布留の山もと雨はれて　宗砌
木のもとつたふつくはねの道
村雨のしつくの田井の名もしるし　行助
した帯も袂の露にぬれつへし
むすひもすてぬ井手の玉水　能阿
よねをひるこゑはあられと替りけり
箕面のおくの瀧のしら玉　専順
杉の木の間に雪そ見えたる
明わたる横河のをちのひらの山　心敬
都を捨し山もすみらし
思ひやれ横河の峯のあきの暮
面影を忘れぬまゝにかされきて
大ひゑいくつたかきふしのね　専順
語るへきことわりもなし夢うつゝ
宇津の山邊にむかふ不二のね　智蘊
はれたる雪は夏の富士の峯
武藏野のみとりの末や天のはら

松をたよりにかへるうら舟
橋たてや蜑のみるめをわかかりて
霞かくれにうをそあつまる
行て見んのほるは遠き龍の門　賢盛
舟のいり江に梅にほふころ
日はにしの水海とをく雨はれて
雪のかゝるも青きさゝはら
興津浪よせてはいなゝみなと山　行助
神のいかきはこえんものかは
住吉の岸に音する興津なみ　宗砌
おなししらへをわくる四の緒
あかし潟浪と風とを夜るきゝて　賢盛
親のをしへのまことをそしる
夢ゆへや須磨のうらみを忘るらん　心敬
岩木そ山のおくの友なる
釣舟もこぬみの浦のあるゝ日に　賢盛
おきつしは路は舟もとまらす
清見潟なみの關戸やあけぬらん　能阿
きかぬときさへおもふあきかせ
もり侘る不破の關屋の雨霽に　心敬
山に侘しき猿の一聲

葛城や岩のかけ橋あけわたり　専順
年ふとも人はとはしと思ふ身に
杉の戸たゝく三輪の山かせ　宗砌
なれても山のおくそさひしき
松風にこゝろゆるせは袖ぬれて　心敬
いつくの嶺かすみよからまし
尋しよ此世の外もなきものを
いつくに行も身こそうきたれ
こゝろたに捨なは世にはすまはすめ　専順
なきをおもふやおろかなるらん
此世にはなからふることそうらみなれ　心敬
旅のあはれをかたりてそ行
此世にてあふはわかれぬ道もなし
とはしとおもふ里はふりけり
身をしれは此世もなき世いかゝせん　智蘊
又しくれ行なかそらの月
さためなの世やさて何をたのまゝし　宗砌
かり殘したるあしの一むら
袖ぬらすわか世の末はみしかくて　心敬
老はつる身をも心になくさめて
千年も夢とおもふ世の中　専順

よしあしとても幾程の身そ
世を背く門出は日をもゑらふなよ　宗砌
わくる岩ねの道は暮けり
今日もたゝ衣をこけのあらましに　賢盛
いまた衣をかへぬあらまし
墨染のゆふへを袖の余所に見て　智蘊
たれこの山の奥にすむらん
身をすつる心をたにもたつねはや　専順
世の中の身にいつまてかかゝらまし
末しら雲のあらましのやま　宗砌
老のまくらは夢そわかるゝ
昔せし我あらましははかなくて　能阿
朝夕にさためなきこそうき世なれ
身をは日ことにすつるあらまし　智蘊
いかなる世にかあわん行末
憂身をも思ひなすてそまてしはし　宗砌
深山のすみか時もしられす
おさまれる御代にもあはて捨身に　行助
誰と見て我世の月を忘るらん
おもはぬ國に身をすつる人　心敬
ゆく跡遠し空のうき雲

いりぬへき山やいつくと身を捨て　専順
ゆふへの色のうすすみの空
世すて人わかふす雲をころもにて　宗砌
鳥のすみ家になれる木隱
おとろかす人もなきまて身を捨て　能阿
契りをきてもあたの世の中
友もはや忘れはてよと身を捨て　専順
あれはいのちとおもふ行末
惜つる身をなき物と捨はてゝ　宗砌
夢より後もあき風そふく
山かけの露と消ねと捨る身に　智蘊
山わけころもほさんともせす
いつくにも朽はくちねと身を捨て　宗砌
すみのころもゝやつれはてけり
身をかくす後はつへき人もなし　専順
かりの世と聞も衣をうるほせり
人もすてすは身をなたつねそ
淋しくなりぬ山かけの庵
うたて身に捨し心やよはるらん　心敬
なけはなきぬる鵆のもろこゑ
親さへや子にいとけなく成ぬらん　宗砌

戀しつらしそなみたまきるゝ
かゝる身をなにとて親のそたてけん　賢盛
おもひやるにもうきはのちの世
おろかなる親にたに子はまさらめや　専順
むくひおそろしうくつらきはて
老ぬれは親をおもはぬ身を侘て　心敬
うたゝねよりのあかつきの夢
たらちねのいさめしらるゝ身の老て　智蘊
しらぬ人にもなみた落つゝ
たらちねに似たるさへこそ戀しけれ　心敬
うきたる此身よらんせもなし
父母のこひしき跡に年を經て　専順
後の世はとふへき道もなくなみた
をくれてしるは親のあわれみ　智蘊
人もこそゆけかた岡の道
世中をいなはやあはれ親もなし
みせはやな心もいはすなくなみた
親にはなるゝあとのみとり子　心敬
いふことの末もつゝかぬ世中に
なにおもふらんあそふみとり子　賢盛
このこゝろこそ佛なりけれ

みとり子はまた思ひわく事もなし　心敬
　ほとなく三つの秋は來にけり

みとり子は露のうき身のはしめにて　宗砌
　なくさめをける末のはかなさ

みとり子はかへらぬ旅をまたしらて　心敬
　いのちのあれは又なみたあり

捨し子を後にみるこそかなしけれ　行助
　たれかはすてゝやすき身といふ

子にそはぬ人も思ひをいたく世に　心敬
　いつのほとにか年はくれける

うれへこし老の永日なかき夜に　宗砌
　まちしこゝろそ我ためにうき

春秋をむかふることに年老て
　うき別こそ物ことにあれ

春秋のかたみに老のつもりきて　能阿
　ましわりつらく殘る世の中

花のもと紅葉のかけに身は老て　心敬
　古郷出し人をまつころ

しほれ行老のこゝろの花をとへ　智蘊
　むかししのふの露そみたるゝ

忘れ草おひのこゝろを種なれや
　此世をおもふあきのはつかせ

一葉よりかろきは老の行末にて　心敬
　身にしら河の秋のあわれさ

老にける人のこゝろを月に見て
　かけをたのむもあたの古郷

山の端にかゝる日よりも身は老て
　わかつらさのみまさりてそ行

心なと去年の老よりよはるらん
　しらてやかゝる身をたのむらん

おろかにも余所におもひし老はうし
　春の日をたゝにをくらん身はつらし

老のこぬ間そ人の世の中　能阿
　うき身の袖そぬれとをりける

世中は老はつるまてやすからて　行助
　人もねきめはかゝるものかは

老てこそあわれをもしれいとふなよ　智蘊
　こゝろのうちをいかてしらせん

かたりなは老のあわれやなからまし　心敬
　誰なれはふるき栖をたのむらん

こゝろよ老か身になやとりそ
　たゝとにかくにさはく世の中

しら浪のからくもおひはなからへて
世をうきせにはなとかかゝれる
老のなみ人にこゆるをうらみにて
こすへきほとに年は暮けり　宗砌
いかにせん我身にかゝる老のなみ
袖にあまるやわか音羽川
せきいれておとす瀬もかな老のなみ　智薀
すゑなる山は色そつれなき
身をしれと松さへ老の浪こえて
むかへは月になみた落けり
老さりし秋はたか世に成ぬらん　能阿
つれなき世こそ忘れかちなれ
末遠くたのむを老のうらみにて　心敬
うちもねられす夜こそなかけれ
身は老ぬはかなや何をおもふらん
世にあふまてと身をかくすひと
老の後つかへん道もやすからて　専順
つれなきゆへにぬるゝころも手
老ぬれはなをすてられぬ憂身にて　行助
はかなや人のことの葉の末
有増はいつのためそと老はてゝ　専順

いのちまつ間の身をやかくさん
老の後いまはの山に世をすてゝ　宗砌
いまはのわかれいそかすもかな
ことかたるそのいにしへの老の友
よきことまたん身とも思はす
老ぬれはなきにしかしの世中に　能河
ひとりな侘そ年のくれかた
ことはりにかさなる老はちからなし　心敬
やつれ行こそ旅すかたなれ
後の世もやゝちかくなる身の老て　宗砌
過にしかたそみるこゝちする
あふ人もそれかとたとる身はふりて　専順
おもかけさへにとをさかる人
見しらすよむかしなれきや翁さひ
今朝おとろきぬ色かはる山
いたゝきの雪にかゝみをおほはらや　賢盛
はやく過行水そかすめる
みるもうし鏡の底の老のなみ　智薀
いまをはをきていのれ後の世
老はてゝのそみたるとも何かせん　専順
なみたわするゝ墨そめの袖

うらみある人をも世をも捨はてゝ　心敬
まことなき名はそらにこそたてゝ
はてはたゝ人をも身をもしらぬ世に　智蘊
久堅の天津社のふたはしら
ひとの世はたゝ夢のうきはし
淵瀬にかはる水は冷し
人の世はこほりをふめる道にして　心敬
あられみたるゝ深山路の末
うき事も玉ゆらの世をいとひきて　宗砌
いくしほみてる思ひとかしる
くれなゐのふり出ぬへき世にそみて
九重におも荷を運ふ淀車
世にしたかひてめくるあわれさ　専順
おもへは山のかけそすみよき
心にもあらす侘ぬる世をいてゝ
たのめし末を月もしるらん
山の端はうらみある世のなかめにて　行助
偽のちはまことの道なれや
うき世はなるゝけふの山こえ　専順
山陰もこゝろにあさく身を捨て
おもへはうき世いかてすみけん　行助

かゝるところに神そましますす
捨ぬへき塵のうき世にましわりて　専順
うき身ひとりと思ひこそしれ
世をひろくめくみのうちに我もれて
浦山し夜半につとむる翁さひ
世につかへても身こそしもなれ
かゝらんとてそ身はのかれぬる
みたれたる世にものとけき墨の袖　心敬
うちなひき瓜つるかゝる園の竹
いかゝなり行世々をかも見ん　宗砌
わたりかたきはかゝるはや川
人はみなうちてふ里を我か世にて
一かたならぬおもひいつまて
世を宇治の里とはしれと猶すみて　能阿
かきりうらむる鈴むしの聲
思ふ事なるとはきかぬ世の中に　智蘊
限なくしのひすくして何かせん
はやくの事をあたし世の中　能阿
あるしもしらぬ宿にこそすめ
世の中にむまれあへるはたれならん　心敬
捨るもかなし捨ぬ身もうし

いつれにかすまん世中山の奥　行助
　たちかへりては身をそららむる
山ふかくさてもすむへき世中に　心敬
　寺は余所なる小初瀨の里
後前の世々の中やと只しはし　智蘊
　すむてふ事のやすきかの國
こゝをさるほとをさかひの後世に　宗砌
　おもふとはみぬひとのよそほひ
忘るなよたか後の世もあるものを
　いかはかりさてとをくきぬらん
前の世はおほえぬ旅のみちなれや　行助
　いつより人をおもひそむらん
我をさへたれともしらぬ前の世に　宗砌
　かなしやさてもなにむまれけん
先の世をみれはなみたのぬしもなし　心敬
　うつし難きはいにしへの道
おとろふる末の世にしも生れきて　專順
　えかたき道もなをやまなはん
末の世の人とておもひくたすなよ
　戀しさのつらさは扨もむくへかし
身もいつの世かいにしへの人　宗砌

　うつゝもおなし夢のおもかけ
身もいつかむかし語の世々の友　專順
　老のすかたそ身にもおほゆる
殘けるむかしの人を稀にみて　宗砌
　軒端の梅はちり過にけり
身をしれは今日をむかしの誰ならん　能阿
　物いはすともこゝろしるらん
うちなきてむかふむかしの空の月　心敬
　世のうきふしに櫻ちる山
身こそあれおもひすつへき春もなし
　つらきこゝろは神もしるらん
なく〳〵もかさりをおろす身を侘て
　似たるはかれるすかたなりけり
侘ぬれは衣はかりに身をかへて
　うき世の宿をたのむはかなさ
かりの身よ何にこゝろをとゝむらん　行助
　雲一むらはまたそしくるゝ
憂身たゝある空もなく古はてゝ　智蘊
　こひにのみなと世をなけくらん
請かたき身をいたつらになしはてゝ　專順
　いかなる夢のわれをとふらん

こしかたも行衛もしらぬ身をうけて　心敬
しらすよ我身または人の身
二たひはこのすかたをやうけさらん
見るはさま〳〵かはる人の身
この後はわれいかさまにむまれまし　専順
無名に人そうとくなりぬる
したしきもしらすや生れかはるもん
あれたる庭の秋のおもかけ
あるもうしまして消なん身の行衛
峯はるかなるいりあひのかね
余所にきくあわれ我身のはていかに　智蘊
柴の戸あけてなかめやる空
いつかさてわか身の末の夕けふり　賢盛
あわれ消なん跡のかなしさ
身のはてを取かくすへき人もなし　心敬
武士の軍の庭に子をつれて
なからん跡をたれにとはれん　行助
別てはいつはためくりあひもせん
なき人をくる野邊の小車　心敬
さのみに人よなとかつれなき
あたし野のけふりをみても捨ぬ身に

きえん跡をもとはしとやする
なけゝともやかて見捨る夕けふり　専順
きえのこるをも老はたのます
先たちしひとり〳〵の数そひて　賢盛
又よといひし暮そはかなき
ちるうちに人のさきたつ花を見て　心敬
夢もあたなる手まくらの露
雲となる名殘かなしき夜の雨
ふりぬるあとはとふ人もなし
忘れえすなけくはちかき別にて
道ほのかなる艸むらのかけ
古つかもきのふけふかの跡とひて　専順
したしきそ猶なきをしたへる
うとかりし人は忘るゝ草の原
おもひかけぬを夢に見えぬる
なき人やわするゝ我をうらむ覽　心敬
かたみのみつはちりつもりけり
なき人のいほりは殘る山のかけ
かへるならひの旅のかりかね
北に行人はこの世にとゝまらて
きよき名のみそ猶あわれなる

ぬれ衣はつゐになき世にあらわれて
　ゆめいくたひそ歸るあきの夜
いにしへのなき玉まつり年〳〵に　專順
　さたかにいつる山の端の月
行末のくらきにいるな我こゝろ
　いまた入日そ霧にこもれる
西にたにくらき心はかたふかて　智蘊
　むかへは月そこゝろをもしる
西をのみねかふ庵の夜半の秋　宗砌
　月と水なかれとゝまるかたもなし
むなしき空をこゝろとも見よ　智蘊
　我くりことそむかしなかりし
後の世をおもひのたまのをゝよはみ　宗砌
　まことの法やしらて過なん
まよへるは空に二の月を見て　心敬
　むなしき夢の春秋のあと
空にみてこゝろの月を忘るなよ　智蘊
　ひさのうへなる琵琶をしらへよ
かくれたる月こそむれのあひたなれ　行助
　我身を雲と見れはまよはす
月きよきむねの大空霧はれて　宗砌

　くまにもあらぬ人そかしこき
われとみる胸の月の輪さやかにて
　うすくやならん袖の移り香
咲花にそむなよ法のこゝろさし　行助
　ところによりて替る言の葉
鷲の山鹿のその輪の法のみち　智蘊
　三とせをまたんかきりとやせん
古里を歸りてこもる那智の山　賢盛
　そまてふ山の奥かすかなり
大ひえや法の灯かけふりて　專順
　むまかあらぬかいなおほせとり
あふ事を人にをしへの法の道　宗砌
　のほるもくるし山崎の寺
たれかしるかりの城のそのたとへ
　みねこそ雲のかさなれる空
我國はとを山ふしのたひころも
　あわれをかけよかつらきの神
くるしさもさそ山ふしの老の坂　智蘊
君かふる千年のかけにつかへつゝ
のりの薪をえたるたうとさ　賢盛
　ふりぬる寺をたのむ草の戸

山里にあかゐの水の末うけて　心敬
　なかるゝ水はめにもたまらす
つみためてあらふしきみの花かたみ　専順
　猶たつねいるおくの山寺
樒つむ峯には春の花もなし　智蘊
　梅か香も袖なる苔にへたたりて
しきみの烟のこるふる寺　賢盛
　あかしの浪の夜る鼓の音
をこなひにたえぬ六時の鐘なりて　専順
　替り行旅のすかたの哀にて
いつれの六の道にむまれん　心敬
　なれてはなれぬこゝろともせす
何事かむつましからむ六のみち　宗砌
　つもりし暮は數もおほえす
つみをけつ入會のかねの聲〳〵に　心敬
　つらきかたにそむまれかはれる
つみあるはをんなの身をやうけぬ覽
　君か御法はかろきことなし
百敷やいのるよひのま出いりて　能阿
　世を祈る其おこなひの絕もせて
夜居の御法の聲そふけゆく　智蘊

　そのかみよりののりのあらそひ
君か代を絕すそ祈る四の寺　能阿
　ときをしらする入あひの鐘
夕しほのみつのはまへの難波寺　行助
　鐘をかきりと日こそいりぬれ
遠山のゆふへの雲に寺見えて　宗砌
　夏くれはふかき清水を又汲て
岩ふみならしこもる山寺　能阿
　まよはぬ法のともし火もかな
狐なく道の末野に寺見えて　宗砌
　山かけたとる嵯峨の古道
人かへるゆふへの寺にかねなりて
　我くろかみの山路ゆく人
尋てそさまをもかへん嶺の寺　心敬
　越ぬる山やはてとなるらん
人のわさ過れはいつる峯の寺
　あらへはおつるはなさゝの露
鐘のなるゆふ山寺の雨の日に　宗砌
　峯のあらしは吹かふかぬか
貝鐘もをと絕〳〵に寺ふりて
　八十あまりの木々のいろ〳〵

かれにけり佛さりにし其はやし　智蘊
身はうき雲となをやまよはん
佛さへむなし煙となりし世に　宗砌
曉のこゝろにかよふそのむかし
佛ふたつの世の中そこれ　賢盛
門さすとしも見えぬ古寺
老のくる道にむかへよかの佛　能阿
おもかけのみはいかゝたのまん
繪にかゝぬまことを見はやかの佛　行助
御祓にいのるこゝろはつかし
つくれるを佛とみるはおろかにて　宗砌
たかともし火そのこる古寺
遠き世の佛のかけを今も見て　智蘊
こゝろひとつそわくかたもなき
となふれは我身さなから佛にて　宗砌
人なとわれをくたしはつ覽
佛ともならはなるへき身を持て
勅にはたれかをそれさるへき
後の世のつみも佛のをしへにて
はつせにますはよきの神かき
迷ひてや我世をあしく祈るらん

たのみをなかくかくるくろかみ
おもふ事千すちの御注連引そへて
とははやさらは道のつまむき
これそ此らのまさしきつし社　専順
木末よりちる蔦のした道
朽のこるいかきさひしきゆふかつら　智蘊
たむけのこゝろ神やしるらん
花を風御戸の錦に吹かけて
竹の葉の綠にうつる小忌衣
浦風さひぬすみよしの宮　賢盛
社そならふ那智の神倉
又つくる新宮とところあふき見よ
ふむあとみゆる霜のふるみち
しらかなる神の宮人くつはきて　宗砌
日の入かたは見るもたうとし
我影をとゝめて神のますかゝみ　行助
かけうつるこそかゝみなりけれ
まことには神やかたちもなかるらん　心敬
たれ春の日に井手の中道
けふそたつ春日まつりのそのつかひ　専順
時もたかへす春のとふやと

春日野やまつりの使うちむれて　能阿
又わかれ路にならさかの春
くたりきぬ春日まつりのみやこ人　宗砌
袖ゆきすりにほふ藤か枝
男山春のまつりにけふこえて　賢盛
御幸にけふはあへるうれしさ
山路よりみれは祭を志賀の濱　宗砌
松浦の山そ海をかけたる
白妙のかゝみの宮のゆふたすき
いけるものみな心なからし
神は世にひかりをはなつ八幡山　專順
明日までの命もしらす中の秋
うろくつはなて神まつる時　行助
手にてをそくむ神おかむ人
まつりせし庭の今夜はすまひにて　宗砌
さてそたむくる大和言の葉
吾國の人をや神はまもるらん
世はくたるとも大和言の葉
此國のあるしとあふけ天津神　智薀
ふりぬ身のひたひにかゝるつくもかみ
ういかうふりにいはふ百年　專順

かすさたまれる歌の言の葉
百數やもゝのつかさのくつかふり　宗砌
もれぬる袖の色そくるしき
數〳〵に人のこえゆくくらゐ山　賢盛
わきて先西なる山やもみつらん
同し木末もたかき大内
又ねのまくら君おもひやれ
かへり見る我身古屋の宿直人　宗砌
こゝろかなはゝ猶やたのまん
君はたゝおろかなるをもあわれみて　賢盛
三度みかきし玉はから國
侘つゝもあれはかしこき代に逢て　智薀
いかにいひてか人をなひけん
亂たる國をおさむるはかりこと　專順
身をおしまぬもたゝ人の爲
國やすくなるは軍のちからにて
つゝむとすれと名はしられけり
武士の此時弓をふくろにて　賢盛
手向する君をや神は守る覽
道あるときにあふ坂のやま　宗砌
越ん山邊の風しつかなれ

末遠き君かよはひの千代の坂
　千ひろなれとていはふ玉の緒
君か代の數こそ濱のまさこ山　能阿
　眞砂は數もいかゝとるへき
我君の代はなか濱のつくしかた　宗砌
　花さく時をたれかみさらん
君か代の春こそ松をためしなれ　賢盛

竹林抄巻第十

發句

　春立ける日
花の春たてるところや吉野山　專順
　正月五日北野の會所の百韻に
春きぬといへは花なることはかな　宗砌
春霞ゆたかにおほへ天津そて　能阿
　霞を
かさし折袖かひはらのはるかすみ　心敬
世は春とかすめはおもふ花もなし
朝霞めにたつ（いろつく雨ハイ）春ハ木末かな　賢盛
朝かすみ色つく雨の（めにたゝ春ハイ）木末かな　智薀
遠近にかすむ一木のこすゑかな　專順

種遠き松はかすみのふた葉哉　心敬
　世のさはかしきころおもふ事侍りけん
老のなみこほりを出る春もかな
　春の雪を
春のこゑきえて雪ふるあらし哉　專順
遠山のまゆすみ青き雪間かな　賢盛
水青し消ていくかの春のゆき　心敬
松の葉は霞やおもき雪もなし
朝みとり空さへ春の雪間かな　行助
ちるを見て花をそけなる雪もなし　心敬
ちるを見よ庭は露けき春の雪
　正月五日北野會所の連歌に
いく春も神そやとりき梅の花　能阿
　堀川のわたりにしる人の亭にてはへりし會に
影移るほしか河邊の梅の花　賢盛
　梅を
風のまは梅のふき來るにほひ哉
梅か香にふかすは去年の嵐かな　專順
梅いつくにほひ空なるあさかすみ
袖にふけたか梅か香そ春の風
折にあひて梅さく柴のかきほかな　能阿

東山の坊にて正月十日比侍りし會に

梅か香をとふ人なれやとけの庭　心敬

會所の奉行承し翌年宿所の會に

もとつ香ににほへよもきか宿の梅　宗砌

題しらす

梅はわか花にかくるゝ老木かな　心敬

花とをしにほひに霞む軒の梅

梅の花たかぬ衣なきにほひかな

木々の香や春のあはする梅の花　專順

水たまり梅ちる庭のなかめかな　宗砌

あつまへ下りける人の馬のはなむけし侍しときの會に

春風にゆく人したふ柳かな

ある山さとにて

こきませて來るにまゆある柳かな

春の草を

露またてなひく若葉の千草かな　心敬

題しらす

若草にましる二葉の小松かな　智蘊

むらさきのちりをすへのゝ蕨かな

風ふかぬ松は春にやなひくらん　行助

春の月を

月かすみ追風よはのかつらかな　心敬

待花心を

またるとてさかはそをそき春のはな　專順

花さけといはぬはかりそ雨の聲

よしやまてさけは程へぬ春の花

吹つくせ花さかぬまの春のかせ　能阿

花の發句に

咲けりと花のものいふにほひ哉　賢盛

待えたるたかはつ花そ山さくら　宗砌

花やさくとを山人のつてもかな　專順

遠山の雪に花さく宮古かな　行助

花に來てをのゝへくたす山もかな　賢盛

朝かすみ風にかくすや花もなし　專順

花そ雲かけても吹な天津風

花鳥もときなるかなや櫻かり　宗砌

さす花やかめのうへなる山櫻　專順

太神宮に參詣の時千句連歌侍し其第一に

日の御影花ににほへるあした哉　心敬

春の發句のうちに

いとみたれ花ほころふる春日かな

霞む日の花よりいつる山もかな　専順
日そおしき花はゆふへの色もなし　宗砌
山櫻まてや宮古の花さかり　専順
遠き國よりのほりける人京にて千句連歌し侍し時
花盛人はたひなる都かな　能阿
降敎寺にして去此不遠のこゝろを
山櫻とをからぬ花のみやこかな　能阿
花を
花一木うへぬ宮古の宿もなし　智薀
伊勢の國より人の所望し侍しに
櫻さく山さへ磯のみるめかな
櫻さく遠山もりや宮古人　宗砌
題しらす
老木まてなれこし花の山路かな　能阿
花はたゝこゝろの老のかさしかな　心敬
櫻色に世はうち霞むにほひ哉
花さかりおもへは似たる雲もなし　専順
時雨にも見さりし花の千入かな　心敬
花に鳥音をさへをれる錦かな　行助
飛ふ鳥をうらやむ花の千里かな　専順
鳥やしるいつくの雲か山さくら
雲鳥のかへるはあやな花の春　智薀
月夜よしよしや花こそ春の雲　行助
月やまつ夕暮とをき花のかけ　心敬
花に月こゝろつくしの木の間かな　宗砌
花にそへおほろ月夜の今朝の雲
いつれ宿さくらかもとのゆふ月夜　能阿
月に見ぬおほろは花のにほひかな　心敬
ゆく嵐花のこなたに宿もかな　専順
春はみな花まちおしむ日數かな
雨に今朝花の香ならぬ水もなし
雲や花にほひをそゝく春の雨　智薀
若草に花の露そふ木陰かな　行助
きのふ見し花か鳥なく朝かすみ　心敬
散る花に明日はうらみん風もなし
雲と見し高ねにかへる花もかな　智薀
吉野の花見侍し時かの山寺にてはへりし會に
花に來て雲にこもりの深山かな　能阿
春の發句の中
外にちる花まちえたり山さくら　専順
花に春ゆくか歸るかをそ櫻　行助
木をきれは花こそとふさ春の風

醍醐寂莂谷といふ所の花見侍りしとき

ちる花の音きく程の深山かな　心敬

栂尾にて細川京兆すゝめられし一座に

ちる花の雪さへさむきみ山かな

ある山家にて侍し會に

花落て小篠露けき山路かな

大原野の花見侍し次にかのわたりにて會侍しに

山櫻ちるをおしほのかひもなし　専順

落花を

さけはちることはりしらぬ花もかな

人はちり花は風ふくゆふへかな　心敬

題しらす

花にみぬゆふ暮ふかき青葉かな

雨しらぬかすみの軒の雫かな　専順

藤を

なみに見ん鴨の羽色の松の藤

紫にさすやはひえの藤のはな　宗砌

ねはみねとむらさきしるし藤の花　専順

藤さけはおられぬなみの花もなし　行助

暮春のこゝろを

花そなきかさして春やかへる覧　心敬

宗祇草庵にて千句侍しに同春の心を

花落て鳥なく春のわかれかな　賢盛

三月盡に

ちらてけふ三月をしたふ花もかな　宗砌

卯月の初のころ侍し會に新樹を

花殘り若葉いろこき木末かな

おなしこゝろを

若葉よりまた花おとす露もかな　心敬

しける木ははつ山あゐの染葉かな　賢盛

花の枝もかくなるものか夏木立　智蘊

夏と秋いかて若葉のうす紅葉　専順

秋はまたとを山そむる若葉かな　心敬

雨もまたこゑなき桐の若葉かな

會所の奉行うけ給し時はしめて社頭の會に

しけりきぬ神そうへ木の御代の陰　能阿

題しらす

茂る木は葉もりの神の舎りかな　宗砌

しけるまて秋の葉くちぬ深山かな　心敬

峰高みしけるからうへの木末かな　能阿

あつまに下りし時日光山といふ寺に上りて會侍しに卯花を

卯花にとをき高ねや去年の雪　心敬

おなしこゝろを

卯花の月にかたふく籬かな　智蘊

をりてほすあさてか露の花うつ木　宗砌

卯月はかりに千句連歌侍しとき

花も名になのるや卯月郭公　専順

北畠大納言（于時宰相）長谷寺にて餘花十首を題にゝて侍し千句に

郭公花もまちけるみやまかな

時鳥を

世にさらはきかぬ鳥なれほとゝきす　心敬

ねたしとやまたすはなかん郭公　専順

長谷寺より所望の發句に

はつせ山ゆふこゑもらせほとゝきす　行助

世中住わひ侍しころ我坊にて會侍りしに

山にすむこゝろをつけよほとゝきす

夏の發句の中

一聲にみぬ山ふかし郭公　心敬

郭公たかねになのる山路かな　宗砌

時鳥うらめつらしき舟路かな　行助

杜宇もゝちの鳥はこゑもなし　心敬

杉むらに聲のあやなれほとゝきす　専順

獨吟の百韻に夏の月を

月ほそしかつらや茂りかくすらん

おなし題にて

あけやすし空おほれする月もかな

五月六日侍し會に

今朝かゝるあやめや軒の一夜つま　宗砌

五月雨を

なか雨のあしのいとなき五月かな

夏引のいとくりかへすなかめかな　行助

春雨にふろを五月のはれ間かな　心敬

五月雨のあめこまかなるはれ間かな　賢盛

紅葉せは五月そさかり木々のあめ　専順

雨おをし五月の雲のむら柏　心敬

千句の連歌中に人に誘りてたち花を

立花にはらひし程の雪もかな

宗祇草庵をむすひてはしめて會侍り時

しけれ猶代々の言葉の園の竹　賢盛

題しらす

口なしの花はこゝろのある世かな　行助

風に露きえぬ草葉の螢かな　専順

小松おひなてしこさける岩ほかな　智蘊
夕立はたき殿ならぬ宿もなし　心敬

夏の發句の中に

雨すゝしふる日はいかに水のこゑ　專順
夏をせき水をたのしむ栖かな　賢盛

二條關白家にてつかふまつりける

夜もくめ月はいつみの夕涼み　專順

題しらす

夏の日は草葉をよるの露もなし　心敬

納涼のこゝろを

露もひぬ槇の葉涼し朝曇り
庭涼し夜のまの露の朝しめり　專順

雲林院近きわたりにて同し心を

雨に今日涼しき雲のはやし哉　智蘊

おなしこゝろを

かけ涼したれもこゝろやひとつ松　行助
涼しさを夏は花なる木かけかな　宗砌
秋をひけ袖もなつその朝すゝみ

秋立ける日

露なからちるは風なき一葉かな　行助

會所奉行うけ給しその秋私家にて侍し連歌に

塵をつき風をつたふる一葉かな　宗砌

七夕のこゝろを

いのりきや七日にほしのあま衣　心敬
石川やふむ跡遠きあふせかな　賢盛
秋風をうらみぬ星のちきりかな　行助
星もけふ二あひをかすころもかな　專順

七月十日のころ侍し會に

日くらしの聲に月まつ朝かな

荻を

松風やしたに秋ふく荻のこゑ

伊勢の二見のわたりにて同し心を

はま荻の風やなかはゝ松の聲　行助

又同しこゝろを

都にもあらし吹けり荻のこゑ　專順

題しらす

言の葉にをく露ちらせ秋のせみ　賢盛
言の葉にさくやむくさの秋の花　宗砌

荻を

露なからおれはおられぬ小萩かな
遠山はをしかなくらし萩か花　心敬

雲林院ちかき所にて八月計に

秋の野は千草の花の宮古かな　宗砌
北野の會所の連歌に草花を
河風の吹あけにゝほふ花野かな　能阿
おなしこゝろを
名もしらぬ小草花さく河邊かな　智薀
朝貌を
むかふ日はうき朝貌の鏡かな　宗砌
われもかうなと植たる庭を人の見せし時侍し會に
さそひ來てわれもかうはし秋の風　賢盛
露を
朝露は野を花そめの時雨かな　心敬
東へ下り侍し時海つらちかきやとりにて
朝しほはひさき風ふくはまへかな
題しらす
柳ちりかりかねさむき河邊かな
梅か枝をわきて秋なる木の葉かな　賢盛
櫻色にうつろふ春の青葉かな　心敬
うら葉ふく秋風しろき木末かな　能阿
はし紅葉またうす霧の立朶かな　專順
繪をうつす秋の草木の千枝かな
月を
先出て月にまたるゝゆふへかな　心敬
見る人を色なる月のひかりかな
曇る夜は月にみゆへきこゝろ哉
くらからぬ月のかつらの木陰かな　宗砌
八月十五夜に
月夜よし代々の寂中の秋の空　專順
四方にちるひかりや月の秋の花　賢盛
名や光今夜はかりの月もなし　宗砌
月やあらぬ似たる時なき今夜かな
なかめつゝ月にわするゝ今夜かな　心敬
月にそむ人は今夜の空もなし
名をえたることとはりしるき月夜かな　能阿
月を
月は今朝とを山とりのかゝみかな　智薀
東にあまた年を送りしころ月を見て
月にこひ月にわするゝ宮古かな　心敬
題しらす
染のこせ月のかつらの初しくれ　宗砌
九月十三夜のこゝろを
秋の葉はおちて花なる月夜かな　行助
月は猶てりそふほしの二夜かな　賢盛

題しらす

くらからぬ錦や月の下紅葉　専順

白河の關見侍けるに修理大夫入道のもとにて

關もせき木すへも秋の木末かな　心敬

同し所より立歸りける時人のはなむけし侍し會に

秋風にかへらは花の宮古かな

題しらす

山ふかし眞木たつ庭の秋の色

霧を

下草と見るも霧ふる木葉（ミの木末イ）かな　専順

瀧なかは霧より落て山もなし　心敬

菊を

きくに今朝雲井の鴈のこゑもかな

庭にくむ水や菊さく谷の露　専順

移ふはきくさくころの草木かな　智蘊

仙人のいのちのほしか秋のきく　行助

秋の菊千代の坂こす山路かな　宗砌

秋の發句に

鳥の音も色なる秋の山路かな　心敬

色そめぬ雨そことはり松の風　専順

織女の手にも正木のにしき哉　行助

菊紅葉月此三を題にて千句侍し第十番に

きく紅葉月ないつれの夕へかな　能阿

もみちを

峯高み空ももみちの夕日かな　専順

たか袖そ紅葉こきいろゝ峯の雲

色ほかにいつくの山かはつ時雨　智蘊

染よ猶うすくれなゐのはつ時雨　賢盛

薄くこきもみちやいつのむら時雨　専順

時雨こはそめん色なきもみちかな

錦おる音か紅葉のはつしくれ　行助

題しらす

朝露そ木葉になさぬ小夜時雨　心敬

聖廟法樂の發句とて人の所望し侍しに

錦織る木末や秋の手向山　賢盛

秋の發句に

秋のぬく錦は木々の落葉かな　能阿

瀧浪にくれなゐ落て秋もなし　智蘊

弓はりの槻の葉落て秋もなし

長月や山とりの尾のはつ時雨

九月に雪のふり侍しときの發句に

きかさりき秋に宮古の雪の山　能阿

暮秋のこゝろを
秋のゆく道しはうつめ下もみち　宗砌
東に下り侍し次の年初冬の頃時雨を
めくる間をおもへは去年の時雨哉　心敬
おなし心を
山を越へ宮古をめくるしくれかな　宗砌
河音は山もとめくるしくれかな　行助
雲は猶さためある世の時雨かな　心敬
きく程は月をわするゝ時雨かな
近江の小野といへる所にて會侍しに
伊吹山しくるゝ雪の麓かな　専順
題しらす
ちる音を時雨にかへすもみちかな　宗砌
松風はちらぬ木の葉の時雨かな　専順
雨木葉ふりみふらすみ時雨けり
音をかる水の木葉の時雨かな
鴨の羽はつれなき池の紅葉かな　智蘊
ちり行はあらしのかさす紅葉哉　心敬
山風によとなき瀧の落葉かな　智蘊
紅葉より後は雪けのしくれかな　宗砌
すゝきちり紅葉は朽る岩ねかな　心敬

枝もかなあらしの木葉霜の花　宗砌
月に今朝ちるはかつらの下葉哉
神無月木のめ春しる落葉かな　智蘊
神無月山里ならぬ宿もなし　心敬
神無月むへもさひたる宮居かな　宗砌
庭に富士松うへたる所に侍し會に
時しらぬ山松ふかし冬の庭　専順
題しらす
松の葉に冬野の露はのこりけり　心敬
雨さむみしつくを木々のたるひ哉　賢盛
露こほり河音さむき茅原かな　専順
吹むすふ川風しろきこほりかな　賢盛
雨に色雪にこゑあるみそれかな　行助
庭にきえ高れにつもるみそれ哉　賢盛
雪の發句のうちに
雪もしれ松うへをける冬の庭　専順
山の端にふるは都の雪けかな　行助
山や雪しらぬ鳥なく宮古かな　心敬
遠山は雪ふる雲のはれまかな　専順
遠山をうつみあらはす深雪かな
雪うすし荻にやのこる秋のかせ　心敬

あしつゝのうす雪氷る汀かな
つきてふるまた薄雪の花すゝき　賢盛
雪うすし岡邊の竹の夕つくひ　心敬
雪の花北は先さく片枝かな　宗砌
あわ雪の花の千種か小松はら
染かねし時雨やなれる松の雪　心敬
紅葉せて花は咲けりまつの雪　賢盛
紅葉せぬ秋もうらみし雪の松　宗砌
雪の松花の老木となりにけり　行助
雪ふれは山里ひたる都かな　心敬
雪遠し山本柏峯のまつ
たか軒そ遠山もとの雪の松　宗砌
風おろす山松あをし雪の庭　心敬
秋も猶あさきは雪のゆふへ哉
うす墨に繪かける雪のゆふへ哉　專順
雪はれてかゝみをかけぬ山もなし　心敬
月雪のいろわかれ行朝かな　智蘊
つくしへ下り侍し時安樂寺にて
跡ふりぬ空にあふきし峯の雪　能阿

泉涌寺にて侍し會に
雪白く水わく谷の岩れかな
冬の發句のうちに
雪をれぬ木はみな風のちからかな　專順
高松太神宮にて
榊葉にさくや八度の霜の花　宗砌
早梅を
冬さくや一重こゝろの梅の花　專順
こぬ春をこてふに似たり梅の花
梅咲て花にまつへき春もなし　賢盛
香こそ梅としくれ竹の雪の窓　能阿
歳暮のこゝろを
白雪のひかりに暮ぬ年もかな　行助

文明十八年臘月晦日一校之終之。

宗祇　判

〔右竹林抄以内閣記錄課本校合〕

續群書類從卷第四百七十二

連歌部二

紫野千句

賦何路連歌第一

あふちさく野はむらさきの梢かな　救済
雲こそはやし五月雨のころ　周阿
夏の夜のほしやあけぬに入ぬらん　成阿
山のとをきは鹿のねもなし　全貞
旅になくわか涙には秋しりて　道明
荻あるやとや風をとむらん　全譽
萩か枝の花こそ露をちらしけれ　春松丸
月またいてぬ野邊のゆふくれ　有長
今は身のかくれ所をすみかへて　定阿
うき世を山やとをくなすらん　禪嚴
夢さてもみしは迷の内なるに　圓基（惠鎮）
時の間にこそ春は過ぬれ　純阿
花はなと風をもまたて散ぬらん　相阿
かすみくれては松もしられす　眞泊
月にきく浪の音までおぼろにて　盛理
夜船いつくの浦をゆくらん　侍
かね遠きそなたの山は明ぬるに　周
野は霜かれの峯のしら雪　全
里ふりぬたかかよひ路の殘らん　純
かへらぬ夢そむかしなりける　相
行水のあはれはかなき跡とひて　高
別の數やなみたなるらん　明
此夕物こひ鴫のなく聲に　侍

いまはかり田の秋過にけり　惠
山かけの雪間はかりに月もりて　周
槇のいたやは露もたまらす　成
もみち見ぬくち木の杣の村時雨　侍
松ふく風の音はたかしま　全
くれことに鷺のねくらをあらそひて　周
簑毛を浪にぬらすふな人　相
音はかりかくれぬ水やこほるらん　枝
上は雪ふむ橋のした道　惠
かけつくるいほりは山の木の間にて　侍
はたやきのこす峯のさくら木　明
さきぬるか火よりもあかき岩つゝし　相
春を夢とや夜あそふらん　成
あたにみるこてうのともにたはふれて　繼
もゝとせまての人の世もなし　周
うき事の心は猶もつくもかみ　高
いはすともよしいろにしるらん　相
ぬしや誰くちなしそめのから衣　侍
きつゝとへとは友そまたるゝ　明
見るまゝにねられぬ月の夜はふけて　松
きけはきぬたのちかき手枕　全

山里は隣も秋とふく風に　侍
泪の袖は露もへたてす　禪
旅まても都心やのこるらん　枝
船よせかぬるすまのたかしほ　成
小車の音かときけはかみなりて　周
まつ夕暮そ心とゝろく　泊
木陰行花には駒もいそかぬに　全
山にむかへは永日もなし　明
捨身の命を春にのこされて　惠
なくやきゝすのかりの世の中　周
在明の月も霞をのかれぬに　高
佛かくれし跡のとこやみ　成
神の代をいかゝ岩戸の明くれて　侍
こゑおもしろき哥のふし〳〵　禪
笛竹の風吹つたへのこる名に　周
雪にも松や青葉なるらん　相
水さむき浮ねの床のかも鳴て　市
くたすいかたもはやき川波　全
さほ舟のさしもとゝめす過ぬるに　高
見なれぬ方の宿やとはまし　純
藤衣身を山かつになしはてゝ　侍

春の心は我そわひ人　相
引ことの玉のを柳風たかし　周
なゝめにかへる鴈の一行　侍
日のいりし夕になれは霞にて　松
波より浦の月やいつらん　泊
旅そうき心は秋にとまり船　侍
やとなきあまり袖は露けし　全
あさちふのをのゝすゝきに風吹て　周
いろこきいねのほやみたるらん　明
これそ此桑子のまゆのはえこもり　相
夏野のかのも星かあらぬか　侍
山本のともしすくなく夜はあけて　成
みるもかりねの夢そみしかき　明
風さむしすそやふれたる旅衣　周
ころも雪ふる道のゆふされ　侍
日かけをもかくすは雲のはたてにて　成
しほさしのほる浦のすて船　高
波あらすいそのやかたは門もなし　全
杉かとみれはあらぬむろの木　周
北山や横川の寺も名にふりて　相
〔つ懸〕七くます社空なるは星　侍

かしこきは神をいたゝく心あれ　成
かふりひたひの氏のはふり子　相
あち酒の三輪の市人ゑいふして　侍
にこれる世にはなとましるらん　全
水あさき池のはちすは峯の竹　周
えたたれたるは波にさく花　相
春の日のうらゝかなるにしほくみて　侍
はこふやあまの薪なるらん　高
もちかぬる心なき身となすへきに　全
木の下石の上にすまはや　周
山にあるうの毛も白く霜をきて　成
露をたれたる筆のいきほひ　侍
玉章やこぬ夜の月におくるらん　周
夢のさきをもたのむ行末　定

救済十七〔全懸〕　周阿十五　成阿九
重貞七　道明八　全誉十
春松丸三　有長二　定阿二
禪嚴三　圓惠三　純阿四
相阿十一　眞泊三　盛理三

何木第二

葉にしける梅とひ過ぬ郭公　周阿
にほひこちふく風のたち花　仝譽
雨はるゝ雲間の朝日あらはれて　救済
山よりいつる野にそ道ある　暉嚴
鹿のねや遠き近きにかはるらん　繼阿
さとの門田はもる人もなし　盛阿
あしのやは月みよとてのねさめにて　成阿
秋風かよふ浦のまつはら　春松丸
音まかふ時雨や波をきかすらん　道明
ふりもさためぬ水のあは雪　相阿
かりの身はいつくともなくすみなして　有長
むすひかへたる山のかくれ家　仝貞
のかれてや夢の浮世とおもふらん　圓惠
風をとつるゝ槇の戸の秋　純
うきをしる涙に露のあらそひて　惠
ともにもろきは桐の葉の雨　泊
花のこる草をは道にふましはや　侍
かり庭のきしを野にそたてたる　相
鷹かひのつかれの犬を又引て　周
つみのきつなのはなれうたさよ　仝

すてゝたに世をは心やのこすらん　松
さとある山は身をもかくさす　成
爪木にもなしの家つとおりそへて　侍
かた枝のもみち風にしらるゝ　明
雲霧の行かふ空や時雨らん　周
日はいり月のいつるをそまつ　仝
西にふく初秋風のすきの窓　侍
ほたるのこすいちのともし火　相
みしか夜や夢をそむけて明ぬらん　惠
あふ時はかりうきこともなし　松
曉の別をしたひまちくれて　周
身を中空に人やなすらん　成
ぬししらぬ文のつかひの歸鳥　純
見のこす花におしきゆふ暮　定阿
けふさくら心とちるに風ふきて　侍
日數や春をさそひゆくらん　眞泊
鶯のをのれひとりとなく物を　周
こと葉ましふる旅の道つれ　明
里ことのさかひに入は名を問て　侍
よるかあしたか在明の月　周
夢に過うつゝの秋やのこるらん　成

ともにあたなる露の身をしれ　定
あさかほの花の下草おとろへて　市
さかり程なき天津乙女子　全誉
よもおへし身をうつせみのから衣　侍
日かけをさふる空のうす雲　恵
山里の初雪さては人まちて　周
野は草かれの霜の下道　侍
冬木とも松の陰にはおほえぬに　高
雲間の月や風にいつらん　周
浦波のよるこく船に秋ふけて　相
露をはしらぬあまのぬれ衣　侍
此神のちかひやよもにみちぬらん　周
花はちるとも枝なおらせそ　侍
行春を心になにとおしむらん　禪
かすむ名殘の在明の月　全
山遠き旅ねの里の鐘聞て　相
草の枕や野中なるらん　泊
いにしへを思へは夢の一結　周
人はしはしのいのちなりけり　枝
我身をもあふまてとてやのこすらん　松
わすられなからたのむおなし世　市

其まゝにわかれのなきは心にて　侍
うき面かけのなにとそふらん　相
山風は雲と殘らて花もなし　周
かすますとても夕あけほの　侍
日のうちと思も春の時さりて　成
きたるつはめのすをやかくさん　純
雪のこるうつはりおもきいゑつくり　侍
はらふ庭をはちりもうつます　明
人ことに神の御心ましはりて　周
たれすみよしを市となすらん　相
秋とてもうる物ならはかへつへし　侍
すかのねなかき日そのこりける　枝
ゆく／＼と霞をしのゝ草のはら　侍
たれにとはまし春の別路　禪
跡とをき其二月を名にきゝて　明
夜中の夢の末のあかつき　純
烏鳴鶏時をしるものを　侍
我身はやもめきぬ／＼もなし　成
涙こそありし名殘となりにけれ　全
かれ萩まても秋風の聲　周
古郷の夕や月をまたすらん　高

旅人いつと衣うつなり　明
なにとなく物戀しくてなかき夜に　侍
むかしの夢のいかてみゆらん　定
老か身のもしやとうへし花さきて　周
別木はなをもにほふ梅か枝　純
鳥の音のすたちはおやのねになくに　成
いつくに春の又かへるらん　明
これとてもかすみの袖の別にて　侍
山にたなひくよこ雲の空　相
月の夜や明とみえてのこるらん　枝
色は金のきくの一本　純
水にある月をもいけにほりためて　周
袖のひろさは露やしるらん　枝
衣をはたはりせはくすむいほに　全
むまやのおさもしらぬ山道　成
くたかけのなくねなからに明過て　相
春はけふきつ人のよろこひ　明

周阿十五　全譽七　救濟十八
禪嚴三　純阿七　盛理五
成阿七　春松丸四　道明八
相阿十　有長三　〔全歟〕重貞三
圓惠四　定阿三　眞泊三

何船第三

晴てたに露五月雨の草木かな　道明
葉のそろはぬは竹の若枝　有長
鳥の子の日なかき比とねを鳴て　周阿
山さとよりや春はたつらん　春松丸
雪うすき峯のこなたの朝霞　救濟
かけはこほりをのこすありあけ　全譽
河水の末は浦にや出ぬらん　定阿
舟路にかはる波風の音　眞泊
しらて行旅を秋とのうき暮に　相阿
ふるさと人や衣うつらん　禪嚴
一つらは初鴈かねの今なきて　成阿
花めつらしき萩の上露　純阿
いかなれはもとろき中に契らん　盛理
あけては別ふけてこそまて　圓惠
鐘きけは我もねをなくとりあへす　侍
夢のかたみになにををくらん　周
又いつかあふきのつまの其名殘　全

花さきこむるゆふかほのやと　相
草しける道のちまたは見えわかて　成
くれて木こりの哥うたふ聲　明
河舟のつりにもさほのある物を　侍
水ふかきまてしほやさすらん　純
松遠き雪の朝日のあらはれて　周
冬野は道の殘る宮守　成
夜はふけぬ此御神樂のおとこ山　侍
たてりとみゆる今の舞人　枝
尾花ふく風は袖をやかへすらん　松
まねけとをそき夕暮の月　惠
秋のくる西より船をまつらかた　周
玉しま河の波のしら露　相
ときみかく鏡は水の面にて　全
いつれのつるき實なるらん　成
君としてゐなから國をおさめしに　侍
みやこの道の關守もなし　全
其人の七賢き名をとめて　明
竹や林のかけをみすらん　泊
月いつる片山はかりくらき夜に　周
わか草まくらうつらふす聲　成

床さむき旅にしあれは秋ふけて　侍
かつちるもみち風をふせかす　禪
花うかふ菊のさかつきとり／＼に　周
口にいるゝそくすりなりける　侍
我にうき人は心のやまひにて　明
しらすなにとか哥をよまゝし　枝
鬼神のおそるれは又やはらくに　周
目にみぬ梅やよるにほふらん　純
かけうつす月もあかゐの花かたみ　侍
かたみの春は二月のあと　相
ありとしるおしへの歌は心にて　周
むくひや後の世にのこるらん　相
戀しなはうき人とてもなからへし　侍
よとのつゝみし契もらすな　成
水とをき鳥羽田に河をほりかけて　周
雨にふきなす秋の山風　相
暮にけり月の浮雲心せよ　侍
今夜といそくほしあひの空　明
鵲の翅ふたつを橋として　周
我ともからすわたるこゑ／＼　全
里人はあさ市とてやさはくらん　松

山はあらしの三輪の杉むら　侍
花ましる檜原はもとの青葉にて　周
かすみの空の日やくもるらん　禪
うき春の心つくしの別より　侍
今こゝにありいにしへの夢　相
人をさへ思あはする身の老て　周
其子そおやのかたちなりける　侍
そたちてや又ともつるに成ぬらん　成
すゑはちとせの松の若枝　周
雪にさく梢の花のいくかへり　侍
よするみきはにこほる川波　明
月出て夜船の浦やしらるらん　枝
鹿のねにこそ山はちかけれ　全
風はかり野さとの秋の夕にて　相
あらぬもみちの露のした草　侍
時雨にはすきのむらさきよも染し　周
うの毛の筆の文字のすみかれ　相
石の上硯の水のすくなくて　侍
山をやとさの畑になすらん　成
風あらす波のはやせの船ちかひ　周
しほのみちひのきしそかはれる　泊

春秋の時のたゝしき彼日にて　侍
行きの鴈はつらをみたらす　成
ちるそうきとても花なき里もかな　周
かすめは山のみえすこそなれ　全
月はかりいてし都の名殘にて　明
ゆふ露わくるのちのしの原　侍
いきてこそ秋にあふ身と成にけれ　惠
いのちのほともむしやなくらん　禪
人ことのあるかなきかの里ふりて　侍
あさ日かけろふはつ雪の空　成
宇治山のふもとの川やこほるらん　周
舟ともはしの道といふなり　枝
兩社君の御幸のはしめにて　侍
鳥居のはしらたてるさくら木　全
神風やいせの内外の春とへは　周
あまてる日かけかすむともなし　惠
きえぬるか小雪ましりの雨そゝき　純
つらゝをなかす岩かねの水　明
山路のすゑたえ〳〵の苔生て　周
鳥おとろかぬは御代しつかなり　市

道明八　有長二　周阿十九
春松丸二　救濟廿　仝響九
定阿一　眞泊三　相阿九
禪嚴四　成阿十　純阿四
盛理五　圓憲四

何物第四

下草の花たちはなのにほひかな　成阿
その葉なからの枝のあを梅　定阿
我とても春をわすれぬ身になりて　相阿
月こそ袖の霞なりけれ　道明
雪のこる山わけ衣うすき日に　救濟
水やこほりをなかしいつらん　眞泊
浦にてはすてたる舟をやとゝして　盛理
あま人よりも旅そわひぬる　仝響
心なき身にも秋をやしらすらん　春松丸
山もとなから遠き鹿のね　純阿
松にふきもみちに歸る風聞て　周阿
雲間の月やをそくいつらん　禪嚴
まちぬらす袖をは露とゆふ時雨　有長
ちきりさためぬ人の別路　圓憲

我とてもうかれ心のつまかへて　侍
花そめうすききぬのうつり香　仝
ちる梅やから紅をのこすらん　周
こゑは霞をくゝるうくひす　明
いほみえぬ奥の谷あひ雪ふりて　侍
夕や山をふかくなすらん　枝
空にある月こそ水に出にけれ　周
ほしは二の夜をかさねはや　純
秋はなとたま／＼きても別らん　松
手にもとられぬ鴈の玉章　成
あさかほの花にむすひし露きえて　周
人のいのちやさためさるらん　定
ありとても此さかひこそたのまれね　侍
又すむもとの都ならはや　相
浦かすむなにはの月の夜はふけて　周
この花ちりぬかねの一聲　侍
さとになき春は山にやのこるらん　成
爪木のみちにふれるしら雪　相
冬の日はあしたなからの夕にて　周
かれたる草のすゑそみしかき　泊
いたゝくは蓬のかみの秋の霜　侍

をき所なき身とこそ露なれ　明
月はなと山もとしらてのこるらん　周
かくれて見えぬみねのあさ霧　成
人すまぬいほりは松の煙にて　侍
名にきくはかりちかのしほかま　純
へたてゝや籬の島となりぬらん　明
船はいつくそ旅のゆふくれ　枝
行つかれあらぬ馬にも乘かへて　周
たかはのきしや野をはしるらん　市
春ふるはあし音よはき雨なるに　明
柳のえたのたかき上鞠　相
なをさくら梢にありと風吹て　侍
霞の上の雲の一むら　泊
明ほのや月の名殘と見えつらん　惠
秋にも人の別れとそなる　全
さとあらくあさちか原の露きえて　侍
いまは花なき小野の草かれ　枝
たれかよふ山のほそ道のこすらん　周
帶のことくにめくる谷河　侍
苔の袖はなた衣をぬきかへて　成
色にそましと身をやすつらん　明

夢にめてうつゝにふける世の中に　周
みてうきことをまよひとはしれ　惠
山遠し雲かあらぬかはなさくら　侍
ゆふへににたり春のあけほの　禪
雁かねのいつかこてふと歸らん　周
とこよときくはつはめたる國　侍
人ねたむ身はひとりねのよるの床　全
車の輪たちこれそ二みち　周
野をめくるよとの河岸水こえて　侍
上に雪ふる波のうきはし　全
ぬしもなき船を氷やつなくらん　周
心のいそく旅のむまや路　定
月みれはしらぬ山をも夜過て　侍
秋をはなにのさそひ行らん　純
ふくとてももみちはよその松の風　周
花ちる萩そふる枝なりける　成
別てはもとの心に袖ぬれて　明
みるにつけても人そ戀しき　侍
面かけや夢の枕をならふらん　相
なこりなき夜も鳥の音そうき　市
その事を思もわかすなきあかし　侍

波きゝわひぬすまの浦風　泊
我しらぬことはをあまのさへつりて　周
あふむかへしの哥こゝろあれ　相
かの池の波も御法やとなふらん　侍
うてなのはちす花ひらけぬる　枝
夏草の中にも露の玉ちりて　相
ほたるとふ火やよるひかるらん　禪
月をまつ野守かいほの窓くらし　周
くもらぬかゝみこれ秋の水　明
あさ霧のあさくま河のみなきりて　全
やしろの軒のかやか下露　周
神としてすくなる心うくへきに　成
手向になりぬあさのゆふして　泊
此旅はつゝり衣のいやしくて　侍
日もさしいらぬ山かつのいほ　惠
柴の戸のしはしは花にとはれしに　周
あけ暮てこそ春は過ぬれ　明
かすみよりいつくのかねのきこゆらん　松
雲のひゝきか瀧のしら波　枝
しほさひのなたふく風のあるゝ日に　侍
雪のうちにはしらぬあしのや　成
たかんなのかきねつゝきに生出て　周
代にすくれたる人そかしこき　全

成阿八　定阿三　道明八
救濟十九　眞泊四　盛理六
全譽七　春松丸四　純阿四
周阿十九　禪巖三　有長三
圓惠四　相阿八

何人第五

しける木の上なる松の青葉かな　禪巖
花にも露のましるなつ草　春松丸
遠野の道行人の月を見て　全譽
たひの夕もふるさとの秋　圓惠
音に吹風やきぬたをきかすらん　救濟
雲のまきれの鴈の一行　相阿
跡をたにしらせぬ春の別にて　道明
雪になりてや花はちるらん　眞泊
霞こそ山をはふかくみせつるに　南阿
我かくれ家は心にそすむ　盛理
捨身は市の中にもしつかにて　周阿

ましはる程やうき世なるらん　有長
神かきのちりをもためぬあさきよめ　成阿
この玉はゝきもてる宮つこ　純阿
乙女子か手にとるすゝのこゑきゝて　定阿
あまそゝきする軒のたち花　全譽
あつまやのまやの月夜やふけぬらん　侍
ことのしらへの殘る秋風　周阿
河霧のむせふも波の岩こすに　成
かすみし程の山のうくひす　松
けふことの夕や春をさそふらん　明
さとつゝきなる入あひのかね　相
草かれの野守の霜に道見せて　侍
松のもとにもふれるしら雪　全
月の夜や水なき浦も氷らん　周
空も一のおきつしら波　明
行船のとふ鳥よりもはやくして　侍
けふよあすかのたひは程なし　相
野をもすき山路になりて里とへは　周
うつろふ菊そいろかはりぬる　南
秋草の花やかなりし人こゝろ　侍
さかりすくなき身こそ露なれ　泊

長夜や月をのこして明ぬらん　松
わかれの鳥のをのかこゑ〳〵　全
うき中はまつ時はかり歸すへて　周
いつのなみたを袖にとむらん　定
わすれすよやとの夕のうかれ妻　侍
うかれとてこそ旅にいてぬれ　禪
都へと歸らぬさきに花ちりて　周
いつくの春にかりは行らん　純
名のみしてこしのしらねは雪もなし　成
浦はつるかのふるき御社　全
ものゝふのつるきとりもつあつさ弓　侍
入かいつるかむら雲の月　周
秋まてと思はさりしに身のいきて　成
むねにたく火のいつかきえまし　南
かはらやの下にはもらてふる雨に　侍
かきまはらなるつたの冬かれ　成
風あらき松のほそ枝のよこおれて　周
夢いかゝみるふせるたひ人　明
つかれ身のいゐにうへてはねられぬに　侍
いそけはとてやつとにをくらん　純
たれとてもゐ中くたりのうき物を　南

かた山さとは人そまれなる　禪
くすの葉の月をも風やかへすらん　周
二たひはなき秋の別路　枝
あさ霜のきゆれは露の野におきて　侍
いのちおしかのかりの身をしれ　成
我ひかぬまゆみのもみちちり〳〵に　周
風の柳や枝たはむらん　侍
誰とても心うこかすはるくれて　全
ちるをおしとそ花を繪にかく　周
のちしろし雪きえぬ間の庭をみよ　侍
夜もあけかたにわたるかさゝき　成
くもるなと思は月のかゝみにて　周
秋にむかへは老そなをうき　明
かへふりぬいつまてとてか草の露　侍
火をともすかとみゆるさゆり葉　成
それとしるひめかもすそのあかくして　純
雲の下てる日こそいてぬれ　惠
山よりもひかし霞めるにほの海　侍
うきすまひには春もしられす　全
花見るにひなのなか路もわすられて　周
あらしの櫻おとろへにけり　成

田をかへす我むかしにはよもならし　侍
老たるうしのあしのをそさよ　周
草かりの行はうしろの山くれて　成
すまのうへ野は人里もなし　市
浦見ゆるしほやはかりにたつ烟　侍
雪ふりみちて松もしられす　南
神かきのあまてる月の殘夜に　周
いせまておもふ野宮の秋　侍
むまや路のすゝかときけは虫なきて　全
はたをるおさのせはきはたはり　成
あさぬのゝいとまなく〳〵袖ぬらし　侍
代につかへては心すくなれ　南
輪はかりか車のなかへふたつにて　周
北にめくるは雪をふくかせ　惠
山かけのむろの戸ほそのゆふ時雨　全
峯はたかのゝおくのふる寺　成
夢さます其曉はとをくして　侍
たゝ月はかり夜をのこしけり　明
うき人に我か秋風のよもふかし　周
そよ袖ぬらす萩の葉の露　枝
いほふりぬ今はかり田のいなはいね　侍

ひとり思へと鳴のなく聲　明
水にかくかすならぬ身のなからへて　周
跡なき波の花とこそなれ　惠
これならて松をも藤にさかせはや　侍
春日の宮こ春そのとけき　成

禪嚴三　春松丸三　仝譽九
圓惠四　救濟廿一　相阿三
道明八　眞泊二　南阿六
盛理三　周阿十八　有長三
成阿十二　純阿四　定阿二

手何第六

音かはる風こそけふはすゝしけれ　南阿
せみなく松のいつれなるらん　純阿
白露のそむるはきなるもみちにて　救濟
ゆふへをいそく山は秋なり　仝譽
雲に見ぬ月はいつくに出ぬらん　周阿
よるとしもなくわたるかりかね　盛阿
人のうつきぬたに我は夢さめて　圓惠
のさとやなをも風はふくらん　春松丸

霜かれの草こそ道になりにけれ　成阿
下にはふらぬ松のはつ雪　眞泊
山水や末は氷らてなかるらん　定阿
音まてたかき瀧のしら波　有長
霞より上行月のおほろにて　相阿
かねきかぬ間にふくる春の夜　道明
夢は我ぬるをまちてやいそくらん　禪嚴
心に見するその人はなし　仝
名はのこるこけの下まて跡問て　侍（盛豐）
松は風こそむかしなりけれ　成理
すみよしの神の宮ゐのふりぬるに　南
作きし田や雨をまつらん　成
月かけを水にまかするなかれにて　周
夜ふねそはやき秋もとまらす　松
あしの葉のほになひくかと見えつるに　相
すゝきの露やおきみたすらん　市
あつさ弓入野のうつらふしかねて　純
かりなる我身もとするゑもなし　侍
いつまてと心の道にまよふらん　明
夢とおもへはこの世なりけり　成
朝みし花の夕風吹かへて　周

山の霞や雲となるらん　相
數〳〵の名殘はいかに歸鴈　恵
たれもおしむは古郷のはる　全
しらて行旅には道もをそき日に　侍
波の雪間を舟やいつらん　成
風はかり氷らぬしほにふきさえて　周
月もかけある浦のまつ原　全
里とをき山こそ秋と思しに　侍
時雨の露や野にもをくらん　相
鹿のねを夕に近くきゝなして　明
花ちるはきはもみちしてけり　成
荻かれぬ風もやとをや尋らん　周
そよたかまつそたひのうかれ妻　成
あまのきるしほやき衣うらめしや　侍
こゝろのなくは立せすもかな　泊
物いはぬ女のかたち繪にかきて　周
たれにゝせてか哥をよむらん　純
花みては鶯までもなく物を　侍
にほひもそれとしるき梅か枝　禪
霞えぬ雪のあしたの風吹て　全
跡こそ山も春はあさけれ　相

谷かけや水音近くきこゆらん　松
月いてぬれは道そしらるゝ　恵
さらてたにうき秋にしも旅立て　周
袖をやとゝや露のをくらん　南
風の間もなひく尾花とみえつるに　明
人のこゝろのたれおもひ草　成
とふことはたま〳〵もなき夕にて　高
あひかたきをはなとやまつらん　明
花にこそうしなひやすき時なるに　侍
夢のうちにそ〔め脱歟〕春をもとむる　全
世のうきもさたのなきにたのしみて　周
秋こそ今はなかは過ぬれ　南
東路の野は夕露の富士の雪　侍
入時しらぬ中空の月　高
人もこす我身もゆかて長夜に　周
別はよその鳥やなくらん　恵
袖はいさ涙もとむる關もかな　侍
あはてむなしき名こそおしけれ　市
言にもゆふけのうらのまさしくて　南
くしとりもてるきねかくろかみ　成
神にひくむまやのおさもあるへきに　周

いせまて行はすその浦船　明
これそたひ所〱のものかたり　侍
雨夜の月のいつくなるらん　成
露そゝき又涙あるまくらにて　相
秋田かりねの夢はむすはす　全
風のもるいほりの軒やふりぬらん　泊
關屋人なきふはの中山　侍
雲まても横たつみねの夕にて　周
かけの木の葉そ霜にあらそふ　高
なにことののそみもしらてすつる身に　明
かくれ家まても春やとふらん　松
花そめのころもよそなるこけの袖　侍
かすみなからにうすき月かけ　盛
下きえはなかるゝ水のこほりにて　高
ふむ跡のこるはしのしら雪　周
谷あひのそはのかけ道あやうきに　相
たひのつかれの馬心せよ　明
うき事を思ふにつけて身はやせぬ　道印
秋の名残のおほはらのさと　周
音そよく風のさゝくり葉も落て　侍
ひろはぬ玉と露やみゆらん　南
かけやとす月をも波のうつせかい　周
とまふきおほふ浦のとも船　定
旅人の□〔原闕〕毛をぬらす雨ふりて　侍
柳のかけにたてるしら鷺　泊
松たかき梢やなをも霞らん　松
野に道みゆる神かきの春　禪
跡たれし其二月のおもはれて　周
引しめなはの長き日の影　高

南阿六　純阿三　救濟十五
全譽七　周阿十五　盛理五
圓惠四　禪嚴三　春松丸五
成阿七　眞泊三　定阿二
有長三〔全闕〕　相阿七　道明八
重貞五　道印二

山何第七

夕立ははるゝもはやき其間かな　全貞
風や跡まてすゝしかるらん　道印
あけやすき夜をたに待す月入て　周阿
かねの音こそなをも春なれ　眞泊

夢にちる花をはたれかおしむらん　救済
霞にみえぬかりはなくなり　常智
古郷は山さへ遠き別にて　全譽
それとはかりの峯のしら雪　道明
いつをきてかれ野の霜はのこるらん　成阿
風一とをりさむきゆふ暮　禪嚴
月いてぬ雲よりも先かけ見えて　春松丸
ひかりほとなきよひのいなつま　南阿
秋の田のかりなるいほり住うきに　盛理
すてはやとても身こそ歸なれ　相阿
あらましは我たにしらぬ末なから　定阿
道かすかなる山のかくれ家　有長
をのつからとはれし比の春過て　圓惠
まつ人はこす日こそなかけれ　全
今さくらたかさそふとて散ぬらん　伊
波を花なる水のうき草　周
かけ霞む月のかつらは枝なくて　侍
うつゝを夢はなとましふらん　成
富士のねの雪に時雨るうつの山　周
跡こそ末の遠きあつま路　相
名のみして春秋とむる關もなし　侍

老せぬ門はいつれなるらん　明
くすりとる蓬か島はいさしらて　周
句缺
浮木とやくたすゝかたの見えつらん　侍
つくらぬはしの殘る杣門　成
音をきくいた屋の軒の雨過て　伊
ひさしからてそ月は入ぬる　高
秋の夜や人まつ程にふけぬらん　禪
きぬたか風か時〱の聲　全
初雁の後に一行又なきて　周
たよりの文をたひにこそみれ　全
山里の花はさきぬる思ひやり　伊
外より春や都なるらん　明
かすみてはくるゝさかひもしられぬに　南
雲なきたにも日こそおそけれ　市
船いたす雪のあしたは風ふかて　侍
ほかけも見えぬあしの冬かれ　高
湊田にまかせし水やこほるらん　周
ぬるゝ袖こそ月をうけたれ　相
花のさく菊のさかつき手にもちて　伊
もみちにあかき人のかほはせ　全

舞ひめのなかひくもすそ色殊に　明
さほのうちよりちかきかすか野　成
よむ哥の和はならの宮こにて　伊
ちゝはゝはいさねるはたか子そ　相
むらうしの歸る草かりもろ共に　侍
ふみの名にある竹そつのくむ　高
葉のあをきあし火をあまのたきさして　周
ほたるのかけは波にきえたり　南
夏の夜の霜とや月の成ぬらん　禪
卯花かきの庭のしら雪　成
通路もしらせぬ春のとなりにて　侍
山には聲のちかきうくひす　明
吹いつる風や霞をさそふらん　高
夜船の浦はあけ過にけり　相
葉をならす竹島かくれ雨きらて　周
江のほとりこそ里はなれなれ　高
くれて行人をは誰かおくるらん　明
かへしを見はやけさの玉章　伊
たき物のにほひの眉のすみかきて　侍
みたれてかほにかゝるくろかみ　全
風よはき柳にならふ花もかな　周

名はいとさくらよるまてもみん　南
山ひめはをらぬ霞のころもにて　成
こほらて落るぬの引の瀧　枝
かけ白き月や雲をもさらすらん　高
のたけはいつれ矢をはきか花　周
もみち散はしをも弓につくりなし　伊
鹿かり人や山にいつらん　定
身をすては波の衣もきらふなよ　侍
きつね心のたのみなの世や　伊
つかの間もあるをはしらぬ命にて　南
あふ事かたなさやはおもひし　明
おほつかなゑみのうちなる下心　周
みちは草木の山のいかくり　侍
ふし柴の露はら／＼と風吹て　成
これやいなのゝ鴫のはね音　全
やとそなきたひねの數を月もしれ　周
なとうき秋のこゝろとむらん　南
いきたらは又も春にはあひぬへし　侍
日のなかきをは老になさはや　高
花みてや夕を猶もおしむらん　松
けふの名殘のいりあひのかね　明

野寺にもすむ人あれはとふらひて　侍
我もあははやのちのあかつき　恵
別しは猶夜ふかしとたちかくれ　周
又ねなからも夢やみゆらん　相
我を君かさねてきはや懸衣　伊
浦舟ならふむろの入海　侍
松にふく風の高砂とをからて　恵
をのかともなるあひおいの鶴　周
樹のかれし林の別二千年　侍
あまりへたゝる二月のそら　高
春の夜のみしかき月をけさもみて　周
野は別草の神の御社　相

全貞九　道印一　周阿十五
眞泊一　救濟十四　常智十
全譽六　道明八　成阿七
禪嚴三　相阿五　南阿六
春松丸三　定阿二　有長二
圓惠四　盛理四

片何第八

風かとよ池波きけは夏もなし　常智
しける柳の露のした水　盛理
ふけてみる月は高やなりぬらん　禪嚴
鹿なくかたの夜のとを山　春松丸
秋にふく野里は草の枕にて　救濟
たかゆふへにか衣うつらん　道明
荻はかりやむ時もなくふく風に　成阿
霜のふる枝のはきの冬かれ　全貞
我にうき心の花のうつろひて　全譽
今はとはれぬ春にそありける　有長
月を見し涙や老に霞らん　周阿
さたかにもなきいにしへの夢　定阿
すてぬれは遠くなりぬる浮世にて　圓惠
山路いつくとまよひ行らん　相阿
ふるさとの名殘と思ふ峰の雲　眞泊
かりも音をなく身はたひにあり　相
袖ぬらす露こそやとをから衣　侍
もみちかさねの花のした草　周
白菊を又むらさきに染なして　成
月のゆかりの夜やのこるらん　高
別ても面かけは身をはなれぬに　相

やせたる馬の毛こそ長けれ　伊
法の師の智のみしかくはいかゝせん　侍
かけをもふむなはゝのおもひ子　周
我君は民をあはれむこゝろにて　伊
霜夜さむしと衣にそしる　侍
しろ鶴の上毛は雪にみえなから　周
かけもねむりて鷺たてるなり　伊
此森に花のかそかの木はありて　侍
春過ぬれはたのむ方なし　市
山里はまつ人とてもをそき日に　明
谷のけふりやみねかすむらん　成
寺〳〵の夕の鐘を又きゝて　伊
たひよりかへる道のあさ霜　高
くすの葉のかれのゝ松をふく風に　周
神のいかきを月やこゆらん　成
浦波の音すみよしの秋ふけて　全誉
みとしろ小田にかりしほになる　枝
袖におく露もあたなる身としるに　明
草のいほりをたれむすふらん　相
人とはいかゝ岩屋に我すみて　侍
すゑこそ見えねこけの下水　高

山かけの道はいつくにつゝくらん　松
ふらぬ夜たに月のしらゆき　恵
霜さゆる嵐のかねの聲ふけて　伊
松や野中の落葉なるらん　成
浦ちかき里は薪のともしきに　侍
しほ屋のけふり波にこそたて　定
我袖をあまのぬらすにくらへはや　周
秋にそたれもわひこゝろなる　相
桐の木の琴の爪をとぬししらて　伊
なみたの露のそゝくひさのへ　侍
月見ても子おもふやみの殘夜に　周
むかしはいつも夢になくらん　相
過ぬるもおほえぬ春の別にて　全誉
かへるもかりのかすもすくなし　高
行水のはやくも花やちりぬらん　伊
霞をなかす瀧のしら波　侍
雪きゆる河音に又雨ふりて　枝
また道しらぬたひの明かた　相
我ねたる夢は人にや通ふらん　伊
心の道に關もりはなし　高
すまては猶遠からぬ都にて　周

山のさかひもしらぬから國　伊
虎はほへ風ふきさはき寒野に　侍
月にや雲のまたらなるらん　松
時雨ふる竹の下草そめわけて　周
松のかけなるもみち一村　高
火をたくはあたゝめ酒のうす烟　侍
ゑひにふす身をたれおこすらん　伊
出かたきまよひのうちのこゝろにて　明
おもひの家はあるもしられす　成
水くらし此河上にとふほたる　周
日の入空は又ほしのかけ　全
くれぬるか西はおくらのあらし山　侍
秋のさかとや袖ぬらすらん　明
白露の色にはさかぬ女郎花　周
きなるはたけは粟をまけるか　侍
かすか野や其神人のから衣　成
さかきはうたふ夜はふけにけり　相
月や霜八たひの鳥はまたなかす　周
國かはりても遠きあつま路　明
うきなからたひをするかのふしの山　高
浦こく舟のうき島かはら　全

しほかまは松にもたつるけふりにて　侍
はしらありともみえぬあしの屋　成
いつの代そ其八重かきの宮つくり　周
文字さたまりし和ことの葉　明
人の身の長きみしかき命にて　侍
日をまちくらす秋の夜の月　周
七夕は二たひあかぬ中なるに　伊
なと我袖の露はそふらん　市
末遠き尾花かくれの野をわけて　高
たひの心のうつらなく聲　泊
行くらす片山里にやと問は　侍
ゐ中ことはゝきゝもしられす　明
一枝も家つとゝなるさくらかり　伊
かりなる別春やもつらん　禪
薪つききえし烟もかすかにて　周
かまとにきはふ民のたのしみ　成

常智十三　盛理四　禪巖二
春松丸三　救濟十六　道明九
成阿九　重貞八　全譽五
有長四　周阿十五　定阿二

圓惠二　相阿六　眞泊二

何目第九

いつもみむ名も常夏の花さかり　相阿
すゝしき風になひくくさむら　常智
月に行野はよるまても道有て　道明
さとやそなたのきぬたうつらん　有長
旅のうき心になして秋もなし　周阿
霧にくれては山もしられす　禪嚴
なく鴈はいつくの空を渡らん　春松丸
かへるは花の別とそなる　全譽
我をたにとふ人ありし春過て　救濟
とをきや里のかすみなるらん　眞阿
月出は朧なりともみるへきに　成阿
夜舟の山はそれとしもなし　定阿
しほひには今ふる雪やたまるらん　盛理
聲こそ浪のひゝきなりけれ　圓惠
なきくらし我友なしとおもふ身に　侍
心の老をなとわするらん　相
秋のこるそれたに今は昔にて　周
風をやらへし庭の荻はら　侍
種あれはさくとはみえし草の花　伊
月によせてもよめる歌人　周
浪寒き船にぬる夜のあかしかた　侍
ことうらよりも須磨の夕暮　成
音にたに我そてぬらす浪聞て　明
其いにしへも身にはかへらす　相
すみあらすさとは道なき春の草　侍
いつかはちらぬはなのとし／＼　周
跡したふその二月の十日あまり　相
夜中の月や猶かすむらん　伊
雪のこる深山からすの聲さえて　周
炭の車をかくる黒うし　侍
やせてこそ翁の力よはりしに　成
おちふれたるやすかたなるらん　市
わひぬれはとひくる方もなく涙　明
紅葉の雨は影にこそふれ　伊
荻にさく花みやきのゝ露散て　侍
まくらの月は夢にまされり　成
わかうきを秋にくらへはよもまけし　周
身もなきおれは鶉もろ聲　侍
同世のなとかた戀になりぬらん　枝

くるしき物をとふ暮もかな　周
いほふかき道は夏野のくすかつら　侍
露の玉さゝ袖はほたるか　成
よみはつる文を枕とねたる夜に　周
おさなこゝろにものわすれすな　恵
ことゝして我にもあらす身は老ぬ　侍
入にし山をかへるさと人　明
西にゆく秋も名殘の夕日影　相
さすかもみも梅(ちり櫻(花)歟)ことなる　侍
露かくるつゝりの袖の手向して　周
時雨も霧も風やかへさん　明(六角)
河浪の月もよるかとみえつるに　崇永
水なるかけは船をさす人　周
暮ぬれはあまも庵の戸をとちて　伊
出入山はこけの通路　全
すては身をそのまゝなれと思しに　侍
我をしらぬや命なるらん　成
今うきにむくひの後の世をまちて　周
こゝろ鵜舟のやみのかゝり火　六
あけにけり程なき月のかつら川　侍
たか家までも秋のはつ風　相

下露もなしの一葉の先おちて　周
山のかたには日くらしの聲　明
夏過ぬなく蟬のはのうす衣　侍
をりはへたるはしつかはた物　成
たれか此所のおさとなりぬらん　恵
やとをたつぬる旅のむまや路　全
河にてはさほさす船の浦つたひ　侍
水としほとのいつれなるらん　定
松原は浪の音にもかせ聞て　松
あられましりの雪にこそふれ　恵
月かくす雲よときりて寒夜に　周
あけてもくらき窓のくれ竹　相
うきふしをのこすは人の別にて　明
けに數ならぬみのゝしけ糸　周
いつはりかくる事かたく成ぬらん　六
石ふみくたく奥の荒駒　侍
あつま琴をゝ引ならす爪たてゝ　周
しらぬ男のひはのはち音　伊
昔こそまねきもとめす過ぬるに　六
まつらの船のちかき神かき　侍
唐國をすはすみよしのしたかへて　周

月日もともに西にこそゆけ　相
物ことにはしめ終のありぬへし　六
身はいつまてのうき世なるらん　明
花も又なれしを我も忘るなよ　侍
春心なき別ならすや　伊
在明のけふりに霞むしほやきて　周
浦からきゆる山の白雪　六
河こほり瀧は波をやおとすらん　侍
きふねはかりのなかれとそきく　全
つかれたるきをひの馬を乘かへて　周
石をもたつるすくろくのさい　明
神に人ちかひかけてやいのるらん　六
かつらすそ引きねかよそほひ　侍
くすのはふいかきの松の風こえて　周
一夜の秋や夢かへるらん　全
月見てもなれぬ旅ねにうき物を　相
野山の露そ我袖にをく　明
浮雲の空さためなき村しくれ　伊
うるほふ小田は此天下　侍

相阿七　常智八　道明十
有長二　周阿十九　禪嚴一
春松丸二　全譽五　救濟廿一
眞泊一　成阿七　定阿二
盛理四　圓惠四　崇永七

唐何第十

風やこれ松葉もそよく音すゝし　崇永
夏野は草もしけきさゝ原　救濟
夕露の玉かとみれはほたるにて　周阿
ひかりさきたつ村雲の月　道明
秋の行其方には猶のこる日に　盛理
さとのきぬたをたれいそくらん　有長
山風に窓うつ雨をきゝそへて　定改
水音にこそ谷はふかけれ　定阿
瀧おつる末をや何になかすらん　圓惠
なみたとまらぬ春の別路　常智
鴈かねの歸る時にも又鳴て　成阿
夕よりなをかすむあけほの　眞泊
月のこるかねやおほろにきこゆらん　全譽
夢みるほとは春の夜もなし　相阿
みしかきは霜のかれ野の草枕　侍

よもきかかみそ風にみたるゝ　全
葉のおつる柳はいとのすちありて　周
水のくるにやうきをしるらん　春松丸
我袖のなみたは露にをきかはり　六
なれても旅の夜こそ長けれ　禪殿
月までも古郷人の名殘にて　侍
山の遠きや雪にみゆらん　明
ふしのねはきえしより猶うへなれは　六
けふりか雲か風の中空　惠
浦たにも見えぬ浪間のおきつ船　侍
松原までもしほやさすらん　全
氷よりなかるゝ水のあさ日影　周
あさき方こそ雪もきえぬれ　定改
山里の道のなきたに春のきて　成
けさをはつねの鶯そなく　定
霞てや今日の夕をのこすらん　六
其方はかりの入あひのかね　市
老となる身のあらましの今つきて　伊
たのしむとてもいつまでの世そ　成
うたゝねのひちのまくらの夢の内　侍
こゝろをまけぬ人はまれなり　六

輪は二車のみちはひとつにて　周
風もめくるかかけの落しゐ　伊
人の身は生〳〵てはてもなし　六
たれもや世々のおやこなるらん　周
なく鳥の林の竹にすをかけて　枝
片山かけにつくる春の田　宗
暮ぬとや霞を風のかくすらん　明
花につけたる人の玉章　六
香ににほふ梅にはよそにちらすなよ　侍
あるしのなこりやともわすれす　全
夜行はともなき月におくられて　周
さめてや秋もゆめちなるらん　伊
今日をしる菊の酒にもゑいぬるに　成
なみたをそへるそての上露　松
古寺のかひふきならし日は暮て　侍
山人歸る洞のかよひ路　宗
影はかり鶴の友とやなりぬらん　六
松一木にも風きゝつへし　相
花の後志賀の都の猶あれて　周
春そむかしを身にのこしける　禪
月霞み我やあらぬとたとる夜に　伊

夢には道をしらてこそ行　全
旅と秋ともに夕のうつの山　侍
いつれかつたのもみちなるらん　惠
古郷の草のほそ道露わけて　周
ぬのをもさらす庭の中垣　成
卯の花の一重や雪を見せつらん　六
よも霜をかし夏の夜の月　侍
いさこふむ浦はしほひの跡なるに　明
かもめ立たつ水のなかれす　周
にほ鳥の浮たつ波に又入て　全
てる日なからや雲かゝるらん　相
峯わけの一とをりなる村しくれ　六
野には道ある山のうす雪　市
すみやきの一重衣の冬侍て　侍
霜すかたそ身のうへになる　明
おとろふるかゝみのかけのはつかしや　伊
風吹森の花の下水　侍
明やすき春の夜烏はや鳴て　周
み山のたひね里もしられす　全
さゝのやのかりなる身とや成ぬらん　六
そめたるすみのあさの衣手　成

筆にかく文字にはなきか名を留て　周
つく／＼しこそ土のしたなれ　六
うちかへす田の□〔石歟〕くろく雪白し　侍
圍碁のかちまけや石にみゆらん　明
生死のさためなき世に猶すみて　六
山の南ときくはこの國　周
よのつねの月とは〔ゝ脱歟〕とやいはし水　侍
秋ももなかとはなついろくつ　成
露とても海なる草をよもそめし　周
風一しほの波のふかみる　相
梅にこそ紅色の花はあれ　六
から國いかにつくし路の春　侍
かり庭なるひつしはこれか鹿の鳴　周
あゆみとゝまるやとのおきふし　明
我心みやこにはこふ夢さめて　侍
この御社の神のたひ／＼　伊
今もさそ後の世まてといのる身に　六
やすくたのしむ寺とこそきけ　成
彼國に行ても歸る道ありて　周
ちかひの船やきしにつくらん　杖
いは河の山をのこしてふる雪に　松

しらけの米そあられなりける　周

崇永十五　救濟十五　周阿十六
道明七　盛理三　有長三
定改四　定阿二　圓惠三
常智七　成阿八　眞泊一
全譽七　相阿四　春松丸四
禪嚴二

何屋平野法樂

杉たかく蝉なく森のこすゑかな　全譽
葉も夏草のさくやとの花　定改
すゝしやと思へは風の夕にて　救濟
山水よりや月はいつらん　定阿
秋のくる道はいつくとしられぬに　崇永

空に聲ある鴈の一行　春松丸
我いそくきぬたを人の又うちて　圓惠
さとは其方のいりあひのかね　禪嚴
ちれはとて花にはなとや歸らん　周阿
山かつなれは春もおします　成阿
薪(ゆ)いふねりその永日も暮て　相阿
かつらはいかにしらぬさほひめ　盛理
春日野のいかきの藤やかゝるらん　侍、
かしまか崎をこゆる浦波　周
又はこふ御つきの船のかち取て　道明
水のおもてに月やいつらん　有長
今夜しる日數そ秋のなかはなる　常智
ねさめにちかき荻の上風
白露の古郷に又玉しきて
金おさむる山はくらまか

續群書類從卷第四百七十三

連歌部三

月千句 文安二年八月十五日

夕何第一

月やあらぬにたる時なき今夜かな　宗砌
夕まてふくけふの秋かせ　堀宰
紅葉はの枝にたまらす霜冴て　日晟
ちるや木末の雪の初花　生阿
霞たつ遠山本の朝またき　專順
そらに野原の雲雀鳴聲　直清
殘る日の行方みえぬ春の色　玄幸
舟人つくる沖つしらなみ　盛家
よりもかく汀はるかに汐滿て　自（聖歟）篤
風は木の間に絕ぬ松の葉　在阿
くるゝより峯の棧跡もなし　軒
雲路をわたる月そかけろふ　良珍
鳴わたる小野のかり田の秋の雁　晟
夜寒のしくれけさや過行　幸
いつの露いつまて身には殘るらん　順
我世そさらにいとはれにける　篤
侘つゝも住める伏見の里はうし　正信
ふか草山はさくら咲ころ　直
花の春人の往來に野は枯て　砌
暮ぬる方や霞しくらん　盛
鳥あさる浦の眞砂の白妙に　生
洲先の月や夏の夜の霜　晟
吹となく風ひやゝかに水すみて　軒
また色あさき秋の山あひ　生
おき初ぬ旅行人の袖の露　直

さもうき世をやおもひとるらん　良
隠家の庵にふかく住なして　篤
かきこもるへきそのゝ呉竹　軒
冬の日の落葉にくもる松の陰　晟
時雨し山にさはくむさゝひ　盛
高圓や尾上の雲を雪とみて　聖
ふりぬる宮ととふ人や誰　幸
ことかたれみさりし代々の秋の月　砌
覺てそおもふ長き夜の夢　順
露のまを頼む契は命にて　聖
君か爲には身をかろくせよ　晟
御調つむ車のうしの遲き日に　砌
津の國かけてかすむ淀舟　生
とはに見は猶いか斗春の空　幸
はなを床なる宿の明仄　軒
嵐ふく山松かねを枕にて　砌
ねぬ夜そおほき誰かしるらん　順
伴ひし昔の人を忍ひつゝ　直
老の夕の月のかたらひ　晟
哀てふ秋とむかへは袖ぬれて　篤
枯行野へそ露を悲しむ　聖

花に猶霜せめきける草の原　正
冬は殘れる虫の音もなし　生
曉かきるつゝりのさしも寒き日に　砌
せはき柴屋そ焼火ともしき　幸
春もまた白雪つもる谷隠　篤
はつ鶯の稀に鳴聲　晟
梅かゝの昨日は薄き朝霞　聖
いつのまにかは風かはるらん　幸
結ひてし水冷しく秋のきて　直
露の底なる野への埋井　盛
いにしへの里をもかれす夜半の月　聖
見しを恨の人そ影せぬ　砌
夏山も殘りて花は咲ものを　順
峯のみとりにかゝる白雪　幸
霞む日や空路に鴈の迷ふらん　良
春の別そいはん方なき　篤
ふりくるゝ雨を三月の名殘にて　軒
折る袖ぬらす藤の下露　砌
山吹の花染衣いろふかみ　生
うつるこゝろそうきせなるへき　直
月も只しからみかけよ涙川　晟

あふよりほかの秋の夜のかす　順
身にしむは誰夕くれの風ならん　聖
野となる里の松の一もと　砌
冬枯の鶉の床のむらすゝき　晟
かり殘したる片山のみち　篤
古寺のあたり見えてや歸らん　幸
舟に燒火の遠き難波津　聖
江の水に流れもやらす飛螢　軒
露の玉ちるあしの五月雨　正
青み行門田の早苗柳かけ　晟
春ものふかき小野の山里　砌
けふりてしまきの炭かま打霞　幸
朝けをぬるみ風そこちふく　順
冬の日も雪むら〳〵に降きえて　生
霜はひかたに興の有明　晟
ひとり鳴鵆は波に立別　盛
あとをしおもふ人の面影　聖
一筆のすさひの文を身に添て　砌
忘れんことはつかのまもなし　篤
とへかしな生田の森の秋の暮　聖
また霧ふかし旅の門いて　軒

絶れ月心つくしの道もうし　順
にしにおもひをかくる明くれ　晟
怠らすみ名の聲のみまへ（唱歟）きて　良
我大君を仰ぬはなし　直
かつらきや花のよそ目の春の風　晟
よし野の山はかすみこめつゝ　生
故郷は囀る鳥の住家にて　盛
あせたる池は水そ寂しき　順
言出はこゝろ淺くやおもはまし　幸
くろきはかみかはなたなるおひ　軒
亂れなき世にこま人もつかへきて　砌
文のはかせの道そたゝしき　瑠璃滿

何船第二

月は名をしのはてめくり逢夜かな　日晟
程は霧まに遠き雲井路　宗砌
山越る雁の翅に雨落て　堀宰
あらしやしのく峯の紅葉は　盛家
夕日さす梢もさひし秋の空　玄幸
庭の笹の浮ふ池水　瑠璃滿
さゝ浪のかゝる岩根に雪を見て　直淸
とる柴はしやふみならすらん　良珍

ふし立も深田の早苗短きに　専順
　小枝はめくむそのゝ若竹　聖阿
五月雨に山の下露ふりそひて　生阿
　猶分わふる谷のくれかた　正信
秋は只野をなつかしみ行道に　砌
　露を舍りと一夜ねにけり　晟
木のもとのあくれはくらき月入て　軒
　風は見えぬに花の香そする　幸
春雨を幾日かふれし天津袖　聖
　かすみやおほふくるゝ山のは　生
波さはく湊の舟の笘屋形　盛
　汐みちくらし遠の浦〳〵　良
鳴澪の芦邊をよそに立別　順
　猶みてゆかん和哥の松はら　砌
おもひやる妹に戀路をさそはれて　晟
　人まつ頃そ門にたゝすむ　生
夕こそ忍ふに更る夜もつらし　幸
　かくてねよとのかねそ物うき　聖
月たにも入來ぬ山の篭寺　砌
　嵐のみねはたゝ秋の聲　軒
猿さけふ木陰や露もしくるらん　順

　ふりぬる宮居上久にけり　直
鈴ならす神樂男は翁にて　砌
　須磨より舟のかよふ住よし　宗
都路のさかひ杳に見え渡り　正
　里のうへなる四方の山の邊　晟
雪まをもまたぬ木こりの踏分て　良
　〔中脱歟〕野に行はわかなつむらん　生
打群て引や小松の初子日　晟
　けふ鶯もさそへ我友　順
暮にけり又やは逢む老の春　砌
　しらは命の果をうらみん　盛
まちよはる心も□なき夜の明て　軒
　うきおもひには夢たにもみす　正
聞侘ぬ旅ねの里の山おろし　生
　瀧のあたりそ雨はまさるゝ　幸
夕されは霧立のほる月落て　晟
　涙や秋の空をしるらん　砌
日くらしの聲はいつしか物さひし　幸
　木ふかき方は道たとるなり　良
ちるとなき霞の花の末きえて　軒
　春行水のあはれ世中　砌

年の波越て歸らぬ身はつらし　順
人のみるにもおしき玉のを　聖
夢覺ぬ又もあふやとさぬる夜に　幸
來んとおもふそこゝろたのめる　軒
長月の殘れる空を詠居て　盛
移ひそむるみねの白菊　直
露寒き二本かしはちるたひに　生
そともの夕風そはけしき　良
此里のむかしをとへは人もなし　晟
かよひし跡もふるの中道　聖
夢にいま見すは戀しとあこかれて　軒
おき出ぬるに夜は深きかも　幸
海くらきむろ山もとの舟よはひ　砌
松ふりけりなたてる磯の木　盛
釣人の袖の朝風雪ふりて　軒
かへるやくるしさかり場の道　順
行秋をつけ野の鹿の聲寒み　砌
草のまくらの夜の長きころ　直
月見れは菅の根凌く露深て　生
おく山隱迷ふ薄きり　晟
捨て誰此世をやかてへたつらん　砌

たゝあらましに我ぞ日をふる　正
夕くれの涙のなかめ晴やらて　幸
かすめる空は春のものかは　聖
歸る鴈かたれとし路のことゝはん　砌
雪の白根は花そ咲らし　晟
草深き野澤の芹をつみ分て　正
里の遠田は作り添つゝ　盛
あるゝをもかこはぬ庵そのまゝに　直
露も雫も袖に見えけり　良
秋の夜をあかてや月に別るらん　軒
又漕出る天の川舟　順
木葉ちるかたのゝ末に風吹て　篤
いろも渚の森の冬かれ　聖
霜をへてその跡ならぬ宮の中　晟
日さすあしたそ春は長閑き　砌
寒かりし山は霞の引かへて　幸
すゑ白波の花の遠島　生
聲はよもひろひもわけし櫻貝　晟
しつこゝろなき松風の聲　正
露ふかき小萩か上の月をみて　順
いねかてになる秋の此ころ　盛

夢をさて誰か夜寒より忘るらん　軒
おとろかぬ身の果そ他なる　聖
後先の世々をもしらす迷ひきて　盛
行くらしつゝ道のはるけさ　良
野も山も春は霞のうちなりと　直
鳥をあまたの鳥の囀り　晟
風渡る軒はの木〳〵の花飛て　砌
梅をわきてそ神は愛ける　順

何田第三

星の名も一夜は立し秋の月　専順
ちきりや置る木々の白露　正信
旅の友けさ遠近の霧分て　宗砌
又里みゆる末の山みち　堀宰
入海に舟吹をくる興津風　日晟
ひかたの汐や雪にさすらん　玄幸
芦の葉の氷にかゝる霜解て　盛家
夕日少き松の一むら　良珍
涼しさや夏野の月にむかふらん　生阿
草の庵のまとの遠山　満丸
夜の雨朝けの雲に又ふりて　晟
刈手や寒き小田の秋風　軒

うら枯のくろの薄のちり残り　順
わたる方にやしとゝ鳴らん　幸
詠やる空を夕と袖ぬれて　直
猶そ戀しきふるさとの山　生
昨日みし花も残らすかすむ日に　盛
夜のまの夢の春の面影　順
行水も明行色も長閑にて　軒
月と雪とにまかふ白なみ　生
髪筋もともにふりぬる眉の霜　晟
かたらんものとむかしやはしる　良
荒まさる庭の笆の蔦かつら　盛
くすのは風も残る夕露　幸
岡のへのしくれに鹿の聲ふれて　生
雲のしからむおくの谷水　晟
夏かけて袖さへぬらし氷室山　順
日もさゝぬまて深き木隠　幸
咲とつる花の朝戸を出やらて　軒
霞にこもる里はふりにき　生
鷺のつまとふ野への雪の中　晟
また風寒き若草の山　直
心こそしたにはもゆれ人もしれ　順

うくつらき身はことの葉もなし　良
後とたにいひ出かたき別路に　生
月そかくるゝしのゝめの空　盛
薄霧の梢たえ〳〵色つきて　軒
野分のうへの峯の白雲　生
行鴈や我一行をしたふらん　直
おくれていそく跡の旅人　順
すきかての道の關守こゝろせよ　良
くれかゝる日はいく程もなし　幸
かたふかぬよはひを見れは羨みて　晟
ふりぬるやとはうき世〻けり　盛
いとゝしくあさちか本は物寂し　生
かしは打ちる冬の木からし　良
みかくかと日かけよりふる玉あられ　軒
眞砂を波のくたくとやみん　幸
主や誰いりすにかゝる捨小舟　生
江のうき橋は板朽にけり　晟
うたゝねの床こそ夢のえにしなれ　盛
又あふことのあらは頼まん　良
二本のすき行春は花散て　順
きたのゝ梅の枝しけきかけ　晟

□月のかつらいつこに霞らん　生
、朝日はやかてゝりまさる色　幸
夕立の空さりけなく又すきて　良
またかはかぬや岩間もる水　軒
苔ならて袖いたつらに朽ぬへし　晟
捨んとおもふ身は老にけり　幸
はこひ行數もしられす木をこりて　良
いそかはしきや年〳〵の暮　順
勤ては佛のみ名を唱つゝ　晟
その寺〳〵の法のいとなみ　軒
明わたるみねも麓もかね鳴て　良
ゆりぬる月は松の葉隱　正
風あらき磯家の秋の夜を寒み　生
たゆむまもなく衣打音　盛
物おもふ心まよひの夕より　幸
戀のけふりやそらに立らん　軒
我胸におよふへしやは不二の嶽　晟
みし人あはす遠き都路　幸
あとそなき假寐のやとの夜の夢　生
ふみわけかたき雪の明仄　盛
一葉さへ殘らぬ桐は冬されて　幸

草にむもるゝ忘れ井の水　晟
蛙鳴田つらの暮の寂しきに　順
幽に成りぬ春雨の音　幸
霞しく山よりおろす風はなし　良
雲にやおくの杣木ひくらん　生
月みれは空に「　」　晟
おとろく鳥そ渡る聲する　直
林よりかつちる下葉打そよき　順
分行道に拾ふさゝくり　軒
眞柴とる雫に袖のしもきえて　晟
宇治の川邊の眞木のしま舟　正
雲間より又さしのほる朝日山　順
めくれる空のかさゝきの聲　盛
旅人の簑毛しほるゝ雨ふりて　生
くるれはしらぬ里に來にけり　軒
猶殘る花もやあると行まゝに　幸
春の野原は分もつくさし　直
朝霞遠方人の袖とみて　順
舟うちわたす末の川長　幸
日數へて行驛路の鈴鹿山　晟
ふるき宿とは月やなるらん　生

蓬生にあらぬ花ある秋の草　軒
鳴きり〳〵す音をな盡しそ　盛
ことゝなくうたふもしるし夕神樂　幸
ゆふかけそへて猶祈るなり　良

何人第四

おもかはり名にあふ月のかゝみかな　良　珍
朝貌むかふ露の明仄　生　阿
夜を殘す松の秋風さやかにて　玄　幸
猶山本は小鹿鳴なり　専　順
霧渡る峯には雲や歸るらん　盛　家
時雨し計り野への寒けき　日　晟
旅の空袖に春けき日をふりて　聖　阿
しのやにをるゝすゝのむら鳥　堀　宰
木のもとになれてや風もやとるらん　正　信
くむや淸水のいろそすゝしき　直　淸
引あとにたまるうしほや礒際　軒
あまの小舟も島めくる月　満　丸
秋の野に夕立殘るあまの原　幸
あくるきりまにきおふ鳴神　聖
別路にけしき見えけり思中　晟
人も移ひ花もちりつゝ　生

春も猶ふるき都は物さひて　順
かすむ水無瀬の山の夕暮　軒
むら／＼にかた野の雪はきえなから　幸
袖ふりはへて出る鷹かり　聖
冬の日のなきたる色や朝またき　良
舟こき送る浦の遠かた　盛
須磨人の秋を海邊に家居して　軒
波にこゝろの住よしの月　順
松風の冷しくして深夜に　晟
露あるまくら夢はきえつゝ　良
かきくらすおもひはいかに雨の中　聖
あはてふる世をわふとたにしれ　盛
問人のあらはこたへん身のむかし　直
なく郭公友や戀しき　生
み山路の遠かりつるを野に出て　幸
見れは都の若なつむ頃　直
いま幾日ありてか花を尋まし　順
春より後そこゝろかはれる　幸
きのふけふ空にまたるゝ秋の月　聖
露よりふくか袖の夕風　軒
分迷ふ山の日くらし音を立て　生

なき□なへに鳥そねに行　幸
まかき田に一村竹の打靡き　良
かひやか下そ水もけふれる　聖
泊舟さむき入江に火を焼て　生
林をあさみもみちちる頃　順
木隱は中／＼しるき峯の寺　軒
哀をかねや告渡るらん　盛
曉の秋の手枕月はなし　良
夜長きね覺見し夢も誰　幸
音に猶ふるやの雨の身に入て　生
小菅しのふそ軒に亂るゝ　軒
道絶る庭の岩根は苔深し　直
床もうきたる池の水音　晟
舟人の生田の川は野をかけて　盛
あとはなからの橋もたえにき　聖
世中のうきをは何にたとへまし　順
おもひしよりも山そ住うき　幸
谷ふかみ八重立雲の奥にきて　生
眞木の葉くらき花の春雨　軒
雫にや木々の木の目は萌ぬらん　良
氷なかるゝ瀧つしらあは　順

月影のすめは霞の色きえて　直
まつあけ行や雪の夜の空　生
あられふるおく山里のかり枕　良
かれはなからもしけき篠原　晟
とる人のいなのゝ眞柴分過て　生
湊にかよふ舟の梶おと　順
おろすてふ網こそ興の鹽せなれ　良
ひくやこゝろのくるしみの海　生
後のやみ杳にてらす影もかな　聖
木のしたまての山のはの月　軒
松高し庵の上の秋の風　幸
艸の戸ほそは露そこほるゝ　盛
侘ぬれはくるとあくとのうき泪　晟
いなんとおもふ戀路いつまて　生
忍ふにはあかぬ別れも有ものを　聖
鳥をもきかす殘すむつこと　軒
待よりも心つきぬとゝめかねて　晟
おひ風かはる舟の夕なみ　幸
みすの山きの川かけて霞む日に　順
とはたの南都路の春　軒
うへ置し古木の花は枝朽て　聖

あるゝ刈田の樗咲ころ　直
雲かはり五月雨はるゝ夜半の月　晟
あくるや雪の色に成らん　幸
浪さはき御擘する浦のとに　正
入舟かゝるむろのうち海　軒
こかれつゝ君か心をうらふれて　生
香をなつかしみ衣のたき物　晟
白菊の花咲宿を過かてに　順
長月の夜のことの爪音　幸
野の宮の別悲しくおもひつゝ　盛
このにし川もみそきせし跡　軒
夏引のあさ風渡る袖の上　晟
いとをみたして雨そふりくる　聖
さゝかにの雲に霞のむすほゝれ　直
また若竹か軒の下荻　幸
春の夜のあくるに閨のつま籠て　軒
あとあらはすな歸るさのみち　順
露そとはいひけちかたき我涙　盛
うき身を秋の夕暮の空　生
ことにふれ物すさましき風の音　良
みなれそなれし松は幾もと　正

何路第五

水艸のもなかの秋は月清し　玄幸
露も玉ちる池のさゝ波　專順
冷しき江に浮鳥のむらかりて　生阿
山もとわたる朝風の聲　良珍
さきさかぬ花はかけなる嶺の松　堀宰
雲をはらへは梅かゝそする　聖阿
野へを行人は霞に袖ふれて　直清
ぬるゝや旅の衣はる雨　日晟
しはしたに立よる宿やなかるらん　正信
くもるかけあれあつき夏の日　盛家
世にしけき悪はこれそ筑波山　順
はやまつとやかなひそむらん　幸
神にこそ祈るしるしの夢の告　聖
かくるかけそふ森のしめ繩　晟
鳴子引うき田の稲は色付て　生
秋風よりもさはく村鳥　良
立渡る霧まの遠の一時雨　聖
夕山のはをみする稲妻　軒
面影は人の僞にて猶うきに　直
したひかねつゝ別路の跡　正

明やすき月の夜床は恨にて　盛
かきほのくすにましる卯花　順
薄雪や野へのかつらにかゝるらん　軒
かみ白くして物哀なり　晟
形見ともなるや書置筆の跡　直
烌の扇は何かうつし繪　満丸
夜寒さへおほろけならぬ須磨の浦　幸
霧にあかしの舟の漁火　生
入かたに月のかつらの影さえて　晟
もみちすれはや枝は色こき　幸
下露の匂ふや花もしくるらん　生
春をふかむる宇治の山里　盛
霞しく水のみな上くれ初て　聖
なみおりかへる岸の柴舟　軒
旅ねせん所も見えぬ川原風　順
きよき眞砂にあられ降之　生
ふくるから霜さへまさる月の影　正
かねもあまたの遠近の聲　順
人歸る野守山守あとふりて　生
松かもと行道の絕〲　良
岩そゝく雪まの水の寒き日に　晟

かさなる峰そ霞棚引　盛
打かへる田面の鴈の旅の空　聖
たか方による心なるらん　順
人に人移ふ色のやすくして　晟
暮行年のおしき梅かゝ　盛
なにしかもくらふの山のけさの月　幸
袖にそ露はまなくちりける　順
つきてなを絶ぬおもひは秋なれや　正
むくらの宿は住てたにみし　生
くむ人もよもきか下の忘水　軒
春鳴虫や蛙なるらん　直
住吉や遠里小野の霞む日に　盛
とは心の花もたむけつ　良
あらましをうき世の旅の門出にて　順
いつかは山におもひ入なん　聖
深草の露を含か夜半の月　生●
身にしむ色の袖に木からし　盛
衣打人や一しほうかるらん　正
こゝに戀する里の夕暮　軒
やりはなつかり路の鷹を蹬かねて　直
雲のはるかにいつち行らん　幸

むかふなみ跡に成ぬる興津舟　順
あほふ〔ろ歟〕なはらにうかむ大空　生
玉鉾の雫も島と顕て　晟
國のみちたるとの葉のみち　順
えそしらぬ春秋分ん心かは　幸
みるめおよはし雪の明方　良
誰もかるやとりは春の花の陰　晟
とをやまふきや色なるらん　軒
はまくりは霞める浦にひろふ貝　聖
夕そ月の色をふくめる　盛
雨殘る山のかたへの秋の雲　軒
峰のすそ田に鷸そおりゐる　生
聲しるき鹿の立とはみえもせて　直
ほかけはかりか遠き狩人　幸
ともしさすそなたを野へとたとる夜に　晟
木下みちそ夏深くなる　聖
松風に冷しくくもる露落て　正
引こときけは河上のこゑ　晟
橋見えて行方遠き鈴鹿山　幸
このもかのもそふみならしたる　正
石はしる駒のあし音しとろにて　生

つらき心の瀧なくもかな　盛
陰に花落るをみてや歸るらん　直
はひまとはれよ木々の藤なみ　順
しのき行しかの山邊の春かすみ　盛
雪のふゝきそ袖に烈しき　聖
空にのみむかひもあへぬ朝日影　正
殘るほとなき入方の月　順
花にさへ秋の野の宮ふり果て　生
霜たに匂ふ榊葉の露　幸
聲立て人やちまたにうたふらん　盛
上おさまれは下安き時　聖
彼國はいつれの品もたりぬへし　晟
名を九つにわくるつくし路　生
こりすまのうらみや程を隔つらん　順
世にしすまへは戀しさもあり　正
今はとて別し後は又もこて　軒
巣を立鶴は雲井にそ鳴　良

山何第六

名にしおふやことよひの月の都鳥　盛家
旅行鴈の我おもふ友　聖阿
峰の雲野原の露に宿かりて　専順
みる／＼おしき花の春雨　正信
けふさくらかり路の末のくるゝ日に　良
過るあらしの跡そのとけき　幸
夜のいろかはる霞の棚引て　晟
きのふまてこそ冬のそらなれ　直
うつもれし雪より後の朝氷　生
ちるこそ波の玉かしはなれ　堀幸
眞砂地に立る松かね顯れて　順
あなしら／＼し人めもやある　晟
したひ行心のおもひあなかちに　良
歸るさいつそ旅をしかま路　直
枕かる此山あひは月もなし　聖
花見ぬ秋はなつ艸のいろ　満丸
露落る淺茅か末は吹風に　正
聲打亂れ虫そ鳴なる
かりふけるすゝの篠屋は軒ふりて　盛
我世のうきを身にも任せす　軒
あらましはいく年へなん春そとよ　生
日もなかしてふ玉のをたまき　幸
三輪山の杉のもとたち打霞　正
いつかまちみん咲やらぬ花　晟

二月の夜寒の月の朝とに　軒
　こゝろ空なる妹も忘れす　生
憂涙むせふは霧やしくるらん　晟
　別に分る道芝の露　良
おもふとも我またしらぬ新枕　碧
　戀とや人の猶恨ふらん　正
都よりみちのくまては日數へて　晟
　山をや越ん白川の關　盛
〔初秋〕
旅にてや物卯の花を宿なれや　生
　夏たけ垣の鶯の聲　晟
春や猶忘れぬふしと成ぬらん　順
　やよひおもへは一時の夢　直
あそふなるいとゆふくれを詠侘　正
　かすむ日影そいりて殘れる　幸
山道の限りもしらぬ雨ふりて　軒
　ひはらのおくは猶くもるなり　良
散らかふ栬に秋や泊瀬川　盛
　流るゝ月は跡もとゝめす　生
手枕の露を形見に夢覺て　聖
　なとか心をおきて行らん　順
幸

　猶風さはく葛の冬枯　良
舟寄るありその濱路又分て　順
　山なき方は海そはるけき　盛
ふたらくは南と計きゝ渡り　晟
　うき世の岸を離ゆかはや　生
柳朽家居ふりぬる道のへに　軒
　花一本を誰かうへけん　良
むさし野の妹も忘ぬ春の暮　幸

空に又立もわかれす霧ふりて　正
　山陰寂し色鳥の聲　順
もす鳴て寒き朝の片岡に　軒
　草莖枯て雪はふりつゝ　晟
根をたゝぬ冬木や春を急くらん　順
　さそふ人なき年はくれにき　碧
獨うき心そいまは老の友　生
　おもひねさめの夢そむかしか　盛
曉にかきらぬかねやしきるらん
　み山おろしに又法の聲　順
閑なる室の戸ほそは住あかて　生
　あけ過るにもとほし火の許　良

夕より月に打つる妹衣　晟
　まきほす袖に露そ又置　正
尾花ちるみつ野の道に分入て　生
　うら枯渡る森の下草　聖
つなかるゝ賤か手馴の離駒　良
　牛の歩は遅く行なり　直
薪ゆふねりそのかつらくるしきに　生
　くたけて後そこゝろつきぬる　晟
一つらの涙や千〳〵に成ぬらん　軒
　春なく鴈も物や悲しき　聖
いかゝすむ花なき里の山櫻　盛
　霞も雲もうら風そふく　順
雨の夜の月にうつれは舟ときて　幸
　なみに秋たつ色も見えつゝ　正
藤咲る陰かと萩や匂ふらん　盛
　野へのまとゐはたゝまくもおし　直
その道と弓もち箭おふ人や誰　晟
　とねりのおさはつかひてそ行　聖
おもふかとふたりも同し心にて　幸
　いまはた忍ふ難波津のあと　生
なへてまつ花の春へはまた遅し　直
　枯野のみとりかすむ遠山　軒
雪はまた朝けの空に降きえて　盛
　暮行方や月になるらん　順
とへかしな秋の夜すかの物おもひ　晟
　うき音信の風そ身に入　正
待こゝろまたぬ心やかはるらん　軒
　忘るゝ中をわすれ果はや　聖
住よしや岸のゝ草をたとりきて　幸
　夏田のはらの蛙鳴聲　良
五月雨に流るゝ水は濁るらん　生
　みちのたゝちも見えぬ暮方　直
神こゝろ頼むは夢の告なれや　晟
　幾世をへても誓かはらし　盛

朝何第七

光をも天に滿たる月夜かな　生阿
　はつ夕霜に野分たつ頃　良珍
木葉より色なる露の落□て　正信
　小舟うかへる磯の山本　日晟
入江なる里の向の離しま　聖阿
　群居る雫の鶩聲〳〵　専順
かり衣薄雪分る鳥の跡　玄幸

あられふきしく風の玉篠　賢　宰
笹原や冬野の露と成ぬらん　誓
うらにあはする人のことのは　正
恨めつゝとはんといひし暮もうし　生
忍ぶ夜しれはかき曇れ月　良
秋の空涙に雨とこほれきて　宗
是も袂かとひろふ落穂　忻
山陰に宇治の川舟こきめくり　誓
岡先をみれは立る白鷺　盛
釣人の蓑毛乱れて秋風に　生
寺みますけの雪の下庵　長
ちる花や谷かねにさへ帰るらん　砌
春の夢をは寐やはしる　正
よそにたつ我名に床のちりならて　順
心のうらみある空もうし　幸
迷ひ行世を浮雲の朝夕に　生
けふり夕き遠の山里　忻
冬されは火を焼わふる風立て　砌
かけにちりしく枝の紅葉　盛
流れても氷や月の注川　長
身は明石のとまりにそよる　三

おもひやる心つくしの旅はうし　誓
ふりぬる跡や芝生の宿　盛
野深き杣山人のかり臥形　砌
雲のみはよりくるゝ雨のへ　長
里遠し秋田をみれは色付て　良
ほのき□わたる稲つまの影　生
宵の間に出る月こそ留なれ　正
いつくのかれそ野へのうたゝね　長
草枕夢てふものも誰なるに　直
友とそおもふふけや松風　砌
木の本はしらぬ花のふ蓋りきて　生
霞みし夕くもる羽ゑの　忻
一方に春雨強る通ひかた　正
おき行舟の跡のしら波　生
皆たく夜さむの月は傾て　幸
風とき〳〵のあしの屋の秋　忻
色付ぬかたも薄波の草か山　長
つゆ野の露を小鹿鳴也　誓
いつまてと身には夢路をたとるらん　盛
むかしの跡にとふ人もなし　生
誰（か墓歟）しる骨の住し雲の山　砌

鳥も別れや悲しかるらん　直
又逢ん夜はいつかはと明過て　聖
賣ては頼む後の夕くれ　幸
物ふかき木陰もあつき夏の日に　幸
清水涼しく涌かへるいろ　晟
胸にあるおもひも果は顯て　砌
しのふるかひもなみた落けり　良
故郷の月も白根の秋の雁　晟
きりのうへなる雪の遠山　丸
吹暮し風もあとなる初尾花　軒
招くや野への›かせきなるらん　正
おもひ□きほたひの道は迷きて　良
法のうへ木の種はこゝろよ　生
池近き櫻かもとの舟遊　砌
こてふ飛かふ峯の山吹　晟
蛙鳴春の水田に鳥おりて　生
哥のことはも身にはまかせす　聖
代々の人君の勅をや仰らん　直
こゝろつかいを頼み來にけり　幸
玉章も疎きは忍ふ中なれや　砌
したしきほとに契結はん　軒

生れ逢親には深きえにしにて　聖
浮巣かけたる鳰の海つら　晟
橋もあるせたのわたりを行舟に　生
水の日影そ遠くめくれる　幸
山のはの色こき空やしくるらん　盛
こゝろもしらす過る秋風　生
昨日けふまたあら鷹の鳥屋出し　聖
野をかり人や踏ならすらん　軒
冬枯て落葉に立る村柏　晟
一本殘る松の寂しさ　生
いにしへの庭の岩ほは夫なから　幸
さゝら波たつ遣水の末　聖
朝またき風はふかねと春冴て　正
かすみかねたるみ山邊の空　幸
年こへぬ月には秋や殘るらん　砌
もらぬ關屋はふり果にけり　盛
只獨悲しき旅の雨のくれ　幸
入相きゝつ逢人もなし　軒
とへかしと待て幾日を送るらん　満丸
都より山おもひこそやれ　正
初雪は降をみるたにかつきえて　良

かれ野の夕日色そさへけき　砌
月まてや嵐の吹におもふらん　幸
うき世のさかは秋もうらめし　生
女郎花多かる陰もなかりしに　正
さくとみしまの花の一時　晟
春といへは移ひにけり我こゝろ　軒
けふや霞に暮渡るらん　盛
いかゝ吹日はをちこちの飛鳥風　砌
天とふ鳥も契くちせし　聖

何鳥第八

名にめてゝむかひあかさん月のかほ　直　清
女郎花さく花の枕香　玄　幸
露拂ふかりねの野へを起出て　盛　家
山ちを行は風そ袖ふく　宗　砌
夏ふかき入江の水の夕凉　生　阿
川すの松の陰のしらなみ　満　丸
群て居る鳥や聲〳〵さはくらん　良　珍
霜夜更ぬと雫は鳴也　日　晟
遠くなる雲井の月の氷ゐて　堀　宰
旅や空路を隔きぬらん　聖　阿
鳴渡るかりの此世のうき秋に　砌

野山の露そ身にも殘れる　盛
さもあをきしゐの下柴かりほして　良
花も老木や年ひろふらん　晟
又やみん程ふる郷の春の友　生
夏近き夜そ夢も短き　幸
裾まては衣もたらぬ丸ねして　砌
よもきかもとに枕かるころ　生
杣人に此山みちのと問ん　直
いかたしなれやさしいつみ川　晟
みかの原暮行月のいか計　幸
秋告渡る初風の聲　良
日くらしの啼なる頃も飛ほたる　生
里に燒火はたゝ山の陰　軒
世の中のうさは誰身にあたるらん　砌
年の矢はやし人こゝろせよ　聖
〔まゝ〕つきりちの月日程なくうつりきて　生
冬とてちるや木々の紅葉は　直
霜さやく林のあいた吹風に　良
驚く鳥やよるも鳴らん　幸
きゝあへぬ夢のたゝちの郭公　聖
殘る程なき在明の空　盛

いたつらに命長月おくりきて　殿
菊をつみては千代もへぬへし　幸
春の夜の子日の小松初若な　砌
けふに逢ふてやひける青馬　盛
むらさきの庭の雪まや沓の跡　殿
かさなる衣のした染は何　良
うつろふに人のとの葉花もうし　生
夢の別そ見しも他なる　正
あくる夜をおしみもはてゝ忍中　誓
さしいりかたの槇の戸の月　砌
秋風にやすくも過る村しくれ　直
袖にも露のかゝる山みち　盛
捨て行身はおもふとなきものを　良
我そさとりのみやこなりせは　生
出てこそねかひは三のさかひなれ　軒
舟漕かよふ難波墨吉　幸
白雲の伊駒のたけの花をみて　砌
霞よ春のいろな隠しそ　盛
ふる雨をうくゐすそ鳴けさの月　幸
涙のうちの老はいくほと　軒
遠きとそけふよりさきの昔なれ　直

後のうき世をおもひたにせよ　生
あひかたき法のとはを聞つるに　良
みはいかならんうとんけの花　誓
ちりしよりみ山櫻は茂りつゝ　軒
つゝしそ残る夏の木のもと　幸
火は夫か粉舟そのほる岩隠　砌
河そひみちの暮渡るころ　良
せきいるゝ岸田に水や傳ふらん　誓
うへたる竹の葉に出る陰　殿
夜を待て月そ宿かる草の上　生
置ぬかたなき野への白露　盛
暮て行秋の形見や残すらん　砌
我もとゆひにあまる黒髪　幸
春の日のなか引きぬの柳うら　誓
花の綾をる瀧の白いと
うき波も水も匂へる藤咲て　生
たゝよふ舟は過かてにみゆ　良
此きしを離れもやらぬ人毎に　殿
頼むこゝろのかよふ彼國　盛
伊勢にます神の誓のうへもなく　砌
しきつ岩根の松の百枝　生

なをく立杉の葉白く降雪に　幸
　まかれる道をのほる相坂　聖
きしるてふ車工みは是かとよ　良
　こゝろめくらす人のとわき　砌
此三代に四方の八隅も納りて　直
　九重の外もしろしめす君　聖
明方の月もたゝしき政事　軒
　時もたかへぬ秋の庭鳥　晟
旅立し關のこなたの露分て　盛
　行は梢の遠き我宿　幸
春過ぬみし花いかに成ぬらん　生
　のとかならぬや嵐ふく空　正
夕汐をまつ尾の浦の朝霞　砌
　もしほのけふり棚引にけり　盛
こゝろなとおもはぬ方にうかふらん　幸
　我ぬる玉の愚なる夢　生
月ひとり身のありかをは問物に　晟
　ふるさと寂しかゝる秋の夜　幸
露霜に埋もれ果ぬ虫の聲　直
　殘れる花も他し野の草　盛
朝貌は程なきかけを盛にて　聖

只夕くれはうくつらき頃　良
とへかしならうらむる物をまつ物を　砌
　こゝろのねより我思草　軒
歸るさの人のとのはかはる世に　正　信
　國〱みてそ都路になる　晟

何水第九

つきぬ名は月も忘し代々の秋　聖　阿
　霧晴のほる四方の大空　盛　家
山めくり時雨に野分猶吹て　直　清
　麓につゝく道の一すち　玄　幸
岸を引川添舟の綱手なは　宗　砌
　いとくり出す春の青柳　日　晟[尋イ]
色にそむ花のこゝろは打はへて　自　篤
　霞の袖に雪そかゝれる　生　阿
歸るさの夕月さむき狩衣　良　珍
　日も薄くなる野への冬枯　堀　宰
水あせし刈田のつらゝ一重ゐて　砌
　まかきもふかき池の俤　生
我中を人めつゝみや隔つらん　直
　こゝろと問ぬ忍ひ路はなし　篤
逢事はかたあしうらをふみかねて　砌

なしは分行山の下陰　幸
檜の葉に戰きもてくる秋の風　篤
月に絕〳〵わたるむら雨　晟
うき雲を翅にかくる天津雁　軒
興なる舟は帆計とみゆ　盛
主や誰松を柱の磯やかた　砌
市にしかまのかち人そ行　晟
逢初んえにしもなきに名に立て　生
うはの空にや世をも恨みん　正
戀は□ふもとに迷ふ嶺の雲　幸
ゆくえもつらくはてもうき頃　軒
花もみし旅立春の暮つかた　砌
日もなか雨やけふもふるらん　盛
月もなく霞しまゝに夜は明て　篤
涙のとかは老にこそあれ　晟
しらす我昔は何をおもひけん　良
生れかはりし身をは覺えす　幸
今住も契りなりけり石上　篤
木の下露にやとりとる也　軒
眞萩咲この宮城野を過やらて　直
山ちをおくと鹿そ鳴なる　砌

明夜の尾上の月やめくるらん　盛
しくれにむかふ風のさやけさ　生
川よりも遠の野里を雪にみて　軒
瀨をさす舟そしはし休ふ　良
行水のあまりにたまる岩はさま　幸
いははさま〳〵おもふとふしれ　砌
かく計忍ふ心はくるしきに　正
おしむへき夜をねてや明さん　幸
いる月もひかりのかけを猶しりて　晟
くらきや便りかよふ稻つま　篤
花すゝき招て誰を松のもと　砌
山ある里を出る川舟　軒
水上に生田のみなと遠からて　直
〔マヽ〕人しける小野の行すゑ　正
薪こる木玉寂しき夕ま暮　晟
風にとき〳〵あられこそちれ　直
笹の葉のかしける色に霜さえて　盛
もしを落さすさたかなる文　晟
我おもひまきれん方やなかるらん　砌
終に夢さへみえぬ獨ね　幸
鐘計明る枕におとろきて　軒

月にはうときみ山邊の雪　良
谷の戸に柏の廣葉打おほひ　幸
一むらわたる枝の色とり　生
秋寒き日は木枯の聲立て　砌
入江をこむる水のうき霧　軒
船出せし跡もはるけき明石かた　盛
ともすいさりの影は隠れず　篤
後の世の罪の鐘〔鐘歟〕はおそろしや　晟
やみちをてらせわか胸の月　生
山深き戸ほその雨に空とちて　軒
哀夕そ袖をうるほす　篤
猿さけふ梢の色の冬枯に　正
なるてふ栗や陰に落らん　晟
えそ見えぬゑみの内なる秋の霜　砌
月をふくめる夜半の白雲　生
貝拾ふ浦かけてよる沖つ波　篤
荒のみまさる風の苫の屋　正
ことゝはんしるよしもしたる旅の友　盛
かりにいてゝも戀る都路　直
尋ても花なき山に行暮て　幸
春色ふかく茂る木隱　順

忍ひ音を霞にもらせ郭公〔そ祝歟〕　正
いまはとまては月傾く　晟
秋の夜は心の限りつくしきて　篤
露分侘ぬ人やりの道　直
朝霜に犬引山の小笹はら　砌
手にとる眞弓つくはかり杖　軒
賤の雄か柴おふ腰はかゝまりて　順
やせては帯そ二重三重なる　晟
雲霞大原野へや暮ぬらん　良
けふを春そといろにふれつゝ　生
ちることのあるとも見えぬ花盛　晟
音なき風や空に吹らん　盛
夏山とてしはしは思ふ秋のせみ　幸
露たにをかしかろき衣手　篤
月あれは拂はぬ床のちりもなし　軒
いかなる夜にか妹と我かねん　幸
傳たにも稀に成つるいふせきに　直
虎臥野へと栖あれにき　正
うき世の中も假とこそしれ　晟
目にもみす遠き佛の名は有て　順

鬼神までも今そしたかふ　生

何草第十

秋に名をえならぬ月の光かな　堀　宰
手折紅葉のさくらかさして　日　晟
草の原花にや人はとまるらん　満　丸
春の野里に友も行かふ　生　阿
雪残る山路の霞うちむれて　盛　家
あしたのかけに出る鶯　玄　幸
庭鳥の鳴つる夜は程もなし　專　順
閣の梢や見え渡るらん　正　信
夏を我色に清水の深みとり　宗　砌
さなみ流るゝ夕風そふく　直　清
雨過る片山川の濁りきて　頁　珍
三室のおくを出る立田路　自　篤
果人の杳にかへる妹のくれ　幸
きりふる野へを分迷ふ頃　正
露のほる草の末葉に月落て　晟
虫の聲さへ寒き暁　順
夜そ永きとはれし夢やかれぬらん　生
結ふ契の末のみしかき　砌
袖を行水のあはをのくるしきに　盛
うたかた人をかけてたにみす　篤
これとてもなけの情の大和哥　砌
はるのたねある花の陰かは　直
波越る岩根の松は藤咲て　幸
うへには瀧のかすむ谷風　生
雨の音水の響も打まきれ　篤
かねきく夜半そ心すみぬる　正
月を宿袖をまくらと欹て　晟
おもへは旅も秋はうきところ　良
雄鹿啼聲を友とそ行くらし　盛
紅葉にあかぬ山の下道　順
かへりみる嵐松の尾大井河　砌
こゝは都の野へ近くきぬ　良
なへてふる雪の朝に打出て　生
若なつむなる袖や寒けき　正
眷とわれいへる□におもふとち　幸
月にいとゝはかすまされかし　篤
涙さてかくなるものかよるの雨　晟
草の庵にあかしかねつゝ　幸
波あらき野島かさきに舟留て　順
頼む木陰も松風そふく　砌

しほる也身を侘人の袂の袖　篤

露のたとへの世の中はうし　生

長月を命にかけて待内に　砌

いまこんときくよすかとも哉　幸

郭公初音の遅き朝ほらけ　直

山白妙に匂ふ卯花　晟

布さらす宇治の川波夏かけて　砌

水さへ青きまきの島陰　盛

舟につむ柴人又や出ぬらん　艮

さし渡したる里の通路　篤

色そなき枯野の原の夕日影　生

しくれむなしき松の一むら　晟

猿さけふ山の山風物さひて　盛

巳下四十七句欠

續群書類從卷第四百七十四

連歌部四

寶德千句

寶德四年三月十二日

何人第一

花そころ誰かは待しけさの雪　宗砌
にほひ木ふかき梅の下陰　宗松
袖とみる野への霞に月落て　賢盛
あけたつ旅の衣はるかせ　忍誓
關の戸にけふは年もや越ぬらん　專順
をと閑なる山中の水　日晟
瀧遠き行ての小河つらゝゐて　原春
をのかむらねや寒き鴨鳥　超心
朝床になを社はらへよるの霜　龍忠
ふりぬる里にかよふ秋かせ　與阿
見し夢やまくらの月に歸るらん　梁心
しかのふしとをあらす狩人　金阿
夏ふかき山の下草ふみ分て　利在
清水かもとやすきかての道　貞明
追しほにいま礒きはのとまり舟　吉理
いくうら風そ傳ふこゑ／＼　盛
枝にちるあられ松原むら立て　砌
ひろはん玉はまれのことの葉　忍
あふきゝけとく祉法の光なれ　順
名に殘りたる代々の古寺　松
月そなき竹のはやしの末の秋　砌
小とりやさはくそのゝ夕霧　原
冷しき里のうしろの山おろし　晟
ふねさしとむる須磨のうら波　與阿

淡路かたうしほの向ふせとをみて　忍
こゝろつくしは我ひとりかは　松
今宵またたのめぬ鐘を聞もうし　龍
あはゝそ鳥の音をもかこたん　順
夢にたにまつ人うとき目は覺て　砌
松かせふかきはなの山里　晟
嶺こゆる雲の春雨殘る日に　與
かすみもしほる旅のあさきぬ　梁
分來つる野をは夕やへたつらん　盛
かりねの一夜明はつるころ　忍
又とはん人や契りのかたたかへ　砌
なみたふたかる月はうらめし　超
時雨霧の迷ひのわかれ路に　金
野ゝみやさひて秋そ暮行　梁
木葉はやかつちる風の嵐山　松
あらしやまたん我庵のとも　砌
捨るよりたくひ稀なるうき身にて　原
猶世中にすみやのこらん　順
結ふへきあかつき遠し三井の水　盛
こほふるか月のさゆる夕かけ　晟
しはしこそ涙もせかは袖のうち　忍

つゝみわひてや名にはもるらん　龍
ひとりなくみ山隱のほとゝきす　砌
くち木のかけは茂るともなし　與
あふち散る森の夏草花咲て　超
むらさきの野は行やつくさん　盛
露くたく袖の追風寒き日に　原
舟路そつらき秋の夕なみ　在
遠山はいろつく程もみえ分て　忍
かすかにわたる雲の稻妻　晟
まよふらし月まつ宵の天津雁　順
かりにも人に音信はなし　英
五月雨のふるやを市の名殘にて　砌
ふみすてけりな高き道芝　龍
みるまゝに休らふ木々の花の陰　松
おもへはとをし春の歸るさ　盛
あま小舟霞のなみに漕暮て　超
いり江にうかふ山際の雲　與
大椋の里をやわかん秋の月　砌
こまのりとめて拂ふ野の露　晟
草かりの袖とはみえす花薄　忍
ほのかにきこゆ誰笛の音そ　砌

暮とにおもひ木からし吹やまて　盛
こゝろひとつや通ふ中みち　超
松たてる美濃の小山のかけ涼し　梁
垂井の淸水いくむすひせん　忍
うるまてとその事遠き世に住て　砌
さとりは何そ身は迷ひけり　金
しら玉も知らぬ衣のうらめしや　順
なみたをとはゝ露とこたへん　松
月をたにしのひてみるに人の來て　晟
夢もしはしのうたゝねの秋　原
手まくらの荻のはそよと吹風に　龍
いつかはふみのたよりきかまし　英
都にはこゝろつかひの行かへり　忍
雪ふる野へを分るたかかり　梁
雉子なくかた山さくら移ひて　盛
かすみのこむる妻なしの花　晟
人もみよ我衣手の春の雨　砌
ふりぬとなとか身をいとふらん　順
年へてもきてはあふ世の有物を　晟
ちきりたかへぬ秋の七夕　原
橋からもとはてやわたる天の川　忍
、もみちそ水のかしはなりける　砌
山本を時雨は過るふゆの日に　超
行末くらすみちの中やと　順
さとよりもこなたなる野を分やらて　松
春のかたみにすみれつむ頃　砌
若草の袂に露やかゝるらん　與
みとりにかすむ朝あけの空　梁
とめかぬるとはの花は色きへて　忍
そのあと遠し集をく哥　盛
あけし代の岩とのやみの神遊ひ　順
まいのみきりの面白き袖　晟
秋草の亂るゝ垣に蝶とひて　砌
いくもゝとせそ露の玉松　明

宗砌十五　日晟十　梁心六
宗松七　原春六　利在二
賢盛九　超心六　貞明二
忍誓十一　龍忠五　吉理一
專順九　與阿五　英阿三
　　　　　　　　金阿三

何路第二

花にほふ山は霞の千種かな　松
　なゝるさくらは一本にさく　忍
うくひすもやとりとるへき雨降て　晟
　くるゝ日になと雁の行らん　砌
月はまた出しほのくもる興津空　原
　夜舟やきりのうちにまとへる　龍
秋のかせさはらぬあしは枯果て　順
　とまふく軒は寒くなる比　與
山ちかき里より雪やまたるらん　盛
　しつはすみやきおくる冬の日　理
つもり行年をうき身にまたしらて　超
　すめは住そとおもふ世中　英
さためなき命よいつと殘るらん　梁
　むなし契りの末の秋秋　砌
かはりける人を松山波越て　忍
　かゝるうらみを何にたとへん　松
暑日の衣のすそをふく風に　在
　露もまたひぬ野への夕立　順
いつのまに花さく草はしほるらん　原
　むしの音しけき庭と社なれ　超
松の室すゝの庵に秋は來て　砌
　戸ほそは月の影やさすらん　忍
天津星光もきへてしらむよに　晟
　にほひうつろふ梅かえの露　與
春雨に花はさきちる程なくて　盛
　たゝにくらせる永き日はおし　原
たつ雉の尾こしの鷹の山心　砌
　戀となりてや音のみ啼らん　晟
かりそめに見しを此世の契にて　順
　さむれはしたふ夢の俤　金
身のむかし忘られぬへき月のよに　忍
　又うき秋と風はつけけり　在
外面なる荻のはしほれ萩散て　砌
　みちこそなけれ古里の秋　松
おもひ入山をは雲や隔らん　原
　おく猶ふかき峯のしら雪　龍
ときは木のかはらぬ陰に年暮て　晟
　春いそくらん雁かへる國　虚
民の戸の苗代小田を作る日に　順
　かすみおりたつ遠近のさと　金
蘆の屋の前の渚に舟留て　晟
　みれはしま社波にうきたれ　超

月かゝる淡路の秋のふかきよに　砌
ひまよりあくるむら霧の空　與
木の本の露や末葉をさそふらん　龍
亂るゝ草そかせをやとせる　明
暮ぬれは渡る螢の影そひて　松
たく火みえ行山の邊の里　忍
ひかり猶赤人の名はかくれめや　砌
かふりすかたの衣のいろ〳〵　晟
時來ぬと神をいたゝきまつる日に　盛
かさしにさへもおらしはつ花　龍
歎冬は末野の春をさかりにて　超
月いてぬへき山そかすめる　原
くらき夜の友なし小舟まてしはし　砌
波さはかしき磯のあかつき　與
千鳥なくうしほの干かた風寒て　晟
霜のまさこやこほりしくらん　吉
ちらせ猶ふるき砌の玉あられ　忍
いつの宮ゐそ松も木高し　英
住よしと名を聞く里にとゝばん　順
うかるへき世もしらぬ行末　盛
心あれ入山みちの秋のかせ　砌

歸るさをくる三日月の影　忍
明わたる原のをしかの聲遠し　梁
(茅歟)淺芦かおくは露みたる也　盛
矢田の野にふれる初雪村消て　砌
なみしろたへにこしの海つら　順
雲ならてそらの限やなかるらん　松
せはきすみかをたち出る人　超
夏の夜は蚊のなく夢も物うくて　原
ねられぬおもひやる方もなし　砌
せきかぬる涙や床のたまり水　松
おちたる月にしるき朝かけ　與
かせそよくかやの下葉の秋の　忍
きりのいくへもみえぬ武さし野　盛
立そへるかすみの關の春の暮　順
こゑうちむれて鳥歸る比　全
山さくら花ちる谷のみちすから　超
なかれにつたふなみや川かみ　英
おなし水くむ家〳〵は程近し　忍
しほやくあまの友さそふ暮　砌
こゝろなき我たくひ社少なけれ　龍
衣うつ夜も月をみる秋　晟

露の袖まきほしかたくね覺して　原
よはくふけともかせそ身に入　吉
かりしを(は欤)の稲葉の雲や靡らん　松
山下草のむしろ田のさと　砌
あまねきは御法の雨の雫にて　盛
たつやほとけに水そゝきけん　忍
うきも神今日は巳の日の夕祓　砌
猶こりすまに物おもふ春　順
なき名をもかすめる空と明やらて　忍
たれよふことり山ふかき聲　盛
とるかたに柚の木玉やこたふらん　晟
遂かもとのやとそいふせき　砌
あやめ草猶五月雨の軒朽て　原
夢もみしかき夜半の一ふし　超
詠つゝ月にや人のうたふらん　龍
まとゐにかはす秋の盃　與

宗松七　龍忠五　利在二
忍誓十　與阿六　金阿四
日晟九　賢盛九　貞明一
宗砌十五　吉理三　梁心三
原春八　超心九
専順八　英阿三

何船第三

いろそふいまや木のめも春の花　盛
ふた葉の後の若草の露　超
日影さす岡邊の雪や消ぬらん　龍
つくる田面の水にこるなり　晟
山かつの野澤のかりほ夏かけて　砌
とふやほたるの初秋のそら　原
宵のまの月そ光のすくなきに　松
紅葉そあかき陰のかりふし　忍
翠なる高根の松をよそにみて　梁
すをたちはなれ遊ふ鶴の子　順
濱川のさきは鹽こす遠干潟　砌
みきはの波そ岩に亂るゝ　與
ねをたゆる浮木に藤の咲散て　在
人のこゝろやはるにのるらん　砌
哀しる涙に月はかすみけり　忍
秋に目覺す老のあかつき　原
きり／＼すなく夜る／＼の床さへて　順

そともの野分かへにふくをと　晟
もれぬへき世のきゝみゝを思ふ身に　盛
いはてしたにやつくすとのは　龍
えそしらぬをしへの外の法の道　砌
いつひとなれんまきのあら駒　松
嶺高くさかしき岩ほこえ過て　盛
やすらふ谷の水そすゝしき　與
たちよれはてる日もみえぬ松の陰　英
まつとも月や遅く出なん　忍
おもはしならうきはならひの中の秋　明
へたつる霧のけさの衣く　原
行雲もかなたこなたに風吹て　順
やとりさためぬ舟のうら波　梁
かりふきのいそやのとまを洩る雨に　砌
たきさすあし火影は消けり　在
木隠に松のはをかく此夕　忍
山はいく代のちりつもるらん　盛
十寸鏡たかきよはひをみるもうし　順
あけてはたれをうら嶋か箱　砌
くやしくも待ける月のみしか夜に　松
またかきくもるむら雨の秋　忍

なく雁や文字かたきへて外さかり　梁
こゝろを荻につけし玉章　超
ほに出るおもひのいろを恨にて　在
江口の舟や君かわかれち　晟
あたりさへみえすよ雲の伊駒山　砌
花のはやしのかけなかすみそ　順
梅か香もこもりて深き竹のおく　與
しつかにわたる窓の春風　盛
つはくらめ北なる國を旅立て　砌
都の秋の月にかへらん　超
かたしきのかりねの野への露はらし　忍
やゝさむしろの霜そ重る　原
跡とむるうちの橋姫名はふりて　盛
なかれさひたる冬のみな上　順
鮎落る河瀬の夏や暮ぬらん　龍
かせの柳の葉は動きけり　砌
春は只花のちる日も長閑にて　忍
夕そかすむ又かねの聲　超
里みえぬ尾上の雪やけふるらん　晟
月はあさまの山寒き色　盛
氷ゐて冬はいくかのちくま川　忍

ぬまふかき江をとつるうき草　原
朽にけりあやめ隠の捨小舟　龍
いつかは我身人にひかれし　砌
わかれ鐘明る戸口にたち出て　松
いほりをうつむ山の横雲　順
けふりにや炭やく嶺はかすむらん　砌
しつかこゝろは春もおほへし　龍
行てみん散なはあたら櫻花　梁
この川かみに舟木きる音　忍
人わたすちかひもありと聞物を　盛
にしよりむかふ秋のはつかせ　超
神のますかの岡きよく月出て　砌
ふかきゐかきに葛葉かゝれる　忍
松のいろいく昔にかかへるらん　晟
うらさひしきはおほよゝの波　盛
うしほくむ袖しもさそなあま衣　原
なみたをよそにおもひやれ人　順
音高し忍ひ車に名やたゝん　忍
かりつみけるよをもき戀草　龍
鷹のとるとゝは手折て歸る日に　盛
はらふかた野の雪の暮方　全

水瀬山雲に河かせ吹荒て　砌
さこそは興の海中のなみ　順
くらき夜をあかすはつらき泊舟　與
まくらを月にいつかかはさん　龍
此秋もひとり〳〵のおもひにて　松
まろねのあした袖そ露けき　晟
あしの屋の門田のうへの雨そゝき　忍
うたてもかゝる世に住にけり　砌
のそみある心のいかてやまと歌　原
たねとりてこそうへめ撫子　忍
名もしらぬ(の脱歟)菀むら草色〳〵に　超
春の小とりの野を渡る聲　梁
影遲き日は山うらや出ぬらん　晟
行舟かすむおほはたのさき　盛
さゝなみの花のおひ風松ふきて　砌
こゝろをちらす夕暮の空　松
身を捨は人のとひ來ぬ宿も哉　原
月こそこけの袖も忘れぬ　超
秋寒し幾重も衣重ねはや　忍
露のうへにそ霜はふりける　吉

賢盛十　忍誓十四　金阿一
超心七　專順九　吉理一
龍忠八　梁心五
日晟七　與阿四
宗松六　利在三
宗砌十五　英阿一
原春八　貞明一

何鳥第四

明る夜は初花よりの梢哉　原
ひかりを春と月そ曇れる　與
霞ふく遠山かせは閑にて　金
なみはなきさの舟の行末　龍
氷しく入江をかけてふる雪に　盛
跡こそみえね千鳥なく也　忍
眞砂より雲に飛雁數消て　砌
きりのまかきにたてるしら菊　順
故里の紅葉の秋や暮ぬらん　超
旅ねの月の夜寒なる比　晟
やつれ來ぬ我は誰にか唐衣　梁
身のほとしれは恨たにせす　松

つらき世にすまの山柴折焼て　忍
かへりもやらぬ野への鷹かり　原
枯殘るおとろにとりの立隱　英
ふむあと消る霜の古道　盛
しらかなる神の宮人沓はきて　砌
かむりゐたゝき出る祝子　金
ゑひをなす酒の盃とり／＼に　松
ひとりやさめん手まくらの夢　吉
心せよ梅ちる小野のさよあらし　順
みなとの上に霞む山里　晟
薪つむ舟をそき日は殘けり　忍
つかえて今そのりに入道　超
代を祈るつとめはたえぬ寺毎に　盛
鐘なり雨のくたる夕暮　砌
霜さやく空に木の葉や迷ふらん　龍
秋風わたる嶺のさゝはら　原
殘れ月我かりふしは夢もなし　忍
あとやうつらの床のたかかり　松
又あはん程こそしらねかた思ひ　順
かた／＼になる中みちはうし　盛
うちとけぬ心は下の帶に似て　砌

衣ににほへはなの春かせ　超
日の影や霞の妻にうつるらん　松
　つららきえ行軒の朝露　與
水つたふ筧の雫もりやらて　原
　關の小川の音羽ちの山　晟
人目にもあまる泪の瀧をみよ　砌
　こゝろのうちはいひも盡さし　順
とりむかふ筆のすさひも愚にて　金
　おもへこの身はつかの間の夢　盛
年をへは色かぬの葉も朽ぬへし　忍
　雪の下なる霜の松かえ　砌
春の野に今朝は霞の引はへて　晟
　つくる澤田のしめのなはしろ　與
なく蛙水のなかれやもとむらん　在
　歌のみちにそ心すむなる　忍
おく山は谷の木こりを友として　砌
　いふことをくるあまひこの聲　盛
時鳥なくとつくるをなへて聞け　松
　里をもわかぬ五月雨の雨　金
卯花はまかき斗の雪ふりて　順
　松そむかしの影を殘せる　龍

さゝなみや志賀の濱風秋更ぬ　晟
　きりのうへなる山越の道　超
旅の袖露のしたにやしほるらん　忍
　すゝきちる野は分もつくさす　盛
なれ〳〵し月こそもとの契なれ　梁
　人のこゝろのかわる世中　吉
いそかはやたゝ有増に成やせん　順
　ことしの花をみよしのゝ奥　松
秋來つる田面の雁は春をへて　砌
　きりも霞もかゝる山のは　晟
舟のよる礒きはくらく暮日に　龍
　なにのみるめを波にかるらん　砌
我袖はしほなれけりと戀侘て　超
　なく音かひなし人を松虫　忍
月すめはなを故郷となる物を　盛
　葉おつるなしの山もとの秋　晟
夕露のやとかす野へや時雨らん　金
　君かかり場に三笠をそきる　砌
すかこもをしくや所のところせく　龍
　たゝまくをしくまとひする時　梁
あつさゆみ春の柳に風吹て　盛

よはき日かけやかすみそむらん　順
消かてのたかねの雪の寒き野に　砌
　里をやとりと鶯そなく　原
此關の原を行人休らひて　順
　あかても清水むすひくらしつ　梁
月にきてかへりかねつる俤に　晟
　しはし立そふ夜半の雲きり　松
山本に鹿の一つれ今朝鳴て　砌
　ま萩しるらん風そいろこき　原
もの毎にうつろふ秋の袖ぬらし　盛
　うき身あらため春にあははや　金
我社はまたのほりえね縣めし　砌
　花の都はさくら咲なり　梁
み山とて猶ふる雪に道もなし　超
　なかそらに聞かせの音信　松
興津舟波にかたほを引懸て　忍
　うらのとまやそはしらみえすく　砌
今はとてあみをほすなり夕日影　英
　七重の植木さそにほふらん　原
契置け一蓮のそのむかへ　金
　こゝろの花はいろもかわらし　砌

こえきつるとし〳〵身社ふりにけれ　梁
　あらたにかすむ四方の山々　忍
種おろす水のみな口春せきて　盛
　またるゝ秋をいそく里ひと　松

原春七　龍忠五　宗松五
賢盛十一　忍誓十一　吉理二
超心六　宗砌十五　利在一
英阿二　専順八
與阿三　日晟八
金阿七　梁心五

唐何第五

さす花やかめのうへなる山櫻　順
　柳のこつえねそめくむらん　晟
小田返す〔や脫歟〕岸のうき土雨を得て　砌
　なく蛙のすたくまさこち　松
うくひすのあはする聲の數〳〵に　金
　このあさ戸出の庭閑なり　梁
夜半の月またある宿を旅立て　忍
　關ちこえ行袖のあき風　成

霧くらき山はあとにや時雨るらん　原
木末さたかに嶺の紅葉は　龍
色さひしほのめき殘る入日影　在
うらよりをちのあまのもしほ火　超
御熊野を流出湯やけふるらん　砌
みなみのかせも暑き水無月　吉
一重なる衣の帶のかたむかひ　忍
ちきりを人よかけな離れそ　超
雛のたれなの長き秋のよに　砌
あり明たかく殘るあかつき　龍
霜寒き野ちの霧まに起出て　興
ふく音さそなかせのしのはら　成
つゝみこす池のさなみのあるゝ日に　原
人めもしらすいひやよらまし　忍
へたつなようき中垣の花の色　松
さしてかほるは梅の下かけ　英
蓑むしはつゝりを春の衣とや　砌
一むら雨のあとはかすめき　佺
月すみてこよひやとりを我にかせ　晟
秋もむつましおは捨の山　成
み渡せは田面遙に色付て　龍

柳さくらそいまもみちする　砌
あけ鞠の軒の夕かせ吹よはれ　順
をろすすたれにあたる人かけ　佺
ひきかくる衣やふせこにほふらん　忍
けふりの末のふしのしら雲　原
竹の葉の雪の下折打靡き　晟
すゝめむらかる日社寒けれ　龍
はし鷹をとほこに維く暮つ方　成
あすの春野を殘す狩人　松
身に越し年をはやくも顧て　忍
つむ七草に星をこそしれ　原
言の葉を手向の秋の天川　在
あしたのきりのかちかくす舟　超
冷しき浪に消るかはなれしま　順
すむ世につみをえたる釣人　砌
あみとなるちかひありとはしらすして　晟
こゝろのつるやおもひ絶ゆまん　成
永日にけふは宮木を引くらし　忍
もえぬるはらに飼やおく駒　梁
若草はいまたふるはにうつもれて　砌
ゆきゝの道や野に殘るらん　英

あさしほに又そなるみのかたを波　晟
おるゝとみれはさはくあち村　順
はやふさのかくる羽かせの一とをり　松
霜のはやしの秋そ暮行　成
呉竹の葉を白妙に月深て　砌
きぬたこゑする里はまちかし　龍
霧かくれと〔く歟〕をりのむらやへたつらん　金
かつらき山をめくる夕たち　梁
夏の日は入へき嶺も杳にて　忍
冬のいくかゝ送る旅人　梁
あつまちを行は春にや向ふらん　順
かゝみの里にかすますもあれ　晟
あかすみる花の俤身に留て　成
さむるそおしき我おもふ夢　原
夜寒なる秋の山風ふくなへに　忍
うへし鳥羽田をけふや刈らん　金
うら枯のよと野のまこも色朽て　順
水のいり江は浪そ越來る　成
舟にくむあかさへ法の爲なれや　砌
身のうき世をも渡す御佛　英
遠くとも分そのほらん深山寺　龍

こゝにたか尾の道のさかしさ　忍
人にくきひとや無名をもらすらん　砌
なみた落そふ袖のぬれ衣　松
此神に祈る心を月もしれ　晟
みそきそ昨日賀茂のみたらし　在
いつしかと秋ふく音や河原風　忍
ひさきの末は落増る比　超
あふ人もかた山道の露分て　原
玉ゆらの世に誰をまつらん　砌
命こそものおもはする夕なれ　超
たのめはおかすさのみかこたし　梁
夏の夜や月をみるまもなかるらん　松
夢はひるねの床に社そへ　金
柱とはくちたる木をはよもなさし　成
ありのすさみに身をもたてはや　砌
ちらす風なくても花は匂ふへき　忍
藤咲まつのなと霞らん　龍
春ふかみ雲の波こす山みえて　松
しまつそうかふ興の中河　晟
鳰鳥や水底をのみくゝるらん　砌
わかゝよひちよ人にしらるな　順

忍ひえぬよひ〳〵毎の秋の月　原
とふもたのます稻つまのかけ　成
あさちはらかけまつ程の露のまに　忍
せめてと葉のひと花も哉　順
はや河に下る筏士友もなし　龍
雲のおほゐそ入江さひたる　吉
をくら山麓の寺の鐘つきて　砌
つきしな代々にかへる春秋　梁

專順八　賢盛十　與阿一
日晟八　原春七
宗砌十五　龍忠八
宗松七　利在三
金阿六　超心五
梁心五　吉理二
忍誓十二　英阿三

朝何第六

（の脱歟）
花えにこゝろやとけぬ春の霜　超
またさえ渡る二月のかせ　盛
深山河雲も氷のひまとちて　忍

さす日うつろふ谷の下水　梁
袖ふれてむすふ夕露凉しきに　晟
行〳〵はるゝ野ちのむら雨　順
里はけにみれは梢の色付て　龍
蔦と月とそ松にかゝれる　砌
秋ふかく成てや風はあれぬらん　松
よる波たかき磯の山陰　與
あま小ふね我身をうらに又こきて　金
わたるもくるしかゝる世中　原
つかふるをあはれと君はしるらめや　吉
あしたにわくる霜雪の道　順
春あさき原の若なは萠やらて　盛
またみとりともみえぬはつ草　英
つゝみゐは人の結はん水なれや　忍
こゝろのそこは契にそしる　砌
むつとに殘すとはやなかるらん　金
いまよりいそく後の暮かた　松
もろともにおもふわかれは明果て　晟
あまの河原に秋はまちけり　超
かせかよふ交野の露や亂るらん　在
もみちいろこき櫨の一もと　原

片岡の夕日かくれに鶉鳴て　忍
またほとゝきす山ふかき聲　盛
捨しより身は名のりする事もなし　砌
木の丸とのはいにしへの跡　順
かるかやの關やあれぬと守侘て　龍
雪氣つゆけき軒の草ふき　晟
音よはし春の水とや成ぬらん　忍
なひく柳のかけのさゝ波　松
霞む日の入江のつゝみ鷺おりて　砌
ひとりはねしと夜をや待らん　吉
旅人のふみみぬ山に行つかれ　盛
いく野の末に宿を社とへ　金
きり〱す淺茅かもとになからへて　晟
しらぬいのちを露にかけつゝ　忍
うき秋の世はかりきぬの玉簾　砌
むすひてすまんいつく隱家　龍
水そゝく岩木の陰を柴の庵　松
けふりたへ〱ほそき山あひ　超
春霞あさけの嶺は重りて　盛
日はなかゝれや遠き行末　順
みちのへの藤欵冬の花盛　忍

うつろふ中の心をそみん　超
誠あるものかと夢を頼む夜に　晟
かせはしくれて月も曇らす　砌
明たつるをのかは山の蟬の聲　原
しけるはいつの竹のたかんな　盛
人も知れおり〱深きこゝろさし　金
我あらましは大はらのおく　砌
ひる世なき河をは袖にせき初て　忍
名になかれなんおもひたゝうし　英
二夜みしは月長月くるゝまに　原
きぬたの千聲夢さそひつゝ　與
おもひやれうちねぬ旅の秋の床　砌
舟路の友はなみの浮鳥　晟
出し日はとをき都を戀侘て　金
くるれはかへる春の野遊ひ　在
さく花のやとの友君我をまて　砌
たもとをかはす梅そたき物　龍
あひそむる心のいろも深き夜に　松
しかまのかち路いそくあさ市　盛
浦による舟のやかたの數みえて　順
きしをとゝろと波や打らん　砌

〔ほ缺〕
ふるわたにまかぬ種ある初尾花　晟
岩ねの松の代々の秋風　超
月はたゝおなし影こそ契なれ　忍
またすといひて忍ふ夕暮　順
明日しらぬ身に幾度の空頼め　砌
くもる計をみねのはつ霜　松
衣ほす天の香久山霞らん　盛
さくらも八重に匂ふさかきは　順
神かきの春はこえぬる光にて　超
一夜あけぬるともし火の下　忍
ほしのあけ庭の手向の色〳〵に　晟
ちくさましりのしら菊の花　砌
秋の露山路をいかに染つらん　金
野邊にはかるゝ松むしの聲　龍
月の暮われかく問ん人も哉　原
しらぬおきなはうらみにそみる　順
是やこのうつし心の夢の露　砌
宮つくりする年もへにけり　盛
其昔おもひ出雲の神こゝに　忍
冬は來ぬとや木葉ちるらん　超
音かはるときはの森のあらし山　順
ならひの岡は道つゝくなり　英
水入れし小田もひとつに池あせて　砌
すくなくおつる春のかりかね　超
霞ゆく月はみる夜や積ならん　盛
のとけき風に迷ふ夕雲　與
面影にむかへは花のにほひ來て　龍
袖にそとまる別ちの露　忍
波あるゝみなとの秋を漕舟に　盛
聲すさましく千とり鳴なり　金
此頃は友なしとてもいかゝせん　松
我山さとの冬の寂しさ　原
小野のおくをひへおろしの吹度に　晟
きくもよ川の杉そ名たかき　砌

超心八　宗松七　梁心一
實盛十一　與阿三
忍誓十一　金阿七
日晟九　原春六
專順九　吉理二
龍忠六　英阿三
宗砌十五　利在二

何木第七

とくさきてちる日の遲き花も哉　金
かせも音せぬ春雨のくれ　梁
雲にゐる鳥は谷にや歸るらん　明
木こりは出るみちの山々　超
月にけさ旅行我は伴ひて　忍
秋なりけりな舟のうらなみ　盛
川かみの一葉やしほになかるらん　砌
ふりくるきりも空にみちたる　松
日もさむし夕は晴よ初時雨　晟
はけしくをくる山風の末　原
行鴈や都の春を忘るらん　順
かすむあさけはわく方もなし　在
二月や雪と月との殘る夜に　超
梅か香ふかきまとそこもれる　盛
ともし火を暮るやとりのしるへにて　龍
たつねいらはやあきらけき道　忍
おくにこそ神はますなれ三輪の山　砌
われゆくさきを祈れ人の身　梁
こし跡の世々のむくひも苦しきに　晟
おもひありてはなと生るらん　與
たのしまん佛の子とは成もせて　忍
しろきはちすの花をみる頃　金
うき草に池への雪やたまるらん　順
こほるみきはゝふむ人もなし　超
君にのみ仕るみちは殘る代に　在
かろかるものと命をそしる　盛
おとろふる天津おとめの薄衣　砌
袖かへしてやうたふうとはま　艾
するかなる田子は春夏いとなみて　順
國とみけりなこの時の秋　砌
其上のめくみの露のとのはに　忍
ひかりさやけしかも山の月　龍
折からのかさしにさせる花をみて　晟
とひよるやとに匂ふ山ふき　與
蛙なく庭のやり水音さひし　原
日かすふりたる五月雨の比　在
猶こすは涙の袖もくちやせん　松
身にはあたなる名をなけく也　盛
玉の緒もたゆる計に待佗て　金
またかきならす夜半のとの音　吉
松風や嶺なる月ををくるらん　盛

ふもとの野への暮方の秋　松
とへかしな霧にこもれる艸庵　砌
冬は柴たく里そすみよき　順
日のあつき夏は淸水を手に汲て　原
こへすきやらぬせきの旅人　與
誰心さくらか本にとめさらん　忍
まれに入ぬるはるのおく山　龍
あらましの道は霞もへたつなよ　砌
いまこんとこそいひし暮なれ　晟
秋は先凉しき風をさきたてゝ　盛
日はかけろひぬ出る三日月　順
うたんとてほすや衣をはりまかた　砌
なたこく舟にあたるしら波　忍
あしの屋に燒火は寒く队みへて　金
なやらふ夜半に年は暮けり　砌
春の來てひいな遊ひはよもあらし　盛
そのふをてうや宿としむらん　順
うちかすむ竹は此世の夢の身に　梁
さくともしらぬ花はこゝろそ　龍
さかりなる市もかくるゝ住家にて　忍
あへ野のはらの松の一むら　砌

雲ゐには聲なき田鶴や餐らん　松
月ふくる夜に白き澤水　原
色なれやいり江の方の秋の波　超
たか手ふれてか尾花ちるらん　盛
行もときあし毛の駒の亂かみ　順
ふりわけけりな小野のかた雨　砌
やまかけにむらくも迷ふ日は暮て　龍
わするゝまなくおもひ社やれ　梁
待らめやいてゝ程ふるみやこ人　晟
ひなの長路のはつ霜の頃　砌
いさりしてたきあかすなりなわの浦　忍
月影ほそく殘る海つら　龍
松たてる木末の秋の色さひて　盛
しつかかたなそ紅葉をもきる　砌
わひ人もさすかこゝろの有るなかに　原
よくかたもかな老の來る道　超
わすかなる家のすまゐはかとひとへ　忍
やせたる犬や事を守らん　晟
星さきの浦こき渡る海士小舟　金
ぬるゝ衣に日かけをそまつ　在
夕立のあとには殘る雲もなし　松

はやふき亂す露の秋風　成
野へにかゝる御かやか軒のひとむかし　砌
めくりそあへるあたらしき月　順
ふくる夜につゝしりうたふ友有て　忍
ちまたに通ふ遠の里々〔ゑ脱歟〕　龍
鈴鹿路や八十の河せ打渡り　晟
みかみのたけは伊勢よりもみゆ　砌
十寸かゝみかけし柳を植置て　盛
こゝろにねさる花の面影　忍
うつしゑの匂ふ霞や筆の跡　松
夕の春の薄墨のそら　梁
よ捨人わかふす雲を衣にて　砌
いく重重ねつわくる山みち　梁
巖にやまくらをかりて月をみん　超
おちそふ露のしけき松かけ　與
むしの名のすゝのしの原枯立て　晟
この河社ふりそのこれる

金阿六　宗砌十五　龍忠七
梁心五　宗松六　與阿四
貞明一　日晟八　英阿一
超心六　原春五　吉理一
忍誓十一　專順九
賢盛十一　利在四

山何第八

身にしむは花の香なれや春の風　龍
かすみの袖は雪もはらはて　原
ゆふ雲の衣きさらき月白し　在
こほりやとくる末の川なみ　松
渡し舟夜はにさほさす音はして　超
ねさりし床をいつる旅人　砌
明そむる色にや雨の晴ぬらん　晟
きり戸に深き嶺の紅葉ゝ　順
秋山のふもとの杉にかせ吹て　忍
すえ野の村にかよふ棹鹿　與
とをちにやふるの中道續らん　梁
行河上の波のたかはし　英
人は皆代つき家つき治來て　砌
いまもさかりのいにしへの哥　金
のこりけりならの都の櫻花　忍
かけてふちさく春日のゝ山　原

春の日の光ににほふ朝霞　晟
在明になるみしか夜の月　龍
子規なく忍ひねの難面て　松
またすはひとり物はおもはし　超
いり相も人たのめなる暮毎に　砌
霜にくもれる宿の通ひち　順
降雪を松〔の脱歟〕はわたるかせさへて　明
なみこそ越れ天のはし立　梁
明くれのよさの山もと引鹽に　晟
おほうなはらのをきのよこ雲　金
久方のそらゆきつくす月入て　順
都の野へにおるゝはつ鴈　吉
もる人や四方の秋田に通ふらん　忍
夜はいねかてに嵐ふきくれ　砌
一しくれ殘る雫の軒もりて　松
おほえす老や袖ぬらすらん　原
おほくみし事さていつく春の夢　砌
花ちりてうもされる木の本　晟
故郷のありとや鳥の歸るらん　超
たひ行我はたのむかたなき　忍
なみかせの日ゝにかわる舟のみち　松

山としまとのおちこちの陰　龍
よそへみんこれもすさきに床の松　砌
霜そまさこの色にふりしく　在
夏の夜も寒き計に月更て　梁
ね覺は秋の心なりけり　忍
花にかる草の枕をふく風に　金
入野ゝすゝき露や置らん　超
うつらなくあたりに鷹を手にかけて　松
駒のりまはす山のした道　晟
梯はあやうき川の廣きせに　砌
みきはの小舟つなや朽らん　順
のりに引心のなきはうき身にて　原
つみのかたには人そすゝめる　忍
つくりをく三輪の朝酒取向ゐ　松
あまたかりやのみゆる朝市　龍
しつのをか柚やましはを運ひ來て　金
霜こりつめる道のよきふ　順
故郷にめくるや月のもとの秋　砌
なかしといへと夜は明にけり　英
かけのおのたれを松虫集らん　忍
くさ／＼しきははたおりのこゑ　砌

ふせやまて木曾ちの坂を下る日に　原
みねこすかせの雲そさまよふ　超
五月雨に野澤の水やまさるらん　晟
さなへとりつゝかへる里人　明
侘ぬれと君か惠を賴にて　砌
つかふるみちはとしにふりにき　忍
みやつこのあさ清めせぬ雪の中　松
かれはゝかせのはらふはゝ木々　晟
ありとみし夢の契は月に夜に　順
きけは水無せの秋の川香　忍
山本の里もわかれす霧籠て　梁
暮るまかきを誰か越らん　金
家の犬人をとかむる聲きひし　砌
はなれえぬ世のおもひさま〳〵　龍
花の陰あすはかせもやつらからん　超
まつにほひくる梅盛なり　英
難波めか舟さす春の袖の上に　忍
さはるこゝろのよしあしそうき　順
旅たゝん日をはこよひのうちにみて　砌
しらぬ山路の月にもやねん　忍
菊さける宿の夕はへ花やかに　順
うつろはてふけ中の秋風　松
言の葉は露ももれしの契にて　金
そてのわかれそなみたにはなる　在
明はつる空はかりなく春の夜に　忍
山つちなりてかすむ谷の戸　砌
遅さくら木かくれ深く咲亂　龍
柳も雪にかほる卯花　晟
河風に岸へのさ波こすとみて　原
又さしかへる舟の人かけ　忍
むろ君のかりそめふしは定めなや　順
懸路をいのる加茂のみつかき　梁
この田井の土のひたるに雨待て　砌
露ふかき野に秋や來ぬらん　超
里あれて木のまに舍る月はなし　松
こゝろつくしになにかなくむし　梁
たつね入この道のへの暮つ方　金
し水むもれる山の岩かね　晟
霜さやく蔦の葉かつら冬かけて　順
くる人うとき柄寂しも　砌
たのめねはまつともいかて告やらん　忍
風しつかなる時にこそなれ　超

龍忠六　專順十　與阿一
原春六　忍誓十四
利在三　梁心六
宗松九　英阿三
宗砌十五 ―　金阿七
超心八　吉理一
日晟九　貞明二

何衣第九

花もはもわかすつほめるかた枝哉　晟
さくらに匂ふ春のときは木　順
冬こもる雪の山ちに年越て　梁
あくれはそらや霞初らん　原
暮はてん三月の名殘惜き夜に　忍
かねこゝろせよ夢のかりふし　松
野にとまる旅のやとりは稀なれや　龍
もみちのかけにま萩ちる比　砌
岡のへの松をしみれは秋もなし　超
ゆふへの露をはらふ山風　與
いかり猪の床にたまるはかる藻にて　金
ふくむいそにおろすはゝ舟　晟
與中の河はうしほやなかるらん　砌
おちたる月のこほる曉　超
うちとけし枕もそしる我泪　忍
あひそむる夜は物もいはれす　松
世の外の岩木の陰に尋來て　明
うらに寺ある小はつせの山　英
北野こそ與喜の宮ゐも一なれ　順
さてそたむくる和言の葉　金
我國の人をや神は守るらん　砌
御かけをあふけ久堅の月　梁
もろこしの聖を祭る秋毎に　忍
露ふく風は西よりそたつ　吉
宮城のゝ花の盛は虫なきて　金
うつろふ心よそに引らし　順
つれもなきためしに人は成やせん　晟
ゝゝとせまての我身とも哉　砌
あらましのする〔マヽ〕ゐはひとつも事たらて　順
まつ夜そはつほとゝきす　超
月にさけくらはし山の遲櫻　砌
八重かすむこそたむの嶺なれ　忍

古寺の夕の春に鐘なりて　龍
ものさひ渡る行ひの聲　梁
誓とき御名の釼を憑む世に　晟
ゑみのみ〔う歟〕ちには何思ふらん　原
植置し軒のいかくりなりそめて　松
ぬしはたれその森そ色つく　忍
露やしる野中の月のかりの宿　順
し水のもとの夏のうたゝね　梁
手すさみにむすへは草も枕にて　砌
やすみそくらす山かけの道　與
こりつみて薪も雪もおもき日に　超
かたふく松のたてる古さと　龍
あはれとや花も見るらん我齢　忍
こゝらの春を友となれにき　順
うくひすの野へのねくらを捨やらて　松
ひとむら竹にあたる朝風　金
うすきりのまかきの月の夜もすから　原
へたつる中の秋はうらめし　砌
にくまるゝあしのほ綿の戀衣　順
袖にそさらに露にふれたれ　英
程遠き久米の山ちの夕時雨　晟

めくる日かけの落るかつらき　梁
鵲の門の柳の木におりて　忍
わたすや花の前の棚はし　砌
霞にもはるの河水うちにこり　超
きしこすなみのくたけ行聲　與
住よしや眞砂なひきて吹風に　原
うらめつらしく匂ふ白菊　金
色みえぬおもひは秋を思にて　砌
なみたのかゝる手まくらの月　超
ともし火の本の古文巻返し　順
知るをやみちの光とやせん　忍
後の世のやみこそ今の迷なれ　晟
愚に我身生てはこし　與
賢は色にかへたる心にて　金
うへてそ竹の陰に住ける　松
水青き小田の早苗のふしみ山　順
河音たかし五月雨の比　龍
かすかなる月待いつる夜は更て　順
人のちきりも末になる秋　晟
誰を引まゆみの下葉替らん　砌
たのむこゝろもあたちのゝ露　梁

うかれてははてをもしらぬ道のおく　金
とを山からすいつち行らん　吉
炭やきのかしらは白く年老て　砌
いつるも侘し雪の朝市　忍
しかま津やうらは風ふくとまり舟　原
海はいつれの河もいるらん　超
水と火の二は胸の底なれや　砌
智は光ある玉とこそなれ　晟
との葉につゝむも人の心さし　順
筆を疊にそ深くそめてき　砌
つかのまに消るは野への秋の露　忍
月なき雲に渡る稻妻　龍
宵なから夜寒やうきと雁鳴て　晟
衣うちねすころも經にけり　順
歸こん我旅人とまつほとに　金
まつはいなはの山風そふく　砌
青柳のいとぬき川や波の春　松
あやおる水はせゝに霞めり　在
遠近に聲かよひ行百千鳥　與
たか里わかすあら玉るとし　忍
下もへをいそきし若なけふ摘て　龍
いなやはらはし袖の薄雪　晟
よるゆけは月こそおくれいかさ山　砌
ふくやほそ江の舟の秋風　梁
暮かゝる道さまたけよ霧おりて　松
めくみの露そ天よりもふる　原

日晟十　超心七　利在一
専順十一　與阿五
梁心七　宗砌十五
原春六　金阿八
忍誓十三　貞明一
宗松七　英阿二
龍忠六　吉理二

二字反音第十

花影月ににほひのみつ夜哉　忍
ゆふくれなゐの梅のちる時　砌
山あらし吹は春雨ふり出て　松
嶺の霞そ野にみたれ行　與
歸るかりいつくの雲に迷ふらん　龍
たひのそらこそ末もしられね　金

古郷とおもひし枕夢覺て　順
淺茅かはらの露のあけ仄　晟
花すゝきかたふく月や招くらん　超
袖にやとれる稲つまのかけ　原
吹風も人たのめなる此夕　梁
まてともとはぬ中はうらめし　英
すさめよとふる初雪も又消て　在
雲ゐる山や猶しくるらん　明
世の外の我隠家は覺束な　吉
よし野のさくら誰もこそみれ　砌
水の江の春のけしきは色もなし　忍
かすむ小舟そしほにおち行　龍
燒すつる蘆の下葉のちり〳〵に　順
ほたるのかけのとをき明仄　與
ふけぬれは月の光の猶そひて　原
野は艸毎に露のほるみゆ　砌
山〳〵の霧ふりくたる夕ま暮　忍
都のかたはおもひへたてす　超
須磨のさと垣ほの柴もたゝしはし　英
三年過はほとなかりけり　金
明暮の親の心は子にありて　晟
うちむれて行鶴の聲々　在
ふちなれや同し雪野の離駒　砌
かみのなかはそ白くなりぬる　忍
いさよひの月まつ窓に向ひゐて　超
雲にこもれる秋の山里　與
瀧とをし暮ぬる色や薄紅葉　松
やまふき咲る春の河きし　吉
おられねと浪は花にやまかふらん　砌
かすみの袖をかさす佐保姫　順
みかさ野は行ともぬれし雨の暮　晟
さす日のもとの大和ちの旅　砌
手向にはつゝり衣もうけやせん　忍
うたふ神樂そきり〳〵すなる　原
初しものをかの秋風寒きよに　在
なをいつまてとをしね守らん　順
さをしかの妻とふ暮の月をみて　砌
おもひとめにし人も戀しく　英
一まきのうち捨書の文はうし　忍
とつてなれや此あつま衣　砌
美濃の國いとぬき川を渡りきて　金
水せきかへすむしろ田のさと　梁

波かゝる岩まの苔のつゝらとけ　松
谷にも春と鶯そなく　順
野へわたるたかねおろしや霞らん　砌
いよすのもとの月の夕かけ　忍
今よりは夜そ長からんをきていよ　金
秋さへわれやひとりある人　順
數ならぬ此身は更に冬籠　原
雪の下葉にくつるおち椎　梁
おく山は猿の聲もやむもるらん　晟
暮ぬる空に鳥そきえ行　與
舟さはく入江の釣の火はみえて　超
人はをとせぬあしのやの內　金
我はすむ浮世を誰か出つらん　砌
とをきむかしのゆかりとはゝや　忍
老木にも花の咲ける枝有て　松
野もせの草は若はさす比　在
床さりて空は雲雀やあかるらん　龍
山もと分るかり人のかけ　與

行秋の末なる月は弓に似て　順
きりふるあした虹もたちけり　砌
かせしふき袖冷しき市め笠　英
かよふなにはのこやあへの里　晟
忘らるゝひまこそなけれいかゝせん　順
わかれて後も我そ難面き　晟
とにかくに命はものを思はせて　忍
春と秋とをおしむ年々　砌
夏山もいま冬枯に成にけり　梁
てる日にかれぬ艸のいとすち　晟
さへかわの家ゐは野にや荒ぬらん　龍
我すむやとそ來へき人なき　忍
誰も皆いはふむ月の今朝立て　砌
いく度老の春にあふらん　原
ものおもひあらぬ比かは花盛　晟
かせふかぬ日の閑なる山　與
古寺にかけひの水の音はして　忍

續群書類從卷第四百七十五

連歌部五

河越千句 文明元年

朝何第一

梅園にくさ木をなせる匂ひかな　心敬
庭白妙のゆきのはるかせ　道眞
うくひすの聲は外山の陰冴て　宗祇
野邊にうつれる道のはるけさ　中雅
ならはすよいつくの月そ旅まくら　印孝
都いつれはみし秋もなし　長敏
冷しくしくるゝ空のくれそめて　永祥
雲より遠の入あひのかね　義藤
草の戸に人も音せぬ山ふかみ　修茂
ほのかに殘るまつのした道　満助
水ほそく岩根かくれにつたひきて　長剎
いそへはるかに汐はみちけり　興俊
浦かせや出行ふねを送るらん　眞
名殘かすめるあかつきの月　敬
春のよの別かなしき袖引て　雅
泪にちらはなやうらみん　祇
草ふかき故鄕ひとの秋の暮　敏
松虫の音をひとりきくころ　祥
問かしな風も身にいる山のおく　孝
柴折かくるすまゐさひしも　助
舟維く河へしつかに日は落て　藤
音にしらるゝ水のゆくすゑ　茂
軒端よりたもとにかゝる春の雨　敬
ねさめ哀になみたそふらん　眞

わひ人はあすの我身を猶しらて　祇
今はた同し暮もたのます　敏
わするなと契すてつる歸るさに　祥
いひし詞をゆめになすなよ　雅
身こそあれ浮名はいかゝ消もせん　助
苔のしたにもさすかいそかす　剝
朝日さす山路にのこる虫の聲　敬
霜に夜さむをいとふ（おもふイ）ころも手　孝
旅人をやとすもかなし秋の暮（寐イ）　祇
しつけき物をたゝく柴の戸　敬
古をしのふるくれのまつの風　茂
朽て咲ちる花たにもなし　眞
春過る片山河の捨小舟　敬
ひとり雁鳴江そのとかなる　助
影遠き入日のくもにゆきはれて　祇
のほる烟にさとはみえけり　茂
秋かせのくさの末折野を淺み　敏
ふしといつくにをしか行らん　孝
月にのみよるはすからに立うかれ　助
むなしくおくる鐘はうらめし　雅
一聲の法をはたのむ身となして　眞
思ひかへすな墨染のそて　祇
心よりふかくも住るやまさとに　孝
しくるゝころは都ともなし　敬
ふみ迷ふ道にこのはの散しきて　祥
行とゝこほるみつそすくなき　藤
河島やふねも別れてくたるせに　祇
たのむやすゑのちきりならまし　助
在明にうつれ忍ふる夕月夜　敬
いとふこゝろもしらし秋かせ　茂
折てみる花たにおしきま萩原　眞
尾上のみやのつま木とる道　敬
替り行むかしの跡に袖ぬれて　雅
これもかたみのひとの一筆　敏
たらちねを守りとたのむ旅のそら　敬
心あてしてかへる古さと　眞
道絶て結ひし草もかるゝ野に　祇
たてるや雪の岩代のまつ　助
神垣になひく白ゆふ風吹て　孝
身にしみけりなむかふ俤　雅
今更に驚く老のますかゝみ　眞
やつるゝ袖に何をおほはん　祥

ひち笠もぬれぬる道の村雨に　敏
たちよるほとの須磨の山里　敬
物おもふまくらにさはく浪もうし　藤
すゝきちる夜の風のさひしさ　茂
きり〳〵す傾く月に聲ふけて　祇
なくとも何に秋をうらみん　眞
あちきなき身にはかたらん暮もなし　敬
待ならひけんことそくやしき　孝
きのふ咲花かとみれはうつろひて　敏
夢にあらそふはるの世の中　雅
あと先につるゝ霞の沖つ舟　祥
半天ひたす海そはるけき　助
冴のこる月の鈎ほそきよに　敬
あくるかよはきこすの下かせ　祇
さりともと心にかくるかひもなし　雅
たゝのちの世そわすれ勝なる　剎
春にめて秋に愁ふる身は古て　茂
命おもへはたのまれもせす　藤
入かたし望ありともうたの道　眞
雪なをふかみきこり山賤　敏
櫻花谷のひゝきに散添て　敬
とはれぬ庭そこゝろかすめる　助
かせ絶ぬともしひ白き春のよに　祇
舟もうこかす江はふけにけり　敬
遠くなる影さへおしき水の月　祥
一むらなひく薄霧のそら　孝
色みえぬ竹のは末に秋くれて　茂
ねにゆく鳥や宿まよふらん　敏
駒とめて狩人とまる山のかけ　祇
袖打はらふしもの下くさ　眞
今こんとたのめし床を起出て　幾弘
こゝろみしかくわれやゆかまし　敬
玉のをゝかけて契ると君もしれ　助
代につかへてはかへりみもせす　雅

心敬十六　長敏八　興俊一
道眞十一　長剎三　幾弘二
宗祇十三　永祥七　満助十
中雅九　義藤四
印孝八　修茂八

何人第二

遠く見てゆけはかすまぬ春野哉　宗祇
明る木すゑのゝとかなるいろ　義藤
月薄く峰のさくらに移ろひて　道眞
ほのくらき江に水おつるやま　心敬
浪さむく火をたく村の夕ま暮　満助
たつや千鳥のかすかなる聲　中雅
ふむ跡の眞砂や風に亂るらん　長敏
身にしむ朝の袖の初霜　修茂
夢覺すまくらに秋のつゆ消て　幾弘
やまちのこのは且落るころ　印孝
來る人かと計おもふ柴の戸に　心敬
なかめそわふる雲かへる（キヱイ）そら　長剎
心無くれに泪をさそはれて　雅
あまのもしほや胸の下燃　茂
待ことは猶こりすまのうらめしく　助
小船やすらふ山ほとゝきす　祇
おもはすと（のイ）むらさめとをす松の陰　孝
はれ行月のよそのくものは　眞
我からになくさめかたき秋のきて　敏
あられんものか野分ふくやと　藤
亂れぬる草は虫飼つゆもなし　敬

かりにも人をたのむあはれさ　祥
侘ぬれは世の何事も安からて　孝
かこつもしらすのこる玉のを　茂
忍ふるにおもひよはらはいかゝせん　弘
まくらかたふけ待ふくる（ろイ）ころ　敬
あやにくに月も時雨に袖ほさて　雅
すきまかちなる冬のやまさと　敏
風さむみせめて落葉よ軒うつめ　眞
松の火あかすいその夕かけ　祇
此浦をはるかにかへる舟も見よ　敬（藤イ）
波のうへゆくかりの一つら　弘（敏イ）
外面なる尾花うつろひ萩ちりて　剎
待とせしまに秋もくれけり　興俊
こぬ人を月も難面おもふらん　眞
あらましのみにとをき山端　茂
けふも聞憂身をかねにはちもせて　敬
老よいつまてちるはなをみん　祇
鶯に語らひくらすのへのさと　眞
さひしやとはぬ春雨の中　助
笘かけて獨ぬるよの舟の床　雅
妹こひしらの旅のさむしろ　敬

手枕の月傾て夢もなし　孝
松かせちかき秋のやまもと　祇
稻はこふ岡へのやとりくれ渡り　眞（助イ）
賤かいほりのものせはくみゆ　助（眞イ）
哀にも細布をれる機たてゝ　剰（敏イ）
都のにしき古はつるあと　敬
來し方をおもふなみたのやみのよに　茂
ねさめのこゝろいつち行らん　弘
曉はみぬもろこしのかね聞て　祇
つくはの山はおなしみよし野　眞
是も名になかるゝ花のさくら川　助
また春さむみゆきはちりけり　敏
風ませに霞もあへぬ此あした　敬
たひにし出んそらそかなしき　藤
ふるさとの柞うつろひ秋更て　祇
たのむ影とは月もみるらん　弘
霧まよふ明方かけてしのふ夜に　雅
神こそみえねかつらきの橋　敬
いつの世の跡か苔地に殘るらん　茂
なみた落そひおもふ（いかゝイ）身のはて　敏
かくて猶つけんもはかなつくもかみ　祇

かつきのあまのうかふ船はた　敬
心無心をのりのそこなれや　眞
草木をさらに佛とそ見る　敏
古寺はつゆのみ玉のかさりにて　祇
むかへる床にきよきつきかけ　助
きり〳〵す袖にこゑするよを寒み　弘
かるゝ蓬のきぬたうつ比　敬
霜まよふ山畑あれて人もなし　祇
岨に一すちのこるかけはし　茂
ふりぬれはおのれと折るゝ木も有て　眞
咲こる花の雪おもきえた　敬
拂へきかせも通はす霞む日に　孝
つはさやしほる春の鴈か音　雅
秋もはやしくるゝ比にめくりきて　茂
人ゆへふくる月やうらみん　剰
さを鹿の妻待山にたひねして　敬
もるや早田の遠方のさと　祇
哀ともみすや夕の袖のうへ　助
あと無雲にかゝる泪のかけ　弘
身をしれは空飛鳥もうらやまし　茂
あめにそいそく沖のつり舟　眞

あらしかとくもれる末の山遠み　剡
小藏のみねのあけのこるいろ　敬
假枕よはにたつ田の里もうし　祇
おもひかへして思ひとまらん　雅
いひ出はあさき計のわかうらみ　孝
見てやなみたの心しらまし　藤
事とはん栖のよその秋のくれ　眞弘イ
わかやとのみや露けかるらん　剡敏イ
聞もうし長夜あかぬ虫の聲　俊
おもひなそへそ松かせの月　敬
常よりもみ山隱のさひしきに　雅
すてはつる身よあるにまかせん　茂
麻衣たゆれけ苔のたもとにて　祇
岩ほのうへもすめはすみけり　剡敏イ
よせかへる浪にいそへのたまり鹽　眞
みつき備ふる舟のかすかす　藤

祇十三　雅八　剡四
敬十六　敏十一　俊二
藤五　茂九　祥一
眞十一　弘七
助七　孝六

何船第三

山かせに松の葉とけて雪もなし　中雅
野へもみとりのはるをしる比　長敏
鷄鳴あしたに草の戸を明て　心敬
床はなれつゝやとや出らん　道眞
誘はれて人は道ゆく月のよに　幾弘
うつろふこゝろ秋になりけり　滿助
色かはす袖や小萩に匂ふらん　義藤
霧のほのかにすゝきちるころ　宗祇
夕日さす岡への原はしつかにて　印孝
山さはみつそ白くなかるゝ　永祥
夜をかけて旅人渡る江はくらし　興俊
呼とも舟は答さりけり　道眞
引琵琶はむせふなみたに聲絕て　祇
ふりぬる宮はたゝ松のかせ　孝
さひしさは神無月の初時雨　敬
はれみはれすみ空は冷し　雅
まちわふる人のこゝろの永夜に　弘
他なるあきの玉のをゝしれ　敏

ならひある浮世をいかて恨らん　茂
すてよとてこそ身は生けめ　雅
哀にもゆふ付鳥の子をつれて　祇
とまるそおほき相坂のせき　助
人歸る山さくら戸のくるゝ夜に　敏
花こそあるし木陰にやねん　敬
霞とも春なわすれそ空のつき　眞
けふりそかたみ鹽竈の浦　茂
あまの身もなき世の跡やうかるらん　祇
小野よりおくのものふかき里　眞
踏分ん雪いと高くふりつみて　助
人にそまよふ夕くれのみち　雅
かゝしたて尾上の畑や作るらん　敏
ふもとにくたる棹鹿のこゑ　敬
月殘る雲にあらしのさよ更て　祇
あさちかはらにころもうつ比　祥
たかむかしあれたる里に忍ふらん　弘
柴の庵にあめおつるくれ　茂
友呼もけにことはりの鳩鳴て　雅
ひとり杖つくたひの山みち　敬
越わひつ六十あまりの老のさか　眞

おしむもうつる年〳〵の末　藤
忘れてや心をしはし休めまし　剣
とひしさもたゝ人は教へす　祇
難面をさのみはいかゝうらむらん　敏
あはてこよひもありあけの月　孝
ふけぬれは時雨かちなる秋の空　助
ゆふへはつゆをなるゝ山里　祇
青葉をも爪木に拾ふ身をわひて　茂
まよふこゝろはいつか絶まし　弘
末遠く岩ふむ道の駒のあし　敬
雪にそしるくみゆる行あと　眞
昨日より風さへよはる年越て　祥
入あひのかねのかすむあけほの　敬
殘り無花は散らんはるのくれ　眞
しつけき山にいそくあらまし　助
まきらはす心そつらき法の道　藤
さはく鳴門のなみの舟人　弘
起出る河への宿のあきのかせ　敬
ちはらか露のつきそこほるゝ　雅
虫の音を袂にかくるよは更て　祇
うきこそひとり我をたつぬれ　茂

榮(つかイ)ふるや捨へき世をは忘るらん　眞
かしこき人そ名をはとけぬる　敏
敎ともなれるやもとの歌の道　助
たひに今とふ山のへのさと　敬
人傳にきゝてたのめる郭公　眞
なくさめかたる友そうれしき　藤
寂しさの心はしるや松のかせ　弘
うらみんものを秋はきにけり　敏
月みてや夕のとかを忘るらん　敬
霧より遠にかへるつり舟　祇
幽にも燒火を村のしるへにて　茂
なかめも寒く住るやまさと　助
外面なる楢の枯枝あられふり　敏
おとろきかちのさよの手枕　祥
わひ人の衣をうすみ子の泣て　敬
ひとへにいたく愁かなしも　雅
はかなしやこなた計の物おもひ　敏
うつゝにしらぬ夢の別路　藤
旅にしてみしはそれとも泪落　雅
ふるさとさひし花のかへるさ　祇
鳥の音もまれに成行春老て　敏

人の心そやまにかすめる　祥
折からに月も詠やかはるらん　眞
あふよしなれは秋のよもなし　茂
更るまて君かあたりの露分て　祇
伊駒おろしの袖しほる道　敬
難波かた小船漕ゆく夕まくれ　敏
芦のは越のなみしろくみゆ　藤
村〳〵の汐干の松に鷺の居て　祥
けふりのうへの空そはれたる　孝
閨の中はこすの匂ひに打くもり　敬
人やとひくる袖のおもかけ　弘
山ふかみ行は我をもかへりみて　茂
いのちをかくる岨のつきはし　敬
朝ことに薪をはこふ市遠み　祥
あゆみも遲き牛そやせたる　敏
つくし路や都遙にのほるらん　眞
しらぬひみゆる淀の舟つき　雅
河かせのよふかき里にめ覺して　祇
浪おさまれは月はすみけり　敏

雅九　助七　俊二

敏十一　藤六　茂八
敬十四　祇十一　剩二
眞十一　孝五
弘八　祥七

山何第四

うくひすに明ほの殘す聲もかな　印孝
おもかけ遠く月はかすみて　永祥
尋よと花はそらにや匂ふらん　修茂
夕にみれは山のはもなし　宗祇
かせをこそしるへになさめ船の道　道眞
雨をもよほす雲な殘りそ　長敏
朝な〳〵氣色かはれる秋ふけて　心敬
漸さむき日のけふことのかけ　義藤
枯〳〵の草のかりほの一重かき　幾弘
はつ雪ふれは人もかよはす　興俊
さらぬたに夕さひしき山里に　滿助
あらしのそこに猿の鳴こゑ　中雅
西河や殘る入江の松ふりて　祇
こゝろに遠き事もみえけり　孝
夢いかにしらぬ方にもかよふらん　藤
きゝしはかりにものおもふ比　雅
打つけに我身をしほる秋の風　眞
草はにやとれそての上露　敏
宮城野や花にみたるゝ蟲鳴て　敬
月にをしかの聲いそく暮　祇
住わひて慰めかたき山さとに　祥
雲ゐる峯の松もうらめし　孝
色かはる心をそての初時雨　眞
うつろふひとにはるゝ名も哉　敬
とはれぬをうらみて花や散ぬらん　弘
かせよりさきのやとの梅かゝ　祇
春のよの枕しつけくめは覺て　藤
空にわかるゝあかつきのくも　孝
契らねと波に岩しく清見潟　敬
すゝしさたのむ露もなつかし　祥
終の道祈れる草の原にきて　敏
さしもとふへき人は先たつ　雅
俤の向ふ計のまきの戸に　茂
くれて待とる山のはのつき　敬
秋風によ舟こたふる梶の音　弘
たえて聞にもなみは冷し　助

うらふるゝ身を蛩の子になし果て　祇
いつかはやすく世をも過さん　孝
仕ふるは心のほかの老もうし　眞
朝夕すむやあらましの山　雅
末いそく園に小松をうへ置て　敬
野中の家はかせもたまらす　茂
來る人もま遠の衣さむき日に　敏
春とあきとを旅におくりつ　眞
白河やしらぬ關路をけふはみて　敬
心のおくの山そかなしき　祥
數ならて身を隱家はかひもなし　祇
草引すつるふるさとの庭　弘
月たにもやとらぬ池の水あせて　孝
夕かせまよふいはれのゝ秋　敏
露分は戀する袖に成やせん　祇
とひこすとてもせめて忘るな　藤
世にあらん程はと計おもふ中　眞
いのちはしるやはなよ艶よ　雅
住馴て身さへふりぬる木の本に　敏
心とめぬるやまもはつかし　敬
うかりしにこりすも月の秋待て　茂

浦の苫屋のかすむくれかた　孝
釣舟の歸るかおきの天つかり　眞
いかにしたひて春をのこさん　祥
空に消野へにとけ行こその雪　敬
わか白髮そありしまゝなる　敏
憂旅をみやこにしはし慰みて　祇
なるゝころもを秋はかへけり　弘
蔦のはに苔も埋るゝみねのまつ　敬
露しもかゝる軒そかたふく　剎
打もねぬよはの莚に月おちて　雅
はや鳥なきぬあけかたの空　眞
人をなと理もなくとゝむらん　祇
われたにいとふわか身なりけり　弘
しられしの山をなみたの尋來て　敬
代にやふりたる道はのこらん　藤
氷らめや雪に筧の水のおと　眞
火をたく庵にふゆそわするゝ　茂
假寐する木の下枕折しきて　祇
しつけき風に椎おつるこゑ　祥
秋の日のうなかみ山や暮ぬらん　敏
みしかくなりぬ夏苧引末　敬

衰る賤か衣のゑり（すそイ）くちて　祇
庵をみれは身をもかくさす　眞
とふ時やあはしとするを忘るらむ　茂
うけぬを祈る戀のはかなさ　雅
誠しる道には心かけもせて　弘
西日になるをいとふ狩人　敬
冬枯のさか野を遠み歸るさに　祥
あらしの風のおくる山本　敏
雲（暮イ）そうき秋もや近く成ぬらん　藤
心ほそしな花おつるころ　敬
身の果をおもふ栖はのとかにて　茂
かけもよはれる永日のそら　剩
涙なとかけぬ契にくもるらん　祇
待夜なからの明方のいろ　敏
衣〳〵を人に告らん鐘もうし　敬
あすもやとはぬ暮をうらみん　弘
あちきなくつらき命の死もせて　敏
なす事もなく住るやまかけ　祥
大方にたのむはかりの墨のそて　茂
こゝろをわれにつけよ法師　雅
水早ききしに筏の竿取て　祇
柚木くたしつとのつくりせり　眞

孝七　敬十五　助一
眞十一　敏十一　雅七
祥八　藤六　剩三
茂八　弘九
祇十三　俊二

白何第五

春風に露はさみたれ柳かな　幾弘
河邊の波のかゝる若草　興俊
朝速き入江のかすみむら消て　印孝
夜半の蘆火のあとそ殘れる　義藤
誰起て假ねの雪を拂ふらん　心敬
おくる山路のつき冴るかけ　宗祇
嵐ふく峯の庵の戸を閉て　道眞
見さりし雲に秋や行らん　満助
雁の立田中のむらのくれ深み　中雅
水も身にしむ澤のかたはら　修茂
柴はこふ袖もぬれ〳〵船引て　長敏
きるみのおもき雨のかへるさ　長剩

とまるへき鷺坂山はまた遠し　眞
入日ほのかにのこる松かけ　孝
遙なる家ゐあらはれ野は枯て　敏
三四はなつ馬そやせたる　雅
鹿をさしているや矢先の數〳〵に　敬
染葉かくれぬ露の村くさ　弘
假枕なみたの月もふけ果て　助
よはの端ゐにまちよはる比　茂
郭公つれなきうぢに又やねん　敬
廬橋のうつろへるくれ　孝
程も無枝に霜をく木はかれて　祇
神のやしろのものふかき山　弘
捨る身や祈らすとても安からん　茂
住世の中はたのむ大君　助
盃のめくれはこゝろ打とけて　敏
ほとふるはかり閒ゐする宿　藤
唐錦たゝまくつらき花のかけ　敬
さくらにうつめ嶺の松かせ　祇
きても猶春は遠山雪ふりて　敏
かすむいつくそむさしのゝ原　眞
夕日かけ入間の里は見へわかす　助

いさよふ月もよをや待らん　茂
たのめねと心にかなし秋の空　雅
きくらんものを雲の初鴈　敬
返しなき文をはおもひ出もせし　眞
忘するへきかはいひしことのは　藤
山里をまた尋ねぬははつかしや　祇
いやしき住ゐ見えつるもうし　敏
夢さへにやつれやすらん旅枕　敬
ふるき都のつきかすむころ　祇
梅かゝよとへはむかしの袖濡て　弘
わか身ひとつの春そかなしき　敏
物をのみおもひしほるは秋なれや　雅
しはゆふ垣に冷しきかせ　眞
山賤の麻の砧もあはれにて　茂
夕はたをうちかへるなり　助
薄烟跡もさひしき谷のおく　孝
苔むす岩の松のひともと　敬
風騒く梢の鳥のまたをりて　俊
しはしふしてや身をも休めん　藤
宿直人かへる舍りも深きよに　祇
打しはふくもつらききぬ〳〵　敬

假初のことのはもなき新枕　眞
ゆめともわかす現ともみす　剎
雨風にのこる一木の花にきて　祇
身さへもまるゝ春のくれかた　敬
ちりかすむ御幸の道の朝迹　弘
行あとはやしすくる小車　孝
ことしさへ今は半の輪を越て　茂
出て河邊に祓する人　鈫
恨めしなそなたに報へ生靈　敬
とふともあさき名をは名のらし　祇
所緣さへしらぬ計に身はわひて　助
草引むすひ野へにねにけり　雅
かり初の宿打たのむ旅のくれ　孝
なれぬる月に入あひの鐘　眞
瀧の音秋風さむき峯の寺　鈫
霧もしくるゝなちのみ山路　茂
この本に住しをとへは跡ふりて　祇
春いくはくそ桃さける園　敬
杣人の霞の洞のおくふかみ　雅
こゝろもゆらく永日のかけ　助
赤子のふり分髪に末かけて　弘
契りしものを誰と契らん　鈫
獨たゝ灘越舟のこきおくれ　敬
たよりの風よこなたにはふけ　眞
梅か香もしらぬ賤やのふゆ籠　祇
ちかき爪木をゆきに折比　茂
山ふかみ末もつゝかぬ道みえて　孝
半はくもにしつむかけはし　雅
虹たつや此川上の入日影　眞
三輪かす崎をかへる市人　敬
夏はみな尋るみつにましけりて　剎
露けくなりぬ秋やきぬらん　祥
荻にかせほのかに忍ふ夕まくれ　弘
月にも見えしものおもふ比　鈫イ眞
やゝ寒み衣引かつきふせるよに　眞イ鈫
かた岡やまをたのむ旅人　敬
村雨に杜の下かけゆきやらて　茂
野中にたまる水そすくなき　祇
うつほ木になるみの浦の捨小舟　弘
さして哀をたれかとはまし　剎
なき人のかたみにのこす腰刀　敬
代をかさねつゝ家そさかふる　祇

竹ふかき陰に甍のかす見えて　茂
けふりのたつは民のかまとか　雅
あらそへることなく國ものとけきに　眞
あつま都もおさまれるはる　助

弘七　祇十三　敏十
俊三　眞十一　剣三
孝七　助八　祥一
藤四　雅八
敬十五　茂十

初何第六

夕月夜かすむはかりの風もかな　長敏
袂はしるやまよふ梅か香　長剣
山むかふ窓さへはるはさむからて　満助
宿しつかなる野への朝あけ　修茂
立出て旅人さはくあと遠み　宗祇
わたれる川にちとりなく聲　道眞
一村のあしのはなひく雪晴て　印孝
氷やうすきふねかよふみゆ　心敬
明過てのこるもほそき月のかけ　義藤
いく重からかふ霧のやまのは　永祥
木の本に更行秋の風おちて　中雅
來ぬ人つくるおもかけもうし　幾弘
雨ふらは中〱おもひ絶やせん　眞
なかむるくれのそらの哀さ　助
遠き野にやせたる村のうすけふり　敏
木樵おきなのたとる山みち　祇
畑になく鳩の羽杖をわかつきて　敬
狩場のかるゝとりのひと聲　弘
古寺にたのむ林の陰ふかみ　祇
かりね目覺すともしひのもと　茂
船うこくよはの干潟に汐越て　雅
波まの月のたゝよへるかけ　敬
世の中に住るをおもふ秋の空　孝
なかむる山を霧なかくしそ　眞
雲はるゝ伊駒の高根色付て　祇
夕日のまへにあらしふく音　祥
柴の戸によるたく爪木出てほせ　敏
苫のしつくのふかきふる郷　藤
老をみて花もなみたはおとすらん　敬
命のすゑにあふはるもかな　祇

契しはむなしき空に年越て　茂
秋たちふゆにうつるかなしさ　敏
霜そをく露に別し旅のそて　敬
月もともなへみやき野の暮　祥
木の本のやとりは誰も身に入て　助
たゝわれからとおもふやま里　雅
都にもなと賤しくは生るらん　敬
しほやき釣をたるゝ難波江　眞
殘る日にあしやの灘の松みえて　祇
わかすむかたにひとかへるらん　敏
かせさむみ塒にさはく群鴉　雅
しけきこすゑの雪の下折　助
明ぬるか竹のは越の伏見山　祥
深くさの戶は野へにあれけり　敬
程ふれはもとの家ゐもおもほえす　藤
われに宿かせ夕くれのつき　眞
露なから憂身はをかん方もなし　茂
袖にもあきのしくれふる比　弘
定めすよもしならはねは問やせん　雅
またてやみきし初ほとゝきす　孝
夏山にのこるは稀のさくら花　眞
みねの卯木やしろく立らん　敏
まはらなる垣根のうへの夕けふり　祇
もりてもうすしかすみ行月　茂
なみたをも今はの春やさそふらん　雅
かへるならひの旅のかりかね　剝
北に行ひとは此世にとゝまらて　敬
水もひかしになかれてそさる　祥
尋てや末をもうけん法の道　祇
馬のうへにもとれるさかつき　敬
武士の祝ふいくさの首途して　茂
家はまもれる神にまかせん　弘
庭中のあすはいつくのかり枕　敏
小しは折かけ陰にぬる人　敬
行くらす交野のみのゝ月をみて　雅
秋はもみちに櫻かりしつ　眞
露もうし雨な降きそ山のおく　祇
菅笠やふれみの毛きれけり　敏
すつるみをかくしかたくてめくるよに　眞
朽るもまたや人となるらん　茂
今あふも遠き契の行衞にて　藤
たのめしまゝの道の蓬生　助

忘れしの君かこゝろはあともなし　孝
出ゆくむろの舟のしらなみ　敬
山風もこゆれはけし熊野川　祇
はやくも三のあきは過けり　茂
九月や十日あまりの月もおし　敬
菊にうつろふかけの露霜　祇
色みえぬ笹の竹に時雨して　敏
夕をふかみそてそしほるゝ　弘
滿汐をしらてし越る湊川　眞
ふるき入江の橋は絶けり　祥
つの國のなからふる身は朽やらて　敬
こやともいはしうきは知らん　祇
さりともと待れし花も移ぬ　茂
はかなや契はるのよの夢　弘
鶯かすかねや枕にかすむらん　剩
やとりあけ行關の釘貫　雅
道たとる旅をはそことさし捨て　敬
ひかけ袖とふくれ方のそら　藤
人みえぬ片山きはのくさの庵　助
軒はにすくる荻のうは風　孝
いねかてのさよ更かたに鴈鳴て　敏
まくらに月もおとつれて行　敬
秋よなとかくまて我にうかるらん　茂
先の世をさへとはんとそおもふ　雅
か（歎イ）なしさは數ふる道もなきものを　助
はや打なひくはつくさの色　祇
見渡せは野へに霞の村きへて　眞
かせおさまれるはるは此はる　俊

敏十　眞十一　雅九
剩三　孝五　弘六
助七　敬十五　俊一
茂十　藤五
祇十二　祥六

薄何第七

春も來て歸らんゆきの朝戸哉　修　茂
かすみをやとせあらしふく山　宗　祇
梅かゝを旅ねの袖やゝつすらん　中　雅
草のまくらにあたらよの月　長　敏
またしらぬ露に馴ぬる野を分て　永　祥
こほるゝはかり秋そしくるゝ　心　敬

暮ぬれは村〳〵かへるそらのくも　満助
みねの木樵のくたる里〳〵　道眞
靜なる河へに通ふふねみえて　長剎
なみちはるけき水のゆく末　義藤
止まりて名におふ宮は神寂ぬ　祇
檜のふるはにのこる夕かせ　敬
眞柴焼かりはの小野は暮渡り　助
あられふる夜に獨かもねん　祥
たまさかの音信をたに聞もせて　眞
打かへしぬるふみはうらめし　鐓
散すなよしのふ泪を人やみん　雅
かさす花こそ老をかくさめ　祇
かひなしや風におらるゝ山さくら　敬
鳥かねまよふはるはくれけり　俊
霞つゝ明はつるをもしらぬよに　祥
かねより後の遠方のつき　孝
袖さむき小舟は秋の江を出て　敬
ふしみの野へのうら枯のころ　眞
泊瀬やま槇のはしほるかせもうし　雅
谷よりのほるくものした道　祇
身を隠す巷につらきうす煙　茂

人にとはれはいかゝこたへん　助
涙をはまきらはすへき色もなし　孝
明のこる夜をたのむかへるさ　藤
月かけを小島の蜑の釣乘て　鐓
いそへのきりに舟そ音する　茂
雨落(殘イ)る松の夕かせ冷しく　敬
秋のとひくるやとは荒けり　雅
夏草を假の扉とおもふまに　眞
いかにむゝへは絕ぬちきりそ　祇
世中はさめにしまゝの夢ならて　敬
夜ふかき山におもふいにしへ　茂
越かたき關にそらねの鳥もかな　祇
花匂ひくるたひの手まくら　雅
菫さく野への舍にはるくれて　眞
かすむはかりの露のふるみち　孝
たえ〳〵に岩もる水や傳ふらん　鐓
夕のにはの月ほそきかけ　敬
初秋はむしの鳴音もほのかにて　雅
こゝろにそよとおつる桐のは　祥
ねられすよ必またぬよはもなし　敬
身を知たにもひとそ戀しき　祇

うたてなと忍ふる事を忘るらん　茂
わか聲あくる山ほとゝきす　眞
五月雨に嶺の杣木を引捨て　敬
あやめかるやの軒のあはれさ　祇
思はすの袖のかふるゝ草まくら　助
都にすむもいのちなりけり　雅
老ぬるは月の中にもうかるらん　敏
あかつきかたのそらのあき風　孝
鴈か鳴時しもあはてかへる夜に　敬
たつねことよとは何をしへけん　祥
目にみえぬ神のしるしの杉の門　眞
聞もつたへよまもるこの家　敬
とのゐ人聲をそかはす夕まくれ　助
木の丸とのに名のるものゝふ　敏
君も猶こゝろ置世はおさまらて　祇
わかるゝ道のかせのさゝはら　茂
我そてに露をな添そあきの雨　眞
むかしもよほすよはの松虫　敏
ふるさとの月はいつより澄ぬらん　孝
あするもかなし飛鳥井の水　敬
冬枯の陰はときはの山ならて　祇
なかすは鹿のゆきに臥らん　剎
立雉はおのかや先もしらぬ野に　敬
そこともみえすかすみ引ころ　藤
心まつ花のあたりにいたるらん　助
我後生をちきるはちすは　敏
またもこん涼しき池の暮ふかみ　祥
さやまおろしのあきに吹かけ　孝
打侘て野へにねぬよを月もとへ　茂
砧にさむきあさちふのつゆ　祇
白妙のそてに霜ふる里はあれて　敬
をちかた人のとをさかるかけ　祥
船下す夕日隠のせをはやみ　雅
雲のなかはをおつるやま川　助
水をのみ便もあらん住ところ　眞
とまらぬをみは身をもたのまし　祇
別路になくさめにしもうつろひて　孝
生るくすはも秋にあふいろ　敬
ふり行は神のい垣も露しけみ　祇
あかねさす日にきりおほふころ　眞
山に誰かすみの袖をかさぬらん　祥
あたゝかにふく谷のはる風　弘

ちれはまたとく咲花を恨にて　茂
木のしたかけの野への村草　敏
消ぬるか霜うすくもり朝速き　祇
おき出てゆく道の遙けさ　祥
衣〳〵につくすこゝろやよはるらん　敏
しらぬ人にも涙おちつゝ　雅
たらちねに似たるさへこそ戀しけれ　敬
むかふかゝみの白髪もうし　茂
霜むすふ池のほとりのふる柳　眞
みとりの松もはるを經にけり　孝

茂九　敬十六　俊一
祇十四　助七　孝八
雅九　眞十一　弘一
敏十　剃二
祥九　藤三

何路第八

日そさむき去年とやいはん朝曇　満助
かれたる木々にこもる初花　幾弘
下萌の野へにほのめく色みえて　義藤
よはくなりゆく山かせの末　印孝

鐘遠きさとにや夢は殘るらん　心敬
旅はひとりとねられさりけり　永祥
月にゆく人もしつまり更る夜に　修茂
小萩かはらは小しか鳴らん　長敏
夕されは雲ゐに渡る鴈をみて　道眞
たちいてぬれはむかふ山のは　中雅
白妙の波にゆきふる田子の浦　宗祇
うつるもさゆる不二川の末　敬
松とをく木の間に冬の日はさして　祥
つゝりをたのむわひ人の宿　敏
新てやそてのなみたを手向まし　助
契うらやむほしあひの空　祇
つらからて明す一よの秋もかな　茂
いつまて野への露を分まし　俊
鳴海潟めくれる道を越汐に　弘
波にみきはをたてる鷺すら　眞
ぬれ〳〵も羽を千石に鵜は下て　敬
苔地すゝしきゆふたちの山　祇
滴ちる谷の嵐やさはくらん　藤
柴たく軒のけふりさひしも　祥
人稀に立おくれぬる市すきて　雅

たゝしはしなる世をはしらすや　孝
片時もそはぬ命のかなしきに　敬
へたてみやこをさそ思ふ中　眞
龍昇るくもゐは海もはるかにて　祇
女も法のみちにいりけり　助
一聲や唱へやすきをたのむらん　茂
庭とり人におくるたひ人　敬
其跡の學ひをきけは遠くして　眞
破るゝまとにゆきそふりくる　雅
捲と無簾のやまもかけ近み　祇
夕のつきのなゝめなる空　弘
定めすよ風のうへ行秋の雲　孝
消るをつゆの身にそ知るゝ　藤
曉のこゝろほそかるかね聞て　敏
夜もいくほとのともしひのもと　眞
待うちに難面年をふるもうし　助
二はのはなにちきる行すゑ　敬
引袖に小松かしもを打はらひ　祇
さむき春野をのほる川舟　敏
霞立入江を遠みくれそめて　弘
ほのめく月にやまそ色つく　雅

風下す尾上のはらの村すゝき　敬
古宮人やつゆうらむらん　祇
かひも無むかしを戀る袖ぬれて　茂
僞のみをたのむはかなさ　祥
打歎またしいまはの暮もうし　敬
舟も氷のとつるふゆ川　茂
拂ひえぬ雪の爪木をつみ置て　雅
ちかきかよひも山そくるしき　助
腰を押手をひく程の老の坂　眞
後はあまたの子をたのむ人　敬
放ち置牧のあら駒またとりて　祇
みやこにむかふあきの月影　敏
更科や露けき里のくさ枕　祥
我をはすてつなかき夜の夢　敬
佛も今はたれにかのこるらん　茂
ありしにほひもうすき衣手　助
別つる花の遠やま打かすみ　眞
かへりみるとも春はおもはし　藤
飼なるゝわれをうくひす音に鳴て　祇
竹とるおきなあはれしるらん　敬
釣たるゝさほもかけせすくるゝ江に　茂

ひとりそなひく芦の葉の風　祥
西よりもきたる佛の法のみち　眞
目を閉てみようかふ日のかけ　雅
こほさしと泪をしのふ此あした　敬
うたてやさても人はかへりぬ　助
風をたに今はいとはぬ山さくら　祇
おしむによらし春に任せん　弘
くれねたゝ永ひかりのかけのうち　眞
秋の月まつやとのさひしさ　敏
虫の聲蓬かつゆのふくるよに　孝
恨をきけところもうつらん　雅
旅行をひとりやもめのなけきゐて　敬
見よや鴉は枝にかたらふ　眞
植置し榊の松の木たかさに　孝
かけたのめとや神はおもはん　藤
袖さむき霜の燎を焼かへて　祇
沖の舟まつよはのたひ人　弘
哀にも垣ほのくさのむしろしき　剣
なくやうつらの聟の古郷　敏
くれぬとて小鷹雑てかへる野に　敬
また秋かせの身をしほるなり　祥

露なから梢の椎のははおちて　雅
ひとむらのこる峯のさゝくり　敬
雲ふかき山をや猿のたのむらん　祥
水底きよきふゆの月かけ　弘
假ねうき袖の河原によは更て　祇
出しみやこを夢にてもみん　助
殘るともめくりあはんは遠きよに　茂
散ゆくはなよ我をわするな　敏
鐘やたゝ春もなみたをさそふらん　弘
一の寺のかすむやまもと　敬
雲の行かた岨ほそき道みえて　眞
かさなりけりな豊年のゆき　雅

助七　祥八　祇十二
弘八　茂八　俊一
藤五　敏九　剣一
孝五　眞十一
敬十六　雅九

二字反音第九

春見ても花には遠き千くさかな　義
　藤

さくらにほはせさむき朝露　印孝
霞つゝ袖に音無あめおちて　永祥
さもものふかき軒の山かけ　満助
竹のはにたれか家ゐのかへるらん　長敏
水うちけふる川そひのみち　宗祇
曉の月のこる江にふねさりて　中雅
秋かせやどすまつの一むら　幾弘
枯〳〵の岩もとすゝき露もなし　心敬
かよふ山への袖そしほるゝ　道眞
名のみあるふるの都の跡をみて　與俊
なけほとゝきすたゝに過めや　長剣
またしとてぬれはねられすいかゝせん　弘
ちきりしまゝの後のゆふくれ　祥
けふこすは花も我をや恨まゝし　雅
かすみよわくるみちなへたてそ　眞
おもひ立此世にうたて春のそら　孝
島はふるすやたのむ老かみ　敬
往昔の人のかひこはうらめしな　眞
わたうす衣わひつゝそきる　祇
やはらかに吹たにつらき秋の風　助
また一葉つゝやなきちるころ　敏

夕川のつきは二のかけありて　敬
行水さむく日ののこる山　祇
おくふかみ峯にや雪の積るらん　祥
假寢かなしき野へそしくるゝ　弘
堪てすむこゝろはいかゝ草の庵　敏
花にやとまる人のふるさと　孝
捨ぬそと春に我身をおとろきて　眞
ほとけも終のわかれこそあれ　蔭
駒かへす山路にふかくおもひいれ　敬
つらしや遠くきそのかけはし　雅
涙にや旅の麻衣やつるらん　助
出にしあとの秋もくれけり　敏
待人に庭のよもきふうら枯て　祇
そよと荻ふく風のおもかけ　弘
夏を今わするゝ月の更る夜に　俊
むすふ清水そ袖をひかふる　眞
分捨て誰いなみ野のくさまくら　祇
とまれあかしの岡のへのやと　敬
こゝろのみ引ことの音はきゝあかて　助
またみぬ方にうかれきにけり　祥
夢のまやもろこし人になりぬらん　敬

とをくわかれし親そこひしき　雅
憂事もいとけなくてはしらぬ世に　祇
春さり秋をむかへぬるころ　眞
子日せし野へのまつ虫又鳴て　敬
今はたそてのつゆさむき色　助
霜むすふ折もつれなしおもひ草　敏
中にふりぬることのはのすゑ　弘
僞にこなたはなさて待ものを　孝
さそひて出しやまはみるらん　雅
跡かすむ花をうら舟こきわかれ　敬
梅かゝとをきありあけの空　祇
春のかせしらぬたもとに吹落て　祥
かふるころものなこりなる色　弘
立行は三とせのわさも程はなし　雅
鼻さす牛のこゝろうのみや　敬
賤かかる草に小萩を折そへて　祇
露をやかへる野にちらすらん　藤
涙そふ月に假ねの夢もなし　眞
みやこしのへときり〳〵すなく　敏
せめて今ひとふてをみる傳もかな　剣
妹さへにうとくなるころ　敬

こひしさのさらは我をもいとへかし　助
身をしらてこそ世にはすむらめ　眞
草の戸の友とはなしの園の竹　敏
まくらのあられ音なかはしそ　祇
よる波もかしまか磯のかりふしに　敬
野邊の月には誰やとるらん　孝
一木立まつの夕かせ身に入て　弘
苔の下にもつゆやうらむる　祥
水そゝく秋は手向やうけさらん　孝
おほつかなきはこゝろなりけり　藤
今こんといひし他人たのまめや　敏
わかおもひよりよはる魂のを　助
なけかすは旅のつらさやなからまし　敬
とをき門出のなみたをとすな　祇
うたひてそ日をもおくらん柳陰　雅
ふねにさほさすはるの川長　敏
霞しく江には釣をや忘るらん　敬
しつかに眠るいはかねのとこ　祥
ふくるよに月待かぬるたにの菴　眞
すまはやあきのみねのふる寺　祇
しきみつむたもとを露になし果て　助

かたみの水となみたこそなれ　敬
いにしへの野中の跡はとふもうし　敏
身をつかのまにおもふあはれさ　藤
ねらひする小鹿のつのゝ草かくれ　祇
いたゝくよはの星くらき空　弘
怠らす君につかふるあさ夕に　眞
まなへるみちや心なるらん　孝
諫るもおろかなる身はかひもなし　敏
水にていしをうつか河風　眞
くるゝより船に火をとるよは冴て　敬
鹽やかすかにゆきそつもれる　祇
踏わくるみちたにみえぬまつの陰　藤
秋はたれとてたつねきぬらん　弘
うき身をも月は伴ふものなれや　茂
めくみの露のひろき世の中　助

藤八　祇十四　茂一
孝五　雅七　俊一
祥七　弘九　剣一
助九　敬十五
敏十二　眞十一

何木第十

梅さきぬなほ山さとをおもふかな　道眞
こゝろのはなの人さそふ比　心敬
春の夜は鳥のいろ音にあけそめて　幾弘
ひくくもうすき遠方のそら　宗祇
あと晴る時雨や末にめくるらん　義藤
いつれはおきをかへる船みち　修茂
あまはたゝ月の夕をよそにして　長敏
すみかをふかみころもうつ音　印孝
道みえぬ淺ちかおくの露霜に　中雅
かせのみかよふ野へのかたはら　興俊
古寺は松の戸たゝく人もなし　敬
おのれとかねの冴るよの聲　眞
うたてなとかへるさをたにいそくらん　敏
待こしほとのこゝろしらすや　孝
花は我宿より外にちるもうし　祇
いつくの春か今はとまらん　助
名におひて霞の關のかすむ日に　敏
あきはきりふる切原の道　敬
朝露に行もてぬるゝまきの駒　眞
のこれる月にあらしふくなり　藤

陰ふかき落葉からへに山晴て　祇
木のまにしろき瀧の岩なみ　茂
住人のこゝろもきよき柴の庵　助
おもひすつれはこともまきれす　弘
猶舊のうらみにかへる世はつらし　雅
わすれんとぬるも夢にみえけり　敏
夕暮をよその契にかこちきて　孝
やよほとゝきすたれに鳴らん　敬
山賤の身はとはるへきゆへもなし　祇
春をいそくはたゝ花のため　眞
秋とをきうら若草の野へを見て　敬
露のかすむはひとや結ひし　雅
月なから水ほのくらき谷の戸に　祇
のこるほたるの冷しきかけ　弘
待れけり初かりかねはいつかこん　孝
ちきりをかけてとをきふる里　眞
思ひ出よおなしなかめのそらの雲　茂
ともに消なんことのはの末　祇
方〱に生れんのちの世をしらて　敬
うけしよわれはこの身二度　眞
聞法をきつねも猶やうたかはん　雅

舟さすとほり水そをとする　祇
舎かる入江のむらのさむき夜に　助
藻くすかきたきあかす旅人　敏
兎に角にほされぬ袖のいかならん　剝
中〱あはしわかるゝもうし　茂
たのめくるあしたを夢になし果て　孝
ゆふへの山にさくらちるかけ　剝
かへる野をおくるもかなしかすめ鐘　敬
身をうくひすの聲そ老行　弘
心なくあかつき月のよはにねて　祇
きかぬ時さへおもふあきかせ　藤
守わふる不破の關屋の雨露に　敬
板のひさしのさひしくもみゆ　剝
幽なる苔のたえまに草生て　祇
岩かきみつのするそかれ行　弘
おく山もたのむかけ無ふゆの日に　孝
ゆきにさる鳴みねの寂しさ　敏
麗のさはけはあたらはな落て　敬
かすみせめくる月もおしきよ　眞
恨わひ春も今はのわかれ路に　雅
秋にあはんも老はたのます　敬

ふる郷の露は何にかのこるらん　茂
なほ身に入るたひの夕風　助
立波もあらき島へに船かけて　弘
しらす夷のくにゝいる人　眞
繪にかける女やすかたかはるらん　敏
こゝろうこかす歌のことのは　敬
ふるき世の虛橋のあとを見て　雅
なみたをつゝむ袖のあはれさ　弘
數ならておもふにいとゝ名や立ん　孝
われゆへ人のうからんもうし　祇
尋れはくれぬる道のしるへして　眞
さとなき山に犬ほゆるこゑ　敬
さひしくも木の本たのむ泊狩　助
折しく眞柴しはしかもねん　茂
礒枕汐くむよはの月を見て　祇
都もよしやまつしまの秋　敬
慰めて別れし袖の露もうし　孝
さてもなにゝか早かはるらん　弘
罪人をおもふもかなし六の道　敬
こゝろのちりはかろぐはらはし　助
花をふく風にも此世おとろかて　敏
後のはるそとたのむはかなさ　藤
加れる彌生の日かす遠からし　眞
またありあけのめくる三日月　敬
秋に猶人のつれなきほとみえて　茂
きけや虫の音しれや朝貌　眞
夕霧に身もかくれのゝくさ枕　祇
あらく吹てなおちそ山かせ　剎
越浪にほはさけ船やくたけまし　敬
むしろもぬれぬ假ふしの床　雅
心をものへぬはかりのかへるさに　茂
さのみにつらきことな語りそ　藤
中／＼に忘れんとする身のむかし　助
たちくるけさをいはふ春の日　弘
むかへては千代をちきれる松の門　敬
みとりをそふる青柳のかけ　孝
若髪になりかへるこそうれしけれ　敏
老をやしなふ瀧そひさしき　祇

眞十二　茂八　助七
敬十七　敏九　剎四
弘九　孝九

祇十三　雅七
藤五　俊一

道眞(太田備中入道。)
幾弘(栗原入道。千葉被官。)
義藤(近衆。上杉被官。)
長敏(鈴木。)

中雅(禪僧。)
満助(鎌田。)
修茂(大胡。)
長剝(山下。)

〔右河越千句以内閣記錄課本校合〕

續群書類從卷第四百七十六

連歌部六

熊野法樂千句

山何第一

香なしの河上しるし花の瀧　勝元
はる行水そさくら流るゝ　盛長
月しろく浮ふ霞に影更て　心敬
鴈歸るなり雲路たとらす　道賢
寒からぬ風にや雪も消ぬらん　行助
たく火に旅のやとりとふ暮　賴還
わくる野に草はむら〳〵紅葉して　賢秀
木末に遠くかゝる秋の日　專順
峯高み霧よりうへや時雨らん　常安
猶露深し岡のへのさと　通賢
守る小田の庵にかよふ道みへて　元說
ふねさすあまををくる濱風　宗祇
夕波に鳴て衞や過ぬらん　宗怡
しほひ杳にさゆる月かけ　賴宣
眞砂地にふりをく霜の消やらて　元綱
松もかすめる朝あけのいろ　幸綱
高砂の尾上の春をわすれめや　道賢
こゝろの花をかたる山もり　心敬
世の外に移ひすめる友ありて　專順
むかしの契すへもたかふな　行助
夢をたゝ又みまほしき夜の床　元說
月をかたしくさむしろの上　勝元
いとはしな思ひを野への虫の聲　盛長
すさめてきくもたゝ秋の風　常安

扇をく袖もすゝしき日は暮て　心敬
くむ手ひまなき夏の山水　宗怡
たへせぬやもとの氷室の松か崎　賢秀
雪にもみちののこる岩かけ　宗祇
隠れゐる栖とたのむ柴の庵　元綱
世をのかれてもこゝろひまなし　勝元
我としる法をは誰に事とはん　通賢
そら吹かせのゆく末の聲　行助
竹なひくさとの遠かた顯はれて　勝元
しらぬ軒端のならふ山もと　心敬
漕舟のいそ近くなる夕まくれ　幸綱
沖の日影そ波に入ぬる　專順
放鵜の羽をほすほとは石にゐて　心敬
くるしき身こそやすめかたけれ　宗祇
あひみても猶かきりなきものおもひ　行助
しのひしともかたり盡さす　道賢
長き夜も契れはやかて鐘なりて　勝元
わかるゝ人に月はいりけり　元説
すさましや越行山の秋の雲　專順
みねのあらしにまかふ鴈かね　宗祇
三吉野のたのむ影なき花ちりて　心敬

はやくも過る春の川なみ
ときそはる氷に水そ〔は歟〕増るらん　幸綱
かたみ小袖をしほる夜な〳〵　專順
つれなさの心くらへやのこるらん　道賢
いのちも我もいつをまたまし　行助
契つる山のこなたに身は老て　心敬
としこえかたく冬暮にけり　勝元
まつさくや春のとなりの梅の花　常安
雪おもけなる軒の中かき　元説
夕日影かたふくまゝに庭さひて　行助
そともの竹にやとる村鳥　宗祇
野邊ちかく誰かすへしも小鷹狩　道賢
秋はえた折すまの山柴　藥壽丸
うみ渡る木陰の木の實それと見て　盛長
あひしる身さへ涙落けり　宗祇
思ふ事つたふる人もうき中に　專順
こりすやれとも又返し文　賴還
年月の恨みのかすやつもるらん　勝元
はれぬこゝろに袖そ朽ぬる　通賢
五月雨の露にむもるゝ草の庵　常安
いてゝやきかん山ほとゝきす　行助

待とをの有明の夜は深にけり　専順
ゆめをおもはすきぬたうつ頃　心敬
秋かせの身にしむほとにはや成て　元綱
子日にうへし松の木高き　元説
故郷の春いつよりそ志賀の浦　宗祇
霞にこもるやまの井の水　行助
いまはその面かけさへにかはりきて　専順
おとろふる身のさきそしらるゝ　勝元
うきしつみある世間や憑まゝし　通賢
さためのなきにのこる玉の緒　心敬
あかすみる月もろともに夜の明て　道賢
山端したふ秋のよこ雲　常安
名浦遠き霧に小舟の漕わかれ　宗祇
あとさきにたる道の行ふり　盛長
旅のやとおなしこゝろに又とひて　行助
かりにすむ世に生れあふ人　心敬
淺からすいかなるえにか契るらん　元説
茂る林にすをかくる鳥　宗怡
子をおもふ鶴は澤邊にむらかりて　道賢
雪けの風のさへかへるころ　盛長
山端の時雨に月のかけもなし　勝元

秋はなみたをいかてかこまん　行助
松むしもとはれぬ暮に聲立て　道賢
しのふの草のつらきかよひ路　専順
分行は亂あひけり野への露　頼宣
かせのみのこる人のふる里　心敬
哀さの心ひとつにとゝまりて　元説
神もうけひけ歌のとはり　盛長
梓弓八百萬代といのりけり　幸綱
この宿からの春そさかゆく　勝元
さかりなる花には人の尙問て　元説
紅までの梅やひさしき　常安
君そみん巖となりしさゝれ石　道賢
つきぬことはの數のよろこひ　専順

管領勝元十　安富民部盛長六　心敬十一
右馬頭殿道賢八　行助十　頼遏二
賢秀二　専順十　常安六
通賢五　元説七　宗祇七
宗怡五　元綱四　幸綱四
藥壽丸一　頼宣二

何船第二

のとかなる御代にやはらく光かな　　　道賢
しら玉椿花そひさしき　　　元綱
青葉にもみ山さくらの開そへて　　　勝元
春の流れにうかふ鴨とり　　　盛長
江にあまる水はこほりやとけぬらん　　　心敬
風にかたまる浪の月かけ　　　専順
露おもきわさ田の稻の穗にいてゝ　　　行助
霜をかぬより野へそいろつく　　　宗祇
寒くなる山路や秋を送るらん　　　頼遷
ふもとの里に衣うつ聲　　　道賢
立けふり夕への雨にみへ分かて　　　宗怡
遠きしほ屋はそこともなし　　　常安
跡ふりぬうつすやいつのちかの浦　　　元說
手にとるほとのこの筆の海　　　心敬
玉章をなみたの中におきかねて　　　専順
心にこむるひとの言の葉　　　頼宣
わすれしの情の末をたのむみに　　　幸綱
かはらて契れまれに問とも　　　賢秀
長き夜も見へくる夢はしはしにて　　　盛長
あかつきよりの月そつれなき　　　行助

つま戀をうしとや鹿の音を立る　　　道賢
時雨にひとりたとる山みち　　　勝元
古郷にとつてやらん人もかな　　　専順
かへして手折花の一えた　　　心敬
巣をつくる鳥やかひ子を思ふらむ　　　盛長
きゝすすむ野にくるゝ狩聲　　　常安
霞ゆく入日に雪の跡見へて　　　宗祇
かよひ路しるき岡のへの春　　　行助
柴の戸に人の分れは草そふす　　　勝元
かせなりけりな今のおとつれ　　　盛長
秋のくる袖より露のおちそゐて　　　頼宣
時雨になりぬ長月の空　　　専順
紅葉する北山もとは雲もなし　　　道賢
なにかし寺の木からしの道　　　常安
黄昏にそことゝもわかぬ鐘鳴て　　　行助
とき移り行世こそ夢なれ　　　心敬
うき事は捨る身迄もしられけり　　　勝元
春もわかるゝすみそめの袖　　　行助
夕風にむら立雲や霞むらむ　　　盛長
かへる跡なき鴈の一つら　　　賢秀
海士小舟閑けき波にともなひて　　　頼宣

幽になりぬ沖のいさり火　道賢
陰くらし松よりほかや明けぬらん　宗祇
西に殘れるすみよしの月　心敬
神代には心つくしの秋ならし　宗怡
から紅をそむるやまひめ　專順
いと〻しくふかき色なる物思ゐ　元綱
よそにやもれんあまり包まは　勝元
うちかすめかくとも人にかたらはや　元説
いまたはつかにみゆる若草　專順
三春の野ゝ日數もつまぬ霜□て　賴暹
山かけつたふ鶯のこゑ　行助
竹を行さとのかけ水たへ〳〵に　心敬
さま〳〵なれやわたる世中　道賢
身をしるも人をおもふもはかなくて　宗祇
うき名斗りやつゐにたえまし　幸綱
明くれは僞のみに過すらん　勝元
さむれはそはぬよる〳〵の夢　賴宣
味酒のたのしみ多き醉の内　行助
御室の山の春秋のいろ　常安
たれとても彼岸の日を忘なよ　盛長
いのちや契るひとつ舟人　心敬

旅なれは波かせあらき浦に來て　幸綱
さていつ迄か日を送るへき　道賢
う別てはあるへき身とも思わぬに　專順
この夕くれも猶そまたるゝ　宗祇
月おそくなりぬる宿は木陰にて　賴宣
空さへせはき秋の谷の戸　賢秀
嶺の雲くたれは霧やのほるらん　盛長
又一さかをすくる老の身　常安
末とをく千年をこゆる杖つきて　行助
卯つちをいわふ春はきにけり　心敬
仰きみる雲のうへなる氷のためし　道賢
袖よりあまるけふの祝言　勝元
枕さへ軒のあやめのにほひにて　心敬
夢みるほとも夏の夜の床　行助
うらむるを心みしかくおもふなよ　專順
さりともたのめあひもこそせめ　常安
名法師をたつねてわくる山の奥　勝元
おろす杣木や筏なるらん　盛長
紅葉ふく大井の川の秋の風　心敬
水すさましくやとる月影　元綱
露をしく床の岩根に猿鳴て　專順

たひねは夢をまつかひもなし　宗祇
千里にもおもふ心はゆくものを　行助
なかめやらるゝ春の山〳〵　幸綱
霞にはいくえの峯のこもるらん　勝元
花に入にし人もかへらす　道賢
三吉野のおく迄さらに暮はてゝ　常安
田の面の水の音そさひしき　元説
守捨し庵の軒や荒れぬらん　道賢
かれゆく草は露もたまらす　心敬
はせを葉は秋のかせにや破ぬる　道賢
あらはにやとる古寺の月　専順
灯のはなほのかなる霧はれて　盛長
うつ碁の石をたゝく人おと　常安
誰となく手をならすにやこたふらん　宗祇
ものいはねとも心をそしる　行助
思ふ事あるは涙にあらわれて　元綱
君とわれとは契りかはらす　勝元

道賢八　元綱三　勝元十
盛長九　心敬十一　専順十
行助十一　宗祇七　頼遁二
通賢二　常安八　元説四
頼宣五　幸綱四　賢秀三
宗怡二

何木第三

浪を見よ花の種まく岩田川　盛長
苔路にちれる春の藤かえ　道賢
谷ふかみ松ふく風の長閑にて　頼秀
峯の霞にかへる雁か音　勝元
古郷を月はへたつる影もなし　専順
まはらになれる秋の草かき　心敬
置かふる露より後の庭の霜　常安
ゆふへや寒き虫のなく聲　行助
入日さす淺茅か末をふく風に　宗祇
落る木の葉のいつちゆくらん　元綱
一方にしくるゝ雲もさたまらす　道賢
たかき山よりふれるはつ雪　宗怡
陰くらき峰はいまた明やらす　頼宣
ともしの松をたのむかり人　専順
罪科をしらて此身やまよふらん　頼遁
ほとけは後のたよりともなし　勝元

得かたしや傳へぬ法のそのこゝろ　盛長
ことの葉のみはいかゝたのまん　元説
待くれのけふよ明日よと過きつゝ　元綱
恨はそひて外る中　行助
つれなさの命や人にならふらん　心敬
おもひそめてし年は經にけり　道賢
二 水くきの跡こそ朽ね橋はしら　盛長
かくやあしてにみゆるなから江　専順
風ふけは濱田の穂波打なひき　常安
いつるもよはき秋の日のかけ　宗怡
有明はあしたの山になをてりて　行助
かれ野の原に霜のさやけき　元説
遠さかれ夢の枕の鐘の聲　専順
まれにとふ夜をおしむ曉　心敬
別路のかたみとなるはこと葉にて　勝元
人の情は後もわすれし　元説
誰かさとゝしらて立よる雨舎　頼宣
軒端の峯そ雲にくれぬる　宗祇
櫻戸を明るを待てとゐやせん　道賢
よし野の枝折華にさす頃　元綱
う 春くれは去年のこゝろに又なりて　行助

きゆるから へにふれるしら雪　心敬
こほるまもみへす流るゝ水の淡　専順
あはれとおもへなみたせくそて　頼還
待わふとつけの枕の夢もかな　宗怡
なにはのうらみいつかしらせん　盛長
人とはぬさとの夕へはさひしくて　賢秀
まかきの荻に風そよくゝ　道賢
露のみやいろ〱ちらん菊の花　行助
山路の霧を打はらふ袖　宗祇
月しはしくもると見れは夜の明て　常安
なみたのもれぬ歸るさの空　頼宣
人のうさ我かなしさのとり〱に　道賢
やるせいつくそ戀の中川　元綱
三 落瀧つ心に淀はなきものを　盛長
にこらぬ水の流れいつくそ　勝元
五月雨は山端青く今朝晴て　心敬
いな野をゆくも茂き笹原　専順
かり枕こゝに一夜は過さまし　道賢
かねなるたひの宿そかなしき　宗怡
古郷は寢覺の床にしのはれて　勝元
かはりゆく世のあとの松風　心敬

人の身はかくこそあれとちる花に　行助
おもかけとてもたゝ春の夢　常安
かすめるもこてうに似たり夕ま暮　宗祇
なと待すしも忘れはつらん　専順
もの思ゐ身にもまかせぬこゝろにて　元説
さやけき月に時雨ふる之　勝元
いとゝしく夜こそ長けれ末の秋　盛長
まとろみかたくすさましき風　行助
稲妻のそらおそろしき影見へて　勝元
くれ行道におふ人もかな　頼宣
しつかなり又隣なし一つ庵　頼還
太山は四つのときもおほへす　宗怡
聞わたるつゝみの瀧は名のみにて　元次
なにのしらへそ河おとの雨　常安
岩こすもしらぬかすみのうもれ水　宗祇
ふるき砌の苔深き春　心敬
陰家や花ゆへ人にしらるらん　勝元
暮やらて日の猶も永けれ　賢秀
遠くとも行へき方は都にて　専順
ひなの住ゐにつらさしらるゝ　常賢
おとろへぬ心つくしを思ひやれ　行助

まつよな〳〵にかわる黒髪　心敬
きのふけふ山の薄雪かつふりて　盛長
さとの梢に過るこからし　元綱
竹のはやかよひ行手に落ぬらん　幸綱
ふねさすさほそ岸にさはれる　専順
人影のちかきはせはき渡りにて　頼還
山田にさはく雁の一つら　心敬
うちはへてひたも鳴子も音高し　道賢
秋風さそな賤かかり庵　宗祇
置あへす露ちる野への暮かたに　道賢
衣の袖そやゝ寒くなる　元綱
莚さへみしかき夜半の月に寝て　宗怡
よすかと頼む夢もみへこす　行助
はかなきは契なりけり人たのめ　道賢
のこれる花や明日をまつらん　専順
吹風をさそふものかは春のくれ　通賢
かすむみなとの舟そやすらふ　行助
磯山の里にはしはし宿かりて　勝元
しは鳴鵆友とこそきけ　常安
目覚すやさよ中空の月の影　心敬
神の告ある秋はたのもし　盛長

勝元九　道賢五　盛長八
賢秀三　専順十　心敬十
常安六　行助十　宗祇七
元綱六　通賢六　宗怡五
頼還四　元説四　幸綱一
元次二

何人第四

萬歳峯にそちきる松の春　頼還
山ものとかによはふ朝風　元次
礒つたゐ霞に船のゆくを見て　行助
すさきをよそに鳥そむれ立　心敬
満しをにあらくなりぬる浪の音　勝元
月の光りそやかてさしくる　道賢
ほともなき時雨に秋のさ夜更て　宗祇
まくらにむしの聲幽之　通賢
外面なるまかきや野へをへたつらん　盛長
はるはきのふに茂る夏草　宗怡
今朝とてや花の香近き衣かへ　常安
いつしか袖に風そまたるゝ　賢秀
乃日は空たのめなるこゝろにて　元綱
とはしとすれや人の戀しき　元説
身ひとりの思ひや猶もまさらまし　幸綱
柴の庵の雨のさひしさ　勝元
夜もすから木の葉のたゝく戸を閉て　心敬
はやきへかてのともし火の影　道賢
誰か又ともにあはれむ月の下　専順
うき老らくの秋の夕くれ　行助
いとゝしく露や置そふ袖のうへ　通賢
しのふこゝろはしたむせひつゝ　常安
二
我中はことの葉さへにかれ／＼に　頼還
おのれと今そ分(マヽ)りぬる　勝元
炭竈のけふりきへゆく小のゝ春　宗怡
なひくや峯の霞なるらん　賢秀
鶯の聲打こもる谷さむみ　元綱
たれか家路そ雪の木かくれ　宗祇
たれこめて冬こもりする里の奥　道賢
とはれける世はいつのむかしそ　元説
今は身をゆかりもしらす捨はてゝ　専順
夢にのみ見るわか方の月　勝元
さらしなの秋をはよそに旅たちぬ　盛長
霧かと斗おもふ天くも　常安

風ふけは梺の塵のうちけふり　行助
落葉かきたく松の下庵　心敬
う かくてたに住身を千世と思はめや　通賢
いやしきも猶いはふ行末　幸綱
苗代の水口まつる春のしつ　道賢
しつまりやらす蛙鳴なり　宗祇
舟さはる岸の山吹またちりて　頼宣
はなの露ふく袖の追風　専順
衣〳〵の庭の朝明うちしめり　心敬
やとのなこりの月そうつろふ　行助
忘れすよ野上にかよふ里の秋　常安
いなはの山にわたる鴈金　宗怡
守小田のうへなる峯もいろ付て　宗祇
木たかき松に殘る日のかけ　幸綱
浪遠き浦は夕のいろもなし　心敬
みなみはれたる那智のうみつら　盛長
三 ふたらくの舟こそまこと法の道　常安
たのまゝことに誓もらさし　元説
神かぐる契をふたりしのひきて　心敬
かはらぬ中とさためをきつゝ　道賢
七夕のまれの一夜も代〳〵は經ぬ　専順

まち得し秋の有明のそら　行助
山里は紅葉かつちり友もなし　宗祇
鹿鳴暮の猿の三さけひ　常安
道まよふ霧にもすその立ぬれて　専順
釣する袖をひたす朝川　心敬
さしのほる小舟は棹もみしかきに　盛長
くたす筏そはやく過ぬる　幸綱
吹にけり名さへあらしの山颪　道賢
ときはの森もかはる冬かれ　専順
う つれなかれ霜は置とも松のいろ　賢秀
露こほる野にのこる虫の音　心敬
日影をもしたへと秋や暮つらん　行助
長きよすかに夢も結はす　勝元
枕かる岩根の滴身にしみて　宗怡
夏はよそなる山陰の床　専順
水鳥のをのかねくらに毛を落し　盛長
手なれの駒をあらふかた淵　心敬
川添のはにふの道をかよひきて　宗祇
柳のいとをみたす下風　通賢
春雨に移ふ花のいろもなし　元説
いてゝもあやな朧夜の月　盛長

かへる雁涙や空にくもるらん　元綱
うかるゝ思ひ人はしらしな　幸綱
名頼めつる此夕くれを待わひて　勝元
消なは命何かうらみん　専順
罪ふかき後の世こそは物うけれ　行助
三のさかひを遠くさらはや　盛長
風むかふ難波の舟の波あれて　頼還
入江の水の月そたゝよふ　心敬
萍をたよりと舍る露もうし　宗祇
わひぬる身こそ秋のものなれ　専順
一重なる麻のさ衣うつたへに　元説
ふるはた作る木曾の山さと　鶴丸
五月雨にそはの棧くちそひぬ　宗怡
ちきりし人もいかてまたまし　通賢
我ひとり花とひゆかん道分て　勝元
秋おもひやる野への春草　専順
ういろかすむ笹の露の朝ことに　心敬
おきゐておしむみしか夜の月　宗祇
手枕のすゝしき風に夢さめて　行助
はかなく馴し人の戀しき　元綱
いつの世のむくひの今にしらるらん　勝元
おほへす過ぬうまれこし方　幸綱
行末はほとなからしな老のはて　道賢
又うへそふる松もひさしき

勝元八　道賢七　頼還三
元次一　行助八　心敬十一
宗祇八　通賢五　盛長七
宗怡五　常安七　賢秀三
元綱五　元説四　幸綱六
専順十一　頼宣一　鶴丸一

何路第五

重るや春の濱ゆふ朝霞　賢秀
いろなき波にさける初花　元説
鳧鴨のたては氷のひまみへて　専順
霜夜の月のくもる明かた　宗祇
雪になる空のあらしは猶さへぬ　道賢
木の葉を盡す冬の山〱　行助
常磐なる松のしるへもあらはれて　勝元
たのむやとりか末の一さと　盛長
うぬれつゝも急くや秋のむら時雨　心敬

遠き野はらに鹿やたつらん　常安
夕風に小田もる人の聲きゝて　宗怡
みなとの波にかよふ釣舟　幸綱
海つらの猶のとかなる春のいろ　勝元
遠山端にかすむ鴈かね　賴宣
明る迄殘れる月の朧にて　通賢
夜ことにしたふ君か面かけ　賴遐
いつはりもたへぬ契になりにけり　行助
かたみ斗の文そふりたる　專順
言の葉のつらきもきかすうとまれて　元綱
またしいまはの暮なたのみそ　盛長
命をや日每の鐘はさそふらん　心敬
二
世のことはりは寐覺にそしる　元說
老ぬとも哀淚のひまもかな　常安
露ところせき古鄕のうち　宗祇
秋の草まかきにあまる花みへて　賴宣
末こすすゝきなひく道のへ　心敬
袖笠も月にはよしやかよふ人　道賢
わか面影をよそにしられし　勝元
山も又すまは浮世となりやせん　宗怡
いとなむ數の盡ぬかくれ家　元說

朝夕に烟そしるきしはの庵　幸綱
いく日か冬はこもりきぬらん　行助
存命て春にそあはんとしの末　盛長
契れる花も我を忘るな　心敬
山さくらさかはといひし都人　元說
いかにとはぬ日こそ長けれ　專順
玉の緒もおもひ消へき露の世に　宗祇
戀にくらへは秋やうからん　常安
しのひぬるなみたを虫は音に立て　心敬
あれたる里のよもきふの月　宗怡
軒端にもさはる影なく風そもる　賢秀
すたれのひまに寒き初雪　專順
雲かゝる伊與の高根や時雨らん　常安
とま引あへぬ土佐の入舟　心敬
立さはく湊の浪に日はくれて　通賢
袖ゆく水のかはくともなし　盛長
かく斗思ひの數のそはる身に　行助
すゑの齡を何かたのまん　專順
よな／＼にかたらふ月はかたふきて　賴宣
三
竹の葉おもくかゝる朝かほ　宗祇
賀茂山も梺の野へもうらかれて　賴遐

その神垣のあらはなるいろ　行助
新き鳥ゐの杜にをぬりて　盛長
あけこそ過れ春のたつそら　通賢
よこ雲のわかるゝかたや霞らん　成胤
よるちる花の夢のうきはし　元次
あひみしも亦いたつらに中たへて　頼宣
うらむるふしそ人に盡せぬ　元説
夏衣織あさいとをくりかへし　宗祇
みとりの影も落る瀧浪　専順
岩にちるかた山岸の水すみて　元説
露けき袖に月そやとれる　勝元
□秋や更ぬらん　心敬
身にしむ風のさはる閨の戸　宗祇
軒近く植たる荻の葉をしけみ　宗怡
竹の下根やさしかはすらん　行助
千代まてと子をそたつるは親心　常安
雲井の鶴の巣をそはなるゝ　勝元
中空にのほる春日の影たけて　幸綱
ふしの御坂はきえぬしら雪　心敬
駿河なる田子のうら藤行てみん　通賢
きけは音して打よする浪　宗祇

明る間を待てやいてん泊り舟　専順
とこやすからす夜こそ長けれ　頼宣
ねられぬを思へは月のとかならて　元説
わかものかほの秋のさひしさ　常安
誰もこそ詠侘らめ夕ま暮　行助
もの思ふ世は身にも限らす　勝元
草も木も下葉老ゆく冬はきて　心敬
霜のみさむき浅茅生の宿　通賢
風ふかぬほとこそ夢のかりねなれ　専順
まくらに春の夜は明にけり　賢秀
庭鳥のなけは千里のとしこへて　元説
かすみやそらの關路なるらん　宗怡
さらてたにくらき巖の日そ遲き　道賢
神代を今もおもひいてつゝ　勝元
松高く木陰さひしきおしほ山　専順
あらしのみ吹大はらの秋　心敬
川音もすさましき夜の月更て　宗祇
たへぬ時雨に袖そつゆけき　行助
いかにともとふ人あれな物思ひ　盛長
さとはなれなるすまの哀さ　光信
三年をは夢とうつゝに送りきて　頼還

都のつては風もなつかし　元綱
いにしへの友は我をや忘るらん　勝元
野中の清水草にうもれつ　常安
松影にたつぬる道は幽にて　頼宣
人かへるともみへぬ山てら　行助
法にそむ心の深くなるまゝに　専順
代はおさまれといのりきにけり　能範

勝元八　道賢四　賢秀三
元説八　専順十　宗祇八
行助九　盛長六　心敬十
常安七　宗怡五　幸綱三
頼宣六　通賢四　頼還三
元綱三　成胤一　元次一
能範一　光信一

初何第六

折花にねかひを三の手向かな　元綱
彌生の春にさける欵冬　通賢
蛙鳴垣ねの水に雨はれて　宗祇
露あひやとる庭の月影　専順

玉敷の御階かゝやく秋の空　道賢
いろつきわたる大内の山　勝元
霧を吹風に梢のあらはれて　盛長
朝立ゆけはちかき關の戸　行助
う余波ある宮古は跡の旅のみち　元説
かりねの夢をしたふおもかけ　心敬
思はすの契其まゝかけはなれ　賢秀
またみぬ山にけふよりそすむ　勝元
三日月の春くる空に出そめて　専順
日の入るかたや霞む途なる　幸綱
雪のまた殘れる松は冴かへり　頼宣
よる浪しろき高砂の浦　常安
鹽おつるあとや杳にくもるらん　頼還
あしはや舟はそれとしもなし　道賢
いたるへきまことの法の道をとへ　盛長
うたかひあるそ人のとかなる　行助
名を書てやる玉章はかへすなよ　宗祇
しゐてしたふを思ふともしれ　心敬
ニ雨風のはけしき夜半に音信て　勝元
新まくらにも涙こそゝへ　常安
故郷をけふそへたつる旅の宿　元説

こへつる方はまた近き山　幸綱
郭公このまゝ跡に鳴やらん　賢秀
われ世中にうかれ出けり　專順
花みんと分つる道にふみまよひ　道賢
この下草の深き春の野　宗祇
遅き日に朝の露の消やらて　心敬
くれぬさきより月をこそまて　行助
あこかるゝ心や秋のものおもひ。　常安
つまこふ鹿もひとり鳴けり　賴暹
山里に身を侘人の田を守りて　心敬
もみちの影をたのむ假庵　專順
たく火のみ友なりけりな冬籠　元說
雪ふかき夜は風そ音せぬ　幸綱
泊つる舟も氷にとちられて　宗祇
しつむをみれは朽るあしのは　專順
鹽かれの入江のぬなは根を深み　道賢
こゝろの庭そむすほゝれ行　心敬
なにとしも人はみわかぬ我思ひ　行助
露にまかへる袖のしら玉　專順
うきことを秋のならひといひやせん　通賢
あつむるむしそ友に音をなく　賴暹

籠の中に遊ふいろ鳥囀りて　幸綱
せはきこゝろもはるはのへけり　行助
櫻さく木かけは市の庭なれや　心敬
しるもしらぬもかはすことのは　盛長
夢路にはみへくる人も定まらす　賴宣
起てやまたん寢てやうらみん　專順
曉の鐘なるほとも聲をきゝて　勝元
わかもとゆひの霜そつもれる　通賢
ゆく秋やうきを形見に殘すらん　盛長
澤のかり田の水はさひけり　幸說
鳴の啼夕の月はかすかにて　心敬
太山のかけそあらき風吹　行助
ふりつもる雪は木ことにかはるらん　勝元
ならの廣葉に交る松の葉　宗祇
暑かりし外面の西日かけろひて　專順
清くそ水もすめる彼池　常安
すかたより心のきはもみへやせん　行助
とものかゝみに身こそ恥ぬれ　心敬
はし鷹の木ゐの下水浪もなし　勝元
かりはいつそ嵯峨の古道　道賢
ともしせし小くらの野へに秋の來て　心敬

山すさましくあらし吹音　元綱
草の庵露の命を宿しかね　専順
苔の莚そなれてたにうき　勝元
ひるまなく岩根の滴落そひて　幸綱
大はら川は流れたへせす　通賢
春は侚朧の清水むすひあけ　賴宣
かすまし心みゝあらふ人　元次
賢もきけはそいとふ花のかせ　常安
竹の林の梅のちるころ　盛長
うくひすはかた山かくる野に鳴て　宗祇
有明かたにいつる道のへ　元綱
名わすれめや他しことはの末の秋　専順
ふかきは露かさてはなみたか　賢秀
我袖のわかれにたとる人こゝろ　行助
うらめしつらしかへりたにみよ　心敬
此里は山陰なから須磨の浦　専順
柴をも運ふ蜑のいとなみ　幸綱
小舟さす波まは遠く暮果て　元綱
松一むらにおくる日のかけ　能範
枯てふす霜の千くさの野を廣み　宗祇
あらはにたゆるすけの庭□り　勝元

灯をそむくるかへに夜は長し　通賢
むかふ心のしつかなる月　賴宣
風たにもふかめや思ふ中の秋　行助
かさぬる衣我そへたてぬ　心敬
う枕かるはまゆふ波に袖しきて　宗怡
ふねつなき置みくまのゝうら　盛長
道安くこゝろのまゝに旅寝せん　道賢
神の告ある夢をこそまて　常安
ものこもり七日もはやくくるゝよに　元説
宮路を出しいそく我かた　勝元
仰きて君にいくよを仕人　専順
いやさかへゆく家〳〵の家　心敬

勝元九　元綱四　通賢五
宗祇七　道賢六　専順十二
盛長六　行助九　心敬十二
賢秀三　幸綱四　賴宣四
常安六　賴遅三　能範一
宗怡一　元次一

何田第七

遅さくらとしに三月をつきてけり　行助
さきそふ花の枝を重て　常安
春の月おりしる影やくもるらん　宗怡
のこる雪けの風は冴けり　道賢
下とつる氷に澤の水こへて　盛長
入江の波にかよふ鴉とり　元說
里遠き小舟は人のかけもなし　心敬
いつくやとりと旅は定めす　專順
山本ははや暮初る道分けて　勝元
日のさすみねのしはしさやけき　賴宣
松風や雲より遠に過ぬらん　通賢
露置あへぬ野への淺茅生　元說
さほしかの妻とふ頃はふし侘て　賢秀
夜半にひまなく秋田もる聲　宗祇
賤か庵月みんとてはよもいてし　專順
すゝむとほその夕くれの空　心敬
またすしもあらすよかくとしらせはや　元說
おもひをさへに告やらぬ中　行助
文とても人まなけれは書侘て　盛長
わすれやすると驚かさはや　幸綱
すてぬへき世やあらましに過すらん　勝元
いたつらにきく入相のかね　常安
二　古寺を猶やあらさん飛鳥風　專順
きのふもけふも杉ふける庵　道賢
明ぬれと窓うつ時雨音やまて　宗祇
ふねのとまこす夜の川波　宗怡
月をさへ旅寝の袖やぬらすらん　心敬
宮こそ秋のうさもまきるゝ　專順
野へに咲く花こそ草の盛なれ　常安
枝もたはゝにはきの葉の露　勝元
啼渡る鴈のなみたか庭の雨　道賢
おほつかなしなおとす玉札　心敬
忍へともはては名の立戀の道　元說
とはて過にしくれそくやしき　宗祇
おく山の宿にも花やちりぬらん　行助
よしのゝかすみ春風のあと　賢秀
早川やのとけきよとによもあらし　成胤
とこ安からす鴨の鳴聲　宗祇
冬の夜は霜にや月の氷るらん　勝元
袖うちかけてをこす埋火　盛長
むかひゐてかたりなくさむ友も哉　幸綱
かゝみに老をみるそくるしき　專順

おもふ事ありといはんもはつかしや　元説
数ならぬ身にたれをうらみん　行助
人次に有し年〱へたゝりて　勝元
宮こはうとくなれる山すみ　心敬
春きての朝〱やかすむらん　宗怡
鶯の啼軒のむめかえ　道賢
遅き日もたけの葉分に移ひて　行助
夕かけ遠きふし待の月　心敬
三秋の夜や夢の覺てものこるらん　頼遅
露の契りはむすひとゝめす　専順
明はつる野山の原を起いてゝ　盛長
關の戸過る不破の山こへ　心敬
夏かけて藤咲川へ又もこん　宗怡
波にあらすなきしの卯花　道賢
水深くまかする小田をかきこめて　宗祇
すむへきほともかりほ作れり　専順
世間はよしやかくても有なまし　常安
うきをならひと思ふ人の身　元説
袖に置露もいとはし秋のくれ　行助
はつしもふれる夜こそ長けれ　心敬
まとろますかりねの野への月を見て　勝元

草のむしろもとゝろのへつゝ　道賢
う水をせき木を植をける山の陰　専順
もの哀なる鳥羽のふる宮　盛長
思ひさへ遠きむかしに袖ぬれて　常安
したふうつゝは夢に覺けり　宗怡
君かくむ酒にあふ夜や明ぬらん　心敬
あかぬ別れのこゝろしれかし　宗祇
ちる花に猶山風の吹そひて　道賢
かすむいろなきしら川の瀧　行助
ゆく水の流にうかふ春日影　幸綱
庭の岩間はうらゝなる波　勝元
夕間暮笆の露もむもれゐて　道賢
草より下もむしの鳴聲　元説
わひ人はいかてか秋を過すらん　通賢
ころもうすみの夜寒なる頃　あく丸
名いとゝしく夢こそかるれ月の下　盛長
過にし方の面かけはおし　宗祇
我はなをとしふるまゝにおとろへて　常安
おひさきいそく親のみとり子　元説
榮ゆく岩ほの松のかけひろみ　専順
海まておほふ住よしの岸　常安

淡路島むかふ鹽干に顯はれて　勝元
波こす斗おつる月かけ　心敬
風わたる尾花かもとの露深し　專順
うつらや床をかへて住らん　幸綱
かくれ得ぬ冬の田の面の鳴の聲　宗怡
數かく斗とへはこそあへ　道賢
水くきのあともおもへは契にて　勝元
神代の歌も戀の中たち　元綱
つまこめに其八重垣や作るらん　心敬
わか草ましるその丶山吹　能範
ゆく春をいわぬいろにもしたはれて　元説
こゝろの花はしる人もなし　行助
いつの世を身の盛にて過ぬらん　元説
おくる日數ををもひつゝけて　勝元
すむ月の跡にさはらぬ峯の雲　道賢
まつる秋なるこのいわし水　賴宣

勝元九　道賢八　行助八
常安六　宗怡六　通賢五
盛長六　元説八　心敬十一
專順十　賴暹二　元綱三
元賢三　宗祇七　幸綱四
成胤一　能範一　賴宣一
あく丸一

何色第八

浪しけしこの瀧もとの藤の花　通賢
岩こす水に春風そふく　心敬
鶯のこゑに日影のいとたけて　盛長
かすむあしたの雨は晴けり　行助
小田返す人や里よりいそくらん　宗祇
遠き野はらの行末の秋　宗怡
暮ぬれは月に伴ふ旅の道　賴暹
草ゆふ枕露やしかまし　常安
かりたむる萩やまはらに成ぬらん　盛長
あれたる垣をかこふしつの男　勝元
冬こもりふせやにちかき山颪　專順
ふりそめけりなみねの白雪　賢秀
松高く時雨の雲や殘るらん　幸綱
夕日かけろひ蝉の鳴こゑ　賴宣
□波ましつけき御祓川　道賢
かつらのさとに秋はきにけり　勝元

宮こ人野に露わくるさかの寺　専順
あらしやさそふ長き夜の鐘　元綱
あふとみし夢はみしかき月更て　通賢
なみたはしるや君そつれなき　行助
別うき江口の舟の梶かくせ　盛長
友もなにはの花落るかけ　心敬
二春くれは早く咲つる梅一木　専順
まかきはいまた雪そ殘れる　元綱
白たへの霞に山はくれやらて　行助
あさみとりなる野への下萠　宗祇
紅葉する草や薄にましるらん　心敬
いろみへそむる袖の上露　専順
契なは後も月にとおもふ中　賢秀
みちもまよはす人そとひくる　幸綱
音信てむなしからさる夕くれに　頼宣
心をしれと松風そふく　常安
すゝしさの袖にあまれる夏の來て　勝元
折にあふきそえにしられしき　盛長
わすられぬ舟こそ所からとまり　心敬
おもふもさそなもろこしの春　常安
うはるゝかと霞の末に山みへて　道賢
おほろ月夜の明行もうし　頼宣
そら音かと鳥をうらむる別路に　宗祇
はなひる人を隣にもかな　勝元
いひたつる我身ひとりの名はつらし　行助
世のさかなさよいかゝのかれん　元綱
いとなみはこゝも大井の山陰に　心敬
筏になして小舟さすさほ　常安
法に入こゝろの道はすくなれや　賢秀
ほとけも神も守れあはれめ　行助
新つゝ花の齢をのへやせん　専順
春にそゆらく人の玉の緒　心敬
舞の手にかはるは今のまつりこと　通賢
ちきりにうたふよろこひの數　勝元
三君か代やうらむるふしもなかるらん　元説
この一もとの竹そ友なる　行助
山里はかけひの水も聲すみて　宗祇
また見も馴ぬ鳥そ鳴なる　勝元
あふ人のあらは都の事とはん　専順
とをくも分る野へのさひしさ　幸綱
末の秋森のこの葉のかつちりて　常安
いろかはり行くすのうら風　道賢

露結ふ岡への霜の消かへり　元説
ねての朝床　専順
むつましき人のかたみのむな事　心敬
あはれ二度めくりこよかし　頼宣
たゝ一夜むすふあやめの草枕　通賢
こゝにはたひか山ほとゝきす　道賢
越やらて暮す梺の雨やとり　宗祇
あまりほとふるあらましの道　専順
身のうきに老のいたらはいかゝせん　行助
わかふる郷は門もさゝれす　頼宣
葎のみしけきにつけて分わひぬ　道賢
この野ゝ末にかりねたのまん　勝元
虫の聲月のひかりにあこかれて　心敬
すゝろに秋そこゝろそらなる　宗祇
拂はやしのに露ちる袖のうへ　常安
しのふとするは安からぬみそ　長明
いにしへをまなひて世をやなたむらん　専順
鬼たにめてし露のことはり　賢
つちも木も皆すへらきの國にして　心敬
しけれは山そ陰たかくなる　宗祇
名 夏野より雲のうへ迄飛螢　行助

夕へのそらにちかき秋かせ　通賢
この朝け冬たつ色の打すゝけ　盛長
ふるやをみれは軒まはらゝ　常安
長雨に草の下葉や朽ぬらん　専順
野を水庭のすまのうら波　心敬
海よりも更行月は山かけて　頼宣
なみたも秋の色になりけり　行助
へたてぬる霧さへつらき人心　通賢
とをきはみへぬさとの中道　幸綱
雪とのみふるの櫻木夢なれや　心敬
春をくらせるをはつせの鐘　専順
年も經ぬ又くはゝれるやよ彌生　盛長
長かるへきは命なりけり　常安
つれなさの限に人のことよひきて　心敬
後はとはしとわかれてそ行　宗祇
よそになるこゝろのほとをみるもろし　頼宣
月なき雲のふかき夕くれ　専順
山端は霧のまかきに重りて　行助
秋たのしめる民のましはり　道賢

勝元七　道賢七　通賢六

心敬十二　盛保一　行助十
宗祇八　宗怡一　頼遷三
常安八　盛長六　専順十二
幸綱四　頼宣六　元綱二
成胤一　長明一

朝何第九

日の本にいつくまさらん神の春　専順
明る岩戸の長閑なるそら　頼宣
山霞む關のこなたに雪晴て　幸綱
こゆへき峯にむかふ旅人　元説
わくる野の袖に吹くる秋の風　賢秀
にほふ小萩や下葉ちるらん　宗祇
夕露に移ふ月をしはしみて　常安
すゝしさ殘るむら雨のあと　心敬
流こそまたもかはらね庭たつみ　道賢
思はすうかふ波のうたかた　宗怡
磯山の櫻にかよふうらの春　元綱
かすめとも猶ちかき松かせ　行助
わか庵の軒端あらはす雪きへて　勝元
かたふくまてに寒きふゆの日　頼遷

夜のほとの氷を薄み今朝の月　心敬
とけてねさりしかへるさそうき　専順
みをくれはすそひく髪のむすほゝれ　盛長
うしろねたくや猶したふらん　常安
おみなへしさく野を人の過やらて　宗祇
駒をとめたる秋の山もと　行助
露そちるしはし時雨の笠やとり　通賢
休らひけりなみのゝ中道　常安
末ちかき年のおはりをおしむ日に　専順
一夜やはるのへたてなるらん　勝元
ねぬるまの空に棚引あさかすみ　頼宣
立を余波の鴈そ啼なる　宗怡
松の風移ふ花に音つれて　賢秀
木かけのやとりおしまるゝ頃　元綱
捨る身を冬は陰さん山もなし　心敬
霜にやつるゝ苫のさころも　行助
寒夜の曉起もおこたらて　宗祇
月をも友と閼伽をこそくめ　勝元
埋れたる花をそ手折る草の原　専順
せはき庵のかけのしら露　頼遷
廣き野を守ともみえぬすまゐにて　道賢

かた山もとの賤かつくり田　光信
う雉子啼苗代垣は人もなし　宗怡
春をえてこそつまをこめたれ　盛長
霞さへしのふ夕のたよりにて　元說
たのむとすれと猶とひもせす　宗祇
今はたゝ命をかきり待てみん　常安
草のみしけるふる宮のみち　勝元
山科やうへ置松はむかしにて　專順
月にたえぬる友そ戀しき　元綱
そことなく舟に棹さす秋の夜に　心敬
ゆふ闇ふかしなひく川霧　宗祇
むら〳〵の岸の呉竹うちみたれ　幸綱
あらしに鳥のねくらをそ立　勝元
山ふかみくつるゝ雪におとつれて　心敬
かひある時と春は來にけり　專順
三盛なる花にはいまもあきたらす　勝元
あやにくなれや霞む月かけ　心敬
忍ふとてかへるもかこと待しはし　元說
とはれぬよりも名は立にけり　宗怡
ものおもふ心のよそにしらるらん　幸綱
戀のぬれきぬほすひまもなし　道賢

はし鷹の狩場の雪の又ふりて　行助
きりふのすゝき霜にかれつゝ　道賢
ふみ分ぬ岡のかけ道うつもれぬ　盛長
ふしたるやとの前の板はし　賢行
舊人とあし音きけはゝや過て　道賢
門へに駒を見けりおそする　勝元
苅はこふ秋の田面を行かへり　專順
又いねかての夜こそなかけれ　宗祇
う衣うつち〔つち歟〕ゝのひゝきに夢たへて　行助
まつちの山のかけのさと〳〵　盛長
とはゝやなたか聞つらんほとゝきす　專順
また人傳にうかれぬる頃　心敬
みてこそは思ひをそれと定めまし　通賢
つたへきく代の繪にかけるぬし　勝元
胡國の旅のゆくゑは我しらて　心敬
もろこしまての舟路くるしも　元說
浪かけて袖にはけしき湊風　專順
尾花ちりしく秋のくれかた　行助
入日さす外山のすそに霧晴て　宗祇
出んま遲くおもふ夜の月　常安
かりの身にその曉を待もうし　宗怡

もとの宮こもさとり住はや　盛長
ならの里みれはあまたの寺有て　専順
いまもさかふる北の藤浪　道賢
皆人のおさるる春に立かへり　通賢
こゝろの花は風もいとはす　常安
涙ゆへ身にはおほろの月を見て　勝元
老の寝さめの秋のよな〳〵　心敬
我命長きを歎く袖の露　道賢
啼きり〳〵す何うらむらん　専順
夕風のまよふまかきに音信て　勝元
いつか出なんしまかけの舟　頼暹
浦遠くともなふ人をまつほとに　賢秀
しほひのま砂行もやられす　行助
あしたゆみ朝は霜やさへぬらん　心敬
かれなて草のたかきかよひ路　元説
冬とたにしらぬときはのもりの陰　宗怡
いかなる風の秋はふくらん　道賢
身にしむはふたりかあひの夕へにて　心敬
つまを重ぬる月の夜の床　勝元
ことの音もきかまほしきを惜なよ　宗祇
わつかに分るよもきふのみち　専順

あら小田にかた山かつのかよひきて　行助
なへて御調のかまへもそする　盛長

勝元十一　道賢六　専順十二
頼宣二　行助八　幸綱三
元説五　賢秀三　通賢五
宗祇八　常安六　心敬十一
宗怡六　元綱三　頼暹三
盛長六　光長一　賢行一

何石第十

海もけさなきのは霞む宮路哉　心敬
はるは音せぬ松のはまかせ　勝元
永日に漕ぬる舟の遠く來て　盛長
月まていそくけふの旅人　道賢
雨はれて過る末野は露深し　通賢
鹿たちならす山もとの暮　宗祇
うつろへる尾花萩かえしとろにて　専順
秋のあらしの庭の寒けさ　宗怡
置初るまかきの霜のむら〳〵に　賢秀
雲まによはき冬の日のかけ　幸綱

たく柴やほすへきほともなかるらん　行助
あまのとる木はしほ屋にそある　元綱
所から須磨の上野は山かけて　常安
宮こゝろはいつもわすれし　頼還
別ての後は戀しさおもひやれ　頼宣
とはんといふもころを經にけり　能範
花の後紅葉の秋にうつるらん　勝元
露のわか身のたのむこの本　專順
幽なる栖にうつやあさころも　成胤
またねぬ方そ月は音せす　心敬
人はかつふけゆく夜半に閑りて　行助
かひまみしのふ中川のやと　道賢
二 つむ芹の根にあらはれはかひもなし　專順
春のゝ水にうつる松かけ　元次
長閑なる風には雪やとけぬらん　元說
わかしろかみのかさなるそうき　行助
末遠く君に仕へん身となりて　宗祇
としたけうちの神やまもれる　道賢
峯高み杖つく道のおとこ山　心敬
千代の坂をもけふそ越ぬる　勝元
曉につもるか鴫のもゝはかき　道賢

いく〳〵の月をみるらん　常安
秋風の窓のむら竹吹わけて　宗怡
すたれに萩の露そこほるゝ　行助
巻かへすふみや涙に孤〔[illegible]〕ぬらん　專順
いつはりのみの人のことのは　勝元
う 大方はいとへるたれも世に住て　心敬
つもれる老を猶いかにせん　宗祇
いそかれぬ日數に冬も又暮ぬ　通賢
うきいとなみの春ちかきころ　常安
返すへき田面に出るしつか家　幸綱
垣ほにまかふ梅も開けり　宗怡
鶯や千里の花にうつるらん　專順
水の聲のみかすむ谷の戶　賢秀
山住のさひしさひとり思ひ侘　頼還
たのまぬ人も猶そまたるゝ　行助
月ゆへにとはれやすると目もあはて　頼宣
野分のあとそ板まかちなる　盛長
秋更て急雨過る音はらし　元綱
三 空もとゝろにほとゝきす啼　勝元
夏くれはむもるゝ瀧のおとは山　宗怡
闕のこなたにかゝるしら雲　道賢

さむくなるけしきに雪やまたるらん　常安
さとよりいつる小のゝすみやき　行助
朝ことの都の市に立別て　〔　〕
こそりそくらす花のこのもと　心敬
春過きはひとりやすまん山の奥　宗祇
うき世すて行道なかすみそ　賴暹
墨染の袖になしてそよもぬれし　盛長
ねかふみのりに物おもふ人　勝元
彼佛たつぬる人も戀路にて　元説
はつせおろしの音そはけしき　通賢
近くなる鐘はしもにや更ぬらん　心敬
まくらに冴る曉の月　行助
うゆく舟の浪のまかちに袖かけて　盛長
みれは跡なるふるさとの山　元説
たかうへし松の老木になりぬらん　心敬
いわねの草ももみちなる頃　賴暹
しら露もあらぬ色にや置まよふ　道賢
むら／＼くもる野への夕きり　幸綱
啼虫のあるかなきかに聲はして　宗祇
人まつとしも月はおもはし　専順
詠ぬる心もしらぬ空はうし　心敬

哀をそへよ露のことのは　行助
おろかなる手向も神はうけぬらん　元説
社のつしにあそふ里の子　宗祇
かりそめのまことしからぬ占とひて　勝元
まつことありとおもひあはせよ　常安
名みる夢やわか行末をしらすらん　専順
こゆへきかたにあくる山かせ　宗怡
このねぬる夜の間に年は立かへり　元説
いそくにきぬる春のうれしさ　賴暹
比遲き花を衣にまつ染て　心敬
にほふかすみの袖の紅　常安
うしほひく湊の夕日落かゝり　盛長
くもるをたのむ松の葉の露　長壽丸
つれなきもとふへき秋の空なれや　宗祇
夜なかき床は君もいもねし　宗怡
あかつきのかけろふかへに時雨して　勝元
たかねのうちは雲そ行かふ　幸綱
富士の山たへすや風のめくるらん　行助
わくるは遠き武蔵のゝ原　通賢
う茂りてや猶たか萱の下みたれ　常安
ほたる火にくるゝ川かみ　宗祇

くたすらん鵜舟のかゝり影そへて　道賢
螢のたくなけむすほゝれつゝ　行助
御しめ引しほやの神の名もしるし　專順
こゝろをくめはめくみをそらく　盛長
數多し今もたえせぬ大和歌　勝元
冬のことはにこもるたのしみ　心敬

勝元九　道賢六　心敬十一

盛長六　通賢五　宗祇八
專順九　宗怡六　賢秀二
幸綱四　行助十　元綱二
常安七　頼宣二　頼遐五
能範一　成胤一　元說五
元次一　長壽丸一

行助法印眞筆をもて坂昌文しるす

續群書類從巻第四百七十七

連歌部七

太神宮法樂伊與千句 天文十二年(一本六)五月廿二日

山何第一

やとりとへ宮古そ旅ね時鳥　梅
月のみそらの夏深きかけ　能親
あさみとり日も夕立の水晴て　宗枚(牧歟下同)
舟ゆくかたの一むらの松　周桂
打けふる遠山もとや里ならし　永閑
くれていつくも分すなりぬる　壽慶
入相のひゝきも霜にさやかにて　賢等
かへるさ寒き道のさゝはら　元理
ウ さほしかのうちそよく野の朝風に　宗椿
たえ〳〵見ゆる霧の遠近　宗昆
そことなき山たしかなる月出て　宗貞
越へきみねをおもふかりふし　宗覺
かた敷の袖にや雨の殘るらん　玄周
きくかたちかきくるゝ川をと　家順(宗歟下同)
涼しさを水もうかふる風立て　能祐
舟はるかにもさし歸る見ゆ　直繼
入日かけ雲間のいつち消ぬらん　重阿
名殘さひしき鳥の一聲　宗枚
春來ても難面き花の冬籠　周桂
雪の下なるそのゝ梅かゝ　永閑
袖に良明方かすむ夜半の月　壽慶
二 わかれをしれは夢の行末　成意
人にうき命の何かおしからん　元理
とわれやするとたえてこそ見め　宗椿

忘れても恨やらしの夕へまて　能親
すてし身をゝく山陰の庵　賢等
つれ〳〵の詠めに心なからめや　宗昆
秋來るかたはいつこ分方　能親
おなし枝に梢の月のうつろひて　宗枚
花こそちらめ萩のした露　宗貞
かへるとも野寺や見えぬ暮ならん　周桂
ほそきなかれの水しろきかけ　玄周
打かはす翅靜に鷺のねて　永閑
ゆくゑ日のさす山きわの雨　壽慶
朝かすみ立もつゝかす吹風に　宗覺
ウ殘るさくらそむら〳〵になる　元理
折やつす人をや花もかこつらん　永閑
すゑの春とも知らぬはかなさ　能親
世は遠く別にけりな法の道　壽慶
ひとつ蓮の契り斗か　宗枚
日暮しの聲きくからに下待て　玄周
月にのみとや見えてやすらふ　周桂
誰すみてはらひもやらぬ露の宿　賢等
外なき物か哀あさちふ　壽慶
暮毎のみねの山風吹しほり　能親

やすくはあらし眞柴取袖　能祐
この浦の侘てふ名こそ知からめ　宗枚
身にかきらすはよしやさすらへ　永閑
歸るへき道は心の月日にて　周桂
老をなくさめ越る年波　元理
ニ大方は君にそ祝春ならん　宗貞
ほとけのためのの若菜つむ袖　宗枚
古寺の前野の霞今朝分て　永閑
はしに落行山したの水　壽慶
あまた見し小川の末のなかれ相(合)　能親
みなとをせはみつなく百船　賢等
語ふや月にならふる旅枕　元理
夜さむのとなりいつれ侘しき　周桂
打すさむ方も定めぬ麻衣　宗昆
暮行まゝの山深きかけ　能祐
花さそふ嵐のほとを雪にみて　宗枚
身もけふこすはと斗の春　能親
日は永く玉のをゆらく友なひて　壽慶
是や藥と霞をそくむ　周桂
ウ尋ても蓬か島はうとかれや　元理
夏冬しらぬ竹のよの中　宗貞

侘はてゝ只蘆つゝの薄衣　壽慶
今更いとふうら風もなし　宗昆
かきならす書を泣音の明暮に　周桂
又や見すしも返す一筆　能親
盡得ぬ心の限いかゝせん　宗覺
さとき學そうらやまれぬる　永閑
齢のみ友とはいへともならて　宗枚
立別れぬる鶴のこゑ〳〵　賢等
雁あさる汀風吹よる波に　永閑
いろなき松も秋の海面　周桂
海士もやは月にみるめをとめさらん　能祐
けふる朝氣の遠方の里　宗枚
知らさりし栖もあれや山のをく　能親
ひとり憂身といとひ行道　壽慶
終にはたおなし心になりもせて　賢等
つゝむ涙に名はもれにけり　宗枚
いさめしを人になとおもひみたるらん　永閑
又やはと世そ君にしたへる　周桂
おさまれる今此時そためしにて　元理
秋のひかりを一夜見し月　壽慶
七夕のあかぬ別のいか斗　玄周

露はむなしき玉ゆらの道　能親
種と其なる言葉や稀ならむ　周桂
うちたのめつゝすくる折〳〵　宗昆
つれもなき心は早晩を絶なれや　宗枚
うへてまつとし人やならはす　元理
庭毎に一木の梅の陰しめて　能親
春またさむきうくひすのこゑ　宗椿
谷の戸や氣色斗にかすむらん　永閑
夜を明やみを又うつるそら　能祐
ね覺朶早晩は有とも初時雨　宗貞
秋の名殘や月にとはまし　宗覺
分馴し野への道芝うらかれて　周桂
千年のこゑは松かせの時　宗枚

梅一句	重阿一	能親十
賢等六	玄周四	宗枚十二
元理八	家順一	周桂十二
宗椿三	能祐六	永閑十
宗昆五	宗覺四	壽慶十
宗貞五	直繼一	成憲一

何人第二

橘は花に散はてぬ匂ひかな　壽慶
面かけのみか行ほとゝきす　賢等
引すつる外山の雲に月おちて　宗昆
めくる軒はに秋の初しも　宗枚（牧歟下同）
枕かる野はうら枯の草の戸に　元理
嵐もよしやたひのころもて　永閑
宮古とも出立きはやおもふらん　周桂
相へき友も又いつのそら　能親
ウ あすはとて契もあたら花の春　宗貞
くるれは歸る鳥の音そする　宗椿
靜なる山や霞のうちならん　能祐
人にしられぬ宿もとめてよ　玄周
心にもおもひとらはや身の向後　宗覺
哀はかなき月日をそふる　直繼
忘らるゝ便なりせはたのまめや　成憲
あやしきほとの秋風のくれ　壽慶
白露に玉の緒かゝるいと薄き　賢等
萩はねにける在明の影　元理
夜もすから何を松風愁ふらん　永閑
今は夢たに稀のふる里　周桂
更に又忍ひし人もむかしにて　宗枚
なみたの外はいさ老のとも　能祐
ニ 嬉敷も憂も唯なす其心　能親
ゆるすと葉の末そ難面　宗覺
三年先後も思はすうら馴て　周桂
のりのみ山の苔のさころも　宗枚
薪こる道朶暮れ鐘の音　元理
をちかた人や行もとまらぬ　宗貞
宿とするかりなる陰も稀なから　壽慶
からすうち鳴木々の冬かれ　永閑
霜しろき月の明闇靜にて　宗枚
灯床しまた殘るかけ　宗昆
打かわすねしよ隔ぬ袖のかに　周桂
今一たひのつらき心よ　賢等
有増をすゝむるきはや秋の風　宗貞
ゐるへき山かをしか鳴之　元理
ニウ 露木葉もろくなる陰道もなし　能祐
身にしめけりないほの夕くれ　永閑
月よ只誰か笛の音に澄ぬらん　能親
忍ふと云は來る夜ならすや　壽慶
夢路にも更は生なん忘草　宗枚

よしかるゝとも終てたにみん　宗昆
あわぬ間の憂に心をならはして　成憲
いとひもはてし船の波風　能親
冬去はおもひやるたに旅の空　宗椿
今こむ人の行衞きかはや　周桂
山路をや都の花に忘るらん　壽慶
咲てさくらのかこふ柴の戸　永閑
とわる共世を鶯のこたへせよ　玄周
ニ如何にわかれも知らぬしのゝめ　宗枚
待空はなみたも更に夜るの雨　賢等〔宗數下同〕
月にさはりのおもひくやしも　家順
女郎花花の上より霧立て　宗枚
秋の野らとそ里は荒ぬる　能祐
陰ちかくしめしやとりの山おろし　周桂
とをより浪に船のたゆたふ　宗貞
浦人の歸るさまよふ鹽みちて　永閑
眞砂は霜の置わたす暮　宗覺
遙なる松一村やくもる覽　宗昆
分る草葉もたえぬ夏の日　壽慶
いつしかに月は秋待袖の上　周桂
木々もや染んころもかり金　元理

常よりも夜寒の風の朝またき　宗枚
妹にわかれし露は涙か　玄周
ニウいかにして云ひもまかえん物おもひ　宗椿
あらわれてやは後はとふへき　能親
おしへしを我おこたりの文はうし　宗貞
よはひたけてそさひしさもそふ　永閑
落瀧津岩根ふみ來る吉野山　壽慶
水のみなわのしはしなる身よ　周桂
鳰の浮巣片よる波こえて　玄周
道はかよひもたゆる五月雨　宗枚
黑髮の分てつたゑん人もいさ　賢等
馴ぬこゝろはいかてたのまん　元理
大方のみるめの行ゑ跡もなし　壽慶
おもひ返は雲そあたなる　永閑
花盛數より外のすさひにて　能親
名鞠にやかせの長閑けさもそふ　周桂
打むれてくるゝをおしむ苔のそて　元理
都ほとりの野へのゆきかひ　能祐
世離てゐるは稀なる佐峨のおく　能親
たゝにもたれか聞鐘の聲　宗昆
みそれふる日をつれ〳〵の詠めして　周桂

あしたも分ぬ冬の夜の雲　寿慶
常磐木の陰ほのくらき山里に　永閑
神さひわたる道の一すち　宗枚
もとめ行蝉の小川の水の音　寿慶
秋のなかれの月そ涼しき　賢等
露は只浮草なからおき留て　能祐
誰か袖の野を過かてに帰るらん　宗枚
たゝよふ方の霧のゆふ風　周桂
御幸の跡のよゝのふる道　宗貞
ウ見す知らぬゆかりを今に残きて　宗覺
結ほふれたる心なにそも　玄周
又よとは終にかきらぬ新まくら　永閑
一よの夢に身をもなせとや　宗枚
思ふ事春はいさやの年暮て　寿慶
木々にかつ咲花のしら雪　周桂
吹すさふ昨日の風の寒かへり　能親
霞のうへの山のさやけさ　元理

寿慶十一　周桂十二　宗椿四(賢歟)
賢等六　能親八　直継一
宗昆五　宗貞六　成憲二
宗枚十二　宗椿三　家順一
元理八　能祐六　永閑十
玄周五

何船第三

分て見む光のかけや夏の月　永閑
かせの涼しきうたゝねの空　宗椿
桐の葉に雨すさふよの音はして　玄周
とすのほのかにかゝるあさ露　能祐
面影にみね飛鳫や移るらん　寿慶
入江の山の水のさやけさ　周桂
沖津より夕日をひたす波寄て　能親(牧歟下同)
ウ跡もとゝめぬ雪のむら雲　宗枚
嵐吹おとや槇の外ならん　元理
うち見る夢のそこはかとなき　賢等
たとりこし方は幾野の草枕　宗昆
我すむ山と行も定めむ　宗貞
入あひの鐘近なる古寺に　宗覺
漸くれそむるともし火のかけ　重阿
帰るさも釣する船やしらるらん　成憲(宗歟下同)
芦へはるかの波のうら〳〵　家順

此朝いつく鳴たつ田鶴の聲　宗椿
八重に霧ふる小山田の原　永閑
人はたゝかりにたに來ぬ秋更て　能祐
うらみにむかふ在明の月　壽慶
待侘てけふの日暮す花の陰　賢等
おしまむ物を春の一とき　元理
よりあはゝ長閑き心かたれ友　能親
老のむかしは知るも稀なり　玄周
蓬生の松とや來鳴時鳥　宗枚
かくは今朝しも菖蒲ふく宿　能親
君かねし淀野は跡もなつかしみ　宗貞
とわに忘れぬ面かけそたつ　周桂
天地にみてる斗もこひわひて　永閑
中〱なりや人もしらなむ　壽慶
なきになす身は山なから淺はかに　宗昆
すつるとならはおなしよもなし　宗枚
とき置し法のまに〱任てよ　賢等
ねかふに罪の消さらめやは　永閑
見るからちに雲をはなるゝ月澄て　能祐
ウ時雨し比のよはの秋風　元理
鹿の音に又もや覺る夢ならん　壽慶

山遠からぬ里の一むら　宗覺
けふ毎に爪木の道しかすかにて　玄周
つもるか上の雪そうちゝる　宗椿
音せぬは波やかつ〱こほるらん　周桂
くるゝ岩尾につなきをく船　能親
海士人の細のかけ繩引上て　永閑
かへる方とや目もはるに行　宗昆
飛消る鷺の翅のたえ〱に　重阿
むら〱青き風のした草　宗枚
霜枯の梢花咲時はきて　周桂
春にやつらき身をも忘れん　能祐
月影の涙の外もかすむ夜に　宗枚
二いかてかやすくとれる手枕　元理
かこちつゝ侘つゝあかす心にて　能親
そのまゝ暮る草の戸の雨　宗貞
苅はこふおしね露けき麻衣　宗覺
小舟さほさす秋の澤水　賢等
山陰の床定まらぬ鴫鳴て　壽慶
立まよひたるかせのむら霧　能祐
月のよを待てや空も晴なまし　元理
行方ふかくくれかゝるみち　周桂

花のかもうちしめりたる露分て　宗枚
つむ手にあかぬ野への若草　永閑
古里は霞そゆかり事とはん　周桂
きえこそ憂身うらやましけれ　壽慶
さりともとおもふ心の終もなし　宗椿
はかられ來るあたのことの葉　宗枚
二ウ
こたふるはきつね木玉の栖にて　賢等
誰かあとならしすこく荒たる　永閑
一度の本のさかへも知るかれや　宗昆
いかなるたれか歎きとはなる　宗枚
更に世やこり終つゝも出さらん　能親
山より深きところしられき　壽慶
わたつ海の末にいさよふ夜半の月　周桂
浪の上なる霧のさひしさ　元理
あき風にふかれていつこむら千鳥　永閑
そのゝ木のみそおつるをとする　壽慶
日影さす霜の雫や曇る覽　宗枚
ひま〳〵さむき軒のわひしさ　能祐
明やらぬ物かと斗獨ねて　能親
名
夢もたへつゝおもひする比　周桂
馴行はいかにと磯の波枕　宗椿

新島もりのあへすかなしき　永閑
なす事や誰か科ならぬ戀ならん　玄周
おとす文にそいさめをもしる　宗枚
君か代のすなをなりしを學きて　賢等
下からもまて時は分てき　周桂
植わたす其神山の大御田に　壽慶
片岡野への夏深きかけ　能祐
行跡も鹿子またらに見かくれて　宗枚
去年の名殘の雪そかすめる　宗昆
花の色は木〔の脱歟〕めにこもる春さむみ　宗貞
さえつる鳥やおのか明ほの　周桂
人も只おもひ入れたる詠めして　能親
おなし心にうちわたるらん　元理
ウ
夜な〳〵の夢の憂橋うつゝかも　玄周
今そたひねのみねのよこ雲　宗枚
おほけなく片敷月のかけ更て　宗疊
露打はらふ墨染のそて　永閑
人による夕はつらきあきならし　周桂
かこふかきねのきり〳〵す鳴　壽慶
なてしこの一花さける冬草に　能祐
こゝろをそめはやまと言のは　能親

永閑十　能親九　宗覺四
宗椿五　宗枚十二　重阿二
玄周五　元理七　宗順一
能祐八　賢等六　成憲一
壽慶十　宗昆六　周桂十一
宗貞四

何路第四

五月雨の汀や天津空の海　周桂
雲居る木すへ水鷄鳴山　能祐
櫻咲宿の戸口に夜は明て　元理
かせふく外面月そのこれる　賢等〔牧歟下同〕
露見れは幾村となくさむきのに　宗枚
かけやひとりの松虫のこゑ　壽慶
道野への往來かきたえ日はくれて　永閑
遠くそきこふ入相のかね　能親
ウ
かすかなる栖やたれと分さらん　宗覺
あし火のかけに夜は更にけり　宗昆
かり衣ぬれ〳〵雪に明しわひ　宗貞
しはし折しく小野の下柴　宗椿
涼しさをなかるゝ水の色に見て　玄周
暮てほたるそ月にきへゆく　重阿
待人におもひはいとゝそふもうし　成憲
うらみあまたのたれをとふらん　周桂
二道の便は賴みはかなしや　賢等
かへりやせましふみ迷ふ山　元理
尋ぬるも峯の白雲花ならて　壽慶
春や今はたすきたてるかと　宗枚
ほのかなり心のくまか鳴千鳥　能親
入日かくれのさほの川面　永閑
笛の音の遠くなり行舟さひし　能祐
しらぬすへのゝ秋の一むら　壽慶
あたらしや賤か薗生の花薄　永閑
虫鳴月の在明のそら　宗枚
歸るさは涙くらへむ袖もなし　宗昆
あやし〳〵も尋あるくれ　周桂
あた人に心置れしうき契　玄周
我家さくらそれもうつろふ　能親
春は唯花に旅立山とをみ　元理
かすみやこゆる相坂の關　宗貞
氷とく波もて知るき音羽川　壽慶

さしのほる日にわたるあさ風　能親
行方もまた殘ある月澄て　周桂
あきの限はうかれ朶せめ　宗牧
ウ夕暮はたかなをさりの荻のこゑ　永閑
さわくこゝろそ松にたへたる　宗覺
つゝむにもあまる色やは見えさらん　宗昆
云ふにしよらはうちとけんとや　能親
やとりとふ哀のほとは知りつへし　宗椿
山ほとゝきす雨のよすから　宗貞
橘や月におとらぬかけならん　宗牧
かたらふ夢のいにしへの人　周桂
誠をもおもひ返せは浮世にて　能親
錦もよしや苔のころもて　永閑
古郷を猶遠さかる年〳〵に　玄周
雪にはいとゝうとくこそなれ　賢等
跡はかも見えぬを憂か心にて　壽慶
まきらわす文よ如何にことわる　周桂
二我身にや恨は又もかへる覽　能祐
待てふくれは大淀のなみ　能親
名殘をは忘ぬ物よ鴈の聲　宗昆
夢にかへたる春のあけほの　宗牧

世もよしちらすて花や有はてん　宗貞
かせの上なる露のむら草　永閑
空をのみあゆむに似たる霧中　周桂
秋すさましき峯のかけ橋　賢等
山陰の猿啼夕月いてゝ　元理
こりしく岩尾いくつ共なし　能親
松の葉のしろきは霜の置ぬらん　能祐
よはひたけたる神の宮人　宗貞
行末は祈る心をためしにて　宗牧
あわさらめやの契り成りける　壽慶
ニウつこふるをさはりの中はたえね只　永閑
おもふにつけてつらさもそゝふ　宗昆
ひろひ置く君か言葉數〳〵に　賢等
つたへし風やよゝにまされる　宗牧
深緑松の木たかく春はきて　周桂
殘るもおなし野への泡雪　壽慶
霞つゝ有かなきかの今朝の月　能親
夜をこめ出る舟そはるけき　宗覺
呉竹の伏見の枕おき別　宗牧
とはゝいつはた此宮古人　元理
過來しを物床しけに打歎き　玄周

目をしのにいつむかふ暮かた　能祐
老はたゝ誰におふせてこふるらん　宗貞
おもへはかなきおもひならすや　永閑
名さゝかにのくへきも知らぬよひ〳〵に　壽慶
をり〳〵風の軒はふくおと　宗椿
あやしきは花に先立こゝろにて　能親
春の行手に遠き青柳　宗枚
あさもよひ霞の岸の舟よそひ　周桂
大江の波のうち出るこゑ　元理
月見れは西なる山にほのめきて　能祐
今はの秋のいつの間のそら　永閑
消んとや我か戀初し袖の露　宗枚
まつこん人にうつやさころも　賢等
旅行はなくさむ方も有つへし　宗昆
鹽干の磯の遥なるみち　周桂
立よらん水さへ稀のあつき日に　宗貞
野はくらしてや駒もかうへき　元理
ウおなしくはねても歸らん櫻かり　宗枚
ぬるともよしや春雨の露　宗椿
草の庵霞間原にふきかこひ　玄周
風の行かふ程そしらるゝ　宗覺
秋もまたけふはおほえぬ袖うすみ　周桂
つまはいつとか匂ふしら菊　壽慶
たまさかの友は月さへ影澄て　永閑
引合たる魚のかたらゐ　能祐

周桂十一　永閑十　玄周七
能祐八　能親九　重阿五
元理七　宗覺四　賢等六
宗枚十二　宗昆六　宗椿四
壽慶九　宗貞七　成意一

三字中略第五

竹の葉の螢は星のはやしかな　貞治
夕立雨に淸き川かせ　壽慶
朝明の山きわ近き船見えて　宗覺
のほるひかりのたかき水上　永閑
やすらふや柴坂道も忘るらん　能親
誰か袖分ぬ花の一もと　能祐
梅かゝはかきねの月にあくかれて　玄周
くれ深くなる鶯のこゑ　成意
ウそこはかと見えぬ霞の谷のとに　重阿

雲ゐや知るへおつる瀧浪　周桂
深行も秋の色なき秋の聲　宗牧（牧或下同）
みとりなからの野への露霜　元理
松虫のかけ村々にうらかれて　賢等
うきを忍ふもあわれ何なる　宗昆
今は只空頼めこそこひしけれ　宗椿
あまりに契る中のあやしさ　宗貞
千年もと人におもふをならひにて　壽慶
おさゝたるよを誰かあふかぬ　永閑
御調にや國のとめるも知らるらん　周桂
幾春秋をこむるこの殿　宗枚
めかれせぬ砌木重く猶なりて　能祐
いつる湧水はむすひあかれし　賢等
一露雫袖に求る月のくれ　元理
夜は永々しいつら人かけ　能親
鳴さすもおもふ便かきり／＼す　宗覺
まかきのあらし吹しほるころ　宗昆（宗或下同）
山はるゝ時雨は殘る空なれや　家順
かたへひはらのみれの冬枯　壽慶
又見るも花の咲へき春ならて　能親
後の彌生の暮のさひしさ　元理

何方にもさそへ霞と立わかれ　能祐
雲にやのらん世の外の道　宗貞
車をもかくる斗に身は古て　宗枚
悪をたにもうけむほとかは　永閑
時に相契おもへはうらやまし　玄周
忍ひしつかひふりはへて見ゆ　周桂
一ウ往來もやとたへて月に立出ん　宗椿
鹿の音そへよ手折る紅葉は　宗枚
吹送る秋の野風の身に入て　賢等
夕露わひし深草のさと　永閑
雨もよにこゆる小幡の山遠み　周桂
日かけそいつち雲のむら／＼　宗覺
俄にも波立かへるあま小舟　宗貞
うらめつらしきなかめせよとや　元理
常よりも文に一筆書そへて　能親
おもふに似たるうらみ成けり　玄周
泣音をや戀の山ひこたふらん　宗枚
妻こめてこそゆくほとゝきす　壽慶
横雲もおしめる月の深よに　周桂
あきは霧さえ哀とやみむ　永閑
一槙の葉のいつ共分ぬ露落て　壽慶

苔ふみまよふおくのふる寺　能親
くみて其曉まてや憑むらん　永閑
さかつきにたれ別れひかふる　周桂
梓弓心つよさもいかはかり　宗枚
とりかへされぬおもひくやしも　能祐
相見しはありしなからの袖ならす　能親
我も年ふる道のたひ人　壽慶
友なふを越行山の力にて　永閑
雪を委にからす飛影　宗覺
ちらはとて木々の葉風やさそふらん　元理
うすき命を忘れやはする　周桂
さりともの夕を待もよはらめや　宗枚
面かけのみかうたゝねの夢　賢等
ウ宵の間をほのかに月や出ぬらん　宗貞
むら雨涼し下荻のをと　宗枚
日暮しもまたとゐあへぬ山里に　能祐
それと云ふへく何かさひしき　壽慶
我なから忍ふ心の折にふれ　周桂
うき一きわに捨るよもなし　玄周
幾千たひ有増毎になしつらん　永閑
おもひたへよのつてのはて〳〵　宗椿

此夜比たのむ夢たに鐘鳴て　壽慶
花の名殘の山のはの月　宗枚
身にしめてかなしふ春の木本に　宗貞
とちめし霞けふも過けり　周桂
天津風雲吹音のさやかにて　元理
今かり衣はるけくそおもふ　宗昆
名淺茅生も住來し跡と立歸り　成憲
こゝろも露にやとしてや見む　能祐
なからふる浮身の秋と忘るなよ　宗枚
とふをすさひのふる里の月　永閑
奈良の葉にそよめく風の山越て　壽慶
ふもとの野へに迷ふ初霜　賢等
袖さむみ夕の鐘やひゝく覽　能親
浪のいつくそさし歸る舟　周桂
かた〳〵にもしほのけふりたなひきて　宗覺
わりなの末やおもひ馴なむ　宗枚
とはるゝも夢かと斗おとろきて　宗椿
雨風のよのひとりねのとこ　永閑
なる神を胸のとゞろきしつまらて　能祐
ウ暮行野へそたとり終ぬる　周桂
草高き幾一村になりぬらん　玄周

木する花咲森のした露　賢等
積れるは跡も洗の雪とけて　元理
釣する舟の霞漕見ゆ　壽慶
山懸てなきたる波の春風に　周桂
高ねの朝日うつろひそ行　宗枚
つれ／＼と秋の時雨をとをす間に　能親
いつしか小田は色付にけり　宗椿

貞治一　賢等六　壽慶十
玄周五　宗昆三　宗覺五
成憲二　宗椿五　永閑十
周桂十二　宗貞五　能親八
宗枚十二　家順一　能祐七
元理七　重阿一

何垣第六

夏草はひま求へき風もなし　宗貞
秋待露に忍ふ虫のね　宗枚（牧歟下同）
から衣在明の月立あかて　永閑
かりねの夜さむさそなそふらん　壽慶
玉鉾の道の紅葉は陰深み　周桂
山かさなりて雲そ重なる　賢等
嶺にまた時雨の雨や殘ろらん　元理
かたへは積るけさの白雪　玄周
ウ去年今年更にわかるゝ空としれ　能親
見えこしや只春の夜の夢　宗覺
月もいつ長閑になれむ草枕　能祐
夕の野風吹捨ぬころ　成憲
幾度か心いらるゝ萩か花　直繼
人待宿に秋そうつろふ　宗椿
折／＼の露のよすかも道たへて　宗昆
忘れやすると程も經にけり　宗貞
さぬる間のよはも命に成ぬらん　宗枚
たえかたくのみ恨こし中　周桂
哀しれ花散春の殘らめや　壽慶
かすみおなしき日數成けり　元理
昨日今日風寒歸る音はして　賢等
釣の小舟もまれのうら波　永閑
ニ暮ぬれは螢のたく火見えかくれ　能祐
月待と哉覽空の涼しさ　宗覺
山のはゝまた初秋の氣色にて　玄周
すそ野の露や我か袖のうへ　宗昆

名にたてるかこともつらき藤袴　宗枚
何かはきけむかへる物ゆへ　壽慶
一年やさなから旅の春のかり　永閑
彌生もさめぬ夢のあかつき　宗貞
跡とめぬ花の枕に鐘なりて　元理
かつは驚き身をや忘るゝ　能祐
憂に有迷ひさとりをいかゝせん　周桂
打まかせつゝとく法をきけ　能親
うらやまし山寺近き柴の庵　宗椿
水草清き道のかへるさ　宗枚
ニウ薪おふやせたる駒の行やらて　永閑
朝市人哉くるゝまて見る　能親
神まつるけふに相ぬる三輪か前(崎)　宗枚
初卯花や木綿かけてさく　壽慶
布さらす垣ねつゝきの里遠み　賢等
賤屋のあたり日もかすかなり　玄周
打けふる末葉の竹に雨晴て　元理
ほのめきかわす秋のいろ草　周桂
鈴虫のふりはへて鳴この夕　能祐
身に入かせの便たになき　宗枚
槇の戸の月を難面くさしこもり　周桂
問ひ行いつかまたるとは見し　壽慶
此方こそ浮あた人のへたつらめ　宗貞
來よの道はたとらすもかな　永閑
ニ生たにかわらまほしく疎にて　宗枚
ならん佛よおもふともやは　周桂
草木こそおのつからなる心なれ　壽慶
おしへしたれもあらぬ春秋　賢等
哀にも古巣のつはめ行かへり　宗昆
日なかきいほりおとつれもなし　永閑
雨そゝきあまりなる迄うち霞　能祐
目路にはまたき老や來ぬらん　能親
ゆるさるゝあやの色々打はへて　宗枚
さすらふる身の歸る出たち　永閑
馴ゐるは都の外もむつましみ　宗椿
空やはかわる秋のよの月　壽慶
我か上の露朶わけてかなしけれ　周桂
おもひ草てふいつかうへつる　玄周
ウ憑ても徒になる道ならし　宗覺
こゝろの奥はつゐに見さりき　宗枚
其里と忍ふ斗に年舊て　能親
卜置まゝに遠き山もと　宗昆

暮毎の鶯やねくらに歸らん　賢等
淺澤水のすゑのさひしさ　直繼
花のなみしつへに又もよせてさけ　周桂
重くかゝるを只松のふち　壽慶
吹とたにいさ白露の春の風　元理
霞のうちのてふのたはふれ　宗貞
足ふみも靜に鳥の舞出て　永閑
をしみ歸さむ入日とそなき　能祐
鐘の音夜を待月の薄霞　宗枚
きりのいつくか行てねんかた　周桂
打なひく初花すゝき枕かせ　壽慶
間近く聞かむ佐保鹿の聲　宗椿
すむ人の憂世に遠〔へ歟〕き岩かくれ　賢等
苔のみつらをゆつるうはそく　周桂
更にたゝ朽木をおのか姿にて　宗貞
色よにほひよ梅のあやしさ　永閑
鶯のほの〳〵鳴てあくろ夜に　宗枚
春をしらする谷の戸中　能祐
氷居し瀧津瀨のこゑなかれ合　重阿
かせの涼しく水上の雲　宗枚
月しろき空に夕哉分さらん　周桂

やすらひつゝく袂露けさ　壽慶
秋を身に憑み初るも何なれや　元理
淺茅か原と里はあれ行　玄周
過かてに詠めこそおれ宮所　能親
たふとき神の前の灯火　永閑
つふ〳〵とすゝくり返す夜もすから　能祐
しはふく聲も友とならすや　宗貞
昔見し便斗に云ひよりて　周桂
かわりやすると心をそおく　元理
面影の花に立舞朝ほらけ　宗枚
松はみとりにかすむ山〳〵　宗覺

宗貞七　宗枚十二　永閑十〔衍歟〕
壽慶十二　能親四　能永四〔四歟〕
周桂十二　宗覺四　宗昆
〔賢歟〕堅等六　能祐六　重阿一
元理七　直繼二　成憲一
玄周五　宗椿四

唐何第七

空蝉のは山をいろの夕日哉　元理

しけみのさゆり花かほるころ　成憲
露は先ならす扇に置初て　周桂
枕更ゆく寐屋のしつけさ　能親
秋さむき月に埋火消残り　玄周
きぬたの音もかすかにそなる　宗昆
出て見し方を隔る霧降て　宗覺
かへりみすれはそことなき空　能祐〔牧歟下同〕
ウ誘引る心や春に任す覧　宗枚
けさのあしたの鶯のこゑ　賢等
年越るしるしや何の雪の中　永閑
たてりてみねの松そふりたる　壽慶
澄のほる音も夜わたる鐘さへて　重阿
野寺さひしき暁のみち　直繼
遙にも水汲なるゝ月のかけ　宗椿
待得しけふの天の川浪　宗貞
薄霧の衣ぬれ〳〵引別　能親
知らぬ向後も名残なしやは　周桂
立出て詠る暮の遠近に　永閑
ひとりかへ覧栖わひしも　宗枚
哀にも花散はつる鳥の聲　賢等
暫しは春を残してそとふ　宗昆

一 霞む夜の夢の半にあけ初て　元理
忍ひ苦しくなれる別路　永閑
相見ての後のつらさよ何ならん　能祐
忘れむとせはわすられもせし　宗覺
恨有世朶便の山のかけ　壽慶
おもひ出なるこゝろ知らはや　宗椿
大方〔屋脱歟〕の詠めくやしき秋の月　宗昆
浦の笘の露の夕くれ　元理
旅人の袖過やらぬ霧の中　宗貞
知へなしとや道まとふ覧　成憲
目の前に有も得かたき御法にて　周桂
いかなる色そ松にふく風　宗枚
子をおもふ聲侘知らのよるの鶴　能親
一ウ憂はね覺におほえさらめや　永閑
取あつめ古今の我か泪　能祐
けふりになせる文の哀さ　周桂
くらへ見は早晩か命の惜からん　能親
たけき心〔まねけは歟〕のあらそひの庭　元理
入日たにまたねけ歸るためしあれや　宗覺
かくるゝ月にかこつ天のを　宗枚
霧深きおくより出る笛のこゑ　賢等

秋の岡への眞草苅らん　永閑
寒る野のあたりの流舟さして　宗枚
鶯く鴈の羽風こほれる　壽慶
雲は皆時雨にうつる朝な〱　玄周
花の干しほは日影にそ見る　周桂
去年よりも匂ひし立枝梅咲て　宗枚
春のやとり哉人もとはまし　壽慶
二 さひしさの何にまきれむ秋のくれ　宗椿
戀するのみか袖の露けさ　元理
物おもふ我やは月にはちさらん　永閑
おきてみねてみ待ふかすころ　能祐
面影の實も夢の中にして　周桂
山ほとゝきすあやな一こゑ　重阿
盛なる花橘のあさ夕に　能親
むかしの人のしたはれそする　賢等
神なひや別馴にし跡とめて　宗枚
春行川のかわつ鳴なり　壽慶
關入るゝ苗代水のはるけきに　玄周
日をふる雨のかすむ山本　宗枚
靜にも川さす庵りすむや誰　永閑
道はなき迄八重葎せり　能祐

一ウ 問ふとたに知らは秋をも隔なよ　能親
忍ふや霧のまかひならまし　元理
月も猶しのふるからに宵更て　宗貞
もよをしかほの松虫のこゑ　宗枚
ことさらのしらへは何にまきれなん　壽慶
なすてふ能そ人にこえたる　周桂
捨る身はおろかなるしも便にて　賢等
おしへのまゝの道はまきれす　元理
つきにける家〱知るく榮へきぬ　周桂
ときもおそきも九重の花　壽慶
尋行心やおなしやま櫻　宗枚
翅はなれぬ蝶鳥のかけ　永閑
いつの誰又古里に生るらん　周桂
むくひにかゝるうらみ成けり　宗覺
名 はかなしや思ふをおきて物おもひ　壽慶
旅はひとりそいとゝかなしき　宗椿
かりねとふ夢はいつくにかへる覽　能親
夜はまた深く月たかき空　能祐
秋風に木綿付鳥のうち侘て　永閑
霜結ふやとすさましき袖　宗枚
ありて朶立暮しつれ眞萩原　宗昆

いつの尾上の宮かふりぬる　周桂
山道やとふへきもなくふみたえて　元理
あふ人まれの雪ふりにけり　永閑
千年をも延るよはひの白髪に　宗貞
おこなひなるゝ聲もえならす　周桂
百敷や行かふ氣色夜を重ね　宗枚
こもれるいみの日數をそ待　賢等
ウ長月や別近つくゆふはらへ　周桂
又來秋やたれもたのまむ　宗覺
露の間と云ひし斗の程をへて　元理
かくしもおかんとたへとはいさ　能親
戀しきは見るか中にもなからめや　壽慶
こゝろかたきの常ならぬ人　永閑
歸るさの眞柴に花を折そへて　宗椿
家つとなれやみねのさわらひ　玄周

元理九　能親八　玄周四
成憲二　周桂十二　宗昆四
宗覺四　永閑十一　宗貞五
能祐六　壽慶九　直繼一
宗枚十二　重阿二　賢等六
宗椿五

何木第八

風を手に心としむるあふき哉　能親
ほたるに深す袖のやすらひ　重阿
夏の夜の夢路程なき秋はきて　宗貞
むすひもあへぬ露の明ほの　元理
槿のまかきの霧のうちしほれ　賢等
そのゝいつくもいろかわるころ　宗枚〔牧歟下同〕
山懸て夕の月やてらすらむ　能祐
しつかなる江の遠き水かけ　壽慶
ウ釣人のねふれる小舟横たはり　永閑
あたらかけにも降つもる雪　周桂
出る日の朝氣の霞打はへて　宗昆
春に行かふ袖のいろ〳〵　宗覺
花さけは山里ならぬ音信に　成憲
こゝろに殘る庵のつれ〳〵　宗椿
忍ふ共あらぬ昔のうかひきて　玄周
月にこほるゝ涙あやしも　能親
早晩の間〔か歟〕に憂秋風の立ぬらん　宗枚
きのふるおしき野への白露　賢等

憐にも草葉おしなみ霜枯て　永閑
來へき宿の使たになき　周桂
旅居にやおもはぬ程の日をも經　壽慶
よせては歸る波の舟人　宗貞
二 磯近き夕の雲の山たかみ　宗覺
雨ふきはらふ松風の音　能祐
花少木すへの露の名殘にて　元理
しつかにねたる蝶のさひしさ　永閑
跡は誰かほみし春もなき物を　宗貞
我か身ひとつの何のこるらん　宗枚
いとゝよに有にもあらて出もせて　能親
目覺て秋の先そかなしき　壽慶
袖をなと月のしほるとかこつらん　周桂
風野分立おもひするころ　玄周
虫の音のかれ〳〵になる人こゝろ　宗椿
まつてふことも今よりはいさ　宗昆
有へはの有增もはたはかなくて　宗枚
二ウ 遠き別のいつかへるらん　周桂
一聲に絕し雲ゐの郭公　元理
みしかきよはの夢のうき橋　宗枚
曉のねぬる間もなきおこなひに　賢等
手枕ちかき貝鐘の音　永閑
相見るも相時にせん空なくて　壽慶
うちとけかほに殘言葉　宗貞
媒のあまたの心いかならん　周桂
我こそまたき憑み初つれ　永閑
あらすなよすまさらめやのみねの庵　能祐
たゝ雲風に跡もおくれし　壽慶
時雨にもいつやと月や待もみん　宗枚
ふけ行音は木のは成けり　周桂
佐保鹿の妻戀さはく道のへに　玄周
秋の日くらし詠めする人　能親
三 霧にたに立まきれてもとはゝとへ　宗貞
ぬるともよしや露とこたへん　成憲
おもふには身をしるかほもみえしたゝ　周桂
おわぬをしたふならひやはなき　壽慶
道も其心さし朶まれならめ　元理
花にのみ入みよしのゝやま　永閑
白雲の尾上の松も長閑にて　宗枚
春を友なふまな鶴の聲　宗昆
船うけてけふもくらせる池水に　能祐
ほのめきそむるさゝ波の月　宗覺

この比や相瀬も知ろき天の川　能親
玉しく露に風わたるなり　宗枚
ちりをたにすへし砌の朝清め　賢等
神のこゝろにかなふよやみむ　周桂
ニウ 憑む久しき戀のためしなれ　壽慶
おしむ命も人ゆへそかし　元理
今來といわすは絕んつらさかは　永閑
こゝろは旅の古里のくれ　能祐
思ひ立道を遙にあくかれて　宗昆
かすめる波の鴈の友ふね　宗枚
横雲に月さし移る春の海　壽慶
夢おしからぬかせの梅かゝ　周桂
雨影の枕ならふるさ莚に　玄周
かた見ならぬも捨かたの身や　賢等
始めより心こはきをはてもしれ　能親
おもひやまむにしく事もなし　永閑
人やりの道かと絕て立かへり　宗椿
あたし浮世と我やなすらん　宗貞
名 惠み皆君か御影はあまねきに　元理
天つかせ吹雨も久しれ　能祐
すさましき雲の中なる峯高み　周桂

在明の夜のにほふ月しろ　永閑
ねやの戸に袖の色そふ菊咲て　宗枚
つもるおもひはたゝ秋のしも　賢等
いとふにもきえぬや人のつらからん　永閑
われさへあけるなからへの末　能祐
聞入ぬおなし古事いわしたゝ　能親
かたへはわらふましわりの中　玄周
法を得る心かしこきさま〳〵に　壽慶
上にしたかひ下になひけり　宗枚
にくからす見ゆるもあたし氣色にて　周桂
ウ 我のみあまる涙ならめや　宗昆
露かゝる忍ふの軒の春の花　壽慶
みたれそめたる風の青柳　能親
氷居し瀧の白糸うちとけて　宗枚
かすみなかるゝ水のすゑ〳〵　宗貞
さかつきをめくらす今日の戯に　永閑
入まて月をしたふ山のは　周桂
よとゝもに幾度秋の時雨らん　宗貞
霧に明たつ庭の村竹　宗昆

能親七　元理六　能祐七

重阿一　賢等六　壽慶十一
宗貞七　宗枚十二　永閑十一
周桂十二　宗椿三　宗昆六
成憲二　宗覺四　玄周五

御何第九

涼しさは唯檻の日かけかな　宗枚（牧歟下同）
みしかきよはの名殘ねし宿　周桂
時鳥枕のいつち過ぬらん　宗椿
しつかに雨の打そゝく空　宗昆
詠めやる春の氣色は夕こそ　宗貞
霞の外は去年の山かせ　能親
在明の入方うすき梅かゝに　壽慶
すたれをまけは雪そちり來　永閑
ウ埋火の夜をあたゝかに起出て　賢等
しはしは旅の愛もわすれつ　元理
見るまゝになきたる浪の舟の上　宗貞
日は中空に海面のやま　能祐
富士のねは雲立おゝう陰もなし　玄周
風はあらしの時ならぬをと　成憲
花の色は何の心にならさ覽　周桂
たくひ稀なる此比の春　宗枚
つれ／＼と迯（遁）れて歸る天つかり　永閑
あけほのいつらあとのうら波　宗貞
殘るへき月は見ろ／＼影消て　能親
扇における別路のつゆ　壽慶
今よりの秋やうらなき思ひせん　能祐
ニかせの傳さへつらき言のは　賢等
越て後待共聞かぬ因幡山　宗枚
幾夕枕しけるむしろ田　玄周
水鳥の數／＼の床氷して　周桂
冬枯しらぬ苔の岩かね　宗貞
霜しろき道行手の絶々に　元理
ふりはへたれかとはん柴の戸　宗椿
夢をたになけの情に待もみん　宗昆
相夜はさらに心ともなし　宗貞
嬉しさのあまれは月のかけ分て　能親
紅葉に急く時雨ふるころ　永閑
本ノマヽさほしかの立所なく山に　能祐
旅なる袖に行方もいさ　宗枚
定ねはよしやいつくも宿とせん　周桂
愛もかこたしかりの世中　壽慶

古に任やせまし身の向後　永閑
徒にやはあかしくらさむ　宗昆
影見れはよ一夜ともす灯に　賢等
高瀬の小舟のほるはるけさ　周桂
山川や雲の中成聲はして　元理
はやくの春か志賀の花園　壽慶
雪に今朝木居鶯打羽ふき　宗枚
とてふはかせにそこはかとなし　能親
古にける雛の霞野を懸て　壽慶
昔はいつこ隔なるらむ　宗枚
見し人ととへは語ふ夜半の月　宗貞
枕は知るへ露氣かりけり　能親
心をも秋には忍ひあへさりき　周桂
そよその事と荻の上風　玄周
三 詠めつゝ立つゝ侘るゆふまくれ　宗覺
かへる波にもおもひやるそら　宗枚
こふるとは誰古郷に傳へなむ　能親
此一筆やたひのなくさみ　永閑
遠き野の松の村々繪にもにて　壽慶
露の色とる花の夏草　元理
夕立の跡よりはるゝ入日かけ　賢等

きは〳〵見ゆる遠方のやま　周桂
なをさりの家居もつくる心にて　宗枚
風の上なるさゝかにのいと　宗貞
共をたに定かねたるうき契　宗椿
わするゝ草やつむ人による　能祐
如何に我あたなるおしも頼むらん　永閑
さりともと見る月さそひこよ　周桂
ニウ 立歸るとは松島のうらのくれ　宗枚
霧にかけなき浪の浦舟　元理
朝露の苫火の名殘打しめり　宗昆
かせ吹小屋のすゝろわひしき　永閑
憂世とは聞共出ていにかたみ　能祐
うたて心のとさまかくさま　宗貞
いひ知らぬ思ひに我やまとはまし　周桂
新手枕は夢かうつゝか　能親
はちかはす中朶後は忍はれめ　玄周
宮古の人に花の一もと　宗椿
山賤の爪木に櫻おりそへて　永閑
おのつからにや春をあはれふ　周桂
百千鳥さへつりくらす草のいほ　壽慶
ねふたき斗けふの長閑けさ　宗枚

名のめはかつ冬をも酒のさかつきに　周桂
雪をめくらす舞のいりあや　玄周
木々の色に影白妙の袖ふれて　能親
かたしく月にあくる遠山　重阿
秋のよも限有とや鐘のをと　元理
たかひに後の心つくせり　宗覺
天地をかけし契もあさはかに　能親
うきいつわりは神もゆるすな　宗枚
佛とは何を云ひてかあふく覽　賢等
御のりの外はもとめしもせし　永閑
幾年かおもひ／＼し墨の袖　能祐
わすれぬはたゝたらちねの跡　壽慶
いさめつる道をはかなみ背きて　元理
行末いかにならんとすらむ　宗枚
うちつけにはやあくかるゝ我か心　永閑
あひ見ぬ前に名こそたちぬれ　周桂
待比の花にも闇かし夕あらし　能親
春のかすみは九重のうち　賢等
空たきの日も長雨にかほりあひ　宗枚
やとり／＼にこゝろつけゝり　宗椿
虫鳴は行さはらしの淺茅原　壽慶
人しつまりぬ月さやかなれ　宗貞

宗枚十三　宗貞七　賢等六
周桂十二　能親九　元理七
宗椿五　能祐七　宗昆四
壽慶九　玄周五　重阿一
永閑十　成憲一　宗覺一

〔題闕〕

もろ人の年や千くらの御秡川　都
夏ふきなかす松風のなみ　永閑
うきみるの岩にみかくれ片よりて〔異本如此〕　壽慶
笘かすかにひきむすふかけ　玄周
霜しろき冬田の原は道もなし　能祐
岡へに殘る月はあり明　元理
此朝暉も色なる鳥啼て　宗枚〔牧歟下同〕
あき來にけりと詠めするころ　周桂
ウ袖とふや常さらさりし風ならん　能親
雲こそころもきなむ旅人　賢等
夕立の行衞につるゝ沖津舟　宗昆
よするや波の音そ涼しき　宗覺

松陰の一村うかひみつしほに　重阿
ゐり日をうすみ殘る遠方　宗椿
此里のよその高ねや暮ぬらん　宗貞
こゑきこへ來る鐘閑なり　成憲
深る夜の心知るゝ手枕に　直繼
憑みし月やひとりしもみん　壽慶
いかにせむ人は音せぬ秋のかせ　永閑
露の限そ袖にかゝれる　宗枚
篠のはの太山の花に分暮て　玄周
霞にけふの過かてのやと　周桂
ウ命よりおもへは春やあたならん　宗貞
なれし彌生も一時のそら　能親
捨ぬれは千々に金も憑まれす　賢等
あなあさましや消し火ねすみ　宗枚
いかにして君か心〔令歟〕はとりも見ん　永閑
さし出されて唯すめる門　宗覺
むなしきは歸らんもはたさすかなり　元理
五月過行山ほとゝきす　宗昆
みしか夜の雲間分れぬ有明に　周桂
梅かゝすなり風やふく覽　能祐
あさみとり草はかつ〳〵春の水　壽慶

雪氣の澤の下さむきをと　宗枚
伏見野や時雨し夕日かすかにて　永閑
むかへは西に山高きかけ　周桂
今は身の限を歎く柴のいほ　壽慶
うしとも何をおもひのこさん　元理
一度と云ひつゝねての朝ほらけ　能親
わりなきなから猶そこひしき　永閑
したわれし都すゝろにわかれきて　宗枚
なみたはさらにせきならぬ道　周桂
老のなみいとふとてや越さらん　賢等
友の契りも誰かのこれる　壽慶
おくれしの偶もうき山里に　永閑
のちつけぬとも花や尋ねん　能親
鶯の聲待方に靜まりて　玄周
明ほのおしむ春の夜の月　宗貞
形見とやとれる扇もたれなれや　周桂
あかぬ人かを身にしめよとか　宗枚
去ともの賴みすくなくなり終て　宗昆
おのかよゝとやわかれ行らむ　賢等
村鳥の塒くらの竹の雪おれに　永閑
我そおとろくさむきよの夢　壽慶

重ねてもあしのほわたはうらめしく　能祐
菊さく宿に秋や送らむ　宗貞
歸るさも山路の霧に忘られて　宗枚
暮にけらしも日暮しのこゑ　周桂
うつろへるすそ野の色はさひわたり　元理
かけさえ月はいさよひのそら　能親
名殘そふ今朝猶人のやすらはて　壽慶
あやにくこゝろいかにうらみむ　永閑
折にふれ替るにならふ戀はうし　宗覺
雲に霞の古郷のやと　宗椿
三先おもふ吉野の山の春たちて　壽慶
やまふきまてはめてし餘や　能親
見えすなる水のうたかたくれぬらん　周桂
浪にかすかく鴈の玉つさ　宗枚
大方の露置袖のなみた川　宗貞
物おもふころは月もあはれめ　賢等
枕をもよそに幾夜か明すらん　能祐
知ると云事のさても悲しき　壽慶
かしこきや更に我身の面ふせ　宗枚
うへか上にはましわりもせし　宗昆
あちきなく淺き根さしのよを知て　永閑

まつにいわふもいかに行すへ　周桂
手向する磯の舟出の波高み　元理
おもふ風ふく日をや待らむ　玄周
ウほの見しは小簾のさかひの夕間くれ　宗椿
鞠もてあそふけふはわすれし　永閑
有數を讀む言葉にたれはかん　能親
眞砂の道のいさ清きをと　宗昆
足なみも玉散る流れ駒留て　宗枚
日の熊川はかけそさしそふ　元理
夜るは猶澄へき月の空に見え　能祐
眞木のいたまは秋風そふく　周桂
みの虫の聲哀にも露ふりて　賢等
すかのはしのゝ山かけの道　壽慶
白妙の雪かと花はちりくめり　周桂
霞はれ行水の水上　宗枚
鷺の居る洲前に春の日は寒て　宗貞
くれて獨のたてる釣人　元理
ウ世中の憂や詠めに殘るらん　宗覺
またすみつかぬ柴の戸の山　永閑
何事もおもひとあまるこゝろにて　能親
君をおきては歎かんもなし　宗貞

迷ふへき闇のうつゝを忘るらん　宗枚
忍ふあたりそ深し終ぬる　周桂
閑なる月には人のたえやらて　宗椿
かけはらちとの秋の出入　元理

都一句　周桂十二　重阿一
永閑十一　宗枚十二　宗椿四
壽慶十　能親八　宗貞七
玄周四　賢等六　成憲一
能祐五　宗昆五　直繼一
元理八　宗覺四

追加

いつはとは時や若葉のそのゝ竹　賢等

軒はの山の五月雨のそら　直繼
峯高み待ゝ月の出やらて　〔宗融〕家順
幾度雲にいなつまのかけ　氏吉
羽風にやさはきて鴈の迷ふらん　能祐
うら枯てたつ霜のむらあし　重阿
磯きはの松のしつへを越波に　能親
くれてはつなく舟そあつまる　宗覺

與州宇和郡今城肥前守平能親爲大神宮法樂之千句於草庵興行。卷頭之御發句關白殿揚名御所。軸亞相都護三條西殿申請者也。

天文六年五月廿二日　周桂判

千秋萬歲

續群書類從卷第四百七十八

連歌部八

石山千句

何路第一　石山寺於世尊院

常磐木も色そふ山の若葉哉　梅
しはし晴たる五月雨の雲　景恵
月影も籬の露につたひ來て　紹巴
なきよるむしの宿ちかき暮(殘歟)　清譽
うら枯に野やなり初て淺らん　你阿
行水見えぬ澤の棚はし　元理
すゑ遠き小川のなかれほのかにて　守仙
日はさしなから時雨すらしも　仍景
吹をくる雲のかたわく山風に　玄哉
寢坐さためぬ鳥の聲〳〵　心前
人かへる竹の下道くれやらて　能誓
田面につゝく野邊の一村　源應
はるかにも塘の水やけふるらん　珠長
霞にのこる日は長閑成　賴喜
ちりちらす山のは白き花の雪　滋成
松にとたゑし春風の音　道九
かきならす琴の調も宵更て　文阿
椽居の月に誰すゝむらん　音阿
夕立は見る〳〵過る空なれや　澄賢
みとりそひ行草のすゑ〳〵　紹巴
せきとめし川邊の水やあまるらん　景恵
瀬々にわかるゝ瀧波のこゑ　你阿
立ならふかけは岩ほのいや高み　清譽
たゑすおこなふ法のふる寺　守仙

いてんその曉をまつ佛にて　元理
うちぬる程は夕闇の月　玄哉
あつさはたのこりもあへぬ秋風に　仍景
行〱ふかき山もとの露　能誓
すゑは猶木の葉みたるゝ道分て　心前
身のかくれ家も人やとはまし　珠長
なくは世につらきも思ひ出つへし　賴喜
ちきりもをかてよしや別れん　滋成
いまさらの袖の泪の澤もやは　道九
うへはみさほをつくるくるしさ　景恵
とよきやあたなるすちにましるらん　紹巴
露の玉まく葛のはかつら　你阿
一ウラ
明行は籬の山に雨すきて　源應
わかれかねたる月のよこ雲　清譽
見し夢の余波身にしむ草枕　玄哉
野らとなりての秋のかなしさ　元理
まつとなく虫の音をのみ友なひて　你阿
たのめぬくれを立うかれぬる　仍景
わすれんとおもふたに憂佛に　能誓
花はあらしの雲拂みね　紹巴
寒のこる山や春ともわかさらん　珠長

きえまふりそふ雪の下庵　心前
あけそむる裳〔窓歟〕の灯かすに〔か脱歟〕て　景恵
むかしの事はつきぬかたらひ　滋成
あはてしもつもる恨のいかはかり　紹巴
人つてのみの中そはかなき　清譽
三オ
雲かゝる山郭公まち〱て　能誓
たちこそぬるれ袖の急雨　你阿
やとりかるあるしの心とりかたみ　元理
くむ盃はあまたたひまて　紹巴
けふの賀を始なるへき祝言に　滋成
わか菜やいつの世をためしとる　玄哉
春日野やかすみにこもる松高み　賴喜
うらゝなる日にあそふ蝶鳥　道九
道のへは春の朝露をきみたれ　元理
ところ〱の草むらの霜　心前
木枯のはつか成ける色朽て　仍景
むせふ石まもたえぬ山水　紹巴
月清み結ひ馴たる曉に　珠長
覺てもおなし秋の夜の夢　清譽
ニウラ
千聲より後猶やまてうつ砧　紹巴
憐もよほす賤かいとなみ　守仙

わふるとちとをかはせる近隣　玄哉
のかれぬ道を歎くかしこき　元理
暮かたの春とは花をもり捨て　你阿
いつくかかへる薗のうくひす　能誓
八重霞かすみとちたる谷の戸に　源應
なかるゝ水は氷とくらし　賴喜
袖にさへ今はせかれぬ涙にて　清譽
あふられしさそやるかたもなき　景惠
またれしは秋のこよひの空の月　心前
はつ鴈かねを萩かえの露　紹巴
立籠る霧も垣ほの山晴て　仍景
すゑは田中の水の水上　滋成
三丙ふみならす岩の雫や積らん　元理
うちつれてしも行馬さくり　玄哉
またしらぬ人の情を旅に□　能誓
雪をわするゝ夜半の埋火　你阿
梅か香も近き扉やひらくらん　紹巴
袂にかよふ風の青柳　珠長
静なる春の磯きわ舟さして　景惠
うきてかもめのねふる夕なみ　清譽
日のうつる山を向の水とをみ　你阿

かきりありける霖雨の空　紹巴
つれ〳〵としはしをくれる物いみに　賴喜
とふは稀なる神かきのうち　滋成
秋といへは月に心のさそはれて　源應
千草か露をわけ出る袖　仍景
ウラ霧ふかき野中の暮の渡し舟　紹巴
をくるゝ道そいやましになる　你阿
老はたゝいにしへのみのしたはれて　清譽
植て見し世の花そうつろふ　元理
やとりをも春はかはらす問けらし　心前
軒に燕の立ならひぬる　景惠
蘆葺る田つらの庵りかたふきて　仍景
かさなるうへの霜の朝かせ　能誓

梅一

景惠七	仍景七	賴喜五
紹巴十二	玄哉六	滋成六
清譽八	心前六	道九三
你阿九	能誓七	文阿一
元理八	源應四	澄賢一
守仙三	珠長五	音阿一

何人第二

月やかる蘆邊のくまも夏の海　你阿
見えし螢は宵の間の影　滋成
夢かよふ岩のかたしき風立て　元理
やとりとたのむ峯のさむけさ　玄哉
打しきり雪ふり初て暮野に　景憲
しはし礒の冬かくるをと　能誓
かすかなる田面のつゝき道遠み　賴喜
わたし捨たる里の柴はし　源應
初ウラ はなちかふ駒は川より向にて　仍景
うら枯のこるをちのさゝはら　清誓
木の下の葉山やうすき秋の霜　紹巴
露もひぬまに又そしくるゝ　理長
更也草のまくらの夜半の月　心前
かり初なからしたふわかれ路　守仙
今はたゝ其言葉も何ならす　道九
立へたてたる中のわりなさ　澄賢
ともなふも雲のいつくの山烏　滋成
ひろふ妻木のかへるさの暮　你阿
賤こゝろなきもやすらふ花下　玄哉
おくや櫻の咲はしむらん　景憲

古寺のさし入かすみ雨晴て　能誓
事とはんとや人門に立　元理
二オ きぬの音そよめくかたはいかならし　源應
ふたりはねぬといふかあやしき　紹巴
かたはらの塵うち拂さむしろに　珠長
憂世わすれて月にむかはん　賴喜
身を秋になして入ぬる山の奥　清誓
おらぬ紅葉の錦きるかけ　仍景
大井川くたす筏もまてしはし　你阿
音はあらしの山そふくなり　元理
虫かくる松の扉の村しくれ　紹巴
うきたつ雲そ行末さためぬ　景憲
出る日もはるけき野邊に鳴ひはり　玄哉
一色なる道のわか草　心前
とけのこる氷ともなき澤水に　能誓
折はへ誰もかへすあら小田　清誓
二ウラ 袖おほみふるの山陰つとひ來て　元理
夜をまたきたつ朝市の庭　你阿
苫屋やしはし燒間のけふるらん　心前
竹の葉分の軒のうす雪　紹巴
とり〳〵に寢座に騒く聲なれや　景憲

いく一とをりおくる夕風　滋成
はや川の波に棹さす渡し舟　你阿
下やすからぬ住居とをしれ　道九
余所目にはかわる習の人こゝろ　守仙
ちかひをきしはわすれしもせし　你阿
去にける佛の後もたのもしな　紹巴
金の御嶽の花やまつらん　清響
霞立きの川上のあくる夜に　仍景
うらをかけたる月ののとけさ　玄哉
三丙ほす網の綱手にうつる日はさして　元理
垣ほの霜の雫をとする　能誓
たはゝにや置まよふらん草の露　你阿
秋風の間の小蝶しつけし　紹巴
松むしの鳴音に道は任せきて　珠長
野邊の外なきいにしへの跡　仍景
尋あふ涙こほるゝ袖のうへ　道九
たかひのうらみいふもいはれす　守仙
枕たゝそむき〳〵に明はなれ　滋成
とたえかちなる夢のうきはし　元理
ねぬるまの程はみしかき春の夜に　清響
をくりむかへてあら玉の年　玄哉

深みとり立そふ松のかけたかみ　紹巴
月は冬木のこすゑくれ行　仍景
二ウラ涼しさをとめこし山の瀧落て　能誓
石はしる水もをとなしの川　你阿
鮎はみなさひたるやなの跡斗　紹巴
露の命ののこるあはれさ　元理
たえてうき秋のすゑはの蓬生に　玄理
あらしのかせを袖のあけ暮　心前
分まよふ遠山伏のかりまくら　仍景
夢かうつゝか人のおもかけ　景恵
ほのかにも見しを思ひの始にて　源應
かすむまに〳〵花やうつろふ　滋成
紅はそれと斗の梅か香に　你阿
また消やらぬ野路のあは雪　頼喜
月ならて誰か汀の朝わたり　紹巴
よるのあつさを殘す袖やは　玄哉
丙槙の戸をひらけはさやく荻の音　滋成
こぬ人ゆへに暮の露けさ　能誓
蜘蛛のいともはかなき我か契み　心前
出やらて世はうきみやつかへ　仍景
立居さへ齢のすゑはくるしきに　清響

しはふきわふる聲なとかめそ　元理
れいならぬこゝろは色に見えつへし　你阿
いまはといさむ武士のみち　紹巴
はるかにもうちはへて行馬の上　景惠
おき乗／＼て猶ねふりつゝ　玄哉
埋火のきへさしつきて憑む夜に　能誓
おもひかけぬを板まもる月　珠長
いつしかに野分めきたる風ならし　紹巴
ふりもよこきる急雨の露　心前
名ウラ
ふねはたゝしらぬ浦半にこかれきて　守仙
とひよる里もあら礒のかけ　源應
藻鹽燒跡やたえ／＼けふるらん　紹巴
山きわ遠き松のむらたち　滋成
鐘の音花の一木のしるへにて　仍景
行／＼春の夕さひしも　心前
わくる野のさかひも見えす霞日に　玄哉
いつくにけふの枕さためん　清譽

你阿十　心前七　澄賢一
滋成七　清譽七　元理八
紹巴十二　玄哉九　賴喜三
景惠六　仍景八　能誓七
守仙四　珠長四　道九三

山何第三

茂る野をさらに深溪の苔地哉　清譽
たかうへ捨し岩のはさま田　能誓
五月雨は河邊の道も水こえて　心前
一むら遠き舟の行すゑ　紹巴
吹のこす嵐の跡の夕霞　仍景
松の葉かくれさむき春の日　源應
山や雪きえぬや月にまかふらん　元理
ほの／＼しらむ裳〔窓脱〕の明かた　你阿
初ウ
灯をそむけてそをく床の上　景惠
秋來ても又あつさたえせぬ　滋成
日くらしのなけは夕にとふ螢　賴喜
おもひもよほす衣手の露　玄哉
科なきも人の隔つになるはうし　道九
たのむちかひもふかき神かき　守仙
松にたゝかけて千とせを祈らはや　珠長
巣を立やらぬ友鶴の聲　文阿
うつる日もまた影よはき霜朝に　能誓

風のまに／＼なひく竹の葉　清譽
江の水は霞なからもかすかにて　紹巴
それかとはかり啼かへるそら　心前
見しはたゝ花のみ殘る蓬生に　源應
有明ならぬ月のさひしも　仍景
二丙 はたさむくおほゆるさ夜の枕して　你阿
薙は秋の霜ふりにけり　元理
いつかさて思ひをのふる折ならん　守仙
またしとすれ〔と脱歟〕くれわたる空　景憲
なきぬへき雲のけしきそ郭公　滋成
にほひそめたる宿のたちはな　珠長
軒はよりあやめの風の袖ふれて　玄哉
雨の雫そをとし音せぬ　紹巴
宮城野はよらんかけなく末遠み　你阿
くるれは跡もわかぬ小車　清譽
月になる物見の庭の所せき　源應
かさす紅葉の色はいつれそ　元理
露なから袖にたをれる菊の花　仍景
きりの籬の水の一すち　賴喜
一ウラ 岩はしは古たる跡に朽やらて　紹巴
さすかにかたへ殘すむかしか　你阿

思ひには猶も戀しき筆なれや　道九
又も見まほし黛の色　能譽
遠山や夕の雲は引すてゝ　心前
下たす杣木のかゝる一坂　紹巴
落瀧津波もかたへは瀬を淺み　滋成
鷺もむら／＼ましる鴨すら　玄哉
月影を霜にえらふもすさましな　你阿
かしらにわたる秋かせの音　元理
色になる草の庵りはさひしくて　景憲
とふ人かへる花はしら雪　能譽
あすまては誰もたのまし春の暮　清譽
三丙 むなしけふりやかすみ行らん　仍景
鹽竈やうつす其世を思ひ出て　元理
とめこし跡は八重葎せる　你阿
たつ縄の殘るにとまるはなれ駒　紹巴
おとろきてたつむら鳥聲　道九
枕ゆふ山のかた岡先明て　仍景
松のとひらはかせの涼しき　元理
おこたらす花皿すゝく一夏に　你阿
たくかはたえぬけふり成けり　清譽
待としもしられしとこそ暮すらめ　玄哉

ましはる中に物思ふ人　滋成
それみあふ身はかよはくも成初て　心前
さすらへ來ての命あやうき　紹巴
舟はたゝうちまかせたるあら波に　能營
月の入さやにしの海はら　守仙
山〳〵も朝霧ふかき空にして　紹巴
色こそ見えね槇の葉の露　滋成
冬かれは芳野のおくもかけあさみ　源應
あらしの音にたへぬ隱家　景憲
獸やこゝろ〳〵〔を脱歟〕に出ぬらん　你阿
〔を脱歟〕おさまる君か世し忘るな　頼喜
名とけて後こそ忍ふ道ならめ　仍景
つたへもてこしいまの一卷　玄哉
打とけて語をきけはなつかしみ　守仙
うき物こしにあかす夜の月　紹巴
おもひねの我古鄕は霧こめて　能營
こえては遠き山そうつろふ　元理
志賀のうらや松のしつ枝に花の波　文阿
つりする舟も春やうかふる　珠長
吹もたゝ風のをとなき朝霞　頼喜
ぬるゝに袖の雨はしるしも　仍景

身さひはいあらはあはつの向後にて　紹巴
忘はせしといふはたのもし　元理
いはけなき程は學もいかならん　景憲
あしき友をはすみかゆるやと　玄哉
日をえらひ遠くも出し道の空　你阿
まほになりたる風のはや舟　紹巴
沖津洲もこゆれは波の下にして　仍景
みちくるをともくるゝ高鹽　心前
うちはふく鳥は梢の松はらに　紹巴
空の詠も春ちかき山　能營
長月もあり明かたにうつろひて　玄哉
残りすくなき秋のかなしひ　你阿
虫の音は外面の野邊のこゝかしこ　滋成
ふみわけかたき露のふる道　頼喜
ちれは又木かけに見るも花はおし　心前
春行水のさそふうき草　紹巴
きえかへる氷もすゑのうたかたに　仍景
日影たえ〳〵おつるやまもと　景憲
むら〳〵になりてやはるゝ峯の空　清譽
軒さたかなる寺は大比叡　元理

清誉六　景恵六　元理九
能誓七　滋成六　文阿（二）
心前六　頼喜五　紹巴十三
玄哉七　仍景九　道九三
源應四　守仙四　你阿十
珠長三

何船第四

残らすはみしか夜もなし今朝の月　玄哉
涼しきかたに閨の外の袖　紹巴
下そよく軒はの荻の露落て　源應
ふけ行秋の松むしの聲　道九
小鹿たつ岡邊の道のくるゝ日に　元理
かへる雲にも山かせそふく　珠長
晴わたる雨や跡よりそゝくらん　清誉
つもりもあへぬ雪の草むら　能誓
初ウラ
木かくれの花はなかれの末〳〵に　心前
春行水のをとしつかなり　你阿
明ぬれは田面の蛙鳴たえて　仍景
里あるかたや竹の一むら　滋成
けふも猶しらぬ宿りの旅はうし　頼喜
いく度夜の時雨なるらん　景恵
折〳〵に色そひまさる蔦紅葉　守仙
夕かせ渡る松はすさまし　音阿
霧間より月をよせくる磯の波　紹巴
さすとも見えぬ舟はうかへり　玄哉
柴人のかへりつくせる里〳〵に　道九
道はあとある霜のむら〳〵　源應
こゝかしこもとむる山もおくならて　你阿
心のほかのかくれ家もやは　清誉
二丙
ゆかりなく成ての後もすめる世に　珠長
おもひやりても誰かたつねん　元理
かすならぬ身を蛛もうとみきて　能誓
ふかきも見えぬこゝろさしかは　紹巴
文をさへ忍ふるまゝに書たえぬ　滋成
さすらへて行人のあはれさ　心前
漕舟のするゑには山も波のうへ　景恵
月や海つらさしのほるらん　你阿
をくるゝも空につらなる鴈の聲　紹巴
吹はらひたる秋かせの空　仍景
いつくより誘引きぬらん一時雨　清誉
朝戸あくれは庭のはつ雪　頼喜

うちなひく竹のは山の日は出て　元理
もゆる木のめも薗の遠近　玄哉
やとりまたさためぬ小蝶飛亂　你阿
一ウラ 霞にかゝる玉ゆらの露　紹巴
苗代の跡にものこる御注連縄　仍景
ふる野の道そ上久わたる　珠長
里人の夕をふかみさし籠り　能誉
旅なる袖を犬ほふる聲　清誉
かへりても塩なれ衣そのまゝに　元理
つなきとめつ〔ゝ脱歟〕ゝねふるあま舟　紹巴
うきはた我とこゝろを慰めて　守仙
さのみとひなは名や立なまし　景恵
うつり行かたには思ひさためてよ　玄哉
あらましのみの山かけの庵　心前
先咲を都の花になれ〳〵て　能誉
かすみ隔つる月は猶おし　源應
三丙 春の夜のあくれはうかふ淡路島　紹巴
千鳥の聲はそことしら波　道九
立籠し雪のくもりの浦つたひ　仍景
葛のかれ葉の露はさむけし　能誉
秋をふる松はみさほに木高くて　你阿

あれにし跡は虫のみそなく　清誉
野分さへしはし斗に吹すさひ　玄哉
くもゝはなれて月や行らん　景恵
はるかなる舟は波間の明石かた　心前
郭公かの名こりたになし　紹巴
とはれしはうつゝも夢の心ちして　元理
かねてはうらみかこたんとこそ　你阿
さはりたゝいひ分るにもしるかれや　滋成
我はわか身のまゝとなるやは　玄哉
二ウラ かり初の隙もまれなるつかへ人　景恵
佛のまへにたへぬおこなひ　紹巴
灯は挑のこせる影にして　清誉
小簾のさかひのあくるしのゝめ　滋成
花の香の枕おとろく山風に　玄哉
ちかなく聲は誰喚子鳥　元理
霞ても跡は晴たる棹のうち　能誉
雨ままちてやいつる釣舟　仍景
蘆呰にならふ扉は人なくて　你阿
聾も臥猪の小田のかたはら　紹巴
月の入山にすかるの遠さかり　滋成
露をきそふる薄いくもと　道九

咲のこるやまと撫子秋かけて　心前
からくれなゐの衣きにけり　元理
名面 白雲もにほへる春の朝日影　紹巴
繪とおもはすはおらん櫻よ　你阿
のとやかに住なす家居事問て　能誓
世をはなるへきこゝろをやみん　玄哉
千とせそと契もあたの物語　元理
やかてかはるをならひかなしも　珠長
きのふこそ都をいてしゐ中ふり　仍景
たゝ月のみをかりふしの友　心前
秋の野にあくかれぬれは暮初て　景恵
隔つる妻もしかすかになく　紹巴
谷せはみおりゐる雲にまかせはや　你阿
冬田の稲葉苅のこすころ　滋成
こほりてやせきいれ水もよとむらん　清譽
かけ樋の竹そなかは朽たる　仍景
名ウラ 玉さかの音つれさへも稀にして　守仙
あひおもふをも親さけてうき　能誓
出いにし人の行末を尋侘　珠長
もろともにこそきえんはてなれ　清譽
色なから嵐のさそふ花の露　仍景
あけほの殘す松の葉の雪　紹巴
鳥の聲また寢所にさえつりて　玄哉
春の宿りそ靜にもすむ　晉阿

玄哉九　心前六　紹巴十三
你阿九　源應三　仍景八
道九四　滋成六　元理八
賴喜二　珠長五　景恵六
清譽八　守仙三　能誓八
晉阿二

初何第五

しら樫の雪間や峯の夏木立　仍景
雲よりいつる山郭公　元理
末遠くかりねせし野の明やらて　你阿
月を友なふ旅のよな〳〵　守仙
すさましき波に舟行和田の原　滋成
しくれ〳〵し秋のうらかせ　心前
日くらしにうちもとたえぬあさ衣　玄哉
茂木のかけや巣つゝくらん　紹巴
初ウラ ふむ跡の一すち殘る山道に　能誓

朝の霜を誰かはらひし　清　響
かくれ家はとひよる人も稀にして　道　九
夢は嵐のかせのまに〱　頼　喜
たとり來てかた敷磯の浪まくら　源　應
舟もかよはぬ湊くれ行　珠　長
想像さすらふる身の秋の空　景　惠
泪露けき袖のあはれさ　澄　賢
頼にも問れぬ月の明はてゝ　元　理
よその別になして夜中　仍　景
僞もとはりかたき程なれや　守　仙
またさかぬ花の春の白雲　你　阿
曙の山はかすみにあらはれて　心　前
二丙長閑に舟のうかふかすみゆ　道　九
はるかなる入江や浪もへたつらん　紹　巴
けふり（と歟）のひまの水のかた〱　滋　成
床しもわかるゝ鳥の聲寒み　清　響
いつる朝けの宿の旅人　玄　哉
しらぬをも道の行てにかたらひて　你　阿
こゝろをのふる市のさかつき　能　誉
おもふとちけふは圓居を莚　元　理
まれに逢夜の月は有明　景　惠

難面も身にしむ斗秋の風　道　九
かゝる物うき露のたまのを　滋　成
まきるやとうらむる琴を曳すさひ　玄　哉
いつまてすまの浦馴てまし　紹　巴
冬枯の小萩もわけは捨侘て　仍　景
小鹿たゝすむ冬の山もと　心　前
一ウラ入かたは淺き木もりの影つゝき　紹　巴
所かへてや庵りむすはん　你　阿
散はさくかけを尋て守花に　元　理
櫻に月もひかりそふくれ　滋　成
春ふくは露たにしらぬ風にして　珠　長
野邊の小蝶のねふるまゝなる　能　誉
いとたえすあかる雲雀の永日に　頼　喜
淺茅か道や（け歟）しけき行かひ　仍　景
ふりにたる跡の家居も改て　心　前
親にかはらぬめくみかしこき　玄　哉
おひたつも直なる竹の露涼し　景　惠
たゝすかはらの御秡する暮　清　響
いつかはの祭の日比近つきて　紹　巴
三丙人のこゝろの猶いさみけり　守　仙
とくにこそあはれもまされ法の庭　能　誉

道はをしへの外にありとや　你阿
とめ來つる鳥の落草それならて　滋成
かけよりまたきくれそむる山　紹巴
柴の庵しはしとたにも留かね　玄哉
いそかはしさの世おもひしる　景憲
あふくには君か御幸やちかゝらし　元理
玉をほり江にしけるしら波　滋成
風なから荷のうき葉の露しけみ　紹巴
日晩なけは秋も涼しき　淸譽
ひらきをく窓に雲間の月待て　心前
星に手向の文のまき〳〵　紹巴
いかはかりかしこき人の胸のうち　仍景
迷ひをいてぬ程のくるしさ　你阿
（ニウラ）山ふかみこなたかなたの道見えて　顯喜
はなれ〳〵の住居こそあれ　元理
夫婦さへゆかをかへたるきよまわり　紹巴
おもふさかりのおほきかなしさ　守仙
かへるさにとはんといふを待侘て　景憲
くるゝ大井のやとりさひしも　心前
木枯の色をうかふる川淀に　滋成
筏によする波のたえ〳〵　仍景

晴やらぬ霧は今朝まで夜を籠て　珠長
谷の戸山の月は半天　紹巴
鳴て鴈尾上のいつこ過ぬらん　你阿
またくれぬ間の鐘遠き聲　元理
花はたゝ春を殘して散もをし　能誉
彌生といふもくはゝりてなに　玄哉
（三オ）あかなくもしゐて霞をくむ袖に　淸譽
水にたはふれ詩をうそふける　你阿
あつき日はこゝにかしこにやすらひて　紹巴
やふしかくれに鵜（しと、歟）なく聲　心前
ふくろふのあくれはいつち宿るらん　能誉
ねられぬ夜半の雨のさひしさ　滋成
打かたるそのしな〳〵に慰て　景憲
またみぬ人も思ふとをしれ　紹巴
戀草の種やこゝろに任すらん　元理
かく玉章におほき言の葉　顯喜
まめたつも忍ふるすちに跡なくて　仍景
憐は月に殘るいにしへ　淸譽
めくり來る秋もかなしき身の齡　玄哉
（三ウラ）侘つゝむしの鳴はいつまて　道九
冬ふかき垣ほは朝な夕霜に　滋成

またかれやらぬ園の竹の葉　心前
またるゝや根こしてうふる春の花　紹巴
野山をこゝにうくひすの聲　玄哉
霞をもわけもて來ての草枕　仍景
小雨にさへや袖はぬれそふ　珠長
暮るともよしやいとはし鞠の庭　守仙
立ましはりも邂逅の人　你阿

仍景八　清譽六　元理八
道九四　你阿九　頼喜四
守仙五　源應二　滋成八
珠長四　心前八　景惠六
玄哉八　澄賢一　紹巴十三
能譽六

唐何第六

五月雨は月まつ天の戸さし哉　能譽
しける木の間に暮川をと　頼喜
柴舟や山もとちかくかへるらん　清譽
水のけふりのはれ渡る末　景惠
入日さす垣ほの野への冬枯に　滋成

葉分にしるき霜のむら竹　仍景
吹落て嵐寒けき小田のはら　源應
かよひたえたる玉鉾のみち　元理
初ウラ
いつちにか妻とひなれし鹿の聲　你阿
うつろひのこる萩の一もと〔村歟〕　紹巴
苅すつる跡は露けき草枕に　心前
かへる野澤の月になるくれ　玄哉
そとなく小舟は風にたゝよひて　道九
岩間／＼に浪かへるをと　珠長
しはしもや雨の名殘の雲ならん　守仙
あつさわするゝ道野への袖　文阿
はる／＼〔衍歟〕と峯こえきつる旅ころも　頼喜
かりかねすさめし夜半の夢人　能譽
風たえぬ松かねまくら敷侘て　景惠
あすまて花よちりなつくしそ　清譽
かきりとて何かは春の暮ぬらん　仍景
二丙
かすみのうちにならす鳥の音　滋成
かけちかき山を砌にすみなして　元理
程なくうつる日は夏の空　源應
色／＼の衣も冬に立かさね　紹巴
苔に落葉か上の朝かせ　你阿

寒し夜の霜置わたす板橋に　玄 哉
秋の月すむ川そひの道　心 前
天津雁汀の友に誘引て　珠 長
霧のたえ間にをちの山のは　紹 巴
むさし野も分れは末に成けらし　滋 成
行〳〵ていつ旅はかへるさ　你 阿
すみ殘り心を盡す古郷に　元 理
かひま見しその人の面影　仍 景
かけをかはいときなきこそ契なれ　清 譽
白髪までの中の年〳〵　紹 巴
ニウラ
いにしへを昨日けふそと思きて　道 九
なき姿をも燒香にやしる　能 醫
夕霞立枝はいつく梅の花　珠 長
聲につたへる竹のうくひす　景 惠
吹かふるうらめつらしき春の風　你 阿
日より待えて舟出する袖　賴 喜
もくす火のうすき煙やしめるらん　紹 巴
いかにいふせきこやの蚊はしら　清 譽
うき思ひはらふは夜るの扇にて　元 理
くもれる月そ人たのめなる　你 阿
稲妻は暮ぬるかたに消かへり　景 惠

すゑ葉の露はおなし下草　紹 巴
落てたにいとふは風の花さかり　仍 景
三ウ
かけ行水に春をせかはや　玄 哉
なかめやる橋ははまなの朝霞　心 前
日もなか雨のつれ〳〵の空　你 阿
とひ捨てかへるを友や惜むらん　清 譽
つゐにや我も山陰の庵　滋 成
古跡も隣より先田と成て　紹 巴
思ひよらすも鴫の立聲　道 九
おき出る曉露の道のすゑ　珠 長
あかぬわかれは月もとゝめよ　仍 景
たのめとも一夜の後はいひかたみ　清（珠妙）譽
およはぬになと身を盡しけん　理 長
我なから物をは思ひしりかほに　玄 哉
鏡の影のやつれかなしも　清 譽
あつしさもけふと始と悔りて　仍 景
いれはこゝろのきよき山寺　紹 巴
ニウラ
杉たてる門より奥の鐘の聲　賴 喜
雪の夕そいとゝしつけき　景 惠
よるひるのはひかきならす埋火に　元 理
あはむあはしのうらもいく度　仍 景

ちゝになる心いられをくせにして　你阿
お　るたもとのなみたはかなや　心前
きぬ〳〵の跡に片敷月もうし　紹巴
露夢はかり又も見えなん　玄哉
朝かほはあやなく色も消はてゝ　源應
明石の波のよせかへる音　珠長
はなれすむ岡邊の里は物さひし　心前
田中の道は行人もいさ　清譽
みとりさへ花にけたれし柳陰　滋成
ちりまよひたるかせの梅園　紹巴
淡雪もしはしは春の空にして　能誓
しくるれはこそ神無月なれ　你阿
かはしをくその兼言も僞に　道九
世のなみならぬ身そうらみなる　守仙
まつしくも成に昔や思ふらん　仍景
とにもかくにもなからふそうき　元理
さきたてしこゝろの闇の晴かたみ　紹巴
松の火はきえたとる山道　景憲
月もまた木の下陰はほのかにて　清譽
涼しさをこそ秋のものなれ　能誓
日くらしや鳴て夕をいそくらん　心前

霧のふかきや雨にまかへる　紹巴
さしのほる舟も川とは過やらて　仍景
よふ聲ちかし里はあるらん　玄哉
あさ（ミウラ）明の野中の枕のこる夜に　元理
さめてもしはし夢心ちなる　你阿
おもはすもとふうれしさは淺からて　景憲
うき二道もさもあらはあれ　滋成
めくりあはん此世後の世わするなよ　玄哉
花にもちきる蓬生の春　紹巴
しつかなる露や菫に霞らん　能誓
つはさをたるゝ蝶のいくむら　心前

能誓七　你阿九　賴喜四
紹巴十三　清譽八　心前七
景憲七　玄哉七　滋成七
道九四　仍景九　守仙二
源應三　珠長五　元理七
文阿一

三字中畧第七

梢まて植わたしたる山田哉　心前

てる日も夏の雨残る空　珠長
郭公ゆく／＼分ぬ聲きえて　景恵
春の湊を跡になす舟　能誉
をき出しかたは遙に打かすみ　清響
たかまくらにかむすふわか草　滋成
月影もこほるゝ野への露見えて　仍景
しくれにけらし秋かせのくれ　玄哉
初ウラ
山の端は色にうつろふ朝ほらけ　紹巴
おりゐる雲も晴る江の水　你阿
あら田鶴のかけりて遠き聲／＼に　頼喜
名もなつかしく忍ふ九重　珠長
旅衣きても程ふる道ならし　道九
うきにたへたる袖のあはれさ　元理
とたへなき涙の床の明暮に　源應
のこる枕にうつり香もおし　晋阿
露霜になひきてかるゝ女郎花　珠長
むしのなく音は小のゝかたはら　心前
人かよふ山邊を鹿の出やらて　能誉
夕の月に舟そやすらふ　景恵
なかれくるみなみもひとつ花の色　滋成
くちて櫻や岸に木たかき　清響

二オ
岩かねは残る砌の春さひし　玄哉
ふむ跡いつの雪まなるらん　仍景
求食しも友なひかへる鴈鳴て　你阿
あれわたりたる田面はるけし　紹巴
人すまぬ所／＼のひとつ庵　元理
竹の葉かくれけふるゆふ影　頼喜
音はまた雫にのこる雨はれて　心前
波に棹さす川つらの里〔舟歟〕　源應
涼しさも月待程の秋の風　紹巴
よひふけけらし衣うつ聲　你阿
うたゝねの覺ておほゆる袖の露　能誉
酔のま〔さ歟〕たれはたゝしはしこそ　滋成
扇をはとられてうきと打うたひ　仍景
いとむけしきもしるき舞人　紹巴
二ウラ
日くれてをかへるあしると見わかはや　景恵
岨〔きそ歟〕のかけ路は駒もす〔マヽ〕ゝます　清響
古畑のあたりの水みさひゐて　珠長
かれ葉なからもしけき篠はら　滋成
風はやみ時雨にましるたま霰　守仙
杉板葺のさむきひま／＼　你阿
來て見るはうつす都の路にして　元理

罪にあたるもゆるすはて〳〵　能誓
よしあしやまとの道にわかさらん　紹巴
雲より空はひとつ色なる　景恵
葛城や高まにつゝく花盛　賴喜
たつ田の山の明ほのゝ春　仍景
月はそらかたふきつゝも長閑にて　源應
三内 旅としもなきまくらならすや　玄哉
古郷はけふこそ立も別つれ　你阿
萩に忍ひし秋のはつ風　紹巴
野は露もをきあへぬ間の緑にて　元理
いかてかかゝる松虫のこゑ　清譽
人目こそこの山すみに絶にたれ　玄哉
ほいかなへつゝ入法の門　心前
國もたゝゆつるに末は猶たゝし　紹巴
もてはやさるゝ弓筆の跡　你阿
武士のこゝろも歌にとけ初て　仍景
やはらきかはす中の手枕　元理
ふたりきてぬるもうすしや筑紫綿　清譽
霜も置そふさむしろの月　能誓
三ウラ くれてより聲かしかまし軒の松　紹巴
ほのかにもうつる日吉の神さひて　景恵

舟よせかへる志賀のうらなみ　心前
とちはつる氷もなかはとけくらし　滋成
をし明かたの天の戸の春　你阿
雲間もる星のひかりも霞にて　源應
月より後の夜は靜なり　玄成（滋成）
吹すさふ野分の跡はおく露に　玄哉
ひらき出たるあさかほの色　紹巴
垣柴のひまは外面もひとつにて　仍景
いやしき身にもこゝろ有けり　守仙
思はすの情こそたゝ戀路なれ　能誓
とはれ初ての末いかゝせん　景恵
忘るなと花に紅葉に雪の友　紹巴
くらせはくらす年〳〵の空　清譽
三内 暑をもいとはん庵の中ならて　滋成
聲するよりや蚊遣焼そふ　心前
蟬の羽のうすく成こし夕日影　能誓
はなれても駒しはし見えたる　景恵
やすらいに程ふるまゝの中宿り　你阿
うかれめにさへ名殘なしやは　紹巴
あやにくに忘ぬもうきこゝろにて　珠長
折ふしことのなけの言の葉　仍景

馴〱て後のおやとも頼身に　紹巴
思ひへたつなほとゝひそかし　玄哉
梅か香におとりやするの菊の花　心前
もみちにみるもことさらの露　源應
秋かせに雲のはやしの月澄て　頼喜
伊駒も嶽そちかき難波江　仍景
行舟の波もなきたるこの朝　你阿
道の首途もいはふにやよる　元理
をし入て衣にそふるぬさ袋　玄哉
袖もそれともしるきはふり子　淸譽
春風の花を簾に吹かけて　能誓
たそかれ時のかすむ小車　紹巴
きさらきの比は往來もさま〱に　守仙
佛のわかれおもはぬはなし　滋成

心前七　紹巴十二　珠長五
你阿九　景惠七　頼喜四
能誓八　道九一　淸譽七
元理六　滋成七　源應五
仍景九　晉阿一　玄哉八
守仙三

何木第八

月やをきて常夏に見ん花の露　元理
くもるもしるき夕立の庭　玄哉
淺からぬ陰の山水流來て　晉阿
鳰のうき巣のうきてたゝよふ　景惠
吹かたもわかすはけしき浦風に　紹巴
きえてはむすふ椎のはつ霜　你阿
秋さむく夕日の影や成ぬらん　能誓
もよほす聲に衣うつ里　淸譽
棹鹿のかよふ外面の山近み　滋成
たちへたてたる峰の朝霧　頼喜
幾とをり月の行末時雨らん　心前
木の間に落る水のかた〱　仍景
しはしとてすゝめはくるゝ松の陰　珠長
いつしか日をは送り來にけん　道九
限ありてかへんもかなし墨の袖　源應
おもふこゝろにまかすへき身か　澄賢
難面さをあまりしたふも苦くて　守仙
命今はと告やりてみん　元理
おしむとてしも行春の空　紹巴
音たかき嵐のさそふ花の雲　景惠

跡はのとけきむら雨の露　能誓
三丙 待し間のこゝろともなし郭公　你阿
打ぬる夜半の暁の夢　滋成
水の聲よとむ岩ねを枕にて　清譽
そこともわかぬ鐘さむき山　心前
行かたの梢を雪やうつむらん　元理
風はたえたる雲の一むら　珠長
とふ跡の鴈はみる／＼はつかにて　紹巴
門田の面のほの暮色　你阿
露はたゝみたれもあへぬ秋の霜　仍景
月まつ袖はふけて冷し　能誓
はしちかく出ゐて人を頼む夜に　玄哉
我まへわたり忍ふるはらし　紹巴
たひ／＼のよその契はねたましや　景恵
あたなるにこそ名は立にけれ　源應
一ウラ たえて今跡もなからのはし柱　紹巴
身はいつまてかふりのこるへき　清譽
袖はたゝおなし緑の色にして　滋成
しもなからなる望もそうき　元理
うきまよふ雲も半に峰の寺　你阿
杉の木立に雨は過けり　景恵

川音も近きふる野に分出て　能誓
田つらのすゑの水のひき／＼　紹巴
放かふ駒のつなては跡さきに　心前
いく一つれかかへる里の子　玄哉
なくさめてうたふ謠もおろかなり　道九
たかん庭火のかけをまつ程　源應
かけそふる夕花しろき夜の月　玄哉
袖もかすみにくれし春日野　仍景
三丙 鶯はきゝ捨ぬへき聲ならて　珠長
かへり見しつゝこゆる關の戸　你阿
旅はけふおくる人にも立わかれ　清譽
なからへはともいひそかはせる　玄哉
一度はたゝあちきなき契にて　元理
いつよりわたる天の川なみ　滋成
ほのかなる霧にかた野の夕月夜　紹巴
木すゑの中にはし紅葉せり　仍景
なひきぬるむら／＼竹に鵙鳴て　景恵
はらへは袖に霜ふるき道　頼喜
明やらていそくは誰そ高せ舟　源應
けふりもこもる宇治の川水　心前
伏見江や打見渡しも分さらん　你阿

さなへの色もしけきあしかき　紹巴
（ニウラ）飛螢あしたの露にかけ消て　仍景
幽かなるより日はあつけなり　能誓
ゆかはやとおもふ宿りも出かたみ　守仙
しつはたふかき情こそあれ　元理
片糸のあふ夜の後はたえもせし　清譽
つくしもてこし心いくはく　景恵
咲を待ちるをかなしふ春の花　心前
さえつる鳥は閑のかたはら　滋成
霞よりもるゝ日影の山かくれ　紹巴
石まの氷なかれいつめり　玄哉
色うつる水のうき草誘引て　源恵
音にはたてぬ川かせそふく　你阿
をのつから秋なる月の下涼み　仍景
袂の露ははらふ跡より　紹巴
（ミ内）うら枯の野中の道は霜ふりて　能誓
松の一木そ陰はるかなり　玄哉
けふることそしらぬ栖の夕間暮　元理
舟行かたは波の島〳〵　心前
磯枕むすひもあへぬ旅ならん　道九
憐はかなき夢のいくたひ　仍景

又もこそ生あふへき此世なれ　紹巴
ふかき契りの行末忘るな　清譽
しめをきし有増ことの柴の庵　你阿
花にとめ入奥山のみち　紹巴
朝かすみ分まとはせるよふこ鳥　玄哉
くれておもへは日なかきもなし　滋成
半天に出て夜をまつ月の影　景恵
さひしき秋の雨も晴けり　能誓
（ミウラ）取〳〵に今やをしねをはこふらん　守仙
宿はとたる寳つむ（は脫歟）へく　玄理
よむ文に殘す道を傳來て　珠長
遠きあかたもたよりこそあれ　仍景
ひろふにやともしからさるかいつ物　紹巴
さかなとりそへめくるさかつき　清譽
邂逅の人にはあふも始にて　道九
と葉かはせとうちも向はす　玄哉

元理八　心前六　玄哉十
仍景八　香阿一　珠長四
景惠七　道九四　紹巴十三
源應五　你阿八　守仙三

能誓七　澄賢一　清譽七
滋成六　賴喜二

青何第九

わくら葉の木陰に鹿の聲もかな　紹巴
こぬ秋の露やおく山の暮　你阿
落瀧津袖に凉しき浪かけて　仍景
かた敷月もふくる夜の空　滋成
かり金やかりねの夢を誘らん　心前
風もやゝはた身にしめる比　玄哉
野邊近き庭の萩かえ且散て　景恵
入日の跡そしはしくるゝ　守仙
初ウラ
初雪や殘して雲やかへるらん　元理
すゑもあらはに峯のかけはし　能誓
川上の山をうかふる水すみて　賴喜
螢のかけそ月にきえ行　源應
ならす〔手驗〕斗の閨の扇も明夜に　清譽
簾にちかしにほふ袖くち　珠長
かけそふる思ひの向後いかならん　道九
あたしこゝろはたのまれもせす　文阿
うつろはん花とやにほふ夕霞　你阿
ふか〔り驗〕いつるよりあらき春雨　紹巴
静なる蝶の翅もかた／＼に　滋成
野はみとりにやつゝく草垣　仍景
植わたすは十代の小田の庭　玄哉
かたへ水行谷あひの道　心前
二オ
風の間におりゐる雲やまよふらん　守仙
燒も眞柴の煙さむけし　賴喜
狩暮らし雪にぬたる宿りして　能誓
しはしと駒をひかへやすむる　景恵
打むかふうへに巖のかけたかみ　紹巴
春はいつより生はしめけん　玄哉
はなれたる磯邊は人の住もなし　仍景
事とひよるは海士のよひ聲　元理
捨舟と見しや棹さすかけならん　你阿
なひくにうすき霧の遠かた　滋成
明わたる竹の葉山の月落て　紹巴
鳴つゝ鳥はねたる秋の夜　清譽
鐘やたゝ別を人にいそくらん　珠長
こなたの外も又契おく　仍景
二ウラ
あらさらん世にたにめくり逢てまし　滋成
いてん佛をまつかひさしき　元理

閑籠り入や高野の山ならし　景恵
氷のそこのたま川の波　能誓
卯花はたゝ白妙の汀にて　你阿
垣もなかれの五月雨のうち　紹巴
とひぬへき人も疎や成ぬらん　源應
せめてつかひよ我にかわるな　仍景
うたかひのこゝろつくしはいかはかり　守仙
きゝもさためぬ道の辻うら　景恵
はるかなる旅のかへさを待侘て　心前
馴ぬる里も出ていぬめり　紹巴
御芳野の花にをはすての秋の月　仍景
なにとなかめん夕あけほの　玄哉
三丙さま〲のこゝろはうかふ言の葉に　元理
限ありけり筆のうつし繪　心前
いかなれは千尋の龍（の脱歟）は見えつらん　景恵
かくしてとけるこのりの庭　你阿
すむ里は神垣ちかきあたりにて　紹巴
とめるめくみをいのらぬはなし　元理
藤氏の末葉なからも陰茂み　滋成
かすみかゝれる大原の山　景恵
炭竈の煙は春も消やらて　珠長

寒のこりつゝ雪ふかき比　紹巴
わつかなる澤のねせりは求わひ　仍景
月うちはふきたてる水鳥　你阿
ぬしもなき舟はかたよる夕波に　能誓
むかひに遠き里のかよひち　清譽
ニウラ岡のへの松の葉こしの峯の庵　紹巴
とひこぬもたゝうらみとはせし　道九
妹かりは虎の臥野を中にして　元理
かせ冷しくわたるくれ竹　頼喜
槿は霜にあかめる色（の脱歟）もおし　心前
むすひなれしはいつまの露　滋成
月ははや有明かたの草まくら　清譽
なけ郭公さてもつれなき　你阿
春にやはおくれて花の殘らまし　玄哉
梅か香よりもあら玉の年　仍景
山かせの音にはしはし霞かね　能誓
舟はほのかにたゝよひて行　紹巴
鹽時やせとこす波のはやからし　滋成
千鳥の聲は半天にのみ　心前
三丙冬の夜の寒さこそとね覺して　守仙
かきおこしたる床の埋火　景恵

櫂おり行ひむすふあかつきに　紹巴
苔のころもは露のまに〳〵　能誓
岩や戸のうちは雫も霧ふりて　仍景
雲より月はもりそむる暮　玄哉
ちらぬ間は山をもかくす花盛　紹巴
わつかにかゝる春の藤波　清譽
住江や海邊も春の朝ほらけ　源應
遠里小野の霞はれ行　珠長
雨はまた軒はの竹に打そよき　元理
吹いてけるもかせのたえ〳〵　滋成
誰か笛の逸に成てきこゆらん　你阿
馬草ををひて先かへるさと　玄哉
日くるれはつなき置たる川舟に　清譽
夏をわするゝ水の岸かけ　珠長
草茂る中に山吹の花咲て　心前
すむ里あれや道の一すち　你阿
仙人もまきれ出つゝ立市に　元理
くむにいかてかつきぬさかつき　仍景
歌はたゝ心のなしとしるかれや　紹巴
やはらくにもそ國はおさまる　景恵

紹巴十三　元理七　你阿九
能誓六　仍景十　頼喜三
滋成八　源應三　心前七
清譽六　玄哉七　珠長五
景恵八　道九二　守仙四
文阿一

何草第十

空に鳴てこもらん峯や夏の月　景恵
木くらきかたへ水鶏なく比　清譽
雨は猶流のするに音そひて　道九
とくる氷や春しらすらん　心前
野邊は今所〳〵の下萌に　能誓
霞のあさけ駒いはふなり　紹巴
打はらひ跡より袖の雪散て　你阿
かへるささむみをくる松かせ　滋成
入逢の響は遠きかけ橋に　仍景
夕日をなかす山川の末　元理
水上や爪木こりつむ舟見えて　玄哉
市は野中に道つゝくらし　源應
誰となく笠のはならふ數多み　守仙

うふる田おさの遠近の袖　顯喜
ゆたかさの家居もしるく住なして　珠長
里はあしたの煙こそたて　晉阿
吳竹によるの霜をや殘すらん　清譽
吹しきりたるかけの山かせ　景憲
かすむ日も暮はてぬれは月見えて　心前
靜にかへる道のへの春　道九
磯つたひよると斗の花の波　紹巴
羽をよはけなる鳥のあはれさ　能蓄
二丙 朝霧の雫も露もしめる野に　滋成
いつくに秋は先しくるらん　你阿
冷しきをとは嵐の一とをり　源應
ね覺の後そいとゝ夜なかき　玄哉
むかししる月こそ老の友ならめ　元理
くちはてけりなよもきふの松　紹巴
かき置も霜の落葉は燒侘て　玄哉
山下道はふむ跡もなし　珠長
とちにけり結ひし夏も杉の門　紹巴
のこる氷室は岩のかたはら　仍景
うつる日の影も幽に暮そめて　清譽
竹のおくなる家鳩の聲　紹阿

古窓は思ひやるたに物さひし　紹巴
それかあらぬかともし火のもと　心前
ウラ うち向ひ手をあらそへる亂碁に　清譽
もろこし人のいかにかしこき　紹巴
まほろしの姿にたにもなくさめて　仍景
誠ならねとそふこゝちする　元理
衣の香のあやしき斗留る身に　玄哉
とかめは思ひ何とこたへん　能蓄
あけやらぬ槇の戸口を行かへり　心前
巣をくふ鳥や人をいとへる　景憲
霞猶ふかむる山の谷かくれ　滋成
雪けしらるゝ白波のをと〔か脫歟〕　道九、
龍田川花もやつれてなるらん　你阿
糸にみたれし青柳の陰　仍景
秋かせの月は簾の釣はりに　紹巴
あたため酒や詩の友となる　玄哉
三丙 唐衣打なかむるや歌こゝろ　元理
とはんけしきも似たる夕暮　景憲
かならすと契ぬをたに憑れて　能蓄
あひやとりをもわかれ行人　滋成
誰か又此世に住ははてなまし　源應

みたるゝ時はねかふおく山　紹巴
いつくまて花に風なき陰ならん　仍景
おほふ霞を木帳ともかな　玄哉
わきも子を打つれ春の野遊に　紹巴
人にしのはん事もわすれき　你阿
月待といふへき袖は涙にて　景恵
おもふあたりにふかす秋の夜　仍景
ともなふも虫の音しけき小萩原　心前
立ともかへす小鹿たつなり　能誉
（三ウラ）霧は猶明はつるまて晴やらて　頼喜
たゝ空にしも富士のねの雪　紹巴
浦かけて行ともおなし舟の上　你阿
うきさすらへのかへらんはいつ　元理
たつかなく成もてくれはあちきなし　清誉
親ある程の中はむつまし　仍景
糸竹も曳とゝのふる心見に　玄哉
軒のひま／＼かゝる篠蟹　滋成
名はそれとわかぬ夏虫飛散て　紹巴
常にけたしの灯の影　玄哉
はかなさの後の闇路をわふる身に　景恵
こへん日数ははやはつか山　清誉

隔なく照せる月の都出て　你阿
じはしか程の秋かせの雲　心前
（ま内）涼しやと立やすらへはひやゝかに　滋成
あたりは袖も落瀧津波　紹巴
明暮の床の哀をみせはやな　仍景
ふるされはてし人はうらめし　源應
行末は何とならの都かた　景恵
さける櫻も風はゆるさし　能誉
一枝はしひても手折花なれや　玄哉
春の名殘もけふのみの空　你阿
深草や立のほりたる夕霞　紹巴
狩場の鳥の聲はいつらは　心前
廣き野や月に成まて分ぬらん　清誉
露をあらしのためぬ高萱　能誉
まはらなる庵りの中は秋寒み　仍景
干かたかりけりあらふ衣手　滋成
（まウラ）河つらは井せきの上も波かけて　心前
うちはふきつゝならふ白鷺　景恵
見るまゝにかたへよりほの暮渡り　守仙
むらの煙そかせによこきる　仍景
はるかなる高嶺は雲の晴ぬ日に　珠長

まなく時雨の山めくりする　玄哉
川音や限もあらすのこるらん　元理
つくりつゝくる里の千町田　紹巴

景恵八　仍景十　清譽六
元理六　道九三　玄哉十
心前八　源應四　能晳七
守仙二　紹巴十四　賴喜三
你阿八　珠長三　滋成七
晉阿一

何水追加

靜なる溪の戸たゝく水鷄哉　守仙
あけかたふかき月の夏山　澄賢

立ならふ松によこ雲引すてゝ　文阿
嵐のかせのいつち過らん　仍景
しくれかと見えしは野邊の初雪に　景祐
かりの宿りも出かてになる　小労
旅はたゝ遠近人に馴〳〵て　重祐
數はあまたの醉のさかつき　景恵

永祿七甲子五月十二日

右落字共可有候へ共如本寫之畢。
元龜二年春より九月十八日迄ニ書之。
眞種筆

【右石山千句舊本闕今以連歌合集補之】

續群書類從巻第四百七十九

連歌部九

出陣千句

於豆州参嶋社頭獨吟千句

何人第一　永正元拾月二十五日　　　　　氏親

たなひくや千里も爰の春霞
　ほかもたつねし梅にほふかけ
鶯のなれ來る朝戸しつかにて
　日もほのめきぬ雪の山もと
おきて誰月さむき嶺を越つらん
　わけしあとある秋のさゝはら
むしの音も所々の野は枯て
　露の名殘やゆふへなるらん
すさましき雲もとまらぬ一時雨
　さわくはかりのなみのをちかた
舟よする村の海士の子こゑ／＼に
　よるのしるへやともす火の影
たゆみなくまなふ道こそ哀なれ
　やすまは山や人にをくれん
すつる身は花の影をもおもふなよ
　春のなさけもむかし成りけり
浦かすむ志賀の都の跡とをみ
　かねに月すむ三井のふる寺
汲あくるあかつきとの秋ふけて
　いまはこゝろよ露も殘さし
あふたひにうらみはいつかはてならん
二　うきもつらきもちきりならすや
わか里とおもふに世をもなくさめて

あさちか末にをくるとし〳〵
花のみや春てふはるは又さかん
　昨日は雪のかすむみよし野
ねにそなく行も歸るも天津鴈
　人になこりのあるもはかなし
かす〳〵にうきを何とてしたふらん
　秋はゆふへのふる里のつゆ
旅の袖月にしほれぬ空もなし
　ころもうつ成風そ身にしむ
すかはらやふしみにも誰すみぬらん
　神もいにしへ戀しからしや
まつりせし日はほとへぬも跡さひし
　みすのあふひよいつか枯けん
二ノウ 花にさく庭のとこ夏おりをえて
　いもと我かねし夜半もなつかし
さめぬれは野原の夢の草枕
　かなしき物は月に山かせ
かりにふく柴を栖の秋の暮
　かくてもへぬる身をいかにせん
老はてゝたゝかた糸を玉の緒に
　あふ事いさや又のちのはる

かさすをも人なとかめそさくら花
　野をかり衣かすみたつころ
かくるれと子をおもふ雉子の鳴聲に
　あらはれぬともしらぬをろかさ
たひとにかきまかへつる文もうし
　たれにか君かこゝろうつさん
三 今もそのかしこき人の世々の跡
　筆にそふるき事も殘れる
秋とてやかへに聲するきり〳〵す
　露しけくなる草もいつまて
月を見し行來たえぬる道のへに
　ひとり夜ふくる中の川舟
千鳥鳴そらいかはかりさえぬらん
　住あらしたる須磨のせき守
わくらはにとふ人つても待侘ぬ
　都のとをきたひそしらるゝ
わかるへくおもふよりはや涙おち
　雪はかしらにふれるちゝはゝ
存命てはこくむ世やはあたならん
　のりに菜をつみ水むすふ山
三ノウ 朝こほり苔の袖にもとけ初て

岩のはさまも春は見えけり
しつか成聲々鳥のかたらひに
　あくるもしらぬちきりうれしも
秋の夜の千夜もあくとは猶あらし
　かたふくのみそ月はかなしき
いつよりかかけしよはゐの末の露
　ほとなやかるゝ若草のはら
春日野をもるは冬こそひまならめ
　嶺のあらしの庵ちかきをと
うき事をきかぬ斗そ山のおく
　さひしさのみはならひこそせめ
たつねきて花待とをの木本に
　いたつらにしもなかき日くらし
名殘
霞さへたのめぬ空はうらみにて
　せめてなかむとしらせたにせは
又誰か山の端ちかき月の友
　秋もいまはのあらましの末
よもきふにたへす松虫聲すなり
　はらふも見えぬ道芝のつゆ
はつ雪やつもるはかりの跡ならん
　おりにあひたる今日の御かり場

代をかさねつかへ來にけり翁さひ
　ふかきめくみに身をやかくさぬ
侘ぬれはほたしのなきもせめてにて
　こゝろほそしやおもひいる山
水ならて何か音する道ならん
　苔むし渡るはしの一すち
松見れは蔦はふ岩に紅葉して
　戸ほそおちたる軒は秋かせ
ともし火はたへて月のみ白き夜に
　いつちなり行ほたる成らん
うつせみのはてたにからは有世にて
　うすきは人の命成りけり
をもくする岩に武士年も經ぬ
　ゆみをふくろに國そおさまる

白何第二　　永正元拾廿五日

青柳やかけそふ三島ゆふかつら
　こほりとけすむ松の池水
月のもと見る／＼いく夜霞らん
　草のまくらにとをさかる夢
秋の野は嵐を袖にかた敷と
　露しけからぬやとりやはせし

鹿の音をともなふ山の暮とに
　あとは木の葉も道うつむなり
ウ
水草ゐし古えは船もさしやらて
　浪こそ見えねいつちよすらん
はる〳〵となきたるあさのうち霞み
　いたらぬもなき春のをちこち
鶯のさそふに人のあくかれて
　ねすへしけりと夜をそおとろく
忍し歸るさにしも名やたゝん
　戀路のうへはこゝろつくさし
おもひする身にはうき世も何にならて
　たれ行山のおくたつぬらん
嶺の雪いく重ともなくふみならし
　つま木こりつむ年は暮けり
傳にたに都はきかぬ庵しめて
　さする床しき友はあらすや（か點）
ニ
老くちて花をも忘れはつる身に
　見る目に何かかすみのこれる
朝な〳〵吹風ゆるく春は來て
　波をわか世とうかふつりふね
引とつる芦屋のなたは人もなし
　ほたるやひとり夜るはもゆらん
たまさかのあふ事かたる手枕に
　ほとなの月やにしにこそなれ
秋ふかき音羽の木末をくら山
　ふもとの野へは露しくれつゝ
暮ぬれは我か家路とやかへるらん
　水さむけなる澤の牛の子
かつ殘る冬草見れは霜置て
　いかなる花そさけるなてしこ
ニノウ
山かつの垣ほならては住もなし（か點）
　こゝをまとのかたゐなるとや
くれ竹に一むらすゝめ聲はして
　日もおちかたの道の邊の暮
かせや秋すゝしく成ぬたひ衣
　野は露けしやいつくにかねん
枕せはちらまくおしき花すゝき
　月やのちみむかた見なるへき
別のみはつともよしや契をけ
　又はいのちのすゑもたのます
ゝる時をおもひこし待身はふりぬ
　道にいつ人名をきこへまし

行々もこたへせぬにやよふこ鳥
　おくなをかすむ春の山こへ
三
そことなく畑屋へ煙立そひて
　しつ屋の花はたれか見るらん
哀にもかた枝さく梅冬かれに
　うつみ火ちかきかたやのとけき
ふくる夜はしはふく人もまとろみて
　おき居にこゝろなとゆるすらん
しられつる忍ひあるきもはかなしや
　ふりにし跡をなをみわの神
誰もこのおもふほとけははつ瀬山
　おのへのかねの入相のこゑ
今日もたゝ暮ぬと云ひていたつらに
　又や夜ふかく目のみさめまし
心なく月にもねやの内にして
　露を見えしの袖そかなしき
三ノウ
秋ゆへの事に戀やはなされまし
　人の身にしむおもひとをしれ
なをさりに何物のけの名のりせん
　ちからをつくしいのるこゑ〳〵
峯々にとを山ふしのまいりきて
　こけのむしろにひとねふりしつ
おち瀧津水に暮せは夏もなし
　ふち山ふきはなを春のいろ
歸るさの柴かりさわらひおりそへて
　けふりにかすむ庵のさひしさ
いかに誰宮古をおもひはなるらん
　旅にしも身のなからへ（も脱）はうし
わか分し野山の露ときへとせて
　月にそかこつやつれゆく袖
名残
いくとせを秋の嵐にをくるらん
　かりにつけたるふる里のふみ
又きくも雲井はかりの音信に
　めくりやあふとなをたのむ人
名はかはる三のくるまはのらまほし
　うしやおもひの家のくるしひ
爰はかせかしこは雨の板ひさし
　松に木ふかき山のした道
おそろしやこやふくろふの聲ならん
　誰とかねまし月はふけけり
さりともの人に秋の夜猶なかし
　うきにはへたる露の玉の緒

むし音もはたかり侘て寒き野に
なにのうへにはやすき世をみん
住(ナヲ)へくは蓮の中をねかへたゝ
水はにごりにしまんものかは
土さへもかたよる斗瀧おちて
石をはしとやふみてわたらん
たきゝこる道もつゝかす山ふかみ
見てのみ花やたちかへるへき
櫻さく吉野をたのむ宿とせよ
春にこゝろのあるもしらるゝ

何袋第三　永正元拾廿五日

花さかり誰かおほゆる日數かな
春は野山に暮す旅人
嶺の雪かつきえしよりこえ初て
なを音たかし瀧津岩波
立すゝむかけや夕に成ぬらん
道の邊とをみ袖かへる(寸眠歟)みゆ
吹しきる嵐に駒もやらはて
いつち行てかすくるむら雨
(ウ)しほりしと花をりもてる秋の野に
日はいりはてつ月になるそら
山の端は霧のまかきやへたつらん
をち方人も見えぬこのさと
とまりせん舟に浦波あれ暮し
うかひつゝみなをくる世の中(君歟)
をもきとかあるをもめくむ岩にして
たゝさぬになを道そをさまる
戸さしせて行來の關も古ぬらん
雨はすゝかの山の木の葉か
いくせともしらぬ川音さ夜ふけて
枕にちかき月のしつけさ
きり〳〵すあなかましはしまとろまん
露のたのみはやすむおもひそ
(ニ)つく杖のほかはかゝらん老ならて
なにを待てふいのちともなし
花はみなちりにしそのゝ春草に
かつ〳〵ましるすみれこそさけ
霞む野にあかすは又やねてゆかん
ふる里人そこゝろをくへき
事とふも今はおほくの年を經て
わすられにしもちきりありけり
昔より猶むつましくなりやせん

見るもかはらぬ志賀のはま松
月にこよひ程とをかりし舟よせて
秋やかたらふかりふしのとも
虫の音も草の枕をしほる野に
こゝろのあるをあはれともきけ
よそにても世をいとふ人にたくへかし
ほとはるかなる山里のいほ
さひしさをほの見するかの夕煙
かすみもしるきしほかまの浦
こきわたる舟にも春の事とはん
いつくにとてかかへる雁かね
小萩はら下葉色つく秋はきて
月にいく夜をいねかてにせん
かこははや野分にあれし宿もうし
また山かけは時雨もそする
なか空のたかねにけさは雪晴て
とをき木末や雲間なるらん
なる神はしつまり行と稲ひかり
こゝろさはかす中はうらめし
おもひたへぬる夜も人の面影に
なくさむほとの夢のはかなさ

よしや世もなからへはこそつらからめ
けふあすとなるあらましの道
いつかはと過る月日をかそへきて
春たちしより花そまたるゝ
去年うつす種は二葉の山さくら
はねならはせるうくひすそなく
このあしたほの〳〵かすむ野に出て
旅はいつくと分里もなし
やとりせてさそはゝ月も夜るも行
秋かせはけし夢もやはみん
衣うつひゝきもいたくふけはてゝ
たれあさちふの露はらふらん
おもひたにかけれはとはん人もいさ
をのさま〳〵にうらみもそせし
いつれかはよいゐの末にならさらん
うきをひとりと身をもかくさし
草の庵すむにやすきをしらせはや
あらしもなるゝ山のあさ夕
霜まよふ冬になら柴ちりやらて
又ひとしきりあられふるなり
月見れは村雲かけてさゆる夜に

なけほとゝきす空もふけけり
忍ふへきたそかれもはや時過て
何にまたるゝこゝろなるらん
いそくなよさのみかきりは遠からし
あしもやすめす道そくるしき
一はし誰やすらひてわたるらん
ふかきそこなる水もおそろし
しつみけん跡さへ宇治のはやき瀬に
かす／＼くつる秋のもみち葉
夜な／＼の月に露霜ふりそへて
野寺はとをきかねもすさまし
おきて誰あかつきしらぬ里ならん
人に別をおしむ世そうき
つゐに行道より戀ははかなくて
つく／＼おもふそらはゆふくれ
かけろふや身のおも影と成ぬらん
あるかなきかの行末とはゝや
をとろへは心のからもそれならて
とをきかとてそうたかはれぬる
誰かやとにかたをたかふる枕せん
宿かおしへし道おろかなり

たつぬれは鴨の草くき秋更て
岡邊いろこき櫨の一むら
鶴やなを夕日かくれに殘るらん
ふゆきてかはるかせは木からし
年もはやたのめし末のふる里に
ちきりありけりめくりあふ人

山何第四　同廿六

又やなかんきかすかほせは時鳥
うたゝねの間の夜半のみしかき
かり枕袖さへうすきかたしきに
秋をおほゆる月しろきころ
色かへぬみ山も下葉ちり初て
岩になかるゝ水もすさまし
あら磯や又うつしほにけふるらん
苫火たきすて人は音せす
いかになをすゝ（本ノ歟）のしの屋の雪のうち
宮古も冬とかせはけしき
おもひやる心とをしれ旅のそら
いたつらにしも見えん夢かは
たのみこししるしをつけの枕にて
いのりてあへは神そ中たち

つれなくはかはる事もやかたるらん
おかへの松をふるいろ（の字脱歟）
うつの山したはふ蔦にうち時雨
夕霜はらふ月そ身にしむ
千鳥なく夜のふけ行かはいかならん
とをき川原は舟もさしこす
かすか成竹一むらに火は見へて
はなれて住る里はさひしき
誰かこ馬の野かひすてられやせぬらん
いさむこゝろもむかし成りけり
ものゝふのつたふる弓に大和三か（本ノマヽ）
たえせぬ風は家々にして
水ひゝくこの川上の嶺の松
寺はむかひの鐘のあかつき
靜かなる月にしほらはすみの袖
いつからき世の秋をいとはん
おもひいる嵯峨野のおくも鹿鳴て
あらしのゆふへとふ人もなし
花はたゝ雪よりつもる木の本に
いつくを道と春はわかれし
天津かり霞の關やしらさらん

わかたひちきれほとは雲井そ
今來んとおほつかなさをなくさめて（ニノウ）
むねうちさはくよゐの一筆
月に人しのふけしきを見んもうし
露はなみたの老のいにしへ
荻の葉もきゝしに似たる風ならて
山もとすみになれぬ夕暮
都をはおもひはなれついかゝせん
ひたすらあらぬ身とやなさまし
かへり見る世はまた戀もあさかれや
あふにしかへは名やはおしけき
いたつらのうき人とに袖ぬれて
むかひてふかすともし火のもと
出て見む月待ほとのやすらいに
やみに霧ふる秋の舟みち
聲をほにそこはかとなく鴈鳴て
この朝氣より風そさむけき
草のはらいくはつ霜に枯ぬらん
はかなや後はとふ人もいさ
ひと夜をや君か情にかけてまし
數ならはこそうらみしもせん

見すしらすなすもとはり思ひけて
　まなひすてたる文字のゆくすゑ
何わさも御法に入は道ならて
　のちの世ねかふ人のあはれさ
をろかにも竹を柱に柴のいほ
　いかにすまれん雪つもるやま
むすふへき水さへ氷とちはてゝ
　春をのみ待年のくれかた
身のうさも又あらたまる松やみん
　おもひうかるなよもきふのかけ
さやか成夜はの月にも門さして
　秋なとあまり心なき人
かす〳〵に鳴の羽かく音もきけ
　山澤水も袖ぬらしけり
跡さきの雲に時雨る嶺こへて
　かさやとりせん里はをちかた
をそしとも我か妹ならて誰かまたん
　花にあくかれ今日も暮しつ
海士小舟はつ瀬の春の入逢に
　かすむふしみは分いろもなし
呉竹のみとりなからの秋ふけて
　窓をてらせる月は夜な〳〵
まきすてぬ碪音もいく千たひ
　こゝろくたけと山かせそふく
木の葉にも身を知る夕靜にて
　はら〳〵とこそ音もなかれけれ
うき事や空にみつほと成ぬらん
　はしめは水もしつくはかりそ
苔のむす岩に一本松ふりて
　春をのこせる藤さきにけり
たそかれの宿や霞も立よらん
　ひとりなかむる庭の長閑さ
誰となく名殘床敷おちふれて
　よみかく跡もゆへはありけり
まとはさぬ心もきかす戀の道
　われのみ人におもひやはする
長雨もなひく方をやはてはみん
　あらしにならふ嶺のしら雲
夏山はなか〳〵花もちりやらて
　こゑは老つゝうくひすそなく
春をへて住人まれの宮の内
　あたりもかすむ野へとこそなれ

たゝしはしおりたく煙一すちに
身をあたたむる市の朝さけ

何路第五　同廿六日

涼しさを心になかす水もかな
あふきのかせは手にならすのみ
はらはねとふくれは月に雲消て
そらにそひゝく衣うつ聲
野中なる里ひとむらの秋遠み
竹の葉しろし霜まよふ暮
何ならぬ枯木にかへる鳥はねて
山もとけふる江こそ遠けれ
そことなく柴つみ小舟よする日に
誰かすむかたそ蘆ふせりみゆ
世中はみなかりそめとしる物を
旅ねのみやははかなかるへき
あさからぬえにこそあれと契れたゝ
戀はうき身にいかてよらまし
一度はうらみてたゆとたえもせん
ひたやこもりはなにかかひある
露しけき門はむくらにとちられて
よもきかおくも月そさしいる

あらましく野分せし日の暮方に
ゝむら雲いつらまよひはつらん
時鳥跡もとゝめす鳴すてゝ
夢からつゝも誰にとはまし
ニ おき別けさは交たに取も見す
うちふしつゝそ名殘戀しき
おも影はといひかくいふ人ならて
親に子はよく似るはかりなり
汀行鶴の毛衣しろたえに
うす雪ふれしあしのむら〳〵
ふけし夜の月による浪音さえて
誰かはひとりうちもまとろむ
みたれ碁を見る〳〵殘る灯に
くちしもしるきをのゝえのあと
山かつの苔のかよひ路奥ふりて
とふ人なしに花そさきちる
春かせのおふの浦浪あれわたる
霞もやらぬふねのはるけさ
ニノウ いつくともしらぬ別に誰ならん
ひとかたにやは玉ほこのみち
逢事もたよりにみしを契にて

あやなくしもそ物おもひける
人つまになに心なくかけつらん
とらふす野より中はおそろし
嵐吹岩ゝの月にかり枕
身もうくはかり水はすさまし
音きけはとをきしら波秋ふけて
たつ田の山やなを時雨らん
はるかにもたちゐる雲はかつらきや
はてはよそなる人とこそ見め
我たにもうき身を誰かお〔ほ歟〕もはまし
ことはりいとへ年に老にけり
三 行末のあらはあふ世を待も見ん
うへをく花のふる里の春
霞む野は住とし方の名殘にて
雪きえおつるをちの山みつ
なかれあふこなたかなたの瀧の音
なみたもよをす夜半のしつけき
月をわかむかしかたりの人にして
とへとこたへすたゝ秋の風
松むしも行は鳴聲かるゝ〔み脱歟〕野に
つれなきたれをたのそめけん

旅の空猶東路のはてはなし
いつくこゝろよとまるかたある
うら山し空行雲にならははや
きえん世をさへ身にそまかせぬ
三ノウ 今日かあすとはおもへとも存命て
又いりあひの鐘をこそきけ
またしとのうらみも末やかはるらん
われもいつはり心とをしれ
大かたの秋に涙をいひそめて
つゐによし野のおくの夕暮
さそはれし聲もそちきるよふこ鳥
をちこちわかすかすむ川舟
打わたす人の行末も春見へて
道の邊つゝく青柳のかけ
梅さきて垣ね色こき里ことに
誰かともなひやすくすくらん
やもめにて世をふることそは戀しけれ
おもふをえすは又もたのまし
名殘 いかなれや心をそめしその行末
すみのころもをあらましのはて
とやかくとねかふにたかきねさめして

月のしるへき空もはかなし
廣澤やなかめ捨つる秋の水
あとは露けき山里のみち
木の葉くち冬草青き岩かねに
春の色そふ松かせそふく
春日野の霞も神のめくみにて
代にあふ人はけしきのとけし
さし入の砌にきはふ殿つくり
都のほかそ見るもさひしき
心たにあらは大原をのゝおく
靜にをくれ身はすてすとも
おもふ事なくは月日も遠からん
待にいく度いそく夕立
使にもおほつかなさを猶云ひて
文をつけたる花なちらしそ
おりそふる爪木わらひの音信に
奥山すみも春はしりけり
かしこきもおさまる時は又いてゝ
ふるきにかへる君か代の道
初何第六　　同廿六日
けふ立や風もさやけき月の秋

露は木草の行末のいろ
時雨るへき山路の夕鹿鳴て
をのへをとをみかへる里人
鐘の聲いつく聞えぬ方ならん
夜ふけしつかに空はすみけり
笠鷺のわたす橋かと霜さへて
川つら白き水のひとすち
木の本はいつれの花のなかるらん
殘る里なく春くるゝ比
分なれし袖を霞のかた見にて
又きりまよふ秋の野の道
こほれつる月の下露村々に
しほれぬもあるあさかほの色
山かつのうすき垣ほのうらおもて
何にかくすと身をおもふらん
いとはれてつれ〳〵見えん世はつらし
さらはわするゝ事ををしへよ
をろか成心も戀はしるものを
なきかとくに人なくたしそ
我か恨苔のしたにもうつもれし
おもひをかるゝ春秋のあと

月のみやあはれしのはん友ならん
山のおくしめ松むしそなく
この比の朝夕露に野は枯て
見れはほのかに殘るともし火
末までもさすかまなひはたへさりき
あとはいよ〳〵むかし戀しも
とをさかる事とひかはせ都鳥
月日にそへて旅そかなしき
そのきはゝおもふ名殘もなをさりに
心まとひし花のわかれ路
けふ見つる櫻は雪に鐘なりて
かた山てらの松のさひしさ
里々は年をこえぬといはふ世に
なりわひしるき四方の國たみ
ニノウ
鈴舟に秋の御調をとりつみて
月さやかなりとをき馬屋地
霧はれて夜る行方やしらるらん
またきみ山の明ほのゝそら
風しほる一むらからす松にねて
ものさはかしやたちそ別る
何に人ぬさも取あへすいそくらん

けふをまちつゝ神まつるさと
契せし數あらはさはつみもなし
いつかしのはてあふ夜なりけん
月ゆへと行かへるをも成しはてゝ
又ふみならすまへのたなはし
誰かかたの便に山をたつねらん
とはむ里なき峯のをちこち
見すは花おもふもあたらさくらにて
かすみのうちは何かしられん
名殘ある雁もこゑせよ浪のうへ
浦は難波をあたにすきめや
いさゝらは人をこやとも云てみん
我のみとひし夜な〳〵の道
忘すは後世てらせ秋の月
霧もこゝろのやみそかなしき
鳴むしもあるにもえつゝとふ螢
おなし野邊成すゑの澤水
年とにかへすあら小田春をえて
かすめはふるの山としもなし
吹しほる嵐も杉の長閑きに
たつねよ人のまかふ道かは

三ノウ
心よりほかはしるへき誰ならん
　あひみておもふ事かたらはや
うきもそれひとしからぬは分かたし
　老のうらみは老そことはる
なかむれとこたへぬ月にむかひゐて
　すみた川原も秋はふけけり
かきりなく露分なれしむさし野に
　旅にや袖はしほれはつらん
都人かへる夕は夜をかけて
　さきをひさはく小車のをと
しつかにと見るは命か花のもと
　かすみそとつる山ふかき庵
朝との霜も殘らぬ春はきて
　いけるはかりの夜半のうつみ火
名殘
我いのちきへすはありと誰しらん
　この世のほかの住居せまほし
軒は柴衣は岩の苔をきて
　見せはやかゝる山のありさま
さむしろにいつまてはらふちりならん
　とはぬにつもる秋の夜そうき
月ひとり分ていく田の森の露
　木の間風ふき色かはるかけ
蟬の羽のうすきを夏の袂にて
　けふは（か脱歟）すみも立かふるそら
山のはの雲も春をや見せぬらん
　ゆく水ぬるみ雨こまかなり
ぬるゝをも舟におもはすさほさして
　夜もふけにたり妹かりのみち
月さゆる中のかよひのうきもしれ
　あはれの夢や何と見えけん
なれしをも忘る斗のいにしへに
　身を誰かさてもそれといわまし
木たかしや我か世に植しそのゝ桃
　花さく年にあふもまれなり
存命は又もやかゝる春もへん
　よはゐの末も若水のかけ

朝何第七　同廿六日

霧もやは立をよふ富士の秋の雪
　月は淸見かいそのゆふなみ
海士衣なれもうつやと浦さへて
　霜に雁鳴夜こそしろけれ
まちとられ竹に風さへふけわたり

ひとり目さます窓の涼しさ
いつちとか行てほたるのきへぬらん
草葉を見れはなひかぬはなし
朝なく野は春雨の跡しるく
かすみのすゑはたゝけふる色
水ぬるむとを山もとは里に似て
かへしすてたるしつのあら小田
めくみある世にたに何を侘ぬらん
かきもおもへはこゝろ成りけり
大かたは誰か詠むるも秋の空
なみたの袖は月そわくへき
長夜の恨をいふは戀なれや
あかしかぬるを立もきけかし
つくくと身の老ぬるをかなしひて
つえはかりこそちからともなれ
山道や駒はをり立花のかけ
やすらひてくらすわか春の友
心さへ行水清くかすむ野に
天の川ともこゝをこそ見め
宿からは月を今宵の主にて
せきこえとをき秋の旅人

かへり見る木末そ名殘下紅葉
時雨にたえねしかの一こゑ
あはれ身をいか成つまにつくすらん
はるく來てもあふ事そなき
行かへる道の空にてきえねたゝ
かゝる物おもふ跡もはつかし
うきふしをとすれは筆のすさひにて
つれく月日をくるわひ人
かそふれは六十の暮も近付て
しのふはかりは何かおもひ出
たちなるゝ陰をは花も忘るなよ
かすみとともに山はこえきぬ
春になををくれけ道やとをからん
ひなのわかれよおもひたにやれ
まはら成海士のとまやの月をみて
かせは枕にあらきはま荻
秋の袖なくや千鳥もぬらすらん
ゆふ暮さひし霜まよふ空
野邊はみなそこはかとなく冬枯て
誰すむへくもあらぬ山さと
いかはかり世はつらけれはいとふらん

命のうちもあはれいくほと
そひはてねたゝはいもせの名もかなし
　心なかきもちきりにそ見ん
三 忘ぬにうときもさすかにくからて
　雪のあしたの人のをとつれ
打そふる炭に爪木の一つかね
　かた枝かつさく梅もありけり
野邊ちかき藪に鶯やとりして
　みやこの春をいかてしらまし
別なん山も霞のいくさかひ
　かりねをちきる嶺のよこ雲
月もたゝ人待床に明そめて
　おきゐる萩の露そともなふ
むしの夢あかすも何をうらむらん
　我はわか身を秋の夕くれ
つらきをも誰おもふへき老ならて
　のちの世ちかしうちもをとろけ
二ノウ 石の火のその間もおしき行末に
　眞柴たきすて山こゆる人
ふかき夜のさむき嵐にたへ侘て
　こほれる月にさるさけふこゑ

しつかにて山もうこかぬ江のほとり
　さほよこたへてねふる舟はた
繪に見るもたゝさなからのおも影に
　名さへつるきの山はおそろし
秋の霜さかしき嶺をふり敷て
　きりはれのほる中のかけはし
かすかなり野分せし夜の朝日影
　木の葉むら〳〵かつそちりそふ
草の戸のまへのほそ道たえ〳〵に
　とふ人さへや心あるとも
名殘 さしあはせかたるはきくも浦山し
　いか成事をちきりをくらん
末の世はなをとをかれや神と君
　たへむわさかはやまとこの葉
春ごとに青柳の糸打はへて
　くち木ともなく花はさきけり
山かすむおくは柚屋の數々に
　誰か家つくるはしらともなし
よひ〳〵のしけき蚊のこゑふけやらて
　ふすふるのみそむねにくるしき
何事にいはては人のとたゆらん

おもひをさせてよそに見むとや
ほのめかす後は中立よりもこす
月まちいつる暮のいなつま
かせわたる淺茅か末も秋ふけて
色つきそむる木々の下露
岩のうへつもれは水やなかるらん
山のふかきをしる人もなし
何ならぬこゑにあまひとたへして
ふる宮ところいかゝすまれん
八雲たついつもに行て神無月
木からししらぬ松みさほにて

薄何第八　同廿七日

契きや時は長月花はきく
けさをく露にはつ雁の聲
山の端の霧のをちこち野は見えて
水ひろき江の秋のさむけさ
出いりの松の葉こしのあま小舟
日もおちかゝる里の一むら
鐘に誰やとりかるへくいそくらん
はらふはかりに雪のふりきぬ
夜もすからきゝし嵐の明初て
別る雲に山さたかなり
名殘うきなみたをいかて忍はまし
又とかいひし人のことの葉
一度をちきりとやせんたえやせん
あひみて冬のおもひとそなる
きゝしよりまさるにいとゝあくかれて
なかてはいつかゆくほとゝきす
村雨は杉の木間の有明に
あかつきおきも秋のふるてら
心すむこの山水を身にしめて
やすむに嶺のくるしさもなし
やすらへはわする斗の旅のそら
都のほかも情しるやと
ひと本にあるししらるゝ花さきて
しめゆひをきし梅はおらせし
いたつらに行て春野や暮さまし
隙あり氣なる人ののとけさ
心にはたえぬおもひをもちけちて
年へにけりなたのみこし中
かりそめの逢ふ夜の夢と覺すなよ
ほの〳〵明る手枕の月

敷袖もうす花すゝき露おちて
　山のかけ野はあき風そふく
日暮の嶺にたゝすむ夕すゝみ
　行かへる里はうちけふりつゝ
呉竹に舟引つなく渡し守
　しはし時雨る晴間まつほと
たのめしはゝやとはしとやおもふらん
　身のうきさまそ見へてくやしき
君かため我か面影やつくもかみ
　なを戀ふらしといとひもやする
傳をたにおく山住にかきたえて
　幾日ともなき五月雨のころ
夕暮はいか成雲のまよふらん
　舟あはれなる大海のはら
旅の空もろこし□（は歟）かりはるかにて
　かへらん道やおもひたゆらん
苗代に一ふたつの春のかり
　霞もさひし山もとの里
雨に今朝しつかつまなし花咲て
　なりもならす（も歟）身をやたのまん
新尋天にまかする世間に

　いつれの神もちからそへつゝ
又みれはふとしきたつる宮柱
　いくひとむかし我もあふかん
命こそあた成物のつれなけれ
　かゝるおもひをしてもこりせす
なをもうき名をや立なむいかならん
　ひとりにしもはこゝろとまらす
家々をあふくに道のおく見えて
　かきりなき書は和歌にこそあれ
すり衣それやしのふにみたるらん
　秋の花野の露わくるあと
行暮しをち方人は月にねて
　みしかき夢に夜は長きころ
三ノウ
何事も更におもふもつきかたし
　こゝろこそおくしらまほしけれ
つれなくてはてはいひてもかひなしや
　いさむる道やみゝにさかはん
人とに似たるこそみな友ならめ
　くもらぬ物はかゝみ成りけり
大空に今夜みちたる月さえて
　夕しほさひし千鳥鳴こえ

風見れは一むらあしに打そよき
　磯のうへなる岩の山松
綸にもこの霞の朝けかゝれめや
　なにをか春のすかたともせん
誰もたゝ名はさほ姫ときくはかり
　雨すゝきぬらし衣ほす見ゆ
〔名殘〕曇こし空ともあらす夏のきて
　ひとつみとりのをちこちの山
池水を海なる磯としをへぬ
　おもひそまかふふる里のあと
かゝる世に殘るも夢か誰ならん
　昨日もしらす今日もはかなし
花の色をうちなけきつゝこもりゐて
　春を暮ぬといつちたつねん
なかむれは猶とを山はかすむるに
　おもひ侍ぬとつけもこさはや
とひやせん待もやみんの夜は更て
　月たにかたれ誰とかはねん
風きけは荻の音する草の庵
　〔き風歟〕いつとわかねと秋そしらるゝ
さひしはときはの山のかけにして
　人目たえたるすまゐかなしも
しつけさはねかふにかなふ身成けん
　こゝろさはかす中はくるしな
濕[?]む夜はとはすおもはぬ折はきて
　夢に見へても袖ぬらしけり
名殘さへゆかしきはかり立別
　のる小馬いはへかとてする見ゆ

夕何第九　　同廿七日

いく夜みし光そ月の朝こほり
　松にみきはの風さゆる比
村千鳥いつちと渡る夢ならん
　ね覺のそらははるかにそなる
明ぬやと軒のひま〳〵今見えて
　しのふにあまる露そこほるゝ
荻の音うちそよめきて人もなし
　まつ山かけに秋は來にけり
夏の日は末の原野の暮[?]そめて
　雨は名殘もなきそすゝしき
とふほたるふして見る夜のやすらいに
　おもひうかるゝ玉や行らん
別こし都のかたは千里にて

いく山のはかこへて跡なる
かきりなき物とそかこつ老の坂
なけきても猶身はあまりあり
世の中の、、、とくも捨もせて
すみてそ庵のやすきをも知
たひとにおりたく柴の夕けふり
よそにも見ゆやたえぬさひしさ
ひとり我かたゝすむかたえ梅咲て
人のくるをそうくひすもなく
霞つゝ山の下道たえ〳〵に
おつるや雪のしつく成るらん
埋み火はふくれとあたりしつかにて
風をへたつる宿のあし垣
夏と秋の行かふほとのあつき日に
ゆふへにさそなあさかほの花
露も多くあかるあゝたは猶もろし
よはりやすら〔む歟〕ほそきむしの音
心たにおほえぬはかり月すみて
なにのなみたの袖ぬらすらん
とをさかる人をは恨はてし身に
ひとりすみにそ世ををくらまし

山かけにさし入ほとの宿しめて
小ふねやすらふ門の青柳
二ノウ
釣たるゝ糸打はえて霞む江に
水のこゝろも春は見えけり
駒いはふ野やしたもえに成ぬらん
やせたるむらそ里つゝきなる
小山田をつくり捨たる跡ふりて
とゝろくかほにたかきよもきふ
木玉よりほかはこたへすわふる身に
人にしられぬ物なおもひそ
うき事をいかゝ（本ノマヽ）なへてをいかゝせん
かきつくしてや筆に見えまし
こまかなる心さしこそあはれなれ
花にすみれをつみそそへたる
春の野に暮すかへるさ打むれて
かすむあたりや都なるらん
船のほる淀の川邊の朝ほらけ
をちこちわかぬ里はいく里
往來にも國のさかへるほと見へて
心をそむる春秋のいろ
この世には空の名殘もいかはかり

　月ゆへつもるくろかみのしも
かきりなくおきゐて物をおもふ夜に
　いか成ひまか身をはやすめん
折にふれ時にあひたるつかへ人
　をとろへ行もならひならすや
秋の花野分の跡を又やみん
　玉ゆらの間も露はとまらす
きり〳〵す袖による〳〵音をそへて
　月にうれふるとはりもしれ
三ノウ ちきらすは身をつくすまて誰待ん
　大かたこそはなかめせしくれ
何にならぬ木末も花にあらはれて
　春のはやしの鳥のこゑ〳〵
霜雪の日影にあへすとけぬらん
　山もみなみそ冬をわするゝ
靜なるこの海つらに舟よせて
　里はなれにや身をかくらまし
人ことのしけきをきくもくるしきに
　つゐにおもひをたへなとそする
今まてはあやうきなから存命て
けをふく世には誰かすまゝし

事にふれ我かしらぬつみをいかゝせん
名殘 　むかふにそうきかゝみなるへき
涙のみ旅行君かかたみにて
　野山の道も人のおも影
篠分し跡は誰か里ちかゝらん
　かきくらしふる雪の明ほの
歸る夜にまたれし恨立きへて
　月のおもはん事もはつかし
夕暮の哀もしらす秋はへぬ
　我か身のもとの露をいつみん
あさちふに心はすみもまたつかて
　ゆき別にしあとはふるさと
いかにしてつもる日數にたへぬらん
　暦のはての年もはかなし
よしあしといふもおもへは夢なれや
　きくに何かは法ならぬみち
松かせに曉ふかく目はさめて
　花のこゝろも山やすむらん
しるしらす人の聲して霞野に
　けふりもしるき春のあさ市
里とに鳥鳴夜半のにしひかし

月におきてやとをぐゆくらん
とまりせし秋の浦舟風をえて
霧にましりし雨は過けり

何木第十　同廿七日

霜なから幾代の鶴か岡の松
ゝゝふてふ夜のほし白き空
曉になるをもしらす月澄て
秋ゆく水よいつく成るらん
舟見れは霧にむせひて跡もなし
あら磯なれや浪のよるをと
住や誰かた山かへる里とをみ
夕暮ふかく雪つもるかと
なかむれはけふる入相かすかにて
ましる花なるをちの青柳
都にも春やとまらす過ぬらん
殘るもしたふかりのひとつら
水さむきしつか秋の田かりやらて
月にいほねしなをやあかさん
なか／＼の露のたのみよたへねたゝ
つゝきにかゝる玉の緒もうし
おしまるゝ人こそあらめ老の末
行かへるともおなし世の中
心をや今は吉野のおくにせん
かけは木ふかく槇たてる庭
さひしさは何の色とも見へやらて
いり日かくれの山もとのみつ
ひとりのみねしやと鷺もいそくらん
あともむら／＼からすとふそら
とをき野も明かたしるく霽晴て
出ることゑする月の旅人
うたゝねに草の枕をむすひすて
あらしになるゝ秋も暮けり
おもふ事大井の里の山ふかみ
水に心やともなひてゆく
花うかふせゝのさかつき取そへて
やよひは誰も名殘こそあれ
おしまるゝ春よいか成春なれや
みなはかなさを夢かとそいふ
まとにはいつおもひしる世ならまし
つらきかためもうらむはかりそ
二
せんかたのなきをもひとり打侘て
三山の庵の秋かせのくれ

した紅葉かつちる木間もる月に
　おりしりかほのさを鹿のこゑ
かりすてゝ人も殘ぬ野をとをみ
　いつちか今日のやとりをはする
行方をおもひやるさへ袖ぬれて
　過こし跡のうさやしのはん
身はさらになからへはともたのまれす
　こゝろは見えつあちきなの世や
又こすはくやしき事もいかゝせん
　きへはやともに別路の露
くすの葉に風さはく夜の月をみて
　秋ふけけりな山里のまつ
三 霧のほる軒はの嶺の朝な〳〵
　渡る袖さへたかきかけはし
かけみつる水ははるかのそこにして
　てる日にも猶いけの涼しき
蓮葉に露は玉こえ雨すきて
　暮る夜とてや螢とふらん
立出て我すむかたのさひしきに
　待と告すは心をそしる
僞になきしはかりの文もうし

　うつろふ花をなに手折けん
山さくら見るにまかひし歸るさに
　霞の中はましるしら雲
春の夜の月はふくれとすみやらて
　枕にきくもとをき川音
三ノウ 舟にみな明日の渡りをおもひわひ
　こゝろつくしは旅にこそあれ
をくれしの人を山路のほたしにて
　うき世なからの年も經にけり
春秋はさすかなくさむ古里よ
　雪のうちにそゆきかたもなき
氷る夜の水は下もやとまるらん
　岩に音するかせのさゝはら
わすれてはとふやと人を待庵に
　月にくれぬる山里のみち
をひかへる爪木に秋の霜置て
　はらふもおなし袖の露けさ
物おもふ心をいつちやりてねん
　身のくるしさやしはしやすむる
名殘 はるかなるかち野の原に駒をえて
　このはま舟にのりやうつらん

行まゝに跡しら波の浦つたひ
　ふきをくらるゝ風の村雨
時鳥まきれはてゝや過つらん
　たそかれときの里とよむ也
月にねん心しらるゝ秋の夜に
　もとあらの萩のかつしほるいろ
暮とに露待空も身にしみて
　野を行人の袖いそくみゆ
鳴海方いく度しほのこえぬらん
　友なし千鳥立居にそなく
打返しいたつらかゝ見あはれにて
　わかさ夜ころもぬれつゝやきん
うちわひておくる朝のやすらいに
　きゝし嵐は嶺のやままつ
ほとゝをく都に入はしつかにて
　めくりよはるを牛の小くるま
つみて行川そひ舟の荷をおもみ
　うかひしつむも折によりけり
春にあふ草木のとく世は成りて
　ふりくるあめの下そ長閑き

此千句に相副奉納申願書。永正始之年秋長月拾二日に。氏親關東に進發之事あり。あしからの八重山を凌。むさし野のかきりなき國之府に馬を立。同月之廿七日に一戰をとけ。勝事を思ひまうこ（本ノマヽ）して。此御神にかへり申の悅したまふ。此度の御祈之ためにはれ歌を千句立願申侍しを。此つゐてにともは思ひ侍れと。ふとの事にてよろしき人數をもとむるに及す。獨吟と云ふ事に成して。第一に發句を氏親に申。第二之三島木綿より鶴か岡の松の霜迄。發句の中に四季をこめて。同冬神無月廿七日にいたりて。誠にぬさもあへすしるし侍るしならし。

何にあらぬとの葉なれともゆふたすき
〔[illegible]〕ゝし心を神にたかへす

続群書類従巻第四百八十

連歌部十

石山百韻 至徳二年十月十八日

月は山風そ時雨に鳰のうみ　二條攝政良基
さゝなみ寒き夜こそ更けれ（ぬイ）　岩坊
松一木あらぬ落葉にあらはれて　周阿
花のすきても殘るあきくさ　通郷
露なから野や初しもに成ぬらん　師綱
きぬたの音は遠里もなし　季尹
柴の庵あれたる庭に鹿鳴て　千若丸
刈田の後のやまさひしき　右大辨
捨て我こゝろとや身を忘るらん　任阿
なをさめかたき夢の世中　忠頼
いつれ先花と老とのあたくらへ　良基
松にさくらのましる木かくれ　惠覺
かすみては月の殘るもすくなきに　頼冬
まくらのかねのちかき明ほの　長遠
別かねたかひにいとふとり啼て　周阿
又とちきるもいさや僞言　隆景
それまでの命もしらぬ戀の身に　石
果はけふりもおしき玉章　良基
等閑に恨しころのしのはれて　通郷
くもる山たにおそき初ゆき　成阿
風のこる檜はらはしものよも置し　景賢
松あるかたはいそく夕くれ　周阿
降雨のこよひを月に干もせて　石
稻葉のくものちかき田上　良基
河音のなみ冷しき網代守　通郷

水の車や瀬をめくるらん　右大辨
流木は杙もさためぬ橋かとよ　師綱
まつくれわたる浮雲の山　千若丸
殘る日の入相おしむ花を見て　良基
にほひすくなきむめの薄雪　賴冬
春やまた朝東風ふいて冴ぬらん　忠賴
けふや初音のさとのうくひす　任阿
我はかく物にかゝる身の袖ぬれて　石
ふたりみはやの手枕の月　師綱
來ぬをなとさのみ夜寒のまたすらん　景賢
夢にふきけりかせの荻はら　成阿
道細き小野の下草うらかれて　任阿
しはしみやこの近き近江路　良基
とはれては身に餘るまて嬉しきに　石
千世萬世とちきるゆくすゑ　忠賴
松はらに道の有ける寺に來て　良基
おくの山猶ふかき隱家　千若丸
捨しより人の住世をいとふ身に　季尹
うらみはいつにすくるあらまし　惠覺
村雲のとき〳〵月に晴なして　通郷
しくれてのこるあきそすくなさ　長遠

露よりもしもこそ染れ遲紅葉　良基
かせも色とる萩やちるらん　石
薄きりの夕の山を絵になして　千若丸
舟路はいつこあとの遠しま　周阿
波よする磯きは越てふる雪に　石
鳴たつ衞友やよふらん　賴冬
宿ことに同し名殘もおしまれて　良基
夢はと絕の春なとめはや　周阿
花はなと我をおもはて散ぬらん　石
むかしはかすむありあけの月　忠賴
早とけよ岩井の氷志賀の山　良基
ふかきちかひは七の御社　任阿
星うたふ神樂乙女のこゑ〳〵に　師綱
庭火のあたり霜や消らん　右大辨
榊葉の枯せぬ枝も風冴て　成阿
しるしの杉を三輪の山本　季尹
旅はけふ初瀬まふてといそく日に　長遠
なみたのこもるそてそしほるゝ　任阿
とてもたつうき名を逢に替もせて　良基
僞まてはたのみある中　成阿
おもへはや夢にも人のかよふらん　良基

まくらぬれそふ獨ねのつき　千若丸
松風の秋閑かにてふくる夜に　季尹
花まてとせんくさのかり庵　周阿
露の身のぬらさぬ袖もよもあらし　石
わすれ果ぬはうきもおもひ出　惠覺
山かけはいかになるゝも寂しくて　成阿
行かたしりぬ谷のみつ音　周阿
苔をふみ松をつたへは道もなし　良基
たれを住とのおくのいはや戸　忠頼
みちか夜はやかて明石の月を見て　石
時しらてなく水のにはとり　良基
軒を行筧やまとをたゝくらん　成阿
山をたえ〳〵みするゆふくも　良基
半より下にはきゆるふしのゆき　師綱
草もはるかにもゆるむさし野　忠頼
ちりもせぬ鎌倉さくら時しらて　石
春はすくるにのこるあつまち　任阿
行くれて關より末やかすむらん　隆景
舟漕よする須磨の柴の戸　良基
浦人やまた汲かぬる汐ひきて　周阿
山なき沖を月やいつらん　師綱

おく霜をそてにふかめてうき秋に　石
尾花をふけはよはる野あらし　景賢
たつ聲の跡に殘るや諸うつら　師綱
かたへはかりははつ鷹のほと　良基
しらてなとこゝろの戀にかゝるらん　季尹
涙みたるゝけさのくろかみ　良基
うき人にあかぬ名殘のいそかれて　石
あふときはかり夜こそおしけれ　周阿
むつことにいかに恨のましるらん　師綱
みてさめやすき夢はおほえす　成阿
横雲をそのまゝ花に明なして　良基
またとちきれるこのやまのはる　右大辨

二條攝政殿十九　頼冬三　長遠三
右大辨四　通郷四　景賢三
成阿八　惠覺三　季尹六
千若丸五　周阿八　隆景二
任阿六　師綱八　忠頼七

（右石山百韻以圖書寮藏本一校了）

三代集作者百韻 於一條殿御會 寶德三年三月

春はけふ夏のとなりの千里かな　大江　經清
かへるをゝくるとりのみち風　小野道風　御
かすみゆく月にしたかふ山くれて　源順　方
關をいてしはよるのたひひと　蟬丸　融源　證
草まくらいつみむゆめをたのむらん　信方　宗砌
あとのみやこそしのふかたなる　昇源　親康
雲のほるあさけの空に雨をちて　源等　寬正
またひとしきり木の葉ちる音　方見大伴　賢盛
ゆく秋のかたみはなにに殘るらん　大輔　壽阿
たゝゆふくれの風はすさまし　源　日晟
いつはりのおほきに月を待かへて　百世大伴　蓮
もゝ夜のゝちもまろねせよとや　紀有朋　御
あふ事はよしやありとも夢の中　源浮　弘阿
なみたにうかふ人のおもかけ　大中臣頼基　源意
誰によりもと身はなけし生田川　乙　方
いそこくふねに浪そをとする　長興

松かけの雪に千鳥やわたるらん　源　證
くれてはみちのふむあともなし　小野春風　親忠
かすみふくをのゝはる風まよふ日に　俊子女　宗砌
としこへなからけふるすみかま　壬生忠見　日晟
山はたゝ三冬のゝちにさへかへり　篁材小野　方
ころもよしきよすてし身そかし　藤　御
うき世には月たにかけもとゝめぬに　安貴王　證
しくるゝ秋や夢さそふらむ　貫香紀　經清
かせわたるこゑもしけき夜鹿鳴て　仲信源朝臣　賢盛
その生の竹も中のふるさと　融源　源意
木のもとのみちよりふかし草の原　列樹春道　長興
とはぬそつらきまつとしらせよ　女　寬正
此ゆふへ文はかりをはかつみせて　高遠大貳　御
たかとをつまの戀しかるらん　當純源　證
唐衣きまさす身をは忘しに　壽阿
これもちきりとうらみてそふる　藤　方
雪しろきすまの山中ふみわけて　宗砌

（秀能）とひてをかへのあかしなるさと　日晟
みる（顕基）そらき枕はからしあまの家　親度
（朝光大納言）朝みつしほのこゆる松かね　御
（藤原）興風にまたいてやらぬかよひふね　證
まよふこの身に（源朝臣）すくる明くれ　壽阿
あ（藤有時）りときく佛の御親さきたてゝ　宗砌
（布留今道）いまみちたえす賀茂の神垣　親忠
あふひ草かつらのみこそしけりけれ　證
花のゝ（藤原千景）ちかけふかきなつやま　經清
月の夜の（平中興）なかきねもかなほとゝきす　弘阿
あやめわかすそなみた（藤）ときふる　寛正
五月雨はのき（頼光源）よりみつのしたゝりて　御
かさ（源賢）ねて雪のころもをるらし　賢盛
天乙女（安国）やすくにきはふたのしみに　日晟
（後生藤）のちふかき身のつみもおもはす　方
したへ（紀友則）とも法のみちには遠さかり　御
（菅原）よしたゝあれよはなつ春こま　宗砌

苅までに岩（元輔清原）もとすけのもえ出て　親忠
雪消しより（清樹）きよきやまみつ　壽阿
ころは（伊衡朝臣女）いま二月さむきあさあらし　長興
い（濟時左大将）なりときけはいのるはつ午　御
おもふ（藤言直）ことなを老か身のさかなるに　證
これたゝくるしなけゝのちの世　宗砌
しるやい（實方藤朝臣）さねかたき床のうき涙　賢盛
（貞名）よし名はたゝし夢にきてとへ　親度
空たのめたか（藤）ため夜をは重ぬらん　證
（景明源左衛門尉）かけあきらかに月いつるくれ　御
ときは（紀秋峯）秋みねもふもともいろ付て　源
ふりぬるてらの庭の（紀長谷雄）はせを葉　日晟
松か（元夏三統）もと夏のあふきをふく風に　御
みつむすふ（[illegible]女）てふ袖やすゝしき　方
（源）いさきよひこゝろにうきをのかれきて　寛正
われ（藤翊臣）たゝ君をあふくともしれ　長興
八百（万男[illegible]）万おきふしねかふいまの世に　親度

まもりたゝしきよるひるの神（守正蔵）　源意
あふさかや此關の戸もひらくらむ（具平親王）　賢盛
わかれになりきせんかたもなし（喜撰法師）　壽阿
たかつねにそはむもしらぬ世に住て（藤）　宗砌
おもひきやうきちきりなりとは（行平）　經清
ちれはたゝ雪をおくりし花の風（忠行）　方
さくらの千本よし野にそみる（二男親王）　賢盛
雁かねのかへるのみかははるすきて（女）　蓮
よるかたいつこいさやしらなみ（在原）　宗砌
おほぬさをきりとゝのふる御祓河（源）　御
よしたかためそらき戀はせし　證
袖かはすなみた一つら行わかれ（紀貫之）　長興
みちしはしけき露わくるやと　賢盛
古宮の木みなもみちの秋ちりて　經清
月かけやこれたかまとのやま（惟喬親王）　寛正
かせにきくおのへのかねもちかき夜に　方
しきふるしけりゆめのさむしろ（式部女）　證

袖そあさやすく身をもつ桑門（文屋）　宗砌
たゝくにあけよこのくわのかと（忠國）（高向）　源意
葉をわかみつめる七種春ことに（紀乳母）　寛正
木の目のとけくあをみゆくそら　日晟
水遠くかすめる大津ふねのきて　壽阿
雪とき／＼のうらのさゝなみ（行平）（壬生忠岑）　祐建
海つらはたゝみねよりや時雨らん（清原）　御
なみたのもろさねたき戀の身（大中臣）　經清
わすれしよしのふも色にいてつへし（在原）　源意
人ゆへむねやなをこかるらむ（大江）　御
衣手にをきとしをける露そうき（弓削）　日晟
よしときゝしは秋よりのつき（凡河内躬恒）　方
なかしてふ夜はゝうしみつねもいらて（土佐）　壽阿
夢とうつゝはとさまかふさま　親度
おもひ出はたゝこれなりき花のはる（行平）　宗砌
つもれるや雪ひらくむめかえ　蓮

御十三　經清朝臣七　賢盛七
長興宿禰五　方九　宗砌十
日晟七　親忠三　證九
親度五　弘阿二　祐建一
蓮三　寬正六　源意六
壽阿七

〔右三代集作者百韻以一本校合〕

以呂波百韻 寶德三年八月十五日

いをねぬや水のもなかの月の秋　御
ろをゝすふねの初鴈のこゑ　方
はるかなる霧まの山は島に似て　砌
にはこそ松のかけもふかけれ　賢盛
ほりうへし荻一もとやしけるらん　專永
へたてぬ袖に風そすゝしき　日晟
とる程は夏のあふきを手になれて　證
ちらすはぬさかいつるたひ人　寬正
りむしにも神まつる日のそのつかひ　經清
ぬるゝ榊の霜そ八重をく　常喜
るりいろのあまのかく山みねはれて　親忠
をるぬししらぬ雲のはころも　壽阿
わかための秋のうつせみなくこゑに　祐建
からくれなゐの露はなみたか　國忠
よもとはし月のむら雨ふり出ぬ　方
たまくらうときあかつきのゆめ　顯惠
れいよりも老やこゝろはよはるらむ　證
その杖になく親のおもひ子　御
つるのゐる岩ねの松のねはくちて　長興
ねの日する野の春はいく千世　親忠
なをいのる君か若年すゑとをく　砌
ららそかすみの軒につゝける　常喜
むま車たてをく門のにきはゐて　眞忠
うしかふ田面ちかき秋草　日晟
ゐてこすも水すさましき河風に　證
のほるは雲や月の中みち　賢盛
おくとをきみののを山もけふ分て　御
くにをあまたの旅のゆくすゑ　顯惠
やとことにけつる櫛をやうたふらん　方
まきをはしらにつくるそま人　砌
けたはかりのこれる橋のくちはてゝ　御

ふるきいたゝの宮のかよひち　寛正
こけを又あとなき雪やうつむらん　親度
えたにこもれる冬の梅か香　長興
てる月のかつらのかけは猶さえて　經清
あきにやかせも光そふらん　專永
さはかしき心のきりのくらき身に　賢盛
きなくこ鳥のゆふ暮のこゑ　御
ゆたねかす田中の春の水ぬるみ　砌
めくみの露に青きわか草　證
みしめひく神かきかすむ春日山　壽阿
しるよしおほきさねかねきこと　顯惠
ゑにかける鼓はうつによもならし　御
ひすやこゝろの瀧の河かみ　專永
もすそにも袖にもかゝるわかなみた　日晟
せけは人めもうらみある中　方
すゑとてもたのまぬ夜半の別ちに　寛正
きえゆくみねのよこ雲の跡　砌
やまはまたまことの雪か花のころ　方
うつる日なみの春そほとなき　常喜
いにしにやをくれて鴈の歸るらん　親忠
ろうは南にむかふ北かせ　御

はつ秋は西にゆふへの月おちて　顯惠
にしたつあとの空のうす霧　證
ほさてもや露の市柴はこふらん　親度
へかたかる世はましはりもうし　砌
ともゝなき山にとおもふ身をすてゝ　御
ちきらは岩に一木あるかけ　賢盛
りつのねの琴のしらへの松風に　壽阿
ぬる玉の緒よ行てあはなむ　日晟
るいにふれつらきにもなをなからへて　御
をそきはならひ人なわすれそ　顯惠
わくらはになくやみやこの郭公　專永
かくてもすまの山のした庵　經清
よもにふく嵐を里に聞わひて　御
たをるさくらにおほふわかそて　砌
れうわうのかへすかけかと日はなかし　賢盛
そもしらきまて春や暮なむ　方
つくし路のすゑ白浪はけしきに　經清
ねよとのかねのみさきなるふね　親忠
なをきくもひゝきのなたの興津かせ　御
らてんの箱にすれる青かゐ　證
むすひをく經の紐軸かすありて　專永

うへなきさとり鉾もおよはす　寛正
ゐてむかふ壁にもなくやきり／＼す　御
のこるよもきのかる丶露霜　常喜
おこしより秋は時雨るいふき山　壽阿
くもるたかねの比良の水うみ　顯惠
やくしほもあらぬ烟は野にたちて　砌
まつむら／＼にいり日さすなり　日晟
けさのまに散けん風の下紅葉　寛正
ふみわけかたし雪のふるみち　親忠
この頃は御幸たえぬるさかの原　長興
えやあはさらむいま一たひも　御
蝶もうし契も夢のたとへにて　方
あたに去ゆく春はしたはし　親度
きためなき雲又かすむ夕まくれ　經清
木にさき草に藤かほるころ　顯惠
ゆひもてるねりそは何そ岩躑躅　壽阿
めくり／＼て山にいる人　證
身をさそへ浮世のよその秋の月　賢盛
鹿はひとりや野へになくらん　祐建
ゑこひする小鷹狩庭のかへるさに　方
日はとりいぬの時にうつれ丶　日晟
もりのこす冬田のいねを又かりて　壽阿
せはきいほりに霜そこりつむ　親度
すみ焼や雪待比に成ぬらん　御
きのふもけふも小野の山かせ　證
やえ雲とみゆる横川の花開て　砌
うすきかすみは月そすみよき　眞忠

御十四	砌九	賢盛六
專永五	日晟六	方八
寛正五	經清五	常喜四
親度五	證八	壽阿六
祐建二	國忠一	顯惠七
長興三	親忠四	眞忠二

〔右以呂波百韻以一本校合〕

將軍家百韻 寛正五年四月廿八日伏見宮渡御時

何路

松や千代萬木しける夏の庭　松
をりにあふちのかけのあさ露　桐

むら雨の雲はのこるに山みえて　藤
月もほのめく初秋のそら　日野大納言
先もるや早田の面のなひくらん　能阿
風もしつかにわたる鴈かね　權輔
友ふねのさそふ浪ちのやすき日に　專順
またいてけりな宿の旅人　行助
廣き野にしるもしらぬも摘若菜　飛鳥井前中納言
あしたになりぬ雪のむらきえ　榮阿
夜はに春いつくの山を越つらん　桐
宮この四方そかすみそめける　松
時きぬと嵐のかせも長閑にて　行助
浪おさまれは浦そなきたる　藤
よき日そと釣する船のいとまなみ　飛鳥井前中納言
あまのころもやまれにほすらん　專順
かく山はなを五月雨のくもふかみ　權輔
こけのむ杉もみとりそふころ　桐
行くらし枕とるへきまつかねに　日野大納言
むしなく野へそこゝろとまれる　能阿
月みれは夜さむのそらもわすられて　松
人まちあかす袖のつゆけさ　行助
とはさりし程をいく度うらむらん　專順

おくかはのこれやまさとの春　能阿
たつねいる谷の木かけは花ちりて　桐
をとうちかすむみつのしら浪　專順
氷とけ此ころまさる瀧つ河　松
雨ふるゆふへ風はしつけし　行助
露おもき萩の末葉の打なひき　桐
小とり取そへかへるかり人　飛鳥井前中納言
山つゝくかた野は秋の夜をかけて　松
ちきりへたつな天の河きり　桐
星あひややすのわたりとむかふらん　藤
舟のよるへはいつもかはらす　權輔
いたつらに身をつくしてもかひそなき　專順
見せはやなみた袖はくちけり　能阿
名のたつも契りとならんたよりにて　行助
おもふあたりに文をおとさん　松
まてそとやうす墨になる夕ま暮　日野大納言
とを山まゆそ雲にのこれる　能阿
青柳のいとよりほそき月出て　藤
ふく風よはくかすむ春の夜　桐
きゝわひぬ旅ねの夢の歸る鴈　專順
またもみはやとしたふ故鄕　行助

おのゝえのくちしは世にや隔けん　飛鳥井前中納言
つもれるよはひしらぬ仙人　松
さきにほふ菊の下水汲なれて　權輔
おる袖にこそもみちふかけれ　專順
立田山時雨るみねの雲をかけ　桐
いてたる月のさむき川上　能阿
冬の江に柴つむ舟の數みえて　行助
ねさりしまゝの床の朝かせ　專順
手もすまにならす扇のをきもせす　飛鳥井前中納言
ちらはやしろき花のゆふかほ　松
とひやせん遠方人の宿の梅　桐
こえもやられすくらす春山　能阿
鶯のまた關なれぬ聲はして　日野大納言
よる〳〵ことにつくる庭とり　專順
いまこゝに戸さゝぬ關としるものを　權輔
あけはなれては道すなほ也　藤
とまり舟いまや出へき時つ風　松
なみしつかなる大とものうら　桐
夕しほのみつの濱川うつもれて　行助
たえぬおち葉とみゆる松かけ　能阿
日にそへて色をまさ木の玉かつら　飛鳥井前中納言
かけてと山の秋そしくるゝ　松
月のすむ伊駒の嶽は雲晴れて　桐
小倉のさともしるき明かた　行助
松の庵まとのひかりはほのかなり　飛鳥井前中納言
雪をあつめてまなふ古文　桐
水莖やむかしのあとをのこすらん　專順
ねてのあしたの夢もわすれす　能阿
うつり香を別し袖の形見にて　桐
春くれかたの櫻木のかけ　權輔
おもひ出やけふみる花に殘まし　松
かすみにこえつ三吉野の山　能阿
唐土も君に靡る時なれや　日野大納言
四のえひすもおなし心に　藤
六儀ある歌の道をや學まし　松
五月の後も田をうふるさと　行助
千町にもあまる早苗をとり〳〵に　桐
なかめふりぬと水そまされる　專順
袖しほれ待夕くれのかさなりて　飛鳥井前中納言
今夜とはすはいかゝたへまし　日野大納言
せめて月我か手枕にかわさはや　藤
軒のすきまは露そもり入　專順

住あらす薄の宿の秋の頃　桐
おもひもしるく衣うつ人　松
わひぬれはいと丶野分の身にしみて　行助
いまはたおなし有明のすゑ　能阿
捨ぬ世やことのはのみにいとふらん　桐
めてぬも花をた丶にやはみん　日野大納言
心なき賤かまかきの山さくら　專順
へたてす春を人もこそしれ　權輔
なれのみと霞のうちによふこ鳥　松
おほつかなしやたのめくる中　桐
まてといふ契の末もかはる世に　日野大納言
又めくりあふほとのうれしさ　能阿
いまか丶る砌をみるもいのちにて　藤
なかく久しき家〱のみち　榮阿

松十四句　桐十七句　藤八句
日野大納言八　能阿十三　權輔七
專順十三　行助十一　飛鳥井前中納言八
榮阿二

水無瀬三吟百韻 長享二年正月

何人

雪なからやまもとかすむ夕かな　宗祇
行水遠く梅にほふさと　肖柏
河かせに一むらやなきはるみえて　宗長
舟さすおともしるきあけかた　祇
月やなをきり渡る夜に殘るらん　柏
しもおく野はら秋はくれけり　長
鳴むしのこ丶ろともなく草かれて　祇
かきねをとへはあらはなるみち　柏
やまふかきさとやあらしにをくるらん　長
なれぬすまゐそ寂しさもうき　祇
今さらに獨有身をおもふなよ　柏
うつろはんとはかねてしらすや　長
おき侘るつゆこそ花にあはれなれ　祇
また殘る日の打かすむかけ　柏
くれぬとやなきつ丶鳥の歸るらん　長
み山を行はわくそらもなし　祇
晴るまも袖はしくれのたひところも　柏
わか艸まくら月ややつさん　長
徒にあかす夜おほく秋ふけて　祇

ゆめにうらむる荻のうはかせ　柏
みしはみな故郷人のあともなし（うしイ）　長
老の行衞よなにゝかゝらむ　祇
色もなきことの葉をたに哀しれ　柏
それもともなる夕くれのそら　祇
雪にけふ花ちりはつるみねこえて　長
きけは今はのはるのかりかね　柏
おほろけの月かは人もまてしはし　祇
かりねの露のあきのあけほの　長
末野なるさとは杳にきり立て　柏
吹くるかせもころもうつこゑ　祇
さゆる日も身はそてうすき暮毎に　長
たのむもはかな爪木とるやま　柏
さりともの此世の道はつき果て　祇
こゝろほそしやいつち行かまし　長
命のみ待ことにするきぬ〳〵に　柏
猶何なれや人のこひしき　祇
君をおきてあかすも（ロイ）誰を思ふらん　長
そのおもかけに似たるたになし　柏
草木さへふるき都のうらみにて　祇
身のうきやとも名殘こそあれ　長

たらちねの遠からぬ跡になくさめよ　柏
月日のすへやゆめにめくらん　祇
このきしを唐舟のかきりにて　長
またむまれ來ぬ法を聞かはや　柏
あふまてと思の露のきえかへり　祇
身をあき風も人たのめなり　長
松むしのなく音かひなき蓬生に　柏
しめゆふ山は月のみそすむ　祇
かねに我たゝあらましのね覺して　長
いたゝきけりな夜な〳〵の霜　柏
ふゆかれの芦零侘て（のとをイ）立る江に　祇
夕しほかせを沖つ舟人　柏
ゆくゑなきかすみやいつく果ならん　祇証
くるかたみえぬやまさとの春　長肖
茂みよりたえ〳〵殘るはなおちて　祇長
木のもと分るみちの露けさ　柏証
秋はなともらぬ岩屋もしくるらん　長
苔の袂もつきはふけけり　柏長
こゝろあるかきりそしるき桑門　祇証
おさまるなみに舟いつるみゆ　長柏
朝なきの空にあとなき夜の雲　祇

ゆきにさやけき四方の遠やま　柏（長）
嶺のいほ木のはの後も住あかて　長（祇）
さひしさそふる松風のこゑ　柏
誰かこの曉おきをかさねまし　祇（長）
月はしるやの旅そかなしき　長（祇）
露ふかみ霜さへしほる秋の袖　祇（柏）
うすはなすゝきちらまくもおし　柏（長）
鶉なく片やまくれてさむき日に　祇
野となる里もわひつゝそすむ　同（柏）
歸りこは待し思ひを人やみん　柏（長）
うときも誰かこゝろなるへき　長（祇）
昔よりたゝあやにくの戀のみち　祇（柏）
わすられかたき世さへうらめし　柏（長）
山かつになと春秋のしらるらん　長（祇）
うへぬ草葉のしけき柴の戸　祇（柏）
かたはらに垣ほのあら田かへしすて　長
行人かすむあめのくれかた　祇
やとりせん野を鶯やいとふらん　柏
小夜もしつかにさくらさく陰　長
灯をそむくる花にあけそめて　祇
たか手まくらに夢はみえけん　長

ちきらはやおもひ絕つゝ年もへぬ　柏
今はのよはひ山もたつねし　祇
かくす身を人はなきにもなしつらん　長
さてもうき世にかゝる玉の緒　柏
松の葉をたゝ朝夕のけふりにて　祇
うらはの里よいかにすむらん　長
秋風のあら礒枕ふしわひぬ　柏
雁なくやまの月ふくるそら　祇
小萩はら移ふつゆも明日やみん　長
あたの大野をこゝろなる人　柏
わするなよかりにやかはる夢うつゝ　祇
おもへはいつをいにしへにせん　長
佛たちかくれてはまたいつる世に　柏
うれし林もはるかせそふく　祇
山はけさいく霜よにかかすむらん　長
けふりのとかにみゆるかりいほ　柏
いやしきも身をおさむるは有つへし　祇
人におしなへ道そたゝしき　長

祇三十四　柏三十三　長三十三

新撰筑波祈念百韵 明應三年正月三日

賦何人連歌

朝霞おほふやめくみつくは山　宗祇
新桑まゆをひらく青柳　聽雪
はるの雨長閑き空にいとはへて　兼載
しろきは露の夕くれの庭　玄宣
たちいて丶月まつ秋の槇の戸に　玄清
さよふけぬとやちかき虫の音　友興
しらぬ野の枕を誰にたのむらん　長泰
やとりも見えす人そわかる丶　宗（専イ）長
むら芦のこなたかなたに舟さして　通俊
風わたる江の水のさむけさ　宗忠
山かけや氷もはやくむすふらん　宗忍
雪をもよほす遠かたの雲　慶卜
そことなく末野のあした鳥鳴て　正佐
ゆく人しるき里のかよひ路　宗坂
なかめつ丶誰もねぬ夜の月のもと　玄宣
荻ふく風をいか丶うらみむ　宗祇
こ丶ろより袖にくたくる秋の露　友興
いつはりになす思ひもそうき　兼載
有ふれは捨かたき世のやすらひに　宗長
はかなきとしを身にやかさねん　玄宣
もろくちる花とみるから（みなからイ）まちなれて　通俊
た丶すむかけははるの山かせ　長泰
晴（ぬイ）やらてかすみをのこす空の月　宗忍
ふるともあめにしのふ夜の道　宗祇
あとつくる雪まは人のとひ侘て　玄宣
おもふのみをやこ丶ろともせん　宗長
やる文の數をつくしてよむ歌に　兼載
いつひとことの情をか見し　宗祇
むねのうちくるしきはかりはや成て　長泰
すめはけふりそ（そイ）木陰にもたつ　友興
風のまも落葉なかる丶あきの水　通俊
しかなく高ねしくれふるらし　兼載
あさな／＼をく露さむく野は成て　宗忍
なれこし月はあり明のところ　宗長
なみたさへ袖の名殘やしたふらん　長泰
こ丶ろあさきを見らむ悲しさ　慶卜
身こそあれ思ひ捨へき花ならて　兼載
たれにとはれんふるさとの春　玄宣
つれてこしともにをくれて歸雁　宗長
あはれにくる丶雲の行すゑ　通俊

山ふかく住人しるき鐘なりて　友興
よをおとろけは月そかたふく　長泰
こゝろなき秋の寐さめのいかなれや　玄清
たれにしほれてころもうつらん　宗祇
うらみこそ我身にかきれつゆのくれ　玄宣
なさけのなきをさらはたのまし　宗忍
愚にもいそかさらめや法のみち　通俊
あつめて高きいさことそなる　兼載
かけ遠き山の尾上のひとつ松　宗祇
爪木もとむる里のさひしさ　宗長
つらゝゐる垣根の淸水汲捨て　玄宣
しもは草葉にむすふくれ竹　宗祇
風過るあとにさやけき夜半の月　兼載
はつかりいつく聲そ先たつ　友興
見ぬそらも思ひやらるゝあきの暮　慶卜
いろつきぬらしきりふかきやま　玄宣
こすゑのみ旅のやとりと分る野に　長泰
ゆく〳〵かはそをちこちの里　宗祇
あた人のをしへし道はそれならて　通俊
誰面かけにうかれきつらん　友興
風かすむはるの川へのすて小ふね　宗長

たまれる水にかはす鳴こゑ　兼載
山田さへかへすはかりにゆき解て　宗祇
雨夜の朝日めくるさと〳〵　宗長
昨日けふくれなゐふかき萩の露　玄宣
菊さくかけはちりもからはし　長泰
かす〳〵の夜は長月をなをやへむ　友興
露を見るにも老か身そうき　宗祇
風にたれさそはるゝやとゆく暮に　宗長
うはのそらにはなにかすむらん　通俊
おちかへりなかは都そほとゝきす　玄清
水はみとりの軒のたち花　兼載
袖ふるゝ扇に月もほのめきて　宗祇
まねくはしらすくるゝ川舟　通俊
いそかぬをくゆるはかりの山越に　慶卜
けふをはてなるあらましの道　宗長
なみたなとよはき心に殘るらん　宗忍
我に（も歟）すゝきのほにいつるころ　兼載
朝つゆのおくての門田かたすりて　友興
とこあらはなり鴫のなく聲　玄清
かすかなる水をも月やたつぬらん　通俊
すむをたよりと思ふ山かけ　長泰

松風に今はこゝろのならひきて　宗長
うつろふ花ののこるあはれさ　宗祇
はる〳〵とふるき都のかすむ野に　兼載
すさめしたれを春もこふらん　友興
人もなく人に年こへ年暮て　宗祇
たゝひとよのみかきりとそなる　宗忍
思はすもほのかたらひし旅枕　兼載
夢をはかなみえやはわすれん　通俊
つゆにくる秋は末野の草の原　宗長
雲(雪イ)にみよとや松はもみちぬ　友興
冷しき日數をはやくつくさはや　慶卜
なからへはてん我身ともなし　宗坂
君いのる人は遠くとたのむ世に　長泰
しまのほかまて波よおさまれ　宗祇
行舟にあかりてむかふあかしかた　兼載
夜ふくるまゝにきよきともし火　宗長
天津星梅さへ窓ににほひきて　友興
うくひす啼つ曉のやと　玄清

宗祇十四　聴雪一　兼載十三
玄宣八　玄清六　友興十
長泰八　宗忠一　宗忍六
慶卜五　正佐一　宗坂二
宗長十三　通俊(専イ)十

(右新撰筑波祈念百韻以版本獨吟百韻一校了)

本式連歌百韻 明應五年正月九日於清水

何人

ひかしけふ松のおもはむ老の春　宗祇
梅かほる野の若菜つむころ
山きはの澤水遠く雪きえて
くるゝやけふりむかひなる里
誰すむを我やとりとやいそくらん
こゝろの有は旅にみまほし
姥捨やかりほの月になくさめて
衣うつ夜のかせなしほりそ
海士もやは波のまくらは安からん
あしへに鴨の霜はらふ聲
閑なる流を寒み日はくれて
うかへる雲のそらのはかなき
行とまる限は誰もしらぬ身に
とほくちきるなとし月の末
今來むをきかは遲くもいかゝせん

ゆかりにさへそおもひらかるゝ
花散らすかせもよはるはうきものを
やまはかすみにかねひゝくおと
はるかなる峯のともし火かけ更て
月は誰にかこゝろすむらん
秋を秋とおもふ計は多き世に
夕をわくはたゝ荻のこゑ
たのみおく露の道しは跡もなし
我やはかれん人はうくとも
友はみなよからんこそは契なれ
とすればさはく籠の内の鳥
雲風に春はこゝろのさそはれて
こえぬ山なき花のあらまし
みよし野を我故郷といつ住まん
都もうき身□かたくそなる
おさまらぬ世をもしらぬは哀にて
いくさの場もたゝ秋のつゆ
風わたる蓬か月のしろき野に
むしの音高くさよふくる空
うらみやはこたへは人のわかさらん
おもひしらすは戀もはかなや

いたつらになさんも今はつらからて
あさまのけふり胸にのこさし
いつくにかみるめもゆかんふしの嶽
きえしまもなくつもる初ゆき
ふきかへてたゆめは風のまた冴て
冬をかなしむわひ人のやと
春になを逢とも我身何ならん
なれ來し年そ花にすくなき
みとりそふ木は只苔のいろなれや
水ゆくやまのあきふかき比
猿さけふ岩のかけふし月落て
夜は明わたる霜のかけはし
跡とめぬ夢とや雲のわかるらん
たそは何そのおもかけそうき
あちきなく忘し人に絶もせて
誰おもひたるゆふへなるらん
古郷に來てはうち鳴ほとゝきす
おもへはむかしけふそ戀しき
かゝれとはいさめさりつる身を捨て
こゝろをたにもむなしくやせん
春を經て花はうらみぬ淺茅生に

たゝ我からの月なかすみそ
袖こゆる波に一夜をあかしかた
ともとやきかん千鳥なくなり
山かけの雪のかへるさ舟さして
雲さへ寂しくれ深きそら
秋としもいはれぬや身のうきならん
我露けさはくさ木にもみす
かせつらき枕の野へを今朝分て
夢とや旅の道まとふらん
行はさそおもひやるたにうつの山
せきはありともこゝろゆるすな
くるしとはなけかさるへき人目かは
ことなみたしそはてもほしけれ
ほとあらて今宵のうちもわかるらん
かたふく月の末のうきくも
初しくれ時雨もあへす秋更て
また薄もみちかつちりそゆく
野分たつころこそ山も哀なれ
きりさむけなる河つらの里
わたし舟誰またれてかいそくらん
身はつくすとも人はおもはし

戀せよと馴來し世かはうらむなよ
こゝろとみちはふみそまとへる
雪のよのゆふつけ鳥に山こえて
あくるもふかく眞木たてるかけ
瀧なみに夢はいく度かへるらん
おもひしつめぬかせのした庵
いとへとも身は只ちりの中にして
こゝろなくても世をやつくさん
玉の緒のたゆるをまてはあやにくに
きえぬものから他し野のつゆ
花すゝきなひくはかりにかせ見えて
月にほのめくはつかりの聲
ね覺せぬ人は哀はいつしらん
うきを分すはこゝろならめや
とへかしな雨うちかすむ窓の前
おもひくらせる山さとの松
たゝ今をみよとやはなはしほるらん
野邊はさかりのあきかせの末
かり衣小鷹手にするつゆ分て
朝ふむみちに駒そいはふる
うち出てすゝしくむかふ瀬を廣み

すめるや幾世清きやまみつ

伊勢物語詞百韻 大永元年十月六日

賦伊勢物語連歌

冬の日の夕かけまたぬ時雨かな
寒るをゝくるかせはやみなり　民部卿
薄氷みつゆく河のをとたえて　親王御方
舟こそりてもよふわたし守　中御門大納言
友とする人はまれなる道のすゑ　中務卿宮
雲なかくしそ月いつるやま　帥大納言
いろ／＼のもみちの千種よるもみむ　冷泉前中納言
かくこそ秋の露ははらはめ　秀房朝臣
いくたひか行ては來ぬるしかの聲　四條大納言
我も田つらにかよふ夕くれ　甘露寺中納言
たひの宿けふの入相きゝわひて　鷲尾中納言
雲のたちまひあらしふく山　重親朝臣
まかひつゝともにこそちれ花の雪
わかれおしみてはるしたふころ　親王
日の永きときは彌生のつれ／＼に　冷
みたれそめにし糸ゆふのかけ　帥

我心いやはかなにもあこかれて　中御門
身もいたつらにならむ戀路か　甘
いとへともさりとてすまぬ契りかも　民
はらはぬ庭のいとゝふかくさ　中務卿
すむ處もとむる月や露のうへ
かす／＼むしのなく聲をきく　長淳
こゝろ細くすゝろにみゆる秋のくれ　四條
みやこしまへのたひのやすらひ　冷泉
浦なみは汐ひ鹽みちよを歸り　中御門
まつ陰ゆけは雫そ啼なる　帥
戀すとも人なとかめそおきなさひ　民
千世もといのる中はかはらし　秀
年たにも十といひしはむかしにて　中務卿
なかめせしまにうつる春秋　甘
斯て身のゐなかわたらひいかゝせむ
とはになみこす河つらの里　冷
草の戸に螢のともす火は見えて　重親
ひさしくなりぬ五月雨の空　親王
濡つゝもしゐてわけ行露のくれ　中御門
そてのせはきに秋風もうし
人しれすおもふうらみの身に入て　甘

心地死ぬへくしたふかへるさ　御
なけはなを血のなみたさへ落つへし
玉か何そとゝへは石なり　民
瀧しろく水はしらせてすむ宿に　冷
はるのものとて月なかすみそ　秀
梅やなき下にかくろゝ圓ゐして
たゝひめもすにはなはなをみむ　親王御方
朝よりくもりてあめになりにけり　民
笠もとりあへていそくたひ人　中務卿
はしのうへひとりふたりもあやうきに
なきさの家は舟よするなり　師
をのつから波のうきみるひろはなん　中御門
ゆふすゝみするあつきころほひ　四條
ほとゝきすなかなく聲もなをあかて　冷
山のはなくは月もまたれし　秀
秋のうさ涙落してうちわひぬ　師
夢からつゝかつゆのわかれち　甘
又來んはしるよししてもしたはれぬ　民
はかなやなにをあすのよのこと
酒をのみのみつゝ日をは送りなむ　師
われとひとしき人そともなる　冷

山陰もいほりあまたの住ゐにて　中御門
峯もたいらにみちそつゝける　四條
ゆき消てみつこそまされたきつ川　秀
いとおもしろくかすむをちこち　甘
暮ぬとて花をみさして歸らめや　中務卿
月にはかりのよると啼なる
うかれつゝ君かあたりの露にねて　重親
ものおもふ人は秋やかなしき　師
とふこともうとまれぬれは賴まれす　親王
あたにちきりて今のくやしさ　冷
有ましや折ふしことにかはるらむ　中御門
たかきいやしきねかひこそあれ
齢をも神ほとけにもいのり來て　四條
われもこもれり室の戸のうち　民
かとけさはなをゆき〳〵て山のおく　親王
日くれになりぬ鳥かへるそら　中務卿
ひとにこそ殘らめはるのこゝろはへ
花のしなひのあかぬ藤なみ　親王
蔦楓しけるいろなき中かきに　民
我身ひとつはもとのふるさと　冷
わつかなるたらひの影に星を見て

また夜ふかきにいてゝ仕ふる　民
御調物千棟さゝけ斗運ふらし（本ノマヽ）　中御門
世にみちしれる人のかしこさ　冷
夏冬を竹のはやしにおくり來て　鷲尾
もみちも花も夢にみなしつ　中務卿
命たゝたのまぬものゝなからへぬ　秀
すくせつたなく身こそふりぬれ　四條
高安のさとのかよひちたえ〳〵に
ゆきのつもりてゆふへさひしき　親王
きのふけふありしよりけにさえ〳〵て　甘
友なしちとり啼になきけり　鷲
釣舟はなみいと高しかへるらん　親王
又笛をふきうたうたふこゑ
ものことにこゝろひとつをうつし來て　中務卿
いさ此山にはるをくらさむ　帥
ぬれて行雨はふるともさくら狩　冷
野邊はかすみにかきりしられす　重親
いてぬやと立てみゐて見そらの月　民
夜のおましも秋さむきころ
をく霜はきくの花さく垣ねにて　親王
たまにぬくへき露のかす〳〵　鷲

御十六句　親王御方十　中務卿宮八
民部卿十　甘露寺中納言七　帥大納言九
冷泉前中納言十一　四條中納言六
鷲尾中納言四　長淳一　重親四
秀房朝臣六　中御門大納言八

連歌部十一

尼子晴久夢想披百韻

夢想

孔子も今の此文字は跡へ歸りてある物かな
昔も今もこの錢を寶珠の玉といふなり

國民はめくみあまねきはるまちて　晴久
田面のつゆものこるふゆくさ　酉歳
鳴のたつ野澤の月やあけぬらん　久丸
たえ〳〵けふるあきのした水　卯歳
あし火たくむらのやまもとやゝ寒み　辰歳
やととふかたやくれんとすらん　申歳
なくこゑもとりあつめたる吳竹に　與一
雨のなこりの日のうすきかけ　辰歳
凉しさを雲のころもにうちはへて　宗養

きよたき川の瀬々のしらいと
木からしのいろこきませて行水に
くるゝやまちはあふひともなし
月ひとり霧まを袖のしるへして
よふかきそらのきぬ〳〵の露
かりそなくこや玉つさのつてならん
あたしものからたのむはかなさ
あすしらぬわか世に花をうへ置て
かすませてたれすめる柴の戸
いり日さす春の山への鐘のこゑ
二 わたしはてゝやかへる川舟
まこもかる水ひとゝをりはれ出て
雨間の五月ひかりそふかけ

露なから螢みたるゝ夕風に
あはれはのこる窓のいにしへ
わくらはにかたらふ夜半の空更て
まくらのちりや又もつもらん
しのひけん雫もつみの袖の海
さらにうき藻のうきしつめとや
鳰とりのこほりのせきも打とけて
は風のとかにかはす友つる
明そむる雲ゐの春の朝ほらけ
雪打はらひいつる蓑代
樒つむみちは木ふかき山寺に
ものさひしきは所からかも
ウ草まくらかけはみやこの月すみて
つゆこそおなしゆふへ成らん
鹿の音もよそにうつろふ小萩原
野風をあらみあきや更けん
人かへるかた山つゝきのこる日に
いくかおくあるたにのかけ橋
水かほる岩ねまつかね花おちて
かすむひま〳〵うちいつる波
春さむき鴫のむらとり聲〳〵に
いねかてにするよるはわひしも
まくらさへつれなき人やうらむらん
ならはしきてもうき身ならすや
ふるさとやいてゝいぬへき秋のくれ
こゝろはたひに（たひにはこゝろイ）露もをくれし
あさきりのたちなへたてそ鈴鹿山
もみちのおくにとをき川音
桴おろすほともあらしの瀬をはやみ
水かさしらるゝ雨のゆく末
なみたたゝ身もうくはかり床の上
よるへさためぬおもひいつまて
うらむるもこゝろ〳〵のふた道に
かけはなれぬもあちきなのよや
月みれはむらくもなからさえくれて
しもに聲すむまつかせの山
ねくらをや冬の夜かるもうかるらん
江の水しらむしのゝめのそら
こきかへるさとは（はるかイ）なきさのいさり舟
わひてもへぬる身はあはれなり
あけまきのよりあふ契りかたいとゝ
こなたかなたのつらさとそなる

宿りをはかへてをまつにうとかれや
たつねいりてのやまほとゝきす
一もとの花はしけみの夏かけて
うら葉ふしさく木々のむら雨
ぬれつゝそわけてし袖の夕かすみ
春もむかしのはるならぬあと
おもひわひ立てみゐてみ夜半の月
こんとはいひてふかす秋かせ
むしの音もまつとしいへはむつましみ
しけさそひゆく中のみち芝
いそのかみふりにし宮もかれやらて
いのるにすゑもとをき氏神
まちえたるけふのみゆきの小鹽山
袖もかすみにふりはへてみゆ
さくらはやあさな〳〵の雪きえて（もてはやすイ）
はるの水ゆく野ははるかなり
月に鴈あかぬなこりの有明に
花も色香もたゝみやここそ
やまかけや千々の草むら秋くれて
しくれもつゆも風のまに〳〵
すかるなくこゑもひまもる松の戸に
こゝろをつけはたゝゆふへのみ
さらに身はあとなき雲にことならて
おとろかさはやかねことのすゑ
神はなをまことならぬをたゝす世に
いかなるつみそわれにかなしき
かす〳〵のさはりを法にときなきて（おきイ）
わすれては又醉のさかつき
かへるさはくるゝもいはぬさくらかり
すみれさく野はねてもゆかなん
こてふにやつゆもこほれてかすむらん
をとせし風もしつかなる庭
竹の子のわか葉生そふかとのまへ
夏なき山は千代もへぬへし

御二句　晴久一　酉歳一
申歳一　興一一　辰歳一
久丸一　卯歳二　宗養九十

弘治二年三月廿四日於江州永原越州城
何路

行水やさゝれこけむす岩つゝし　宗養
あめの名殘の藤かほる山　重興
時雨またれぬはるの月出て　紹巴
なかめをうつす夕くれの雲　養
から衣はしめて薄き秋かせに　興
わけて入野の露の色〳〵　巴
虫の音はいつれともなく鳴添て　同
よるの螢の明はつるかけ　養
ウ
うき草の末葉は水の遠近に　巴
あさきなかれや先こほるらん　養
汲すてし山井の道は霜ふりて　同
田中につゝくかた岡のむら　紹巴
鳴落る鴈の羽かせも打かすみ　宗養
夢もおしまし明ほのゝはる　同
歸るさを恨ん花にやとかりて　巴
ふるきこゝろのみえぬ物かは　同
一度はあふ瀬をしへよ涙川　猿
身はうたかたのあはれいくほと　同
道のへに捨をく跡のゆふはらへ　巴
夕へになれは袖ほのかなり　同
露なから月をやまねく花薄　猿

とふ人あらぬふるさとの秋　巴
なかき夜をそひねの夢の朝ほらけ　同
あかぬ心もいやはかなゝる　猿
此世さへわするゝ物を後かけて　猿
たゝたのめとの法の嬉しさ　同
さすらへの限りはふかき哀みに　巴
行こそとまれあまの笘ふき　猿
松たてる江の水とをき夕からす　巴
はれ渡りたる雪の山〳〵　同
あきの月時雨の後の空すみて　同
色なき鐘も聲そ身にしむ　猿
あたりまて野寺の道の高かやに　巴
をくりもすてぬ袖のしたかせ　猿
もてならす扇のにほひいかはかり　同
ニウ
名のりをきかぬ向後かなしき　巴
物のけにかつは見えてもつれなしや　猿
身をつくせとの命なるらし　巴
ちれはこそ花も紅葉もおしまるれ　猿
たえぬすさひのうつし繪の跡　同
須磨の浦や侶つゝ送る明暮に　巴
妻とふ千とり風にしはなく　猿

霜しろき茅原むら〳〵枯立て　巴
をちかた人の袖の夜ふかさ　猿
月殘る峯の梯行雲に　同
こすゑの秋のかけ淺きみち　巴
なれきつる里とを(た歟)くなる鹿の聲　同
あらしや野へに吹こゆむらん　同
松の葉の入日をうすみ雨過て　猿
煙をくゝる水のひとすち　巴
篝たく夜るの鵜舟のつなてなわ　猿
片山かけや明殘るらむ　同
村竹の葉たれになひく雪落て　巴
はらふ露をやうくひすとなく　同
旅衣たちわかれての朝かすみ　同
みやこのかたは空ものとけし　猿
秋風もしけき草木にみえ初て　巴
月かけさひし山しなのあと　猿
春日野やいくかかさなる霧の内　巴
くるれは鐘のをともそひけり　同
漕かへる浪の友舟よひかはし　猿
柴おひいつる谷あひの道　同
すてしにやおなしうき身もなくさめん　同

よしあしとてもふたつあるやは　巴
三ノウ
はしめより仕へ初るにまかせきて　同
のこるはまれのよもきふのかけ　巴
野分せしけさまて月のきり〳〵す　猿
ねぬ夜おほゆるさむしろの露　同
いつよりか秋になしつる人こゝろ　同
木の葉ふりしく中の通路　巴
花の枝は春のとなりの色みえて　同
霜の雫を羽吹鳥の音　猿
ふむ跡も荒磯浪の眞砂地に　同
はこふもしほのけふる山本　同
里はたゝ夕日の末にちかゝれや　巴
吹來て涼し風の急雨　同
袖はなをむすふか上の秋の露　巴
つみてくやしきわか思ひ草　猿
名
菊の香も昨日の跡はかすかにて　巴
やとりあまたの月のみ山ち　同
ぬる鴛やつらゝの枕わひぬらん　猿
風のまに〳〵霰ふり來ぬ　同
外面なる葉ひろ柏のまはらにて　巴
にし日なからもかけはさやけし　同

秋ちかき空は雲間の朝みとり　猨
うへのほりたる田上のやま　同
袖づゝく河邊の小舟引すてゝ　巴
ひとり〳〵にわかれ行みち　同
生れあはんとはたのみても不覺束　同
たちそふ袖をせめてへたつな　猨
傍をとめこし花の夕かすみ　同
かりはのきしのこゑの落草　同
ウ
うち出て駒いはふ野の春さむみ　巴
ひま〳〵みゆる雪の下水　猨
こからしの色は岩ねに朽やらて　巴
すむかたふかき木々の松かき　猨
鳩鳴て雨雲かゝる古畑に　同
さひしきくれをいそく秋の日　巴
萩の葉や先ほのめかす月ならん　猨
みきり玉しく露のこのもと　巴

宗猨五十　重與一
紹巴四十九

〔右永原筑前守重興興行百韻舊本闕今以連歌合集補之〕

永祿五年飯盛城百韻
元龜三年林中務少輔興行百韻
天正二年水野監物丞守隆興行百韻
同三年蜂屋兵庫助頼隆興行百韻
同四年甲斐左京入道宗柳興行百韻

〔右舊本闕〕

天正七年正月十六(三イ)日定家卿色紙開百韻

何人

もしほ草かく跡たえぬかすみ哉　昌叱
まさこ(なみイ)ちとをきはるのゆふくれ　藤孝
とけわたる汀もこほる月いてゝ　紹巴
かへしすてたる小山田のすゑ　心前
霜かれの葛葉にかはる秋のかせ　孝
かけはいつこの松むしの聲　叱

わけて入袖も漸はたさむき野に　前
みちのゆくゑもまよふあさきり　巴
いくたひかかりねの宿のさよ時雨　叱
あかぬもみちのちりつくす山　孝
さひしさはとはれぬ友の立かへり　巴
たか方にしもなくほとゝきす　前
なくなれるあとをあまたに尋きて　孝
道のつたへをおこすゑ〳〵　叱
先たつやあかつき近き草まくら　前
したふもあはれゆめのおもかけ　巴
形見そとむかへは月もあふ夜にて　叱
をかむあふきやいつまての袖　孝
秋かけて蚊のほそ聲の暮もうし　巴
戸さしのうちに引こもりつゝ　前
花をつる木陰は見しの恨にて　孝
野邊のすみれそつむとしもなき　叱
行方はうくひすの音にいさなはれ　前
かすみに猶もくらき明ほの　巴
東風ふくや雨をのこせる山ならん　叱
入江のむらにかへるつりふね
はるかなるすさきかくらふ汐満て　巴

まつのしつえもなみやこえけむ　前
むれつゝもねくらの鷺の打羽吹　孝
畔をめくるや深田なるらん　叱
五月雨は里よりさとの道絶て　前
あともわかれすたかき草〳〵　巴
焼ものにあらそふ名やはうす煙　叱
住家のさかひちかきやま賤　孝
かこふ野も小鹿入たつ月更て　巴
かりのこしたる澤のかたはら　前
霧ふりて早速にそらや暮けらし　孝
行袖とをき峯のかけはし　叱
杉むらに寺のいらかのかさなりて　前
明はつるよのかねの聲〳〵　巴
別路のうさをなくさむひとり臥　叱
しはしのほとはのこるまくら香　孝
ぬるゝをも心の花の露ふれて　巴
袖にかさしの藤はいくふさ　前
もろ人の春に出入春日山　孝
たえぬ祈やなをあめか下　叱
ひろこれは水の堤もつきかねて　前
根さへはひえのまつの木高さ　巴

岩たゝみよちのほりてや月はみむ　吃
玉のみきりもつゆのふる道　孝
欄干のはしにかたふく野分して　巴
さらに戸ひらそあけなからなる　前
しのひつゝ待くらすよのうたゝねに（ふイ）　孝
けさの餘波をおもへ手枕　吃
あかしかたへたてゝすめるうらかなし　前
ともにちとりの鳴かはすこゑ　巴
なかれての身はよるへなき船の上　吃
雲に入てやなを五月やみ　孝
晴間見し夕日も雨の音すなり　巴
軒はにおほふ風のむら竹　前
家〳〵のいもゐもしるしみしめ縄　孝
たゝり（まつイ）あるてふ神の宮人　吃
乘駒も道のかたへに行やらて　前
雪のあさみのみつのうき草（をイ）　巴
河（ウ）なみや花をよせ來て歸るらむ　吃
はるもはつ瀬のやまかせの音　孝
すかはらやふしみは霞立こめて　巴
月まちならすさと人のそて　前
ころもうつつちのひゝきやたえ〳〵に　孝

秋のあはれはゆふへなりけり　吃
とはれずは我身も露も（とイ）消なまし　前
わすれくさ生ふる中の通路　巴
住よしやまつ原つゝく陰ふりて　吃
日はをちかたの沖のしらなみ　孝
まほなりし舟も嵐のうき雲に　巴
雁の翅やわかれゆくらむ　前
さへかへる霜夜の鶴の音に鳴て　孝
（名）春さへ（たにイ）あかしわふる芦のや　吃
守そめて苗代垣ねつくる田に　前
のこる薄のすゑほのかなり　巴
霧やたゝ野を一かたに立ぬらん　吃
あらしにくるゝやまのはの月　孝
大井川瀬々に落來る秋のいろ　巴
筏や枝をくみもそゆらむ　前
爰かしこさかまく水のなかれあひ　孝
庭も雲ゐるゆふたちのそら　吃
村からす花の中より鳴いてゝ　前
はるのはやしのふかきやまきは　巴
入相の鐘さへたえて永日に　吃
法のつとめやくり返すらん　孝

むなしきをおもひの玉の數そひて（にかそへそへイ）　巴
まちふかしてや涙わひしも　前
さはりありとつけこす文をひらき見て（ウ）　孝
たのむかひなき身は宇治の里　叱
難波津やしはしはかりの冬こもり　前
すゑはみとりのあし原のなみ　巴
風わたる柳や春をいそくらむ　叱
ちれはあとより雪消の露　孝

あたゝかになりてひかりやうす曇　巴
またれ〳〵しあら玉の年　前

昌叱廿五　紹巴廿五
藤孝廿五　心前廿五

〔右定家卿色紙開百韻以連歌合集校合〕

續群書類從卷第四百八十二

連歌部十二

明智光秀張行百韻 天正十年五月廿七日

時は今あめか下なる五月哉　光秀
水上まさる庭の夏山　行祐
花落る池の流をせき留て　紹巴
かせは霞を吹をくるくれ　宿源
松も猶かねのひゝきや消ぬらん（寒イ）　昌叱
かたしく袖は有明の霜　心前
うら枯に成ぬる草の枕して　兼如
きゝなれにたる野邊の松虫　行澄
秋はたゝ涼しきかたに行かへり　行祐
尾上のあさけ夕くれの空　光秀
立つゝく松の木葉や深からん　宿源
浪のまかひの入うみの里　紹巴
漕帰る海士の小舟の跡遠み　心前
隔りぬるも友ちとりなく　昌叱
しはしたゝ嵐の音のしつまりて　兼如
たゝよふ雲はいつく成らむ　行祐
月は秋あきは最中の夜半の空　光秀
それとはかりの聲ほのか也　宿源
たゝく戸の答ほとふる袖の露　紹巴
我より先にたれ契るらん　心前
いとけなきけはいならぬはねたまれて　昌叱
とひてかくいひそむくくるしさ　兼如
度〳〵の仇の情は何かせん　行祐
たのみかたきはなを後の親　紹巴
初瀬路や思はぬかたにいさなはれ　心前

ふかくたつぬる山時鳥　光秀
谷のとに草の庵をしめ置て　宿源
薪も水も絶やらぬかけ　昌叱
松か根の朽そひにたる岩つたひ　兼如
あらためかこふ垣のふる寺　心前
春日野やあたりも廣き道にして　紹巴
うらめつらしき衣手の月　行祐
葛の葉の亂るゝ露や玉かつら　光秀
たはゝになひくいと萩の色　紹巴
秋風もしらぬ夕やぬる小てふ　昌叱
みきりもふかき霧そこめたる　兼如
村竹の淡雪なから片敷て　紹巴
岩根をひたす濤のうすらひ　昌叱
鴛鴨やをりゐる羽ねをかはすらん　心前
みたれふしたるあやめ菅原　光秀
山風の吹そふ音は絶やらて　紹巴
とち果にける住ゐ寂しも　宿源
問人もくれぬるまゝに立歸り　兼如
心のうちにあふやうらなひ　紹巴
はかなきを頼かけたる夢かたり　昌叱
おもひになかきよは明しかた　光秀

舟はたゝ月にそうかふ浪の上　宿源
ところ／＼にちる柳かけ　心前
秋の色を花の春迄うつしきて　光秀
山はみな瀬の霞たつくれ　昌叱
下とくる雪の雫の音す也　心前
なをも折たく柴の屋の内　兼如
しほれしを重ね侘たるさよ衣　昌叱
おもひなれぬる妻そへたゝる　光秀
淺からぬふみの數／＼（かねイ）つもるらし　行祐
とけるも法は開ふるにこそ　昌叱
賢は時を待つゝ出るよに　兼如
心ありける釣のいとなみ　光秀
行／＼も濱邊つたひの霧晴て　宿源
一筋しろし月の川水　紹巴
紅葉はや分る立田の峯をろし　昌叱
夕さひしき小男鹿のこゑ　心前
里とをき庵も哀住馴て　紹巴
捨る憂みのたのみこそあれ　行祐
みとり子の生たつ末を思ひやり　心前
猶なかゝれの命ならすや　昌叱
契たゝ懸つゝくめる盃に　宿源

別てこそはあふ坂の關　紹巴
旅なるを今日は明日はの神もしれ　光秀
獨なかむる淺茅生の月　兼如
爰かしこなかるゝ水のひやゝかに　行祐
秋の螢や暮いそくらむ　心前
村雨の跡よりもなほ霧降て　紹巴
露はらひつゝ人のかへるさ　宿源
宿とする木陰も萩の散盡し　昌叱
山より山にうつるうくひす　紹巴
朝霞うすきかうへに重りて　光秀
ひき捨けらし横雲の空　昌叱
出なむも浪風かはる泊舟　兼如
めくるしくれの遠き浦々　昌叱
むら芦の葉かくれ寒き入日影　心前
立さはきては鴫の羽かき　光秀
行人もあらぬ田面の秋過て　紹巴
かたふくまゝのとまふきの露　宿源
月みつゝ打もや明すさよ衣　昌叱
ねもせぬ袖の夜半の休らひ　行祐
しつまらは更てこんとの契にて　光秀
あまたの門を中のかよひ路　兼如

埋つゝ竹のかけ樋の水の音　紹巴
岩まの苔は幾重成らむ　心前
みつかきは八千代へぬへきと計に　行祐
翁さひたる袖のしらゆふ　昌叱
明る迄霜夜のかくらさやかにて　兼如
とり〳〵にしもうたふこゑ添ふ　紹巴
はる〳〵と里の前田を植渡し　宿源
縄手の行衛たゝちとはしれ　光秀
いさむれはいさめるまゝの馬の上　昌叱
うちゑみつゝもつるゝともなひ　行祐
色もかもゑひをすゝむる花の下　心前
國〳〵は猶長閑なる時　光慶

光秀十五　紹巴十八　昌叱十六
光慶一　兼如十二　心前十五
威徳院行祐十一　大善院宿源十一　東六郎宮執筆行澄一

〔右明智光秀張行百韻以一本校合〕

源氏國名百韻於一條殿御會

梅かえの實はこゝろ葉のしけみ哉　御
雪にも露のむすふ卯の花　宗砌
雨のゝち月のうす雲たち消て　方
鴈のとわたるそらのかよひち　意
小山田のふもとの野分吹暮に　晟
いな葉のかりほいまつくるなり　經清
民やすくもらぬ關屋はあれはてゝ　蓮
たひこそはやく日なみこへゆけ　寛
此河の水のうきふねさす棹に　建
とをく紀伊路は駒もすゝます　忠
岩代や松かせさゆる野はかれて　存
よるいかはかり月のゆふしも　隆
おく山はけふなをみ雪つもるらし　忠
たにはそこまて雲そこりしく　賴
水をくみ薪をとるも御法にて　隆
身はかつさきの世をやしるらむ　壽
すて人のおちふれはつる椎かもと　御
くれゆく秋を宇治のふる宮　經清
鈴虫のこゑのかきりや庭の霜　方
なかき夜あかすおきてまつころ　砌
玉かつらかけてたのまぬ月はうし　寛

はつ瀬まふては大和なるみち　忠
よむ歌に名をとめたるやあま小舟　方
えひすのすめるしま〳〵のかけ　晟
あつまやの軒をまかきのおくにみて　經清
すゝしさとをる袖のゆふかせ　存
とこなつの花にあしたの露はなし　隆
おりしもつけのさける草むら　壽
色〳〵のこてふは野へをすみ家にて　忠
あそふや空にかゝるいといふ　意
春の夜の竹河うたふ雲のうへ　御
わすれぬふしを月よあはれめ　砌
しほたるゝたもとの露を枕にて　晟
わかさとなから秋そわひしき　賴
とはゝやなもみちのかけのみねの庵　寛
いつも山にはしかやなくらむ　御
時雨ゆくすまの野かせの吹かへて　證
あはちのせとそをふねあやうき　砌
浪のうつ岸にむかへるみをつくし　御
たてるや鷺のみたすみのゝ毛　晟
柳よりあをみゆく葉は木々の春　壽
山しろたへに雲なひくはな　御

おほろにてならひにけりな朝月日　意
くもるかゝみはみるかひもなし　方
うらみある夢のうき橋たへねたゝ　經清
なみたなりけり袖の河うち　證
いたつらにあかし暮してあふせなみ　御
をとさわかしくふく飛鳥風　寛
飛鳥はつねにゆかけにおとろきて　方
たちまふ雲そ虹のほかなる　砌
柏木の露やいり日にむかふらん　忠
いてはと月になかめやるやま　存
うつせみの世は君からそ秋の暮　輔
なく音かなしき中とこそなれ　建
まれにあふ人をも今は戀わひて　壽
いよ〳〵たつ名なにゝしのはむ　證
たき物のけふりににほふ玉すたれ　御
袖まきほさぬきぬ〳〵のそら　寛
雪はらふ山ちや春の雲かくれ　方
はつ花さくらまちていつみむ　砌
紅梅のうへ木にましる松の風　證
今朝はと野邊にいつるうくひす　忠
こゑあはせなをほとゝきすなかはなけ　晟

ひたふるころの五月雨のあめ　經清
水をあけまきし早苗を又うへて　砌
竹たにこゆるみすのやまみち　御
ゆふ霧やよとのうへ野にくたるらん　賴
宮このみかは月もあきの夜　壽
旅まくら花さく草にやとりきて　方
名もしな〳〵のむしのこゑ〳〵　意
かけろふのあるかなきかとすつる身に　證
みちのおくをは誰かきはめん　存
よこ笛の手をつたへたる卷〳〵や　方
いさつまかさねみへぬ袖口　壽
藤はかまおはなもかるゝ冬のきて　寛
ふしのかけふむ武藏野の霜　證
うへなきはわかむらさきの色なれや　御
人は位にのほらすはうし　經清
老の坂きはまる年や九十　砌
いのちなかさにをはりしられぬ　證
まほろしも行て生ゝ彌陀の國　晟
ふねをはたれもよするかの岸　賴
河上は浪に花ちるさとありて　方
よそにもみへすかすむはゝき木　忠

おちかゝり日かけのとけきその原や　經清
あふみ路ゆけはひはりなくころ　壽
山の名のとこはなれたる我なかに　御
ちりこそつもれあはぬ手枕　寛
橋姫や夜をさむしろの秋の月　證
苔の岩みな露のほるなり　方
松あをく藤のうら葉はもみちして　御
ひたちにますも春日野の神　證
たてそへつおなし宮木の槇はしら　壽
老せぬ門はこの殿にあり　親忠
何をきりつほに藥をつくるらむ　方
酒をあひする日こそおしけれ　晟
さく梅はするつむ花の色に出て　御
家路こゝとやすみれにほへる　意
たかつまそ野へをしめゆふかほよ鳥　砌
山たによはふこゑやよろつ代　寛

御十三　方十一　證十二
蓮一　宗砌九　眞忠四
祐建二　壽阿八　經清朝臣七
寛正八　祐存四　定輔一
源意五　日晟七　宗頼四
親忠四

後小松院御獨吟 應永元年十二月十二日

和漢聯句

ちる雪の花にいとはぬ嵐哉
歳寒梅獨芳
北窓晨呵筆
南陌曉霑裳
霧薄き外山の月に旅たちて
秋かせ遠く分る草むら
斷續亂蛩響
去來飛鳥忙
暮かゝる浦和の舟の數みへて
江畔水微茫
興永石磯釣
醉闌金殿觴
ひかりそふ花の木のまに日のさして
霞晴行山の朝明
みね越て今もや歸る春の鴈

情疲天一方
滴愁孤館雨
點鬢半閨霜
月白き枕の上に秋ふけて
夢もま遠にうつはさころも
漸寒比にや賤も馴ぬらん
なひくけふりは竹の夕風
遺賢林下器
美女帳前粧
獨坐對紅燭
孤眠憐素商
うきおもひ夜な／＼月もうれへきて
ちきりもかれつ露の下草
妻あはぬ野はらの鹿の聲しほれ
物寂しきは山本のくれ
松高煙漠々
榴發火煌々
除熱薰風閣
舊寒朔吹鄉
柴の戸を叩くあられの横きりて
人こそとはね冬のおく山

歌聲加伐木
酒味更成章
響遠房兼杜
道洪虞與唐
聖叡新飽瑞
仙術屢呈祥
菊はこれ遠きよはひの種なれや
なみの花ちる秋のく〔たカ〕に川
月の色移るみ山に風たちて
啼猿晩斷腸
袖かけて寒き木のはや時雨らん
たのむかけなきわひ人の宿
難學一瓢樂
尤寄双鳥翔
乾坤興(唫)典(與イ)瀾
枕簟夢魂長
小蝶こそさく花そのをすみかなれ
おりしる志賀の故鄉の春
浦人はおきの霞の網ひきて
淑氣鑠瀟湘
佳景須催句

閑時轉炷香
おこなひは猶怠らぬ寺ふりて
ふるや軒はの杉のむらさめ
洞口雲舒巻
波心艇有亡
風むかふしほせに霧の立迷ひ
さしくる月の影はほの〳〵
釣簾山暮色
昔草野春光
農舎鶯兒語
宸宮燕子揚
うら〳〵なる風は雲井ををとつれて
万象忽歸陽
民喜昇平化
儒思學業常
ひまとめて（ふ歟）螢や窓をてらすらん
みえて葉のつるわか竹の露
我涙心よはくも落そめて
つゝむに堪ぬ戀のくるしさ
風添團扇恨
架題少詩狂

春樹綠千里
晩花紅一場
うつろはん心の色はみるもうし
おもひたゝはや人しれぬ中
惆悵倚欄處
寂寥携杖傍
月のほる山のすそ野は夜に成て
をさゝのくまにすたく虫の音
置露の哀や仇に頼らむ
よろつうき世そおもへ身のはて
禪榻茶煙淡
疎籬竹影藏
披書塵叓少
和琹漏聲央
魚躍奔流白
鳥啼寄嶺蒼
松原のむもれし雪の村きへて
かすまぬ月の猶寒き比
風あるゝ春の湊もよる舟に
あまの袖まて波やかくらん
沙際蜃樓聳

城邊鳳闕康

〔右後小松院御獨吟和漢聯句以連歌合集校合〕

後花園法皇御獨吟百韻 應仁二年十二月

枝ふりぬいまやいたゝく雪の松
　つもれるとしは冬ふかきころ
床のうへかけすさましく月さして
　ころもうちねぬやとのさ夜中
聲〳〵に鴈や雲ちをわたるらん
　いな葉ほのかにくるゝ小山田
秋の日の入し高根はなを見へて
　いそく宮この旅そほとなき
のる人もいさめる駒のあしはやみ
　こゝろの引は春の野あそひ
をちかたの花の追かせ袖ふれて
　かすみのうちやにほふさくら木
さたかにはみへぬ姿のゆかしきに
　あやなきこひそ物おもひなる
夏虫の身はいたつらにこかれわひ
　わすれぬふしはなみたにもしれ
風わたる竹の葉すゑの露ちりて
　山そしくるゝ秋のふか草
なきてたつうつら衣やふりぬらん
　やつすおはなの袖の冬かれ
はてのうき世間なからなを住て
　我のみたのむあたしとのは
いつはりのあるをしらぬははかなきに
　直きみちこそ賢かりけれ
古の聖教まなひきて
　なかれてとをき水くきのあと
ゆふ立に岡へや河と成ぬらん
　みさほもふかくしける松の葉
紫の色こき藤の花ちりて
　春の雲井の庭そえならぬ
はかせまてのとかに鞠やあそふらん
　巣には友なき老のうくひす
ねをそなくかけてもしらぬあふとに
　夢のちきりもうとくなりにき
天の戸の明かたちかく月をみて
　をけは身にしむ袖のはつ霜

暮るゝまて花にそなるゝ菊のもと
ふかき山ちや仙人のいゑ
谷かくれこりゐる雲はしつかにて
小川にすこくひゝく岩なみ
せをはやみたへ〳〵むすふうすこほり
したうちとけぬ事のくるしさ
なれてたにつらき心の隔にて
こゆる關路に行つるゝ友
殘る夜の月にや宿を出ぬらん
そなたの木すゑ霧まよふなり
くれわたる嶺の檜原の秋さひて
空ふきくもる山風のをと
御芳野の奥より雪のふりきほひ
あとたへはてつかくれ家のみち
すてし世の人は我をや忘るらん
やつれ行身はかはるおもかけ
あはぬゆへほさていく日の戀衣
くるかたいとの五月雨のころ
なひきふす岸への柳浪かけて
此河上に花そちりかふ
嵐たつ初瀬の山の春のくれ

かすみてとをきいりあひのこゑ
つく〳〵と忍ふむかしは夢にゝて
月をかたみの老のたまくら
ふかき夜の露も涙もおちそひぬ
ひとりある鹿やねのみなくらん
うらかれの眞萩の下葉いろ付て
たつやにしきはたをやめのきぬ
さらにいま人目にきはふ宮の中
君九重にかへる此とき
さはきつる浪の千里も治りて
なきたるうらや舟いたすらん
あま人は貝をもひろふいそのうへ
こゝろなき身も慰はあり
おきふしにたえぬ思は憂物を
いかてすくさむ春のつれ〳〵
梅ちかしあとにさくまの遲さくら
かすまぬ山の雲はしろたへ
なをのこる雪の下庵風さむみ
たれ事とはむ冬こもるかた
花さくやこの野の草も秋くれて
むしのねはかりかるゝ篠はら

心まてすむ月かけはくまもなし
　ふるきみきりそみるもさひしき
くちもせぬ名のみはしかの都にて
　たつことたえぬからさきのなみ
こゑたかく松にそむかふ興つ風
　みとりにきゆる空のうき雲
我おもひはるゝ心は清くして
　さとれる法そけにうへもなき
まよひには六のちまたをめくりつゝ
　かすめるかたの小車のをと
花をみて誰か歸るさの暮ならん
　ほのめきいてぬ春の三日月
必といひしたのめもむなしきに
　うきにとりせすなとしたふらん
夏までも春の別をわすれわひ
　草のしけみに目こそうつられ
あつまのゝすゑより富士のあらはれて
　とをきふもとの雲はたえ〳〵
物すこしさとの朝けの雨のあと
　かきほ吹こす風のはけしさ
呉竹のよなかき比の月ふけて

　ちとせの秋を松むしのこゑ
　　鶴有遐齡同御詠
池のおもによりくる浪のやしは子も
　かす〳〵見ゆる千代の友鶴

後土御門後柏原兩院御百韻 延德三年六月廿二日

御法樂
夢想之連歌

うちとくる氷のひまのあさ霞　夢想
池のこゝろも長閑なるやと
くもりなき春の砌に月まちて　勝仁
若葉にしける陰そ暮行
草も木も雨やみとりを添ぬらん
雲のよそめも深くなる山　勝仁
我方の道もしられす隔きて
たよりもあれな日數ふる旅
雲に啼鴈はいつくに迷ふらん　勝仁
人はかよはぬ小田の冬され
一村のかけも野中と荒果て
月も清水の末したふらん　夢想

秋まても昨日のまゝの夕すゝみ　勝　仁
袖の露にそ心をかるゝ　同
思ひゆへ友とはうとく身をなして
誰をかこたんとはりもなし
ちるを見る花は現もくやしきに　勝　仁
山のさくらそあかぬおもかけ
春の色雲も霞もひとつにて　勝　仁
くるゝかいかに鳥かへるそら
入相も音せよ待は久しきに
そのあかつきをおもふ法師　勝　仁
末の世は佛のなきに迷ひきて
塵にましはる神もこそあれ　勝　仁
落葉するみかさの森の陰深み　同
山もあらはにさやかなる月　同
聲〳〵に峯越鴈の數みへて
入江の波に秋風そふく
出やらぬ舟や芦まにさはるらん
みるめもかくて袖はぬれけり　勝　仁
戀するをいやしきわさとおもふなよ
我とは身をもいとはれはせす　勝　仁
なす罪に法の力やたのましし

かり行末は駒もつかれぬ
けさ出し道もわかれす雪降て　勝　仁
竹まはらなる里のさむけさ
片枝さく梅もかくれす打かほり
鳥の中にも聲はうくひす　勝　仁
人くとて春のすまゐは心せよ
たよりにとはゝなさけともせし　勝　仁
夕㒵の花のやすらひあやしきに　同
犬なとかめそ月になる里
秋のそら星の光もさやかにて
さ夜風たかく冷しき音　勝　仁
橋姫の袖にも波やかけつらん
川つらちかき宇治の古宮　勝　仁
きゝなるゝ我友衞聲立て　同
よそにもしろや妹かりの道
忍ふれとかよふ心のたへもせす
夢にあふ夜は名にももれしな　勝　仁
數ならぬ身は獨ねをなくさめて
草の庵は月もはつかし　勝　仁
朝㒵をみるに命はつれなきに
夕かけまちて虫は啼けり　勝　仁

此野にもやとりはあらぬ旅のみち
越へき山そかねてくるしき
捨はやの世はさかしきをならひにて　勝仁
身を閑かにはなにとおもはん
冬かけて賤〔こ歟〕か鳥おふをくて田に
袖さへとをる霜の朝あけ
別路はかねより後もうかりけり
入月かけは形見ともみす　勝仁
扇をは忘るゝ閨の秋の風
礒もいまや手にならすわさ　勝仁
行末の身のいとなみに打佗て
たゆむもうしやかたきをこなひ
古寺の道はいつくに殘るらん　勝仁
陰は落葉にうつむ松はら
薄雪は梢はかりのなかめにて
くれてまかはぬ鷺の一つれ　勝仁
塒にといそく鴉の飛みたれ
物さはかしき市の歸るさ
隱家をしらす過るは愚にて
春をかことにこもるみよし野　勝仁
花ゆへのかり路は人もとゝめしな

永き日くれぬ遠く行山　勝仁
梯はかさなる雲にへたたりて
水のひゝきや瀧おとすらん　勝仁
川上も末もひとつの五月雨に　勝仁
舟にてかよふ里のをちこち
誰もさそうきたる身をは佗ぬらん
契るといふもたのまれぬ中
稀にとふ恨も年もつもりきぬ　勝仁
二のほしよ幾秋かへし
庭にみる菊も山路の種なるに
都はなとか薄き紅葉は
過やすき時雨の雨の又ふりて　勝仁
雪をまつ日よ空たのめすな　同
冬きぬと嵐はけしく吹くもり
九かさねは閑かにそすむ
大内の山や外にはかはるらん　勝仁
ならひの岡のいにしへのあと
陰高き松をしるへに道見へて　勝仁
青葉かくれも花そまきれぬ
春雨や霞とともにはれぬらん
夕日うらゝにあそふいとゆふ　勝仁

引汐に蜑の子まても釣たれて
　波の千里もちかき海つら　　勝仁
漕舟や追手となりてはしるらん
　はこふ貢にあしもやすめす　　勝仁

二句
　御製　五十八句　　後土御門院
　勝仁　四十　　後柏原院

慈照院殿御吟百韻

應仁元年十月十七日
法皇御勅點

何人
ときは木をそむる落葉の時雨かな
　あらしそさゆるひはらまきはら
雲もなきみねにこほれる月いてゝ
　夜るをとすこし山河のなみ
誰かしくいはねにかゝる瀧まくら
　苔のむしろは露そみたるゝ
雨すくる庭のかゝる萱折ふして
　野分のかせのあらきゆふくれ
なきいつる虫の聲〳〵いとなきに
　やゝはたさむく秋ふくるころ
しきわふる袖にや霜を重ぬらん
　ものおもふ身そとけてねられぬ
みたれたる世をのみなけく我こゝろ
　竹のかきほのあるゝかくれ家
住なれて松を友なる山のおく
　花ちりぬれはとふ人もなし
鳥かへる春の暮かた物さひて
　こゝろ老にけりのこるうくひす
あり明の月かけかすむ宮のうち
　ほのかに見ゆる神の御あかし
古文をよめはたへ〳〵もし消て
　すきまあらはに壁そこほるゝ
あなかまや風にうらむるきり〳〵す
　野邊のまくすのした葉ちるころ
つれなしな秋をもしらぬ岡の松
　まつになみたの露そふりそふ
ひとりねの袂に月や深ぬらん
　來ぬ夜をつくる鐘のねもうし
あひみしもはかなき夢の別路に
　こてうとひかひ春そ暮ゆく

花薗のうつろふあとはふりはてゝ
志賀の宮こにのこるさくら木
唐崎や行幸せし代は程とをし
たへぬまつりは時をたかへす
宿ことの星の手向の秋をへて
てらす雲ゐの月そさやけき
霧はれて數こそみゆれ天津鴈
いなはのかせや露はらふらん
を山田のかりほの眞萩ちりにけり
もとのちきりのかはる身そうき
とをさかる中はそのまゝとひ絶て
いつをかきりのなさけなりけむ
忍ふそよむかしの友もなくなみた
軒もる月のかすむ故郷
くちのこる梅やたえ〳〵にほふらん
柳はかせそふくとしもなき
のとかなる暮にかゝりの鞠の音
ふむやいさこは沓の跡あり
降しける汀の雪に鴨おりて
かるゝ入江のあしのむらたち
難波人たく火かすかに消殘り
こや身にしめと衣うつこゑ
夢たへておきこそあかせ月の本
とはれぬ床にかよふ秋かせ
音をそなくあふてふとやかた鶉
かりにもせめてちきりをかはや
山ふかみ花さきなはと人まちて
暮らしそわふる春雨のそら
つく〳〵となすとなくて日はなかく
身はつらつゑにかゝるくるしさ
老ぬれはたゝ脇息をちからにて
手にとる經のこゑそきこゆる
おりえてやいとゝたへなる法の華
しれは衣の玉もかくれす
うき名ゆへなみたは袖に猶おちて
しのふる文もよそにもれけり
鴈の行すゑは霞や消ぬらん
雪こそのこれこしのとを山
春はまた風あら海の興つなみ
けふはつりにもいてぬうら人
松原の木陰に網を懸ほして
ゆふ日見へすく雲のをち方

いくたひか月待秋の時雨らん
　なみたもしかやつまこふるこゑ
おもふこともるや早田のほのめかし
　いはてそとじをふるの山かけ
わきかへる瀧つ心をなをせきて
　いしまのし水むすふすゝしさ
ふねとむるいそへの松の木陰に
　たつや千鳥のうらつたふ聲
埋れぬ雪には遠き跡みえて
　けふりやしるへかよふ炭やき
山かけてかすめるをのゝ下もえに
　さとはいく田のわかなつむらむ
作るへき賤か苗代しめをきて
　水のかはつそ夢あまたある
よむ歌に古今の名もしるし
　なをくちやらぬ柿のもとつ葉
秋ふかくなるや木のみはおちそひて
　外山の月にさるさけふなり
寐覺にや衣うるほす旅の空
　わかふるさとをこふるよな／＼
いとちかく音こそすまのうらの浪
　あかしのせとをかよふはや舟
時鳥幾聲鳴て過ぬらむ
　五月雨はるゝをちの山／＼
入日さす麓のあふち色はへて
　むら／＼雲のなひく半天
劔こそ國をおさむる寶なれ
　神のしるしを實そうけつく

兼載獨吟百韻 永正二年九月十三日

奥州會津郡之守護蘆名といへる人。父子間違亂の事有。しかあれは一家のものとも引分て。催軍勢干戈に及ふ。その時爲祈禱。獨吟を初侍りけれは則和合し侍り。其折ふしは永正第二九月十三夜のことなりしかは。

何人

月は名をわくるもひとつ光かな　法橋兼載
　花のちくさに露なひく暮
虫の音も色なる野邊は秋更て
　行袖寒くかはるやまかせ
きのふみし雲や時雨に成ぬらん
　木の葉の後は空も晴けり

遠方の松にいさよふ朝日影
さしてそ出る浦の釣舟
さゝれ石のあらはれ隱淺き江に
もくつにあさる鷺の一つれ
五月雨の跡はもとみし道ならて
夏野の末に迷ふ旅人
いつとてか速ひもとく萩の花
妻こふ鹿はねぬ聲そする
曉の月も身に入手枕に
露を形見のきぬ〳〵の袖
はかなきになしも果ぬは契にて
とことはにそふ人のおもかけ
山里と誰かはいはん花さかり
おもへは春は都なりけり
風もはや年越あへす長閑にて
こゝろよけにも鳥の啼聲
池廣く水せきいるゝ古宮に
みるはかりなる浦なみの月
蜑人のわかぬは秋の哀にて
夕のけふり明仄のきり
いろ〳〵に山やすかたのかはるらん

いかなるたねそ岩かねの松
とふへきを今は昔になし果て
誰をまちつゝ身は殘るらん
雪にのみことしもくるゝ柴の戸に
こほれは絕ゆるかけ水の音
埋火の夜深き枕かけきえて
老はねふりそなくさみとなる
世のうさを何にしはしも忘れまし
盡ぬはのそみ身は愚なり
いたつらに積置文の窓ふりて
軒はをよそに螢とひくれ
釣簾近く出て月まつ夜半の空
忍ふ思ひも秋やよはれる
まきらはす涙に露のすくなくて
恨のかつに何をとらまし
いはてたゝくらしや果ん我心
なかめおよはぬあまの橋立
日くるれは沖つ鹽風曇りきて
舟よせかぬるあら磯のなみ
をくるれは急くかひなき旅の友
ひとり〳〵になれるやまみち

谷せはみ折れる薪やさはるらん
　松にむら〳〵落る夕しも
神無月春吹風のけしきにて
　さみしさしらぬ九重のうち
ゆかりさへ音信たゆる草の庵
　哀かくるはこゝろある人
戀すてふうき身を誰もにくむ世に
　いひあはすへき便たになし
たのみある夢をも忍ふ此あした
　終にやおもふしるしをもみん
もよほせと花まち遠の春の雨
　雪解の雫おちる山かけ
衣ほす佐保の川風霞日に
　ほのかに里の殘る春日野
色かはる芝生隱の道ふりて
　夕露寒し誰かとひこん
月になけ在明ちかききり〳〵す
　よはひも秋も末になるころ
何をまつ身ともおもはす存生て
　世をたのむとや人のみるらん
山を淺み住こそかりの舍なれ

　なこりもとめすさくらちる陰
春なから岩浪早きよしの川
　はけしき音に風もかすます
宵の間は朧月夜の冴〳〵て
　にはかにも亦かはるものかは
おほつかな誰いひなしになひくらん
　おもひのけふり不二にやは立
涼しきを神の惠ときくなるに
　ふるの社の松風の聲
奥ふかき木の間に燈す火は見へて
　しつまりねぬるよるの里々
夕暮のやとり定めぬ村雀
　ちらすなおしき雪の吳竹
草はみな枯野寂しき冬籠
　はては山こそ栖ともなれ
僞と人は疑ふあらましに
　こゝろの中をたれかしらまし
傳きや忍ひしよゝのものかたり
　やゝ音高し濱松のかせ
浦ちかく波の舟長立さはき
　はやかけきへぬ跡の山のは

いくか又都の空に袖ぬれん
　半にさむる夢そはかなき
八聲なく鳥も告あへぬ夏の夜に
　かけほのくらき横雲の月
立のほる川きり白く風絶て
　こなたかなたの山そ色付
遲くとふこゝろも悔し花の春
　なか〳〵し日もはや暮にけり
さそはれて我さへいとゝ遊ふ野に
　かへす家ちの友のかす〳〵

（右兼載獨吟百韻以版本一校）

宗長獨吟 大永八年四月十二日 名號百韻

　八十あまりそれたにかなふ心かは
をくるゝといふもけふの命を

名號連歌　　宗長

なつころもたちかふる日數程もなし
　むへ啼時か山ほとゝきす
あさみとり春の殘りの花咲て
　みちしはつゝき菫つむ人
たか住し跡はるかにもつゝくらん
　ふるや小雨の見へす露けき
なにとなく光あはれに月出て
　むしの音佗し夜寒なるらん
あきはかつ移ろひわたる野へ毎に
　みつたへやらぬ澤の一すち
たみの田の冬はあらすく春まちて
　ふるの山もと行人もなし
南良坂や三笠の森の夕すゝみ
　むかふに遠く日はかたふきぬ
あつま路や都の方の詠して
　身はとつてもいかてこたへん
たましゐのなき後の世はしらまほし
　ふたゝひは又夢ならてやは
なくさめて別し月は有明に
　むすひをけとや露こほるらん
あさはかのはきの上葉や雁の文
　みちさへいつこ殘るふるさと
たまさかの人のゆきゝも春暮て
　ふねつなき捨かすむ川水
なかるゝや浪より花の落すらん
　むなし筋なり瀧のしらいと

あらし吹山はこぬ秋誰またん
みねにさびしき雲のけしきよ
薪こる道はほとなくしくるめり
ふゆの日いつく暮るをもみす
なもしるく空かはり行神無月
むかしも今も定めたゝしき
あきらけき君か代の道傳へきて
みつの干（ハイ）しほの高き大ひえ
谷〱の梢の上の霧の中
ふりはへ出ん秋のそらかは
なく鹿の聲する方の夕月夜
むらさめならしやかて過行
あらましき風の名殘は猶吹て
みやのうちすみ物の音もせす
たまたれの釣簾のつま〱ひま遠み
ふせこのたく香かほり出ぬる
なき人やおもかけにして見へぬらん
むねにはさめぬ夢そかなしき
あまの戸はきら〱と更行月に
みちくる秋のしほあひの海
立なみと我から里の身に入て

ふむ所せき道はあやうし
なつの野の山かたかけて乘駒に
むもるゝ雪そ深さしられぬ
あらかねの土にしつえの松ふりて
みしともあらす庭の淺茅生
田鶴のすむ池のみしふをかきはらひ
ふれてや折に又もあふらん
なかめつる曉月のよはのそら
むら〱になる霧のおちかた
あと先に寐に行鴉秋さひし
彌山の里は夕暮のそら
たく柴の軒の梅かゝほのかにて
ふゆこもりする春も有けり
くらきより冥をてらせ空の月
願　はるかにおもふ夜こそ長けれ
むす苔の山路の露を枕にて
以　今はや秋や旅にくれなん
此しらす我故郷出し春やいつ
功　雲ゐに歸る鴈も啼なり
德時わかぬ霞は老の〔祈賦〕夕〱
くりかへし戀しよしやいにしへ

平經にけんや賤のをた巻絶ねたゝ
　うらむる事も中にこそあれ
等とかは誰等閑ともましるらん
　うきたる何を人の告つる
施せんかたもなき名ははるゝものならて
一　いかに祈らは神もうけまし
ちるとても折てや花の手向せん
切　さくらを殘すけふの別路
いひやらぬ春の情のいかはかり
同　友に三あり誰おろかなる
打渡す橋をは過ぬ休らひに
發　ほたるにみゆる道の夕やみ
常に人學ふ窓こそ哀なれ
善　ほと〳〵による心をそしる
提織女にかす夜の袖の露置て
　いさよふ月もかけやしぬらん
心しのひかね出ては歸る秋風に
　むすふ涙そ身に餘りぬる

往わたくしの年は八十もきのふにて
　うれへをとろくとのはやある
しほれ行花に雨しもかきくらし
生　柳は枝の露おもけなり
鶯のうちはふく音ははかなくて
安　朝ゐせられぬ此よ更ぬる
むれ立てしのくは積る雪なれや
樂　らうかはしさは山賤のさと
雲風もすめる心はならふらん
國　こゝにたのしむ世こそやすかれ
くをのかれ生るゝ國は遠からし
覺　かたく佛の道ねかへ人
草も木ももるへき天の惠かは
阿　あふかさらめや富と榮と

左衞門尉藤原盛綱大永八年四月七日逝去。法名覺阿。年來之懇志のため。此百句をつらね侍るものならし。

八旬有餘老拙

續群書類從卷第四百八十三

連歌部十三

賀茂社法樂宗牧獨吟名所百韻

山城 波のおと木すゑもせみの小河哉　宗牧
同 夕かせ凉しかたをかの森
同 日影山あき行袖に移ひて
丹波 ほのかにかゝるかつらきの月
同 薄霧の立田の奥やしくるらん
同 夜はの朝けのむら雲の里
同 やとりせしいく野の方を顧て
丹後 都戀しきあまの橋立
同 松に吹よさの浦風くるゝ日に
奥 をしまか磯は波のよるみゆ
同 きえかねる春に逢津の峯の雪
同 かすめるおくや忍ふてふ里

江州 鶯のをのか關の戸出やらて
同 野上のまくら夢も過らし
美濃 むしろたや片しく袖の別路に
同 いなはのやますけふの露けさ
駿河 ねに立かをしかの原の秋の暮
城 里はをくらの夕寂しも
同 昔みし面影浮ふ大井川
はりま 松もあかしのあかぬ海つら
攝津 山風もをとのみすまの花盛
近江 植しさくらの谷の戸の春
山城 霞にや跡は深草ことゝはん
同 ふしみの夢のわかぬ明仄
大和 すかはらや人めを忍ふ枕して

丹後　水の江遠きあしかもの聲
同　霜氷るよし野の宮の明暮に
大和　袖ふる山も人けせぬころ
いせ　鈴鹿路や關越跡は夕にて
あふみ　いつかあふ坂霧も隔つな
山城　秋ときく音羽の里の名もつらし
同　月もくたくる宇治の川波
同　下葉より槇のしま陰露落て
河内　五月雨にほふ橘のてら
大和　いその上ふると語（植）るほとゝきす
いせ　山田のはらは上かへてけり
山城　冬枯のをのゝ夕霜ふりとぢて
あふみ　いく重よ川の雪積るらん
同　雲かゝる比良のね嵐と絶なみ
同　花の波たつ滋賀の浦松
筑前　忘めやかねの三崎の春の暮
のと　鈴めくりして遊ふ長閑さ
大和　秋篠や下戰く音の涼しきに
同　日くらしの野や露結ふらん
河内　むら雨の月は雲まの伊駒山
攝津　難波わたりは心してみよ

同　津の國のなからへまうき夢の世に
江州　ときはの橋と身やは賴まん
河内　天の川秋まつ契美し
同　おもふかた野はなかめするのみ
山城　櫻かり雪の跡さへをしほ山
大和　春日祭の袖のいろ〳〵
同　故郷と奈良の都も春めきて
同　とをつあすかの霞棚引
山城　月はけさみかくれて行みなせ川
同　となせの秋に移る筏士
同　嵐山吹こす紅葉いか斗
同　雲の林のものふかきかけ
同　紫の野邊[illegible]にくれは日も暮ぬ
大和　三笠の神のいにしへの跡
筑前　さしてその木の丸殿や守ぬらん
同　我身たか名をかるかやの關
信濃　その原や賴むふせやの數ならは
同　しほれてのみそきそのあさ衣
同　更科の月に露さへ拂ひ兼
あふみ　鳴や鶉の床の山かせ
山城　待來しもいなたのをのゝ秋暮て

同　またや木幡の里の通路
同　旅にして袖しら川の夕渡り
三河　はる〱きつゝおもふ八橋
越前　しかすかに別れし方や慕ふらん
同　花には鴈もいつはたの山
同　や田の野の小萩かふるえ下萠て
同　露は秋きゝの里の春雨
同　あさみつのくろとの月の深よに
ふせん　仄かにかほる白菊の濱
攝　住よしや岸に波よる霧晴て
同　空に浮ふや淡路なるらん
淡路　扇にも移す繪島の俤に
きい　忘かたみのうらめしの身や
同　夕暮はまたしとするも待乳山
駿　問れましやはすめる唐崎
同　木枯のもり來るのきの月冴て
山城　野の宮人や枕寂しき
同　松のをのしらへ幽に暮渡り
はりま　老の靏なく高砂の秋
きい　和歌の浦や身に入世々の風ならん
同　玉ゆらのとそ波の露けさ

同　藤代や花のゆかりの春もおし
同　霞む詠に我なくさ山
奥　歸るさの程しら河の年越て
同　衣の里やあらためてみん
攝　いとせめて戀ふる夢野の手枕に
同　とはて生田のうらふれよとや
同　こやの池につかはぬ鴦の打侘て
同　月も細江の水けふるくれ
江州　青柳のむらや一葉にしらるらん
山城　この橋本の秋の初かせ
同　神山やしめゆふ花の露かけて
同　あふけ糺の朱の玉垣

宵柏獨吟觀世音名號百韻

宵柏

なかは人かへる世もかなほとゝきす
もとの木立の茂り行やと
暮ふかき月に山水聲はして
分來しみちはらすきりのそら
むすふともさこそは露の草まくら
せめてわすれは夢のかりふし

おしむにや夜ははかなくて明ぬらん
むら〳〵かすむ遠かたのそら
ほのかにも晴行野へに雪きへて
さそふ日かけもうくひすそなく
咲出ぬ花の匂ひや朝ほらけ
常磐木ふかし柴の戸の山
小夜時雨たへぬはそてのうへにして
すめるもかなしひとりねの月
あちきなく來ぬ人うらむ秋風に
猶ふるさとの松むしの聲
さらてたにたとりし道の村すゝき
とふともかりほそよとこたへし
身の上もうれへは心みへやせん
入をいつくかいとふ山のは
深くともよしの計とおもふなよ
いさやと春を呼ふ鳥なく
今いく夜月も霞の在明に
ぬるとも露よ藤にほふかけ
蓬生や袖は茂きに枯れて
すみ來し里と何したふらん
移はゝかりにたにとも思はめや

めかれぬほとそ世々のとの葉
かひもなき學ひも老はなくさめて
ね覺に聞はかへるうらなみ
更わたる行衞も月の清見かた
別しまゝの秋かせのそら
鳫そなく旅人いかになりぬらん
里とたへたる雪の山もと
道ふかき野やふかくれに梅さきて
光は春のいつくわくらん
なへてともえやはなにはの夕かすみ
みつゝいかてや心あらまし
うちとくる火かけも夫としるき夜に
思ふ（人歟）又やは他にちらさん
さても名のそらよりこそはもれつらめ
つはさならふる鳥のあはれさ
庵近く雨うちけふるくれ竹に
水傳ひ來る谷のかけみち
行月もみ山隱に安からし
あらしのまくら敷侘る秋
露木の葉むすほふれつる夢絶て
冬野をみるや人の世の中

契なとかれし物とはかけつらん
　こゝろより社かゝるくるしさ
身にしれは岩にくたくる波もうし
　いかにならはんおとなしの瀧
殘るともはからぬ名社おもふなよ
　むくらのかきねあらす松かせ
古郷の月は更ての秋やみん
　きくまつ露にかゝる虫の音
身にしむも我夕暮の空ならし
　人にうらみもいかに山すみ
わすれしのなをさりとははかなさよ
　たへぬもつらき中の緒の聲
子をおもふ鶴は霜よに打侘て
　芦の葉さむみそよく濱風
暮果て釣の翁のさす舟に
　かた山寂し入逢のかね
分る野の秋の日薄くうち時雨
　鹿の音まちし木々そ色そふ
いねかての早田守里にはや成て
　風のけしきも袖ぬらしけり
忍へとの夕は人のとふなれや
　あとはきのふの雲とやはみぬ
山ふかみなからへぬともとはゝうし
　いまはの花におとつれもせす
春をさへ殘して鳥の歸るらん
　小てふを野へのすさみにそ行
唐ころもかすみにましり露ふれて
　都を遠みあはれをそしる
あま人のとはすかたりのさま〳〵に
　おなしとのみ波のたくなわ
暮る江にたなゝし小舟過やらて
　おもけに雪のかゝるすかみの
捨し身のかりねもいかに山あらし
　つとめよふかき曉の聲
名のりする殿（上歟）ゐに月はかたふきて
　うてなの臺の露の閑けさ
秋かけて漸うとくなる夕すゝみ
　かけみまほしみ前渡りしつ
忍ふなよ茂みのおくのかほよ貌（鳥歟）
　外山かすめるうちの河つら
明仄の春の舟人まてしはし
　はるかにこたふ聲そかなしき

別なる闘より物のたひのそら
いつくにみまし宮城のゝ暮
かせなから露もうかるゝ小萩原
おさめぬこゝろ秋そあやしき
涙さへおもひたゝこし夜はの月
うきをうきともなにのこさまし
花のうへに移るのみやは夢ならん
人はむかしのさくらさくかけ
春毎におしみ哀み馴〳〵て
こゝろふかくも年をふる山

右一卷　瀨川昌德之本ヲ以寫畢

文章連歌五十韻

催促かしての遲參のはるの雨
所存の外に梅やちるらん
かすますよ如此の月もかな
罷歸るや遠きかりかね
故郷に旅より人の入御有て
等閑もなく舟や漕らん
細々に浪ふきたつる興津風
召遣はるゝ浦の海士の子
薪をは如件とるものを
其後よりの雪のとをやま
時雨しか雖然月いてゝ
夜更かたこそ毎度寒けれ
獨寐は御音信にも不預
稀にあひなはいかゝ恐悦
畏入相頃日まちくれて
色々にある人の僞
此程は申通る事もなし
客來いとふ山のかくれ家
行末を察し存る身をすてゝ
世のうかりしも自由の至か
待もせぬ秋や無心に來るらん
草や紅葉の所望なるらん
月の夜は滿足したる心地して
とはるゝ時そ諸事をわするゝ
近き野の就其は厖そなく
將又むすふ袖のうは露
期後信といふをうちたのみ

斟酌もなく人は戀しき
絶し中誰に機嫌を窺て
忍ふ文をはよしや御披露
花咲は以次とはれしに
すこしは春の逗留もかな
永日のかけは遙に久しくて
不知案内にかすむ山みち
里遠し以外のうき旅に
急くをとむる關は計會
したふ身を推量もせす鳥啼て
しはし別の出引もかな
憂中の御意の通はうらめしや
積欝なれとなとおもふらむ
戀しさの迷惑したる夕にて
月の遲さはふしむ千萬
秋ふかはもし廢忘か村しくれ
身にしむ風は勿躰もなし
山陰に徒然なれはと立出て
退屈したる柴のとのうち
浮世には居住せしとや捨るらん
佛の御扶持仰く行末
一聲を賴存るちかひにて
虚言ましらぬみたの名號

眞壁道無闇礫軒追善

懷舊　　　　兼如

人の身も知られぬ春の向後哉
きえしかすみの露かゝる袖
たゝしはし柳か枝の雪散て
はふきにけりなそのゝ鶯
明ほのに月のひかりや移るらん
なかめ〳〵し秋の夕暮
とをくなる都の山や霧の内
めくるしくれや雨のまに〳〵
木の本に落そふ紅葉いか計
つゝきもやらぬ道の末〳〵
音もたゝあさ澤水の爰かしこ
作りすて田はいつよりのあと
はなれたる里もとなりを求より
うちかたらふに心のこさぬ

恨こそ頼むかきりの物ならめ
□えはたえんの契り□
すゑに亦あひみんもたゝ□
時うしなふもよしや世の中
月華にいとま有身はなしはてよ
くめるかすみやあかぬ伴ひ
關山を春の名殘に越わひて
猶もきかはや行ほとゝきす
なれてたにさひしかりけり草の庵
ひかへそかぬるかへるさの袖
むつとは殘り有夜の明離
幾度むせふ泪なりけん
むなしきか數そふ末になからへて
たれとしのはんむかしならまし
おもはすもさすらへ來ぬる遠津島
風さへあらきなみの浦舟
鹽あひや月の行衞に替らん
かたを分つゝ霧くらき空
一つらにをくるゝ鴈の聲す也
かさなるすゑに猶高き山
ろふはたゝ雲の絶まに顯て
さくらにつゝく奥の古寺
槇原の風もや春になりぬらん
氷とけそひ落瀧津川
とるさほのしけさもさそふ渡し舟
爪木ま草の道はしるしも
里やたゝ野山のきかひかけぬらん
まかきをちかみをしかたゝすむ
うつろへは猶むら萩の色にして
をきもとゝめぬ月の下露
風や亦たゆむとせしもすさふらん
いそへをとをみこゆるうき波
啼行やまとはしにける友千鳥
みる〳〵雪のかきくらしぬる
ちり出るかけも木ふかき花ならし
かすみもはてぬ山松の聲
春の夜もかりねの枕敷かねて
打とけやらぬ心くる□（しさ歟）
なにゆへの恨をしたにふくむ□（らん歟）
出てゐにける人のはかなさ
たのまれぬ身をしも玉のありかにて
小田のひつちのすゑの夕露

いなつまやそれかと計照らん
　月のかたへに殘るうき雲
一通そゝくあまりの風過て
　みなとかけつゝ白き川波
幾むらに芦の枯はのなひくらん
　垣ほはなをそかこひかねたる
行かひのみちのへちかき宿しめて
　人のとはの聞にあやなき
ものゝけにうつし心やうせぬらん
　子有中をもかけはなれぬる
後の世のつとめこそたゝ哀なれ
　起なれにけり月のあかつき
竹のはや露より霜に亂るらん
　寒さ添行秋風の音
幾里かもよほされつゝうつ衣
　ゆふへになれは物そかなしき
奥ふかきかたに啼よる山烏
　たはなす鷹や白雲の上
霞ふる入日の末はかすかにて
　凮こそさはけ松の木つたひ
立とみし程あらましの花の波

　春は初瀬のとをき川音
かすみより三輪の渡りの暮初て
　雨やとりせんかけたにもなし
うきはたゝかためをきたる妹か門
　余所人にもやかはす手枕
たは付し筋とも分ぬみたれ髪
　よはひのすゑになれるかなしさ
をろかなる學はつゐにとけやらて
　御法にうときゐくゐしらるゝ
請ぬるも女の身こそ哀なれ
　のこりて住は宇治の山里
秋の雲に半あひたる□
　しくれめきたる空はす□
冬ちかくなれは吹そふ松の□
　しほれもて行中の草ふき
馬はたゝはなてる野邊になれ〳〵て
　ほそきもみちはあまたなりけり
かけにもやかた山畑のこもるらん
　ところ〳〵にたかきうきつち
崩そふ岸根は水の淺かれや
　かたふくすゑもしけき青柳

こすの外の花のえをもき朝しめり
雨より後や猶かすむらん

善幹案スル ニ。道無ハ常州眞壁城主眞壁右衞門尉氏幹入道ナリ。永祿天正ノ比ニテ。太田三樂ト同時ナリ。

細川高國朝臣六々歌仙
出陣萬句三物
白川萬句發句
【右舊本闕】

以宮內省圖書寮本一讀了田邊勝哉

大正十三年五月二十日印刷
大正十三年五月廿五日發行
昭和十三年四月十日再版發行
昭和十七年八月三十日六版發行

（文協會員番號 115016）

出文協承認 ア230188
400

發行者 東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者 東京市豐島區西巣鴨二丁目二五七四番地
東東一八九五
丹羽誠次郎

印刷所 東京市豐島區西巣鴨二丁目二五七四番地
忠義堂印刷所

發行所 東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七・電話大塚七一八

（配給元 東京市神田區淡路町一ノ九 日本出版配給株式會社）